

監修

佐佐木信綱
柳田國男
新村出
山田孝雄
津田左右吉
和辻哲郎

枕 冊 子

田中重太郎校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「枕冊子」 田中重太郎校註

昭和二十二年六月二十五日初版發行

昭和三十一年五月十五日第六版發行

印刷所 圖書印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 四〇〇圓

目次

解

説……………一

清少納言の世界……………三

作者と時代……………八

書名……………一六

表……………一七

譜……………一七

例……………一七

文……………一七

一 春はあけぼの……………七二

二 ころは……………七三

三 正月一日は……………七三

四 おなじことなれども聞き耳ことなるもの……………七六

五 思はむ子を法師になしたらむこそ……………七七

六 大進生昌が家に……………七七

七 うへにさぶらふ御猫は……………八二

八 正月一日、三月三日は……………八五

原形とその成立・内容……………三三

諸本と底本……………三〇

影響と研究史……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

九 よろこび奏すること……………八六

一〇 新内裏の東をば……………八六

一一 山は……………八七

一二 市は……………八七

一三 峯は……………八七

一四 原は……………八八

一五 淵は……………八八

一六 海は……………八八

一七 みささぎは……………八八

一八	わたりは	八九
一九	たちは	八九
二〇	家は	八九
二一	清涼殿の丑寅の隅の	八九
二二	生ひ先なくまめやかにえせぎいはひ	八九
二三	など見てゐたらむ人は	八九
二四	すさまじきもの	八九
二五	たゆまるるもの	九〇
二六	人にあなづらるるもの	九〇
二七	にくきもの	九〇
二八	心ときめきするもの	九〇
二九	過ぎにしかた戀しきもの	九〇
三〇	心ゆくもの	九〇
三一	檳榔毛は	九〇
三二	説經の講師は	九〇
三三	菩提といふ寺に	九〇
三四	小白河といふところは	九一
三五	七月ばかりいみじう暑ければ	九一
三六	木の花は	九一
	池は	九一

三七	せちは	三三
三八	花の木ならぬは	三三
三九	鳥は	三六
四〇	あてなるもの	三六
四一	蟲は	三六
四二	七月ばかりに、風いたう吹きて	三六
四三	にげなきもの	三六
四四	ほそ殿に人あまたあて	三六
四五	主殿司こそ	三六
四六	をのこは、また、隨身こそ	三六
四七	職の御曹司の西面の立部のもとにて	三六
四八	馬は	三七
四九	牛は	三七
五〇	猫は	三七
五一	雑色・隨身は	三七
五二	小舎人童	三七
五三	牛飼は	三七
五四	殿上の名對面こそ	三七
五五	若くよろしき男の	三七
五六	若き人・ちごどもなどは	三七

五七	よき家の中門あけて……………	一四〇	七六	こちよげなるもの……………	一五五
五八	瀧は……………	一四一	七七	御佛名のまたの日……………	一五六
五九	川は……………	一四二	七八	頭の中將のすずろなるそら言を聞き て……………	一五八
六〇	曉に歸らむ人は……………	一四三	七九	かへる年の二月二十餘日……………	一六三
六一	橋は……………	一四四	八〇	里にまかでたるに……………	一六六
六二	里は……………	一四四	八一	ものあはれ知らせがほなるもの……………	一六九
六三	草は……………	一四四	八二	さて、その左衛門の陣などに行きて後……………	一六九
六四	草の花は……………	一四四	八三	職の御曹司におはしますところ、西の 廂に……………	一七〇
六五	集は……………	一四七	八四	めでたきもの……………	一八一
六六	歌の題は……………	一四七	八五	なまめかしきもの……………	一八四
六七	おぼつかなきもの……………	一四七	八六	宮の五節出ださせたまふに……………	一八五
六八	たとしへなきもの……………	一四八	八七	細太刀に平緒つけて……………	一八八
六九	しのびたるところにありては……………	一四八	八八	内裏は五節のころこそ……………	一八八
七〇	懸想人にて來たるは……………	一四九	八九	無名といふ琵琶の御琴を……………	一八九
七一	ありがたきもの……………	一五〇	九〇	上の御局の御簾の前にて……………	一九二
七二	内裏の局、ほそ殿、いみじうをかし……………	一五一	九一	ねたきもの……………	一九三
七三	まいて、臨時の祭の調樂などは……………	一五三	九二	かたはらいたきもの……………	一九四
七四	職の御曹司におはしますところ、木 立など……………	一五三	九三	あさましきもの……………	一九四
七五	あちきなきもの……………	一五五			

九四	くちをしきもの……………	一五	一二二	繪にかきおとりするもの……………	三三
九五	五月の御精進のほど……………	一六	一二三	描きまざりするもの……………	三三
九六	職におはしますころ……………	一七	一二四	冬は……………	三三
九七	御かたがた、君達、上人など……………	一八	一二五	あはれなるもの……………	三三
九八	中納言殿まゐりたまひて……………	一九	一二六	正月に寺にこもりたるは……………	三四
九九	雨のうちへ降るころ……………	二〇	一二七	いみじう心づきなきもの……………	三四
一〇〇	淑景舎、東宮にまゐりたまふほどのことなど……………	二一	一二八	わびしげに見ゆるもの……………	三三
一〇一	殿上より、梅のみな……………	二二	一二九	暑げなるもの……………	三三
一〇二	二月つごもりごろに……………	二三	一二〇	はづかしきもの……………	三三
一〇三	はるかなるもの……………	二四	二二一	むとくなるもの……………	三三
一〇四	方弘は……………	二五	二二二	修法は……………	三三
一〇五	見苦しきもの……………	二六	二二三	はしたなきもの……………	三四
一〇六	いひにくきもの……………	二七	二二四	關白殿、黒戸より出でさせたまふとて……………	三五
一〇七	關は……………	二八	二二五	九月ばかり、夜一夜降り明かしたる雨の……………	三七
一〇八	森は……………	二九	二二六	七日の日の若菜を……………	三七
一〇九	原は……………	三〇	二二七	二月、官の司に……………	三六
一一〇	四月のつごもりがたに、初瀬にまうでて……………	三一	二二八	頭の辨の御もとより……………	三六
一一一	つねよりことにきこゆるもの……………	三二	一二九	などで官得はじめたる六位の笏に……………	三四
		三三	一三〇	故殿の御ために……………	三二

一三一	頭の辨の、職にまゐりたまひて……………	二四四
一三二	五月ばかり、月もなういと暗きに……………	二四四
一三三	圓融院の御はての年……………	二四七
一三四	つれづれなるもの……………	二五〇
一三五	つれづれなくさむもの……………	二五〇
一三六	とりどころなきもの……………	二五一
一三七	なほめでたきこと……………	二五一
一三八	殿などのおはしまさで後……………	二五五
一三九	正月十餘日のほど、空いとくろう……………	二六〇
一四〇	清げなる男の雙六を……………	二六一
一四一	碁を、やむごとなき人のうつとて……………	二六一
一四二	おそろしげなるもの……………	二六二
一四三	清しと見ゆるもの……………	二六三
一四四	いやしげなるもの……………	二六三
一四五	胸つぶるもの……………	二六三
一四六	うつくしきもの……………	二六三
一四七	人ばへするもの……………	二六五
一四八	名おそろしきもの……………	二六五
一四九	見るにことなることなきものの文字 に書きてことごとしきもの……………	二六六
一五〇	むつかしげなるもの……………	二六六
一五一	えせものところ得るをり……………	二六七
一五二	苦しげなるもの……………	二六七
一五三	うらやましげなるもの……………	二六八
一五四	とくゆかしきもの……………	二七〇
一五五	心もとなきもの……………	二七一
一五六	故殿の御服のころ……………	二七三
一五七	宰相の中將齊信・宣方の中將・道方 の少納言などまゐりたまへるに……………	二七五
一五八	むかしおぼえて不用なるもの……………	二八一
一五九	たのもしげなきもの……………	二八一
一六〇	讀經は……………	二八二
一六一	近うて遠きもの……………	二八三
一六二	遠くて近きもの……………	二八三
一六三	井は……………	二八三
一六四	野は……………	二八三
一六五	上達部は……………	二八三
一六六	君達は……………	二八三
一六七	受領は……………	二八四
一六八	權の守は……………	二八四

一六九	大夫は……………	二六四	ばかりなるに……………	三〇三
一七〇	法師は……………	二六四	大路近なるところにて聞けば……………	三〇四
一七一	女は……………	二六四	一八八 ふと心おとりとかするものは……………	三〇五
一七二	六位の藏人などは……………	二六五	一八九 宮仕人のもとに來などする男の……………	三〇六
一七三	女の一人住むところは……………	二六五	一九〇 風は……………	三〇七
一七四	宮仕人の里なども……………	二六六	一九一 野分のまたの日こそ……………	三〇八
一七五	あるところになにの君とかやいひける人のもとに……………	二六六	一九二 心にくきもの……………	三〇九
一七六	雪のいと高うはあらで、うすらかに降りたるなどは……………	二六九	一九三 島は……………	三一一
一七七	村上の前帝の御時に……………	二九〇	一九四 濱は……………	三一一
一七八	御形の宣旨の……………	二九一	一九五 浦は……………	三一一
一七九	宮にはじめてまゐりたるころ……………	二九二	一九六 森は……………	三一二
一八〇	したりがほなるもの……………	二九六	一九七 寺は……………	三二四
一八一	位こそなほめでたきものはあれ……………	二九六	一九八 經は……………	三二四
一八二	かしこきものは乳母の男こそあれ……………	三〇〇	一九九 佛は……………	三二四
一八三	病は……………	三〇一	二〇〇 書は……………	三二四
一八四	すぎすぎしくて獨住する入の……………	三〇三	二〇一 物語は……………	三二五
一八五	いみじう暑き晝なかに……………	三〇三	二〇二 陀羅尼は……………	三二五
一八六	南ならずは、東の廂の板のかげ見ゆ……………	三〇三	二〇三 あそびは……………	三二五
			二〇四 あそびわざは……………	三二五
			二〇五 舞は……………	三二六

二〇六	弾くものは……………	三六	二二五	三條の宮におはしますころ……………	三三
二〇七	笛は……………	三六	二二六	御乳母の大輔の命婦……………	三三
二〇八	見るものは……………	三八	二二七	清水にこもりたりしに……………	三三
二〇九	五月ばかりなどに山里にありく……………	三三	二二八	むまやは……………	三三
二一〇	いみじう暑きころ……………	三三	二二九	社は……………	三三
二一一	五月四日の夕つかた……………	三三	二三〇	一條の院をば新内裏とぞいふ……………	三七
二一二	賀茂へまゐる道に……………	三四	二三一	身をかへて天人などはかうやあらむと見ゆるものは……………	三八
二一三	八月つごもり、太秦にまうづとて……………	三四	二三二	雪高う降りて、いまもなほ降るに……………	三九
二一四	九月二十日あまりのほど……………	三五	二三三	ほそ殿の遣戸をいととうおしあげたれば……………	三九
二一五	清水などにまゐりて……………	三五	二三四	岡は……………	四〇
二一六	五月の菖蒲の……………	三六	二三五	降るものは……………	四〇
二一七	よくたきしめたる靈物の……………	三六	二三六	日は……………	四〇
二一八	月のいと明かきに……………	三六	二三七	月は……………	四一
二一九	大きにてよきもの……………	三六	二三八	星は……………	四一
二二〇	短くてありぬべきもの……………	三七	二三九	雲は……………	四一
二二一	人の家につきづきしきもの……………	三七	二四〇	さわがしきもの……………	四二
二二二	ものへ行く道に……………	三七	二四一	ないがしろなるもの……………	四二
二二三	よろづのことよりも、わびしげなる車に……………	三八	二四二	ことばなめげなるもの……………	四二
二三四	ほそ殿に便なき人なむ隣に……………	三〇			

二四三	さかしきもの……………	三五三	るついでなどにも……………	三五五
二四四	ただ過ぎに過ぐるもの……………	三五三	關白殿、二月二十一日に法興院の積	
二四五	ことに人に知られぬもの……………	三四四	善寺といふ御堂にて……………	三五八
二四六	文のことばなめき人こそ……………	三四四	たふときこと……………	三七六
二四七	いみじうきたなきもの……………	三四五	歌は……………	三七七
二四八	せておそろしきもの……………	三四五	指貫は……………	三七七
二四九	たのもしきもの……………	三四六	狩衣は……………	三七七
二五〇	いみじうしたてて婿取りたるに……………	三四六	単衣は……………	三七七
二五一	世の中になほいと心憂きものは……………	三四七	下襲は……………	三七八
二五二	男こそなほいとありがたく……………	三四八	扇の骨は……………	三七八
二五三	よろづのことよりも情あるこそ……………	三四九	檜扇は……………	三七八
二五四	人のうへをいふを腹立つ人こそ……………	三四九	神は……………	三七八
二五五	人のかほにとりわきてよしと見ゆる	三五〇	崎は……………	三七九
	ところは……………	三五〇	屋は……………	三七九
二五六	こたいの人の、指貫着たるこそ……………	三五二	時奏する……………	三七九
二五七	十月十餘日の月のいと明かきに……………	三五二	日のうらうらとある晝つかた……………	三〇〇
二五八	成信の中將こそ……………	三五二	成信の中將は、入道兵部卿の宮の御	
二五九	大藏卿ばかり……………	三五三	子にて……………	三六〇
二六〇	うれしきもの……………	三五三	つねに文おこする人の……………	三六五
二六一	御前にて人人ともまたものおほせら		きらきらしきもの……………	三六七

二七九	神のいたう鳴るをりに……………	三六七
二八〇	坤元録の御屏風こそ……………	三六八
二八一	節分違などして……………	三六八
二八二	雪のいと高う降りたるを、例ならず……………	三六九
二八三	陰陽師のもとなる小童こそ……………	三六九
二八四	三月ばかり物忌しにとて……………	三九〇
二八五	十二月二十四日、宮の御佛名の……………	三九一
二八六	宮仕する人人の出で集まりて……………	三九三
二八七	見ならひするもの……………	三九三
二八八	うちとくまじきもの……………	三九三
二八九	右衛門の尉なりける者の……………	三九六
二九〇	小原の殿の御母上とこそは……………	三九七
二九一	また、業平の中將のもとに……………	三九七
二九二	をかしと思ふ歌を……………	三九七
二九三	よろしき男を下衆女などのほめて……………	三九八
二九四	左右の衛門の尉を判官といふ名つけ……………	三九八
二九五	大納言殿まゐりたまひて……………	三九八
二九六	僧都の御乳母のままなど……………	四〇〇
二九七	男は女親なくなりて男親の一人ある……………	四〇〇

二九八	いみじう思へど……………	四〇二
二九九	ある女房の……………	四〇三
三〇〇	便なきところにて……………	四〇三
一本	「まことにや、「やがては下る」と……………	四〇四
一	夜まさりするもの……………	四〇四
二	火影におとるもの……………	四〇四
三	聞きにくきもの……………	四〇五
四	文字に書きてあるやうあらめど……………	四〇五
五	心得ぬもの……………	四〇五
六	下の心がまへわろくて清げに見ゆるもの……………	四〇五
七	女の表着は……………	四〇六
八	唐衣は……………	四〇六
九	裳は……………	四〇六
一〇	汗衫は……………	四〇六
一一	織物は……………	四〇六
一二	あやの紋は……………	四〇七
一三	薄様色紙は……………	四〇七
一四	硯の箱は……………	四〇七

補遺

上卷末所載

法師は言すくななる……………四三

女はおほどかなる……………四三

女のおそひは……………四三

中卷末所載

夜居にまゐりたる僧を……………四三

下卷末所載

一 霧は……………四三

二 出で湯は……………四三

一四 筆は……………四七
 一五 墨は……………四七
 一六 貝は……………四六
 一七 櫛の箱は……………四六
 一八 鏡は……………四六
 一九 蒔繪は……………四六
 二〇 火桶は……………四六
 二一 燵は……………四六
 二二 檳榔毛は……………四六

奥書

三 陀羅尼は……………四三

四 時は……………四三

五 下簾は……………四三

六 目もあやなるもの……………四三

七 ものあはれ知りがほなるもの……………四三

八 めでたきものの人の名につきていふかひなく聞こゆる……………四三

九 見るかひなきもの……………四四

一〇 まづしげなるもの……………四四

一一 ほいなきもの……………四五

二三 松の木立高きところの……………四九
 二四 宮仕所は……………四二
 二五 荒れたる家の蓬深く……………四二
 二六 初瀬にまうでて、局にゐたりしに……………四三
 二七 女房の、まゐりまかでは……………四四
 三〇一 この冊子、目に見え、心に思ふことを……………四五

枕
册
子

田
中
重
太
郎

解 說

清少納言の世界

平安時代の文藝は、王朝文藝とも呼ばれる。この時代の文藝は、日本文學のなかでもつともよく皇室を描き、もつともおほく宮廷に生きた人によつて書かれてゐる。

清少納言の枕冊子は、王朝文學である。その描く世界が宮廷または貴族の世界にほとんどかぎられてゐることも當然であらう。そこには、當時の諸記録に見える地震・火災・洪水・飢饉・外交・經濟生活・疫病流行などの事實はまつたくといつてよいほどとりいれられてゐないし、貴族の地位獲得の暗闘さへもほとんどあげられてない。この時代の女流日記にも、一般にそれが日記といはれながら、さうした記事をほとんど闕いてゐる。

無論、枕冊子に乞食も出て来る。海女の生活もある。下衆の逸話もとりあげられてはゐる。だが、それはどこまでも宮廷を中心として描かれた畫面に興を添へる一小點に過ぎない。そして、この冊子の著者が

主上や中宮と「ただ人」とをはつきり區別し、「下衆げすの家に雪の降りたる。また、月のさし入りたる、いとくちをし」(「にげなきもの」と觀じてあることも、この冊子を一讀せられたらすぐわかることである。清少納言が紫や白や紅くれなるやを好み、「あてなるもの」としてさうした色彩のものをあげてゐるのも、それらの禁色じよ・神聖色の高貴の美を第一としたからである。雪が好きであつたのもおなじく清淨性をたふとんだからである。また、「第一の人にまた一に」とのぞんだのもおなじ意識からだといへるであらう。

しかし、現實において、清少納言の父は一介の受領——彼女が「受領などなるは目もとまらずにくげなる」(「見物は」)といつた——に過ぎなかつた。清原元輔は梨壺の五人にかぞへられてはゐたけれども、八十三歳になつてやつと從五位上肥後守にとどまつてゐた。そして少納言自身も内侍にさへなれなかつたのである。その清女は、分をわきまへてはゐたが、中宮定子に侍して、あたかも姉に對するやうに、むしろそれ以上にしたしくのびのびと、自由にふるまつてゐる。その君臣主従の關係は決して人間性をおさへゆがめたり、人格を無視したりするものではなかつた。清女の個性はりつぱに生かされてゐた。そのことは作者の體驗・實感の文學である枕冊子に明らかである。

清少納言が思想家でないことや哲人でなかつたこと、また彼女が知識の木によつてゐたことは事實であらうが、だからといつて、その人に人間味がなかつたとか、その人が輕薄な女であつたとかはいへないであらう。むしろ「よろづのことよりもなさげあるこそ、男はさらなり、女もめでたくおぼゆれ」(第二五四段)

の一段がかの女の本音ではなからうか。

「をかし」は開放の精神である。祕密を好まない、明かるい、たくまな心である。それはまた美をすなほに批判する心である。このわかい心の持ち主は過去をたふとびはするが、やはりいまに強く生きた純情の人であつた。

枕冊子は、貴族社會に生み出された。そして、その生活を禮讚し、讚美してゐる。それは、その社會のもつ洗練せられた教養と血統とを重んじ、纖細・閑雅・優美の生活をたふとんでゐる。平安時代に、宮廷に奉仕した一女房の書いたこの書に庶民の世界をもとめるのは勿論むりである。そして、おなじ時代の紫式部がおなじ宮廷の上東門院に侍してゐながら貴族生活を讚美しきれなかつたのに對して、清少納言はまさにその美にひたつてゐる。おぼれてゐるともいへる。そして、かの女の枕冊子には人生に深く思ひをひそめる力がともなつてゐないやうである。だが、われわれは古典を完全無缺なものと考へないであらう。古典をうやまひ、なつかしみ、學ぶべきものはこれを得るが、祖先にないものや足りないところはこれをわれわれが補つてゆけばよいのではなからうか。いまさらいふまでもないことだが、故きを濫ねて新らしきを知ることと、そなはらむことを一人にもとめてならないことは、古典を讀む上にもつねにたいせつである。

ただし、すべての人の心の面が一つでないやうに、この作者の心の全部が徹底的に貴族主義であつたの

ではない。

清少納言は、瞬時もつれづれに堪へられぬ人であつた。一人ではかた時もあられない、つねに社交をもとめて、美の感覺に生きた女性であつた。それだけ、開放的な人であつたともいへる。かの女は宮廷をはなれて、清新な「五月ばかりなどに山里に」（第二〇九段）ドライブして蓬の香を愛し、「清水などにまゐりて」（第二五段）坂のもとで柴焚く煙のほひに心を寄せてゐる。夏の夕暮、牛の鞭の香にもぐるほしきまで興じてゐる。これらの自然・野趣に對する深い觀照の心は、素朴な野人の心である。この時代の女流に見られない自然人の精神である。そして、蟲や蚤や蚊やなめくちを寫し、あくびやくさめをも書いてゐるのもその心である。

小白河の八講の段において、八講そのものを描かないで、その周圍を描き、その前後を敘した清女は、積善寺供養の最長段でも、その前日の記に數千言を費して、かんじんの供養の記事を敷衍にとどめてゐる。説くべきものを直敘しない、露呈しない。賀茂の奥へほととぎすを聞きに行つて、ほととぎすを寫さない。この冊子の中には自讃談がおほい。自分のほめられた話をおほくみづから紹介してゐる。勿論、そこにも例の他をかへりみてみづからをいふ式の俳諧的手法が用ゐられてはゐるが、紫式部に「清少納言こそしたり顔にいみじう侍りける人」と評せられ、榮華物語の作者に「清少納言など出であひて、少々の若き人などにもまさりて、をかしうほこりかなるけはひを」（第七鳥邊野）と書かれたことであるから、これは當

時の女性としてあるまじき態度だつたのであらう。けれども、人間は自己にあるものをはなさうとする本能がある。つねに放し、話すのである。學問も藝術もその所産である。そして、この本能は老幼にかかはらず存するが、明かるとい話はわかい者ほどその度が強いやうである。報告癖といはれるこの表現が枕冊子の日記的部分を構成してゐるとしたら、そこにもこの冊子の作者のわかさがありはしないか。

清少納言の描く世界は、ほとんど貴族生活であつたが、その心は俳諧の國にあつた。かの女は歌人ではなく、散文詩人であつた。雅俗流通、自然觀照の俳人であつた。その文にはほひ・うつり・ひびきをもち、また俳文の祖ともいふべき一群を有してゐる。もつとも、その俳諧は、芭蕉の世界のもでなく、むしろ凡兆・蕪村・太祇のそれに近かつたが。

この冊子のなかで階級のことをやかましくいつてゐる作者に、もし、いま、まのあたりあつて見たら、案外くつろいだ、開放的な人ではなかつたらうか。すこし口やかましいけれども、意外に平民的で話しやすい、正直な女性ではなかつたらうか。すくなくとも、紫式部より近づきやすい女であつたらう。式部の文より個性がはつきりしてきびきびしてゐる枕冊子の行文から、また、雪の山の段その他の日記的記事に見える作者の心や態度から、かうした氣持をわたくしはもつてゐる。

清少納言枕冊子が知性と感覺との文學であるといはれ、簡勁・奇警の隨筆文學であると稱せられて來たことの當否は、本書の本文を讀まれてから批判せられるべき問題であらう。以上のやうなわたくしの感想

も、この冊子を讀まれてから御叱正を賜はるべきものである。一般にものを讀むのに先入はきびしく去るべきであり、ことに古典を讀むに際して、さうしたとらはれたみかたはできるだけ避けたい。古典の心にひたつても、おぼれないであたい。

ただ、わたくしは、この冊子が、日本人は勿論、ひろく世界各国の人々に讀まれて批判せられることをねがふ。そして、日本の古典「清少納言枕冊子」には、それらの人々の批判に堪へて永遠に生きてゆくだけの生命力があり、意義があるものと信じてゐる。

作者と時代

枕冊子の作者は、清少納言である。このことはこの冊子の記事内容、榮華物語卅六わあはせ根合ねあはせの記事、無名草子に見えるこの書の批判などよりみて疑ひを容れない事實と考へられる。枕冊子の書名に清少納言の名を冠した場合がきはめておほいことも、その作者を明示してゐるものである。

清少納言は、歌人清原元輔きよはらのもとすけの女むすめである。しかし、その名はわからない。

「清」は清原氏で、「少納言」は夫か父、兄など近親者の官名だつたと思はれるが、その點もまだつまびらかでない。女房名寄や枕草子抄（多田義俊著）に「諾子なご」と見えるが、それらはなにによつたのか眞偽のほどもはつきりしない。

清原氏の系圖は約十本餘傳はつてゐるが、清原氏は代々學問の道で世に立つて來た家であつた。その祖、舍人親王は日本書紀の撰者であり、夏野もまた令義解の撰者であつた。さらに清少納言の曾祖父にあたる深養父は古今集、後撰集などに見える著名歌人であり、父元輔はいふまでもなく梨壺の五人の一人として、萬葉集に古點を施し、また後撰集の撰にもあづかつた學者であつた。そして、この清原家は後世には中原氏とならんで明經の家となり、太政官の外記を奉職することがおほかつた。かの高倉院侍讀であつた清原頼業などの大學者もこの學問の家から出たのである。

かうした家に育つた清少納言は、物質的にはともかくも、その古典的教養の點でかなり恵まれた境遇にあつたといふことができよう。父元輔の社會的地位は、歌人・學者として以外は、深養父と同じく不遇のやうであつた。彼の家集に見えるいくつかの歌はその氣持をよく傳へてゐる。しかし、あまり恵まれぬ官途について心を悩ましてゐたとはいへ、彼の性格は多血質に神経質を兼ねてゐたため平生は快活さうであつた。今昔物語卷廿八「歌讀みの元輔加茂の祭に一條の大路を渡る語第六」に見える逸話にさうした性質が讀みとられる。その末尾に「この元輔は馴れ者の、ものをかしくいひて人笑はするを役とする翁にてなむありければ、かくもおもて無くいふなりけりとなむ語り傳へたとや」と書かれてゐる評語は、彼の面影をありありと教へてくれるやうである。

快活で、滑稽なことをいひ、人をよく笑はせる人、明朗諧謔な文を書く作家、さうした人が眞から樂天

家であることはすくない。勿論、さうした人は外面的に樂天家に見える。誇りに、快げに、明かるく見える。けれども、その心の奥底はさうでない場合がおほいのである。わたくしはかうした性格を土佐日記の著者や十返舎一九に見るのであるが、この清原元輔にもまたその例を見出だすのである。

そして、元輔の子清少納言もさうした性格の持ち主であつた。清少納言にむかつて當時與へられた同性からの批判「清少納言こそしたり顔にいみじう侍りける人、さばかりさかしたち、眞字書きまなちらして侍るほどもよく見ればまたいと堪へぬことおほかり」(紫式部日記)「清少納言など出であひて、少々の苦き人などにもまさりて、をかしう誇りかなるけはひをなほすて難くおぼえて」(榮華物語第七 鳥邊野)は外面的・印象的には十分寫し得て眞であつた。清少納言にはおそらくかやうに花やかにふるまひ、さし出るやうな行爲があつたことであらう。しかしさうした外側や表面だけを見て、その心の底までも批評し去ることはゆるされないのである。人間の眞の心や性格をきめることはきはめてむづかしいが、そのあらはれた行爲や印象だけによるのがかならずしも妥當な方法ではあり得ないし、また正しい結果をもたらずものでないことは斷言できるのであらう。したがつて作者以外の人の評判記によつてだけでは、作者の性格を論ずることはゆるされないのである。

そして、清少納言集一卷は、あるいはこの作者の眞實の心を今日のわれわれにも傳へてくれるかも知れない。もつともそれにも、當時の歌には型があり、女性は弱くあえかなることが要求されてゐたのである。

が。

清少納言にはこの外に松島日記三卷の著が傳へられてゐるが、これは宣長が指摘したやうに後人の僞作である。

清少納言の生歿年代ははつきりとわからない。その履歴も、枕冊子の記事から整理された記録だけで、くはしくはわからない。したがつて、清女を知るには、この冊子を味讀するほかにはほとんど方法がないのである。

ただ彼女がはじめて宮仕をしたと思はれるのは正暦四年（九九三）の初春で、當時二十七八歳とすれば彼女の出生は康保一・二年ごろ（九六五・六ごろ）となる。定子皇后の崩御は長保二年（一〇〇〇）であるから、清女のほんたうの生涯はわづかにこの宮仕の十年足らずであつたといへるのではなからうか。

中宮の御所に出仕してからは、お若いが聰明にわたらせられ、その上御慈愛の深い中宮のお傍に絶えずお仕へし、公私ともに御談合のお相手として、また消閑の御役に遺憾なくその職責をつくしたのである。その君臣の交りは、見るもうらやましいかぎりであつた。うてばひびくといふことばのやうに、中宮の御心と少納言の魂とは相應じ相通じたのであつた。十も若くいらせられるが、その御教養において清少納言にまさるとも決してお劣りにならぬ中宮は、濶い坤徳の翼に、あたかも姉のやうに、時には母のやうにさへはぐくまれた。御かたちといひ、御學才と申し、ただただことばにも心にもおよび難い中宮に對して少

納言は讃仰やむことなく、ひたすら忠勤を勵んだのである。

清少納言の宮中奉仕は「十年ばかり」〔鳥は〕であつた。そして長保二年十二月皇后にお別れして以後の彼女の消息は不明である。ただおそらくそのまましばらく宮中にとどまつたであらうことは考へられる。そしてこの冊子の一往の完成を見たのが長保三年（一〇〇一）上半期らしいことも、いろいろの點から推測される。しかし、彼女がどこでその生涯を終へたか、幾歳で世を去つたかなどについては未だわからない。またその夫や子女について考へることもたいせつであるが、それらの研究も不十分で、夫に橘則光のりみつがあり、一子則長を生んだこと、則光と別れてから藤原實方と結婚し、さらに晩年には藤原棟世と家庭をもつたらしいこと、あるいは清女の兄弟として致信むねのぶ・戒秀の外に爲成があり、藤原理能の妻となつた姉があつたらしいことなどの外はほとんど何もわかつてゐない。

平安京に都がうつつてから二百年、攝關政治はつづいて、藤原氏の榮華は最高頂に近づいてゐた。そして女流文學としてのかな文學は藤原氏の女子の入内によつて、宮廷を温床とし、サロンとして、發展して來た。元來平安時代そのものが、飛鳥時代以來外に向けられて來た日本の心が内に沈潜し、自己深化し、優美風雅の文化を生んだ時代であつた。それは萬葉のたをやめぶりの展開した「みやび」の時代であつた。

第六十六代一條天皇の永祚二年（九九〇）五月藤原兼家の長子道隆が父について關白となつた。同年一

月二十五日、彼はその第一女定子（御年十五）をいれて女御とし、定子は同年十月五日中宮となられた。道隆はさらに次女を東宮の妃にした（長徳元年正月）。すなはち淑景舎原子、内御匣殿である。かくして、一條天皇御生母東三條院詮子の御兄であり、天皇と東宮との外父としての彼の威權は朝野を壓するものがあつた。大鏡によると、道隆は非常な酒豪であつたらしいが、その性格もきはめて磊落快活のやうであり、興に乗じては「日一日さるがう言を」（淑景舎春宮にまありたまふ）した諧謔家である。

正暦四年（九九三）四月、彼は攝政を復辟して關白となり（中の關白と呼ぶ）、翌年その子權大納言伊周は内大臣となつた。道隆は翌長徳元年三月病を得たので奏請して伊周をして權に關白のことは行はせ、詔によつて伊周に隨身兵仗を賜はつたのである。同年四月、病革り剃髪をしたけれども、その十日つひに薨去した。時に四十八歳であつた。

道隆の亡くなつた後、中の關白家には悲しい雲がおほひはじめた。道隆はその嫡子伊周（異腹の兄に道頼があつたが）をその後任に擬してゐたが、道隆の弟に右大臣道兼があつた。兄が薨じたとき、重病の床にあつた道兼は生前の關白をしきりに望んでやまないで、ついに道隆葬送の日道兼に萬機關白の詔が下つたのである。

この道兼は、關白職にあることわづか七日で薨じたが、生前弟道長を左大將——これは伊周の兼任してゐた官であつた——に任じ、薨ざるにあたつて道長に右大臣、關白の職を譲ることを奏請した。容色・才

能はずぐれてをり、中宮の御兄として時めいてはゐるけれども、その運氣の強さにおいて、その器量において、その政治的手腕において、伊周はやはり道長に一步を譲らねばならなかつた。二度までも機を失ひ、焦燥自暴の結果、彼は弟隆家とともに亂行し、自分は太宰の權の帥に、隆家は出雲の權の守にそれぞれ貶謫されるに至つたのである。しかし、かうした貶謫が、史家の指摘してゐるやうな道長の自己安全のための讒構によるのであつたとすれば、伊周もまた道長を恐れさせるほどの敏腕家であつたことになる。

昨日の榮華は夢と消え、暗雲にとどされた中の關白家、そこに定子中宮がましまし、枕冊子の著者が定子皇后にお仕へ申しあげてゐたのである。長徳二年（九九六）五月一日、伊周出發の三日前、中宮はみづから御缺して御落飾あそばされた。その後、翌長徳三年四月、伊周隆家召還の詔が下つたが、すでに中の關白家の勢力はまつたく地に墜ち、中宮の御身にも悲しい出來事がつぎつぎとおこつた。道長は、長保元年（九九九）十一月一日、己が長女彰子を入内させたが、翌二年二月廿五日には女御彰子（御年十三）を立てて中宮とし、定子中宮を皇后とした。

皇后は主上のかはりなき御寵愛を唯一のたのみとされ、清少納言らの忠勤に、思しむすぼれる御心を解きやはらげられながら、長保二年（一〇〇〇）十二月十五日、大進生昌の宅で嫡子内親王をお生みになり、御後産のため翌十六日、御年未だ二十五歳で崩御されたのである。

この度は限りのたび（旅と度とをいひかけてある）ぞ。その後すべきやう」など書かせたまへり。い

みじうあはれなる御手習どもの、内わたり（一條天皇）の御覽じきこしめすやうなどやと、思しけるにやとぞ見ゆる。

夜もすがら契りしことを忘れずは戀ひむ涙の色ぞゆかしき

また

知る人もなき別れ路にいまはとて心ぼそくもいそぎたつかな

また

煙とも雲ともならぬ身なりとも草葉の露をそれとながめよ

などあはれなることどもおほく書かせたまへり。

にはじまる皇后御葬送のかなしい記事は榮華物語第七鳥邊野に見えてゐるが、この巻をひらくとき、わたしは知らず知らず涙のにじむのをとどめ得ないのである。

長徳三年十一月中宮に立たれた彰子は、才媛紫式部を輔導の侍女として、御堂關白道長の威勢とともにお榮えになり、上東門院として八十七歳の天壽を全うされ、式部また源氏物語五十四帖の大作を残した。

清少納言の枕冊子は、かうした時代、かうした環境に成立したのである。樋口一葉が「枕の草紙をひもとき侍るに、うはべは花紅葉のうるはしげなることも二度三度見もてゆくに哀れにさびしき氣ぞこのなかにもこもり侍る」（「棹のしづく」）といひ、藤岡作太郎博士が「枕草紙以外の清少納言こそ一篇の悲劇を

成せるもの」(國文學全史)と道破せられたことは、その人がいづれも若くして散つた秀才、才媛であるが故に、一層われわれの胸をうつのである。

われわれは明かるさに満ちた枕冊子に、定子皇后と清少納言の悲しみを味讀しなければならぬのである。しかもこの冊子の巻頭の一文「春は あげぼの」は日本人の自然觀、古典と風土との眼心をとらへた壓卷であり、不易の語である。この餘裕、このうつくしさは枕冊子の特質が那邊にあるかを教へるものである。

書 名

清少納言枕冊子は古來つぎのやうに呼ばれてゐる。

一 清少納言枕冊子・清少納言枕草紙・清少納言枕双紙・清少納言枕さうし・清少納言まくらさうし

(本朝書籍目錄・八雲御抄卷一・河海抄・花鳥餘情・源氏物語抄・看聞御記、その他枕冊子三卷本の題簽などにも

これらの名稱が見える)

二 清少納言枕 (八雲御抄卷五、里の條)

三 清少納言草子 (八雲御抄卷五、杜・里の條)

四 清少納言記 (八雲御抄卷一、禁祕御抄・類聚名物考)

五 清少納言抄（八雲御抄卷三、馬の條・卷五、野・市・橋・河・海などの條）

六 清少納言（八雲御抄卷五、淵・渡の條・明月記、天福元年三月廿日の條・慶安二年刊本の題簽など。ただし、明月記のは人名とも考へ得る記事である）

七 清少抄（八雲御抄卷五、岳の條）

八 清少（八雲御抄卷五、瀧・淵のば）

九 枕草子・枕草紙・枕冊子・枕双紙・枕雙子・枕造紙（大鏡古本裏書・無名冊子・淺野家藏臨時祭試樂調樂〔定家筆〕・つれづれ草・河海抄・花鳥餘情・實隆公記・清巖茶話その他）

右のうち二、三、七、八などは略稱といふよりもむしろ略記された結果と思はれる。四、五、六については、それがもつとも古い書名であつたらうとする説もあるが、すくなくとも現存文獻上においてはいまだ一般に通稱されてゐなかつたものであるから、結局一、と九とがこの冊子の名稱として古來もつとも行はれて來たものと考へられるのである。そして、四、五、七に見える「記」「抄」などの名が「草子」「草紙」のかほりに用ゐられたものであるならば、この冊子の書名は、作者みづからがことさらに附したものではなかつたことがわかる。すなはち、一から九に至る書名は、すべて清少納言と同時代の他の人または後世の人々によつて名づけられたものと考へられるのである。もつとも、九は榮花物語（若ば枝）などにも普通名詞として見えてをり、それはこの冊子の跋文にも見えるとほり、作者が名づけなくとも、で

きあがつた著書が當然さう呼ばれる名稱なのでもあつた。

以下一と九との書名をすこしく検討してみたい。そして一は九の上に作者名を附けたものであるから、まづ九を考察することがおのづから一を解する結果となるであらう。枕草子は「枕」と「草子」との二語から成立してゐる。そして、枕にはこの字のほかに宛てる文字がないが、草子には草紙・冊子・双紙・雙子・造紙などの文字が用ゐられてゐる。まづこの草子「さうし」の意義から考へてみよう。

「さうし」は、もと綴ぢた書物の總稱であつた。その綴ぢかたや體裁によつて異りはしたが、さうし元來の意義はその書の外形から來た名稱であつた。それは當時古今集・後撰集の冊子本を古今のさうし・後撰のさうしと呼んでゐるのもわかる。内容は歌でも、物語でも、その書の外形がさうし(冊子)であれば、すべて「さうし」と呼んだので、それは卷子くわんぎなどに相對した稱呼なのであつた。したがつてその文字を宛てるには「冊子」を以てするのが原義に即してもつとも正しいと考へられる。「さうし」は「冊子」の音便である。この類例に「格子」——「かうし」、「拍子」——「はうし」などがある。以下この書の中で「さうし」といふべきところにはすべて「冊子」の字を用ゐることとする。もつとも冊子さうしは、その後世的意義において、それに書かれた内容(かな文學)にも關係して、草子・草紙などの文字が宛てられて來た。草子は小右記・權記・伊呂波字類抄に、草紙は御堂關白記にもつとも古い例が見られる。そしてその宛て字の傳統が數百年乃至一千年來のものであるとすれば、現今強ひてそれらの用字を咎むべきではないであらう。ことに無名冊子以後のい

はゆる御伽草子・假名草子・草雙紙に至つては決して冊子の文字を強ふべきではない。いまはしばらくその原義にもとづく文字によつてみたまでである。

つぎに「枕」の語義を考へねばならないが、これについては、枕冊子の意義に關聯して從來多數の説が出てゐるので、便宜上「枕」と「枕冊子」の用法なり意義なりをあはせ説いて行きたい。

榮華物語 若ば枝えに、女房の衣裳のおほく重なつたのを敍して、

衣きぬの袂つまかさなりて、うち出いだしたるは、色いろの錦を枕冊子まくらづしにつくりて、うちおきたらむやうなり。か

さなりたるほど、一尺餘よばかり見えたり。あさましうおどろおどろしう、袖口そでぐちはまるみ出でたるほど、火桶ささやかならむを据多たらむと見えたり。

とあるが、これを源氏物語 若菜上の

紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎすぎに、あまたかさなりたるけちめ花やかに、冊子まくらづしのつまのやうに見えて……。

と見えるのとあはせて讀むとき、枕冊子まくらづしと冊子まくらづしとの形態が類似したものであることがわかるであらう。そして、榮華物語のさきの文の前後を讀むと、この枇杷殿（研子）大齋の際の女房打出がはなはだ多數の衣であつて、前代未聞のことであり、あまり衣がおほいので動けない女房もあつたほどで、後に道長から叱りを受けたことなどが知られる。

かくて、枕冊子は單なる冊子よりも厚い形態の冊子をいふらしいことが理解されるであらう。そしてその相違が「枕」の一語によるとすると、この一語の意味はいかに解すべきであらうか。從來これに加へられた主な説にはつぎのやうなものがある。(以下の諸説は枕冊子の跋文にもとづいたものがおほい。第三百一段参照)

1 「枕」をつねに手馴らすもの、座右にして離さぬものとし、枕冊子を備忘録、手控へなどの意とするもの(顯昭所引教長卿註・契沖・村田春海・藤井高尙以下明治以後諸家の通説)

2 「枕」は人に見すまじきものとし、枕冊子を祕藏の冊子と解するもの(關根正直博士「枕草子集註」、吉田幸一氏、同じく枕とは閨中といふ意味であつて、他見をはばかる私記といふべきものと説く人に多田義俊「枕草子抄」・花見朔巳氏説〔新校群書類從第廿一卷解題〕がある)

3 「枕」を寢具の枕と解し、「枕にこそはし侍らめ」は、「くくつて枕にしたいと思ひますわ」の意に説くもの(坂元三郎氏「國語解釋」第二卷第八號「暗と黒と枕」なほ、「この紙をくくつて枕にしよ」と説くもの(山内二郎氏「枕草紙選釋」・佐藤幹二氏「解釋と鑑賞」第二卷第六號などがある)

4 漢詩文に典故をもとめるもの(イ)文選卷廿三設論の部にある班孟堅(班固)の「答賓戲竝序」のなかの「徒樂_二枕_一經籍_二書紆_二體衡門_一」を典據としたとみる植松安氏の説(藤村作博士功績記念會編「國文學と日本精神」所收「枕にこそは」と(ロ)白氏文集廿五祕省後廳七言絕句「盡日後廳無_二一事_一」白頭

老監枕書眠」によつたとする池田龜鑑博士の説（『國語』第三卷第三號）との二説がある。後説は夙に類聚名物考（山岡俊明編）卷二百六十六書籍部四清少納言記にも見えてゐる。

5 「まくら」を臣等（古今集真名序）として枕冊子を私の日記草子と解するもの（盤齋抄一説）

6 「枕」を枕言・歌枕などの枕とみ、題詞とみるもの（盤齋抄一説・春曙抄一説・小林榮子女史「源氏伊勢新研究」附録「枕草紙といふ書名」）

7 「まくら」を魂、ことに生魂の集中保持される處とし、その歌詞の中の生命を扼してゐることばと解し、まくらごと、まくらことばは、その生命を握つてゐる單語、または句の意味と説くもの（折口信夫博士「國文學註釋叢書十七枕草紙解説」、高崎正秀博士「萬葉集叢考」所收「枕詞の研究」、『國文學論究』所收佐藤謙三氏「枕草子と女房日記との交渉」）

8 「まくら」を「目座」——人間の身體中もつとも中心になり、神聖な場所である「目」を安定させる「座」——の義とし、枕冊子を枕頭の書とすることを、「目座」による魂を豊かにみちびくものとみるもの（臼田甚五郎氏「新釋註枕草子」解題）

9 跋文の史記、枕の出典を枕冊子の略語の「まくら」とみて催馬樂にもとめるもの（原田清氏「文學」第十一卷第六號「枕草子の形態と題名について」）

10 9と4の（イ）とを兼ね、兩方の出典説をとるもの（中島光風氏「國語と國文學」第廿二卷第二號）

これらのおほくの異説に對して採るべき態度や結論を簡單に述べることは至難であるが、現在の私見としては、枕冊子の「枕」はもとその冊子の内容から出たものであり、歌枕・枕詞・枕言などの「枕」と同じく、「上位に位するもの」「上にあるもの」との意をもつもので、6のやうに題詞とみる説がもつとも穩當であらうと考へる。すなはち、この冊子の内容は、「山は」「峯は」「すさまじきもの」「にくきもの」など、名辭・題詞により類纂されてをり、一見日記的記事と見える文も、それがほとんど「……もの」の分類意識下にある事情から見て、この冊子の書名としての「枕」の意味は敍上の如く解すべきであると信ずるからである。もし「しぎ」（史記）に對して「まくら」といふ語をかならず考へねばならないとすれば、それは原田氏の「底」説や中島氏の史記に對する漢書の孟固への聯想などにはしたがへず、むしろそれは古來枕詞としておほく用ゐられて來た「しきたへの」につづく「まくら」の聯想と考へるべきであらうと思ふ。また、後撰集卷十八雜歌四伊勢の歌に「ちりに立つわが名清めむ百敷の人の心をまくらともがな」（つねになき名立ち侍りければ）同、よみ人知らず、題しらずの歌に「涙のみ知る身のうさもかたるべくなげく心をまくらともがな」とあるなどにも關聯してゐるのかも知れない。

「清少納言枕冊子」は「清少納言が（または「の」）枕冊子」と讀む。枕冊子は現今一般に「まくらのさうし」と呼ばれてゐるが、さきの榮華物語の場合も「の」がなく、「綴ちおける枕さうしの上にこそ昔がたりの夢は見えけれ」（夫木和歌抄卷三十二枕 信實朝臣）の歌も「の」を入れずに詠んだと考へられ、中世

の源氏物語諸註に「清少納言枕さうし」「清少納言まくらさうし」などと記し、近世初期においても「の」を入れて記した例がほとんどないから（もつとも一般に「の」が表記してなくても「の」を入れて讀むことがおほいが、この場合右のやうなかな書きのときにも「の」が入つてゐないから）古くは「まくらさうし」といつたのであらう。

清少納言の枕冊子の命名はかならずしも作者によらなかつたが、それをさう呼ぶことは作者みづから意識してゐたことと思はれる。この冊子の跋文がその間の事情を説明してくれるからである。したがつて、「まくらさうし」といふ普通名詞は清少納言以前から存したのであらう。

原形とその成立・内容

枕冊子の原形とその成立については現在まだ定説がない。

この冊子の跋文びやくぶんによると、内大臣伊周が一條天皇と皇后定子とに料紙を献上したことがあつた。その年代はかならずしも伊周の内大臣時代である正暦二年（九九四）から長徳二年（九九六）までの間とは限定できないが、すくなくとも彼が太宰の権の帥となつた長徳二年四月廿四日より以前のことであらう。その冊子―料紙には、主上は史記を書かせられ、皇后は清女にそのままで賜はつたのである。枕冊子の正式の執筆は、この拜領の冊子からはじめられた。そして摺筆は長保二年（一〇〇〇）十二月以後、同三年八月

以前に一旦なされたと考へられる。

清少納言の枕冊子には草稿本・初稿本・再稿本などがあつた。このうち草稿本らしいものは現在一本も傳はつてゐない。草稿本は跋文によると、左中將源經房が伊勢の守であつた長徳元年（九九五）十二月から、同二年十二月までに成立してゐて、その間に經房に持ち出されたことであつたものである。その内容は「…は」「…もの」などの類纂の部分のほかに日記的な記事も多少あつたものと考へられるが、跋文はなかつたであらう。これはながらく彼女の手からはなれてゐて、その後にも返つたのであるが、これにその後の記事なり感想なりを増補し、一部に添削加除し、跋文をつけたものが初稿本で、長保三年（一〇〇一）前半期までに一往成立してゐたと考へられる。本書の底本とした三卷本は、かなりくづれてはゐるが、この初稿本の姿をほほ備へたものであらう。この草稿本、初稿本の成立年代は、この冊子中の史實の文から傍證できるのであつて、長徳二年と長保二年との記事が充實してゐることは、これらの記事がその年代を離れないころ執筆されたと考へられるのである。

さらにこの初稿本を増補した再稿本があつたと思はれる。それはその本文における人物の官位名その他から見ておそくも治安元年（一〇二一）までに成立してゐたと考へられる。現存の傳能因所持本にはこの再稿本のおもかげを留めてゐるものと推考されるのである。

枕冊子はその全部が連続的に、一氣呵成に、短期間に書かれたものではない。冊子中の官位表記に前後

不同があり、それが事件年時、執筆年時のいづれにもよらないものであつたりする事實からもさうしたことが證される。

枕冊子の原形は、現存流布の枕冊子、ことに本書の底本とした三卷本枕冊子から、さうひどく遠いものではなかつた。したがつて讀者は、枕冊子を本書の姿によつて、このままの章段順序で讀まれることを希望する。

人皇第五十二代嵯峨天皇の御代には、すでに漢詩の題詠が廷臣の間で日常化し、やがて和歌の題詠が普遍化して、題の數五百を有する類題和歌集の古今和歌六帖が生まれた。これらの題詠や、當時までに成立した諸種の辭書・類纂の類が清少納言の枕冊子へ直接間接に與へた影響は大きいものであらう。唐の李義山（李商隱）の雜纂もあるいはこの冊子の典據となつたかも知れない。また和泉式部集に見える「つれづれなりしをり、よしなしごとにおぼえしこと」「世のなかにあらまほしきこと」以下「人に定めさせまほしきこと」「あやしきこと」「苦しげなること」「あはれなること」などの題詠、また、やや後のものではあるが、梁塵祕抄の題歌（四句神歌 雜）などを讀むとき、「…は」「…もの」といふ枕冊子の形態が決して彼女の獨創でないことが知られる。梁塵祕抄以外の、それらの題詞と枕冊子との差異は、「春は」「夏は」「山は」「市は」などが「春」「夏」「山」「市」と書かれてゐないといふことだけでも知られる。實に「は」の一字は枕冊子が歌學書でなく、作歌便覽でなく、作文辭典でないことをはつきりと證據立ててくれるの

である。「すさまじきもの」「めでたきもの」などの「……もの」の形式が、「すさまじきものは」「めでたきものは」などとなつてゐないのはその條の内容がすでにさうした便覧や辭典でないためで、しかも「わろきものは」以下いくつかの段にさうした形式をまだとどめてゐるのである。

しかも、清少納言の枕冊子は普通の枕冊子ではなかつた。跋文に示されたやうに、それは最初、普通の枕冊子（類纂書）を書くつもりで拜領した冊子なのであつたが、定子皇后の庇護のもとに作者の個性が十分に生かされ、わが國隨一のうつくしい類纂隨筆となり、宮廷日記となつた。それは、泰平の御代に一人のやまとなでしこが、そのすぐれた大和魂を發揮して、時の主上と皇后とに奉仕申しあげた至誠の宮仕の日記であり、讚仰の記録である。宮廷に奉仕した一女性が平安京の風土と人とをうつくしく描いた隨筆である。この冊子の形態は、前代・當代の口遊くゆうを學び、句題にならひ、皇后の御希望にしたがひ、また作者の好みによつて類纂的な形態をとりはしたが、その本質は清少納言の宮廷奉仕の讚仰録であり、定子皇后頌徳記であり、また隨想平安京風土記なのであつた。この意味で、文學としての枕冊子の成立を考へるにあつて、この冊子のなかの類聚諸段と和歌・類纂書などとの關係を検討することは學問的にきはめて必要であるにしても、それらは所詮この冊子の本質を左右したり、この冊子の精神的意義を動かし得るものではないと信ずる。

枕冊子は後掲四系統諸本によりそれぞれ内容・分量に増減があるが、その内容は池田龜鑑博士の分類に

よるとつぎのやうになる。

第一類 主として天然自然の現象または客観物に關するもの

(一) 自然の現象に關するもの。たとへば、日は、雲は、ふるものは など。

(二) 地理地文に關するもの。たとへば、山は、森は、池は、島は など。

(三) 土木家屋に關するもの。たとへば、關は、橋は、みさきぎは、社は、寺は など。

(四) 動植物に關するもの。たとへば、木は、鳥は、馬は など。

(五) 神佛に關するもの。たとへば、佛は、神は、だらには、修法は など。

(六) 人に關するもの。たとへば、法師は、をんなは、大夫は など。

(七) 趣味娛樂に關するもの。たとへば、ひくものは、歌は、ものがたりは、あそびは など。

(八) 装束に關するもの。たとへば、そくたいは、狩衣は、夏のうはぎは など。

(九) 日用品や調度に關するもの。たとへば、ひあぶぎは、おりものは、すずりのはこは、たたみは など。

第二類 主観的な精神内容に關するもの。たとへば、めでたきもの、あはれなるもの など。

第三類 四季の情趣に關するもの。たとへば、正月一日は、五月四日の夕つかた など。

第四類 自然または人生の感想に關するもの。たとへば、男はめおやなくなりて云々、若くてよき男の云

云など。

第五類 日記・紀行などに關するもの。たとへば、淑景舍東宮にまゐりたまふ云々 など。

そして前田家本はこの分類のままが冊に立ててあつて、池田博士はこれがもつとも原本の面影に近いものではないかと考へられた。『美論としての枕草子』『日本文學大辭典』『岩波文庫春曙抄解題』『岩波日本文學 枕草子の形態に關する一考察』

鹽田良平氏は三卷本文を底本として

第一部 自然鑑賞。春は曙・正月一日三月三日は・正月に寺に・七月ばかりの・木の花は・蟲は など。

第二部 美的心象。あてなるもの・うつくしきもの・心ときめきするもの・こころゆくもの など。

第三部 をりにふれて。女のひとり住ひ・宮仕へ人のもとに・いみじうしたてて埒に・村上の前帝の・すきずきしくて など。

第四部 自傳的作品。小白河といふところは・宮に始めてまゐりたるころ・關白殿二月二十日に など。と分類編成された。(日本古典鑑賞讀本 枕草子)

またわたくし自身も小著「枕草子の精神と釋義」で、成立(春は曙・跋文)宮仕(初宮仕・清涼殿の春など)枕(あてなるもの・うつくしきもの・川は など)四季(正月一日は・五月の山里 など)事件(大進生昌が家・翁丸)の五部に分けて釋いたことがある。

しかし、本書を一読すれば、枕冊子に類纂的部分——「…は」「…なるもの」「…(し)きもの」——と隨筆的部分と日記回想記的部分との三つの部門に分類できることを讀者はよみとられるであらう。そして、類纂的部分は「…は」と「…のもの」とに二分できることもただちにさとられるであらう。枕冊子の原形は、かうした各部門に分ち得る文が本書底本のやうに混在してゐた雜纂型であつたのか、それとも、かつて和辻哲郎博士・池田龜鑑博士などが説かれたやうに、分類整理された本、つまり類纂本であつたかは未だ明らかにされてゐない。したがつて、枕冊子の内容を分類表示したり、説明したりすることは、この冊子を眞に味はふ上にはかへつてさまざまとなるであらう。讀者がみづから棹取つてこの清流をくだるとき、はじめて枕冊子の作者のいのちにふれ得ることと信ずる。

ただ一つ、清少納言枕冊子の全篇に滿ちてゐる「春」の精神について考へておきたい。それは枕冊子味讀のもつとも重要な鍵だからである。

卷頭第一まづ「春は あけぼの」と道破した清少納言は、その「あけぼの」に生きた。春に生きた人であつた。わかさにあこがれ、未完成の年少美に生きぬいた人であつた。柳の葉の「ひろごりたるはくし」とし、花の散りたるは「うたて」と見、三十の身を「さだ過ぎふるぶるしき人」としてみづから強く恥ぢてゐた。「うつくしきもの」として幼兒・童・雛の調度・遊の浮梨・雞の雛など「なにもなにもちひさきものはいとうつくし」と觀じたのも、小なるもの・稚きものの將來性をねがひ愛づる心である。春は少

年である。希望である。青い未完成の美である。なまめかしき美も、東南の色―東の青と南の朱とを重ねた―むらさきの美も、また春の美であらう。時の主上も、皇后も、いまだ二十代にましましたかましまさぬかの宮廷に仕へて、清女の生活は「うつくしきもの」をもとめて、わかくつづけられたのであつた。

枕冊子が「をかし」を基調とする文學であることは從來だれにもいはれたところである。この「をかし」についてはすでに多數の論考が行はれてゐるが、その語の由來については未だ考察されてゐない。わたくしはそれが「わか(若)し」と語系をおなじくする語であり、「をかし」の「を」は「小」^{*}から出た詞であつて、「をとこ」「をとめ」「を(愛・惜)し」「をつ」「(變若)などの「を」に通ずるものではあるまいかと考へてゐる。さう考へることによつて、形容詞「をかし」の持つ多面性が理解されると思ふ。ただ上代文獻に「をかし」の語が見えない點はなほ考へるべきであらう。

なほ、この冊子に「いと」といふ副詞が頻發され、「いとをかし」がさかんに用ゐられてゐる點から考へても、枕冊子は青春の文學であり、若い女性の文藝だといへるであらう。一般に人は若ければ若いだけ「いと」をよく用ゐるし、また男性よりも女性に「いと」的なことばつかひがおほいからである。「をかし」と感じやすいからである。

諸本と底本

枕冊子の現存諸本は、その数がすくなくないが、池田龜鑑博士はそれを

一 傳能因所持本系統

二 三卷本（安貞二年奥書本）系統

三 前田家本

四 堺本（宸翰本）系統

の四つにわけ、一、二はそれぞれ第一類・第二類の兩類にわけられた。この各系統諸本の性質、その所在・所有者などについては、すでに先學武藤元信・山岸徳平・池田龜鑑・楠（舊姓光明）道隆・鈴木知太郎の諸氏の論考があり、また小著「枕冊子研究」「前田家本枕冊子新註」「校本枕冊子」（上巻の諸本解題）などに説いたので略し、ここには本書の底本とした三卷本について述べておく。

三卷本は、その冊数が三冊であるところからかく呼ばれるが、また、その奥書から「安貞二年奥書本」「安貞本」とも呼ばれる。現存諸本は本文に見える多少の異同、巻の立てかた、條目と勘物・奥書などの相違により、「春はあけぼの」から「あぢきなきもの」までを闕き、奥書・勘物がおほくて正確詳細なものを一般に「第一類本」と稱し、さうでない諸本を「第二類本」と呼んでゐる。そして、現存第二類諸本は第一類本を堺本で校訂した本であつて第一類本の方が純正である（『國語國文』第五卷第六號枕草子三卷本兩類本考）といふ楠道隆氏の説は正しいが、これはあくまでも、現存第一類本と第二類本についてであつ

て、現存塚本による校訂以前に、すでに三巻本には兩類本のあつたことを、淺野家藏枕冊子繪卷の詞書本文や、同家藏臨時祭試樂調樂（定家卿筆）所引枕冊子本文によつて知ることができるのである。（小著「枕冊子研究」參照）

さて、本書に底本としたのは、三巻本第一類本である。すなはち、陽明文庫藏清少納言枕双紙三冊（舊二冊本）であるが、第一類諸本にすべて闕けてゐる「春は あけほの」から「あぢきなきもの」までは第二類本の彌富破摩雄氏舊藏本で補つた。以上の方法は、第一類本の本文が第二類本文より純正だと考へるとき、どうしても採らねばならない校訂方針であると信ずるものであるが、いまかりに第二類本を底本として校合しても、さう大きな異文はなく、ことに章段の出入・前後などは決しておほくはない。この古典全書の枕冊子は三巻本の定本たるべきものとして校訂してみたものである。

なほ、底本の體裁、三巻本の現存主要諸傳本はつぎのとほりである。

底本

一 陽明文庫所藏三冊（舊二冊）本 上中下三卷

縦九寸二分（中卷九寸一分）横七寸五分（中・下卷七寸二分）袋とぢ。褐色紙表紙。中卷をのぞいては題簽白鳥の子金銀泥下繪があり、各卷書寫時は室町時代末期、外題は近衛信尹公筆といはれるが、中卷にはない。禮紙は上中卷は前に二枚、下卷は前に一枚ある。上下巻とも「陽明藏」の朱印があり、下卷

には「近衛藏」の朱印もある。上巻内題に「清少納言枕双紙」とみえ、中巻には「近衛藏」の朱印だけがあり、内題がない。一面十二行に書かれてゐる。

一 彌富破摩雄氏舊藏本 上中下三冊

縦八寸三分・横六寸五分。袋とち。表紙薄褐色布装。見返金銀散模様。題簽は各巻中央色紙に「清少納言枕双紙」とある。一面十行に書かれ、書寫年代はすくなくとも近世初期以前と思はれる。現存第二類本中では勸修寺家本（上巻）・前田家（五冊）本とともに最も古いものである。

【参考】三巻本（安貞二年奥書本）現存諸傳本

一 第一類本諸本

1 陽明文庫藏（三冊）本（舊二冊本） 三冊

2 宮内廳書陵部藏本 三冊

3 陽明文庫藏（三冊）本（2と謄寫關係にあると思はれる近世中期の寫本） 三冊

4 富岡益太郎氏藏本 三冊

5 勸修寺家藏本（上巻の本文は第二類本系統に屬する）（二冊）

6 岩瀬文庫藏本（5を天明二年に寫した本）（二冊）

7 中邨秋香舊藏本（上巻の本文は第二類本系統に屬する）（二冊）

8 龍谷大學圖書館藏本（上卷後半「しきの御さうしにおはしますころ」より

「なぬかの日のわかかなを」までのみ）

一冊

二 第二類本諸本

1 彌富破摩雄氏舊藏本

三冊

2 勸修寺家藏本（中卷・下卷の本文は第一類本系統に屬する）

（一冊）

3 岩瀬文庫藏本（5を天明二年に寫した本）

（一冊）

4 中郵秋香舊藏本（中卷・下卷の本文は第一類本系統に屬する）

（一冊）

5 前田家藏本

五冊

6 古梓堂文庫（久原文庫）藏本

三冊

7 伊達家舊藏本

三冊

8 内閣文庫藏本

三冊

9 刈谷圖書館藏本（中卷闕）

二冊

10 靜嘉堂文庫藏本（松井簡治博士舊藏本、上卷闕）

三冊

11 鈴鹿三七氏藏本（上卷・中卷闕）

一冊

12 京都大學藏本（長澤伴雄舊藏本、上卷・中卷闕）

一冊

註 第一類本の8は箇々の語句においては第二類本文にも一致するところがおほい。

影響と研究史

源氏物語にくらべてその六分の一餘の分量しかもたない清少納言の枕冊子は、一方物語といふ傳統的な文藝形態に對して隨筆・さうしとしての新形式——それは公にすべきものではないものとして——によつたため、そしてその著者の生命と著者の主家の榮落とによつてこれら二大古典の研究史に大きな影響を見たのである。

清少納言枕冊子は源氏物語にもその影響とおほしき條々を見出だし得るとのことである（島津久基博士「源氏物語評論 岩波講座」日本文學」所收）が、榮華物語（根合）・寶物集（第二）・無名冊子・古今著聞集（卷十一）・十訓抄（卷七）・禁祕御抄・八雲御抄などにその讀後感なり引用なりが見られる。また室町時代においては、つれづれ草をはじめ正徹物語・なくさめ草（正徹）・竹馬抄（斯波義將）などに引かれ、やがて江戸時代になると、犬枕・童蒙先習（小瀬甫庵・慶長十七年跋）・尤の雙紙（寛永九年刊）・俗枕草紙（別名僭上納言）より、玉かつま・花月草紙その他に至るまで相當廣大な影響を與へてゐる。また、この時代の俳諧においては、「誰かいふ枕艸紙はこの道の寶なり」と賞讃した琴風は、自撰俳諧瓜作（元祿四年刊）に「春は曙」「穠は夕暮」の二歌仙を卷き、「ことことなるもの」その他の枕言によつて發句を分類撰集し、季範撰の「きさら

ぎ」(元祿五年刊)、寄木撰の「まくら掛」(元祿十四年跋)、さては朱拙撰の「初便」、梅丸の「俳諧枕草子」その他の俳句・俳文にも影響が見られるのである。明治以後は落合直文の「新編枕草子」その他の戯文もあるが、一葉の文學などにすこし見られるくらいで、創作の上に目立つた影響はないやうである。それは枕冊子が歌集でも物語でもなかつたことのためであらう。しかし研究史の上では明治以後劃期的な發展を見たことはいふまでもない。

この冊子の註釋書には、古く季經卿註十卷(本朝書籍目錄・花園院宸記) 頼元抄(多田義俊著「枕草子抄」によると、十四卷あつて、當時四卷だけ傳はつてゐたといふ)などがあつたらしいが、いづれも現在傳はつてゐない。室町時代以前のものはわづかに三卷本の勘物(かんと)が残つてゐるだけで、源氏の諸古註に比してその分量の點において、その質の上からも、問題にならない。

江戸時代のはじめ磬齋・季吟兩翁の抄があらはれ、惟中の旁註が出るに及んで、いはゆる舊註が大成された。延寶年間には福住道祐が九本を十七年にわたつて校勘し、註釋し、また藤井高尙は「清少納言枕草子新釋」藤井高雅は「枕草子參考」(十二冊)を著したよしであるが、高尙の新釋が一部刊行せられた以外は發見されてゐないのは遺憾である。ただ長澤伴雄の編著が舊臺北帝國大學その他に存してゐたことはよろこばしい次第である。以下主要な参考書目をあげよう。

枕冊子の註釋書解題としては、雜誌論文として大津有一氏の「枕草子註釋書覺書」〔文學〕昭和九年一月

號) がきはめて参考になるが、明治以後のものは解説されてゐない。わたくしは小著「枕草子の精神と釋義」附録の研究文獻の項に註釋書・各種論文名を昭和十七年八月十五日現在の調査で掲げた。また、雜誌論文の簡單な解説としては立命館大學論叢第八輯國語漢文篇第二號のなかに「清少納言枕草子研究業績に關する三つの報告」の名で作成した。さらに、書目だけではあるが、「枕草子評解」(有精堂版)の解題の條に、研究文獻として、昭和二十八年六月現在で研究書目を附しておいた。

清少納言枕草紙抄 十五卷 延寶二年五月刊(國文註釋全書・國文學註釋叢書所收) 加藤馨齋

枕草紙春曙抄 十二卷 延寶二年七月刊(岩波文庫所收、その他刊本が多い。齋藤彦麿・岩崎美隆の註も活字になつてゐる。鈴木弘恭翁の訂正増補、佐藤仁之助翁の改訂増補版などもある) 北村季吟

枕草紙旁註(清少納言旁註・枕草紙拾穗抄) 十一卷 天和元年十一月刊(國文註釋全書・國文學註釋叢書所收) 岡西惟中

枕草子裝束抄(清少納言枕草紙裝束撮要抄) 一冊 享保十四年四月刊(國文學註釋叢書・枕草子春曙抄附録

所收) 壺井義知

枕草紙抄(有職故實・調度に關する語句や成立・題號などについて考説したもの) 一冊 (故實叢書「安齋雜考」下

の卷所收) 多田義俊

千草の根ざし(草花の考證を施したもの) 一冊 文政十三年刊(木版刊本・續隨筆文學選集第二所收) 殿村常久

枕草紙存疑 (難解・疑問の語句に對する考證) 一冊 (況齋叢書・未刊國文古註釋大系所收) 岡本保孝

枕草紙私記 (同右) 一冊 天保十二年成 (國文學註釋叢書所收) 岩崎美隆

參考枕艸紙 (春曙抄を底本とし、七種の異本で卷七まで精密に對校した校本。未刊。七冊 舊臺北帝國大學所藏) 長

澤伴雄

枕草紙詳解 三冊 (後に一冊) 明治三十二年六月刊 松平靜 (渡邊文雄補)

枕草紙通釋 二冊 明治四十四年九月、十月刊 武藤元信

校定枕草紙新釋 二冊 (後に訂正せられて一冊) 大正八年四月刊 永井一孝

枕草子評釋 二冊 (後に一冊) また増訂版も出た。大正十年六月刊 金子元臣

枕草子全釋 一冊 昭和二年二月刊 栗原武一郎

枕草子集註 一冊 昭和六年二月刊 關根正直

選釋書は、はなはだ多いが、

枕草子新釋 一冊 昭和十七年七月刊 青木正

枕草子新解 一冊 昭和二十八年一月刊 林和比古

通解 枕冊子新釋 一冊 昭和二十八年三月刊 小西甚一

はそれぞれ特徴があつてすぐれてゐる。小著にも「國文學習叢書枕冊子」「枕草子評解」などがある。

その他頭註と簡単な解説を施してある程度ではあるが、藤村作博士編「清少納言枕草子」(昭和十四年三月刊)・山岸徳平氏編「校註枕草子」(昭和十四年三月刊)などはこの冊子の全文を讀む上に非常に有益な本であり、吉澤義則博士著「校註枕草子」(昭和二十五年一月上卷刊・同二十六年三月下卷刊)は、十二行古活字本を底本文とし、博士独自の解釋に示唆をうけること多く、鹽田良平氏著「枕草子」日本古典鑑賞讀本(昭和二十八年三月刊)は、抄本ではあるがその鑑賞と批判の文に教へられるところがすくなくない。

枕冊子の異本として、塚本を活字翻印したものに小著「塚本枕冊子」(古典文庫)(昭和二十三年五月刊)があり、前田家本本文を全文翻刻し、これに頭註を加へた小著に「前田家本枕冊子新註」(昭和十六年九月刊)がある。

また、清少納言と枕冊子とを解説した單行本に、

清少納言(家庭叢書號外) 一冊 明治二十九年十二月刊 綠亭主人

清少納言と紫式部 一冊 明治四十五年三月刊 梅澤和軒

清少納言とその文學 一冊 昭和十五年三月刊 關みさを

清少納言傳記攷 一冊 昭和十八年二月刊 岸上慎二

清少納言 一冊 昭和十八年五月刊 關みさを

清少納言と紫式部 一冊 昭和十九年二月刊 今井邦子

枕草子（研究社國文學古典講話）一冊 昭和二十年五月刊 岸上慎二

枕草子に關する論考（中古國文學叢考）一冊 昭和二十二年三月刊 池田龜鑑

清少納言 一冊 昭和二十三年十二月刊 田中重太郎

枕冊子研究 一冊 昭和二十七年十月刊 田中重太郎

清少納言物語（日本名作物語）一冊 昭和二十九年四月刊 池田龜鑑

などがある。

小著「校本枕冊子」は、傳能因所持本系統の三條西家舊藏本（學習院大學國文學研究室現藏）を底本として、枕冊子の現存諸本中主要なものを校合したものである。

學術論文としては、つぎにあげるものがすぐれてゐる。

清少納言枕草子の異本に關する研究 「國語と國文學」昭和三年一月號 池田龜鑑

枕草子解題 雄山閣版國語國文學講座第一卷 烏野幸次

枕草子研究 新潮社版日本文學講座第五卷 窪田空穂（昭和二十一年十二月刊「平安朝文藝の精神」所收）

枕草子の形態に關する一考察・清少納言 岩波講座日本文學第十四・十八 池田龜鑑（昭和二十二年三月

刊「枕草子に關する論考」所收）

枕草子解説 國文學註釋叢書第十七卷 折口信夫

枕草子異本研究―類纂形態本考證―「國語・國文」昭和九年六、七月號 光明（現姓楠）道隆

枕草子諸版本の本文の成立―特に慶安板本、磐齋抄、春曙抄、旁註本について―「文學」昭和十二年

二月號 鈴木知太郎

枕草子三卷本兩類本「國語・國文」昭和十年六月號 光明（現姓楠）道隆

枕草子の成立時期についての考察「國語と國文學」昭和十一年五月號 小澤正夫

そのほか枕冊子の成立その他については、岩清水尙氏、山脇毅氏、林和比古氏、冊子中にはあらはれる人物については岩野祐吉氏にすぐれた論考が多い。

この冊子の外國語譯は、すべて抄譯であつて、その數も源氏物語にくらべてすくない。すなはち、西紀一九二八年（昭和三年）ロンドンで刊行された *The Pillow-book of Sei Shonagon* 一冊（二六二頁）は源氏物語を全英譯した Arthur Waley 氏の抄譯で、金子元臣氏の評釋の本文を底本とし、枕冊子の約四分の一を英譯したものであるが、一九二九年再版されてゐる。英譯では、やはり抄譯で *The Sketch Book of the Lady Sei Shonagon*（昭和五年刊）小林信子女史譯がある。Waley 氏の書によると、フランス語譯に *Les Notes de l'Oreiller* 一冊（西紀一九二八年、パリ刊）があり、これは日本人 K. Matsuo（松尾邦之助）氏とフランス人 Steinber-Oberlin 氏との共譯で、その分量はやはりこの冊子の四分の一であるが、その採用箇所は Waley 氏の書とは異つてゐるやうである。また Aston 氏の *Japanese Literature*（西紀

一八九九年・明治卅二年刊)中に一部分英譯され、Florenz氏の *Geschichte der Jap. Literatur* (西紀一九〇六年刊)に若干ドイツ語譯され、Reyon氏の *Anthologie de la Littérature Japonaise* (西紀一九一〇年刊)中にもすこしフランス語譯されてゐるよしである。

古典は現代に生きてゐる。枕冊子の現代的意義はその生きる力を見出だすにある。その永遠なるもの、不易の生命を説くにある。ここに、Waley氏の英譯書を通じてこの冊子に加へられた二三の評語をかかげて、つたないこの解説のむすびとする。

An enchanting book, beautifully translated.—Daily Express.

うつくしく翻譯せられた「魅惑ある本」

How witty and delicately perspective the lady was may be guessed by the charm and dexterity of Mr. Waley's translation.—Times Literary Supplement.

この婦人(清少納言)がいかに機智に富み、またいかに繊細優雅な透視畫法に通じてゐたかは、ウエリイ氏の、魅力ある、また巧妙な翻譯によつて推察できよう。

Exquisite...Shonagon should be met immediately by all discriminating people.—Time and Tide
いみじきかな。あらゆる具眼の士は少納言とただちに近づきになるにちがいない。

年表

註 三三・一一四などの数字は三卷本(本書)段數。
 二九九・三〇八などの数字は前田本(古典文庫刊
 小著「前田家本枕冊子新註」)段數。

年 號	皇 室	敘 任 異 動	社 會	枕 冊 子 (事件年時推定)
寛和二年 丙戌(西紀九六六)	六月廿三日 花山天皇(十 九歳)御落飾。一條天皇 (七歳)踐祚。(七月廿二 日即位) 七月五日 女御藤原詮子(一 條帝御母) 皇太后となら る。 七月十六日 冷泉天皇第二 皇子居貞親王、皇太子と なる。 十月十日 圓融法皇 大井 河に御幸、三船の御遊。	六月廿三日 太政大臣頼忠 の關白をやめ、兼家攝政 となる。 七月廿日 攝政兼家の右大 臣をやめ、大納言藤原爲 光を右大臣とす。この日、 從三位權中納言藤原道隆 正三位權大納言となり、 廿二日從二位になる。(道 隆は七月十六日右近衛中 將を去る) 十二月廿五日 僧正寛朝、 大僧正になる。	六月十八日より三 日間 右大将藤原 濟時、小白河の 第にて法華八講 を修す。 六月廿四日 藤原 義懷・同惟成、 花山寺にて出家 す。 この年四月 往生 要集(慧心僧都) 成る。	六月十九日「小白 河といふところ は」(三三・二九九 段)

<p>永延元年 丁亥(九七) 四月五日改元。</p>	<p>十月十四日 攝政兼家邸行 幸。 十一月八日 石清水八幡宮 行幸。 十二月十五日 賀茂社行 幸。</p>	<p>九月四日 伊周、左近衛權 少將となる。 十二月十六日 道長、倫子 を娶る。</p>	<p>二月十一日 入宋 僧裔然、佛像經 論などをもたら して入洛す。</p>
<p>永延二年 戊子(九八)</p>	<p>三月廿五日 常寧殿にて兼 家の六十の賀を行ふ。</p>	<p>一月六日 道隆、從一位叙 位の恩命を辭し、次子伊 周にゆづり、伊周、從四 位下となる。 一月十五日 伊周、禁色を ゆるさる。</p>	<p>四月十四日・七月 廿八日 儉約令出 づ。 十一月七日 道隆 二條第にて兼家 の六十の算を賀 す。</p>
<p>永祿元年 己丑(九九) 八月八日改元。</p>	<p>三月廿二日 はじめて春日 社行幸。</p>	<p>二月廿三日 道隆、内大臣 に任ぜらる。 二月廿七日 伊周、備中權 介となる。 四月五日 伊周、右中辨と</p>	<p>八月十三日 大風 (家屋倒壊・洪 水・高潮)</p>

<p>七月廿九日 南殿に出御、相撲御覽。</p>	<p>なる。</p> <p>七月十三日 道隆、左近衛大將を兼ねぬ。</p> <p>十二月廿日 攝政兼家、太政大臣に任せらる。</p>	<p>五月十日 兼家二條京極第を佛寺とし、法興院積善寺と號す。</p> <p>八月廿八日 大風・洪水。</p> <p>十月廿五日 地震</p>	<p>「あはれなるもの」(一一五段)の中、藤原宣孝・隆光の御嶽詣のありしはこの年八月、宣孝の筑前守任官の時 の事と思はる。</p> <p>前田本三〇〇段 「御嶽にまうづる道のなりは」</p>
<p>正暦元年 庚寅(九七) 十一月七日改元。</p>	<p>一月五日 主上(十一歳)御元服。</p> <p>一月廿五日 内大臣道隆の女定子(十五歳)入内。</p> <p>二月十一日 定子、女御とならる。従四位下。</p> <p>八月一日 主上御惱。</p> <p>九月七日 圓融法皇、藤原實資をして主上の平安を春日社に祈らしめらる。</p>	<p>五月五日 兼家、攝政を辭し、關白となる。</p> <p>五月八日 兼家、出家。道隆、關白となる。</p> <p>五月廿六日 道隆、攝政となる。三十八歳。(六月一日左近衛大將をやむ)</p> <p>六月某日 肥後守従五位上清原元輔卒す。八十三歳</p> <p>七月一日 齊信、左中將となる。</p> <p>七月二日 兼家、薨す。六十二歳</p>	

正曆二年

辛卯(九二)

十月五日 女御定子、中宮
となり、中宮遵子、皇后
とならる。
十月廿二日 中宮、東三條
院より入内。
十二月十九日 中宮、御祈
のため山陵使を發遣せら
る。

一月下旬 圓融法皇の御惱
のため圓融寺に行幸。
二月十二日 圓融法皇崩
御。寶算三十三。

九月一日 皇太后詮子、御
惱により職曹司に還御。
九月十六日 皇太后詮子、
御落飾、はじめて院號を
定めて東三條院となす。

七月十日 伊周、右中將、
隆家、右兵衛權佐になる。
九月一日 伊周、藏人頭と
なる。
十月廿五日 中宮生母從五
位上高階貴子正三位に敘
せらる。

一月廿七日 伊周、藏人頭
をやめて參議となり、右
大辨平惟仲、藏人頭とな
る。

七月廿二日 非參議高階成
忠從二位となる。
七月廿三日 攝政道隆の内
大臣をやむ。

七月廿七日 參議伊周、從
三位となる。
九月七日 爲光太政大臣、
重信右大臣、道兼内大臣、

五月廿八日 攝政
道隆、右近馬場
にて競馬を行ふ

六・七月 旱魃。

八月 祭主正四位
上大中臣能宣卒
す。年七十一。

正曆三年 壬辰(九九)	
十二月一日 大納言藤原濟時の女、城子東宮に入内。	十二月一日 諒闇により節會・小朝拜を停む。 二月三日 諒闇により釋奠を停む。 二月六日 圓融法皇の御周忌御齋會を行ふ。 二月十二日 同 御周忌諒闇あく。 四月廿七日 東三條院へ行幸。 十一月廿七日 中宮、新造の二條第に遷御。 十二月七日 中宮、二條宮より入内。 十二月十四日 平野社へ行幸。
道長權大納言(廿六歳)、伊周權中納言(十八歳)となる。	四月廿七日 道長、從二位 六月十六日 太政大臣爲光薨す。五十一歳。 八月廿八日 從三位伊周、權大納言になる。この日、公任參議、俊賢藏人頭、高遠兵部卿、隆家左少將になる。 十月十一日 從二位讚岐權守高階成忠出家す。年七十。
四月廿一日 道隆賀茂詣。 五月廿六日・六月一日 京都洪水。 十月廿三日 道隆、法興院にて法華經一千部供養す。 十二月十三日 興福寺の僧徒等、道隆の四十の算を賀す。	二月 「圓融院の御はての年」(一三三・三〇八段)
天皇 十三歳。 中宮 十七歳。	天皇 十二歳。 中宮 十六歳。

正曆四年

癸巳(九九)

一月三日 東三條院へ行幸

一月廿二日 内宴。東三條

院・中宮、承香殿にて宴

儀御覽。

三月廿七日 攝政道隆の二

女原子入内。淑景舎。

四月廿四日 中宮萬燈會。

八月八日 主上御痘瘡。

十一月十五日 豊明節會。

中宮、五節を獻ぜらる。

十一月廿七日 大原野行幸

一月十三日 隆家、信濃權
守となる。

二月廿二日 道隆の二三四

女、南院西對にて着裳。

四月廿二日 道隆、上表、

攝政を辭し、關白となる。

一月廿三日 道隆
大襲。

三月卅日 攝政道

隆の第東三條南

院焼亡。

六月廿五日 關白

道隆、法興院三

味堂供養。

六月廿六日 故右

大臣正二位菅原

道眞に左大臣正

一位を贈り、閏

十月さらに太政

大臣を贈る。

この年、咳疫流行。

初春「宮にはじめ
てまゐりたるころ」
(一七九・三〇一段)

ただし、清少納言

初宮仕の年時につ

いては、正暦元年

冬、同二年春・冬、

同三年春・冬、同四

年冬説などあり。

十一月十五日「宮

の五節出ださせた

まふに」(八六・三

一四段)

十二月二十日(廿

二日)「御佛名のま

たの日」(七七・三

一五段)ただし、

「經房の中將」を重

視する時は、長徳

二年十二月以後の

事となる。

正暦五年

甲午(九九四)

一月三日 東三條院御所土御門院へ行幸。

二月十三日 中宮、東三條院へ行啓。

二月廿日 中宮、東三條院とともに積善寺に行啓。参内。

一月十三日 隆家、正四位下、美作權守となる。

八月廿八日 重信、左大臣になり、道兼右大臣を兼ね、伊周、内大臣に、源宣方、右中將となる。
九月 日 平惟仲、左大辨となる。
十一月五日 道隆の男、隆圓、權少僧都となる。

一月廿三日 道隆大襲。

二月廿日 道隆、積善寺にて經供養を行ふ。

四月十五日 道隆賀茂詣。

八月七日 道隆、相撲を行ふ。

十一月十三日 道隆病む。

十一月十六日 道隆、東三條南院に遷る。

この年、天災多く疫疾流行す。

二月廿日「關白殿二月二十一日に」(二六二・三一九段)

三月「三月ばかり物忌しに」(二八四・三二三段)

春「清涼殿の丑寅の隅の」(二二・三一〇段)

五月「心にくきもの」(一九二段)

中「五月の長雨のころ」の條

夏「大納言殿まゐりたまひて」(二九五・三〇二段)

天皇 十五歳。
中宮 十九歳。

長徳元年

乙未(九五)

二月廿二日改

元。

一月二日 東三條院へ行幸
中宮・東宮(居貞親王)
大饗。

一月五日 三宮御給。

一月十九日 道隆の二女原
子(淑景舎)、東宮女御と
なる。内御匣殿と號す。

二月十八日 中宮、東宮女
御原子と登華殿にて御對
面。

四月六日 中宮・東宮女御、
道隆の第南院に行啓。

四月十二日 中宮、道隆の
穢に觸れ、登華殿に入ら
る。

五月十八日 主上、藤壺に
渡御。

六月十九日 中宮、入内。

六月廿日 主上、藤壺に渡

一月二日 道隆、病により
參内せず、五日簾中に候
す。

二月五日 道隆、辭表をた
てまつる。

二月廿六日 道隆、再び辭
表をたてまつる。

三月九日 關白道隆の病に
より、内大臣伊周をして
文書を内覽せしむ。

四月三日 道隆、病により
職を辭す。

四月五日 伊周に隨身兵仗
を賜ふ。

四月六日 關白道隆出家。

この日、隆家權中納言從
三位となる。

四月十日夜 入道前關白正
二位道隆薨す。年四十三。

一月九日 冷泉院
の御所鴨院、道
隆・伊周の二條
の第焼亡。

一月廿八日 伊周
大饗。

二月十七・八日
「淑景舎東宮にま
ありたまふほど
の」(一〇〇・三二
〇段)

二月末「頭の中將
のすずろなるそら
言を聞きて」(七八
段)

六月廿八日より七
月八日まで「故殿
の御服のころ」(一
五六段)

九月十日「故殿の
御ために月ごとの
十日」(一三〇段)

十月廿二日「はし
たなきもの」(一二
三段)中、「八幡の
行幸のかへらせた

御。

六月廿八日 この日より中宮、太政官朝所にて御赦。

七月八日 中宮、還御。

九月五日 東宮、右大臣道長の京極第に遷御。

九月十日 中宮、道隆の供養を職曹司にてせさせらる。

十月七日 中宮、梅壺にて御讀經。十日結願。

十月十日 主上石清水行幸のため、中宮、職曹司に遷御、東三條院、内裏を出でらる。

十月廿一日 石清水行幸。廿二日還御。

十月廿四日 中宮季御讀經。

四月廿七日 道兼、關白となる。

五月八日 道兼薨ず。三十五歳。

五月十一日 權大納言道長に内覽の宣旨を賜はる。

六月十一日 權大納言正三位道賴(中宮御兄)薨ず。二十五歳。

六月十九日 道長、右大臣に任せられ、氏長者となる。

八月廿八日 伊周、東宮傳を兼ね。この日、俊賢参議、行成藏人頭、公任右衛門督となる。

九月 日 藤原實方、陸奥守となる。公任侍従となる。

七月・八月以降 道長と伊周との對立甚だし。

この年、疫病猖獗を極め、上達部・殿上人にして罹病死歿する者甚だ多し。

まふに」の條。

正曆五年二月または長徳元年四月

「ねたきもの」(九一段)の中、南の院裁縫の條。

長徳元年五月以前「小原の殿の御母上とこそは」(二九〇・三二六段)

道綱の母はこの年五月二日に死去。

天皇 十六歳。
中宮 二十歳。

長徳二一年

丙申(九六)

一月五日 東三條院へ行幸
 一月十六日 踏歌節會。この夜、伊周・隆家の従者、過つて花山法皇を射奉る。
 二月廿五日 大神宮以下諸社に奉幣、主上八省に行幸。中宮、梅壺より職曹司に遷御。
 三月四日 中宮、職曹司より二條宮に遷御。
 四月廿四日 中宮、再び二條宮に遷御。
 五月一日 中宮、御落飾。
 六月八日 中宮、高階明順宅へ移御。その夜、平成仲邸に移御。
 六月廿五日 東三條院詮子入内。
 七月十一日 二條宮炎上の

一月十四日 方弘、藏人となる。廿二歳。
 四月廿四日 内大臣伊周を貶して太宰權帥とし、權中納言隆家を出雲權守とす。この日、齊信、參議となり、正光、藏人頭となる。
 五月一日 隆家出發。
 五月四日 伊周出發。
 五月十五日 病により、伊周を播磨に、隆家を但馬に留めしむ。
 六月廿五日 道長・顯光に任大臣の兼宣旨を賜ふ。
 七月廿日 道長左大臣、顯

六月八日 中宮の二條宮炎上。
 六月 大地震。
 七月 大風、賀茂川溢る。
 この年、火災多し。拾遺和歌集、この年に成るか。

二月か「頭の辨の御もとより」(一一八段)
 二月廿六日「かへる年の二月二十餘日」(七九段)
 三月末日より七月「宰相の中將齊信宣方の中將」(一五七段)
 (六月)(八月)「殿などのおはしまさで後」(一三八段)
 「この冊子目に見える心に思ふことを」(三〇一段)中、伊周の冊子献上はこの年四月廿四日以前正暦五年八月廿八日任内大臣まで

ため中宮に用度雜物を奉る。

七月廿日 大納言藤原公季の女義子入内。

七月廿四日 中宮、左大臣道長に笛を賜ふ。

八月九日 義子、女御となる。弘徽殿。御年廿三。

十一月十四日 右大臣顯光の女元子入内し、十二月二日、女御となる。承香殿。

十二月十六日 中宮、第一皇女脩子、里第にて御誕生。

光右大臣となる。

九月十九日 公信侍従となる。

十月十日 伊周、密に入京して中宮御所にかくれ居たるを本府に追はる。

十月廿餘日 中宮御生母正三位高階貴子薨す。

の間の事と思はる。

「左中將まだ」〔三〇一段の中〕は長徳元年十二月から同二年十二月までの事か。

「殿上の名對面こそ」〔五四段〕「雨のうちへ降るころ」〔九九段〕後半の記事、「方弘はいみじう」〔一〇四段〕、「中納言殿まゐりたまひて」〔九八段〕もこの年か。

天皇 十七歳。
中宮 廿一歳。

長徳三年

丁酉(九九七)

六月廿二日 東三條院へ行幸、中宮、職曹司に移御。
 七月 日 清涼殿にて御讀經。
 十月九日 中宮、法興院にて貴子の周忌法會を行はる。

一月某日 信經、式部丞となる。
 四月五日 伊周・隆家、赦にあひて召還。
 五月四日 隆家入京。
 八月 日 方弘、修理亮となる。
 十月廿三日 隆家、兵部卿となる。
 十二月某日 伊周入京。

三月廿五日 東三條院御惱のため大赦。
 五月 日 蝕・大地震。
 九月 南の賊、邊境を犯す。

「雨のうちには降るころ」(九九九段)の前半。
 この年六月以降長保元年八月まで「頭の辨の職にまゐりたまひて」(一三一一段)

天皇 十八歳。
 中宮 廿二歳。

長徳四年

戊戌(九九八)

二月十一日 故道兼の女、尊子入内。
 二月十五日 脩子内親王、職曹司を出でらる。
 二月廿三日 承香殿女御元子入内。
 七月五日 中宮御惱。

七月十四日 藤原説孝、五位藏人となる。

二月 太宰府、賊を追ふ。
 六月十三日 大僧正寛朝寂。
 七月 疫病流行。
 この月、源重光、從三位高階成忠(七十六歳)、三

三月「職の御曹司の西面の」(四七段)
 五月「五月の御精進のほど」(九五・三二八段)
 秋か「里にまかてたるに」(八〇段)

<p>長保元年 己亥(九九) 一月十三日改元。</p>	
<p>一月三日 中宮入内。 六月十四日 内裏炎上のため主上、職曹司に小憩、大極殿に行幸、太政官に渡御。</p>	<p>十一月十六日 脩子内親王別當を補す。 十二月十六日 脩子内親王、職曹司より参内。登華殿にて十七日着袴。三歳。</p>
<p>一月七日 藤原實資、敍正三位。拜賀のため職曹司に参る。 二月九日 彰子着裳。同十一日從三位に敍せらる。</p>	<p>八月廿七日 右衛門權佐宣孝、山城守を兼ね。 八月 行成右中辨、源道方左少辨となる。 十月廿二日 源經房左中將源頼定權中將、成信右中將となる。</p>
<p>一月一日 雪降る。 一月 大赦。 閏三月廿二日 清範寂。三十八歳。</p>	<p>十日、佐理(五十歳)薨す。 八月十三日 源宣方卒す。 八月廿日 大風。 十月 日蝕・地震。 十一月十三日 藤原實方卒す。 十二月十日 大雪。後日、宮中にても雪山を作る。 この年、夏冬の間赤斑瘡流行、死者多し。</p>
<p>五月 「五月ばかり月もなういと暗きに」(一三二段)</p>	<p>十二月より長保元年一月にわたる「職の御曹司におはしますころ」(八三段) この年八月かまたは前年八月か「職におはしますころ」(九六段)</p> <p>天皇 十九歳。 中宮 廿三歳。</p>

年

表

<p>長保二年 庚子(1000)</p>	<p>六月十六日 一條大宮院へ 行幸。 八月九日 中宮、職曹司よ り三條の平生昌宅へ移 御。 八月十五日 中宮御修法。 十一月一日 道長の長女彰 子入内。年十二。 十一月七日 三條宮(生昌 宅)にて、中宮、第一皇 子敦康御誕生。 この日、彰子、女御とな る。藤壺(飛香舎)。</p>	<p>三月 道長に隨身兵仗を賜 ふ。 十一月三日 左大臣道長の 室、從三位倫子に輦車を ゆるす。</p>	<p>六月十四日 内裏 炎上。修理職よ り出火。 八月 太宰府、高 麗の賊をうつ。 九月十二日 道長 嵐山にて三船の 遊。 九月十九日 内裏 の猫、子を産む。 産養の事あり、 乳母は馬命婦な り。 この年、紫式部、 藤原宣孝と結婚。</p>	<p>八月九日・十日 「大進生昌が家に」 (六段) 長徳四年またはこ の年「大藏卿ばか り耳とき人はな し」(二五九段) 「成信の中將こそ」 (二五八段)も長徳 四年十月以後。 天皇 二十歳。 中宮 廿四歳。</p>
<p>二月十二日 中宮、新内裏 に入御。 二月十八日 敦康百箇日の 儀。主上北殿に渡御。</p>			<p>二月下旬「二月つ ごもりごろに風い たう吹きて空いみ じう黒きに」(一〇</p>	

二月廿五日 中宮定子、皇

后となり、女御彰子、中宮となる。

三月廿七日 皇后定子、生

昌宅三條宮に出御。

四月十八日 皇子敦康、親

王宣下。

八月八日 皇后、三條宮生

昌宅より入内。

八月廿日 尊子、女御とな

る。

八月廿七日 皇后、生昌宅

より本宮に遷御。

十月一日 内裏造督成るに

より、仁王會・安鎮法・

臨時御讀經等に行はる。

十月六日 皇后御修法。

十月十一日 主上、一條院

より新造内裏に入御。

三月十七日 定澄、興福寺別當となる。

四月 道長邸にて

侍臣競馬。

五月廿六日 道長

邸にて法華八講

を修す。

五月 雨を祈る。

六月 大雨、疫病

流行。

八月 洪水。

九月 皇大神宮遷

宮。

二・三三一段)

二月廿日ごろ「一

條の院をば新内裏

とぞいふ」(二三

〇・三一七段)

三月十七日「新内

裏の東をば北の陣

といふ」(二〇段)

三月「うへにさぶ

らふ御猫は」(七

段)

五月五日「三條の

宮におはします

ころ」(二二五段)

二月十二日―三月

廿七日または八月

八日―廿七日か

「成信の中將は入

道兵部卿の宮の御

子にて」(二七六・

長保三年
辛丑(1011)

十月卅日 皇后御修法。
十二月十五日 皇后、生昌

宅三條宮にて御産。第二
皇女嬖子御誕生。

御産により同夜半(十六
日)崩御。御年廿五。在

位十一年。

十二月廿一日 固關、磐固

又陣定を行ひ、皇后崩御

後の雑事を議す。

十二月廿七日 夜、皇后を

六波羅密寺に葬送す。

一月一日 諒闇により節會
を停む。東三條院にて拜
禮あり。

一月七日 白馬節會を停む

一月十日 故皇后三七日御

忌諷誦を行ふ。

一月廿九日 法興院にて故

皇后の御法會あり。

二月一日 東宮の御匣殿原

二月四日 源成信、出家。

廿三歳。

十一月六日 北野
社炎上。

この冬、疫病流行
し、翌年春夏に及
ぶ。

この年、源重之歿
す。

二月廿九日 藏人

頭藤原行成、世

尊寺を供養す。

ついで、同寺を

御願寺とす。

三二一段

天皇 廿一歳。
皇后 廿五歳。
中宮 十三歳。

	<p>子(故皇后の御妹)剃髮。 三月十日 主上、御除服。 三月廿五日 皇女媛子御百日の儀。 八月十一日 中宮(彰子)御所にて敦康親王の魚味始の儀。 九月九日 中宮彰子、土御門第に移御。 十月九日 土御門第へ行幸。東三條院の四十の賀を行ひ給ふ。 十一月十三日 敦康親王、飛香舎にて御着袴。 十二月四日 故皇后の周忌法會を法興院にて行ふ。 十二月卅日 敦康親王御讀經を行はる。 閏十二月十六日 東三條院御落飾。 閏十二月廿二日 東三條院詮子、行成邸にて崩御。御年四十。</p>
<p>四月廿五日 紫式部の夫、藤原宣孝卒す。 六月廿日 主殿助藤原隆光藏人となる。 閏十二月十六日 伊周、本位に復す。</p>	<p>十一月十八日 内裏炎上。 十一月廿九日 公卿宮女の華奢美粧を禁ず。</p>
<p>天皇 廿二歳。 中宮 十四歳。</p>	

年

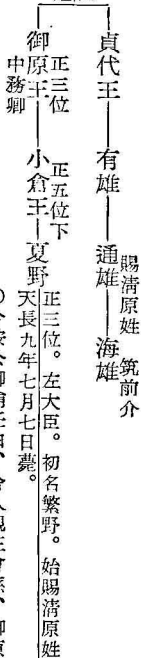
表

系 譜

はじめ三圖は 作者關係の系譜、「皇室」以下は 作品關係の系圖である。
〔皇室〕以下の系譜は本名で表示し、この冊子中の稱呼を（ ）で包んで示した。枕冊子
中にあらはれる人名を肉太の活字（ゴヂツク體）で示し、あらはれない人を普通の活字で
示した。

〔扶桑拾葉集作者系圖 清少納言〕

天武天皇—舍人親王一品。太政大臣
諡崇道靈敬天皇



○今按公卿補任曰、舍人親王曾孫、御原
王孫、小倉王第五子、云々。
譜系圖誤作天武帝曾孫。今據補任改之。



女 清少納言。初仕皇后定子。後爲上東門院侍女。
嘗著枕草子。老年落魄。卒於筑州民門云。

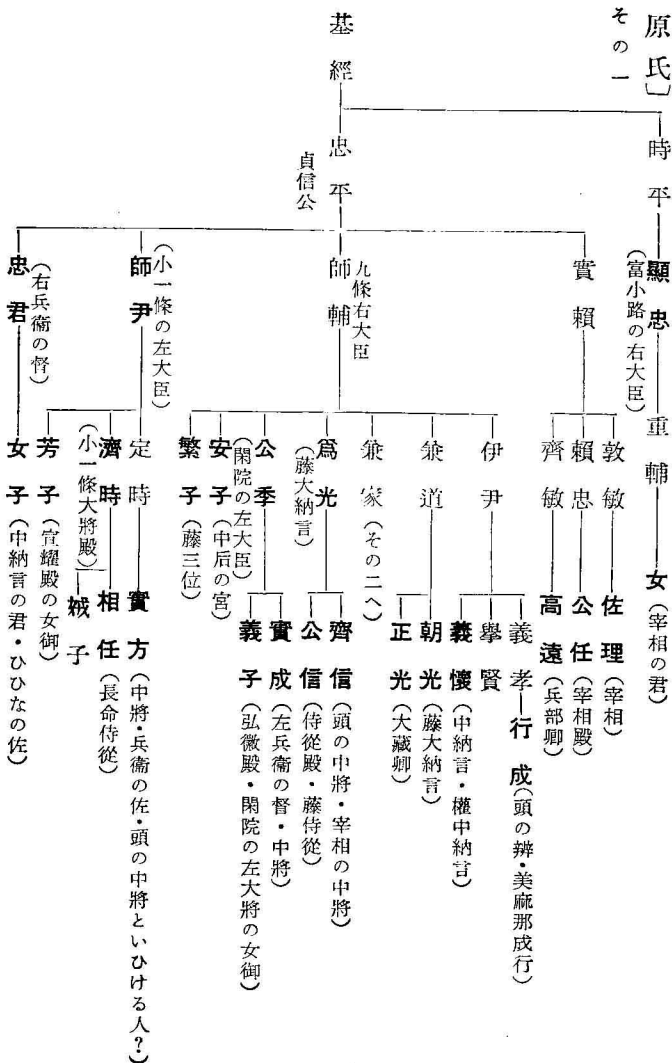
〔續群書類從卷第七十三系圖部六十八所收清原系圖六本の中第六本〕

〔系圖纂要 清原氏〕



〔藤原氏〕

その一



系譜

〔藤原氏〕

その二

右大將

道綱 (小原の殿)

道命 (阿闍梨)

道賴 (山の井の大納言)

伊周 (權大納言・大納言殿・内の大匠殿・内の大匠・大臣) → 道雅 (松君・小若君)

隆家 (三位の中將・中納言殿)

隆圓 (僧都の君)

賴親 (内藏の頭)

周賴 (少將)

定子 (宮・宮の御前・うへ・うへの御前・御前)

原子 (中の姫君・淑景舍)

女 (三の君・三の御前)

女 (御匣殿・四の君)

女 (五の君)

中の關白 三位の中將
白殿・ただいまの關
殿・關白殿・故殿・

道隆

栗田關白

道兼

攝政太政大臣
法興院關白
兼家

御堂關白

道長

御堂關白 (宮の大夫殿・左の大匠殿・大)

關白 賴通

關白 教通

上東門院 彰子

圓融天皇女御 一條天皇御母 詮子 (女院・院)

東三條院

皇子 研子 嬉子

〔藤原氏〕その三

藤原爲輔—惟孝—說孝

宣孝—隆光（主殿の助）
（右衛門の佐）

〔藤原氏〕その四

梶中納言

藤原兼輔—雅正—爲長—信經（式部の丞）

〔清和源氏〕

清和二代の孫

源經基—滿仲

滿政—忠隆（藏人・式部の丞）

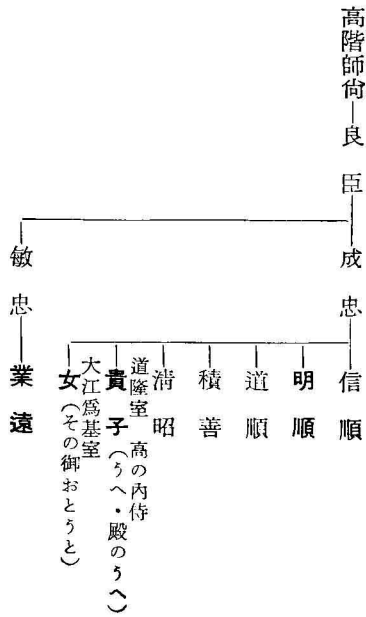
〔桓武平氏〕

桓武五代の孫

平珍材—惟仲（左大辨・中納言）

生昌（大進）

〔高階氏〕



〔橘氏〕



凡例

- 一 解説はこの冊子についての基礎的知識を述べようとし、その現代的意義におよぼさうとしたものである。なほ、解説は昭和二十年の春に書き、その後手を加へ、今回また小補したものである。
- 二 本文は三巻本系統第一類に屬する陽明文庫藏三冊本（舊二冊本）を底本とした。その闕卷とされてゐた中卷は昭和二十一年九月にはじめて公開されたが、本書はそれを採用した。また現存第一類本にすべて闕けてゐる「春はあけぼの」（第一段）から「あぢきなきもの」（第七十四段）までは三巻本系統第二類本の彌富破摩雄氏舊藏本で補つた。なほ、陽明文庫藏舊二冊本の底本鬮刻は本書が最初である。
- 三 底本の誤脱・衍と思はれる部分はあるべく同類または同系統の他本本文で加除訂正した。ただし、同類・同系統本文がすべて誤脱・衍と思はれるものは他系統本文で改めた。また、必要に應じて改訂理由を頭註に示した。
- 四 本文を改めた場合の頭註に古本・刈本・内本・能本・前本などとあるのは、それぞれ古梓堂文庫藏本・刈谷圖書館藏本・内閣文庫藏本・傳能因所持本・前田家四冊本などの略稱である。
- 五 底本におけるかなづかひの誤、不統一はすべて訂正、統一するやうにした。

六 底本の本文にかかはらず、校訂者の考へにより便宜に改行し、段落を切り、句讀點・濁點・半濁點・對話符をつけ、また必要に應じて會話者の主格を六號活字で註記した。なほ對話符のうち「」は對話の當事者の、「『』」は第三者または間接のことばをあらはすものである。

七 底本の段落にかかはらず、校訂者の考へにより、かりに章段數を定めた。

八 底本のかなは意味の理解に必要な程度において適宜漢字を宛てた。この場合かなならずしも振りがなを施さなかつた。また、底本漢字に振りがなを必要とする場合には任意これを附けた。

九 底本のあて字や難訓の漢字はかなに改めた。

一〇 底本の採用については、新村出博士、陽明文庫木村前主事その他の御世話になつた。あつく御禮申しあげる次第である。

一一 頭註は原則として高等學校卒業者が辭書を參考としないで讀めるやうにといふ基準で書いたが不備、不足の點がおほい。

一二 頭註のなかで通説と異なる新説は、校訂者自身のもの以外はできるだけ主張者の名を註した。

一三 頭註には現在の學界で未解決の問題や、未詳の語句についても、できるだけ一往の通説なり私見なりの結論を示しておいた。

一四 頭註のなかの引用文のうち漢文はおほく書きくだしにした。また、くはしい考證の類はできるだけ

さけて結論だけをのせることにした。これは従来考證や漢文にさへぎられて古典に近づけなかつた
人人と古典とを結びつける一助にもならうと念じたからである。なほ、紙幅の關係で頭註には敬語
を用ゐなかつたところがある。おゆるしをこふ次第である。

一五 改訂版を出すにあたつて、解説に手を加へ、主として研究文獻を追補し、本文はさらに校訂を嚴に
し、頭註を補訂した。この校訂については、菊川春子氏の助力を得た。

昭和三十年三月三十日

校訂者しるす

清少納言枕冊子

【一】「春は」は總主語の提示語的用法。「春はあけぼのいとをかし」「春はあけぼのいとをかし」など詠語節の主語。春といふ季節では曙が、春の一日では夜明けがたがすばらしいの意。

(二)だんだんと白んでゆく東の止ぎはがすこし赤みがかつて、赤紫色をおびた雲がほそくそのあたりにたなびいてゐるといつたところが(いい)。「紫」は古代紫で、こい赤色。「だつ」「は」は「めく」に似た接尾辭。「:の::たる」(連體どめ)はこの冊子におほいが、「:か::てゐる(てある)とき・ところ」などの意をあらはす。(三)月のあるころのすばらしさはいふまでもない。

(四)いつもならばいやな雨なのだが、螢の飛ぶ夏の夜は雨が降るのもよい。

(五)夕日が山の端にいまにも落ちさうになつたところ。

(六)能因本には「三つ四つ二つ」とある。それが作者の初稿かも知れない。

(七)鳥のやうに殺風景な鳥でさへおもむきがある、まして雁などのならんで飛んでゐるのは實にいい。

(八)日が西の山に沈みきつて、視界が閉ぢられると、風の音、蟲の聲など聴覺の世界にはいるが、これもまたいひやうも

一
春は^一 あけぼの。^二 やうやうしろくなり行く山ぎは、すこしあかりて、紫^三だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は^四 夜^五。月^六のころはさらなり、闇^七もなほ螢^八のおほく飛びちがひたる。

また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨^九など降るもをかし。

秋は^十 夕暮^{十一}。夕日^{十二}のさして山の端^{十三}いと近うなりたるに、鳥^{十四}の寝^{十五}どころへ行くとして、三^{十六}つ四^{十七}つ、二^{十八}つ三^{十九}つなど飛びいそぐさへあはれなり。ま^{二十}いて雁^{二十一}などのつらねたるがいとちひさく見ゆるは、いとをかし。日^{二十二}入りはてて、風の音^{二十三}、蟲^{二十四}の音^{二十五}など、はたいふべきにあらず。

なくおもむきの深いものである。

(九)早朝。他に翌早朝の轉義がある。底本には「冬は……あらず」までがない。

(一〇)またさうした雪や霜の白い美観がないときでも、とても寒い朝に。

(一一)炭を持つて廊下をわたつて行くのも。「もて」は「持つて」の促音「っ」を表記しないもの。

(一二)いかにも冬に似つかはしい。「つきづきし」は「ふさはしい」の調和美を述べる形容詞。

(一三)寒さが次第に衰へてあたたかくなつてゆくと。「もて」は、次第に進行する意をあらはす接頭辭。接續助詞とも考へられるが、「ゆるびもていけ」を複合動詞とみるべきであらう。

(一四)圓形の火鉢。

【二】(一)一年のうちで興趣の深いおりは。わたくしの好きなころは。

(二)正月、三月、四月、…は底本をはじめ諸寫本すべて漢字でしるしてあり、どう讀んだかわからない。しばらく音讀しておく。

(三)一年中いい。

【三】(一)「正月一日」も諸本漢字でしるしてあるので、音讀すべきかも知れないがしばらく訓讀しておく。以下「三月三日」なども同じである。

冬は つとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも

またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして炭もてわたるも、いとつ

きづきし。晝になりてぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちに

なりてわろし。

二

ころは 正月、三月、四月、五月、七八九月、十一月、すべてをり

につけつつ、一年ながらをかし。

三

正月一日は まいて空のけしきもうらうらと、めづらしう霞みこめたる

に、世にありとある人は、みな姿かたち心ことにつくろひ、君をもわれを

も祝ひなどしたるさま、ことにをかし。

七日 雪間の若菜つみ。青やかにて、例はさしもさるもの、目近から

ぬ所にもてさわぎたるこそをかしけれ。白馬見にとて、里人は車清げにし

(二) 雪の消えたところ。

(三) 七日は人日。この日七種の新菜を羹かまとしてたべると、萬病邪氣を免れるといふ中國の風習が輸入され、朝廷でも行つた。

(四) 摘みとつた若菜が青々としてゐて。(五) ふだんはさうした物をさほど目近かに見馴れぬやうな高貴のあたりで珍重しさわいでゐるのは、まことにおもしろい。「さしもさるもの」は「さるものさしも」と順序をかへて考へるとはつきりする。

(六) 馬は陽の獸、青は青陽の春の色である。正月七日に青馬を見ると、年中の邪氣を去り、年災を除くといふので、もと青馬の節會を行つたが、平安時代に入つて白馬に變り、文字も「白馬」となつたが、なほ「あを馬」と呼んだ。

(七) 清少納言もその一人である。

(八) 待賢門。大内裏の東側、南から二番目の門である。「としまゝ」はしきる。

(九) ゆれ動き、鉢あはせになり。

(一〇) 髪を飾りに右側に簪としてさす櫛。

(一一) 氣をつけてあなかつたので。

(一二) 内裏の東門。建春門にある。陣とはその官人のある所。詰所。

(一三) 一人は宿衛供奉雜役に奉仕する者。こは近衛府の令人で、白馬の節會には、馬の前に立つて行く。殿上人が馬

たてて見に行く。中の御門みかどの闕とじきみ引き過ぐるほど、頭かしら一所ひとところにゆるぎあひ、刺櫛さしも落ち、用意せねば、折れなどして笑ふも、またをかし。左衛門の陣のもとに殿上人などあまた立ちて、舍人の弓ども取りて馬どももおどろかし笑ふをはつかに見入れたれば、立部たてじぶなどの見ゆるに、主殿司しゅどのりつかぎ、女官にょくわんなどの行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人九重ここのへを馴ならすらむなど思ひやらるるに。

内うちにて見るは、いとせばきほどにて、舍人とわりのかほの衣きぬもあらはれ、まことに黒くろきに白しろきもの行きつかぬところは雪のむらむら消え残りたるこちしていと見苦くるしく、馬のあがりさわぐなどもいとおそろしう見ゆれば、引き入られてよくも見えず。

八日 人の、よろこびして走らする車の音おと、ことに聞えてをかし。

十五日 節供せせくまゐりすゑ、粥かゆの木ひきかくして家の御達ごたち、女房などのうかがふを、打たれじと用意してつねにうしろを心づかひしたるけしきもいとをかしきに、いかにしたるにかあらむ、打ちあてたるは、いみじう興きようありて、うち笑わらひたるは、いとえばえし。ねたしと思ひたるも、ことわり

副ひの舍人の携へてゐる弓などを取つて、馬をおどろかして笑ふのである。

(二) 車のすき間からこはこはちよつとのぞいてみたら。

(三) 板敷の類で、土居つゐの上に柱を立て、一間ごとに白木の「しとみ格子」(格子に板を張つたもの)、「二枚つ」を立てたものに。

(四) 後宮に奉仕して、掃除、さし油などの役をする女官。男子にもある官名。

(五) 一體どれほど前世からのよい果報のある人が九重の雲深い宮中をなれなれしく平氣で歩いてゐるのであらうなどと思はれて、「に」どめの例。「四頁参照」。

(六) 顔のきちもあらはれ。底本をはじめこの系統諸本「かはのきぬにあらはれ」

(七) 黒い顔に白粉の十分ゆきつかぬ部分は、雪がまだらに消えて黒い土が見えてゐるような氣持がして。

(八) 自然と車中へ身體が引き入れられて

(九) この日は女紋にむぎ——女房に位階を勅授せられる儀式——や、給女王きつ女王——正月八日と十一月中の己の日、つまり白馬節會と新嘗祭の翌日、女王に絹、布、綿などの祿物をたまはる儀式——があるが、その選にあつかつた人が御禮のための参内などをして走らせる車の音もつねとちがつて快く聞えて興趣深い。

(十) 望粥の節供。正月十五日(望の日)は

なり。

新あららしうかよふ婿むこの君などの、内うち裏へまゐるほどをも心もとなう、ところにつけてわれはと思ひたる女房の、のぞき、けしきばみ、奥おくの方にたたずまふを、前まえにゐたる人は心得て笑ふを、女房「あなかま」とまねき制すれども、女はた知らずがほにておほどかにてゐたまへり。女房「ここなるものとり侍らむ」などいひよりて、走り打ちて逃ぐれば、あるかぎり笑ふ。男君も、にくからずうち笑みたるに、ことにおどろかず、かほすこし赤みてゐたるこそをかしけれ。

またかたみに打ちて、男おとこをさへぞ打つめる。いかなる心にかあらむ。泣き腹だちつつ、人をのろひ、まがまがしくいふもあるこそをかしけれ。内うち裏うちわたりなどのやむごとなきも、今日けふはみなみだれてかしこまりなし。

除目じよめのころなど、内うち裏うちわたり、いとをかし。雪降り、いみじうこほりたるに、申文まをもてありく四位しゐ、五位ごゐ、若わかやかにこちよげなるは、いとたのもしげなり。老いて頭かしら白しろきなどが、人に案内あんないいひ、女房の局つぼねなどによりて、おのが身のかしこきよしなど、心こゝろ一つをやりて説き聞かするを、若き人人はまね

節口で、節日に奉る供御(御食事)が「節供」である。

(三) 粥を煮た木を削つて杖をつくり、これで腰を打てば安産するまじなひとする。「かゆ杖」ともいふ。

(四) その家の故妾の女房たち。「御」は婦人の敬稱。「たご」は敬意を含んだ複数をあらはす接尾辭。つぎの「女房」に對して、老女格の者をいつたのであらう。

(五) みんながどつと笑つたのは、まことに陽氣でにぎやかなことである。

(六) 打たれた者が残念だと思つてゐるのも、もつともなことである。

(七) 姫君のところへ通ひ出して聞のない婿君が、朝宮中へ出任する時刻を待ち遠しく思ひながら、その家家で、われこそはと思ひあがつてゐる女房が。

(八) 前にすわつてゐる女房は、姫を打つのだなあと思つて笑ふのを打たうとする女房が、「しつ、しつかに」と斥まねどとめるが、「出て來た女君は全然知らぬ様子で、おつとりとすわつていらつしやるも(九) 打たれた女君もたいしてびつくりも(十) ないで。

(十一) 公務員の人事異動。春の除日は、縣召で地方官を任命し、大體正月九日または十一日から三日間。秋の除目は司召で

をし笑へど、いかでか知らむ。「よきに奏したまへ、啓したまへ」などい

ひても、得たるは、いとよし、得ずなりぬるこそいとあはれなれ。

三月三日は、うらうらとのどかに照りたる。桃の花のいま咲きはじむる、

柳などをかきこそさらなれ。それもまだまゆにこもりたるはをかし。ひ

ろごりたるはにくし。花も散りたるのちはうたてぞ見ゆる。おもしろく咲

きたる櫻を、長く折りて、大きな瓶にさしたるこそをかしけれ。櫻の直

衣に出桂して、まらうどにもあれ、御せうとの君達にても、そこ近くあ

てもものなどうちいひたる、いとをかし。

四月、祭のころ、いとをかし。上達部、殿上人も、うへの衣の濃き薄き

ばかりのけぢめにて、白襲もおなじさまに、涼しげにをかし。

木木の木の葉、まだいとしげうはあらで、わかやかに青みわたりたるに、

霞も霧もへだてぬ空のけしきの、なにとなくすすろにをかしきに、すこし

曇りたる夕つ方、夜など、忍びたるほととぎすの遠くそら音かとおぼゆば

かりたどたどしきを聞きつけたらむは、なにごちかせむ。

祭近くなりて、青朽葉、二藍のものどもおしまきて、紙などにけしきは

京官を任命する。ここは前者。清少納言の宮任當時は二十日以後に行はれてゐる年が多い。

(三) 任官や官位の昇進を朝廷に申請する文書。

(二) 取りつぎをたのみ。底本「あんなゝひ」

(一) どうぞ天皇様によるしく申しあげて下さいませやう、皇后様にもよしなにおつたへ下さいませやう。

(四) 若芽で、眉のやうなのは、おもしろい。「こもりたる」は「まゆ」(萌)の縁語。「にくし」のちは「は底本にない」。

(五) 表白裏紫のかされ。直衣は公卿の平服。

(六) 指貫の上に鞋を着て、その裾を上衣の下から出すことをいふ。出衣ともいふ。直衣の下から出だし衣にするのである。底本「いたきうちき」

(七) 「せうと」は女から男の兄弟をいふ。「いもうと」に對する語。ここは皇后の御兄弟頼、伊周などをさすのであらう。

(八) 賀茂祭。陰曆四月の中(第二回目)の酉の日に行はれる。

(九) 袍。束帯の表衣で、襦のついた袷衣。

(四) 白い薄物、生絹を半臂・下襲に着る。陰曆四月一日の衣がへから用ゐる。

(四) 内本によつて袖つた。くくり染。

(四) 「げきし」の音便。「むかふがは」のついた足駄。

かりおしつみて、行きちがひもてありくこそをかしかれ。末濃、むら濃、巻染なども、つねよりはをかしく見ゆ。童の、頭ばかり洗ひつくろひて、なりはみなほころび絶え、亂れかかりたるもあるが、褌子、履などに、「緒すげさせ。裏をさせ」などもてさわぎて、いつしかその日にならなむと、急ぎおしありくも、いとをかしかや。あやしうをどりありく者どもの装束きしたてつれば、いみじく定者などいふ法師のやうに練りさまよふ、いかに心もとなからむ。ほどほどにつけて、親、をばの女、姉などの、供し、つくろひて率てありくもをかし。

藏人思ひしめたる人の、ふとしもえならぬが、その目青色着たるこそ、やがて脱がせでもあらばやとおぼゆれ。綾ならぬはわろき。

四

おなじことなれども聞き耳ことなるもの。法師のことば。男のことば。女のことば。下衆のことばには、かならず文字あまりたり。(足らぬこそをかしかれ)

(四三)はやく祭の當日になつてはしい。「なむ」はあつらへ望む意味の終助詞。

(四四)ふだんは變なかつかうでをどりはねまはつてゐるおてんぼの少女たちが。

(四五)底本「さうさ」大法會の行道——衆僧が列をつくつて佛像佛堂の周圍を廻ること——の時、香爐をささげて前行する二人の小僧。

(四六)どんなに自分の服裝が氣になることであらう。この一句、流布諸本・前田本「こそをかしけれ」

(四七)藏人になりたいと思ひこんである人で、急になれさうもないやうな人が。

(四八)底本をはじめ諸本「うの口」

(四九)狗彫ともいひ、天皇の御衣であるが、下賜されて藏人が着ることもある。他の者が着ることを許されない。ここで、この人が着るのは藏人所の衆だからである。(池田銀鑑博士・石丸和雄氏)

(五〇)そのままいつでも脱がせないでおきたいものだ。ただし、その袍が綾織でないのは(品がなくて)よくない。

(五一)流布諸本・前田本の「こと」ことなるもの「によるべきであらう。三卷本第一類には上卷前半がないが、おそらく「こととなるもの」であつたらう。標本は「おなじことなれど」とある。「言異なるもの」の意。または「異なるもの」

五

思はむ子を法師になしたらむこそ心苦しけれ。ただ木の端などのやうに思ひたるこそいとほしけれ。精進物のいとあしきをうち食ひ、寝ぬるをも。若きはものもゆかしからむ。女などのあるところをも、などか忌みたるやうにさしのぞかずもあらむ。それをもやすからずいふ。まいて、駭者などはいと苦しげなめり。困じてうち眠れば「眠をのみして」などもどかる、いとところせく、いかにおぼゆらむ。

これむかしのことなめり。いまはいとやすげなり。

六

大進生員が家に、宮の出でさせたまふに、東の門は四足になして、それより御輿は入らせたまふ。北の門より、女房の車どももまた陣のあねば入りなむと思ひて、頭つきわるき人も、いたうもつくるはず、寄せて下るべきものと思ひあなづりたるに、檜椰毛の車などは、門ちひさければ、さ

「一言なるもの」の意と考へられる。

(二) 餘計な語がある。いひ足らぬ表現がゆかしくてよいのである。「足らぬこそをかしけれ」は底本などに「イ」として小文字で傍記してある。

(三) かはいいと思ふ子を法師にしたやうな場合、それは實に見る目もいたいたしい氣の毒なことである。

(四) 非情のもの、温い心のないもののため。轉じて、つまらぬもの、取るに足らぬものゝ意となる。ここは原義。

(五) ここで切れる。下に「やすからずいふ」が省略せられてゐる心。

(六) 若い僧は好奇心もあり、もの見たし、聞きたし、知りたしと思ふであらう。

(七) 修驗者。病氣平癒その他息災の加持、祈禱をする修驗道の行者。天台・眞言の兩宗に屬した。底本「けんしや」。

(八) まことに苦しきさうである。「苦しげなめり」は「苦しげなるめり」の「なる」が撥音化して「ナン」となり、ンが表記せられてゐないかたち。なほ「いと苦しげなめり」のつきに、傳能因本系統本に

御嶽

熊野

かからぬ山なくありくは
どに、おそろしき目も見、しるしある
聞え出で來ぬれば、ここかしこに呼ば
れ、時めくにつけてやすげもなし。い

はりてえ入らねば、例の、筵道しきて下るるに、いとにくく腹立たしけれどもいかがはせむ。殿上人、地下なるも、陣に立ちそひて見るも、いとねたし。

御前にまゐりて、ありつるやう啓すれば、宮「ここにも人は見るまじうやは。などかはさしもうち解けつる」と笑はせたまふ。清「されど、それは目馴れにて侍れば。よくしたてて侍らむにしもこそおどろく人も侍らめ。」
清「さても、かばかりの家に車入らぬ門やはある。見えば笑はむ」などいふほどにしも、生昌「これまゐらせたまへ」とて、御靨などさし入る。清「いで、いとわろくこそおはしけれ。などその門はたせばくはつくりて住みたまひける」といへば、笑ひて、生昌「家のほど身のほどにあはせて侍るなり」といらふ。清「されど門のかぎりを高うつくる人もありけるは」といへば、生昌「あな、おそろし」とおどろきて、生昌「それは于定國がことにこそ侍るなれ。古き進士などに侍らずはうけたまはり知るべきにも侍らざりけり。たまたまこの道にまかり入りにければ、かうだにわきまへ知られ侍り」といふ。清「その御道もかしこからざめり。筵道きたれど、み

たくわづらふ人にかかりて、ものの怪ワ調テウずるもいと苦しければ、とあり、三巻本・前田本・堀本には右の文がない。

(七)疲勞してついうとうとすると。

【六】(一)「大進」は中宮職の三等官。従六位上相當。生昌は平の珍材の次男。

(二)中宮定子。長保元年十一月のこと。

(三)門扉をつける柱の前後にさらにひか

柱を二本づつつけた四足門。

(四)髪のかたちの亂れた人も。清少納言自身を主としていふ。

(五)蒲葵の白い葉をはそくさいて、車蓋クルマカサを葺きおほひ飾つた、晴ハレの牛車。身分の高い人の乗る車。

(六)「さはりて」は底本「さはかり」とある。

(七)殿上人に對し、清涼殿に昇殿を許さ

れない人。

(八)もしりつばにお化粧し、かざりでも

しましたなら、かへつて。

(九)生昌が見えたら笑つてやりませう。

(一〇)門だけを高く造つた人もありました

わね。「のかざり」は「だけ」の義。于定

國は前漢の人、于公の子。于公が門を高く

造り、子孫にかならず四馬高蓋に乗る

者が出るだらうといつたが、はたして于

定國は宰相になつた。(前漢書・蒙求)

なおちいりさわぎつるは」といへば、生昌「雨の降り侍りつればさも侍り

つらむ。よしよし、またおほせられかくることもぞ侍る。まかり立ちなむ」

とて往ぬ。宮「なにこそぞ、生昌がいみじうおぢつること」と問はせたま

ふ。清「あらず、車の入り侍らざりつることいひ侍りつる」と申して下り

たり。

おなじ局つばはにすむ若わかき人などして、よろづのことも知らず、ねぶたけれ

ばみな寝ぬ。東あづまの對たいの西にしの廂ひだり、北きたかけてあるに、北きたの障さし子こに、かけがね

もなかりけるを、それもたづねず。家主いへぬしなれば案内あんない知りてあけてけり。あ

やしく噎かればみさわぎたる聲こゑにて、生昌「さぶらはむはいかに、さぶらは

むはいかに」とあまたたびいふ聲こゑにぞおどろきて見れば、几帳うしちの後に立て

たる燈臺とうだいの光はあらはなり。障子さしを五寸ばかりあけていふなりけり。いみ

じうをかし。さらにかやうのすきずきしきわざゆめにせぬものを、わが家

におはしましたりとて、むげに心にまかするなめりと思ふも、いとをかし。

かたはらなる人をおし起たこして清「かれ見たまへ。かかる見えぬ者のあめ

るは」といへば、頭かしらもたげて見やりていみじう笑ふ。清「あれは誰たそ、顯證けんじ

(二)大學と諸國の國學で選抜した者を式部省で試験して及第した者。文章生。

(三)わたくしはさいはひこの文章道にかねてからたづきはつてゐましたので、この程度でも。

(四)その道もあまりすぐれていらつしやらないやうですね。「道」に筵道をかけて皮肉るのである。

(五)またなにか難題でも持ち出されてはこまります。「もぞ：」「もこそ：」は「：たら困る」「：たら大變だ」の意。

(六)「こと」は内本による。底本など「と」をあらはす複合語の感動詞。

(七)若い女房たちとともに。

(八)東の對の屋の西側の廂の間で、北側へつづいてゐる部屋であつたが、その北の襖には戸じまりのかぎもかけてなかつたのを、それもたしかめもしなかつた。

(九)しわがれたやうな、へんな聲で。

(一〇)そこへまゐつてもよろしうございませうか。底本など「さぶらはおはいかに」

(一一)目をさまして見ると。

(一二)好色めいたことは。

(一三)あれを御覽なさい。あんな見知らぬ人がゐるやうよ。

(一四)あれは誰そ」を傍の女房の詞、「い

に」といへば、生昌「あらず、家の主と定め申すべきことの侍るなり」といへば、清「門のことをこそきこえつれ、『障子あけたまへ』とやはきこえつる」といへば、生昌「なほそのことも申さむ。そこにさぶらはむはいかに。そこにさぶらはむはいかに」といへば、女房「いと見苦しきこと。さらにえおはせじ」とて笑ふめれば、生昌「若き人おはしけり」とて、引きたてて往ぬる後に、笑ふこといみじう。あけむとならばただ入りねかし。消息をいはむに「よかなり」とはたれかいはむとげにぞをかしき。

つとめて、御前にまゐりて啓すれば、宮「さる事もきこえざりつるものを。昨夜のことにめでて行きたりけるなり。あはれ、彼をはしたなういひけむこそいほしけれ」とて笑はせたまふ。

姫宮の御方の童の装束つかうまつるべきよしおほせらるるに、生昌「この袖のうはおそひはなにの色にかつかうまつらすべき」と申すを、またわらふもことわりなり。生昌「姫宮の御前のものは、例のやうにてはにくげにさぶらはむ。ちうせい折敷に、ちうせい高坏などこそよく侍らめ」と申すを、清「さてこそは、うはおそひ着たらむ童もまゐりよからめ」といふを、

と見苦しきこと」を清女の詞とみることもできる。「めり」は一七八段にも自己の動作に用ゐた例がある。さうすると「若き人おはしけり」は武藤元信翁の説のやうに、「そこに若き人もおはすれば、とかく申さで往なむ」との捨て詞となる。(二五)底本はじめ諸本「そこにさぶらはむはいかにく」とある。(二六)襖をあけるといふのであれば、もうそのままはいつてしまつたらよいのに。「入つてもよろしいか」とことわりをいはうかと、ほんとおもひやりこめた。(二七)于定國の問答に感心して。(二八)それにもまあ、律義者の彼をみたたまらぬやうにひどくいひやりこめたのは、ほんとはかはいさうなことである。(二九)底本をはじめ三卷本諸本「いとをかしけれ」とあるが、能本より改めた。(三〇)脩子内親王。一條天皇第一皇女。永承四年(一〇四九)崩す。御年五十四。この時御年四歳。姫宮のおつきの童女たちの装束をつくるやうにと。(三一)袖(下裳の下、單衣の上に着る。男子や貴婦人も用ゐる)のうはつぱり。「かざみ」(童女の着る服で、狩衣に似てうしろが長い)といふところをわざわざまはりくどくかういつたのである。

宮「なほ、例の人のやうにこれなかくないひ笑ひそ。いと謹厚なるものを」と、いとほしがらせたまふもをかし。

中間なるをりに、人「大進「まづものきこえむ」とあり」といふをきこ

しめして、宮「またなでふこといひて、笑はれむとならむ」とおほせらる

るもまたをかし。宮「行きて聞け」とのたまはすれば、わざと出でたれば

生昌「一夜の門のこと中納言に語り侍りしかば、いみじう感じ申されて、

中納言「いかでさるべからむをりに心のどかに對面して申しうけたまはら

む」となむ申されつる」とて、また異こともなし。一夜のことやいはむと

心ときめきしつれど、生昌「いましづかに御局にさぶらはむ」とて往ぬれ

ば、歸りまありたるに、宮「さてなにごとぞ」とのたまはすれば、申しつ

ることをさなむと啓すれば、女房「わざと消息し、呼び出づべきことには

あらぬや。おのづから端つ方、局などにゐたらむときもいへかし」とて笑

へば、宮「おのがここちにかしこしと思ふ人の譽めたる、うれしと思ふ

と告げ聞かするならむ」とのたまはする御けしきも、いとめでたし。

(三三)中勢(すこし低い)足附きの膳と中勢の食器を載せる具。「中勢」は關根直博士説。通説は「ちうせい」は「ちひさき」のなまりとみる。

(三四)「例の人」は底本など「れい人」。

(三五)「これなまじめな」内本「これな」。

(三六)ともきまじめなのに。

(三七)用事のただえてゐた時に。

(三八)どんなこと。「なにといふ」の略約。

(三九)生昌の兄、平惟仲。

(四〇)非常に感心されました。「どうかして適當な機會にゆくりとお目にかかつてお話を申しあげ、またいろいろお話承りたいものだ」とおつしやつてみました。

(四一)ほかになんの用事も無い。ほかにない。はい。

(四二)なにかのえり、人からちよつと離れて端にゐる時か、自分の部屋などにさがつてゐるやうな時にいへばよいのに。

(四三)そなた(清少納言)が知つたらうれしいと思ふだらうかと考へて。

【七】(一)「うへ」は主上またはその御居所。(二)かうぶり 冠。紋飾。従五位下に敘せられること。内本「かうぶり給はりて」

「かうぶりて」内本「かうぶり給はりて」

三卷本抜書本に「かうぶり給はりて」とある

に従ふべきか。能本「かうぶり給はりて」

(三)命婦は五位以上の女官の稱、自身が五位以上の婦人は内命婦、夫が五位以上

七

うへにさぶらふ御猫はかうぶりにて命婦のおとどとていみじうをかしければ、かしづかせたまふが、端に出でて臥したるに、乳母の馬の命婦、「あな、まさなや。入りたまへ」と呼ぶに、日のさし入りたるに、眠りてゐたるをおどすとて、命婦「翁丸いづら。命婦のおとど食へ」といふに、まことかとして、しれものは走りかかりたれば、おびえまどひて、御簾の中に入りぬ。

朝餉の御前に、うへおはしますに、御覽じていみじうおどろかせたまふ。猫を御懐に入れさせたまひて、をのこども召せば、藏人忠隆、なりなまありたれば、上「この翁丸打ち調じて、犬島へつかはせ。ただいま」とおほせらるれば、あつまり狩りさわぐ。馬の命婦をもさいなみて、上「乳母かへてむ。いとうしろめたし」とおほせらるれば、かしこまりて御前にも出でず。犬は狩り出でて、瀧口などして追ひつかはしつ。

清「あはれ、いみじうゆるぎありきつるものを。三月三日、頭の辨の柳

の人は外命婦。「おとど」は婦人の敬稱。
(四)夫か兄かが五位以上の役人であつたのであらう。

(五)まあ、お行儀がわるい。おはいりあそばせ。

(六)どこ、どちら。底本「いつつ」

(七)ほか正直の翁丸は。「しれもの」は底本など「たれ物」とある。

(八)清涼殿内の夜の御殿の西、主上が朝夕の御膳をめし上る間を朝餉の間といふ。「うへ」は第六十六代一條天皇。

(九)禁中に奉仕する男子、特に藏人など。

(一〇)岡山縣邑久郡朝日村の犬島か。

(一一)叱責して。底本「いさなみ」

(一二)「かしこまりて」は底本をはじめ諸本にない。内本、能本による。

(一三)清涼殿の東北隅の御溝水の落ちる所を瀧口といひ、そこに詰めてゐる武士をも瀧口といふ。ここは武士をさす。禁中の警衛と雑役に任ずる。

(一四)ああ、これまではとてもいばつて大きな身體をゆり動かして得意げに歩いてゐたのに。

(一五)(定員二名の)藏人の頭のうち、文官である太政官の辨官(通常中辨)を兼ねる者。ここは藏人頭兼右大辨藤原行成。
(一六)蔓草などを頭につけて飾りとしたものを「かづら」といふ。「かざし」(髪さ

かづらせさせ、桃の花をかざしにさせ、櫻腰にさしなどしてありかせたまひしをり、かかる目見むとは思はざりけむ」などあはれがる。

清「お膳のをりは、かならず向ひさふらふに、さうさうしうこそあれ」などいひて三四日になりぬる晝つ方、犬いみじうなく聲のすれば、なぞの犬のかくひさしうなくかあらむと聞くに、よろづの犬とぶらひ、見に行く。

御厨人なる者走り來て、御厨人「あな、いみじ。犬を藏人二人して打ちたまふ。死ぬべし。犬を流させたまひけるが、歸りまゐりたるとて調じたまふ」といふ。心憂のことや、翁丸なり。御厨人「忠隆、實房など打つ」といへば、制しにやるほどに、からうじてなきやみ、御厨人「死にければ陣の外にひき棄てつ」といへば、あはれがりなどする夕つ方、いみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるがわななきありけば、清「翁丸か。このごろかかる犬やありく」といふに、清「翁丸」といへど、聞きも入れず。女房「それ」ともいひ、女房「あらず」とも口口申せば、宮「右近ぞ見知りたる。呼べ」とて召せば、まゐりたり。宮「これは翁丸か」と見せさせたまふ。右近「似ては侍れど、これはゆゆしげにこそ侍るめれ。また、

(一) が一二本つつさすのに對し、「かつら」は頭上を覆ふやうにする。

(二) 底本「さふふに」

(三) さびしくてたまらない。内本以外「さうさしう」

(四) 禁中の御廁掃除などをする賤しい役の女。

(五) こらしめなさつてゐます。

(六) いいえ、ちがうわ。「あらず」は底本など諸本「あへす」いま、内本による。

(七) 右近の内侍。主上と中宮の御寵愛の女房で、この冊子にも數回見え、榮花物語(浦々の別れ)にもその名が見える。

(八) この犬はとても醜くおそろしさうなひどい姿でございます。

(九) 「寄り來ず」は底本「よりこそ」

(一〇) さうでないもの、別の大だといいきめてしまつた、その翌朝。

(一一) 髪を櫛でけづり整へられること。「御手水」は御手洗、御洗面の義。「まゐる」は高貴のかたに物をさしあげるにいふ敬語動詞、轉じてその御動作をも述べる。

(一二) 底本とその系統諸本は「けに」とあるが、おそらく「候に」からの誤であらう。清女が中宮の御傍に侍候してゐるのである。能本「さふらふに」

(一三) 從來は「柱のもとに」と校訂されて

『翁丸か』とだにいへば、よろこびてまうで來るものを、呼べど寄り來ず。あらぬなめり。それは『打ち殺して棄て侍りぬ』とこそ申しつれ。二人して打たむには侍りなむや」など申せば、心憂がらせたまふ。

暗うなりて、もの食はせたれど、食はねば、あらぬものにいひなしてやみぬる、つとめて、御梳髮、御手水などまみりて、御鏡を持たせさせたまひて御覽すれば、さぶらふに、犬の柱もとにゐたるを見やりて、清「あはれ、昨日翁丸をいみじうも打ちしかな。死にけむこそあはれなれ。なにの身にこのたびはなりぬらむ。いがにわびしきこちしけむ」とうちいふに、このゐたる犬のふるひわななきて涙をただ落しに落すに、いとあさまし。さは、翁丸にこそはありけれ。昨夜はかくれ忍びてあるなりけりとあはれにそへて、をかしきことかぎりなし。御鏡うち置きて、詩「さは、翁丸か」といふに、ひれ伏していみじうなく。

御前にもいみじうおち笑はせたまふ。右近の内侍召して、宮「かくなむ」とおほせらるれば、笑ひののしるを、うへにもきこしめして、わたりおはしましたり。上「あさましう、犬などもかかる心あるものなりけり」と笑

あるが、底本はじめ諸本「柱もと」とある。「世人」「世の人」「れいの人」「れいの人」など「の」のない語もあつたらしい。

(二九)底本「おとすに」

(三〇)内本以外「きは」とある。

(三一)底本の系統の諸本と能本の古寫本にも「おちわらはせ」とあるが、その意がはつきりしない。「怖ぢ」であらうか。末流の諸本「うちわらはせ」

(三二)主上附きの女房などもこのことを聞いてこちらへ來、みな集まつて呼ぶにつけても、いまはもういふままに立ち動く。

(三三)底本「物のをせさせはや」未詳。能本にも「物ゝてをせさせはや」とある

から、「ものので」の本文を生かして解すれば、手當をする意の手か。(林和比古氏説)從來は未流本の校訂本文「もの調せさせばや」によつてゐる。「もの調す」は藥物を調ずる意か、食物を調へる意か、おそらく前者であらう。

(三四)心に秘めてゐた翁丸がかはいさうだとの氣持をととうとすつかり口に出しましたね。

(三五)清涼殿内の一室、主上附きの女房の詰所。

(三六)底本「さとにや侍らん」

(三七)まあ、おそろしい。そんなものは絶對にをりませぬ。

はせたまふ。うへの女房なども聞きて、まゐりあつまりて呼ぶにも、いまぞ立ち動く。清「なほこのかほなどはれたる。もののでをせさせばや」といへば、女房「つひにこれをいひあらはしつること」など笑ふに、忠隆ただなが聞きて、臺盤所だいはんどころの方より、「まことにや侍らむ、かれ見侍らむ」といひたれば、清三十七「あな、ゆゆし。さらにさるものなし」といはすれば、忠隆三十八「さりと、見つくるをりも侍らむ。さのみもえかくさせたまはじ」といふ。さて、かしこまりゆるされて、もとのやうになりなき。なほあはれがら三十九れて、ふるひなき出でたりしこそ、よに知らずをかしくあはれなりしか。人などこそ人にいはれて泣きなどはすれ。

八

正月一日、三月三日は、いとうららかなる。
五月五日は、曇り暮らしたる。
七月七日は、曇り暮らして、夕方は晴れたる空に、月いとあかく、星の数かずも見えたる。

〔三八〕そんなにお隠しになつても。

〔三九〕能本「さてのち」

〔四〇〕勘當、おとがめ、謹慎。

〔四一〕「人などこそ」の「こそ」底本イ本として表記。人間ならば、ほかの人から同情の詞をかけられると感泣もしようが、犬がさうした場合、涙を流したことが感銘深く、あはれなことであつた。

〔八〕(一)「正月一日、三月三日」「五月五日」などは底本をはじめ諸本すべて漢字である。いましばらく訓讀しておいた。

(二)菊のきせ綿は、菊の香をうつした綿で、老いを拭ひ棄てるのである。

(三)「一層強く引きたち、にはつて。」「れ」は自發の助動詞連用形。「もてはやされて」で切れる。「て」とめの例。九六頁参照。

(四)いまにも降つて來さうに。底本とその系統の諸本は内本以外はすべて「ふりたちぬべく」とある。

〔九〕(一)官位昇進などの後の拜賀のこと。奏慶。底本と刈本などにはこの一句「をかし」まで脱落。

(二)下襲の強をひいて。「まかす」は引

く意の下二段活用助詞。

〔十〕(一)一條大宮院。長保元年六月十四日内裏焼亡、十六日一條大宮院に行幸された。

(二)底本をはじめ諸本「なしの木」能本

九月九日は、なつさきのか 曉方より雨すこし降りて、菊の露もこちたく、おほ 覆ひたるわた 綿などもいたく濡れ、うつしの香ももてはやされて。つとめてはやみにたれど、なほ曇りて、ややもせば降りおちぬべく見えたるもをかし。

九

よろこび奏するこそをかしけれ。うしろをまかせて、御前の方にむかひて立てるを。拜し舞踏しさわぐよ。

十

にいざり 新内裏の東をば北の陣といふ。ならの木のはるかに高きを、清・女房「いく 尋あらむ」などいふ。權中將「もとよりうち切りて、定澄僧都の枝扇せせ にせばや」とのたまひしを、山階寺の別當になりてよろこび申す日、近衛つ づかさにてこの君の出でたまへるに、高きけいし 枝子をさへはきたれば、ゆゆしう高し。出でぬる後に、清「などその枝扇をばもたせたたまはぬ」といへば、權中將「ものわすれせぬ」と笑ひたまふ。

「ならの木」

(三)源成信。政平親王の子。藤原道長の妻磯子の姪の子で、道長の養子となる。長徳四年十月右中將、長保二年八月左中將、同三年二月出家、年二十三。

(四)長保二年三月十七日興福寺の別當となる。

(五)木の葉のある枝を扇のやうに用ゐること。三肢の細枝の両面に紙をはつたものともいふ。

(六)底本をはじめ諸本「よろこひ申する」

(七)近衛の中將で成信がその場に出てゐたが。

(八)定澄は背が高いうへに。

(九)なぜ先日のお話のあの大きい枝扇を定澄にお持たせなさらぬのですか。

(一〇)定澄僧都は背が高いので、長いはずの柱も着られるのではない。すぐせ君(未詳)はあまり小さいので短いはずの柏も着られるのではないの意か。

【十一】(一)(二)所在未詳。

(三)陸奥に在るといふ。(八雲御抄)

(四)所在未詳。「かたさる」は遠慮する意。

(五)筑前。「むかし見し人をそわれはよそにせし朝倉山の雲居はるかに」(古今六帖・拾遺集・夫木抄二)をいつたのか。

「よそに」は、底本以下諸本「こそに」

(六)所在未詳。石清水の臨時の祭(三月

「定澄僧都に桂なし。すぐせ君に柏なし」といひけむ人こそをかしけれ。

十一

山は 小倉山。鹿背山。三笠山。このくれ山。いりたちの山。忘れずの

山。木の松山。かたさり山こそ、いかならむとをかしけれ。五幡山。かへ

る山。後瀬の山。朝倉山、よそに見るぞをかしき。おほひれ山もをかし。

臨時の祭の舞人などの思ひ出でらるるなるべし。

三輪の山、をかし。手向山。待ちかね山。たまさか山。耳なし山。

十二

市は たつの市。さとの市。つば市、大和にあまたあるなかに、初瀬に

詣づる人のかならずそこに泊るは、観音の縁のあるにやと心ことなり。を

ふさの市。飴磨の市。飛鳥の市。

十三

第二の午の日(試樂の東遊の歌「大比禮や小比禮の山(そ)はやよりてこそよりにこそ……」)

(七)底本「みえなし山」

(十二)(一)辰の日にたつからかう呼ぶといふ。いま、奈良市の西南に辰市村がある。

平城京の東市であるらしい。

(二)椿市、海石榴市などと書く。奈良縣磯城郡金谷の地。初瀬峡谷の入り口。

(三)輕の市、磐余の市、三輪の市など多くある。

(四)奈良縣磯城郡初瀬町にある。當時華嚴宗の大寺。本尊十一面觀世音。

(五)所在未詳。三河の小總か、あるいは大和の八木附近か。

(六)底本など「あすのいち」

(七)攝津のゆづるはの嶽であらう。

(八)東山の南の一峰。

(九)近江にも備中にもあるといふ。

(十)(一)京都府綴喜郡。

(二)奈良縣。霧たちて雁ぞなくなる片岡のあしたの原はもみぢしぬらむ(古今集五秋下 よみ人知らず)

(三)長野縣下伊那郡。

(十四)(一)かしこ淵(所在未詳)はどのやうに深い心の底を見知つて、そんなりつばな名をつけたのであらうか。流布本「見えそ」。それによれば「見られて」「見せて」

峯は^{みね} ゆづるはの峯。阿彌陀の峯。彌高の峯。

十四

原は^{はら} みかの原。あしたの原。その原。

十五

淵は^{ふち} かしこ淵は、いかなる底の心を見て、さる名をつけむとをかし。

な^ないりその淵、誰に^{たれ}いかなる人の教へけむ。

青色の淵こそをかしけれ。藏人などの具にしつべくて。かくれの淵。いな淵。

十六

海は^{うみ} 水うみ。與謝の海。かはふちの海。(いせの海イ)

十七

の意。

〔三〕所在未詳。入つてはいけなぬ淵だなんて、たれにどんな人が致へたのかしら。

〔三六〕六位藏人の着る青色の袍などにもでささうで。「て」とめの例。八六頁参照。

〔三六〕(一)湖。琵琶湖のことであらう。

〔三六〕他本「かはくちの海」八雲御抄には「かはふらの」とある。

〔三七〕(一)底本など「うくるすのみささき」

大阪府南河内郡、孝徳帝大坂磯長の陵ともいひ、奈良の若草山ともいふ。

〔三九〕能本、前田本「かしははらの」。それによれば、京都市伏見區桃山町の桓武天皇柏原陵となる。柏木は大和にも近江にもある森の名。

〔三九〕(一)渡船場は。

〔三九〕「行き通ふ舟路はあれどしかすがの

わたりはあともなくぞありける」(源順集)「三河と尾張とのさかひなるしかすがのわたり」(更級日記)

〔四〇〕底本をはじめ諸本「こりすぎのわたり」。須磨かといふ。

〔四〇〕越中にあつたといふ。(八雲御抄)

〔四九〕(一)「館は玉造」であらうか。この段は他系統の諸本にはない。「たち」を

「太刀」とみる説(萩谷朴氏)もある。

〔五〇〕(一)「みかめ」未詳。底本系統諸本はすべて「みかる」。内本は朱で消して「わ

みささぎは うぐひすのみささぎ。かしはぎのみささぎ。あめのみささ

ぎ。

十八

わたりは しかすがのわたり。こりずまのわたり。水はしのわたり。

十九

たちは たまつくり。

二十

家は 近衛の御門。二條みかめ、一條もよし。染殿の宮。清和院。菅原の院。冷泉院。閑院。朱雀院。小野の宮。紅梅。縣の井戸。たけ。三條。小八條。小一條。

二十一

たり」と朱書。「ゐ」は「院」であらう。

(二) 底本の系統諸本「せかい院」

(三) 能本「れせい院」前田本「冷泉院」

(四) 紅梅殿。藤原伊尹また爲光の家。

(五) 井戸殿とも呼ぶ。「都人來てもをらなむ蛙なく公がたの井戸の山吹の花」(後撰集三、橋公平の女の歌)

(六) 未詳。他本「とう」として「三條」

につづけ「東三條」とする。

(七) 内本・能本「小六條」

【三十一】(一) 底本系統諸本「せいえうてん」

清涼殿は、紫宸殿の西にある九間四面の殿舎。主上のつねにまします御殿。

(二) 荒海の障子。清涼殿の孫廂東端の北隅にあり、弘徽殿の上の御局の東にあたる

るところにある布のふすま障子。表(南面)に手長足長、裏(北面)には宇治川

の網代(南北両面とも墨繪)をかく。

(三) 中國古代の想像説たる山海經に長臂國、長股國があつて、捕魚をつねとする

故事を繪にしたもの。「生きたるものとども」とはこれをいふ。

(四) 皇后、女御などの清涼殿での御休息所。ここは弘徽殿の上の御局(荒海の障子の西)をいふ。

(五) すのこ(縁側)に廻してある欄干。高欄とも書く。

清涼殿の丑寅の隅の、北の隔なる御障子は、荒海の繪、生きたるものどものおそろしげなる、手長足長などをぞかきたる、上の御局の戸をおしあけたれば、つねに目に見ゆるを、にくみなどして笑ふ。

勾欄のもとに青き瓶の大きなをすゑて、櫻のいみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるをいと多くさしたれば、勾欄の外まで咲きこぼれたる書つ方、大納言殿、櫻の直衣のすこしなよらかなるに、こき紫の固紋の指貫、白き御衣ども、うへには濃き綾のいとあざやかなるを出だしてまゐりたまへるに、うへのこなたにおはしませば、戸口の前なるほそき板敷にゐりたまひて、ものなど申したまふ。

御簾の内に、女房、櫻の唐衣どもくつろかにぬぎたれて、藤、山吹などいろいろこのまじうて、あまた小半蒔の御簾より裳おし出でたるほど、晝の御座のかたにはおもものまゐる足音高し。聲躰など「おし」といふ聲聞ゆるも、うらうらとのどかなる日のけしきなど、いみじうをかしきに、はての御盤取りたる藏人まゐりておももの奏すれば、なかの戸よりわたらせたまふ。御供に扉より大納言殿御送りにまゐりたまひて、ありつる花のもとに

行けどもむひさにふるみもの山のとつ宮
 どころ。後文の「げに」はいかにもこの
 古歌のとほりの意。

(三三)御膳の給仕をつかさどる人が。

(三四)八三頁(元)参照。貴族に仕へる男を
 もいふ。

(三五)あまりの御りつばさに日はあらぬか
 たにむいて、主上の御襟子ばかり見申し
 てゐるので、うっかり墨扱みの綴ぎ目も
 はづれさうである。「つきめ」未詳。し
 ばらく通説による)

(三六)思ひ出せる古歌を一首づつ書きなき
 い。

(三七)「はやく書いてさしあげなさい。男
 子はこんなことに口出しすべきではござ
 いません」といつて、色紙を御簾の中
 返してよこされた。

(三八)手習ひのはじめに習ふ歌「難波津に
 咲くやこの花冬ごもりいまは春べと咲く
 やこの花」(古今集・序、古今六帖六)
 難波津の歌でもなんでもよいから、いま
 ぶつと思ひ出した歌を。

(三九)先輩の女房が二三首ほど書いて、「こ
 れにお書きなさい」といはれるので。

(四〇)古今集二春下。詞書「染殿の後の御
 前に花瓶に櫻の花をささせたまへるを見
 てよめる 前の太政大臣」(藤原良房)こ
 の歌の「花をし見れば」をかへたのであ

べてすもて面さへ赤みてぞ思ひみだ亂るるや。春の歌、花の心など、さいふいふも、
 上三九藤二つ三つばかり書きて、上藤「これに」とあるに、

年三〇ふればよほ齢は老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたる、御覽じくらべて宮「た
 だこの心どものゆかしかりつるぞ」とおほせらるるついでに、「圓融院の
 御時に、院三三「冊子に歌一つ書け」と殿上人におほせられければ、いみじう
 書きにくう、すま三三ひ申す人人ありけるに、院「さらになだ、手三三のあしさよ
 さ、歌のをりにあはざらむも知らじ」とおほせらるれば、わび三四びてみな書き
 ける中に、ただいまの關白殿、三位の中將ときこえけるととき、

潮三三の満みついつもの浦のいつもも君をば深く思ふはやわが

といふ歌の末を「頼三六むはやわが」と書きたまへりけるをなむいみじうめで
 させたまひける」などおほせらるるにも、すず三六りに汗あせあゆるこころぞする。

年三六若からむ人、はた、さもえ書くまじきことのさまにやなどぞおほゆる。

例三九いとよく書く人も、あぢきなうみなつつまれて、書き汚けがしなどしたるあ
 り。

る。染殿の后は、良房のむすめ明子、文德天皇の皇后。

(三二) 知りたかつたのよ。

(三三) 御辭退申す。底本「すまひ申する」

(三四) 字の上手下手も。「よき」底本「よき」

(三五) 困つて。

(三六) 道降。正暦四年四月廿二日攝政から關白になる。

(三七) 出所未詳。作者もわからない。「いつも」を出雲と考へる説と、嚴藻とみる考とがある。いづれにしても「何時も」の

序。潮の満ちるいつもの浦、その名のよろにいつものも、あなたのことをばわたくしは心から深く思ふことです。「は

「や」は感動の助詞。

(三八) 底本「あとあゆる」。ひや汗が流れ出る氣持がする。

(三九) 「贈は名いぬ」などといふことばを用ゐてゐるわたくしの歌は、年の若い女房だつたら、とてもそんなふうの書けさうもないことだつたなあと思はれる。

(四〇) ふだんは非常に上手に歌を詠み書く人も、わけもなく氣おくれして固くなつて、書きぞこなひをした人もある。

(四一) 古今和歌集。コロンとよむ説もある。

(四二) 上の句。「末」は下の句。

(四三) 「いかにと問はせ」は、底本「いかに」とはせ」とある。

古今の冊子を御前に置かせたまひて、歌どもの本をおほせられて、宮

れが未いかに」と問はせたまふに、すべて夜晝心にかかりておぼゆるもあ

るが、け清う申し出でられぬはいかなるぞ。宰相の君ぞ十ばかり、それも

おぼゆるかは。まいて、五つ六つなどは、ただおぼえぬよしをぞ啓すべけ

れど、女房「さやはけにくく、おほせごとを、はえなうもてなすべき」とわ

び、くちをしがるもをかし。知ると申す人なきをば、やがてみな讀みつづ

けて夾算せさせたまふを、女房「これは知りたることぞかし。などかうつ

たなうはあるぞ」といひ歎く。中にも古今あまた書き寫しなどする人は、

みなもおぼえぬべきことぞかし。

宮「村上の御時に、宮耀殿の女御ときこえけるは小一條の左の大臣殿の

御むすめにおほしけると、たれかは知り奉らざらむ、まだ姫君ときこえけ

るとき、父大臣の教へきこえたまひけることは、大臣「一には御手を習ひ

たまへ。つきには琴の御ことを人よりことに弾きまさらむとおほせ。さて

は、古今の歌二十卷を、みなうかべさせたまふを、御學問にはせさせたまへ」

となむきこえたまひけるとときこしめしおきて、御物忌なりける日、古今を

(四三)つつばり。残りなく。
 (四四)藤原重輔のむすめ、顯忠の孫。定子皇后にお仕へし、清少納言とならび稱せられた才女。

(四五)それくらゐでは、おぼえてゐるといへようか。「おぼゆるかは」は底本はじめこの系統本「おぼゆるは」

(四六)「さうまあそつげなく、せつかくのおほせ言を無にしてよいでせうか」と困りながらも残念がる。底本「まやは」

(四七)すぐそのまま、下の句まで。
 (四八)竹の先を割つて、今日のしをりの用をなすもの。長さ四五寸、糸などで結ぶ。

(四九)村上天皇の御時に、宣耀殿の女御と申しあげたかたは、小一條の左大臣殿師尹の御むすめでいらつしやつたと、だれが存じあげない人がありませう、そのかたが「宣耀殿」は女御の居られた殿舎名。

(五〇)第一には。底本「ひとつには」
 (五一)七絃の琴。「御こと」の「こと」は絃樂器の總稱。

(五二)それから、そのつぎには、古今集の歌二十卷を全部誦讀なされることを。

(五三)物忌は夢見の不吉や天神、太白神の遊行の方角を犯すことをつしむなど、いろいろの災禍を忌み、いく日かの間、齋戒沐浴籠居する當時の風習。
 (五四)底本など「て」がない。

もてわたらせたまひて、御几帳を引き隔てさせたまひければ、女御例ならずあやしとおぼしけるに、冊子をひろげさせたまひて、上「その月、なりのをり、その人のよみたる歌はいかに」と問ひきこえさせたまふを、かうなりけりと心得たまふもをかしきものの、ひがおほえをもし、忘れたるところもあらば、いみじかるべきことと、わりなうおほしみだれぬべし。そのかたにおほめかしからぬ人、二三人ばかり召し出でて、碁石して數おかせたまふとて、強ひきこえさせたまひけむほどなど、いかにめでたうをかしかりけむ。御前にさぶらひけむ人さへこそうらやましけれ。せめて申させたまへば、さかしう、やがて末まではあらねども、すべてつゆたがふことなかりけり。いかでなほ、すこしひがごと見つけてをやまむと、ねたきまでにおほしめしけるに、十卷にもなりぬ。上「さらに不用なりけり」とて、御冊子に夾算さして、大殿ごもりぬるも、まためでたしかし。いとひさしうありて起きさせたまへるに、上「なほこのこと、勝ち負けなくてやませたまはむ、いとわかるべし」とて、下の十卷を、上「明日になれば、異をぞ見たまひあはする」とて、上「今日定めてむ」と、大殿泊まゐりて、夜

(五五)某月、何のをり、だれだれが詠んだ歌はどうであつたか。「その人」は内本以外「そ人」とある。

(五六)とても心をくだかれ、はらはらなされたことでせう。

(五七)さうした和歌の方面にくらくない女房を二三人ほど召し出して。

(五八)無理やりに催促して帝がおたづねになるから。

(五九)利口ぶつてすぐそのまま全部末までお答へになるといふやうなことはありませんでした。

(六〇)どうかして、すこしでもまぢがひを見つかるまではやめまいと、にくく腹立たしいまでに。「を」は強勢の助詞。

(六一)まつたくだめだね。

(六二)お覽みになつてしまつたのも、またすばらしいことよ。

(六三)「るに」は、内本による。

(六四)主上及びから敬語をお用ゐになつた例の一と考へられる。「わろかるべし」底本「わろし(へしイ)」古・内本による。

(六五)別の本を御覽になるかも知れない(それでは困る)。八〇頁(二四)参照。

(六六)御燈火をおつけになつて。

(六七)底本など「なむ」がない。
(六八)主上(村上帝)が女御の方へおわたりになつて。底本など「歸わたらせ給て」

更くるまでな^{六七}打讀ませたまひける。されど、つひに^{六八}負けきこえさせたまはずなりにけり。うへわたらせたまひて 人人「かかること」など、人人殿に申し卒られたりければ、いみじうおほしさを過ぎて、御誦經などあまたせさせたまひて、そなたに^{六九}おきてなむ念じ暮らしたまひける、すきずきしうあはれなることなり」など語り出でさせたまふを、うへもきこしめし、めでさせたまふ。上「われは、三卷、四卷をだにえはてじ」とおほせらる。人人・女房「むかしは、えせ者などもみなをかしうこそありけれ。このころはかやうなることやはきこゆる」など、御前にさぶらふ人人、上の女房、こなたゆるされたるなどまありて、口口いひ出でなどしたるほどは、まことにつゆ思ふことなくめでたくぞおほゆる。

二二

生^{七〇}ひ先なくまめやかにえせざいはひなど見てゐたらむ人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて。なほさりぬべからむ人のむすめなどは、さしまじらはせ、世のありさまも見せならはさまほしう、内侍のすけなどにて

(六)父君師尹に。底本など「一人」がなく「殿に申に」とある。内本による。

(七)御風流で、感慨無量のことです。

(七)一條天皇もお聞きあそばして。

(七)自分は、三巻四巻さへとても讀みきれさうもない。「われは」は、底本など諸本「は」とある。能本による。「四巻を」の「を」底本にない。

(七)むかしは、たいした身分でない者などもみな風流だったのですね。近ごろはこのやうな風雅な話は聞いたことがない。「えせ者」は、賤しい者。つまらぬ者。下衆の上、よろしきもの下。

(七)「やは」は内本以外「は」

(七)主上にお仕へしてゐる女房で、中宮様の方へまゐることをゆるされた人々なども、中宮御所の方へまゐつて。

【主】(一)平凡な結婚をして人妻となり、將來の希望とか光明とかもなく、まじめに夫のわづかな出世などを考へてゐるやうな人は、わたしに思ひやられてはらしくつまらぬ人のやうに思ひやられてはならない。「て」どめの例。八六頁参照。なほ、「まめやかに」は、底本「またやかに」

(三)やはり相當な身分のあるやうな人のむすめなどは宮中に出仕させて。

(三)たとへば、典侍(從四位相當、内侍の司の次官)などの役でしばらくの間でも

しばしもあらせばやとこそおぼゆれ。

宮仕する人をば、あはあはしうわるきことにいひ、思ひたる男などこそ

いとにくけれ。げに、そもまたさることぞかし。かけまくもかしこき御前

をはじめ奉りて、上達部、殿上人、五位、四位はさらにもいはず、見ぬ人

はすくなくこそあらめ。女房の從者、その里より來る者、長女、御厠人の

從者、たびしかはらといふまで、いつかはそれを恥ぢ隠れたりし。殿ばら

などはいとさしもやあらざらむ、それもあるかぎりはしか、さぞあらむ。

うへなどいひてかしづきすゑたらむに、心にくからずおぼえむ、ことわ

りなれど、また内裏の内侍のすけなどいひて、をりをり内裏へまゐり、祭

の使などに出でたるも面だたしからずやはある。さてこもりぬるは、ま

いてめでたし。受領の五節出だすをりなど、いとひなび、いひ知らぬこと

など人に問ひ聞きなどはせじかし。心にくきものなり。

二十三

すさまじきもの 晝ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅の衣。牛死にた

宮仕させておきたいと思はれる。

(四)宮仕する女性を輕薄でよくないことだといひ、またさう思つてゐる男などは。

(五)しかし、考へてみると、それもまたもつともなことなのである。

(六)顔をあはさぬ男子といふのはまことにすくないであらう。

(七)雑役に従事する賤しい女。

(八)賤しい者の稱。「たびし」は磔のことといふ(清水濱臣説)。

(九)女の宮仕を非難する殿ぼらなどは、女の場合ほどさまさまの人、身分の低い者に顔をあはせることがないであらうか、彼等とて宮中にお仕へしてゐるかぎりにはやはり同様であらう。

(一〇)宮仕の經驗ある女性と結婚して、これを「うへ」(北の方)などと呼び、大事にかしづきすゑてゐるやうな場合、その女があまらう人馴れてゐて奥ゆかしくなく思はれるのは、もつともであるが。

(一一)名譽あることではないか。

(一二)そんな經驗をもつ身分でありながらそのまゝ家庭にこもつてゐるのは、まして。

(一三)受領(底本「する」)五節の舞姫を自分の娘から出す際などでも。

(一四)夫人が宮仕の經驗者ならば。
【十三】(一)ときはづれ、期待はづれ、不調

る牛飼。ちこ亡くなりたる産屋。火おこさぬ炭櫃、地火爐。博士のうちつづき女兒生ませたる。方違に行きたるに、あるじせぬところ。まいて節分などは、いとすさまじ。

人の國よりおこせたる文の、ものなき。京のをもさこそ思ふらめ、されど、それはゆかしきことどもをも書き集め、世にあることなども聞けば、いとよし。

人のもとにわざときよげに書きてやりつる文の、返りごといまはもて來ぬらむかし、あやしうおそきと待つほどに、ありつる文、立文をも結びたるをもいときたなげにとりなしふくだめて、上に引きたりつる墨など消えて、使「おはしまさざりけり」もしは使「御物忌とて取り入れず」といひてもて歸りたる、いとわびしくすさまじ。

また、かならず來べき人のもとに車をやりて待つに、來る音すれば、さななりと人人出でて見るに、車宿にさらに引き入れて、轅ぼうとうちおろすを、主人「いかにぞ」と問へば、使「今日は外へおはしますとて、わたしたまはず」などうちひて、牛のかぎり引き出でて往ぬる。

和、不備などで、おもしろくないもの。
がつかりするもの。

(二) 網代は秋冬、(九月から十二月)水魚をとるための具。水魚は宇治川、田上川から献上された(延喜式)。

(三) 表紅、裏紫、陰曆十一月から二月までに着る服色。

(四) 「ちひろ」ともいふ。あろり。

(五) 博士は職名。女兒では學問をつがせることができない。なほ、「はかせの」四字底本別墨で補入。内本以外本文にない。

(六) 行かうと思ふ方が金神その他の遊行にあたつてゐるためやむを得ぬ所用のときは、一旦別の方向に泊る。

(七) 藥應してくれないところ。

(八) まして、立春・立夏・立秋・立冬などへうつる節分のかたがへなどは、それが豫定されてゐるだけに。

(九) 田舎からのたよりに土産の添はぬのは、當然あるべき物がないので、いやだ。

(一〇) 正式の立文(縦長くたたま上下を端折る)でも、また略式のむすびぶみ(上端または中を結んだ)でも。

(一一) 非常にきたなくぶくぶくにくづしてしまつて。

(一二) やつて來られたのだなど。「さ(副詞)なる(斷定の助動詞連體形)なり(推定の助動詞終止形)」のつづまつたかたち。

また、家の内なる男君の來ずなりぬる、いとすさまじ。さるべき人の宮仕するがりやりて、はづかしと思ひぬるも、いとあいなし。ちこの乳母の、ただあからさまにとて出でぬるほど、とかくなくさめて、主人「とく來」といひやりたるに、乳母「今宵はえまぬるまじ」とて返しおこせたるは、すさまじきのみならず、いとにくくわりなし。女迎ふる男、まいていかならむ。待つ人あるところに、夜すこしふけて、忍びやかに門たたけば、胸すこしつぶれて、人出だして問はするに、あらぬよしなき者の名のりして來たるも、かへすがへすもすさまじといふはおろかなり。

驗者のものの怪調ずとて、いみじうしたりがほに、獨鈷や數珠など持たせ、蟬の聲しほり出だして讀みぬたれど、いささかさりげもなく、護法もつかねば、あつまりぬ念じたるに、男も女もあやしと思ふに、ときのかはるまで讀み困じて、驗者「さらにつかず、立ちね」とて、數珠取り返して、驗者「あな、いと驗なしや」とうちいひて、額よりかみさまにさくりあげ、あくびおのれよりうちして、よりふしぬる。

いみじうねぶたしと思ふに、いとしもおぼえぬ人の、おし起こしてせめ

- (一) ガレージにずつとそのまま車を。
 (二) ぼんと音を立て。底本など「ほくと」
 (三) 丑牛だけを。底本およびこの系統諸本は「かぎり」を「かさり」に作る。
 (四) 底本の系統諸本「やもて」とある。取られての意か。「はづかし」は能本「いつしか」とある。
 (五) つい、ちよつと、しばらくといつて、自分の里などへ出て行つた間、泣く幼児をあれこれと慰め、きげんをとつてゐて、一方、「はやく歸つて來なさい」と。
 (六) 「おとづれて來るはずだと」待つてゐる男性がある場合に。この「ところ」は、「ときに」に似た用法。一〇三・二六頁参照。
 (七) はつと思つて、召使の者を出して。
 (八) さうでないつまらぬ者が。
 (九) 修験者がもの怪(人にとりついて、その人を病氣にしたり、不幸にしたりする死者、生者の靈球)のついたのを調伏するといふので、とても自信滿滿といつた顔で。
 (一〇) 獨鈷(降魔の具。験者が持つ鐵か銅製の劍形で一尖の金剛杵)や數珠を、「よまし」に持たせ、蟬の鳴くやうな讀經の聲をしぼり出して底本となへてゐるが。
 (一一) 「さりげも」底本「きりげも」
 (一二) 「よまし」につくべき護法童子もつかないので。(つけば、ものけは退散

てものいふこそいみじうすさまじけれ。

除目につかさ得ぬ人の家。今年はかならずと聞きて、はやうありし者ども
 のほかほかかなりつる、田舎だちたるところに住む者どもなど、みなあつ
 まり來て出で入る車の轆も際なく見え、物詣する供にわれもわれもとま
 りりつかうまつり、もの食ひ、酒飲み、ののしりあへるに、はつる曉まで
 門たたく音もせず。あやしうなど、耳立てて聞けば、前驅おふ聲聲などし
 て上達部などみな出でたまひぬ。もの聞きに宵より寒がりわななきをりけ
 る下衆男、いとものうげにあゆみ來るを、見る者どもはえ問ひにだに問は
 ず、外より來たる者などぞ、「殿はなににかならせたまひたる」など問ふ
 に、いらへには男「某の前司にこそは」などぞかならずいらふる。まことに
 たのみける者は、いとなげかしと思へり。つとめてになりて、ひまなく
 居りつる者ども一人二人すべり出でて往ぬ。ふるき者どものさもえ行きは
 なるまじきは、來年の國國手ををりてうちかぞへなどしてゆるぎありきた
 るも、いとほしうすさまじげなり。

よろしうよみたりと思ふ歌を人のもとにやりたるに、返しせぬ。懸想人

する)「よりび」は、修験者が生靈または死靈を調伏し、退散せしめようとするとき、わきにおいて、霊を一時の宿らせる童子。「よりび」ともいふ。

(二五)二時間も讀みつづけたびれて。

(二六)ああ、まことに祈りのききめがないなあ。

(二七)手で髪をかきあげ、自分からさきにあくびをして。

(二八)たいしてすきでもない人がゆすぶり起して無理に何かといひかけて来るのは

(二九)官。役目。(三〇)以前仕へてゐた者どもで、よそに行つてゐる者だとか、田舎めいたところに住んでゐる者などが。

(三一)底本など諸本「ながえに」

(三二)わいわいさわさわあつてゐるが。

(三三)地方官任命の詮議が終る夜明けがたまで知らせに来る者もないので、をかしいなと、耳をすまして聞く。

(三四)前驅を拂ふ警蹕の聲がして、任命に参列の上達部は。

(三五)様子を聞きに(情報を得るために)前夜より寒がつてぶるぶるふるへてゐた下男が、「宵」は底本「よひ」

(三六)底本「えとひにたるにとはす」だめだつたとわかつてたづねる元氣もないが。

(三七)某國の前長官におなりになりました。任官しないから、前任の官名をい

はいかがせむ、それだにをりをかしようなどある返りごとせぬは心劣りす。また、さわがしうときめきたるところに、うちふるめきたる人のおのがつれづれと暇おほかるならひに、むかしおぼえてことなることなき歌よみておこせたる。

四六 その日になりて、思はずなる繪などかきて得たる。

四七 産養、むまのはなむけなどの使に、祿取らせぬ。はかなき薬玉、卯槌な

ど持てありく者などにもなほかならず取らすべし。思ひがけぬことに得たるをば、いとかひありと思ふべし。これはかならずさるべき使と思ひ、心

ときめきして行きたるは、ことにすさまじきぞかし。

四八 婿取して四五年まで産屋のさわぎせぬところも、いとすさまじ。大人な

る子どもあまた、ようせずは、孫などもはひありきぬべき人の親どち晝寝したる。かたはらなる子どものこちにも、親の晝寝したるほどはよりど

ころなくすさまじうぞあるかし。

四九 師走のつごもりの夜、寝起きてあぶる湯は腹だたしうさへぞおぼゆる。

五〇

五〇

五〇

たのである。

(三八)それを聞いて、主人の任官を心からたよりにしてゐた者は、まことに情ないことだと思つてゐる。

(三九)來年任期が切れてあく國々を。

(四〇)悲觀してうろろしてゐるのも。

(四一)底本「いとをかし」諸本「いとをかし」(四二)かなりうまく詠めたと思ふ歌を。底本「よろしうよみたる」と。

(四三)戀人へ贈つた時はともかくとして。

(四四)世にもはやされてゐない人が、自分が暇のあるままに、おかしを思ひ出し、たいしたことのない歌を。

(四五)なにかの行事のをりに必要な扇を、これはたいせつな扇だからと思つて、十分思慮があり、心得があると思つてゐる人にわたしておいたところ。

(四六)當日になつて。(四七)底本「思ひわする」勸本「思わする」内本「思わする」能本による。意外につまらぬの意。

(四八)出産後三日目、五日目、七日日に親戚より衣食を贈り、産婦の家では、それにこたへて開く祝宴。(四九)旅立への餞別品を贈つたり、宴をひらいたりする。(五〇)祝儀。かげ物。多く巻絹の類をいふ。

(五一)不淨邪氣を拂ふため種々の香料を錦の袋に入れ、造花を添へ五色絲をたらしなどし簾や柱にかけるもの。絲の長さは

師走しはすのつごもりの長扇ながあふ。「日ひばかりの精進しょうじん潔齋けつさい」とやいふらむ。

二十四

一 たゆまるるもの 精進しょうじんの日のおこなひ。遠とほきいそぎ。寺てらにひさしくこもりたる。

二十五

人ひとにあなづらるるもの 築士ついでちのくづれ。あまり心こころよしと人に知られぬる人。

二十六

にくきもの いそぐことあるをりに來て長言ながことするまらうど。あなづりやすき人ならば、「後のちに」とてもやりつづけけれど、さすさがに心はづかしき人、いとにくくむつかし。
硯すずりにかみの入りてすられたる。また、墨すみの中に石いしのきしきしときしみ鳴

八尺から一丈くらゐ。五月五日に用ゐた。
 (五) 桃の木を幅一寸長さ三寸に削り、五尺ばかりの五色の糸をつけたもの。正月の最初の卯の日に、糸所から其御座の西南の柱にかけ、臣下も相互に贈答した。
 (六) 相當大事な使。祿がもらへるほどの使。

(五四) わるくすると、うっかりすると。
 (五五) とりつくしまがなくて。

(五六) 「精進解齋」と解する説もある。

(五四) (一) どうも怠け心が生ずるもの。自然とたゆみがちなもの。

(二) おつとめ。勤行。(三) 當日まで随分日数がある行事の支度、準備。

(四五) (一) 土塀。ついでひち(築土)の約。(三) お人よしである人に知られてゐる人。

(十六) (一) お客。客人。

(二) 相手がどうでもいいやうな人なら。

(三) 追ひ歸すこともできようが。

(四) なんといつても、こちらが氣恥しく感ずるやうなりつばな人である場合は。

「さすがに」底本でない。

(五) 困る。いやである。

(六) 髪か、紙か。前者であらう。

(七) 急病人が出来たので、修験者を迎へにやつたところが、自宅にゐないで、よそにゐるのを使が探しまはつてゐる間。

(八) 調伏のことに關係して、疲れはてて

りたる。

にはかにわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例あるところになくて、外にたづねありくほどいと待ち遠にひさしきに、からうじて待ちつけて、よろこびながら加持せさするに、このごろもの怪にあづかりて困じにけるにや、ゐるままにすなはちねぶり聲なる、いとくし。

なでふことなき人の、笑がちにてもいたういひたる。火桶の火、炭櫃などに、手の裏うち返しうち返しおし伸べなどしてあぶりをる者。いつか若やかなる人などさはしたりし。老いばみたる者こそ火桶の端に足をさへもたげてものいふままにおしすりなどはすらめ。さやうの者は、人のもとに來て、ひむとするところをまづ扇してこなたかなたあふぎちらして塵掃き棄て、居も定まらずひろめきて、狩衣の前まき入れてもゐるべし。かか

ることはいふかひなき者のきはにやと思へど、すこしよろしき者の武部の大夫などいひしがせしなり。

また、酒飲みてあめき、口をさぐり、鬚ある者はそれをなで、盃こと人に取らすほどのけしき、いみじうにくしと見ゆ。「また飲め」といふな

あるためであらうか。
(九)すわるとすぐに、ねむさうな聲になるのは、實にくらしい。

(一〇)たいした才能もない人が、笑ひながら得意げにしやべり散らしてゐるのも。

(一一)わかわかしい人がいつそんなことをしたであらうか、年老いた者にかぎつて火鉢の端に足までもあけて、しやべりながら足をこすつたりしてゐるやうだ。

(一二)自分がすわらうとするところだ。
(一三)すわつた姿勢もおちつかず、ばたばたして。

(一四)狩・旅・蹴鞠などにも用ゐたもの、このころは従六位以上の常服になつてゐた。前が長くたれてゐるので、それを前にのばしてすわるのが通常である。

(一五)こんな無作法なことは、いふに足りない下賤の(無教養な)者がすることであらうかと思ふが、いくぶん身分のある者で、(たとへば)式部の大夫などといつた人がさうしたのである。大夫は「たゆう」とよむ、五位の稱。本来六位下相當である式部省大丞(三等官)で五位の者。

(一六)わめき、口のあたりをなでまはし。底本「あめき」(一七)もつと飲め。「また」を接續詞とも解することができる。

(一八)すすめられた者が。
(一九)べそ口をして。口をへの字にまげて。

るべし、身ぶるひをし、頭ふり、口わきをさへひきたれて、童の「こふ殿にまゐりて」などうたふやうにする、それはしも、まことによき人のしたまひしを見しかば、心づきなしと思ふなり。

ものうらやみし、身の上歎き、人のういひ、つゆ塵のこともゆかしがり聞かまほしうして、いひ知らせぬをば怨じ、そしり、またわづかに聞き得たることをば、われもとより知りたることのやうにこと人にも語りしらぶるも、いとにくし。

もの聞かむと思ふほどに泣くちご。鳥の集まりて飛びちがひ、さめき鳴きたる。

忍びて来る人見知りてほゆる犬。あながちなるところに隠しふせたる人のいびきしたる。

また、忍び來るところに、長烏帽子して、さすがに人に見えじとまどひ入るほどに、ものにつきさはりてそよるといはせたる。伊豫藤などかけたるにうちかづきて、さらさらと鳴らしたるも、いとにくし。帽額の簾は、ましてこはじのうちおかるる音、いとしるし。それもやをら引きあげて入

(二〇)未詳。「こふ殿」は「國府殿」か「守殿」か。未詳。

(二一)りつばな人がなさつたのを實見したので、おもしろくないことだと思ふのである。

(二二)(なにかしきりに)人のことをうらやみ、自分の不幸を歎いて愚痴をこぼし、他人のことを(とかくわるく)いひ、ほんのちよつとしたことも知りたがり、聞きたがつたりして。

(二三)前後つじつまをあはせて話すのも。

(二四)さわがしく音を立てて、鳴いたのも。

(二五)人目を忍んでこつそり通つて來る男をよく見知つてゐて。

(二六)人の隠れるところでもない無理な場所所に隠してねさせておいた男が。

(二七)さうはいふものの人に見られまいとしてあわててはいるときに。

(二八)伊豫國浮穴郡父野川で産する篠簾。

(二九)くぐる時にかむつて、さらさらと音を立てたのも。「たるも」底本「たも」

(三〇)上邊にそへて帛を横に長く引き延べたものを額といふが、そのある御簾(竹製)。「こはじ」は御簾を釣り上げておく鉤。または御簾をまく時、中に入れておく薄い木板をいふ。

(三一)しづかに、そつと、上にあげてはいると、全然音を立たない。(三二)入口の引戸。

るは、さらに鳴らず。遣戸遣戸をあらく閉閉て開開くるも、いとあやし。すこしもたぐるやうにして開開くるは鳴りやはする。あしう開開ければ、障子障子などもこぼめかしうほとめくこそしるけれ。

ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊蚊のほそ聲聲にわびしげに名名のりて、かほのほどに飛びありく、羽風羽風さへその身のほどにあるこそいにくけれ。

ききめく車車に乗りてありく者。耳もきかぬにやあらむと、いとにくし。わが乗りたるはその車車の主主さへにくし。

また、物語するに、さし出出でてわれひとりさいまくる者。すべてさし出では、童童も大人大人も、いとにくし。あからさまに來たる子ども、童童を見入れ、らうたがりて、をかしきもの取らせなどするに、ならひてつねつねに來つつみ入りて、調度調度うち散らしぬる、いとにくし。

家家にても、宮仕所宮仕所にても、あはでありなむと思ふ人の來たるに、そら寢寢をしたるを、わがもとにある者起起こしにより來て、いきたなしと思ひがほにひきゆるがしたる、いとにくし。新參新參の、さしこえて、もの知りがほに教へやうなることいひ、うしろみたる、いとにくし。

- (三三)へたにあけると。
 (三四)ふすまなどもがたがたと、音を立ててさわがしくひどい音がするものだ。
 (三五)力ななさうなほそい聲でぶーんと飛んで来て。
 (三六)きいきいとときしむいやな音のする車に乗つてまはる者。
 (三七)自分がさうした車を借りて乗つた時は、車ばかりかその車の持ち主までがにくらしい。
 (三八)でしやばつて、自分ひとりしやべりまくり、先に話を進める者。「さい」を「才」と解するのは誤で、「さき」の音便。
 (三九)ついちちよつと遊びに来た子どもや少年少女を目にかけ、かはいがつて。
 (四〇)馴れて、いつもやつて来てすわりこんで。(四一)手廻りの道具やなにやを散らかしてしまふのは。
 (四二)あはないですませるものならすましたいと思つてゐる人がやつて来たので。
 (四三)寝ぎたない、寝坊だと思つた様子で。
 (四四)世話をやいてゐるのは。
 (四五)自分がいまなかくよくしてゐる男が、以前親しかつた女のことをほめていひ出しなどするの、それはもうずつと古いことなのだが、やはりにくらしい。
 (四六)いまのことだつたらにくさも思ひやられる。

わが知る人にてある人の、はやう見し女のことほめいひ出でなどするも、
 ほどへたることなれど、なほにくし。ましてさしあたりたらむこそ思ひや
 られるれ。されど、なかなかさしもあらぬなどもありかし。
 はなひて誦文する。おほかた、人の家の男主ならでは、高くはなひた
 る、いとにくし。

蚤も、いとにくし。衣の下にをどりありきてもたぐるやうにする。犬の
 もろ聲に、ながながとなきあげたる、まがまがしくさへにくし。
 開けて出で入るところ、閉てぬ人、いとにくし。

二十七

心ときめきするもの 雀の子飼。ちご遊ばするところの前わたる。よき
 煎きものたきてひとり臥したる。唐鏡のすこしくらき見たる。よき男の車
 とどめて案内し、問はせたる。

かしら洗ひ、化粧じてかうばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人
 なぎところにも、心のうちは、なほいとをかし。

(四七)かへつてまた、さうにくくもないやうなこともあるものだが。

(四八)くしやみをして自分でまじなひの呪文を唱へる者にはくらしい。

(四九)聲をそろへて長々といつまでもはえたててゐるのも、なんだか不吉な感じがして、氣味わるさまで手傳つてにくらしい。

【三七】(一)どうか、どうか胸のをどるもの。「ときめき」の「とき」は心臓の鼓動の擬聲音か。江戸時代に遊女がつまみ喰ひを「雀の子飼」といつた。(柳亭記)

(二)幼児を遊ばせてゐるところの前を車に乗つて通るとき。

(三)沈香、麝香などの香の粉末に甲香を入れ、蜜でねりあはせたもの。煉り香。

(四)秘藏の舶載のりつばな鏡が、すこし曇つてゐるのを見つけた場合。

(五)別にだれといつて見てくれる人のゐないところでも、ひそかに心がときめく。

(六)來られたのかと、はつとする。

【三八】(一)賀茂祭の日、柱や簾、几帳などにつけた葵が枯れ残つてゐるのを見て。

(二)紙などのちひさな人形、季節を問はず、女兒の遊び道具としてゐた。さうした昔がなつかしいのである。

(三)淺紫。(四)布帛の小切れ。「裂き出で」または「裂き妙」から來たといふ。

(五)おしつぶされて、本の中なんかにあ

待つ人などのある夜、雨の音、風の吹きゆるがすもふとおどろかる。

二十八

過ぎにしかた戀しきもの 枯れたる葵。ひひな遊びの調度。二藍、葡萄染などのさいでのおしへされて冊子の中などにありける、見つけたる。

また、をりからあはれなりし人の文、雨など降り、つれづれなる日探し出でたる。去年のかはほり。

二十九

心ゆくもの よくかいたる女繪の、詞をかしうつけておほかる。もの見のかへさに、乗りこぼれて、をのこともいとおほく、牛よくやる者の車走らせたる。白くきよげなる陸奥紙に、いといとほそう書くべくはあらぬ筆して文書きたる。うるはしき絲の練りたる、あはせぐりたる。ちようばみに、ちようおほくうち出でたる。ものよくいふ陰陽師して、河原に出でて呪詛の祓したる。夜寝起きて飲む水。

つたのを見つけたとき。

(六)もらつたときは、をりがをりだつたので感銘が深かつた手紙を。

(七)蝙蝠扇。地紙を骨の片側だけにはつた扇。夏の扇。

【一九】(一)快いもの。嗜れ嗜れして氣持がよいもの。溜飲のさがるもの。

(二)袖口などが車の外にはみ出るほど、大勢乗つて。

(三)車副ひの男どももたいへんおほく。

(四)襪紙。厚くて上品である。もと陸奥産。

(五)底本系統諸本「かゝへてはあらぬ」内本による。

(六)よりあはせて繰つたもの。

(七)雙六の一種。二つの袋の目が同じやうに出ると、相手の駒を食ふから重食といふ。ほかに調(二箇の賽の目のそろつた場合)半(さうでない時)の義とも、

「丁半」ともいふ。(八)陰陽寮の職員、占筮、相地、祓ひ、祈禱などをする。

(九)人の呪咀を祓ひ除く。

(一〇)この文によつて清少納言は酒を飲んだかといふ。

(一一)祈願の趣旨を自分にかはつて神佛に申しあげせるとき。

【二〇】(一)檳榔毛の車はゆるゆると走らせるのがよい。正式の車だから急いで行くのはふさはしくないといふのである。

(二)網代でふいた車。略式の車。

つれづれなるをりに、いとあまりむつまじうもあらぬまらうどの來て、

世の中の物語、このごろあることをかききもにくきもあやしきも、これ

かれにかかりて、おほやけたくしおぼつかなからず、聞きよきほどに語

りたる、いと心ゆくここちす。

神、寺などにまうでても二の申さするに、寺は法師、社やしろは禰宜ぬぎなどの、く

らからずさわやかに、思ふほどにも過ぎて、とどこほらず聞きよう申した

る。

三十

檳榔毛びんらうげは のどかにやりたる。急ぎたるはわるく見ゆ。

網代あじろは 走らせたる。人の門かどの前などよりわたりたるを、ふと見やるほ

どもなく過ぎて、供ともの人ばかり走るを、たれならむと思ふこそをかしけれ。

ゆるゆるとひさしくゆくは、いとわろし。

三十一

【十二】(一)ちつとみつめてしまふほどうつ
くしい人の説經こそ、その説くことの。

「こそ」は底本をはじめこの系統本にない
(二)よそ目。わき見。説經師が醜男であ
るとよそ見をしてしまふので、ついたふ
とい説經を忘れるから、聽聞者としての顔
のよくない僧の説經を聴くと佛罰を蒙る
であらうかと思はれる。

(三)かうしたことは、いふまい、書くま
もうすこし年の若いころなどは、こ
のやうな罰あたりのことを書けるであら
うが、いまのわたくしのやうにおぼあさ
んでは、佛罰もまことにおそろしい。原
文の「ことは」は詞とも解せる。

(四)説經はたふといつて、説經すると
信仰心の強い者だといつて、説經すると
いふところへはどここへでも。

(五)この罪深い心からみると、まあそれ
ほどでなくともよからうと。

(六)(退職した)藏人は、むかしは行幸
の御前驅などといふこともせず、その一
年だけは宮中あたりには影も見えなかつ
たやうだが、現今ではさうでもないやう
だ。

(七)六位の藏人が巡爵によつて五位とな
り退職した者を藏人の五位といつて、そ
んな人をさかんに起用するが。

(八)在職當時のせはしさにくらべて、退

説經の講師は かほよき。講師のかほをつとまもらへたるこそ、その説
くことのたふとさもおぼゆれ。ひが目しつればふと忘るるに、にくげなる
は罪や得らむとおぼゆ。このことはとどむべし。すこし年などのよろしき
ほどはかやうの罪得がたのことは書き出でけめ、いまは罪、いとおそろ
し。

また、たふときこと、道心おほかりとて、説經すといふところごとに最
初にいきゐるこそ、なほこの罪の心には、いとさしもあらでと見ゆれ。藏
人など、むかしは御前などいふわざもせず、その年ばかりは内裏わたりな
どには影も見えざりける、いまはさしもあらざめる。藏人の五位とて、そ
れをしもぞいそがしうつかへど、なほなごりつれづれにて、心ひとつは暇
あるこちすべかめれば、さやうのところによ、一度二度も聴きそめつれ
ば、つねにまうでまほしうなりて、夏などのいと暑きにも、帷子いとあざ
やかにて、薄二藍、青鈍の指貫など踏み散らしてあためり。烏帽子に物忌
つけたるは、さるべき日なれど、功德のかたにはさはらずと見えむとに
や。

屈無聊で、心だけは暇があるやうな氣持がするやうなので、そのやうな説經所に。

(九) いづれもおまゐりしたくなつて。「まうて」は底本「まて」

(一〇) 直衣の下に着た帷子がとてもあざやかに透いて見えて。

(一一) 鈍色は鼠色、その青みを帯びたもの。

(一二) 柳の枝を三分ほどに切り、物忌と記し、ことなし草の葉で烏帽子につける箇。

(一三) 物忌で謹慎しなければならぬ日なのだが、説經聽聞など佛道を修め善功を積む方面には、外出も支障がないことを示すためであらうか。

(一四) 事に附いたる」と「言に盡いたる」との二説がある。後者によれば、話が盡きてあたりを見まはす義となる。

(一五) そば近くすわり。底本「近う」がない。

(一六) 水晶などでりつばに飾つた數珠を手慰みにし、ひねくり廻して、あつちこつちながめやり。

(一七) どこそで某の人がした法華八講。法華八講は、法華經八卷を八人の僧が毎日朝夕一座に分擔し、四日間を終る。

(一八) 寫經を終つて佛前に供へ替む法會。

(一九) ああであつたこと、かうだつたことと、比較し批評してあるので、かんじんのいま聽聞すべき説經のことは、聞いてもゐない。

そのことする聖と物語し、車立つることなどをさへぞ見入れ、ことにつ

いたるけしきなる。ひさしうあはざりつる人のまうであひたる。めづらし

がりて、近うのより、ものいひうなづき、をかしきことなど語り出でて、

扇ひろうひろげて、口にあてて笑ひ、よく裝束したる數珠かいまさぐり、手

まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のあしよしほめそし

り、某にてその人のせし八講、經供養せしこと、とありしこと、かかり

しこと、いひくらべゐたるほどに、この説經のことは、聴きも入れず。な

にかは、つねに聴くことなれば、耳馴れてめづらしうもあらぬにこそは。

さはあらで、講師あてしばしあるほどに、前驅すこし追はする車とどめて

おるる人、蟬の羽よりも輕げなる直衣、指貫、生絹の單衣など着たるも、

狩衣の姿なるも、さやうにて、わかうほそやかなる三四人ばかり、侍の

者、またさばかりしていれば、はじめゐたる人人もすこしうち身じろぎ、

くつろい、高座のもと近き柱もとにすゑつれば、かすかに數珠おしもみな

どして聴きゐたるを、講師もはえはえしくおぼゆるなるべし、いかで語り

つたふばかりと説き出でたなり。

(三〇) 纏らぬ絹。

(三一) 同じほどの人數で、はいつて來ると。

(三二) 「くつろぎ」の音便。席をあげ、座を譲りあけて、講師の席に近い柱のそばへ。

(三三) 光榮なことと思ふのであらう、どうか後々までも評判になるほどのすばらしい説經をと思つて説き出したやうである。「たなり」は「たるなり」の「たる」が撥音化して「たん」となり、その撥音無表記の例。

(三四) 底本「我とち」；それらの貴公子たちがおたがひ同士なにか話しあつてゐることも、どんな話であらうかと氣になる。

(三五) その貴公子たちをよく知つてゐる人。
(三六) 「あの人は居られましたか」「勿論」などといつもきまつていはれてゐる(やうな)のは、あんまりである。勿論、説經所へ全然顔を出さないなんていふことがあつてはならないが。

(三七) 賤しい女でさへよく聽いてゐるんだもの。

(三八) だからといつて、はじめのころはうろろする女性はなかつた。「ありく」はあるきまはる、外出してうろつく意。いまの「あるく」より用法が廣い。

(三九) 市女笠被衣(單衣の小袖)を着た女の正式の外出姿。

聽聞ちやうもんすなどたふれさわぎ、額ぬかづくほどにもならで、よきほどに立ち出づとて、車くるまものかたなど見おこせて、われど二四ちいふことも、なにごとならむとおぼゆ。見知り三三たる人は、をかしと思ふ、見知らぬはたれならむ、それにやなど思ひやり、目をつけて見送らるるこそをかしけれ。

「そこに説經せきやうしつ、八講はこうしけり」など人のいひつたふるに、人三六「その人はありつや」他の人「いかかは」などさだまりていはれたる、あまりなり。などかは、むげにさしのぞかではあらむ。あやし三七からむ女だにいみじう聽くめるものを。さればとて、はじめつかたばかりありきする人はなかりき。たまさかには壘裝束つばさうぞくなどして、なまめき化粧けさうじてこそはあまりしか。それに物語ものがたりなどをせせし。説經せきやうなどには、ことにおほくきこえざりき。このごろ、そのをりさし出でけむ人、命長いのちくて見ましかば、いかばかりそしり、誹謗ひぼうせまし。

三十二

菩提ぼだいといふ寺に、結縁けいげんの八講はこうせしに、まうでたるに、人のもとより「と

【三十二】(一)未詳。洛東阿彌陀峯の南にあつたといふ。

(二)佛道に縁を結ぶための法華八講。

(三)「ね」は底本以下この系統本「ぬ」

(四)「寂寂し」の音便。さびしい。

(五)わざと望んでも濡れかかりたいありがたい蓮の露(八講)を捨ておいて、憂き世に二度とかへれようか。

(六)そのまま泊つてしまはうかと。

(七)未詳。列仙傳六に見える湘中老人が黄老の書を読んであまりのおもしろさに家路の巴陵の道を忘れた故事をいひ、その留守の人の待ち遠しさをも思ひやつてはをられぬ意かといふが、未詳。「常住」の字音か。梁塵秘抄二に「いづれか葛川へまゐる道、仙洞七わたくづれば坂、大石あつか杉の原、さうちうのおまつをゆくを玉川の水」(四句神歌雜)といふのがあるが、この「さうちう」も未詳。【三十三】(一)小白河殿。小白河は白河の附近に相違ないが、その位置はわからない。(二)藤原濟時、小一條左大臣師尹の二男。當時權大納言右近衛大将、四十六歳。(三)いかにもその噂のやうに隙間もなく轆の上に(後の車)車臺を重ねてあり、第三列日位までは、いくらか説經の聲も聞えようといつたありさまである。車は後向きに立つてゐるのである。

く歸りたまひね。いとさうざうし」といひたれば、蓮の葉の裏に、

清もとめてもかかる蓮の露をおきてうき世にまたはかへるものかは

と書きてやりつ。

まことにいとたふとくあはれなれば、やがて泊りぬべくおぼゆるに、さうちうが家の人のもどかしさも忘れぬべし。

三十三

小白河といふところは、小一條の大將殿の御家ぞかし。そこにて上達部、結縁の八講したまふ。世の中の人、いみじうめでたきことにて、「おそからむ車などは、立つべきやうもなし」といへば、露とともに起きて、げにぞひまなかりける轆の上にはまたさしかさねて、三つばかりまではすこしものもきこゆべし。

六月十餘日にて、暑きこと世に知らぬほどなり。池の蓮を見やるのみぞ、いと涼しきこちする。左右の大君たちをおき奉りては、おはせぬ上達部なし。二藍の指貫、直衣、淺葱の帷子どもぞすかしたまへる。すこしおと

- (四)寛和二年六月十八日から四日間行はれた。清少納言は十九日に行つたらしい。
- (五)左大臣源雅信、右大臣藤原兼家。
- (六)「底本」あさましき「淺葱は薄い青色。
- (七)「すかし」は底本以下この系統本「かし」
- (八)濃いはなぞ縹色に青味を帯びた指貫。
- (九)小野宮實頼の孫、當時從三位、參議。四十三歳。
- (一〇)「あ」は底本系統本内本以外「ね」
- (一一)ちつとおちついてもぬないで。底本をはじめ諸本「ねも……」
- (一二)師尹の孫、濟時の養子。當時左近少將。
- (一三)「底本」丁めいしう「濟時の子相任の幼名。當時從五位下、侍從。十六歳。能本」ななかあきらの侍從「前田本」ちやうめい侍從
- (一四)一門の子弟、良家の子弟。
- (一五)日が高くのぼるころに。
- (一六)關白道隆。當時從三位右近中將。三十二歳。
- (一七)「青色」(丁字茶)か。前田本「からの」
- (一八)底本系統本内本以外「こすはう」
- (一九)從來「ほそ」(細)と校訂されてゐたが、三卷本の「ほを」とあるにより小林榮子・池田龜鑑兩氏が正された。
- (二〇)底本「ぬるほね」または「ぬかほね」

なびたまへるは、青鈍あを鈍の指貫、白き袴はかまもいと涼しげなり。佐理すけの宰相さむらひなどもみな若やぎだちて、すべてたふときことのかぎりもあらず、をかしき見ものなり。

廂ひましの簾す高うあげて、長押ながしの上に上達部うへは奥にむきてながたとめたまへり。そのつきには、殿上人、若君達わかきんたち、狩装束かりうぶく、直衣なほしなどもいとをかしうて、え居ゐもさだまらず、ここかしこに立ちさまよひたるも、いとをかし。實方じつかたの兵衛べゑの佐すけ、長命ちやうめいの侍從じなど、家の子こにて、いますこし出で入りなれたり。また童わらわなる君きみなど、いとをかしくておはず。

すこし日ひたたくるほどに、三位さんの中將ちゆうしやうとは、關白せきひやく殿をぞきこえし、香かうのうすもの一藍ひとあゐの御直衣みちよ、二藍ふたあゐの織物オリモノの指貫さしゆき、濃こゝろき蘇枋すぼうの下したの御袴みはかまに、はりたる白しろき單衣ひとへのいみじうあざやかなるを着たまひて、あゆみ入りたまへる、さばかりかるび涼しげなる御中みちかに、暑あつかはしげなるべけれど、いといみじうめでたしとぞ見えたまふ。

朴は、塗骨ぬりほねなど、骨ほねはかはれど、ただ赤あかき紙しを、おしなべてうち使もちひ持もちたまへるは、瞿麥しやうまくのいみじう咲きたるにぞいとよく似たる。まだ講師こうじものほ

(三)四足附きの膳、貴人の用ゐる膳の一種。

(二)ここより「おとな上達部」の「おとな」までこの系統諸本錯簡があるのを正しておいた。

(三)一條攝政伊尹五男、當時從二位權中納言。三十歳。

(四)どれがよい、悪いなどと評することのできないほど、みなすばらしい帷子の中で、義懐卿は(帷子を人目に立たぬやうに袴の下に着こんでいらつしやるので)まるで直衣だけを着てゐるやうであつて。「まことに」は内本による。底本など「まわに」

(五)車の轅をおく隙もなかつたので。

(六)この場の空気をみださないで女車に申入れのできさうな者を一人。

(七)近くにすわつていらつしやるかたがただで御相談になつて、そのいつておやりになることはこちらは聞えない。

「きこえず」は内本による。底本などは「きこえに」

(八)使の男はひどく神妙な様子で女車のところへ歩み寄るのを、一方で笑つていらつしやる。

(九)使の男は女車の後方に寄つて。

(一〇)實方よ。返歌を考へておけ。

(一一)いつになつたら返事が聞けるのか

らぬほど、懸盤かたはらして、なににかあらむ、ものまゐるなるべし。

義懐ぎわいの中納言の御さま、つねよりもまさりておはするぞかぎりなきや。

色あひのはなばなといみじうにほひあざやかなるに、いづれいづれともなき中の

帷子かたびらを、これはまことにすべて、ただ直衣なほしひとつを着たるやうにて、つね

に車くるまどものかたを見おこせつつ、ものなどいひかけたまふ、をかしと見ぬ

人はなかりけむ。

後のちに來たる車の、ひまもなかりければ、池に引きよせて立ちたるを、見

たまひて、實方さかたの君に、義懐ぎわい「消息せうそくをつきづきしういひつべからむ者一人」

と召せば、いかなる人にかあらむ、選りえて率ひておはしたり。「いかがいひや

るべき」と、近ちかうゐたまふかぎりのたまひあはせて、やりたまふことばはき

こえず。いみじう用意して車のもとへあゆみよるを、かつ笑ひたまふ。後しり

のかたによりていふめる。ひさしう立てれば、義懐ぎわい「歌などよむにやあら

む、兵衛べいゑの佐、返し思ひまうけよ」など笑ひて、いつしか返事聞かむと、

あるかぎり、おとな上達部までみなそなたさまに見やりたまへり。げにぞ

顯證けんじやうの人まで見やりしもをかしかりし。

と、だれも彼も、老上達部までも。「そなたさまには、後世は「そなたさまを」といふべきところである。」

(三二)外にゐて車に乗らずに聽講してゐる人までもそちらを見てゐたのもおもしろかつた。

(三三)歌などの文句をいひ誤つたことぐらゐで、かう呼び返すこともあるまい。あれほど長く待たせたのだから、まさかきまつたことばは、訂正すべきでもあるまいものと思はれた。「おのづから」「まれに、時たま」の意から轉じて、「めつたに、まさか」の意。「おぼえたる」は底本「おほしたる」

(三四)待ち遠しく、「どうだつた」「どうだつた」とだれも口々に。

(三五)急に返事をしないで、權中納言が当たつねになると、そのそばに行つて、きどつた様子で申しあげる。

(三六)思慮あること、風流に趣向をこらすこと。

(三七)藤原爲光。九條師輔の九男。當時權中納言。四十五歳。

(三八)ずつと(寄つて)のそいで。底本など一けにさしそのきて

(三九)「と」底本などない。

(四〇)まつすくな木をむりに折つてしまつたやうだ。そのままにしておけばよかつ

返事聞きたるにや、すこしあゆみ來るほどに、扇をさし出でて呼びかへせば、歌などの文字いひあやまりてばかりやかうは呼びかへさむ、ひさしかりつるほど、おのづからあるべきことはなほすべくもあらじものをとぞおぼえたる。近うまゐりつくも心もとなく、「いかに」「いかに」と、たれもたれも問ひたまふ。ふともいはず、權中納言ぞのたまひつれば、そこにもあり、けしきばみ申す。三位の中將「とくいへ。あまり有心過ぎて、しそこなふな」とのたまふに、使「これもただおなじことになむ侍る」といふはきこゆ。

藤大納言、人よりけにさしのぞきて、「いかがいひたるぞ」とのたまふれば、三位の中將「いとほき木をなむおしをりためる」ときこえたまふに、うち笑ひたまへば、みななにとなく、さと笑ふ聲、きこえやすらむ。

中納言「さて呼びかへさざりつるさきはいかがいひつる。これやなほしたること」と問ひたまへば、使「ひさしう立ちて侍りつれど、ともかくも侍らざりつれば、使「さは、歸りまゐりなむ」とて歸り侍りつるに、呼びて」などぞ申す。義懷「誰が車ならむ。見知りたまへりや」などあやしがりた

たのに、ことを好んで女車にいひかけて、
相手を困らせたうへに、返事ももらへな
かつたこと。後撰集十六雜二「いたくこ
と好むよしを時の人いふと聞きて、高津
内親王、なほき木にまがれる枝もあるも
のを毛を吹ききぎずをいふがわりなき」

(四)ざわざわと

(四)底本系統本内本を除き「定」

(四)車の前後の簾の裏にかける長い帛、
餘つた部分を簾の外にたれておく。約九
尺五寸。

(四)濃紅の。

(四)車の後に。「も」は他系統本にはな
い。「摺りたる」は、青摺りにしたの意。

(四)「やがて」は底本など「やりて」。廣
げたまま車のうしろにうちかけなどして
出て行つたが、なに者であらうか、先刻
の返事はつまらない返歌などするよりは
劣つてゐようか、あんな態度の方がかへ
つていかにもよいと思はれてすばらさ
と思つた。「うちかけ」は底本「うちさ
い」と思つた。「かたほ」の「か」「きこえ」の「き
は底本にない。「また」は「まだ」とも
よめる。

(四)八講は、朝夕二座、四日間行はれる。

(四)播磨國の人、法相宗の僧。説經の名
人で、文殊の化身とまでいはれた。長徳
四年權律師、長保元年閏三月廿二日寂。
三十八歳。この時二十五歳。

まひて、「いざ、歌よみて、このたびはやらむ」などのたまふほどに、講師
のぼりぬれば、みなぬしづまりて、そなたをのみ見るほどに、車はかい消
つやうに失せにけり。下簾など、ただ今日はじめたりと見えて、濃き單がさ
ねに二藍の織物、蘇枋のうすものうは着など、後にも摺りたる裳、やが
てひろげながらうちかけなどして、なに人ならむ、なにかはまた、かたほ
ならむことよりは、げにときこえて、なかなかいとよしとぞおぼゆる。

朝座の講師清範、高座の上も光り満ちたるこちして、いみじうぞある

や。暑さのわびしきにそへて、しきしたることの今日すぐすまじきをうち
おきて、ただすこし聞きて歸りなむとしつるに、しきなみにつどひたる車
なれば、出づべきかたもなし。朝講はてなば、なほいかで出でなむと、前
なる車どもに消息すれば、近く立たむかうれしさにや、はやばやと引き出
であけて出だすを見たまひて、いとかしがましきまで、老上達部さへ笑ひ
にくむをも聞き入れず、いらへもせで、強ひてせばかりいづれば、權中納
言の、「やや、まかりぬるもよし」とて、うち笑みたまへるぞめでたき。
それも耳にもとまらず、暑きにまどはし出でて、人して、清「五千人のう

(四七)あまり美男子なのであたり一面光つてゐるやうでまことにすばらしい。

(五〇)わたくしは暑さがつらいうへに、途中まで手をつけてあることで、どうして今今日中にしてしまはなければならぬことをそのまゝにしておいて。

(五一)幾重にも重なつて集まつてゐる車だから。

(五二)「なば」は底本はじめ諸本「ぬは」

(五三)底本など「うへなる」。

(五四)底本など「が」を「る」につくる。

(五五)「せばがりいづれば」は底本など「せばかりつれ」

(五六)「ああ、退出したのもよからう」釋迦が開三顯一の法を説く時、五千人の増上慢がにはかに座を起つて退出しようとした。釋迦は「是の如き増上慢人退くも亦佳し矣」といつて制止しなかつた故事

(法華經方便品)による。

(五七)暑いので、人をかきわけ出て使の者に。

(五八)右の故事によつた。あなただつて五千人の増上慢の中におはいりにならぬことはありますまい。

(五九)ちつと動かすに。

(六〇)どうかして知りたいものだ、人にたづねたのを。底本系統諸本内本を除き「尋ね給ひけるを」。いま、内本、能本、前田本による。

(六一)寛和二年六月廿三日、花山天皇御出

ちには入らせたまはぬやうあらじ」ときこえかけて歸りにき。

そのはじめより、やがてはつる日まで立てたる車のありけるに、人より來とも見え、すべてただあさましう、繪などのやうにてすぐしければ、

ありがたくめでたく心にくく、いかなる人ならむ、いかで知らむと問ひたづねけるを、聞きたまひて、藤大納言などは、「なにかめでたからむ、いと

にくく、ゆゆしき者にこそあなれ」とのたまひけるこそをかしかりしか。さて、その二十日あまりに、中納言、法師になりたまひにしこそあはれ

なりしか。櫻など、散りぬるもなほ世のつねなりや。「おくを待つ間の」とだにいふべくもあらぬ御ありさまにこそ見えたまひしか。

三十四

七月ばかりいみじう暑ければ、よろづのところあけながら夜もあかすに、月のころは寝おどろきて見出だすに、いとをかし。闇もまたをかし。

ありあけ、はたいふもおろかなり。

いとつややかなる板の端近う、あぎやかなる疊一枚、うち敷きて、三尺

家。同廿四日、中納言義懐出家。

(六二)それはまだひととほりのはかなさ、普通の惜しさである。

(六三)「白露の置くを待つ間の朝顔は見ずそなかなかあるべかりける」(新勅撰集十三戀三 源宗子)といふが、その短い盛りにはさへたとへられないほどはかない御世、御榮えとお見えなされた。このところ通説では、それほど短い御前途とは見えぬ御様子であつたのと説く。

【三十四】(一)月の出るころは、目をさまして、外のけしきをながめるが、まことにいい。(二)有明の月の出る陰曆十六七日以後のよさは、また言語に絶してゐる。このあたり第一段に似てゐる。七一頁参照。(三)几帳は端の方に立てておくべきである。でないといふと、奥が見えて気がかりであらうに。

(四)男は歸つてしまつたのであらう、紫の薄色の衷は濃紫で、表面がすこし色褪せてゐるか、底もなけれは濃紅色の綾の「ならず」底本など「なかつた」

(五)「またいづこより……霧の満ちたるに」内本以外底本系統諸本にはない。

(六)「透す」意か。

(七)亂れ、そそけてゐるので。

(八)「けしきも」は諸本「けしきと」

(九)「櫻麻のをふの下草露しあらば明か

の几帳、奥のかたにおしやりたるぞあぢきなき。端にこそ立つべけれ。奥のうしろめたからむよ。

人は出でにけるなるべし、うす色の衷いと濃くて、上はすこしかへりたるならずは、濃き綾のつややかなるが、いとなえぬを、かしらこめに引き着てぞ寝たる。香染の單衣、もしは黄生絹の單衣、紅の單衣、袴の腰のいとながやかに、衣の下よりひかれ着たるも、まだ解けながらなめり。外のかたに髪のうちたなはりてゆるらかなるほど、長さおしはかられたるに、またいづこよりにかあらむ、朝ぼらけのいみじう霧り満ちたるに、二藍の指貫にあるかなきかの色したる香染の狩衣、白き生絹に紅のとほすにこそはあらめ、つややかなる、霧にいたうしめりたるを脱ぎ、髪にすこしふくだみたれば、烏帽子のおし入れたるけしきもしどけなく見ゆ。

朝顔の露落ちぬさきに文書かむと、道のほども心もとなく、「麻生の下草」など、口ずさみつつわがかたにいくに、栝子のあがりたれば、御簾のそばをいささか引きあげて見るに、起きて往ぬらむ人もをかしう、露もあはれなるにや、端に立てれば、枕がみのかたに、朴に紫の紙はりたる扇

- してゆかむ親は知るとも」(古今六帖、六)
「櫻麻のをふの下草露しあれば明かして
い行け親は知るとも」(萬葉集、十二)
(一〇)起きて早く歸つて行つた人の心も風
流に思はれるが、置く朝露も趣が深いと
観ずるのであらうか。「一端」は底本系統
諸本「しはし」。
(二〇)「あり」は底本など「ある」。内本
「あるは」
(二一)陸奥紙などを二つ折りにして懐中す
るをいふ。懐紙。それをさらに細く切つ
た。やがて短冊に變る。
(二二)赤花(あかね色)か紅色か、すこし
はつてゐるのも。
(二三)人のけはひがするので、女は衣の中
から顔をおけて見ると、男がここにこし
て下長押に寄りかかつてすわつてゐる。
(二四)悉くやしきも、寝姿を見つければし
まつたなと思ふ。
(二五)簾が置くのも待たずにあわてて歸つ
て行つた男がにくらしいので。「もどか
し」は、當方の心も察しない者への感情
を述べ、もどきたい心、非難したい氣持
の義に用ゐられてもゐた。
(二六)女の枕のあたりにある扇を男は自分
のものつてゐる扇で、および腰になつてか
きよせるが。「して」は底本など「とて」
(二七)「うとうとしく思つていらつしやる

ひろごりながらあり、みちのくに紙の骨紙たたらがみのほそやかなるが、花はなか紅くわにか、
すこしにほひたるも几帳のもとにちりほひたり。

人氣にんげのすれば、衣うぬのなかより見るに、うち笑わらみて長押ながしにおしかかりてゐ
ぬ。恥はにかみなどすべき人にはあらねど、うちとくべき心こころばへにもあらぬに、
ねたうも見えぬるかなと思ふ。男「こよなきなごりの御朝寝あさなかな」とて、
簾すだのうちにから入りたれば、女「露つゆよりさきなる人のもどかしさに」と
いふ。をかしきこと、とりたてて書くべきことならねど、とかくいひかは
すけしきどもは、にくからず。

枕まくらがみなる扇、わが持もたるして、およびてかきよするが、あまり近う寄り
來くるにやと心ときめきして、引きぞ下くだらるる。取りて見などして、男「う
とく思おもいたること」などうちかすめ、うらみなどするに、明あかうなりて、
人の聲聲こゑごゑし、日もさし出でぬべし。霧きりの絶間見たえまえぬべきほど、いそぎつる
文ふみも、たゆみぬることそうしろめたけれ。

出ででぬる人も、いつのほどにかと見えて、萩あきの、露つゆながらおしをりたる
につけてあれど、えさし出でせず。香かほの紙かみのいみじうしめたるにほひ、いと

こと」などとそれとなく諷し、うらみな
どするうちに。「思い」は「おぼし」の
音便。底本はじめこの系統諸本「おほ」
(二)朝霧の晴れきらぬうちに急いで
た手紙も、なにかとまぎれ怠つて出せ
いでしまつたことは氣がかりである。能
本「見えぬべきほど」の「べき」はな
く「ほどに」とある。

(三)朝早く、露の落ちないうちに歸つて
行つた人も、いつの間に書いたのかと思
はれるが、萩の枝の露の置いたまま折り
取つたのに手紙を附けて持たせて來た
が、使ははまるる男に遠慮して、さし出
さない。

(三)底本「からのかみの……」丁子色
(黄に赤味を帯びてある)の紙の、とて
も強く薫きしめたにはひもすばらしい。
(三)あまり明かるとなつて、きまり悪い
ころになつたのである。

(三)自分がおきざりにして來た女のとこ
ろもこんなであらうかと想像されるのも
主として「木の花」である。
(二)したれた花房が長くて。

(三)世に類なく、趣がすぐれた様子で。
(四)その上、ほととぎすがその身をよせ
るゆかりのある木と思ふからであらうか
(五)ちよつとした手紙を結びつけるもの

をかし。あまりはしたなきほどになれば、立ち出でて、わがおきつるとこ
ろもかくやと思ひやらるるも、をかしかりぬべし。

三十五

一 木の花は 濃きも薄きも、紅梅。櫻は、花びらおほきに、葉の色濃き
が、枝ほそくて咲きたる。藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、いと
めでたし。

四月のつごもり、五月のついでたちのころほひ、橘の葉の濃く青きに、花
のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心ある
さまにをかし。花のなかより黄金の玉かと見えていみじうあざやかに見え
たるなど、朝露にぬれたる朝ぼらけの櫻におとらず。ほととぎすのよすが
ときへ思へばにや、なほさらにいふべうもあらず。

梨の花、よにすさまじきものにして近うもてなざず、はかなき文つけな
どだにせず。愛敬おくれたる人のかほなどを見ては、たとひにいふも、
げに、葉の色よりはじめてあいなく見ゆるを、唐土にはかぎりなきものに

にさへもしない。

(六)愛らしさのない人の顔。(七)たとへ。

(八)いかにもそのたとへのとおり。

(九)「あいなく」はおもしろくなく、かはゆくなく。底本系統諸本内本を除いて「あはひなく」

(一〇)漢詩にも作るが、それには、やはりなんとか仔細があるのであらうと、しひてこの花の特長を探して見ると。

(一一)うつくしい色艶があるかなきかについてあるやうである。

(一二)字は大眞、唐の玄宗皇帝の寵を受けた女官。安祿山が兵を起して楊貴妃を馬嵬坡で殺した。白樂天は、これを長恨歌に作つたが、詩の中に帝が臨邛の道士に命じて妃の魂の所在を求めさせた。道士は蓬萊で妃にあひ、帝の恩命を傳へたところ、妃が感泣した様子を「玉容寂寞淚闌干。梨花一枝春帶雨」と形容してゐる。

(一三)ひとすぎてもやだれとも、他の木と同列に論ずべき木でもない。

(一四)風凰のこと。能本「もろこしにことしき名つきたる」

(一五)絃樂器の總稱。

(一六)すばらしいなどととほりいつべんの形容詞で表現できるものではない。筆舌に盡しがたいほど、すばらしいものだ。

(一七)ぶかつかうだけれど。

てふみにも作る、なほざりとも、やうあらむと、せめて見れば、花びらの端はしにかしきかしきにほひこそ心もとなうつきためれ。楊貴妃やうきひの、帝みかどの御使つかひにあひて泣きけるかほに似せて、「梨花りくわいし一枝、春はる、雨あめを帯おびたり」などいひたるは、おほろげならじと思ふに、なほいみじうめでたきことはたぐひあらじとおぼえたり。

桐の木の花、紫むらさきに咲きたるはなほをかしきに、葉のひろひろりりざまざまうたてこちたけれど、こと木どもとひとしういふべきにもあらず。唐土たうどに名つきたる鳥の、選えりてこれにのみあるらむ、いみじう心こころとなり。まいて琴ことに作りて、さまざまなる音ねの出いで來るなどは、をかしをかしなど世のつねにいふべくやはある、いみじうこそめでたけれ。

木のさま、にくげなれど、棟むらの花、いとをかし。かれがれにさまことに咲きて、かならず五月五日さつきいつひかにあふもをかし。

三十六

池は かつまたの池。磐余いはなほの池。贅野たへのの池。初瀬はつせに詣まうでしに、水鳥の

(一) 枯れさうな姿で、風變りに咲いて、かならず陰曆五月五日に咲きはせるのも、おもしろい。

【七】(一) 奈良縣生駒郡跡村。勝間田の池。萬葉以來の歌池。

(二) 奈良縣磯城郡。

(三) 京都府相樂郡。(四) 所在未詳。

(五) 變な名前で、どうしてそんな名をつけたのであらうと思つてたづねたところが。

(六) 全然水がなく乾いてゐるのであつたら「水無しの池」と呼ぶもよからうが。

(七) 奈良市にある。

(八) 采女は、古く主上につかへて御食事ごじじに奉仕した女官。拾遺集三十哀傷「猿澤の池に采女の身投げたるを見て、人麿、わぎもこが寝くたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき。大和物語に、奈良の帝に仕へた采女としてこの亂と歌がある。「寝くたれ髪」は、寝て亂れた髪。(九) 所在未詳。原文「おまへの池」(一〇) 底本系統本内本を除き「かみの池」所在未詳。

(一一) 「戀すてふ(イ本武藏なる)狭山の池のみくりこそ引けば絶えずれわれや根絶ゆる」(古今六帖六、夫木抄「戀すて」)「みくり」は三稜草。水澤の中やその附近に生える。

ひまなくゐて立ちさわぎしが、いとをかしう見えしなり。

水なしの池こそ、あやしう、なごてつけけるならむとて問ひしかば、「五月などすべて雨いたう降らむとする年は、この池に水といふものなむなくなる。またいみじう照るべき年は、春のはじめに水なむおほく出づる」といひしを、清「むげになく乾きてあらばこそさもいはめ、出づるをりもあるを、一筋にもつけけるかな」といはまほしかりしか。

猿澤の池は、采女の身投げたるをきこしめして、行幸などありけむこそいみじうめでたけれ。「ねくたれ髪を」と人麿がよみけむほどなど思ふに、いふもおろかなり。

御前の池、またなにの心にてつけけるならむと、ゆかし。鏡の池。

狭山の池は、みくりといふ歌のをかしきがおぼゆるならむ。こひぬまの池。

はらの池は、「玉藻な刈りそ」といひたるも、をかしうおぼゆ。

- (一) 所在未詳。
 (二) 「をし」(鴛鴦) たかべ(小鴨) 鴨さへ來ゐる はらの池のヤ 玉藻は 眞根な刈りそヤ 生ひもつぐがにや 生ひもつぐがに」(風俗、鴛鴦)
 【三七】(一) 節日。一月七日(人日) 三月三日(上巳) 五月五日(端午) 七月七日(七夕) 九月九日(重陽) の五節日をいふ。
 (二) いふに足りない、下賤の民家までが、どうかして自分の家の屋根に菖蒲をしげく葺かうとして。
 (三) この五月五日は。八段八五頁参照。
 (四) 縫殿寮。中務省に屬し、主上の御衣の裁縫や女官の考課をつかさどる。
 (五) 御帳寮。四基の柱の間に帳をかける。
 (六) 腰ざしや物忌札などをつけて。一〇九頁(二) 参照。「腰ざし」は未詳。腰紐をいふ。「腰ざし」熊本など一さしぐしさし。
 (七) 菖蒲の長い根に、むらごの組糸で結びつけたのなど、毎年のごとでいままさらめづらしさうにいふべきことではないが、まことにいい。
 (八) 毎年春に咲くからといつて、櫻を平凡なものと思ふ人があらうか、それと同じく「めづらしういふべきこと」ではないが、「いとをかる」といふのである。
 (九) 道を歩く童女などが、それぞれな服装相應につけて、すばらしくりつばな服装をしてゐると思つて。「つち」は「地」。

せちは 五月にしく月はなし。菖蒲・蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし。九重の御殿の上をはじめて、いひしらぬ民の住家まで、いかでわがもとにしげく葺かむと葺きわたしたる、なほいとめづらし。いつかは、ことをりにさはしたりし。

空のけしき、曇りわたりたるに、中宮などには縫殿より御薬玉とて色色の糸を組み下げてまゐらせられたれば、御帳立てたる母屋の柱に左右につけた。九月九日の菊をあやしき生絹の絹につつみてまゐらせたるを、おなじ柱に結びつけて、月ごろある薬玉に解きかへてぞ棄つめる、また薬玉は菊のをりまであるべきにやあらむ。されど、それはみな糸を引き取りてもの結ひなどしてしばしもなし。

御節供まあり、若き人人、菖蒲の腰ざし、物忌つけなどして、さまざまの唐衣、汗衫などをかききをり枝ども、長き根にむら濃の組してむすびつけたるなど、めづらしういふべきことならねど、いとをかし。さて、春ごとに咲くとて、櫻をよろしう思ふ人やはある。

つちありく童などの、ほどほどにつけていみじきわざしたりと思ひて、

「つじ」(辻)ではない。

(二〇)絶えず袂を見つめ、他人のものと見くらべなどし、なんともいへずすぐれてゐると思つてゐる大事な萬蒲を。

(二一)洞子にのつてふざけた小舎人童などにひつはられ、とられて泣くのもおもしろい。(六五頁参照)「小舎人童」は中少將のめし具す童をいふが、こゝはさうした類の男童を一般にいつたのであらう。

(二二)ふだんとちがつて。

(二三)鳴いて。二六段(一〇四頁参照。伊本・古本「名のりて」)

【二六】(一)あかめ。あかめもち。

(二)そのものとり立てていふほどのものではないが。武藤元信翁に、當時は寄生植物をすべて「やどりぎ」といふこと、朝咲く花をすべて朝顔と呼ぶのと同じであるといふ説がある。

(三)賀茂(十一月第三の酉の日)と石清水(三月第二の午の日)とに毎年ある。

いづれも神樂があつて、舞人は櫛を採つて舞ふ。

(四)神樂歌、「とりもの」の中の櫛の歌に「櫛葉にゆふ取りしでて誰が世にか神

つねに袂まぼり、人のにくらべなど、えもいはずと思ひたるなどを、そばへたる小舎人童などに引きはられて泣くもをかし。

紫の紙に棟の花、青き紙に萬蒲の葉、ほそく巻きて結び、また白き紙を根して引き結ひたるもをかし。いと長き根を文のなかに入れなどしたるを見るこちども鬨なり。

返事書かむといひあはせ、語らふどちは見せかはしなどするも、いとをかし。人のむすめ、やむごとなきところどころに御文などきこえたまふ人も、今日は心ことにぞなまめかしき。夕暮のほどにほととぎすの名のりしてわたるもすべていみじき。

三十八

花の木ならぬは 楓 桂 五葉。

たそぼの木、しななきこちすれど、花の木ども散りはてて、おしなべて縁になりたるなかに、ときもわかず濃き紅葉のつやめきて、思ひもかけぬ青葉のなかりさし出でたる、めづらし。

の御前にはいほそめけむ」と見える。

(五)他の木といつしよに生えてはぬない。「ら」は完了の助動詞「り」の未然形。

(六)ひどく茂つてある姿を思ひやるのもいやだけれど。

(七)「和泉なるしのだの森の楠の木の手杖におかれてものをこそ思へ」古今六帖二・夫木抄廿二)

(八)「この殿はむべも富みけりさき草の三つば四つばに殿造せり」(催馬樂)「三つば四つば」は三棟、四棟の意。「さき草」は、山百合をいふ。葦の先が三つ四つにもなり、花が咲く。

(九)「長澤五月雨合 水氣、孤檜終宵學三雨聲」(方干)(金子彦二郎博士説)

(一〇)檜に似た木。羅漢柏。深山陰濕の地に生ずる。常緑灌木。あすならう。

(一一)吉野の金峰山におまゐりして歸つた人などが持つて歸つて来るやうであるが、その枝ぶりはまことに手に觸れるのもいやな感じがするほどごつごつした感じがするけれども。

(一二)明日は檜の木になるとか、明日あひとかなど頼みにならぬ、困つた約束言であるよ。だれに頼みに思はせてゐるのかと思ふと、相手が聞きたくて、おもしろ

檀まのみ、さらにもいはず。そのものとなけれど、寄生木やどりぎといふ名、いとあはれなり。榊ささき、臨時りんじの祭まつりの御神樂みかぐらのをりなど、いとをかし。世に木どもこそあれ、神かみの御前みまへのものと生おひはじめけむも、とりわきてをかし。

楠くすのぎの木は、木立こだちおほかるるところにも、ことにまじらひ立てらず。おどろおどろしき思ひやりなどうとましきを、干枝ちえにわかれて戀する人のためにいはれたるこそ、たれかは數かずを知りていひはじめけむと思ふにをかしけれ。

檜ひのきの木、またけ近ぢかからぬものなれど、みつばよつばの殿とのづくりもをかし。五月さつきに雨の聲をまなぶらむもあはれなり。

楓かへの木の、ささやかなるに、萌もえ出でたる葉末はづらの赤みて、おなじかたにひろごりたる葉のさま、花も、いとものはかなげに、蟲かなどの乾かれたるに似てをかし。

あすはひの木、この世に近くも見えきこえず。御嶽みいだけにまうでて歸りたる人などの持もて來くめる、枝えだざしなどはいと手觸ふれにくげにあらくましけれど、たなにの心ありてあすはひの木とつけけむ。あぢきなきかねごとなりや。た

(一三)ひめつばさ。

(一四)常緑樹はどれでも葉が落ちないものであるのに、この椎の木にかぎつて葉がへしない例として歌に詠まれてゐるのもおもしろい。「はし鷹のとかへる山の椎葉の葉がへはすとも君はかへせじ」(拾遺集十九雜戀)。

(一五)櫪の一種。葉は狭く小さい。材木の色はやや白く、舟・車などを造る。

(一六)四位以上の黒色の袍を櫪の葉で染めたのだといふ。

(一七)あたり一面どこもかしこも雪が降つた景色と見まぢがへられるほどで。これは白樺といふ名のほか實物を知らない清女が、これを白い木と考へ、つぎの人麿の歌とあはせ考へて、このやうに誤り書いたのであらう。素盞鳴尊の御事云々は典籍未詳。人麿の歌は、萬葉集十冬雜歌あしひきの山路も知らず白樺の枝もとををに雪の降ればば、であらう。これは實景の歌であるが、人麿歌集の歌で、かならずしも人麿の作とはいへない。「とををに」は「たわわに」と同義で、枝もたわみ曲るほどにの意。

(一八)いいかげんには思へない。とほりいっぺんではすまされぬ。

(一九)わが世の春をほこつて。大事にされ

れたのめたるにかと思ふに、聞かまほしくをかし。

ねずもちの木、人なみなみになるべきにもあらねど、葉のいみじうこまかにちひさきがをかしきなり。

棟の木。山橘。山梨の木。椎の木、常磐木はいづれもあるを、それしも葉がへせぬためしにいはいれたるもをかし。

白樺といふものは、まいて深山木のなかにもいとけ遠くて、三位、二位の袍染むるをりばかりこそ、葉をだに人の見るめれば、をかしきこと、めでたきことにとり出づべくもあらねど、いづくともなく雪の降りおきたるに見まがへられ、素盞鳴尊出雲の國におはしける御ことを思ひて人麿がよみたる歌などを思ふに、いみじくあはれなり。をりにつけてもひとふしあはれとも、をかしとも聞きおきつるものは、草・木・鳥・蟲もおろかにこそおほえぬ。

ゆづり葉の、いみじうふさやかにつやめき、莖はいと赤くきらきらしく見えたるこそ、あやしけれど、をかし。なべての月には見えぬものの、師走のつごもりのみときめきて、亡き人の食物に敷くものにやとあはれなるに、

(二)齒は齡。新年齒固めのために猪や鹿の肉や押鮎、餅などを食べる。ゆづり葉は鏡餅をかざるに用ゐる。

(三)「旅人に宿かすがののゆづり葉のみぢせむ世や君を忘れむ」(古今六帖六)ゆづり葉はときは木で紅葉しない。

(三)「柏木に葉守りの神のましけるを知らでぞ折りし祟りたさるな」(大和物語上。後撰集十六雜に枇杷左大臣仲平として初句「楡の葉に」とある)冬になつても落葉しないから葉守の神がいますといつた。狭衣三にも同じやうな用例がある。

(三)衛府の異名を柏木といふ。

(三)すぐれた姿はもたないけれども。

【三九】(一)鸚鵡は西域の靈鳥といふ。

(二)人間のしやべることをまねるといふことである。「らむ」は疑惑的な推量をあらはす助動詞で、直接経験しないこと。ものについで推量する場合にも用ゐる。この場合、清女は「鸚鵡」を實際に見てゐないので、傳聞の助動詞的につかつたのである。以下「山鳥」のなども同じ。(三)袖中抄十二、奥義抄五、無名抄などに説がある。萬葉集十四に「山鳥のをろのはつ尾に鏡かけとなふべみこそ汝によそりけめ」と見え、事文類聚後集に鸚鵡として傳説話が見える。

また齡を延ぶる齒固の具にももてつかひためるは。いかなる世にか「紅葉せむ世や」といひたるもたのものし。

柏木、いとをかし。葉守の神のいますらむもかしこし。兵衛の督・佐・尉などいふもをかし。

姿なけれど、櫻櫛の木、唐めきて、わるき家のものとは見えす。

三十九

鳥は ことどころのものなれど、鸚鵡、いとあはれなり。人のいふらむ

ことをまねぶらむよ。ほととぎす。水鶏。鳴。都鳥。雛。ひたき。

山鳥、友を戀ひて、鏡を見すればなくさむらむ、心わかう、いとあはれ

なり。谷へだてたるほどなど、心苦し。

鶴は、いとこちたきさまなれど、鳴く聲の雲居まできこゆる、いとめで

たし。頭赤き雀。斑鳩の雄鳥。たくみ鳥。

鷺は、いとみめも見苦し。まなこゐなども、うたてよろづになつかしか

らねど、「ゆるぎの森にひとりは寝し」と争ふらむ、をかし。水鳥、鴉、

(四)心をさなく、世馴れてゐないのがまことにいじらしい。

(五)晝は雌雉同居、夜は谷を隔ててゐるといはれる。「あしひきの山鳥こそは峰

むかひにつまどひすとへ……」(萬葉集八家持)など詠まれてゐ、奥華抄にも詠が見える。「あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかもねむ」(拾遺集 戀入塵)

(六)まことにぎよぎようしい姿だけれど、その鳴く聲が天まで聞えるのは、ほと

んどにすばらしい。詩經「鶴鳴九臯、聲聞于天」九臯は曲折し深く入り込んだ沼。鶴は君子に喩へ、聲は名聲をいふ。

(七)みそささい。

(八)日つきなどもいやで、いつたいに魅力のない鳥だが。

(九)「高島やゆるぎの森の鶯すらもひとり」は寝じと争ふものを(古今六帖二)

(一〇)雌雄たがいにかはりあつて、羽の上におくつめた霜をはらつてやるさうだが、そのときのことなど思ひやると。「羽の上の霜うち拂ふ人もなし鶯鷺のひとり寝けさぞかなしき」(古今六帖三)

(一一)その鳴き聲をはじめとして姿かたちもあれほど上品ではいらしいのに宮中で鳴かないのがまことによるしくない。

(一二)十年ほど宮仕をして聞いてゐたが、

いとあはれなり。かたみに居かはりて、羽の上の霜はらふらむほどなど。千鳥、いとをかし。

鶯は、文などにもめでたきものに作り、聲よりはじめてさまかたちもさばかりあてにうつくしきほどよりは、九重のうちに鳴かぬぞいとわろき。

人の「さなむある」といひしを請「さしもあらじ」と思ひしに、十年ばかりさぶらひて聞きしに、まことにさらに昔せざりき。さるは、竹近き紅梅

もいとよくかよひぬべきたよりなりかし。まかでて聞けば、あやしき家の見どころもなき梅の木などには、かしがましきまでぞ鳴く。夜鳴かぬも寝

ぎたなきこちすれども、いまはいかがせむ。夏秋の末まで老聲に鳴きて、「むしくひ」など、ようもあらぬ者は名をつけかへていふぞ、くちをし

すしきこちする。それもただ雀などのやうにつねにある鳥ならば、さもおぼゆまじ。春鳴くゆゑこそはあらめ。「年たちかへる」などをかしきことに、歌にも文にも作るなるは。なほ春のうちならましかば、いかにをかしからまし。人をも、人づなう、世のおぼえあなづらはしうなりそめにたるをばそしりやはする。鶯・鳥などのうへは見入れ、聞き入れなどする人、

その人のことばどほり全然鳴かなかつた。そのくせ、そこは。

(三)退出して聞くと、賤しい家のたいしたこともない梅の木などには。

(四)「くすしき」は底本「すしき」とあり、その他の諸本も「く」一字分空白になつてある。(内本「すこき」とある)形容詞「くす(奇)し」は験のありさうな、勿體ぶつた、不思議だの義であるが、ここはあんまりきまじめていやなの意。

(五)「あらたまの年たちかへる」などと、趣のあることとして、歌にも漢詩にも作るやうであるが。「あらたまの年たちかへるあしたより待たるるものは鶯の聲」(拾遺集一 素性)

(六)それにしても、やはり春のうちだけ鳴くのだつたらどんなにすばらしからう。人間でも同様で、人の数に入らず、世の人から、軽く思はれはじめた人に對しては、だれも悪目などはいつたりしない。(七)たとへば、鶯や鳥などのことをば注目したり、耳を立てて問題にしたりする人は絶對にないのである。だから、鶯はすばらしい完全無缺なものと定評になつてゐるから、その往生際ももつときれいだらうと思ふのに、こんな缺點があるから、こんな不満もおぼえるのである。

(八)京都市上京區紫野にあつた天台宗の

世になしかし。されば、いみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬこちするなり。

祭まつりのかへさ見るとて、雲林院うりん、知足院ちくよくなどの前に車を立てたれば、ほととぎすも忍しのばぬにやあらむ、鳴くに、いとようまねびに似せて、木高こだかき木どもの中にもろこ聲に鳴きたるこそさすがにをかしけれ。

ほととぎすは、なほさらにいふべきかたなし。いつしかしたりがほにもきこえたるに、卯うの花、花橘たちばななどに宿やどりをしてはたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり。

五月雨さみだれの短き夜に寝ねざめをして、いかで人よりさきに聞かむと待たれて、夜深くうち出でたる聲こゑのらうらうじう愛敬あやうづきたる、いみじう心あくがれ、せむかたなし。六月みなつきになりぬれば、音ねもせずなりぬる、すべすべていふもおろかなり。

夜鳴よるくもの、なにもなにもめでたし。ちごどものみぞさしもなき。

寺。

(一六)同じく、紫野にあつた。

(一七)底本など「しのいぬ」

(一八)驚のまね聲とほんとのほととぎすの聲とがいつしよになつて。ほととぎすは驚の巢で躰化し、育てられるといふことを詠みこんだ長歌が萬葉集九にある。

(一九)いつの間にやらわが世の夏をたたへて得意がほに鳴いてゐる。

(二〇)すこし隠れてゐるのも、にくらしいほどゆかしい風情である。「鳴く聲をえやは忍ばぬほととぎす咲く卯の花のかげに隠れて」(新古今集三夏 人麿「咲く」一本「はつ」)

(二一)巧者な、魅力のある聲を聞くと、どうにも心がおちつかず、なんともしやうがない。

(二二)老いのうたてさもなく、何から何まで、なんともいひやうもなくすばらしい。

(二三)上品で美しいもの。

(二四)薄紫色のあこめに白がさねの汗衫を着てゐるの。

(二五)鶯鳥の卵。諸説あるが「こ」は卵であらう。

(二六)甘藷。甘味料である。甘茶蔓の葉を煎つて甘味をとつた。

(二七)とてもかはいらしい児が。

三九一四一段

あてなるもの 薄色に白がさねの汗衫。かりのこ。削り氷にあまづら入
れて、新らしき 鏡 に入れたる。水晶の數珠。藤の花。梅の花に雪の降り
かかりたる。いみじううつくしきちこのいちごなど食ひたる。

四十一

蟲は 鈴蟲。ひぐらし。蝶。松蟲。きりぎりす。はたおり。われから。
ひを 蝨。螢。

衰蟲、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似てこれもおそろし
き心あらむとて、親のあやしき衣引き着せて、「いま秋風吹かむをりぞ來
むとする。待てよ」といひおきて、逃げて往にけるも知らず、風の音を聞
き知りて、八月ばかりになれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く、
いみじうあはれなり。

ぬかづき蟲、またあはれなり。さるここちに道心おこしてつきありくら
むよ。思ひかけず暗きところなどに、ほとめきありきたるこそをかしか
れ。

(三) いまのこほろぎ。

(四) 藻についてある小蟲。

(五) 蜻。かげろふ。

(六) 舞な。きたない。

(七) 鳴き聲と母を呼ぶ幼児の語を「ちち」と表現したのであらうか。現に岩手縣九戸郡大野村などでは母親をチチといふらしい。「ちち」は父、乳とも考へられる。

もし「乳」とみるならば、幼児語で「乳」を重ねたとみなければならぬ。なほ「まてよ」を「まてよ」と武藤元信翁は解してゐる。

(八) 叩頭蟲。米搗蟲。

(九) あんな小さい蟲の心にも信仰心をおこして、頭をさげ額突き廻ることである。

(一〇) ほとほとと音を立てて

(一一) もつとも、人間なみにとりあげてにくむべき相手などにできるほどの大きさではないが。

(一二) 列子湯問篇に「甘蠶古之善射者」とある。岸上懺二氏は古事記安寧天皇の條の蠶伊呂泥、蠶伊呂杵などを指摘された。

(一三) かはいの様子である。

(一四) 輕快この上なくて。

【四十二】(一) こもつてゐる、含んでゐるなどの意。

【四十三】(一) (似つかはしくないもの。

(二) 雪・月の白さは高貴であり、神聖であ

蠶こそ、にくきものうちにいれつべく、愛敬なきものはあれ。人人しうかたきなどにすべきもののおほきさにはあらねど、秋などただよろづのものにぬ、かほなどにぬれ足してゐるなどよ。人の名につきたる、いととまし。

夏蟲、いとをかしうらうたげなり。火近う取りよせて物語など見るに、冊子の上などに飛びありく、いとをかし。

蟻は、いとにくけれど、かろびいみじうて、水の上などをただあゆみにあゆみありくこそをかしけれ。

四十二

七月ばかりに、風いたう吹きて、雨などさわがしき日、おほかたいと涼しければ、扇もうち忘れたるに、汗の香すこしかかへたる細衣の薄きを、いとよく引き着て晝寝したるこそをかしけれ。

四十三

つて、下衆の家に似つかはしくない。

(三)「車にあひたる」の意であるが、豫期せずあふを「車のあふ」といふ。(橘純一氏説)

(四)黄牛。牛の中ではりつばなもの。

(五)妊娠して。

(六)椎の實をひろつて食べてゐるのは、童であれば似つかはしいが。「齒もなき女」の「女」は底本文のとほりであるが、「おんな」(嬬)であらう。

(七)左右の衛門佐は弓箭を帶するより、

「弓器負ひ」(鞞負ひ)ゆげひといふ。この「夜行」は、夜あるき、夜遊びのこと。狩衣姿もひどくへんである。

(八)五位の服の色である赤い袍は、ぎょうぎようしい。それだけに、女の局のあたりをうろうろしてゐると輕蔑したくなる。

(九)女の局にはいりこんで、香にしみてゐる几帳にかけてある袴など、實にくあひがあるい。「そらだきもの」は特定のものにたきしめるのでなしに、あたり一面にははせる薰物。

(一〇)源頼定。一品式部卿爲平親王の男。母は左大臣源高明のむすめ。長徳四年十月十五日權中將に任せられたが、もと彈正大弼であつた。

にげなきもの 下衆の家に雪の降りたる。また、月のさし入りたるも、

くちをし。月の明かきに屋形なき車のあひたる。また、さる車にあめ牛か

けたる。また老いたる女の腹高くてありく。若き男持ちたるだに見苦しき

に、こと人のもとへいきたるとて腹立つよ。

老いたる男の寝まどひたる。また、さやうに鬚がちなる者の椎つみたる。

齒もなき女の梅食ひて酸がりたる。

下衆の紅の袴着たる。このごろはそれのみぞあめる。

鞞負の佐の夜行姿。狩衣姿も、いとあやしげなり。人に怖ぢらるる袍

は、おどろおどろし。立ちさまよふも、見つけてあなづらはし。「嫌疑の

者やある」ととがむ。入りゐてそらだきものにしみたる几帳にうちかけた

る袴など、いみじうたつきなし。

かたちよき君達の、彈正の弼にておはする、いと見苦し。宮の中將など

のさもくちをしかりしかな。

四十四

【四十四】(一)廊下。側に女房などの住む局がある。

(二)氣焔をあげて(無遠慮に)しやべつてゐるをりに。

(三)しやがんで、「何々殿の」といつて行く者はよい。

(四)氣どつた様子をし、はづかしがつて「存じませぬ」といつたり、なんにもいはずに通る者は、とてもにくらしい。

【四十五】(一)女官名。

(二)服藝などきれいにしてゐるなら。

(三)少々の事にはづかしがらぬ、無遠慮なさまであるのも、まことに似つかはしく、見よい。

(四)顔のかはいらしい者を一人持つて、装束をその季節季節に應じてつくり。

(五)現代風な装束をさせてあるかせたいと思ふことである。

【四十六】(一)また、人に仕へる男子では、隨身がい。

(二)味が無い、おもしろくない。

(三)辨官などは、まことにすばらしい官だと思つたが。「辨」は左右大辨、中辨、少辨。太政官の重職。

(四)このころの辨官の髻は、四尺ほどであつたらしい。(關根正直博士説)

【四十七】(一)「職」は中宮職の略。中宮附きの

ほそ殿ほそどのに人あまたゐてやすからずものなどいふに、清きよげなる男をとこ、小舎人こしやわらひ童わらわなど、よき包つづみ、袋などに、衣きぬどもつつみて、指貫さしぬきのくくりなどぞ見えたる、弓ゆみ、矢や、楯たてなど持てありくに、清きよ「誰たがぞ」と問へば、ついで「なにがし殿どのの」とて行く者は、よし。けしきばみ、やさしがりて、「知らず」ともいひ、ものもいへども往いぬる者は、いみじうにくし。

四十五

主殿司しゅどのつかさこそなほをかきものはあれ。下女しもよんなの際きははさばかりうらやましきものはなし。よき人にもせさせまほしきわざなめり。若く、かたちよからむが、なりなどよくてあらむは、ましてよからむかし。すこし老いて、もの例れい知り、面おもなきさまなるも、いとつきづきしくめやすし。

主殿司しゅどのつかさのかほ愛あひ敬やうづきたらむ、一人持ひとりもたりて、装束さうぞくときにしたがひ、裳も、唐衣からぎぬなど、いまめかしくてありかせばやとこそおほゆれ。

四十六

役所。その曹司を、假の御所にしつらへたのである。中宮は長徳三年六月廿二日に職の御曹司に入られたが、この段は長徳四年三月のことと考へられる。

(三)藤原行成。長徳元年八月廿九日藏人頭、同二年四月廿四日權左中辨。

(四)内本と能本末流本の慶安刊本にだけ「辨内侍なり」とあるが、信ずべき諸本にはすべて「辨さふらひなり」または「辨さふら也」などと見える。「辨」は自稱でなければ、何人が未詳。

(五)「大辨が見えても逃げて行つてはいけないよ」といまいつてゐるところです。

(六)この頭辨行成卿は、非常にすぐれてすばらしい方だと見えたり評判されたりもせず、風流なことなど特に人目に立つことはなく、ただありのままの平凡な人のやうであるのを、人人はさうとばかり心得てゐるが、わたくしはやはり奥ゆかしい心ざまを見知つてゐるから。「見えきこえて」は下の「ことはなう」に關聯して否定されてゐる。この「て」は完了の助動詞「つ」の中止形。

(七)とても、普通の人ではございませぬ。(八)晉の豫讓の言葉に「士は己を知る者のために死し、女は己をよるこぶ者のためにかはづくりす。いま智伯われを知る。

をのこは、また、隨身こそあめれ。いみじう美美しうてをかしき君達も、隨身なきは、いとしらじらし。辨などは、いとをかしきつかさに思ひたれど、下襲の裾短くて、隨身のなきぞいとわるきや。

四十七

職の御曹司の西面の立部のもとにて、頭の辨ものをいとひさしういひ立ちたまへれば、さし出でて、清「それはたれぞ」といへば 頭辨「辨さふらふなり」とのたまふ。清「なにか、さも語らひたまふ。大辨見えば、うち捨て奉りてむものを」といへば、いみじう笑ひて、頭辨「たれかかかることをさへいひ知らせけむ。『それさなせそ』と語らふなり」とのたまふ。いみじう見えきこえて、をかしきすぢなど立てたることはなう、ただありなるやうなるを、みな人さのみ知りたるに、なほ奥深き心ざまを見知りたれば、清「おしなべたらず」など、御前にも啓し、またさ知ろしめしたるを、つねに 頭辨「女は己をよるこぶもののためにかほづくりす。士は己を知る者のために死ぬ」となむいひたる」といひあはせたまひつつ、よう

われかならず智伯のために離れにむいて死せん」(史記 刺客列傳)とあるのを引用した。

(九)わたくしに幾度となく口約束をなさつて、よくわたくしの心を理解してゐて下さつた。

(一〇)一緩降り遠江のあと川柳刈れれども
 またも生ふちふあと川柳 (萬葉集七旋頭歌)と同類の歌によつたものと思はれる。「刈れ」は「離(か)れ」に通ずる。邪魔がはひつても二人の仲は離れない。

(一一)この君行成卿はかたい人でなんだかおつきあひしにくい感じがするかたである。他の男性のやうに歌をうたつたり、はしやいだりなんかしないで、おもしろくないわ。「うたひ」は、諸本「かたひ」

(一二)みつともない人はいやだ。

(一三)頭辨は中宮になにか申しあげなさる時にも、最初口をきいたわたくしのあるところをたづね、わたくしが局におひてゐるときは呼び出したり、局に来ていつたりして。「局」は諸本「つね」

(一四)あなたの参内がおそくなるやうでしたら、宮様にわたくしが「かうかう申してをりました」と申させに使をやつておいて下さい。

(一五)さうしたことには他に適當な人がございませう。

(一六)さうも承知しないといった様子でい

知りたまへり。「遠江の濱柳」といひかはしてあるに、若き人人はただいひに見苦しきことどもなどつくろはずいふに、若女房「この君こそうたて見えにくけれ。こと人のやうに歌うたひ興じなどもせず、けすさまじ」などそしる。さらにこれかれにもいひなどもせず。

行成「まろは、目はたたざまにつき、眉は額さまに生ひあがり、鼻は横ざまなりとも、ただ口つき愛敬つき、頤の下・頸清げに、聲にくからざらむ人のみなむ思はしかるべき。とはいひながら、なほかほいとにくげならむ人は心憂し」とのみのたまへば、まして頤ほそう、愛敬おくれたる人などは、あいなくかたきにして、御前にさへぞあしざまに啓する。

ものなど啓せさせむとも、そのはじめいひそめてし人をたづね、下なるをも呼びのぼせ、局に来ていひ、里なるは文書きてもみづからもおはして、頭辨「おそくまあらば、『さなむ申したる』と申しにまらせよ」との

たまふ。清「それ、人のさぶらふらむ」などいひゆづれど、さしもうけひかずなどぞおはする。清「あるにしたがひ、定めず、なにごとともてなしたるをこそよきにすめれ」とうしろ見きこゆれど、頭辨「わがもとの心の

らつしやる。

- (七)なにごとでも九條師輔くわじゆうふ漢誠の「衣冠よりはじめ牛車馬におよぶまで、あるにしたがひてこれを用ひよ。美麗を求むることなかれ」(原漢文)といふやうな古人の詞のやうに「何事にもとらはれないのがよろしうございますよ」と御忠告申しあげるが、「これが、ぼくの生まれつきうまれつきの性格でね」とばかりおつしやつて。(八)心はなほらないものです。「過ちては則ち改むるにはばかることなかれ」(論語學而第一)
- (九)でも、わたくしはとてもへんな顔ですへんな顔から、以前あなたあなたが「そんな顔の特主は決して好きになれない」とおつしやつたので、おあひしなないのでございます。(一〇)わたしのことばのとほり、きらひになりさうだが、さうなつたら困るよ。では、顔を見せないでもいい。
- (一一)まれに、何かの拍子にあひさうな時でも、自分から顔をふさいで御覽にならないものも、
- (一二)男も下襲をつけずに、袍と指貫だけである宿直姿の人が多し。
- (一三)末詳。(一四)狭い廂の間。
- (一五)主上(一條天皇)と中宮様。
- (一六)起きるに起きられずあわてふためくのを。

本性ほんじやう」とのみのたまひて、「改あらたまらざるものは心なり」とのたまへば、清きよ「さて、『はばかりなし』とはなにをいふにか」とあやしがれば、笑ひつ、頭辨かぶま「なかよしなども人にいはる。かく語らふとならばなにか恥づる。見えなどもせよかし」とのたまふ。清きよ「いみじくにくげなれば、『さあらむ人をばえ思はじ』とのたまひしによりて、え見え奉らぬなり」といへば、頭辨かぶま「げにくくもぞなる。さらば、な見えそ」とて、おのづから見つべきをりも、おのれかほふたぎなどして見たまはぬも、まごころにそらごとしたまはざりけりと思ふに、三月やまひつごもりがたは、冬の直衣なほしの着きにくきにやあらむ、袍うわぎがちにてぞ、殿上の宿直姿もある。

つとめて、日さし出づるまで式部しきぶのおもとと小廂こせうに寝たるに、奥の遣戸やりどをあけさせたまひて、うへの御前おんまへ・宮の御前出おんまへででさせたまへば、起きおきもあへずまどふを、いみじく笑はせたまふ。唐衣からぎぬをただ汗衫あせみの上うへにうち着て、宿直物とくのひものもなにもうづもれながらある上うへにおはしまして、陣じんより出で入る者ども御覽らんす。殿上人の、つゆ知らでより來てものいふなどもあるを、主上すしやう「けしきな見せそ」とて、笑はせたまふ。

(二七)夜具もなにもまだかたづけかないでそれらにうづもれてゐるところへ、主上と中宮とがおいでになつて。

(二八)ここにゐるとの様子を知らせるな。

(二九)しばらくして、お二人は奥へお立ち歸りになる。

(三〇)なほも、主上と中宮のこりつばな御様子などを式部のおもとと話しあつてゐたところ。

(三一)几帳をかける棹の端を手といふ。

(三二)底本「まはりて」。通説「障りて」でひつかかつての意とみる。

(三三)藤原説孝。長徳四年七月十四日五位藏人。紫式部の夫宣孝の兄。橘則隆とする説(岩野祐吉氏)に従ふべきか。

(三四)他の事。ほかの言。

(三五)さうでない顔である。

(三六)しかし自分にはあちらをむいてゐたので、十分見られたの意を、「もろともに見たる人は」の「は」に含む。

(三七)思ひ残すことなく、十分に。

(三八)それにしてもどうして、一旦見まいとおつしやつておきながら、あんなにつくづくと……。

(三九)底本「かき」。なかなか見ることができな。能本「よき」とある。

(四〇)のぞき見して。

(四一)どこか他でもう一人見ることができ

さて、立たせたまふ。中宮「二人ながら、いざ」とおほせらるれば、

清「いま、かほなどつくろひたててこそ」とてまめらず。入らせたまひて後

も、なほめでたきことどもなどいひあはせてゐたる、南の遣戸のそばの几

帳の手のさし出でたるにさはりて、簾のすこしあきたるより黒みたるもの

の見ゆれば、説孝がゐたるなめりとして、見も入れで、なほことごとどもを

いふに、いとよく笑みたるかほのさし出でたるも、なほ説孝なめりとして見

やりたれば、あらぬかほなり。あさましと笑ひさわぎて、几帳引きなほし

かくるれば、頭の辨にぞおはしける。見え奉らじとしつるものをと、い

とくちをし。もろともに見たる人は、こなたにむきたればかほも見えず。

立ち出でて、頭辨「いみじくなごりなくも見つるかな」とのたまへば、

清「説孝と思ひ侍りつれば、あなづりてぞかし。なかは見じとのたまふ

に、さつくづくとは」といふに、頭辨「女は寝起きがほなむ、いとかたき」

といへば、ある人の局に行きてかいはみして、またも見やするとて來たり

つるなり。まだうへのおはしましつるをりからあるをば、知らざりけり」とて、それより後は局の簾うちかづきなどしたまふめりき。

るかも知れないと思つて。
〔四〕わたくしがここにゐたのを、あなたは知らなかつたのですね。「けり」は諸本「ける」

〔四〕わたくしの部屋の簾をくぐつて遠慮なくはいつたりなどなされた。

〔四六〕〔一〕紫駟(しむぢう)黒栗毛也(和名抄)とあるが、狩谷掖齋の箋註に赤栗毛と訓むべしと述べてある。

〔三〕白毛に黒または他の色のさし毛あるもの。

〔三〕いかにも木綿髪ともいつてよい。八雲御抄に「ゆふかみとは馬の髪の白きなり」とある。

〔四九〕(一)腹の下や足、尾の毛の筋などはそのまま白いのがいい。

【五十一】(一)上の方だけが黒くて、腹が眞白なのがよい。

四十八

馬は うま いと黒きが、ただいささか白きところなどある。紫むらさきの紋つきたる。蘆毛あしげ。薄紅梅うすこうばいの毛にて、髪・尾おしなどいと白き。げに「ゆふかみ」ともいひつべし。

黒きが、足四つ白きも、いとをかし。

四十九

牛は うし 額ひたひはいとちひさく白みたるが、腹はらの下・足あし、尾おしの筋などはやがて白き。

五十

猫は ねこ 上うへのかぎり黒くて、腹いと白き。

五十一

【五十一】(一)藏人所の雑色にかぎらず、諸家の召しつれる身分の低い従者をいふ。
(二)痩せてゐるやうな低の者がよい。ひどくふとつてゐるのは、ねむたさうに見える。

【五十二】(一)髪がきはめてきちんとしてゐて亂れず、髪の毛の筋がきれいにさばけてゐてしかもすこしつやのある者が、聲がきれいで、かしまつてものをいつてゐるのは。三八頁(二五)参照。

(二)愛すべく、魅力がある。

【五十三】(一)體格がりつばで大きく、髪の毛もあらく男性的で、顔が赤ら顔で。

(二)氣がききさうな、ものの用に立ち得るやうなのがよい。

【五十四】(一)當直の侍臣や瀧口を、毎夜亥の二刻(午後十時半)より點呼するのを名對面・宿直申・名調などといふ。「殿上の」

はそれが清涼殿で行はれるもの。
(二)君の御前に藏人などが伺候してゐる時は、そのままその人が問ひたづねる。

(三)どやどやと參上して來るのを。
(四)底本とその系統諸本は「車おり」内本「車おもて」

(五)耳をすまして聴くをりに。「となふ」は調へる。大鏡に「心をとなへてきこしめせ」(後一條帝紀)とある。

(六)例のやうに、急に胸がどきつくものである。

雑色・隨身は すこし瘦せてほそやかなるぞよき。

男は なほ若きほどはさるかたなるぞよき。いたく肥えたるはいねぶたからむと見ゆ。

五十二

小舎人童 ちひさくて髪いとうるはしきが、筋さはらかにすこし色なる

が、聲をかしうて、かしまりてものなどいひたるぞ、らうらうじき。

五十三

牛飼は 大きにて、髪あららかなるが、かほ赤みてかどかしげなる。

五十四

殿上の名對面こそなほをかしけれ。御前に人さぶらふをりは、やがて問

ふもをかし。足音どもしてくづれ出づるを、上の御局の東おもてにて耳をとなへて聴くに、知る人の名のあるは、ふと例の胸つふるらむかし。ま

(七)平常はゐるといふこともめつたに聞かせない人などの聲をこのをりに聞いた時、どんな気がするものであらう。
(八)女房たちが、「あの人の名のりは上手だわ」とか「まづい」とか「聞き苦しい」などと評判するのもおもしろい。

(九)名對面も終つたやうだと。

(一〇)弓弦を鳴らし、沓の音がし、ざわざわと音を立てて、出て来ると。

(一一)ごぼごぼと踏み足音をさせて。

(一二)侍臣、瀧口など不參の時は、「さぶらはわは」は底本「けねは」

(一三)源方弘(左馬權頭時明の子、伯父前和泉守致明の養子となる。藏人となり、阿波守に至る)は、瀧口どもの申告を聞かないといふので、君達が注意して、「名對面つかうまつらぬ時は、その事由を藏人が聞くべきである」と教へたところ、自分の不注意を棚にあげて、彼はひどく腹を立て、瀧口を叱り處罰しようとしたので。「聞かず」底本系統諸本「すかず」(一四)後涼殿の西の廂にある。朝夕の御膳などを供する所である。
(一五)同情して。底本をはじめこの系統諸本「いとをかしかりて」
(一六)「やあ、これは、わたくしの沓ですよ」と、正直に名のり出て、いつそうさわがれる。

た、ありともよく聞かせぬ人などこのをりに聞きつけたるは、いかが思ふらむ。女房「名のりよし」女房「あし」女房「聞きにくし」など定むるもをかし。

果てぬなりと聞くほどに、瀧口の弓鳴らし、沓の音し、そそめき出づると、藏人のいみじく高く踏みこぼめかして、丑寅の隅の勾欄に高膝まづきといふるすまひに、御前のかたにむかひて、うしろざまに「たれたれか侍」と問ふこそをかしけれ。高くほそく名のり、また人人さぶらはねば、名對面つかうまつらぬよし奏するも、藏人「いかに」と問へば、障ることども奏するに、さ聞きて歸るを、方弘聞かずとて、君達の教へたまひければ、いみじう腹立ち叱りて、勘へて、また瀧口にさへ笑はる。
御厨子所の御膳棚に沓おきていひののしらるるを、いとほしがりて、「誰が沓にかあらむ、え知らず」と主殿司、人人などのいひけるを、方弘「や、方弘がきたなきものぞ」とて、いとどさわがる。

五十五

- 【五十五】(一)わかくてかなりな身分の男性が身分いやしい女の名をなれなくしくいつてあるのはどうもよくない。知つてゐながら、「なんだつけた(などといつて)名の一部をば思ひ出さないでいふのはいい。」片文字は「をかし」丙本以外にない。
- (二)底本はじめ諸本「つかへ所」
- (三)夜などはさう曖昧にいふのもわるいであらうが、宮中の主殿司や主殿司のゐる禁中ではない普通の所などでは侍所(大臣家などに置かれた侍の詰所)などにある者をつれて來ても呼ばせればいい
- (四)自分自身で呼ぶと、だれの聲だかはずきりわかるのに。「に」どめの例。七三・一四四頁参照。
- (五)最下級の女や召使の少女などを呼ぶときは、自身で呼んでもよい。
- 【五十六】(一)國司などは、若くなく相當の年配の者でも肥えてゐるのがよい。
- (二)粗末な弓のやうなもの、棒か杖のやうなものを振りあげて遊んでゐるのは、ほんとにかはらしい。
- (三)底本など「見まくほしくこそあれ」
- (四)車に乗つたまま行くと、薫香のほひがとでもはつてくるのはまことにいいものだ。
- 【五十七】(一)身分の高い人のりつばな家の中門。

若くよろしき男をとこの、下衆女げすの名なよび馴なれていひたるこそにくけれ。知りながらも、なにとかや、片文字かたじはおぼえていふはをかし。

宮仕所みやつかへの局つばなによりて、夜よるなどぞあしかるべけれど、主殿司ちのちつか、さらぬただどころなどは、侍さむらひなどにある者を具ぐして來ても呼よばせよかし。乎やづから聲こゑもしるきに、はした者わたは、童わらわなどは、されどよし。

五十六

若わき人・ちごどもなどは 肥こえたる、よし。受領うりやうなど大人おとなだちぬるもふくらかなるぞよき。

ちごは あやしき弓ゆみ、しもとだちたるものなどささげて遊びたる、いとうつくし。車くるまなどどめて抱かかき入れて見みまほしくこそあれ。

また、さて行くいくに、たきもの香か、いみじうかかへたるこそいとをかしけれ。

五十七

中門は寢殿造の東西にある門、表門のつきにある門。いまの玄關のやうな場所。底本をばじめ諸本「の」がない。(一)能本に「きよげなるはし」とある。(二)蘇枋色の下簾の色つぎがたいへんきれいで。(三)車のながえを置く處。(四)束帯の時、右手に持ったもの。象牙または薄い板で、長さ約一尺二寸。底本など「さえ」

(六)隨身が背負ふ箭を入れる細長い壺形の器。平胡録に對する。

(七)御厨子。下婢。

(八)某様の御供のかたはおいででしさいますか。

【五十六】(一)和歌山縣牟婁郡。
(二)奈良縣山邊郡布留川の上流にあるが、法皇(花山院か)御幸の記事未詳。
(三)宮城縣宮城郡今市。
(四)世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵を今日は瀬となる(古今集十八雜)

(三)京都市右京區嵐山の麓を流れる。上流は保津川、下流は掛川。

(三)和歌山縣牟婁郡音無の瀧のあつた川が、京都市東山區今熊野にも音無川があるが、吉野川の一流、榮山寺のが有名。
(四)底本「なな(みなイ)せかは」七瀬川は多くの瀬がある川の意の普通名詞。

よき家の中門あけて、檳榔毛の車の白く清げなるに、蘇枋の下簾にほひいときよらにて樹にうちかけたるこそめでたけれ。五位、六位などの下襲の裾挟みて、笏のいと白きに、扇うちおきなど行きちがひ、また装束し、壺胡録負ひたる隨身の出で入りしたる、いとつきづきし。厨女の清げなるが、さし出でて、「なにがし殿の人やさぶらふ」などいふもをかし。

五十八

瀧は音無の瀧。布留の瀧は、法皇の御覽じにおはしましけむこそめでたけれ。
那智の瀧は、熊野にありと聞くがあはれなるなり。轟の瀧はいかにかしがましくおそろしからむ。

五十九

川は飛鳥川。淵瀬も定めなく、いかならむとあはれなり。大堰川。音無川。七瀬川。

(五)「朱雀門前、二條南」(拾芥抄靈所部)「みみと」は「耳疾し」に聯想した。底本「みとせ」をミセケチにしてある。

(六)「こさかしく、さし出て」。

(七)「陸奥の玉星川のためさかき流れあふ瀬やあるこそ待て」(犬木抄)

(八)「大君の御笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ」(萬葉集七)「まがねぶく吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ」(古今集廿)「細谷川」は、もと細

い谷川の意の普通名詞。右の例歌もそれ。

(九)「貫川の瀬々の小菅のやはら手枕やはらかに寝る夜はなくて親さくる妻」(催馬樂)

(一〇)「澤田川袖つくばかり淺けれど恭仁の宮人高橋渡す」(催馬樂)

(一一)催馬樂の曲名なのでそれが聯想させるのであらう。催馬樂は、平安時代の歌謠。もと唐樂の曲名であつた。

(一二)「陸奥にありといふなる名取川なき名取りては苦しかりけり」(古今集十三戀三)

(一三)「狩り暮らし七夕つめに宿借らむ天のかはらにわれは來にけり」(伊勢物語・古今集九羈旅・古今六帖二)「天の川原」は大坂府北河内郡。

【六七】「醜く、ぶかつこうに」。

(二)男がむやみにしぶつて起きにくさう

川。
耳敏川、またもなにごとをさくじり聞きけむと、をかし。玉星川。細谷川。

いづぬき川、澤田川などは催馬樂などの思はするなるべし。名取川、いかなる名を取りたるならむと聞かまほし。吉野川。

天の川原、「たなばたつめに宿借らむ」と、業平がよみたるもをかし。

六十

曉に歸らむ人は 裝束などいみじううるはしう、烏帽子の緒もと、結ひかためずともありなむとこそおほゆれ。いみじくしどけなくかたくなしく、直衣、狩衣などゆがめたりとも、たれか見知りて笑ひそしりもせむ。人はなほ曉のありさまこそをかしうもあるべけれ。わりなくしぶしぶに起き難げなるを、強ひてそそのかし、女「明け過ぎぬ。あな、見苦し」などいいはれて、うち歎くけしきも、げにあかずもの憂くもあらむかしと見ゆ。指貫などもあながら着もやらず、まづさし寄りて、夜いひつることのなごり、女の耳にいひ入れて、なにわざすともなきやうなれど、帯などゆ

であるのを、わりやすめて、催促し、「すつかり明けてしまひました。まあ、みつともない」などといはれて。

(三)すわつたまままで着もしないで、まづ女のそばへ寄つて、昨夜來話したことのなごりを。

(四)そのまま二人でつれだつて行つて、今夜まであへないから晝の間のぢれつたさなどをいひながら送り送られて行く場合は、その男の後姿が見送られて、なごりもさぞをしいことであらう。

(五)男に、思ひ出す女性が別にあり、實にあつたりと記してばたばたときはいで。

(六)未詳。底本「かはらゆひ」ともよめる。能本系本「ひきゆひ」なほ「よると」は内本・能本・前田本「よろつ」

(七)底本系統本「かいすふる」髪を手でかきなでる。

【六十一】「あさんづの橋のとどろとどろと降りし雨の……」(催馬樂)(福井縣)。足羽郡淺水「あさみつ」といふ。

(三)飛騨の國にあるといふ。
(三)一津の國の難波の浦の一つ橋君を思へばあからめもせず。(古今六帖三)もと普通名詞。
(四)奈良縣吉野郡にあつたといふ。
(五)「上野の佐野の舟橋取り離し親はさくれどわはさかるがへ」(萬葉集十四)

ふやうなり。

格子^{かうし}おしあげ、端戸^{つぎと}あるところはやがてもろともにあてて行きて、晝のほどのおぼつかかなからむことなどいひ出でにすべり出でなむは、見送られてなごりもをかしかりなむ。思ひ出^{おも}どころありて、いときはやかに起きてひろめきたちて、指貫^{さしぬき}の腰こそそとかははゆひなほし、袍^{うへ}も、狩衣袖^{かりぎぬ}かいまくりてよろとさし入れ、帯いとしたりたかにゆひはてて、ついゐて、烏帽子^{ぼし}の緒^おぎと強げにゆひ入れて、かい添^そふる音^ねして、扇^{あふ}、疊紙^{たたふみ}など昨夜枕^{よるまくら}上におきしかど、おのづから引かれ散りにけるをもとむるに、暗^{くら}ければ、いかでかは見えむ、いづらいつらと、たたきわたし見出でて、扇^{あふ}ふたふたと使^{もち}ひ、懷紙^{ふとろがみ}さし入れて、男「まかりなむ」とばかりこそいふらめ。

六十一

橋は ^一あさむつ^の橋。長柄^{ながは}の橋。あまびこの橋。濱名^{はまな}の橋。一つ橋^{ひとつ}。うたたねの橋。佐野^{さの}の舟橋^{ふねはし}。堀江^{ほりえ}の橋。鵲^{かみさぎ}の橋。山すげの橋^をつ^の浮橋^{うきはし}。一筋渡^{いちすぢ}したる棚橋^{たなはし}。心せばけれど、名を聞くにをかしきなり。

舟橋は舟をならべてその上に板をわたして橋としたもの。

〔六〕小津（滋賀縣野洲郡）か、尾津（三重縣桑名郡）にあつたものか。

〔七〕「天なる一つ棚橋いかで行かむ若草の妻がり訪へば脚結すらくを」（萬葉集十一）「棚橋」は、板を棚のやうにかけ渡した假橋。

〔六十二〕（一）所在未詳。

（二）「東路のいさめの里は初秋の長夜をひとりあかすわが名ぞ」（古今六帖一）

「東路のいさめの里は初雁のながめをひとり明かすわが名ぞ」（同二）。

（三）（五）（七）所在未詳。

（四）「信濃なるいな郡と思ふにはたれかたのめの里といふらむ」（夫木抄）

（六）宮城縣にあるといふ。

〔六十三〕（一）賀茂別雷神の故事。（年中行事秘抄・袖中抄・公事根源）

（二）その名が面高で、傲慢にかまへてあるといふのがおもしるのである。「に」

どめの例。七三頁六行目参照。

（三）木、岩などにつく藁の一種。源氏物語、やどり木にも用例がある。

（四）未詳。名よりの戯れか。

（五）「身を觀ずれば岸の額に根を離れたる草のごとし」（羅維・和漢朗詠集下

無常、原漢文）

六十二

里は 逢坂の里。ながめの里。寢覺の里。人づまの里。たのめの里。夕日の里。

つまどりの里、人に取られたるにやあらむ、わがまうけたるにやあらむとをかし。伏見の里。あさがほの里。

六十三

草は 菅蒲。菰。蕤。いとをかし。神代よりしてさる挿頭となりけむ、いみじうめでたし。ものさまも、いとをかし。澤瀉は、名のをかしきなり。心あがりしたらむと思ふに。

三稜草。蛇床子。苔。雪間の若草。こだに。酢漿。綾の紋にてあるも、ことよりはをかし。

あやふ草は、岸の額に生ふらむもげにたのもしからず。いつまで草はまたはかなくあはれなり。岸の額よりもこれはくづれやすからむかし。まこ

(六) 嬖年草。萬年草。ほとけのつめ。

(七) しのお草の異名かといふ。「ことなし」を「事無し」に解する説はよくない。「事成し」の義である。

(八) べんべん草。春の七草の一。

(九) たけの低いちがや。

(一〇) たへ。譬喩。一一九頁(七)参照。

(一一) 未詳。

(一二) 獨葵。たちあふひ。太陽の光にしたがつてその方向をかへるのは、まるで人間のやうで草木といふべきでない性情だ。

(一三) 艾の異名。

(一四) つゆ草の古名。花の色が青色で、探つて衣にすりつけるとよく染まる。「つき草に衣はすらむ朝露にぬれてのちはうつろひぬとも」(古今集四秋上) 萬葉集には「ぬれてのちには」とある。

【六十四】(一)「からなでしこ」は石竹のこと。

(二) 牽牛子牽牛子のこと。萬葉集の朝顔は桔梗である。

(三) ぶかつこうで、おもしろくないけれども。

との石灰石灰などにはえ生せいひずやあらむと思ふぞわろき。

ことなし草は、思ふことを成すにやと思ふもをかし。忍草しのぶ、いとあはれ

なり。道芝、いとをかし。茅花つばなもをかし。蓬よもぎ、いみじうをかし。山菅すげ。日

かげ。山藍やまあはろ。潜木ひそけ縮。葛くわ。笹ささ。青つづら。薺なまこ。苗なまこ。浅茅あさか、いとをかし。

蓮葉はすは、よろづの草よりもすぐれてめでたし。妙法蓮華めうほふれんげのたとひにも、花

は佛にたてまつり、實は數珠ずすずに貫つらぬき、念佛して往生極樂わうじやくらくの縁えんとすればよ。

また花なきころ、緑みどりなる池の水に紅くわなほに咲きたるも、いとをかし。翠翁紅すいおうこう

とも詩に作りたるにこそ。

唐葵たうあひろ、日の影かげにしたがひて傾かたむくこそ草木くさきといふべくもあらぬ心なれ。さ

しも草くさ。八重やむら蓀そ。つきぐさ、うつろひやすなるこそうたてあれ。

六十四

草の花はなでしこ。唐たうのは、さらなり、大和やまとのも、いとめでたし。を

みなへし。桔梗ききやう。朝顔あそがほ。刈萱かりかや。菊きき。壺菫つぼすみれ。

龍膽りんだうは枝えだざしなどもむつかしけれど、こと花はなどものみな霜しも枯かれたるに、

(四) 龍膽は紫色の花をつける。葉は笹に似てゐる。

(五) 人間と同列に批評するほどのもののみさまではないが。

(六) つゆ草(つき草)をいつたのか、雁來紅(葉鶏頭)をいつたのか未詳。清女が「かまつかの花」として耳にし目にしたのは前者と思はれる。「ことなし草」が忍ぶ草の一種か異名かであるとすれば「かまつかの花」と「つゆ草」とが再出してもさしつかへないであらう。名のおもしろさから書かれてゐるのである。

(七) 未詳。つゆ草を鴨跖草と書くからいつたのか。雁來紅にしても、雁來花ではない。

(八) がんひ。仙翁花の一種。

(九) 「ふしの花」よりの誤といふ説(殿村常久)もあるが、やはり藤であらう。

(一〇) さ牡鹿の立ち馴らす小野の秋萩に置ける白露われも消ぬべし(後撰集六秋 貫之)

(一一) なせまたさうへんてこな實を結んだ姿でこの世に出て來たのであらう。せめてほづきの實くらゐの大きさであればいいのに。

(一二) 繡線花。繡線菊。

(一三) とりどりの美しい色彩に。

いと^四はなやかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。

またわざととり立てて人めかすべくもあらぬさまなれど、かまつかの花、らうたげなり。名もうたてあなる。かりのくる花とぞ文字には書きたる。かにひの花、色は濃からねど、藤の花といとよく似て、春秋と咲くがをかきなり。

萩、いと色深う、枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれてなよなよとひろごりふしたる、さ牡鹿のわきて立ち馴らすらむも、心ことなり。八重山吹。

夕顔は花のかたちも朝顔に似て、いひつづけたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、實のありさまこそ、いとくちをしけれ。などさはた生ひ出でけむ。ぬかづきなどいふものやうにだにあれかし。されど、なほ夕顔といふ名ばかりはをかし。しもつけの花。葦の花。

これに薄を入れぬ、いみじうあやしと人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは薄こそあれ。穂先の蘇枋にいと濃きが、朝霧にぬれてうちなびきたるは、さばかりのものやはある。秋のはてぞいと見どころなき。色色

(二) 薄だけが冬の末まで懸先が眞白に亂れそけたのも知らないで昔の盛りを思ひ出してゐるかのやうに、風に吹かれなびいて、ひよろひよろと立つてゐる姿は、老人にきはめてよく似てゐる。それを人の身になぞらへる氣持があつて、さうしたいやな姿をかへつてあはれと感じ、情趣をおぼえる人もあることであらう。

【六五】(一) 萬葉集(二十卷)のこと。新撰萬葉集は菅原道真編(二卷)。

【六六】(一) 駒であらう。

【六七】(一) 氣がかりなもの、不安心なもの、心もとないもの。「おぼつかなし」は轉じて「待ち遠しい」「ちれつたい」などの意にも用ゐられる。

(二) 比叡山延曆寺では出家受戒後籠つて修行するものに十二年間下山を許さない。しかも女人禁制であつた。それだけにさそ氣がかりであつたらう。

(三) 顔がはつきり見えてはいけなからうといふので、火もともさないで、闇の中だがそのまま知らない人とならびすわつてゐるとき。

にみだれ咲きたりし花の形もなく散りたるに、冬の末まで頭のいと白くおほどれたるも知らず、むかし思ひ出でがほに風になびきてかひろぎ立てる、人にこそいみじう似たれ。よそふる心ありて、それをしもこそあはれと思ふべけれ。

六十五

集は 古萬葉。古今。

六十六

歌の題は 都葛。三稜草。こま。霰。

六十七

おぼつかなきもの 十二年の山ごもりの法師の女親。知らぬところに並
なるに行きたるに、「あらはにもぞある」とて火もともさで、さすがに並
みゐたる。

(四)新參の召使で、まだ氣心もわからぬ者に、たいせつな物をもたせてつかひにやつたところ、なかなか歸つて來ないとき。

(五)まだ物もいへない赤ん坊が身體をそらせて。

【六十六】(一)あまり相違がはなはだしくて譬へやうもないほどのもの。比較のしやうもないほどちがふもの。

(二)好きな人といやな人と。同じ人でも、好きだと思つてゐるときとさうでなくなつたときとは、ほんとに別人のやうに思はれる。「思はぬと思ふと二人くらぶれば同じ人とやいふべかりける」(古今六帖五)によつたのであらうか、後文の「まことに」の語はそれを證するやうでもある。

(三)とまつてゐて夜中ごろに寝ながらさわぐのが、落ちてあわてふためき、木から木へ飛びうつり、びつくりして起きたばかりのあわて聲で鳴いたのも、晝見る様子とちがつておもしろい。

【六十九】(一)人目をさけてあふところではなるといつても夏が情趣深いものである。

いま出で來たる者の心も知らぬに、やむごとなきもの持たせて人のもとにやりたるに、おそく歸る。ものもまだいはぬちごの反り覆り人にも抱かれず泣きたる。

六十八

たとしへなきもの 夏と冬と。夜と晝と。雨降る日と照る日と。人の笑ふと腹立つと。老いたると若きと。白きと黒きと。思ふ人とにくむ人と。おなじ人ながらも、心ざしあるをりとかはりたるをりは、まことにこと人とぞおほゆる。

火と水と。肥えたる人、瘦せたる人。髪長き人と短き人と。

夜烏どものゐて夜中ばかりにいねさわぐ。落ちまどひ、木傳ひて寝起きたる聲に鳴きたるこそ晝の日にたがひてをかしけれ。

六十九

しのびたるところにありては夏こそをかしけれ。いみじく短き夜の明け

(二)全然寝ないで終つた。

(三)前夜からどこもかしこもそのまますて開け放つたままにしているから。

(四)一晚中語りあかしたのに、まだもうすこしいひたいことがあるので、おたがひに受け答へなどしてゐると、二人がすわつてゐるすぐ近くの頭の上から、鳥が高い聲で鳴いてゆくのは、見すかされたやうでひどくあらはな氣持がしておもしろい。

(五)夜具にうづもれて寝てゐて聞いてゐると、鐘の音がまるで何かの底で鳴るやうに聞えるが、まことにおもしろい。

【七七】(一)戀人として來たのはいふまでもない。ただ普通の交際でちよつと仲よくしてゐる人でも、またはそれほどないが、時々たまたま遊びに來などもする人などが、簾の内に女房どもが大勢ゐていろいろ話をしてゐる中にすわりこんで急に歸りさうでないのを。

(二)晋の玉質が石室山で、仙童の困甚を見て居る間に、斧の柄が朽ちてしまつたとの故事(述異記)により、長時間の過ぎることをいつたのである。

(三)まことにむしやくしやするやうなので、長いあくびをして、こつそり聞えないやうにと思つていふやうだけれど。

ぬるに、つゆ寝ずなりぬ。やがてよるつのとこあけながらあれば、涼しく見えわたされたる。なほいますすこしいふべきことあれば、かたみにいらへなどするほどに、ただゐたる上より、鳥の高く鳴きて行くこそ總證なるこちしてをかしけれ。

また、冬の夜いみじう寒きに、うづもれ臥して聞くに、鐘の音のただもの底なるやうに聞ゆる、いとをかし。鳥の聲もはじめは羽のうちに鳴くが、口を籠めながら鳴けば、いみじうもの深く遠きが、明くるままに近く聞ゆるもをかし。

七十

懸想人にて來たるはいふべきにもあらず、ただうち語らふも、またさしもあらねど、おのづから來などもする人の、簾のうちに人人あまたありてものなどいふに、ゐ入りてとみも歸りげもなきを、供なる男童など、とかくさしのぞき、けしき見るに、「斧の柄も朽ちぬべきなめり」と、いとむつかしかめれば、ながやかにうちあくびで、みそかと思ひていふら

(四) ああ、つらい。いやだ、苦しいことだわい。

(五) おもしろくない。氣にくはぬことである。

(六) なんとも思はないであらうが、この前にすわつてゐる主人のことをいままでも風雅な人だと思ひ、さう噂してゐたこともすつかり興ざめてしまふやうに思はれる。

(七) そのやうにはつきりと表にあらはしてはよいではないで。

(八) ああ。ため息の形容。底本など「ある」
(九) 「心には下行く水のわきかへりいほで思ふぞいふにまされる」(古今六帖五いほで思ふ)

(一〇) 竹、板などの間をすかして作つた垣。

(一一) 「きつと雨が降るだらう」などとぶつぶついふのも、まことににくらしい。

(一二) 供の者はたくさんゐるであらうが、その中でも、氣だてを見てつれてあるきたいものだ。「心ばへ」底本「心さへ」

【主】(一) めつたにないもの。

(二) かわいがられるお嫁さん。

(三) 世をわたり、年を経てゆく間、全然非難すべき點のない人。

(四) おたしがひに相手を尊敬し、遠慮しあひ、すこしの油断もなく心づかひしてゐると思はれる人が、最後まで己が本性を

めど、供「あな、わびし。煩惱苦惱かな。夜は夜中になりぬらむかし」といひたる、いみじう心づきなし。かのいふ者は、ともかくもおぼえず、このあたる人こそをかしと見えきこえつることも失するやうにおぼゆれ。また、さいと色に出でてはえいはず、「あな」と高やかにうちひうめきたるも、「下行く水の」といとほし。

立部、透垣などのもとにて、供「雨降りぬべし」などきこえこつも、いとにくし。いとよき人の御供人などはさもなし。君達などのほどはよろし。それより下れる際はみなさやうにぞある。あまたあらむなにも、心ばへ見てぞ率てありかまほしき。

七十一

一 ありがたきもの 男にほめらるる婿。また、姑に思はるる嫁の君。毛のよく抜くる銀の毛抜。主そしらぬ従者。

つゆの癖なき、かたち・心・ありさますぐれ、世に経るほど、いささかのきずなき。おなじところに住む人の、かたみに恥ぢかはし、いささかの

相手に見られないで終る例はほとんどない。

(五)物語や歌の集などを書き寫す時に、もとの本に墨をつけたいこと(はなかなかできないことである)。

(六)男と女との間だけとはいはない。女同士も約束をかたく深く仲よくしてゐる人が、いつまでも仲がよいといふ人はめつたにない。「難し」は「あり難し」の義。

【七三】(一)内裏の女房の局であるほそ殿はとてもない。廊の一方を、女房の局としたものをも「ほそ殿」と呼んだ。

(二)薮の上半分をいふ。

(三)底本「ふき入て」この當時の語法により「吹き入れて」とよむべきである。従来「吹き入りて」とよんでゐるのは誤である。

(四)油断なく注意される。

(五)指先だけでしづかにたたくのが、あああの人だなと、ふつと思はれるのは。

(六)中から答へる様子もないので、外に立つてゐる男が、内ではもう寝こんでしまつたのかなと思ふであらうか、さう思はれるのも残念なので、すこし身體を動かして起きてゐることを知らせる衣ずれのけはひをきざせると、まだ起きてゐたやうだと外の男は思ふことであらうよ。「さななり」は九八頁(二)参照。

際なく用意したりと思ふが、つひに見えぬこそ難けれ。

物語・集など書き寫すに、本に墨つけぬ。よき冊子などは、いみじう心して書けど、かならずこそきたなげになるめれ。

男女をばいはじ、女どもも契り深くて語らふ人の末までなかよき人難し。

七十二

内裏の局、ほそ殿、いみじうをかし。上の薮あげたれば、風いみじう吹き入れて、夏もいみじう涼し。冬は雪、霰などの風にたくひて降り入るも、いとをかし。せばくて、童などののぼりぬるぞあしけれども、屏風のうちに隠しすゑたれば、ことどころの局のやうに聲高くえ笑ひなどもせで、いとよし。

晝などもたゆまず心づかひせらる。夜はまいてうちとくべきやうもなきがいとをかしきなり。脊の音夜一夜聞ゆるが、とどまりて、ただおよび一つしてたたくが、その人なりとふと聞ゆるこそをかしけれ。

いとひさしうたたくに音もせねば、寝入りたりと思ふらむとねたくて、

(七) 静かに立てる火箸の音もあたりを氣にしておくなど、聲を立てるが、男がいよいよひどくたけなき、聲を立てていふと。

(八) 「かけなきがら」とよめば、「ものかけに隠れてゐざりよつて」の意であるが、「かけなきがら」とよみ、「懸け金をかけたままるざりよつて」と解する説(清水濱臣)もある。

(九) 「つま」は底本など「つるす」、内本「つますこし」。

(一〇) 「たえず着たる」「たえず來たる」「絶え、透きたる」「絶え、好きたる」なども解せられるが、「たえずき」(絶え透き)ではなからうか。源氏(紅葉賀)の「とかくひこしるふほどに、ほころびはほろほるとたえぬ」を、石川雅望は「鬨腋のごとくはじめよりわざとぬひのこしたる所をほころびといへるなり。それがぬひてありし所までもほころびぬるをたえたるとはいへるなり」と説いてゐる。

(一一) 得意氣に、うけばつて、なにごとく承知顔に。なほこの句は、下の「え立たせ」の「で」によつて否定される。つまなり、「うけばつて……」をばよせては立たないで」の意。「え立たせ」は底本など「らたたせ」。

(一二) 帳の音便といふ説もあるが、扉の義であらう。

すこしうちみじろぐ衣きぬのけはひ、さななりと思ふらむかし。冬は火桶かたどにやをら立つる箸はしの音ねもしのびたりと聞ゆるを、いとどたたきはらへば、聲にてもいふに、かけながらすべりよりて聞くとときもあり。

また、あまたの聲して詩誦しじ、歌などうたふには、たたかねど、まづあけたれば、ここへとしも思はざりける人も立ちどまりぬ。

入いるべきやうもなくして立ち明あかすもなほをかしげなるに、几帳かたどの帷かたどいとあざやかに、裾すそのつまうちかさなりて見えたるに、直衣なほしのうしろにほころびたえすきたる君達、六位の藏人の青色あおなど着きて、うけばりて遣戸やりどのものなどにそばよせてはえ立たせ、へいのかたにうしろおして、袖うちあはせて立ちたたるこそをかしけれ。

また、指貫さしぬきいと濃こう、直衣なほしあざやかにて、色色の衣きぬどもこぼし出でたる人の、簾すをおし入れてなからいりたるやうなるも、外とより見るはいとをかしからむを、清きよげなる硯すずり引きよせて文書き、もしは鏡かがみ乞かひて見なほしなどしたるは、すべてをかし。

三尺の几帳いせうを立てたるに、帽額ぼうがくのしもただすこしぞある、外とに立てる人

(三)「たる」底本はじめ諸本「なる」
(四)「いり」底本はじめ諸本「いひ」
(五)「帽額」底本はじめ諸本「もと」
(六)巻きあげた帽額の簾の下と几帳の上とのすいたところが、ちやうど内外の男女の顔のあたりにあつて。
【七十三】十一月の賀茂の臨時の祭の試樂のこと。祭の前三十日に舞人と祭使を選んで練習するをいふ。

(二)松明(たいまつ「焚松」)を高くさしあげて額はえりの中にひっこめて行くので、松明の先端をば周圍の物にぶつけさうであるが。「なるに」は底本をはじめ諸本「なる」と(三)おもしろく音楽を奏し。「遊び」底本そひ。

(四)禮装、束帯をいふ。
(五)自分の主君の君達のために追つてゐるのも、奏樂の音にまじつて。

(六)夜が明けたが、そのまま、まだ舞人、樂人の歸りを待つてゐると。

(七)「あらたに生ふる」とみ草の花手に摘みれて宮へ参らむなかつたえ(古本風俗歌)「あらたに」は「新に」ではなく「荒田に」と解する。「とみ草」は稻のことといふ。「摘みれ」は「摘み入れ」の約。大鏡に源雅信がこの歌の節をかへてうたつて人々を感じさせた記事がある。この歌詞は後世も田植の神事に用ゐられた。

とうちにゐたる人ともものいふが、かほのもとにいとよくあたりたるこそをかしけれ。たけの高く、短からむ人などやいかあらむ。なほ世のつねの人はさのみあらむ。

七十三

まいて、臨時の祭の調樂などは、いみじうをかし。主殿寮の官人長き松を高くともして、頸は引き入れて行けば、さきはさしつけつばかりなるに、をかしう遊び、笛吹き立てて、心ことに思ひたるに、君達日の装束して立ちどまり、ものいひなどするに、供の隨身どもの前驅をしのびやかに短う、おが君達の料におひたるも、遊びにまじりてつねに似ずをかしう聞ゆ。なほ明けながら歸るを待つに、君達の聲にて、「荒田に生ふるとみ草の花」とうたひたる、このたびはいますこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらむ、すくずくしうさしあゆみて往ぬるもあれば、笑ふを、女房「しやしや。『など、さ夜を捨てていそぎたまふ』とあり」などいへば、こころなどやあしからむ、倒れぬばかり、もし人などや追ひて捕ふると見ゆるまで

まどひ出づるもあめり。

七十四

職の御曹司におはしますころ、木立などのはるかにものふり、屋のさまも高う、け遠けれど、すずろにをかしうおぼゆ。母屋は鬼ありとて、南へ隔て出だして、南の廂に御帳立てて、又廂に女房はさぶらふ。

近衛の御門より左衛門の陣にまありたまふ上達部の前驅ども、殿上人のは短ければ、大前驅・小前驅とつけて聞きさわく。あまたたびになれば、

その聲どももみな聞き知りて、女房「それぞ」、女房「かれぞ」などいふに、また 他の女房「あらず」などいへば、入して見せなどするに、いひあてたるは、女房「さればこそ」などいふもをかし。

ありあけのいみじう霧りわたりたる庭に下りてありくをきこしめして、御前にも起きさせたまへり。うへなる人人のかぎりは出でぬ、下りなどして遊ぶに、やうやう明けもてゆく。

清「左衛門の陣にまかり見む」とて行けば、女房「われも」「われも」と

- (八)なんといふ眞面目一方の風流氣のない人であらうか、見向きもせず、そつけなくさつさと退出する人もあるので、みなが笑ふが、その女房の中の一人が、「しばらくお待ちなさい。『なせまあさう惜しい夜を捨てあわただしくお歸りになるのですか』といつてゐる人がありますよ」などと制止するが。「あるなどいへど」は底本など諸本「ありなどいへば」
- 【七四】(一)中宮職の役所で同時に中宮の假の御殿一三二頁【四七】(一)参照。
- (二)非常に古い時代がついてをり。「はるかに」は、ここは時間的な意義に採りたい。
- (三)化生のもの。綴。
- (四)廂と簀子との間にある。孫廂。
- (五)陽明門から建春門へである。
- (六)幾度も幾度もになると、その聲がだれの聲であるかをみな聞き知つて、「あれは、だれだれ様」「これはなにに様」などいふが。「あまたたび」底本あまたひ。
- (七)さうぢやない。
- (八)だからいはないことぢやない。
- (九)おそばに仕へてゐる人はすべて簀子(縁)に出てすわり、あるは庭におりたりして遊ぶが、やうやく夜も次第に明けてゆく。

(一〇)「おひつきて」は内本以外「とひつきて」

(一一)「池冷うして水に三伏の夏なく、松高うして風に一聲の秋あり」(和漢朗詠集上納涼 源英明)もと「夏日閑に暑を避く」と題した詩。原漢文)

(一二)「月を見たまひけりな」と、とも考へられる。その場合「な」は詠歌の助詞である。

(一三)特別に急ぐ用事のない時は、かならずこの御殿に参上なされる。

【七十五】(一)おもしろくない、こまつたもの。この段には、みづから招いたことながら期待に反したり、意外であつたり、とりえがなかつたりして後悔してゐることととり収めてある。

(二)みつともないの。醜いとき。

【七十六】(一)得意満面なもの。元氣のあふれて自信たつぶりなもの。單に「氣持よきさうなもの」ではない。

(二)卯杖を奉る時の拍子とみる考(山岸徳平氏説)もあるが、「拍子」は底本とその系統諸本すべて「ほうし」とある。この段すべて人について述べてゐるから、従來の通説「法師」とみておく。

(三)神樂の指揮者。

おひつきて行くに、殿上人あまた聲して、「なにがし一聲秋」と誦じてまゐる音すれば、逃げ入り、ものなどいふ。「月を見たまひけり」などめて歌よむもあり。

夜も聾も、殿上人の絶ゆるをりなし。上達部までまゐりたまふに、おぼろげにいそぐことなきはかならずまゐりたまふ。

七十五

あぢきなきもの わざと思ひ立ちて宮仕に出で立ちたる人の、もの憂がり、うるさげに思ひたる。養子のかほにくげなる。しぶしぶに思ひたる人を強ひて婚取りて、思ふさまならずと歎く。

七十六

一 ここちよげなるもの 卯杖の法師。御神樂の人長。神樂の振幡とか持たる者。

【七七】(一)毎年十二月十九日より三日間、三世諸佛の名號を唱へて六根の罪障を穢悔消滅させる會式。「またの日」すなはち翌日は、通常二十二日になる。

(二)地獄變相を描いた屏風。御佛名會に立てられたのを、終つてから中宮の御殿に持つて來て御覽に供せられたのである。

(三)「絶對に見ますまい」といつて。底本「さらに見侍らて」

(四)氣味わるさにこへやに隠れてうつぶしになつてゐた。「こへや」は未詳。慶安刊本の「うへや」の本文により御座所近い女官の詰所とみるのが通説。能本はこのあたり「ゆゝしさにうつつぬ」とある。

(五)右大臣源重信の子、正暦元年少納言。

(六)大納言源時中の子。

(七)十三絃の琴。

(八)行成(當時左兵衛權佐)かとする通説よりも、笛にすぐれた平行義とみる説(岩野裕吉氏)に従ふべきであらう。

(九)雅樂に用ゐる、細竹十三管を環形に列べた笛。

(一〇)藤原伊周、中宮の御兄。正暦三年八月より同五年八月まで權大納言であつた。

(一一)「たちまち聞く水上琵琶の聲、主人は歸るを忘れ客は發せず、聲をたづねて聞

七十七

一 御佛名のまたの日、地獄繪の御屏風取りわたして宮に御覽せさせ奉らせたまふ。ゆゆしういみじきことかぎりなし。中宮「これ見よ。これ見よ」とおほせらるれど、清「さらに見侍らじ」とて、ゆゆしさにこへやにかくれふしぬ。

雨いたう降りてつれづれなりとて、殿上人上の御局に召して御遊あり。道方の少納言琵琶、いとめでたし。濟政筆の琴、行よし笛、經房の中將笙の笛などおもしろし。ひとわたり遊びて、琵琶ひきやみたるほどに、大納言殿、「琵琶、聲やんで物語せむとすること遅し」と誦じたまへりに、かくれふしたりしも起き出でて、清「なほ罪はおそろしけれど、ものめでたさはやむまじ」とて笑はる。

七十八

一 頭の中將のすずるなるそら言を聞きて、いみじういひおとし、人「頭中將

に問ふ、彈くは誰ぞと、琵琶の聲は停んで語らんと欲すること遅し。(白樂天、「琵琶行」の一節、原漢文)

(二)伊周のめでたきにも愛憎の妄執を起す佛罰はこはしけれども。(橋純一氏説)

【七六】(一)藤原齊信。正暦五年八月廿八日藏人頭。

(二)根據もない、事實無根の噂・評判。

(三)いひけなし。

(四)「どうしてあんな女を一人前だと思ひほめたりしたのだらう」などと殿上でひどくおつしやいます。

(五)それが眞實ならば、そんなにそしられてもしかたがないが、さうでないんだからまあいい。そのうちに正しいことがお耳にはいるでしょう。

(六)清涼殿の北廊西側にある戸か、またはその黒戸のある部屋をいふ。こは後者。

(七)通る時にも、わたくしの聲などがするをりは、袖で顔を隠して全然こちらを見ないで、とてもくんでいらつしやるから、わたくしはなんともいはないで、中將を見向きもしないですごすうちに。

(八)まさか、そんなこと……。『あらじ』は底本「あれし」

(九)下のわが局にゐ暮らして、夜參上したところ、宮様は夜の御殿に入られて、もうおやすみになつてゐた。

『なにしに人と思ひほめけむ』など、殿上にていみじうなむのたまふ』と

聞くにもはづかしけれど、清「まことならばこそあらめ、おのづから聞き

なほしたまひてむ」と笑ひてあるに、黒戸の前などわたるにも、聲などす

るをりは、袖をふたぎてつゆ見おこせず、いみじうにくみたまへば、とも

かうもいはず、見も入れて過すに、二月つごもりがた、いみじう雨降りて

つれづれなるに、御物忌にこもりて、人人「頭中將」さすがにさうざうしく

こそあれ、ものやいひやらまし』となむのたまふ』と人人語れど、清「よ

にあらじ」などいらへてあるに、日一日下に居暮らしてまありたれば、夜

のおとどに入らせたまひにけり。

長押の下に火近く取りよせて、さしつどひて扇をぞつく。女房「あな、

うれし。とくおはせよ」など見つけていへど、すさまじきこちして、な

にしにのぼりつらむとおぼゆ。炭櫃のもとにゐたれば、そこにまたあまた

ゐるものなどいふに、「なにがしさぶらふ」といとはなやかにいふ。清「あ

やし。いつの間に、なにごとのあるぞ」と問はすれば、主殿司なりけり。

主殿司「ただこことも人にづてならで申すべきことなむ」といへば、さし

(一〇)寄りあつまつて。「さしつどひて」は第一類本にない。

(一一)漢字の扇を示して旁わきをつけさせる遊戯あそびも、「つくく」を「つぐく」とよみ、旁を出して扇を續つづがす遊戯あそびだともいふ。

(一二)中宮様がいらつしやらないから、がつかりしておもしろくなく。

(一三)あろりのおそばにすわつてゐると、そこにまた女房たちがたくさんゐて、しゃべつてゐると。

(一四)菓あまがまゐりました。

(一五)へんだわ。いま參上したばかりなのに、いつの間に、どんな用事があるのかしら。

(一六)ただあなたさまに直接に申しあげたことがございます。

(一七)外へ出て話すと。「いふに」は底本「いふ事」第二類本「とふに」

(一八)いますぐいそいで見るわけにもいかない。「たたいま」から清女の答とみることもできる。

(一九)すぐにも、歸つて来て。

(二〇)どうもをかしい。第一類本にはない。

(二一)底本など第一類「いをの物語」とよまれる。「いせ」未詳。「伊勢の物語」で、例の長岡に居給うた業平の母のもとから「しはすばかりにとみのこととて御文あり」をふまへた詞とみるべきか。

出でていふに、主殿司「これ、頭の殿あたまのたてまつの奉たてまつらせたまふ。御返事ごへんじとく」といふ。

いみじくにくみたまふに、いかなる文ふみならむと思へど、たたいまいそぎ見るべきにもあらねば、清い「往いね。いまきこえむ」とて懐ふとどろに引き入れて、なほなほ人のものいふ聞きなどするに、すなはち歸り来て、主殿司「頭中將あたまのちゆうじやう」さらば、そのありつる御文ごふみをたまはりて來ことなむおほせらる。とくとく」といふが、あやしう、いせの物語なりやとて見れば、青き薄うす様にいと清きよげに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。

蘭省花時錦帳下らんしやうかじきんぢやうげ

と書きて、「末すえはいかに、末すえはいかに」とあるを、いかにかはすべからむ、御前ごぜんおはしまさば御覽ごらんせさすべきを、これこゝろが末すえを知りがほにたどしき眞名まんな書きなきたらむもいと見苦みくるしと思ひまはすほどもなく責せめまどはせば、ただその奥おくに炭櫃すすびに消え炭すすのあるして、

草くさの庵いほりをたれかたづねむ

と誓ちかきつけて取らせつれど、また返りごともしはず。

(三)薄くすいた鳥の子紙。

(三三)「蘭省の花の時錦帳の下、廬山の雨の夜草庵の中」(白樂天) 廬山の草堂に雨の夜獨り泊つて野にゐる諸友によせた詩の一節。白氏文集と和漢朗詠集(下)にある。蘭省は尙書省、いまの内閣、錦帳は天子の錦のとばり。

(三四)これのあとの文句を。

(三五)漢字。假字(かなな・かりな)の對。

(三六)公任卿集に見える公任の歌。これに對して、「このへの花の都をおきながら」(藏人たかただ)の句が附いてゐる。

(三七)源宣方。左大臣重信の子。正暦五年八月右中將。

(三八)ぎょうぎょうしく大きな聲で。

(三九)へんだわ。どうして、(そんな)人間らしくもない名の者がをりませうか。同じ呼ぶなら「玉のうてな」さんはるませんか」とでも探されるのなら、返事もしませうが。「けふ見れば玉のうてなもなかりけりあやめの草の庵のみして」(拾遺集二夏 よみ人知らず) 賀茂保憲女集夏にもこの歌がある。

(四〇)下の局にゐたんだね。底本など第一類本「しもと」

(四一)やはり、この者(清少納言)とまつたく交りを絶つてしまつて後は、どうもさびしくてそのままであられない。ひよ

みな寝て、つとめていとく局に下りたれば、源中將の聲にて、「このに草の庵やある」と、おどろおどろしくいへば、清「あやし。などてか、人げなきものはあらむ。『玉の臺』ともとめたまはましければ、いらへてまし」といふ。

源中將「あな、うれし。下にありけるよ。うへにてたつねむとしつるを」とて、昨夜ありしやう、頭中將の宿直所にすこし人人しきかぎり、六位まで集まりて、よろづの人の上、むかしいまと語り出でていひしついでに、源中將「頭中將『なほこの者むげに絶えはててのちこそさすがにえあらね。もしいひ出づることもやと待てど、いささかなにも思ひたらず、つれなきもいとねたきを、今宵あしともよしとも定めきりてやみなむかし』とて、みないひあはせたりしことを、主殿司『清』ただいまは見るまじ』とて入りぬ」と、主殿司がいひしかば、また追ひかへして、「ただ、手を捕へて、東西せさせず乞ひ取りて持て來ずは、文を返し取れ』といましめて、さばかり降る雨のさかりに遣りたるに、いとく歸り來、主殿司『これ』とて、さし出でたるが、ありつる文なれば、返してけるかとてうち見たる

つとして、むかふから何かいつて来るかも知れないと思つて待つてゐるが、全然なんとも思つてゐないで、平氣でゐるのも、ほんとに残念だが、今夜だめともいとも、どつちかにきめてしまはう。

(三三)「持て來ずは」刈本・岩本・古本など第二類本に「もてこさらすは」とある。それによれば、「もて來。さらすは」とよめる。すなはち、もつて來い。それではなければならない。

(三四)「見るとすぐ」にみな同時に大聲をあげたので。

(三五)ひどい奴だな。やつぱりすてきれない人だ。「盗人」は公任の句を盗んだのでこのやうにいふかとも考へられるが、當時人をのしる時に「盗人」の語を用ゐた例がある。「を」は感動の助詞。

(三六)聞いてゐてこちら氣がひけるくらゐまで、いいことばかりいひ聞かせて。(三七)残念ですわ。「くちをしかるなれ」の略約。

(三八)橋則光。長徳二年、修理職亮。

(三九)すばらしい御祝詞を申しに、上の御局にをられるかと思つて來ましたよ。

(四〇)どうなさつたの。人事異動など話もないのに。どんな官におなりになったのですか。司召は、京都の役人の人事異動。

に、あはせてをめければ、人人「あやし、いかなることぞ」と、みなよりて見るに、頭中將「いみじき盗人を。なほえこそ思ひすつまじけれ」とて見さわぎて、頭中將「これが本つけてやらむ。源中將つけよ」など、夜ふくるまでつけわづらひてやみにしことは、「行く先も、かたり傳ふべきことなり」などなむみな定めし」など、いみじうかたはらいたきまでいひ聞かせて、源中將「いまは御名をば、『草の庵』となむつけたる」とて、いそぎ立ちたまひぬれば、清「いとわろき名の、末の世まであらむこそくちをしかなれ」といふほどに、修理の亮則光「いみじきよろこび申しになむ、うへにやとてまゐりたりつる」といへば、清「なんぞ。司召なども聞えぬを。なにになりたまへるぞ」と問へば、則光「いな、まことにいみじううれしきことの昨夜侍りしを、心もとなく思ひ明かしてなむ。かばかり面目あることなかりき」とて、はじめありけることども、中將のかたりたまひつるおなじことをいひて、「ただ、この返りごとにしたがひて、こかけをしふみし、すべてさる者ありきとだに思はじ」と頭中將のたまへば、あるかぎりかうようして遣りたまひしに、ただに來たりしは、なかなかよかりき。

(四〇) いや、ほんとにうれいことが昨夜
ありましたのでね、夜があけるのが待ち
遠しくて。あんな名譽なことはなかつた。
底本「いまなことに」

(四一) この返事次第によつては。

(四二) この八字の意義未詳。「かけ」は影、

「ふみ」は踏みか。過去においてよくも
そんな女の影を踏んだものだの意か。

(四三) 未詳。勘用、勘要か。頭をひねり考
へて。

(四四) そのまま素手で歸つて来た時はかへ
つたよかつた。

(四五) 「せひと」の音便。ここは兄妹にも
比すべき間柄だから自分をいつた語。

(四六) その結果はひととほりのよきどころ
ではなく、大勢の人がほめ感心して。

(四七) いや、さうした方面のことについて
はまつたく不得手な者でございませうで

(四八) 批評をせよとか、この詞を聞いてそ
の妙味を知れといふのではない。

(四九) 信用。思はれかた。底本など「せう
との」の「の」がない。

(五〇) 「返事をやつて、つまらぬ文句だ
など」とはれてはかへつて残念なことであ
らう」などといつて、夜中までみながさ
わいでいらつしやつたが。

(五一) わたくし自身のためにも、あなた
のためにも、すばらしいよろこびではあり
ませぬか。

七 八 段

持て来たりし度はいかならむと胸つぶれて、まことにわるからむはせうと
のためにもわるかるべしと思ひしに、なのためだにあらず、そこの人の
ほめ感じて、『せうとこち來。これ聞け』とのたまひしかば、下こちはい
とうれしけれど、『さやうのかたにさらにえさぶらふまじき身になむ』と申
ししかば、『言加へよ、聞き知れとはあらず、ただ、人に語れとて聞か
するぞ』とのたまひしになむ、すこしくちをしきせうとのおぼえに侍りし
かども、本つけ試みるに、人人『いふべきやうなし。ことにまたこれが返
しをやすべき』などいひあはせ、『わるしといはれては、なかなかねたか
るべし』とて、夜中までおはせし。これは身のため人のためにも、いみじ
きよろこびに侍らずや。司召に少少の司得侍らむはなにともおぼゆまじ
くなむ』といへば、げにあまたしてさることあらむとも知らで、ねたうも
あるべかりけるかなと、これらなむ、胸つぶれておぼえし。このいも
と、せうとといふことは、うへまでみな知ろしめし、殿上にも、司の名を
ばいばい、せうととぞつけられたる。

物語などしてゐたるほどに、室「まづ」とめしたれば、まゐりたるに、

(五三)大勢よつてかかつてのさうしたたくらみがあらうとも知らないで、うつかりしてゐたら、あとで残念だと後悔するやうな結果になりさうであつたなど、これら考へて胸がどきんとした。「おぼえり」は底本など第一類本「おほへり」(五四)「せうと」は女の立場から男の兄弟をいひ、「いもうと」は、男の方から女の姉妹を呼んだ。「せうと」はかならずしも兄ときまつてはゐない。

(五四)主上。

(五五)修理亮の官名をいはないで。「いはて」は、底本など諸本「いかて」

(五六)主上がお笑ひになつて、わたくし(中宮)におほせられて。「笑はせ」は底本、宮本など以外は「わたらせ」とある。

(五七)「殿上人たちはみな、「草の庵を」の文句を扇に書きつけて持つてゐるよ」と

(おほせられたよしを)中宮様がおつしやるので、あきれたこと、どうしてあんな歌を書き送つたのかしらと思つた。

(五八)袖をまるで几帳をたてるやうにして、自分と顔をあはずまいとしてをられたが、そのカーテンをも取りのけて。

(五九)(一)その翌年長徳二年の。長徳二年二月廿五日中宮職へ退出、同年三月四日職より出御。底本「二月」朱書補入。

中宮職は、中宮に關する諸雜務をとりあつかふ役所。(二)凝花舎。(三)齊信。

このことおほせられむとなりけり。宮「うへ笑はせたまひて、かたりきこえさせたまひて、をのこどもみな扇に書きつけてなむ持たる」などおほせらるるにこそ、あさましう、なにのいはせけるにかとおぼえしか。

さて後ぞ、袖の几帳なども取り捨てて、思ひなほりたまふめりし。

七十九

かへる年の二月二十餘日、宮の職へ出でさせたまひし御供にまゐらで、梅壺に残りゐたりしましたの日、頭中將の御消息とて、「昨日の夜、鞍馬にまうでたりしに、今宵、方のふたがりければ、方違になむ行く。まだ明けざらむに歸りぬべし。かならずいふべきことあり。いたうたたかせで待て」とのたまへりしかど、「局にひとりはななどてあるぞ。ここに寝よ」と、御匣殿のめしたれば、まゐりぬ。

ひさしう寢起きて下りたれば、留守の女「昨夜いみじう人のたたかせたまひし、からうじて起きて侍りしかば、『うへにか、さらばかくなむときこえよ』と侍りしかども、よも起きさせたまはじとて臥し侍りにき」と語る。

(四)鞍馬寺。洛北鞍馬山の中にある。
 (五)御匣殿の別當。御匣殿は貞觀殿内にあつて、主上の御服の裁縫をつかさどる所、その長官が別當である。ここは道隆の第四女、中宮の御妹君。
 (六)「上の局にをられるのか。では、かうかうだと申しあげてくれ」とのことのでごつたにお起きになるまいと存じて、そのまま寝てしまひました。
 (七)氣のきかぬ、不行き届きのことだなど思つて聞いてゐると。
 (八)頭の中將様からのおことばです。
 (九)ただいま殿上より退出するが、あなたに申しあげねばならないことがある。
 (一〇)「わたくしはどうしても見なければならぬ。そこでお目にかかりませう」といつて、使を歸した。
 (一一)局でおあひすると、隔ての簾なども遠慮なく引きあげなどなさらうかといふおそれもあり、心配だし、困るので。
 (一二)「めでたくて」は「あゆみ出でたまへる」を修飾する。「あゆみ出でたまへる」さまは「めでたく」すばらしい。
 (一三)藤の折り枝の模様を上紋に浮織にしたのである。「おどろおどろしく」はそれがすばらしくりつぽなの形容。
 (一四)下着の紅の色や砧で打つて出した光澤などもかがやくばかりに見える。

心もなのことやと聞くほどに、主殿司來て、「頭の殿のきこえさせたまふ、
 『ただいままかづるを、きこゆべきことなむある』』といへば、清「見るべきことありて、うへへなむのぼり侍る。そこにて」といひてやりつ。

局は引きもやあけたまはむと心ときめき、わづらはしければ、梅壺の東面半蔭あげて、清「ここに」といへば、めでたくてぞあゆみ出でたまへる。

櫻の綾の直衣のいみじうはなばなと、裏のつやなどえもいはずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織り亂りて、紅の色、打目など脚ばかりぞ見ゆる。白き、薄色など下にあまたかさなりたり。せばき縁に片つかたは下ながらすこし簾のもとと近うよりゐたまへるぞ、まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、これにこそはとぞ見えたる。

御前の梅は西は白く東は紅梅にて、すこし落ちがたになりたれどなほをかしきに、うらうらと日のけしきのどかにて、人に見せまほし。御簾のうちにまいて若やかなる女房などの、髪うるはしくこぼれかかりてなどい

(五) その下に白いのや、薄紫色などのものをたくさんかさねて着てをられた。

(六) 下半身に地を着けて下にあるま(縁に腰をかけて)、すこし簾のそば近く寄つて腰をかけてゐられるありさまは、いかにもあの繪にかいたり、物語ですばらしいものとしていひのべてあるのも、すつとこんなのをいふのだらうと思はれてすばらしいことであつた。

(七) 「若々しい女房などが、髪も端麗で、長くふさふさとして肩のあたりにこぼれかかつてゐる」などといったやうな姿で、應答などしてゐるのだつたら、もうすこし興深く見られるものであらうが。

(八) 女盛りの年も過ぎたおぼあさんで、しかも髪なども自分の髪でないためであらうか、ところどころちぢれてばらばらになつて、その上、關白殿の喪中で一般にわれわれこの宮にお仕へしてゐる者は衣服の色もつねと異つてゐるころなので、(一) 凸色があるのかないのかわからぬほどの薄鈍、重なつた色目もはつきり見えな鼠色の薄衣などもばかりたくさんあるけれども、すこしも見ばえもしないのに、(二) 底本など「うす衣」を「きはきぬ」とする。また「ばかり……おはしまさ」朱補入。「などばかり」は底本に「なとはかり」とある。

ひためるやうにて、もののいらへなどしたらむはいますこしをかしよう見どころありぬべきに、いとさだ過ぎふるるしき人の、髪などもわがにはあらねばにや、ところどころわななきちりぼひて、おほかた色ことなるころなれば、あるかなきかなる薄鈍、あはひも見えぬうす衣などばかりあまたあれど、つゆの映も見えぬに、おはしまさねば、裳も着ず、袿姿にてゐたるこそものぞこなひにてくちをしけれ。

頭中將「職へなむある。ことづけやある。いつかまある」などのたまふ。頭中將「さても、昨夜明かしもはてで、さりとともかねてさいひしかば待つらむとて、月のいみじう明かきに、西の京といふところより來るままに、局をたたきしほど、からうじて寝おびれ起きたりしけしき、いらへのはしたなき」など語りて笑ひたまふ。頭中將「むげにこそ思ひうんじにか。などさる者をば置きたる」とのたまふ。げにさぞありけむとをかしようもいとほしようもあり。

しばしありて出でたまひぬ。外より見む人はをかしく、うちにかなる人あらむと思ひぬべし。奥のかたより見出だされたらむうしろこそ、外に

(一〇) 中宮がおいでにならないから、唐衣も裳もつけないで、小袷だけの略装でゐた。小袷は男子の衣冠に相當する。
(一一) あたりのりのりつばさ、このもしさの興さましとなつて残念なことである。
(一二) 底本など第一類本「たたきし」の「し」がない。(一三) おぼけた様子で。
(一四) 應答の間のぬけてゐることは……。
(一五) まつたく失望してしまつたよ。「うんず」は「鬱す」。いやになる、悲觀するなどの意。底本「けんこそ」
(一六) 外から見えてゐる人は、こんなりつばさ人と話してゐるのは、どんなうつくしい人だらうと思ふにちがひない。また、奥の方からおたくしのうしろ姿を見てゐる人は外にそんなりつばな人があようと、は夢にも思はないであらう。
(一七) 底本など第一類本「すし」うつば物語に出る人名。源涼。嵯峨院の皇子、才藝學問にすぐれ、朱雀院の神泉苑の紅葉の賀で仲忠と琴をひいたとき、天人が下位の左近中將となつた。侍從に任せられ、正四位左近中將となつた。左大臣源雅頼の十女を妻とし、參議、右衛門督、中納言に至る。時に廿六歳。
(一八) 同物語の主人公ともいふべき人物。父は右大臣兼雅、母は清原俊隆のむすめ、家が貧しく、幼いとき母と山中の老杉の空洞に住んだことがあつた。七歳の春母

さる人やとおぼゆまじけれ。

暮れぬれば、まゐりぬ。御前に人人いとおほく、上人などさぶらひて、物語のよきあしきにくきところなどをぞ定めいひそしる。

涼、仲忠などがこと、御前にも劣り優りたるほどなどおほせられける。

女房「まづこれはいかに。とくことわれ。仲忠が童生ひのあやしさをせち

におほせらるるぞ」などいへば、清「なにか。琴なども天人の下るばかり

ひき出で、いとわるき人なり。帝の御おすめやは得たる」といへば、仲忠

が方人どもとところを得て、女房「さればよ」などいふに、中宮「このこと

どもよりは、晝齋信がまゐりたりつるを見ましかば、いかにめでまどはま

しとこそおぼえつれ」とおほせらるるに、女房「さて、まことにつねより

もあらまほしうこそ」などいふ。清「まづそのことをこそは啓せめと思ひ

てまゐりつるに、物語のことにまぎれて」とて、ありつることどもきこえ

さすれば、女房「たれも見つれど、いとかう、縫ひたる糸・針目までやは

見とほしつる」とて笑ふ。

女房「頭中將『西の京といふところのあはれなりつること、もろともに見

から、祖俊藤が仙客から學んだといふ琴の神技を學ぶ。やがて父とあひ、朝廷に仕へた。彼は學才が非凡で、侍従を経て廿一で正四位左近中将となる。神泉苑の紅葉の賀の彈琴により、女一の宮を賜うた。右近大將を経て、大納言、二位に敘せられ、按察使を兼ねた。時に年卅三。

(二九) 判定しなさい。

(三〇) 宮様は幼年時代の賤しいことをよくないと、とても御主張なさいませうが。

(三一) 「どうして仲忠は涼に劣るものですか。涼は琴なども天人が下りるほど巧みに弾きましたが、それだけであつて、まことにつまらない人です。仲忠のやうに帝の御むすめをたまはつたでせうか」(うつほ物語吹上の下)

(三二) ひいきの者どもは、得意になつて、

「それごらんなさい」などいふと。

(三三) 底本など「けいせんと」

(三四) 「みな」底本にない。

(三五) 「高々たる驪山上に宮あり。……翠華來らずして歳月久しき、牆に衣あり瓦に松あり、わが君在位すに五載、なんぞ去ること幾多の地ぞ。」(白樂天)(白氏文集四 驪宮高 原漢文)衣は若のこと。

「ありつや」は底本「ありつるや」にくる。

(三六) (一) おだやかでないといふ人はいつて

る人のあらましかばとなむおぼえつる。垣などもみな古りて、苔生ひてなむ」などかたりつれば、宰相の君の、「瓦に松はありつや」といらへたるに、いみじうめでて、頭中將「西のかた、都門を去れることいくばくの地ぞ」と口ずさみつること」など、かしがましきまでいひしこそをかしかりしか。

八十

里にまかでたるに、殿上人などの來るをもやすからずぞ人人はいひなすなる。いと有心に、ひき入りたるおぼえはたなければ、さいはむもにくかるまじ。また晝も夜も來る人を、なにしにかは、なしともかがやき歸さむ。まことにむつまじうなどあらぬもさこそは來めれ。あまりうるさくもあれば、この度出でたるところをばいづくとなべてには知らせず。左中將經房の君、濟政の君などばかりぞ知りたまへる。

左衛門の尉則光が來て物語などするに、「昨日宰相の中將のまゐりたまひて、『いもうとのあらむところ、さりともし知らぬやうあらじ。いへ』と

あるやうであるが、これはわたくしとしては、ひどく氣にかけて、遠慮しはばかなければならないといつたおぼえなどにもないから、かりにそんなにいはいはれてもにくらしいとも思はない。「いひなすなる」は底本「いひなすなり」「有心に」は底本「うらむに」
(二)「留守だ」といつて恥をかかせて歸せようか。
(三)人のうわざどほりよくやつて来る。
「來めれ」は底本など第一類本「めくれ」
(四)「出でたるところをば」底本など第一類本にはない。(五)藤原齊信。
(六)意地悪く、しつこく。
(七)知つてゐることをば知らないといひ争ふのはまことにつらいことだ。もうすこして笑ひ出しさうだつたが。
(八)源經房。
(九)顔でも見あはせたら、すんでのことであつてしまひさうでしたので。
(一〇)困つて。底本「おびて……取りてた」脱落。宮本以下諸本による。
(一一)こんぶ、わかめ、ひろめなどの海藻。
(一二)食事時でもない中途半端な時に妙な食事をするなあとおぼえてゐたであらう。「人々」は底本「人も」
(一三)もし笑つたら、隠してゐたのがむだになつたことであらう。「ふよう」は「不用」とも「不益」ともいふ。

七九・八〇段

いみじう問ひたまひしに、さらに知らぬよしを申ししに、あやにくに強ひたまひしこと」などいひて、則光「あることは、あらがふはいとわびしくこそありけれ。ほとほと笑みぬべかりしに、左の中將のいとつれなく知らずがほにてゐたまへりしを、彼の君に見だにあはせば笑ひぬべかりしに、わびて、臺盤の上に布のありしを取りてただ食ひに食ひまぎらはししかば、中間にあやしの食ひものやと人人見けむかし。されど、かしこうそれにてなむ、そこは申さずなりにし。笑ひなましかば、ふようぞかし。まことに知らぬなめりとおぼしたりしもをかくこそ」などかたれば、語「さらになきこえたまひそ」などいひて、日ごろひさしうなりぬ。

夜いたくふけて、門をいたうおどろしうたれば、なにかう心もなう、遠からぬ門を高くたたくらむと聞きて、問はずれば、瀧口なりけり。「左衛門の尉」とて文を持って來たり。みな寝たるに、火とりよせて見れば、則光「明日御讀經の結願にて、宰相の中將、御物忌にこもりたまへり。『いもうとのありどころ申せ、いもうとのありどころ申せ』とせめらるるに、すぢなし。さらにえかくし申すまじ。さなむとや聞かせ奉るべ

- (一四)お思ひになつたのも、おもしろい。
「おぼし」は底本「おほえ」
(一五)絶對にわたしの居所を申しあげないで下さいね。
(一六)だが、このやうに遠くもない門を無分別にひどくたくたのであらうかと。
(一七)季の御讀經(二月と八月とに行ふ)の最終日。
(一八)なんともしかたがない。
(一九)どこどこにあなたがゐると御報告申しあげませうか、いかがでせうか。どちらでもあなたの御命令にしたがひませう。
(二〇)いいかげんな、眞實でもない所々におつれあるき申しましたが、眞劍にお責めになり、お叱りになるので、とてもつらい。「ところどころ」は底本など第一類本「所から」
(二一)それにしても、なぜああとまかうとも御返事を下さらないで、つまらない布のはしくれをつつんでよこされたのか。
(二二)「たるかと」は底本「たるとて」いま第二類本による。
(二三)何も知らなかつたのだなと思ふとにくらしいから、なんとも返事をしないで。
(二四)海に潛る海士の住所は不定だといふが、明らかにしてないわたしの住所を「そこだとさへ知らせるな」といふ意味で「め」を食べさせたのでせうが。わか

き。いかに。おほせにしたがはむ」といひたる。返事は書かで、布を一寸ばかり紙につつみてやりつ。

さて、後來て、則光「一夜はせめたてられて、すろなるところどころになむ率てありき奉りし、まめやかにさいなむに、いとからし。さて、などもかくも御返はなく、すろなる布の端をばつつみてたまへりしぞ。あやしのつつみものや。人のもとにさるものつつみて送るやうやはある。取り違へたるか」といふ。いささか心を得ざりけると見るがにくければ、ものもいはで、硯にある紙の端に、

清かづきするあまのすみかをそことだにゆめいふなとやめを食はせけ

む

と書きてさし出でたれば、則光「歌よませたまへるか。さらに見侍らじ」とて、あふぎかへして逃げて往ぬ。

かうかたらひ、かたみのうしろみなどするうちに、なにもなくてすこしなかあしうなりたるころ、文おこせたり。則光「便なきことなど侍りとも、なほ契りきこえしかたは忘れたまはで、よそにてはさぞとは見たまへ、

りませんか。「そこ」に「底」と「其處」、

「めを食はせ」に「めくばせ」をかけて

ゐる。底本、いふを「ゆふ」につくる。

(三五)「するうちに」底本をはじめ第一類

本「するの中に」

(三六)おもしろくないことなどがあるに

しても、やはりお約束したことはお忘れに

ならないで、よそながらでもあれば「せ

う」との則光であるよと見てほしいと思

ふ。「よそ」は第二類本「よそめ」

(三七)ぼくを愛する人は、絶対に歌を下さ

らないでほしい。歌を詠んでよこす人は

すべて仇敵だと思ふ。もう最後で、絶交

しようと思ふやうな時にだけ歌を詠むが

いい。「を」は感動の助詞。底本にない。

(三八)「流れては妹背の山の中に落つる吉

野の川のよしや世の中」(古今集十五戀)

を本歌としてゐる。いままでは、あの妹

山背山が仲よしのよしの河をはさんでな

らび立つてゐるやうにあなたと交りをつ

となむ思ふ」といひたり。

つねにいふことは、則光「おのれを思さむ人は、歌をなむよみて得さす

ましき。すべて仇敵となむ思ふ。いまはかぎりありて絶えむと思はむとき

にを、さることはいへ」などいひしかば、この返りごとに、

清三九

くづれよる妹背いもせの山のなかなればさらによしのの河とだに見じ

といひやりしも、まことに見ずやなりにけむ、返しもせずなりにき。

さてかうぶり得えて、遠江とほたあふみの介すけといひしかば、にくくてこそやみにし

か。

八十一

もののははれ知らせがほなるもの はな垂たり、間まもなうかみつものい

ふ聲こゑ。眉まゆ抜ひく。

八十二

さて、その左衛門ざゑもんの陣ぢんなどに行きて後のち、里さとに出でてしばしあるほどに、

(二)眉毛を抜く女の顔。當時、女は未婚既婚を問はず年ごろになると眉を抜いてまゆずみで眉を引いた。

【六十五】(一)七十二段の後半をうけてゐる。

(二)行つた時のそなたのうしろ姿がいつも思ひ出される。どうしてあの時、あのやうに平氣でなんとと思はずとめもしないでめたのか知ら。非常に興趣が深いことだらうと思つたが、いかが。

(三)御返事に、おほしめしはもつともでございませと申しあげて。「御返」は宮本

に(ま)「御返しかしこまり」第二類本、御返りにかしこまり」

(四)使の女房にいふ私信である。

(五)宮様にも、「朝ぼらけほのかに見れば飽かぬかな中なるをとめしはしとめなむ」(うつほ物語吹上の下、涼の琴の音に

下つた天人の歌)の御心で御覽になつたことと拜察申しましたが、(六)すぐにお使が来て、「涼のてがらの歌をひいたりなどして、そなたがとでもひいきにしてゐるといふ仲患の不面目なることをどうして申したのか。」思へ(四段已然)る(完了の助動詞連體)なる(推定の助動詞連體)「面ふせ」は、底本「おりてふせ」

(七)普通のお詞をたまはつたのでさへおそれ多いのに、まして。

【六十五】(一)この段は長徳四年十二月から

宮「とくまゐりね」などある仰せごとの端に、宮「左衛門の陣へ行きしうしろなむつねに思しめし出でらるる。いかでか、さつれなくうち古りてありしならむ。いみじうめでたからむとこそ思ひたりしか」などおほせられたる御返に、かしこまりのよし申して、わたくしには、清「いかでかはめでたしと思ひ侍らざらむ。御前にも、『なかなるをとめ』とは御覽じおはしましけむとなむ思ひたまへし」ときこえさせれば、たちかへり、宮「いみじく思へるなる仲患が面ふせなることはいかで啓したるぞ。ただ今宵のうちによろづのことを捨ててまゐれ。さらずは、いみじうにくませたまはむ」となむ仰せごとあれば、「よろしからむにてだにゆゆし。まいて『いみじう』とある文字には、命も身もさながら捨ててなむ」とてまゐりにき。

八十三

職の御曹司におはしますころ、西の廂に不斷の御讀經あるに、佛などかけ奉り、僧どものあたるこそさらなることなれ。

長保元年一月にかけての事件である。
(二)晝夜を十二時とし、十二人の僧に輪番に間斷なく誦經させられる。

(三)佛の畫像など。

(四)いふまでもないことである。底本など第一類本「こと」がない。

(五)賤しい者の聲で「どうぞあの佛の御供物のおさがりを賜はりにう存じます」

(六)だめだ。まだ早いのに。

(七)「何者がいふのであらうか」といつて、出てみると、すこし年とつた女法師がひどくすすけて黒くなつた狩袴の、あの筒といふもののやうにはそく短いのを、帯より下五寸くらゐの長さにはいて。「狩袴」は布の指貫。狩衣の袴。底本とその系統諸本「狩袴の……おなじやうに」がない。

(八)體裁を飾り、様子ぶつた聲で。

(九)わたくしは、佛の御弟子でございますから、お供へもののおさがりを賜はらうと申しますのを、このお坊さまたちがをしんで下さらないのです。

(一〇)陽氣で、上品である。かういふ乞食法師は元氣がなくうちしほれてゐるのがあはれて同情をひくものであるが、これはいやに陽氣で元氣があるなあと思つて。「うちうんじ」は「うち齋し」の義。
(一一)ほかのものは食べないで。

二日ばかりありて、縁のもとにあやしき者の聲にて、「なほかの御佛供のおろし侍りなむ」といへば、僧「いかでか。まだきには」といふなるを、

清「なににいふにかあらむ」とて立ち出でて見るに、なま老いたる女法師の

いみじうすすけたる狩袴の、筒とかやのやうにはそく短きを、帯より下五

寸ばかりなる、衣とかやいふべからむ、おなじやうにすすけたる衣を着て、

猿様にていふなりけり。清「かれは、なにごといふぞ」といへば、聲ひき

つくるひて、尼「佛の御弟子にさぶらへば、御佛供のおろし賜べむと申す

を、この御坊たちのをしみたまふ」といふ。はなやぎ、みやびかなり。か

かる者は、うちうんじたるこそあはれなれ、うたても、はなやぎたるかな

とて、清「ことものは食はで、ただ佛の御おろしをのみ食ふか。いとたふ

ときこと」などいふけしきを見て、尼「などかことももの食べざらむ。そ

れがさぶらはねばこそ取り申せ」といふ。菓子、ひろき餅などをものに入

れて取らせたるに、むげになかよくなりてよろづのこと語る。

若き人人出でて来て、「男やある」「子やある」「いづくにか住む」など口

問ふに、をかしき言、そへ言などをすれば、女房「歌はうたふや。舞な

(二)水菓子。柿などの生果物。唐菓物は粳米、小麦粉などを原料として多くは胡麻油で揚げて作った菓子。

(三)のし餅か。薄く廣くしたお供へ餅。(四)巴與へしたので、ばかに仲よくなつて。

(五)「たるに」は底本「たたるに」

(六)吾若い女房たちが出て来て、「御主人はゐるの」「子どもはゐるの」「どこに住んでゐるの」など。

(七)あてつけた冗談。諷言。

(八)もつとひどい文句がまことに多い。(九)男山の峯の紅葉が名高いやうに、そのやうにうき名が立つことだ。この俗語

は古今集十七雜上よみ人しらずの「いまこそあれわれもむかしは男山さかゆく時もありこしもを」をふまへてゐる。また犬筑波集戀の部の「やはたの山ををがむ尼ごせ」はこれを承けるものである。

なほ「たつ」は底本などは「たへ」とよまれ「はだへ(肌)」と解する説もある。

(十)まはして振る。ぐるぐるまはす。底本「まろはしふか」第二類本による。

(十一)そばでできてきたへないやうなことをばどうしてさせてゐたの。

(十二)早くかへしてしまひなさい。

(十三)「白くて」は「着よ」の結果をのべる。着て白くなれの意。「壁を白くぬる」

どはするか」と問ひもはてぬに、尼「夜はたれとか寝む。常陸の介と寝む。寝たる肌よし」これが末、いとおほかり。また、「男山の峰のもみぢ栗、さぞ名は立つや、さぞ名は立つや」と頭をまるばし振る。いみじうにければ、笑ひにくみて女房「往ね、往ね」といふに、清「いとほし。これになに取らせむ」といふを聞かせたまひて、宮「いみじうかたはらいたきことはせさせつるぞ。え聞かで、耳をふたぎてぞありつる。その衣一つ取らせてとく遣りてよ」とおほせらるれば、清「これ、たまはするぞ。衣すすけためり。白くて着よ」とて、投げ取らせれば、ふし拜みて、肩にうち置きては舞ふものか。まことににくくてみな入りにし。

後、ならひたるにやあらむ、つねに見えしらがひありく。やがて常陸の介とつけたり。衣も白めず、おなじすすけにてあれば、いづち遣りてけむなどにくむ。

右近の内侍のまゐりたるに、宮「かかる者をなむかたらひつけておきためる。すかして、つねに来ること」とて、ありしやうなど小兵衛といふ人にまねばせてきかせさせたまへば、右近「かれいかで見侍らむ。かならず

なほ「たつ」は底本などは「たへ」とよまれ「はだへ(肌)」と解する説もある。

「帽子を軽くつくる」などと同じ用法。この時代の語法にもしばしば見られる。

(三) 舞ふべきものであらうか。さうではあるまいとの意から「さても拜舞した」とであるといつた意から「さても拜舞した心」をあらはしてゐる。底本「またものか」

(四) 馴れたのであらうか。底本など第一類本「に」がない。

(五) わざと人目につくやうに姿を見せあはる。『しらがふ』は他の動詞と複合してわざとさうする、争ふなどの意をあらはす。「道ひしらがふ」食ひしらがふ。

「ありく」は底本など第一類本「ありて」

(六) 底本系統本「左近の内侍」

(七) 口が上手で嘘をついていつも来るの

(八) 右近にお聞かせになると、右近は「その女をどうかして見たいにお見せ下さいませ。かたらずわたくしにお見せ下さいませ。宮様をはじめみな様がたの御なじみの者のやうでございませうが、決してわたんから」などおなじみを奪ひなどははしませ

(九) 上品なのがやつて来たのを。

(一〇) はやくもあの「常陸の介」のうたをうたつたさきの尼が出あつて見てしまつた。「は來あひて」は内本、能本「いきあひて」「すなはち「行きあひて」とある。

(一一) 「さて」は底本などにない。

(一二) おなじことなら。

見せさせたまへ。御得意ななり。さらによもかたらひとらじ」など笑ふ。

その後、また尼なる乞食のいとあてやかなる出で來たるを、また呼び出でてものなど問ふに、これはいとはづかしげに思ひてあはれなれば、例の衣一つたまはせたるを、ふし拜むはされどよし、さてうち泣きよろこびて

往ぬるを、はやこの常陸の介は來あひて見てけり。その後ひさしう見えねど、たれかは思ひ出でむ。

さて、師走の十餘日のほどに雪いみじう降りたるを、女官どもなどして縁にいとほく置くを、女房「おなじくは、庭にまことの山をつくらせ侍らむ」とて、侍めして、「おほせごとにて」といへば、集まりてつくる。

主殿寮の官人の御きよめにまありたるなどもみなよりて、いと高うつくりなす。宮司などもまゐり集まりて言あへ興ず。三四人まゐりつる主殿寮の

者ども二十人ばかりになりけり。里なる侍めしにつかはしなすとす。「けふこの山つくる人には日三日賜ふべし。またまゐらざらむ者は、またおなじ數とどめむ」などいへば、聞きつけたるはまだひまゐるもあり。里遠き

はえ告げやらす。

- (三)「中宮様のおほせごとで」といふと。
 (三)といへば「は底本など」「いへば」。
 (三)西朝の御掃除にまゐつた者なども。
 (三)中宮職の役人などもまゐり集まつてああしたらしい、かうしたらよいなどと助言しておもしろがる。
 (三)底本「この山」の「こ」がない。
 (三)三日間の陽暇。
 (三)あはててやつて来る者もある。
 (三)袍などを着た中宮職の役人は、そのまま狩衣に着かへて侍候してゐる。
 (四)その場にゐあはせる女房たちはみなさう申しあげるのを。
 (四)中宮様も、心のうちでまさかそんなにいづまでも残つてはゐまいとお思ひになつてゐる。
 (四)なるほどそれまではよもやありはしまい。「正月の一日までは」とでもいっておけばよかつたなあと、内心思ふが。
 (四)ええまよよ。それまではなくても。
 (四)一旦、いひ出したことは取り消すまいと思つて、主張を固持していひ争つた。
 (四)底本など「いつか」とある。
 (四)高さが低くなつてゆく。
 (四)加賀白山の十一面観音。古今集九羈旅、越の國へまかりける時白山を見てよめる、躬恒「消えはつる時しなれば越路なるしちやまの名は雪にぞありける」

つくりはてつれば、宮司めして衣つかさ二ゆひ取らせて縁えんに投げ出なしたるを、
 一つ取りひとに取とりて、拜まがみつつ、腰こしにさしてみなまかぬ。袍うすなど着またるはさて狩衣かりぎぬにてぞある。

宮「これいつまでありなむ」と、人人にのたまはするに、女房「十日はありなむ」「十餘日はありなむ」など、ただこのごろのほどを、あるかぎり申すに、宮「いかに」と問はせたまへば、清「正月むの十餘日よひまでは侍りなむ」と申すを、御前おまへにもえさはあらじとおぼしめしたり。女房はすべて年のうち、つごもりまでもえあらじとのみ申すに、あまり遅くも申しつるかな。げにえしもやあらざらむ。一日いつなどそいふべかりけると下したには思へど、
 三はれ、さまでなくともいひそめてむことはとて、かたうあらがひつ。
 四二十日ふたのほどに雨降れど、消きゆべきやうもなし。すこしたけぞ劣おとりもてゆく。清「白山しらの観音くわんおんこれ消えさせたまふな」と祈るも、ものぐるほし。

さて、その山やまつくりたる日、御使みつかひに式部しきぶ丞ちやう忠隆ちゆうたかまゐりたれば、裾すそさし出いだしてものなどいふに、忠隆「けふ雪の山やまつくりせたまはぬところなむなき。御前みまへの壺つぼにもつくらせたまへり。春宮とうぐうにも弘徽殿こうきでんにもつくられたり。京極きやうごく

(四八)「たまふなと」は底本「給なこと」
 宮本「給はなと」第二類本「給ふなと」
 (四九)主上よりの御使。忠隆は八二頁参照。
 (五〇)主上の御前の「遠庭」にも。遠庭は中庭。清涼殿の前をいつたのか、後深殿との間にあるのをさしたのか不明。
 (五一)冷泉第二皇子居貞親王。後に三條天皇と申す方である。
 (五二)清涼殿の北にある皇后や女御の住まれる御殿。女御藤原義子(公季の女)が住んでをられた。(五三)藤原道長の邸。
 (五四)「舊り」をかける。あちこちに降つて古くさくなつてしまつたことだわ。
 (五五)頭をかたむけ感心して。
 (五六)拙い返歌をさしあげてこんなすばらしいお歌をけがしますまい。「けがさじ」は底本など「けるさし」
 (五七)風雅なことです。御簾の前でみんなに話します。「を」は感動助詞。
 (五八)皇后様もこのことをお聞きになつて「忠隆はとてもすばらしい返歌をつくらうと思つてゐたのでせう」とおつしやる。
 (五九)いいえ。いやなつらいことがございしましたので。
 (六〇)聲を長く引いて。嘆息の氣持である。
 (六一)さてもうらやましいことです。歩くこともできないほどに多くのものをいただく人があります。どうした人なのでせ

殿にもつくらせたまへりけり」などいへば、

清 ここにのみめづらしと見る雪の山とところどころに降りけるかなとかたはらなる人していはすれば、たびたびかたぶきて、忠隆「返しはつかうまつりけがさじ。あされたり。御簾の前にて人にをかたり侍らむ」とて立ちにき。歌いみじうこのむと聞くものをあやし。御前にきこしめして宮「いみじうよくとぞ思ひつらむ」とそのたまはする。

つごもりがたに、すこしちひさくなるやうなれど、なほいと高くてあるに、晝つかた、縁に人人出でゐなどしたるに、常陸の介出で來たり。清「などいとひさしう見えざりつるに」と問へば、常陸介「なにかは。心憂きことの侍りしかば」といふ。清「なにごとぞ」と問ふに、常陸介「なほかく思ひ侍りしなり」とて、ながやかによみ出づ。

うらやまし足もひかれずわたつ海のいかなる人にもたまふらむといふを、にくみ笑ひて、人の、目も見入れねば、雪の山にのぼり、かかづらひありきて往ぬる後に、右近の内侍に、「かくなむ」といひやりたれば、右近内侍「なごか、人添へてはたまはせざりし。かれがはしたなくて雪の

うか、うらやましいことでのぞ。」「足もひかれず」は、後にやつて来た尼が跛であつたからいふ。「わたつ海のいかなる人」は「あま」(海人・尼)である。「人」を「あま」に作る能本系統本にしたがふのが一般であるが、「あま」の本文は再篇か後人の意改かであらう。

(六二)だれも彼女を見ないので。「ね」は底本など「ぬ」

(六三)あちこちうろろして歸つてから。

(六四)「右近の内侍」は諸本「左近の内侍」

(六五)せつかく常陸の介が来たのに、どうして人をつけてわたくしの方へよこして下さいませんでしたの。彼女が困つて、

雪の山にまでぼりうろろし廻つたのでせうが、ほんとにかはいさうでしたわ。

(六六)そのままとけずに新年(長保元年)となつた。

(六七)この新雪はいけませぬ。もと積つてみたところまではそのままにしておいて、いま降つた部分は掻き捨てなさい。

(六八)齋院司の侍の長が袖の葉のやうに濃い緑色の宿直着の袖の上に。

(六九)寒さにふるへて。底本「出でたり」の「り」を「る」につくり、朱で「り」になはす。

(七〇)天皇御一代ごとに、賀茂の明神に奉仕される未婚の内親王。ここは、村上天皇第十皇女選子内親王。

山までのぼりつたよひけむこそいとかなしけれ」とあるを、また笑ふ。

さて雪の山つれなくて年もかへりぬ。一日の夜の夜、雪のいとおほく降りたるを、清「うれしくもまた降り積みつるかな」と見るに、宮「これはあいなし。はじめの際をおきて、いまのはかき棄てよ」とおほせらる。

局へいとく下るれば、侍の長なる者袖の葉のごとくなる宿直衣の袖の上に青き紙の松につけたるをおきて、わななき出でたり。清「それはいづこのぞ」と問へば、「齋院より」といふに、ふとめでたうおぼえて、取りてまゐりぬ。

まだ大殿籠りたれば、まづ御帳にあたりたる御格子を、棊盤などかきよせてひとり念じあぐる、いと重し。片つかたなればきしめくに、おどろかせたまひて、宮「など、さはすることぞ」とのたまはすれば、清「齋院より御文のさぶらふには、いかでかいそぎあげ侍らざらむ」と申すに、宮「げにいととかりけり」とて起きさせたまへり。御文あけさせたまへれば、五寸ばかりなる卯榎二つを卯杖のさまに頭などをつつみて、山橘・日かげ・山菅などうつくしげに飾りて御文はなし。ただなるやうあらむやはとて御

(七)底本「こもて」とよめる。

(七二)こらへてあげるのだが、とても重い。

(七三)一人なので格子の一方だけをあげるから、きいきい音がするので、中宮様がお目ざめになつて。「きしめく」は底本「きしめく」に

(七四)いかにももつともです。まことに早かつたのね。

(七五)やぶかうじ。(七六)ひかげのかづら。

(七七)何にもないといふことはないはずだと思つて御覽になると。

(七八)山も響きわたる斧の快い響はどうしたことかとなつねると、それはいはひの

卯杖を切る斧の音であつた。「いはひの杖」は卯杖。山、斧、杖は縁語。馬内侍集、齋院より卯杖を賜へれば「なげきとてほとほと思ふ斧の音はいはひの杖をきるにぞありける」かへし「斧の音もたづねざりせば玉椿はいひの杖をいかでしらまし」

(七九)それだけに御心くばりのほども。

(八〇)蘇枋色に見えるのもいたしたが、それは梅がさね(表白・裏蘇枋)のやうだ。

(八一)皇后の御返歌を。「くちをしけれ」を底本など「口おしう」につくる。

(八二)ほんたうの北越の國の雪山のであらうかと思はれて、消えさうもない。

(八三)いかにも勝つた氣持がしてどうかし

隠ずれば、卯杖の頭つつみたるちひさき紙に、

山とよむ斧の響をたづぬればいはひの杖の音にぞありける

御返し書かせたまふほども、いとめでたし。齋院にはこれよりきこえさせたまふも、御返しもなほ心ことに書きけがしおほう、御用意見えたり。

御使に白き織物の單衣、蘇枋なるは梅なめりかし、雪の降りしきたるに、

かづきてまゐるもをかしう見ゆ。そのたびの御返しを知らずなりにしこそ

くちをしけれ。

さて、その雪の山は、まことの越のにやあらむと見えて、消えげもなし。

黒うなりて見るかひなきさまはしたれども、げに勝ちぬるこちして、い

かで十五日待ちつけさせむと念ずる。されど、女房「七日をだにえ過ぐさ

じ」となほいへば、いかでこれ見はてむとみな人思ふほどに、にはかに内

裏へ三日入らせたまふべし。いみじうくちをし、この山のはてを知らでや

みなむことと、まめやかに思ふ。こと人も「げにゆかしかりつるものを」な

どいふを、御前にもおほせらるるに、おなじくはいひあてて御覽せさせば

やと思ひつるに、かひなければ、御物の具どもはこび、いみじうさわがし

て十五日までもたせたいと祈念する。
 (八四)見とどけよう。」「と」底本にない。
 (八五)心から眞實に残念に思ふ。

(八六)おなじことならいひあてたところを御覽に入れたいと思つてゐたのに、しかたがないから、御道具どもをはこび、ひどくさわがしいその最中に。

(八七)木守。庭の樹木などの番人をいふか。
 (八八)土塀の邊に廂をさしかけてゐたのを。

(八九)こはさせないで、よく番をして、十五日までゐなさい。

(九〇)結構な御褒美をおかみから下さるであらう。また、わたくし個人としてあつく御禮を申し上げます。

(九一)臺盤所の人が下衆などに與へるものを。「にくるる」底本など「にくまるる」。

(九二)子どもがのぼりませう。

(九三)それをとめて、いふことをきかない者があつたらいなさい。

(九四)中宮様が宮中へおはひりになつたので、わたくしは七日までおそばにゐて、その後里へ下つた。

(九五)里(自分の家)に歸つてゐる間も。

(九六)氣がかりなので。

(九七)宮中に仕へる賤しい役人。

(九八)御湯殿の掃除などをする女官。

(九九)こもり(木守)が拜んでよろこんだ

きにあはせて、こもりといふ者の、築土のほどに廂さしてゐたるを、縁の
 もと近く呼びよせて、清「この雪の山いみじう守りて、童などに踏み散ら
 させず、こぼたせで、よく守りて、十五日までさぶらへ。その日まであら
 ば、めでたき祿たまはせむとす。私にもいみじきよろこびいはむとす」
 などかたらひて、つねに臺盤所の、下衆などにくるるを、菓物やなにやと
 いとおほくとらせたれば、うち笑みて、木守「いとやすきこと。たしかに
 守り侍らむ。童ぞのぼりさぶらはむ」といへば、清「それを制して、き
 かざらむ者をば申せ」などいひ聞かせて、入らせたまひぬれば、七日まで
 さぶらひて出でぬ。

そのほども、これがうしろめたければ、おほやけ人、すまし、をさめな
 どして、たえずいましめにやる。七日の節供のおろしなどをさへやれば、
 拜みつることなど笑ひあへり。

里にても、まづ明るすなはち、これを大事にて見せにやる。十日のほ
 どに、使「五日待つばかりはあり」といへば、うれしくおぼゆ。また晝も
 夜も遣るに、十四日夜さり、雨いみじう降れば、これにぞ消えぬらむとい

ことなどを笑ひあつた。
(一〇〇)この雨できつと消えてしまつてゐるであらうと、とても心配で。
(一〇一)もう一日二日待てばいいのに惜しいことだ。
(一〇二)「まるで氣狂だわね」といつて笑ふ。
(一〇三)人が宿所へ行くのに、わたしはそのまま起きてすわつてゐて、召使の下衆を起させるが、なかなか起きないから。「下衆」は底本など「けに」
(一〇四)やつと起きたのを。
(一〇五)藁を編んで作つた敷物。圓座。まるく小さく残つてゐたさまをいふ。底本をはじめ諸本「わらうた」また、底本「はへり」の「り」ミセケチ。
(一〇六)底本「わらへ」(一〇七)底本「あざ」
(一〇八)このままとけずにあるでせう。
(一〇九)待ち遠しく心配で、氣が氣でない。
(一一〇)椀のへぎ板などをまげて作つた菓子折りのやうなもの。音便で「をりうづ」ともいふ。「具せさせて」は「持たせて」の意。底本「おもひつ」同系統本「おもひつ」「思ひつ」などある。
(一一一)能因本にはこの上に副詞「ひとも」がある。慶安刊本・春曙抄本「ひたもの」は誤。「ひたもの」はいつぱいの意。
(一一二)すぐに持たせてやつた器物をぶらさけて歸つて來て。

みじう、いま一日二日も待ちつけでと、夜も起きゐていひ歎けば、聞く人も「ものぐるほし」と笑ふ。人の出でて行くに、やがて起きゐて、下衆起さするに、さらに起きねば、いみじうにくみ腹立ちて、起き出でたる遣りて見すれば、使「わらふだのほどなむ侍る。こもりいとかしこう守りてわらはばもよせ侍らず。木守「明日、明後日までもさぶらひぬべし。祿たまはらむ」と申す」といへば、いみじううれしくて、いつしか明日にならば歌よみてものに入れてまゐらせむと思ふ、いと心もとなくわびし。
暗くらきに起きて、折櫃せびつなど具ぐせさせて、清「これにその白からむところ入いれて持もて來こ。きたなげならむところ、かき棄すてて」などいひやりたれば、いとく持もたせたるものをひきさげて、使「はやくうせ侍りにけり」といふに、いとあさましく、をかしようみ出でて、人にも語り傳たへさせむとうめき誦ずんじつる歌も、あさましようかひなくなりぬ。清「いかにしてさるならむ。昨日までさばかりあらむものの、夜のほどに消えぬらむこと」といひくんずれば、使「こもりが申しつるは、『昨日いと暗くらうなるまで侍りき。祿たまはらむと思ひつるものを』とて、手てをうちてさわぎ侍りつる」など

(二三)「もうとつくになくなつてをりましたよ」といふので、まつたくあきれた、せつかくすばらしく詠んで人にも語り傳へさせようと苦吟した歌も。「うめき」は底本「うめのき」

(二四)いひ、悲観してゐると。「いひくんず」は「いひ屈す」の義。

(二五)「手をうつ」は喜怒哀楽など感情が激發した時や、意外のことで驚いたり落膽した時などに思はずする動作である。

(二六)期待しすぎ、あたりすぎでございませぬ。「あまり」ことに「古本」「あまり」など。「他」の第二類本「あまりことか」

(二七)底本など「にや：侍る」がない。

(二八)底本など第一類本は「さて」がない。

(二九)底本「身はなげ身はなげつとて」雪山童子の半偈投身の說話になつて、物の蓋だけ持つて来て、「身はなげました」(身は容器の蓋を除いた部分)との秀句をいつた法師の機智を知つてゐた清女が、それを聯想して書いたものであらうか。

(池田龜鑑博士説) 諸本文の「ほうし」は從來「帽子」とよまれたが、關根正直博士、山岸徳平氏が「法師」に正された。

(三〇)すぐ持つて来たことが。

(三一)これほど心に深くかけて思つてゐたのを思ふにたがはせては、間があたらう。

(三二)實をいふと。

いひさわぐに、内裏よりおほせごとあり。宮「さて、雪はけふまでありや」とおほせごとあれば、いとねたうくちをしけれど、清「三年のうち一日までだにあらじ」と人人の啓したまひしに、昨日の夕暮まで侍りしはいとかしこしとなむ思うたまふる。けふまでは、あまりごとになむ。夜のほどに人のにくみて取り棄てて侍るにやとなむおしはかり侍ると啓せさせたまへ」などきこえさせつ。

さて、二十日まゐりたるにも、まづこのことを御前にもいふ。「身は投げつ」とて、蓋のかぎり持て來たりけむ法師のやうに、すなはち持て來しがあさましかりしこと、ものの蓋に小山つくりて、白き紙に歌いみじう書いてまゐらせむとせしことなど啓すれば、いみじく笑はせたまふ。御前なる人人も笑ふに、宮「かう心に入れて思ひたることをたがへつれば罪得らむ。まことは、四日の夜侍どもを遣りて取り棄てしぞ。返りごとにいひあてしこそいとをかしかりしか。その女出で來て、いみじう手をすりていひけれども、侍『おほせごとにて。かの里より來たらむ人にかく聞かすな。さらば、屋うちこぼたむ』などいひて、左近の司の南の築土などにみ

〔二三〕「女」は「をんな」でなく「おんな」
〔二七〕であらうか。または女が「こもり」
なのでなくて、「こもり」の妻をいふの
であらうか。能本「おきな」

〔二四〕清少納言をさす。

〔二五〕左近衛府、上東門、陽明門の間、職
の御曹司の東南にある。

〔二六〕いつてゐたといふことだから。「な
り」は傳聞推定の助動詞。

〔二七〕いかにもそなたの豫言どほりに、一
月十五日は勿論二十日まで残つてゐたで
あらう。〔二八〕主上。一條天皇。

〔二九〕まことに遠謀深慮をもつていひ争
つたことである。

〔三〇〕どうして、まあ。

〔三一〕眞からしよげて弱り、情なると、
天皇様もこちらへおこしになつて、底本
と同類本に「うへも…たまひて」なし。

〔三二〕ふだんから寵愛してをられる女房
〔清女〕のやうだと思つてゐたのに、こん
なこつそりと棄てさせるやうなひどいこ
とをなさるのを見て、へんだと思つてゐ
た。「おほす人」能本「おぼえの人」。従
來「おほくの人」と解されてゐたのは誤。

〔三三〕いや、まあ。感動詞。「あはれ」を
底本「あるれ」につくる。

な棄ててけり。侍「いとかたくて、おほくなむありつる」などぞいふなり
しかば、げに二十日も待ちつけてまし。今年の初雪も、降り添ひなまし。う
へもきこしめして、「いと思ひやり深くあらがひたり」など殿上人どもなど
にもおほせられけり。さても、その歌語れ。いまはかくいひあらはしつれ
ば、同じこと勝ちたるなり」と御前にもおほせられ、人人ものたまへど、
侍「なでふにか、さばかり憂きことを聞きながら啓し侍らむ」など、まこ
とにまめやかにうんじ、心憂がれば、うへもわたらせたまひて、主上「ま
ことに年ごろはおほす人なめりと見しを、これにぞあやしと見し」などお
ほせらるるに、いとど憂く、つらく、うちも泣きぬべきこちぞずる。
侍「いで、あはれ、いみじく憂き世ぞかし。後に降り積みて侍りし雪をう
れしと思ひ侍りしに、宮「それはあいなし、かき棄ててよ」とおほせごと
侍りしよ」と申せば、主上「勝たせじとおほしけるななり」とて、うへも
笑はせたまふ。

八十四

【十四】(一)りつばなもの。すばらしいもの。(二)「大和錦」に對し、唐土から舶來の錦である。

(三)裝飾を施した太刀。三節會、内宴、御禊、行幸などに束帶の時五脚が佩用する。(四)木彫佛の木目。ただし、池田鎮鑑博士はつくり繪の佛像で彩色を施したものを「つくり佛」といつた。「もくゑ」はもと「きゑ」(木繪)であつたと説かれる。

(五)底本など「の」がない。

(六)りつばな家の若君達でも着ることのできない綾織物を、職掌がら天子着御の麤塵(青色)の袍を自由に着てゐる姿。

「心に」の「に」は底本などがない。

(七)藏人所の雑色(定員八人、公卿の子孫またはしかるべき諸大夫よりこれに補す)または官職のない六位などの子どもなどで、四位五位の官爵にある殿ばらの侍として、その下に使はれてゐて。

(八)勾當の内侍が勅旨をうけたまはつて藏人の頭に傳へて宣下する文書。

(九)二宮(中宮、東宮)は毎年正月二日親王公卿以下を、大臣は任官の時に諸大臣以下を饗應する。こゝは後者。

(一〇)主上より甘栗を大臣に賜ふ使で、六位の藏人の役である。

(一一)大臣家でたふとがり大事になさるさまは。「たまへる」は底本「給へり」

めでたきもの 唐錦^{からにしき}飾り太刀^{かぎたち}。つくり佛のもくゑ。色あひ深く、花ぶさ長く咲きたる藤の花の松にかかりたる。

六位の藏人。えみじき君達なれど、えしも着たまはぬ綾織物を心にまかせて着たる青色姿などのいとめでたきなり。ところの雑色、ただ人の子どもなどにて、殿ばらの侍に四位五位の司あるが下にうちめてなにとも見えぬに、藏人になりぬれば、えもいはずぞあさましきや。宣旨など持てまあり、大襲のをりの甘栗の使などにまゐりたる、もてなしやむことながらたまへるさまは、いづこなりし天降り人ならむとこそ見ゆれ。

御むすめ、后にておはします、またまだしくても、姫君などきこゆるに、御書の使とてまゐりたれば、御文とり入るるよりはじめ、襷さし出づる袖口など、明暮見し者ともおぼえず。下襲の裾ひき散らして、衛府なるはいますこしをかしく見ゆ。御手づから杯などさしたまへば、わがこことにもいかにおほゆらむ。いみじくかしこまり、つちにめし家の子・君達をも、心ばかりこそ用意しかしこまりたれ、おなじやうにつれだちてありくよ。うへの近う使はせたまふを見るには、ねたくさへこそおほゆれ。御文書か

(二)主上よりの御消息を傳へる使者。
(三)勅使へのおもてなしに、梅を籠中からさし出す女房の美しい袖口なども。
(四)藏人自身も美しなすばらしくも。
(五)彼が昨日までははなはだかしこまりずつと下の者として仕へてゐた(「つち」は地下の意)大臣家の子息たちを對しても、心だけは思慮し、遠慮をしてゐるが、もう同じやうに肩をならべて。
(六)主上が、底本と同系統本「御文」：まありたまへば」がない。
(七)三四年ばかりの御つとめ(六位の藏人の任期は六年)を、服装も悪く、姿もなみなみの程度で殿上にまじはるのは、かひのないものだ。「まじはら」は第二類本「まじらは」
(八)任期を終へ、五位に敘せられる(巡爵)と「藏人の五位」といつて地下(おちげ)になる。その藏人の五位になつて殿上をおりなければならぬ時が近づくだけでも、命よりも惜しんであらうが、臨時に行はれる諸國の受領を申請してやめるにいたつてはまことに残念な感じがする。
(九)「夏」は底本など「一管」とある。
(一〇)巡爵により殿上から下りるが、いまの年の春夏から悲しむはじめたが、いまの世では御たまはりとしての官職(受領)などを所望して、あわてて奔走し競ひ望むことである。

せたまへば、御靦の墨すり、御團扇などまめりたまへば、馴れつかうまつる三年、四年ばかりを、なりあしく、ものの色よろしくてまじはらむは、いふかひなきことなり。かうぶりの期になりて、下るべきほどの近うならむにだに、命よりもをしかるべきことを、臨時のところどころの御たまはり申しておるこそいふかひなくおぼゆれ。むかしの藏人は、今年の春夏よりこそ泣きたちけれ、いまの世には走りくらべをなむする。

博士の才あるは、めでたしといふもおろかなり。かほにくげに、いと下薦なれど、やむごとなき人の御前に近づきまゐり、さべきことなど問はせたまひて、御書の師にてさぶらふは、うらやましくめでたしとこそおぼゆれ。

願文、表、もの序など作り出だしてほめらるるも、いとめでたし。

法師の才ある、はたすべていふべくもあらず。

後の晝の行啓。一の人御ありき。春日詣。葡萄染の織物。すべてなにもなにも、紫なるものはめでたくこそあれ。花も、絲も、紙も、庭に雪のあつく降り敷きたる。一の人。紫の花の中には、杜若ぞすこしにくき。

(三)官位の低いこと。文章博士は地下ちかの官（從五位下）、明經博士は正六位下相當。

(三三)御侍讀。御學問の師。

(三四)追善・祈誓等の爲の神佛への願文。

(三五)臣下より奉る具申等。事を具して君主に奉る文書。

(三六)底本「つえある」

(三七)底本「名」または「各」とよめる。

(三八)攝政關白の行列。

(三九)春日神社は藤原氏の祖天兒屋根命をまつるから、藤原氏で攝關たる人はかならず參詣し、公卿が美々しく隨行した。

春日の祭は二月・十一月の第一の申の日。

(六五)「(一)上品で美しいもの。優美なものを正式につけたかたくるしい姿でなく、ひらきのおほいかざみだけを着て。

(二)扇の顔をかかくして。慣用語法。

(三)鳥の子の薄い紙をちた本。底本など「にすやうのさうし」

(四)またさうひどく古びてもあない。

(五)底本「あをやかなり」(七)朽ちた板目形の模様を濃色で出したもの。

(八)底本など「風」がない。(九)組み糸。

(一〇)帽額などはつきりしてゐる簾の下から。底本「あさやかなり」

(一一)碓の緒の義で、猫をとめるためおもりにつけた綱だといふ。猫はこのころ貴紳に寵玩せられた。底本「はかりのを」

(一二)底本「ひきあるく」

六位の宿直姿（ちかむすび）のをかきしきも紫のゆゑなり。

八十五

なまめかしきもの ほそやかに清（きよ）げなる君達の直衣姿（ちかむすび）をかきしげなる童女のうへの袴（はかま）などわざとはあらではころびがちなる汗衫（あせなま）ばかり着て、卵植（うらじ）・薬玉（いすゞ）など長くつけて、勾欄（こうらん）のもとなどに扇（あふぎ）さしかくしてゐたる。

薄（うす）様の冊子（さふし）。柳（やなぎ）の萌（も）え出でたるに、青（あお）き薄（うす）様に書きたる文（ふみ）つけたる。三重（みへ）がさねの扇（あふぎ）。五重（ごへ）はあまりあつくなりて、もとなどにくげなり。いとあたらしからず、いたうものふりぬ檜皮（ひのかわ）葺（き）の屋（や）に、長（なが）き菖蒲（あやぶ）をうるはしうふきわたしたる。青（あお）やかなる簾（すだ）の下（した）より、几帳（きちやう）の朽木（くち）形（がた）、いとつややかにて、紐（ひも）の風（かぜ）に吹きなびかされたる、いとをかし。白（しろ）き組（ぐみ）のほそき。帽額（ぼうがく）あさやかなる簾（すだ）の外（ほか）、勾欄（こうらん）にいとをかきしげなる猫（ねこ）の赤（あか）き首綱（くびつな）に白（しろ）き札（しるし）つきて、いかりの緒（いと）、組（ぐみ）の長（なが）きなどつけて引きありくもをかしうなまめきたり。

五月（ごがつ）の節（せま）のあやめの藏人（くらひね）、菖蒲（あやぶ）のかづら、赤紐（あかひも）の色（いろ）にはあらぬを、領布（ひのり）・裙帯（くろひた）などして、薬玉（いすゞ）、皇子（みこ）たち上達部（かんだらめ）の立ちなみたまへるに奉（たま）れる、

(三)葛蒲、薬玉を親王公卿にとり傳へる女藏人(内侍、命婦などより下臈の女房)。(四)當時、女房がはれの装束に用ゐた頸肩にかけた裝飾。底本など「ひし」。(五)女官の正装の裝飾に長く垂れる腰紐である。「くんたい」といふ。(六)皇子たち、上達部がたまはつて。(七)薄練などで上を包んだ鬘書。(八)大嘗會、新嘗會(五節會)に、小忌衣(神事に用ゐる、白布を張り山藍で形木を青く摺つた衣服)を着て、齋戒神膳などに奉仕する若殿たち。(九)正暦四年十一月の五節である。「五節出ださせたまふに」は五節の舞姫を出させられること。この段は「なまめかしきもの」に屬するものであるが、便宜上別に段を立てた。「五節」は、底本「五せつ」(二)舞姫の世話をする女房。(三)こは、定子皇后の御妹原子、淑景舎の女御のことをさすとする説もあるが、皇后のことを申したのであらう。(春曙抄・島田退藏氏説)。(四)一條天皇御母、藤原詮子。道長の妹。(五)すなはち女院の人と淑景舎の人とは姉妹同士である。(六)この年は十五日が戊辰であつた。帳寮の試みは通常丑の日。この年は十二日。(七)山藍で染めた唐衣や汗衫を。

いみじうなまめかし。取りて腰に引きつけつつ、舞踏し、拜したまふも、いとめでたし。紫の紙を包み文にて、ふさ長き藤につけたる。小忌の君達も、いとなまめかし。

八十六

宮の五節出ださせたまふに、かしづき十二人、ことどころには女御、御息所の御かたの人出だすをばわるきことになむすると聞くを、いかにおほすにか、宮の御かたを十人は出ださせたまふ。いま二人は、女院、淑景舎の人、やがてはらからどちなり。

辰の日の夜、青摺の唐衣・汗衫をみな着せさせたまへり。女房にだにかねてさも知らせず、殿人にはましていみじうかくして、みな装束したちて、暗うなりにたるほどに、持て来て着す。赤紐をかしうむすび下げて、いみじうやうしたる白き衣、かた木のかたは繪にかきたり。織物の唐衣どもの上に着たるはまことにめづらしきなかに、童はまいていますこしなま

- (八)「着す」は底本「き」
 (九)右肩よりあはび結びに結び下げて。
 (一〇)未詳。「燈す」で張つた衣を見でみがきつやを出すのをいふと。(伊勢貞丈説)
 (一一)は木のかた給(蝶・鳥などの繪)
 (一二)衣にすり出した。「かた」は形、型。
 (一三)「いま」は、底本以下第一類本にない。
 (一四)「着て」の二字、第一類本にない。
 (一五)五節の舞姫の控へ室。常寧殿の四隅にある。
 (一六)取りはらつて外からよく見えるやうにし、舞姫などがまる見えて、はなはだへんなことだ。その當夜まではやはりきちんと整へたままおいた方がよからう。
 (一七)陪從の女房の袖口がこぼれ出てゐる。「出でたり」底本「てたち」
 (一八)雪の山の段に出た皇后附きの女房。
 (一九)山の井は堅く氷つてゐるがどんな氷がいま解けたのであらう。「山井」に「山藍」を、「ひも(氷も)」に「紐」に「解くる」は「うち解くる」意をかけてゐる。つまり、あなたはつれない人ですがその方の赤紐が解けました。一體どうしたことでせうの意。この歌後拾遺集十九雜五と清少納言集に見える。實方朝臣集には「いかなるひものよそにとくらむ(實方)」「あしひきの山井の水はさえなから」(のぶかた)となつてゐる。

めきたり。下仕^{しもづかへ}まで着^きて出^いでゐたるに、殿上人、上達部^{かんたつちう}おどろき興^{きよう}じて、小忌^{このみ}の女房とつけて、小忌^{このみ}の君達は外^とにゐてものなどいふ。

宮「五節^{ごせつ}の局^{つばね}を日も暮れぬほどにみなこぼちすかして、ただあやしうてあらする、いとことやうなることなり。その夜まではなほうるはしながらこそあらめ」とのたまはせて、さもまどはさず、几帳^{こま}どものほころびゆひつつこぼれ出^いでたり。

小兵衛^{こへい}といふが、赤紐^{あかひも}のとけたるを、「これむすばばや」といへば、實方^{じつかた}の中將よりてつくろふに、ただならず。

實方^{じつかた} あしひきの山井の水はこほれるをいかなるひものとくるなるらむといひかく。年若^{としわか}き人の、さる懸證^{けんじやう}のほどなれば、いひにくきにや、返しもせず。そのかたはらなる人どもも、ただうち過^すしつともかくもいはぬを、宮司^{みやうじ}などは耳とどめて聞きけるに、ひさしうなりげなるかたはらいたさに、ことかたより入りて、女房のもとによりて、宮司^{みやうじ}「などかうはおはするぞ」などぞささめくなる。四人^{にん}ばかりをへだててゐたれば、よう思ひ得^えたらむにてもいひにくし。まいて歌よむと知りたる人^{にん}のは、おほろげな

(一) 小兵衛は年若い女房で、しかもみんなの見てゐるところなので、返歌しにくいのであらうか。
(二) 間のわるさに。ぼつのわるさに。
(三) 「どうして返歌もしないでいらつしやるのですか」などとささやくやうである。「なる」は底本「也」。
(四) わたし(清少納言)は。
(五) 實方の歌は、尋常のものでないのにどうして未熟な返歌が出せようかと遠慮されるのはよくない。「いかてか」との「と」は底本など第一類本になし。
(六) 歌人はそんなものではあるまい。特(四) すぐれた歌でなくても躊躇なく、すつと、口に出すものである。
(七) 役人がにくみ嫌ふ様子を見せるのが氣の毒だから。
(八) 水の表面だけが淡くむすんだ薄氷ですから、さす日かげにすぐゆるんで解けたのでせう。「あわ・泡」に「あは(淡)」と、「鮑結び」を、「ひも(水も)」に「紐」を、「かざす」に日が「さす」をかけて「日かげのかづら」をいひ、「むすべる」「ひも」ゆるぶなどの縁語を用ゐた。底本「あわ」を「あか」につくる。なほ「うは水」はこの系統本「あは水」とあるものがあり、能本は「うす水」とある。(七) 舞姫が参殿する時の見送りに、病氣といつて行かない人にも中宮様が行くや

らざらむはいかでかとおつしましきこそはわるけれ。よむ人はさやはある。いとめでたからねど、ふとこそうちいへ。瓜はじきをしありくがいとほしければ、

清(三六)

うは氷あわにむすべるひもなればかざす日かげにゆるぶばかりを

と、辨のおもといふに傳へさすれば、消え入りつつ、えもいひやらねば、實方「なにとか、なにとか」と耳をかたぶけて問ふに、すこし言どもりする人の、いみじうつくろひ、めでたしと聞かせむと思ひければ、え聞きつけずなりぬるこそ、なかなか恥かくるこちしてよかりしか。のぼる送りなどに、なやましといひて行かぬ人をもたまはせしかば、あるかぎりつれだちて、ことにも似ず、あまりこそうるさげなめれ。

舞姫(三六)

は、相尹の馬の頭のむすめ、染殿の式部卿の宮のうへの御おとうと

の四の君の御腹、十二にて、いとをかしげなりき。

はて(三六)

の夜も、おひかづきいでもさわがず。やがて仁壽殿よりとほりて、

清涼殿の御前の、東の簀子より舞姫をさきにて、上の御局にまゐりしほどをもをかしかりき。

うにおつしやつたので、全部つれだつて来たから、ほかの舞姫の時とちがつて、あまりに大ききに見えるやうだ。「なめれ」は底本をはじめ第一類本「なれ」

(二六)右馬頭藤原相尹のむすめ。

(二七)村上天皇皇子の染殿式部卿爲親王の御妃の御妹にあたる、四番目の姫君の御子で當年十二歳。

(三〇)辰の日の夜が最終であるが、それは丑の日からはじまるからで、もし前文のやうに辰の日からはじまれば未の日になる。正暦三年もおなじ干支である。

(三二)末詳。おひかぶさる意といふ。

【八七】(一)この段も「なまめかしきもの」の一節である。

(二)もとは太刀の緒、後には幅廣くつくつて、緒とは別に前に垂れた。小忌の時は白色である。

【八六】(一)なんとなく、ただ普通平凡に見える人も、すばらしく思はれる。

(二)色とりどりの小ぎれを。

(三)當時、宮女正装の時頭髪に飾つた物。

(四)鹽屋殿の北にあつた。底本など「せんようてん」第二類本「せうえうてん」

能本「清涼殿一前本「せんえう殿」

(五)髻のもとを結ぶ紐み糸。紫のむら濃。

(六)きはだつてりつづばなこと思つてゐるのも、もつともである。

(七)第二類本「山あゐ」

八十七

細太刀に平緒つけて、清げなる男の持てわたるもなまめかし。

八十八

内裏は五節のころこそすずろにただなべて見ゆる人もをかしうおぼゆれ。主殿司などの、色色のさいでを、物忌のやうにて、釵子につけたるなどもめづらしう見ゆ。宣耀殿の反橋に、元結のむら濃いとけざやかにて出でゐたるも、さまざまにつけてをかしうのみぞある。上の雑仕、人のもとなる童もいみじき色ふしと思ひたることわりなり。山藍、日かげなど、柳篋に入れて、かうぶりしたる男など持てありくなどいとをかしう見ゆ。殿上人の、直衣脱ぎたれて、扇やなにやと拍子にして、「つかさまさりとしきなみぞ立つ」といふ歌をうたひ、局どもの前わたる、いみじう立ち馴れたらむこちもさわぎぬべしかし。まいて、さと一度にうち笑ひなどしたるほど、いとおそろし。行事の藏人の搔練襲、ものよりことに清らに見

(八)柳の木を廣き五分ほどに細く三角に削つて白糸で編み四方を張つた箱。

(九)紋爵して地下になつた藏人の五位。

(一〇)「御前よりうちあげうちおろし越す波はつかさまりのしき波ぞ立つ」(梁塵秘抄神歌)などの類の歌謡。「つかさまさり」は官位昇進の意。

(一一)その時には長年宮仕した女房たちでもきつと胸騒ぎがすることであらうよ。

(一二)表裏とも紅の練り絹の下襷をいふ。

(一三)女房が、奥は張つた様子をほめたりそしつたりして、このころは五節のことばかりで他に何もないうやうに見える。

「出で」底本など第一類本にない。「そしり」は底本「はしり」

(一四)天皇が帳臺の前で舞姫の試演を御覽になる行事。十一月の第二の丑の日に行ふ。試樂とも調樂ともいふ。

(一五)舞姫世話役の女房。第一類本以外は「かいつくろひふたりわらは」とあつて「の」がない。従來はその本文によつてゐる。

(一六)理髪の童女。

(一七)つらにくいくらみにいふので。底本第一類本「ありにくき」

(一八)一人入れますと、うらやむ人がありますから、絶對に。(一九)がやがやとさわめき入ると。底本「さめき入て」

ゆ。褥とどなど敷きたれど、なかなかえも上のほりあらず。女房の出であたるさまほめそしり、このころはことごとくなかめり。

帳臺ちやうたいの夜、行事の藏人のいとぎびしうもてなして、かいつくろひふたり、二人の童わらわよりほかにはすべて入るまじと戸をおさへて、おもにくきまでいへば、殿上人なども、「なほこれ一人は」などのたまふを、藏人「うらやみありて、いかでか」などかたくいふに、宮の女房の二十人ばかり藏人をなにとませず戸をおしあけてざめき一九入れば、あきれて、藏人「いとこ二〇はずぢなき世かな」とて、立てるもをかし。それにつけてぞ、かしづ三ぎどももみな入るけしき、いとねたげなり。うへにもおはしましてをかしと御覽じおはしますらむかし。

童舞わらわのの夜は、いとをかし。燈臺とうだいにむかひて寝わたるかほどももらうたげなり。

八十九

人「無名むみやうといふ琵琶びばの御琴ごことをうへの持てわたらせたまへるに、見みなどし。

- (三〇)まことにこれは無體なことですな。
 (三一)「かしづき」底本にない。
 (三二)底本とその系統本、この一句「をかし」まで脱落。童舞は卯の日に舞姫の世話をする童女を、主上の御前に召して見そなはず儀。下文「むかひて寝たる」は第一類本以外の諸本「むかひたる」
 【六九】(一)天皇様がちちらへもつていらつしやつたので。
 (二)行つてみると、女房が彈くのではなく、ただ紋などを手なくさみにして。
 (三)ただもうなんでもなく、名もない。底本「名もおし」
 (四)わたくしのところにとでもすばらしい筈の筈があるのよ。お父様(道隆)が下さいましたの。「まろ」は底本「まつ」
 (五)隆圓。道隆の四男、定子皇后、淑景舎の御弟。正暦五年權少僧都十五歳、寛弘八年四月權大僧都。長和四年寂。三十六歳。「隆圓に」の「に」底本などない。
 (六)淑景舎様はお聞き入れなさらないのでほかのことばかりをおつしやるので。
 (七)どうかして淑景舎様にお答へさせ申さうといく度もいく度も申されるが。「いらへさせ」は底本「いらへ扱」
 (八)「いなかへじ」といふ名の御物の筈があるので、それに「否換へじ」と秀句されたのである。

て、かき鳴らしなどす」といへば、ひくにはあらで、緒などを手まさぐりにして、女房「これが名よ、いかにとか」ときこえさするに、宮「たたいとはかなく、名もなし」とのたまはせたるは、なほいとめでたしとこそおぼえしか。

淑景舎などわたりたまひて、御物語のついでに、淑景舎「まろがもとにいとをかしげなる筈こそあれ。故殿の得させたまへりし」とのたまふを、僧都の君「それは隆圓にたまへ。おのがもとにめでたき琴侍り。それに代へさせたまへ」と申したまふを聞きも入れたまはで、ことごとをのたまふに、いらへさせたまつらむとあまたたびきこえたまふに、なほものものたまはねば、宮の御前の、「いなかへじ」と思したるものを」とのたまはせたる御けしきのいみじうをかしきことぞかぎりなき。

この御筈の名、僧都の君もえ知りたまはざりければ、ただうらめしう思いためる。これは職の御曹司におはしましほどのことなめり。うへの御前に、いなかへじといふ御筈のさぶらふななり。

御前にさぶらふものは、御琴も御筈もみなめづらしき名つきてぞある。

(九)「いなかへじ」といふ御笛の名を。

「笛」は底本「文」第一類本など、「ふみ」

(一〇)いらつしやつた時の事などのやうである

(一一)底本など第一類本「御ふみ」

(一二)六絃。大和琴。あづま琴。

(一三)宜陽殿には累代の御物(樂器、書籍の類その他)を納めてあり、その第一の棚には最上の名器があつたので、「なになには宜陽殿の一の棚にあり、または、おくべきものなり」と頭中將(藤原齊信であらう)が口癖のやうにいはれたの意か。

【九十七】(一)弘徽殿の上の御局の御簾の前で。(二)縦様。まっすぐに立てて。

(三)すばらしいなど申すのもありふれて到底詞には盡し難し桂、またつや出しをした衣などを。底本「いふによのつねなる」(四)持つていらつしやるのさへ。

(五)はづれてお見えになるのは。底本「は、たとふ……たまへる」脱落。

(六)「人」は底本「人々」第一類本「人」

(七)「船を移し相近づきむかへて相見る。酒をそへ燈をめぐらし重ねて宴を開く。

千呼萬喚して始めて出て来る。なほ琵琶を抱いて半ば面を遮る」(白樂天、琵琶行の一節、原漢文)による。底本「なかは」

の「は」がない。(八)とてもこれほどりつばではなかつた

玄象、牧馬、井手、渭橋、無名など。また和琴なども、朽目、鹽籥、二貫などぞきこゆる。水龍、小水龍、宇多の法師、釘打、葉二つ、なにくれなど、おほく聞きしかど忘れにけり。「宜陽殿の一の棚に」といふ言ぐさは頭の中將こそしたまひしか。

九十

上の御局の御簾の前にて、殿上人日一日琴笛ふき、遊び暮らして大殿油まゐるほどに、まだ御格子はまゐらぬに、大殿油さし出でたれば、戸のあきたるがあらはなれば、琵琶の御ことを、たゞさまに持たせたまへり。紅の御衣どものいふもよのつねなる桂、また張りたるどもなどをあまた奉りて、いと黒うつややかなる琵琶に、御袖をうちかけてとらへさせたまへるだにめでたきに、そばより御額のほどのいみじう白うめでたくげざやかにてはづれさせたまへるは、たとふべきかたぞなきや。近くゐたまへる人にさしよりにて、清「なかばかくしたり」けむえかくはあらざりけむかし。あれはただ人にこそはありけめ」といふを、道もなきにわけまゐりて申せ

でせうよ。なぜならばあの女は妓女で、平民でしたらうから。

(九)「潯陽江頭夜客を送る。楓葉荻花秋瑟瑟。主人は馬より下り客は船に在り。酒を擧げ飲まん和欲すれども管絃なし。醉うて歡を成さず慘として將に別れんとす。別るる時茫茫として江、月を浸す」

(白樂天、琵琶行の一節、原漢文)の「別」に縁づけられたものであらうといふ。

(池田龜鑑博士説)

【九七】(一)残念で、くちをしいもの。とてよくやしいもの。

(二)急ぎのしたてものを縫ふ時、うまく縫へたと思つて、針をひきぬいたらはじめから糸の尻をむすんでおかなかつたのだつた。

(三)裏返しに縫つたのも。

(四)東三條(道隆邸)南院。正曆四年三月卅日焼失、後再興。正曆五年十一月十六日に道隆はこの東三條南院に遷つてゐる。

(五)源兼澄のむすめ、敦康親王の御乳母。

(六)衣服のゆきの廣い方を。「かたの身」は片身と考へてはどうだらうか。

(七)縫ひ絲の尻も結ばぬほど急いで。

(八)片身づつ擔當して縫つたのを御背で一つにあはせたところ、すつかり。

(九)「たり」は底本「たち」

(一〇)綾織などのやうに模様があり、裏表

ば、笑はせたまひて、宮「別れ」は知りたりや」となむおほせらるるも、いとをかし。

九十一

ねたきもの。人のもとにこれより遣るも、人の返りごとくも書きてやりつる後、文字一つ二つ思ひなほしたる。とみのもの縫ふに、かしこう縫ひつと思ふに、針を引き抜きつれば、はやく尻をむすばざりけり。また、かへさまに縫ひたるもねたし。

南の院みなみにおはしますころ、「とみの御物なり。たれもたれも、ときかはさずあまたして縫ひてまめらせよ」とて、たまはせたるに、南面に集まりて、御衣の片身かたみづつたれかたく縫ふと、近くもむかはず、縫ふさまもいとも狂くるほし。命婦いのとの乳母めのといととく縫ひはててうち置きつる、ゆだけのかたの身を縫ひつるがそむきざまなるを見ついで、とぢめもしあへず、まどひ置きて立ちぬるが、御背おあはすれば、はやくたがひたりけり。笑ひののしりて、女房「はやくこれ縫ひなほせ」といふを、命婦「たれあしう縫ひた

がわかるものであつたら、不注意に裏を見ないで縫つた時その人はなるほど悪かつたといつてなほしもませうが、これは無紋、模様のない御衣ですから、なを見ぬに見わけられませう。かうした場合だれがなほしませうか。

(二)「そんなことをいつて捨てておかれませうか」といつて。

(三)絨子・成子の御乳母。(岩野祐吉氏説)

(四)藤原忠君のむすめ、藤原時明の妻(岩野祐吉氏説)

(五)底本、第一類本「よりよせて」

(六)見てゐると。

(七)非常にりつばな人といふわけではないが、かなりの身分の男などでもある時は、さうもしないのに、男があるのかたたくとめても、「ほんのすこし」などといつてもつていく。

(八)権勢ある家の下僕などが来て、無禮なことをいひ、こんな無禮をしたとて、この受領風情にこの自分をどうすること

ができようぞなど思つてゐるのは、まづたく癪しやくにさはる。「もの」は第二類本

「さるべき所の」

(九)「追ひて」は底本など第一類本「思て」

(一〇)「こちすれ」は底本「こちこそすれ」

りと知りてかなほさむ。綾あやなどならばこそ裏を見ざらむ人もげになほさめ、無紋むもんの御衣ごいなればなにをしるしにてかなほす人たれもあらむ。まだ縫ひたまはぬ人になほさせよ」とて、きかねば、「さいひてあらむや」とて、源少納言、申納言の君などいふ人たち、もの憂うれげに取りよせて縫ひたまひしを見やりてゐたりしこそをかしかりしか。

おもしろき萩・薄はくなどを植うゑて見るほどに、長櫃ながびつち持たる者、鋤すきなどひきさげて、ただ掘りに掘りて往ぬることわびしうねたけれ。よろしき人などのあるときは、さもせぬものを、いみじう制せいすれど、「ただすこし」などうちいひて往ぬる、いふかひなくねたし。

受領ずりやうなどの家いへにも、もの下部しもぶなどの來きてなめげにいひ、さりとてわれをばいかがせむなど思ひたる、いとねたげなり。

見まほしき文などを、人の取りて、庭にわに下りて見立てる、いとわびしくねたく、追おひて行けど、簾すのもとにとまりて見立てるこちこそ、飛とびも出でぬべきこちすれ。

【九十二】(一)聞きづららしいもの。見づららしいもの。見聞くにたへられぬもの。にがにがしいもの。

(二)十分にその音もひき調へられない琴を、しつかり調子もあはさないで自分ではすばらしいつもりでひいてゐるもの。底本とその同類諸本この一文なし。第二類本・堺本により補つてみたが、この系統本文としては、はじめからなかつたものかも知れない。「ひきとどめぬ」は能本・前本「ひきととのへぬ」とある。

(三)その人のうわさをいつた時。それは問題にしてゐる人がたいした人ではなくても、たとへ召し使つてゐるやうな者であつても、まことに。底本と同類本「の人」がない。

(四)しばらく滞在してゐるところで。

(五)ふざけてゐるの。

(六)顔のみつともない幼児を親としていとしいままにかはいがり、愛し、その幼児の聲のまままねて、幼児のいつたかたことなどをまねてゐるの。

(七)教養學問のある人の前で。「才」は底本「才」諸本「さえ」。「聲」は能本「かほ」とある。

(八)「ほめ」は底本など諸本「ほめし」

【九十三】(一)あぎればはてなるともいひやうのないもの。びつくりしてことばも出

九十二

一 かたはらいたきもの 二 よくも音ひきとどめぬ琴をよくも調べで心のかぎりひきたてたる、客人などにあひてもいふに、奥のかたにうちとけことなどいふを、えは制せで聞くこち。思ふ人のいたく酔ひておなじことしたる。聞きめたりけるを知らで、人のうへいひたる。それはなにばかりの人ならねど、使ふ人などだにいとかたはらいたし。旅だちたるところにて、下衆どものざれめたる。にくげなるちごを、己がこちのかなしきまに、うつくしみ、かなしがり、これが聲のままにいひたることなどかたりたる。才ある人の前にて、才なき人のおぼえ聲に人の名などいひたる。ことによしともおぼえぬわが歌を人にかたりて、人のほめなどしたるよしふもかたはらいたし。

九十三

一 あさましきもの 刺櫛すりて磨くほどに、ものにつきさへてをりたるこ

ないもの。

(二) そんな大きなものはあたりがせまく感じられるほどつしりしてゐるから、よもや轉覆などしまいと思つてゐたのに、ひつくりかへつてゐるのを見ると。

(三) あつけない。はりあひがない。

(四) 遠慮もなくいつてゐるのを聞く氣持。

(五) 自分がまつたく知りもしないし、見もしないことを、あなたは知つてゐるとか、あなたがしたとかいつて人の目の前で、一言の辯解もさせないやうなけんまくでいつたの。「あらかはす」は底本など「あらはす」

【平四】(一) 残念なもの。

(二) 底本「五節の御佛名」

(三) あたりも暗くなるほどひどく。

(四) めでたい節會に、重大な御物忌があつたもの。節會は即位・拜賀・白馬・端午などの節日の集會。

(五) かねてから準備してゐて、いつになつたその日が来るのか、早く來ればいいのにと待つてゐることが、さしきはりがあり、急に中止になつた場合。

(六) 管絃の遊びなどをもし。「をもし」は底本「せりし」第一類本「をもし」第一類本「もしは」とある。

こち。車のうち覆りたる。さるおほのかなるものはところせくやあらむし思ひしに、ただ夢のこちして、あさましうあへなし。

人のために、はづかしうあしきことをつみもなくいひゐたる。かならず來なむと思ふ人を夜一夜起き明かし待ちて、曉がたにいささかうち亡れて寝入りにけるに、鳥のいと近く「かか」と鳴くに、うち見あげたれば晝になりける、いみじうあさまし。

見すまじき人に、外へ持て行く文見せたる。むげに知らず、見ぬことを人のさしむかひてあらがはず、くもあらずいひたる。ものうちこぼしたこち、いとあさまし。

九十四

一 ちををしきもの 五節・御佛名に雪降らで、雨のかきくらし降りたる。節會などに、さるべき御物忌のあたりたる。いとなみいつしかと待つこと、さはりあり、にはかにとまりぬる。あそびをもし、見すべきことありて、呼びにやりたる人の來ぬ、いとくちをし。

(七)底本「も」がない。

(八)衣裳が優美にこぼれ出て、趣向が。

(九)極言すれば「よくいはば」の試譯)、非常にかはつてゐて、あまりのことに見苦しいほどだと思ふくらゐ飾つたりしてゐるのに、見てほしいやうな人が馬でも車でも、あひもしないで、だれにも見られないで終つてしまふのは。「よくいはば」の意のところ從來「用意はけしからず」「用意よくは、はげしからず」などの本文がとられてゐるが、「よくいはば」の本文によるべきである。「見えず」は底本「見す」

(一〇)だれも見えてくれないので困ると、せめてすこし風流気のある下衆などで、他の人に話のできさうな者でもいいからあひたいたと思ふのも、實にへんな心理だ。

【九五】(一)皇后が五月の御精進(正・五・九)の三月を三齋月といふ)を職の御曹司で行はれたのである。こゝは長徳四年、(二)周囲を壁で塗り、明り取りを附け、つま戸で出入する部屋。衣服調度などを納めておく。底本「前の」がない。

(三)柱と柱との間を一間といふ。二間の部屋。

(四)特別に設備したので、普通とかはつてゐるのもおもしろい。「ならぬ」は

男も、女も、法師も宮仕所などよりおなじやうなる人もろともに寺へも
まうでものへも行くに、このましようこぼれ出で、用意、よくいはば、けし
からず、あまり見苦しとも見つべくぞあるに、さるべき人の馬にても車に
ても行きあひ、見えずなりぬる、いとくちをし。わびては、すきずきしき
下衆などの、人などにかたりつべからむをがなと思ふも、いとけしからず。

九十五

五月の御精進のほど、職におはしますころ、塗籠の前の二間なるところ
をことにしつらひたれば、例ざまならぬもをかし。

一日より雨がちに曇り過ぐす。つれづれなるを、請「ほととぎすの聲た
づねに行かばや」といふを、われもわれもと出で立つ。賀茂の奥に、なに
さきとかや、棚機の渡る橋にはあらで、にくき名ぞきこえし、「そのわたり
になむ、ほととぎす鳴く」と人のいへば、「それは鯛なり」といふ人もあ
り。「そこへ」とて、五日の朝に、宮司に車の案内いひて、北の陣より、
「五月雨は、とがめなきものぞ」とて、さしよせて、四人ばかり乗りて行

底本、なかね……」。

(五)なに(某)崎とか、あのたなばたのわたる鶴の橋ではなくて、それに似たにくらひ名であつた。これは西行のゐたといふ賀茂の「ささき」といふ地をいふのであらうか。現在京都市上京區上賀茂。

(六)五月雨の降るころは、さしつかへないといふので車を職の殿舎にさしよせてそこで乗り、北の陣から出たのである。

(七)「いへど」は底本「いへは」

(八)禁止の副詞。いけません。この冊子に三例、落窪・榮華に各一例、その他副點語として多數例がある。底本「まこ」

(九)無情なつれないふうで。

(一〇)ここは左近の馬場(一條西洞院)。

(一一)底本「御は」諸本「さは」

(一二)騎射、射禮、射禮、射禮などの演習。ここは騎射の手番。射手を左右二人づつがへる。五日は左近、六日は右近の騎射。

(一三)「つきたまふといへど」は、底本「つきたまへといへは」

(一四)高階成忠道隆の室高内侍の父)の三男。皇后の御伯父。「けり」は底本「ける」

(一五)質素で。(二)窓檜・杉などの薄板を斜に組んで造つた板の屏風。

(一七)黒三稜草の莖を抽いて編んだ籬。

(一八)いかにもみなのうわざどほりやかましいと思ふほどに。「かしがまし」は底

く。うらやましがりて、女房「なほいま一つして、おなじくは」などいへ

ど、宮「まな」とおほせらるれば、聞き入れず、情なきさまにて行くに、

馬場といふところにて、人おほくてさわぐ。清「なにするぞ」と問へば、

車副「手つがひにて、眞弓射るなり。しばし御覽じておはしませ」とて、

車とどめたり。「左近の中將、みなつきたまふ」といへど、さる人も見

ず。六位など、立ちさまよへば、清「ゆかしからぬことぞ。早く過ぎよ」

といひて、行きもて行く。道も、祭のころ思ひ出でられてをかし。

かくいふところは、明順の朝臣の家なりけり。清「そこもいざ見む」

いひて車よせて下りぬ。田舎たち、ことそぎて、馬の縮かきたる障子、

代屏風、三稜草の簾など、ことさらにむかしのことをうつつしたり。屋の

まもはかなだち廊めきて端近に、あさはかなれどをかしきに、げにぞか

がましと思ふばかりに鳴きあひたるほととぎすの聲を、くちをしう、御

にきこしめさせず、さばかり慕ひつる人人をと思ふ。明順「ところにつ

ては、かかるとをなむ見るべき」とて、稻といふものを取り出でて、

き下衆どものきたなげならぬ、そのわたりの家のむすめなどひきゐて

本「かしかさし」

(一九)残念にも。底本「口おしと」

(二〇)つれて来て。底本など「ひきもて」

(二一)くるくる廻る廻るもの。糸を引くものか、

扱すり曰か。おそらく後者。

(二二)唐繪にかいてあるやうな大きな懸盤

で。懸盤は食器をのせる臺。

(二三)この品々はまことに田舎臭いもので

す。しかし、かうしたところに来た人は、

ともすると主人が困つて逃げ出してしま

ふほどまで食物を催促して出させてめし

あがりになるものですが。このやうに箸

もおつけにならぬやうでは田舎へのお客

襟らしくありません。

(二四)その座をとりもち。

(二五)そのやうに下藤の女官などのやうに

一列にならんでたべられませうか。

(二六)ではお膳からおしして召しあがれ。

(二七)いつもはひぶし(體を前方にふせて、

肘を座におろし、衣裳に埋もれたやうに

坐る女房のみずまひ)に馴れていらつし

やる人たちですから。(二八)だつて、途中

でもいいではありませんか。

(二九)卯の花がたぐん咲いてゐるのを折り

りとつて、車の簾や横などにさしたが、さ

しきれず、車の屋根のおほひや棟などに、

長い杖を、まるで屋根を葺いてあるやう

にさしたから。

て、五六人してこかせ、また見も知らぬくるべくもの二人して引かせて歌

うたはせなどするを、めづらしくて笑ふ。ほととぎすの歌よまむとしつる、

まぎれぬ。唐繪にかきたる懸盤してもの食はせたるを見入る人もなければ、

家の主、明順「いとひなびたり。かかるところに來ぬる人は、ようせ

ずは、主逃げぬばかりなど、責め出だしてこそまゐるべけれ。むげにかく

ては、その人ならず」などいひて、とりはやし、明順「この下藤は、手づ

から摘みつる」などいへば、清「いかでか、さ女官などのやうに、着き並

みてはあらむ」など笑へば、明順「さらば、取りおろして。例のはひぶし

にならばせたまへる御前たちなれば」とて、まかなひさわぐほどに、「雨降

りぬ」といへば、いそぎて車に乗るに、清「さて、この歌はここにてこそ

よまめ」などいへば、女房「さはれ、道にても」などいひて、みな乗りぬ。

卯の花のいみじう咲きたるををりて、車の簾、かたはらなどにさしあま

りて、おそひ・棟などに長き杖を葺きたるやうにさしたれば、ただ卯の花の

垣根を牛にかけたるとぞ見ゆる。供なる男どもいみじう笑ひつつ、「こ

こまだし、ここまだし」とさしあへり。

(三〇)まるで卯の花の垣根を牛にかけてひかせてゐるやうに見える。「とぞ」は底本「そと」

(三一)「散り散らず聞かまほしきを故郷の花見て歸る人もあはなむ」(拾遺集一春、伊勢、古今六帖二)「あはなむ」は逢つてほしいの意で、「なむ」はあつらへ望む意の終助詞。「人」でなく「人」が主格になつてゐるのは前段末の「行きあひふ」などとおなじ古い語法で豫期せずあふ意。(橋純一氏説)

(三二)藤原公信。太政大臣爲光の六男、長徳二年九月侍従。十九歳。一條殿は、當時爲光の遺族たちが住んでゐた。

(三三)侍所で、とり亂した姿でいらつしやつたがいそいで立ち上り、指貫をおめしになりました。

(三四)上東門。左右は土を塗つた大垣で、その間に屋根なしの門があつた。

(三五)「帯」は底本「思ひ」

(三六)「道ひ來る」は底本「思ひくる」

(三七)第一類本「あへき」第二類本「あつき」ただし、底本「あつき」ともよめる。

前田本「あつち」。「あつち」を「あつち」と讀み、平家物語の「あつち死に」とあはせ考へて、をどる、はねる、ばたばたする意にとる説(倉城準太郎氏)もある。(三八)正氣の人が乗つてゐるとは絶對に見えない。まあ、一度おりて見なさい。

人もあはなむと思ふに、さらにあやしき法師、下衆のいふかひなきのみたまさかに見ゆるに、いとくちをしくて、近く來ぬれど、「いとかくてやまむは。この車のありさまぞ人にかたらせてこそやまめ」とて、一條殿のほどにとどめて、清「侍從殿やおはします。ほととぎすの聲聞きていまなむ歸る」といはせたる、使「侍從」ただいままゐる。しばし、あが君」となむのたまへる。侍にまひろげて、おはしつる、いそぎ立ちて、指貫たてまつりつ」といふ。「待つべきにもあらず」とて、走らせて、土御門さまへやるに、いつの間にか裝束きつらむ、帯は道のままにゆひて、「しばし、しばし」と追ひ來る。供に侍三四人ばかり、ものもはかで走るめり。清「とく遣れ」と、いとどいそがして、土御門に行き着きぬるにぞあへぎまどひておはして、この車のさまをいみじう笑ひたまふ。

侍從「うつつの人の乗りたるとなむ、さらに見えぬ。なほ下りて、見よ」など笑ひたまへば、供に走りつる人どもも興じ笑ふ。侍從「歌はいかが。それ聞かむ」とのたまへば、清「いま御前に御覽せさせて後こそ」などいふほどに雨まことに降りぬ。侍從「などかこと御門御門のやうにもあらず、

(三五)「も」は底本など「に」
 (四二)「まこと」は底本など「まこと」
 (四一)この土御門にかぎつてかう屋根もな
 くはじめに造つて置いたのだらうと。
 「かうへ」は底本「かうへ」底本と同類
 本「この」なし。
 (四三)どうして歸らうかな。底本など「歸」
 なし。

(四四)これからさき歸つて行くのはがつか
 り力ぬけは、さあいらつしやいませ。内裏
 (四四)では、さあいらつしやいませ。内裏
 へ御一緒に、おともいたしませう。

(四五)烏帽子・直衣・指貫の略装ではどう
 して参内できよう。

(四六)木降りになつたので、笠をもつてあ
 ないこちらのおどもの男どもは車を門内
 にどんどん引き入れてしまつた。「笠も」
 は底本など「かさり」

(四七)このたびは、ゆるりゆるりと、元氣
 なく、なまけななさうな様子で。
 (四八)中宮様はどうだつたかとおたづねに
 なる。一緒に行けないでうらやましがつ
 てゐた人々は、「人々」は底本「人に」

(四九)公信が一條の大路を走つたことを話
 した時には、みな笑つた。「藤侍従」は藤
 原氏で侍従であるの意。

(五〇)どこに。どれ。

(五一)歌をよまなかつたわけを。

四二 この土御門しかかうへもなくしそめけむとけふこそいとにくけれ」など
 いひて、侍従「いかで歸らむとすらむ。こなたさまはただおくれじと思ひ
 つるに、人目も知らず走られつるを、奥いかむことこそいとすさまじけれ」
 とのたまへば、清「いざたまへかし。内裏へ」といふ。侍従「烏帽子にて
 はいかでか」清「とりやりたまへかし」などいふに、まめやかに降れば、
 笠もなき男ども、ただ引きに引き入れつ。一條殿より笠持て來たるを、さ
 せて、うち見かへりつつ、こたみはゆるゆるともの憂げにて、卯の花ば
 かりをとりておはするもをかし。

さて、まゐりたれば、ありさまなど問はせたまふ。うらみつる人々、怨
 じ、心憂がりながら、藤侍従の一條の大路走りつる語るにぞ、みな笑ひぬ
 る。宮「さて、いつら、歌は」と問はせたまへば、清「かうかう」と啓す
 れば、宮「くちをしのことや。上人などの聞かむに、いかでか、つゆをか
 しきことなくてはあらむ。その聞きつらむところにて、きとこそはよま
 しか。あまり儀式さだめつらむこそあやしけれ。ここにもよめ。いと
 ふかひなし」などのたまはずれば、げにと思ふに、いとわびしきを、いひ

(三)殿上人など聞くであらうに、どうして歌をよまなかつたなどといつてすまされようか。

(四)すぐ、詠めばよかつたのに。

(五)趣向をこらさうとして、格式ばり過ぎたのがよくないのだわ。

(六)ほんとにこつまらないぢやないの。

(七)「いと」は底本「はと」

(八)能本系統本には「は」とぎすなく音たつねに君ゆくと聞かば心をそへもしてまし^しの歌がある。これは再稿以後に作者か後人かが書き入れたものであらう。

(九)これで(この稿と紙とで)すぐに。

(一〇)「の」は底本などがない。

(一一)清女にもならべられる學才を持つた皇后つきの女房。九三頁参照。

(一二)やはりあなたがさきに。「そこ」は對稱の代名詞。

(一三)雷がとてもおそろしく鳴つたので無

我夢中で、ただこわくてたまらないので。

(一四)全部下しわたし、あわててゐたので。

(一五)「成りて」とも考へられる。

(一六)すぐ、机にむかひこの返事をさしあげようと思つて机にむかひつたが。

(一七)雷のお見舞に。

(一八)西のお座敷に出て應對し、お話申しあげなどしてゐるうちに、とりまぎれて歌の話もしないでしまつた。

あはせなどするほどに、藤侍従ありつる花につけて、卯の花の薄様に書きたり。この歌おぼえず。これが返しまづせむなど、硯取りに局にやれば、

宮「ただこれしてとくいへ」とて、御硯の蓋に紙などしてたまはせたる。

清「宰相の君書きたまへ」といふを、宰相「なほ、そこに」などいふほど

に、かきくらし雨降りて、神いとおそろしう鳴りたれば、ものもおぼえ

ず、ただおそろしきに、御格子まありわたしまどひしほどに、このことも

忘れぬ。

いとひさしう鳴りて、すこしやむほどには暗うなりぬ。ただいまなほこ

の返りごとたてまつらむとてとりむかふに、人人・上達部など、神のこと

申しにまありたまへれば、西面に出でて、ものきこえなどするにまぎれ

ぬ。こと人はたさして得たらむ人こそせめとてやみぬ。なほこのことに宿

世なき日なめりとくんじて、清「いまはいかでさなむ行きたりしとだに人

におほく聞かせじ」など笑ふ。宮「いまもなかその行きたりしかぎりの

人どもにていはざらむ。されど、させじと思ふにこそ」とものしげなる御

けしきなるも、いとをかし。清「されど、いまはすさまじうなりにて侍る

(六七)他の人はまた、さうして歌をもらつた人(清女)こそ返歌すべきだらうと考へてすてておいたので、どうもこのこと縁のない日のやうだと悲觀して。

(六八)もう決してほととぎすを聞きに行つたとさへ人にひろくいひますまい。

(六九)いまでも、そのいつしよに行つた人たちだけで詠めるぢやないの。

(七〇)御不興げの。(七一)もうがっかりしておもしろくなくなりましたのでございませう。

(七二)がっかりしておもしろくなくなるはずがないぢやないの。「かは」は底本など「かい」

(七三)あの明順様が「手づから折つた」とおつしやつた下蕨はどうでした。

(七四)思ひ出すにも食物の事、蕨だなんて。(七五)上の句をいへ。

(七六)ひどく欲ばつてゐる。「うけばる」はおし強くはばからぬ動作をいふ。

(七七)どうしてこれほどまでほととぎすのことを思ひにかけてゐるの。

(七八)どういたしまして。

(七九)つらくてその場に侍候してゐられぬやうな氣持が致します。「えさぶらふ」

は底本「えさらふ」

(八〇)もつとも歌の文字數も知らなかつたり、春に冬の歌、秋には梅の花の歌をよむといつたまつたく非常識な、無智者者

なり」と申す。宮「すさまじかべきことかは」などのたまはせしかど、さてやみにき。

二日ばかりありて、その日のことなどいひ出づるに、宰相の君、「いかにぞ、『手づからをりたり』といひし下蕨は」とのたまふを聞かせたまひて、宮「思ひ出づることのさまよ」と笑はせたまひて、紙の散りたるに、

宮下蕨こそ戀しかりけれ

と書かせたまひて、宮「もといへ」とおほせらるるも、いとをかし。

清ほととぎすたづねて聞きし聲よりも

と書きてまもらせれば、宮「いみじううけばりたり。かうだにいかでほととぎすのことをかけつらむ」とて、笑はせたまふもはづかしながら、清「なにか。この歌よみ侍らじとなむ思ひ侍るを。もののをりなど、人の

よみ侍らむにも、『よめ』などおほせられれば、えさぶらふまじきこちなむし侍る。いと、いかがは、文字の數知らず、春は冬の歌、秋は梅の花の歌などをよむやうは侍らむ。されど、歌よむといはれし末末は、すこし人よ

りまさりて、人人「そのをりの歌はこれこそありけれ。さはいへど、それ

ではありませんが。

(八)しかし、歌人といはれた者の子孫は。「されど」は底本など第一類本「なれ」と

曾祖父深達父、父元輔は著名な歌人。

(八)なんといつても、あの人の子だから。

(八)全然すぐれた點もなくて、そのくせ名歌ぶつて自分のこの歌はすばらしいなどと思つてゐる様子で、最初に詠んで出し出すのは、亡き父元輔のためにも氣の毒でございます。

(八)「まかせよ」は底本など「まかせ」能本「まかせ」

(八)「われは」は底本「われらは」

(八)たいへん氣持がらくになりました。もう歌のことは氣に致しません。

(八)庚申待。庚申の夜寝ると三戸といふ悪い蟲が人の身の中に入つて害をするからその夜は徹宵して守るといふ。中國道家の説で、このころ日本でも行はれてゐた。

(八)皇后の御兄藤原伊周。この時内大臣は前官であつた。

(八)一夜を明かすつれづれを慰めるため、いろいろと趣向をこらし、配慮していらつしやつた。

(九)「にも」は底本など第一類本に「も」(九)様子をつくつて苦心の詠をするが、自分は中宮様のそばにゐて何か申しあげ、他のことばかりいふのを。「ゆるが

が子なれば」などいへばこそかひあるこちもし侍らめ、つゆとりわきたるかたもなく、さすがに歌がましう、われはと思へるさまに最初によみ出で侍らむ、亡き人のためにもいとほしう侍る」とまめやかに啓すれば、笑はせたまひて、宮「さらば、ただ心にまかせよ。われはよめともいはず」とのたまはずれば、清「いと心やすくなり侍りぬ。いまは歌のこと思ひかけじ」などいひてあるころ、庚申せさせたまふとて、内の大臣殿、いみじう心まうけさせたまへり。

夜うちふくるほどに、題出だして、女房にも歌よませたまふ。みなけしきばみゆるがし出だすも、宮の御前近くさぶらひて、もの啓しなどことごとをのみいふを、大臣御覽じて、内大臣「など、歌はよまで、むげに離れめたる。題取れ」とのたまふを、清「さることうけたまはりて、歌よみ侍るまじうなりて侍れば、思ひかけ侍らず」と申す。内大臣「ことやうなること。まことにさることやは侍る。などか、さはゆるさせたまふ。いとあるまじきことなり。よし、こと時は知らず、今宵はよめ」など責めさせたまへど、けぎよう聞きも入れでさぶらふに、みな人々よみ出だして、よしあ

し。」は底本など第一類本「ゆるし。」
 (九二)「しかるべきこと」さらばただ心に
 まかせよ。われはよめともいはし」との
 皇后の御詞―を拜承いたしましたして、歌を
 よみますまいと決心致しましたので、心
 にかけてもをりませぬ。

(九三)異様なことだ。ほんたうにそのやう
 なことがあるのですか。なぜまあ、おゆ
 るしなされたのですか。

(九四)たとへさうであつても、ほかの時は
 ともかく、今宵はよみなさい。

(九五)すつぱりと。全然。底本とその同類
 本「げによう」第二類本による。

(九六)「よしあしなごさだめ」は底本「よ
 しあし」となごさだめ」

(九七)「投げ」は底本「なり」

(九八)曾祖父や父に遠慮することがござい
 ませんでしたら、千の歌でも。

(九九)女房たちははだれかれと話しあ
 ひ、笑ひなどするのには、わたくしは廂の
 柱よりかかつて、ものもいはないで
 伺候してゐると。廂は、寝殿造の建築で、

母屋(身屋)と簀子とのあひだの間。

(一〇〇)わたしは淋しくものたりないのに。

(一〇一)「月影はおなじ光の秋の夜をわきて
 見ゆるは心なりけり」(後撰集六秋中、よ
 み人知らず)あかすのみおもほえ打をば
 いかげせむかくこそは見め秋の夜の月」

しなどさだめらるるほどに、いささかなる御文を書きて、投げたまはせたり。見れば、

宮元輔が後といはるる君しもや今宵の歌にはづれてはをる

とあるを見るに、をかしきことぞたぐひなきや。いみじう笑へば、「なに
 ごとぞ、なにごとぞ」と大臣も問ひたまふ。

清「その人の後といはれぬ身なりせば今宵の歌をまづぞよままし

つむむことさぶらはずは、千の歌なりと、これよりなむ出でまうで來まし」と啓しつ。

九十六

職におはしますころ、八月十餘日の月明かき夜、右近の内侍に琵琶ひか
 せて、端近くおはします。これかれものいひ、笑ひなどするに、廂の柱に
 よりかかちてものもいはでさぶらへば、宮「など、かう音もせぬ。ものい
 へ。さうさうしきに」とおほせらるれば、清「ただ秋の月の心を見侍るな
 り」と申せば、宮「さもいひつべし」とおほせらる。

九十七

(拾遺集三秋、元輔)、「いつくにか今宵の月の見えざらむあかぬは人の心なりけり」(同三秋、躬恒) また、琵琶行の「言無く、ただ見る江心秋月の白きを」によつたとみる説もある。(池田龜鑑博士説)

【九十七】(一)皇后の御身内のかたがた、君達、殿上人など。(二)寵愛してあげませうか、どう。もし第一に思ふのでなければいかか。第二類本「いなや」たまへり」がない。能本「人」がない。(三)かうしたことをおほせられたわけをいふと、實はわたくしが御前で。二四二頁(二)参照。

(四)かへつて憎まれ、冷遇された方がよい。二番三番なんて死んでもいいやだわ。(五)どうしても一番でありたいわよ。「を」は強意の助詞。

(六)一乗の法のやうですね。法華經廿八品方便品に「十方佛土中ただ一乗の法のみあり。二も無くまた三も無し。佛方便の説を除き、ただ無上の道を説きたまふ」(原漢文)とある。「一乘」は奉物、それで弘誓の海を越え、無上正覺の彼岸へ渡る。(七)「十方佛土の中には西方をもつて望みとす。九品蓮臺の間には下品といへどもまさには足りぬべし」(原漢文。和漢朗詠集下雜、極樂寺建立願文、摩訶保胤)。「十方佛土の中には西方こそはそのそむなれ、九品蓮臺のあひだには下品なりと

御かたがた、君達、上人など、御前に人のいとおほくさぶらへば、廂の柱によりかかりて女房と物語などしてゐるに、ものを投げたまはせたる、あけて見たれば、宮「思ふべしや、いなや。人、第一ならずはいかに」と書かせたまへり。

御前にて物語などするついでにも、清「すべて、人に一に思はれずはなにかはせむ。ただいみじうなかなかにくまれ、あしうせられてあらむ。二三にては死ぬともあらじ。一にてをあらむ」などいへば、「一乗の法なり」など人々も笑ふことのすぢなめり。

筆、紙などたまはせられたれば、清「九品蓮臺の間には、下品といふとも」など、書きてまゐらせられたれば、宮「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。いとぢめつることは、さてこそあらめ」とのたまはず。清「それは人にしたがひてこそ」と申せば、宮「そがわるきぞかし。第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ」とおほせらるる、いとをかし。

もたんぬべし」(梁塵秘抄)九品は極樂往生の九階級。上品上生以下下品下生まで。皇后様に愛していただけるのでしたら、最下級でも結構でございます。

(八)すつかり降参してしまつたのね。

(九)一度斷言したことは、そのままはずがよいものです。

【九六】(一)藤原隆家。道隆の子、伊周の弟。皇后の御弟。底本と同系純本、殿が「な」をとりまします。その骨に紙をはらせて獻上したいと存じますが、なみたいいていの紙は不調和ではれませんから、よい紙を探しもとめてをります。

(二)「なむ……ななり」と。底本にない。

(四)一段と聲高く、自慢しておつしやるから、わたくしが、そんなに珍しく、だれも見たことのない骨でしたら、扇の骨ではなくて、だれも見ない海月の骨ですね。

(五)これは、ぼくの思ひついたことばにしておかう。底本「が」は「る」とある。

(六)このやうな自讃の記事などこそ、見聞くにたへないことの中に入れておくべきであり、ここに書くべきではあるまいが、この冊子の草稿をみた人が「一つでもおとしはいけない」といふので、やむをえずともかくもここに書いておく。

九十八

中納言殿まゐりたまひて、御扇たてまつらせたまふに、「隆家こそいみじき骨は得て侍れ。それをはらせてまゐらせむとするに、おぼろげの紙はえはるまじければ、もとめ侍るなり」と申したまふ。宮「いかやうにかある」と問ひきこえさせたまへば、隆家「すべていみじう侍り。『さらにまだ見ぬ骨のさまなり』となむ人人申す。まことにかばかりのは見えざりつ」と言高くのためへば、清「さては扇のにはあらで、海月のななり」ときこゆれば、隆家「これは隆家が言にしてむ」とて笑ひたまふ。

かやうの事こそは、かたはらいたきことのうちに入れつべけれど、人人「一つな落しそ」といへば、いかがはせむ。

九十九

雨のうちへ降るころ、けふも降るに、御使にて、式部の丞信經まゐりたり。例のごと襷さし出でたるを、つねよりも遠くおしやりてゐたれば、

- 【九九】(一)うちつづき降るころ。
 (二)藤原爲長の子。長徳三年正月式部丞。
 (三)不都合に、きたなくなりますからね。
 (四)底本「けんそくれうし」同系統本「けんそくれう」未詳。「せんぞく」は「衾褥(しとね)」と洗足をかけたといふ。
 (五)「これは、あなたが賢くてうまうまはれたのではない。わたくしが足がたのことを申さなかつたら、こんな秀句はお出来にならなかつたでせう」とくりかへし、くりかへしつたのは。
 (六)以前に。以下清女が信經に話す詞。
 (七)村上天皇皇后。藤原安子。右大臣師輔のむすめ。
 (八)「うせにける」は底本をはじめ第一類本「うせける」(九)底本「ときかし」(一〇)「ける」は底本「けり」
 (一一)これがまあ、あの有名な「ゑぬたき」(「犬抱き」)か、關根正直博士説か、どうしてさうりつばに見えないのだらうか。
 (一二)それはその時がらでさうも見えるのでせう。「時柄(人名)に」と「時がらに」といひかけた。
 (一三)最初から秀句をいひ争ふ相手として選んでも、そんなことはどうしていへよう。 「いかでか」底本など「いる事は」
 (一四)その通りすばらしかつたのでせう。
 (一五)題を出した(ヒントを與へた)時柄

清「誰が料ぞ」といへば、笑ひて、信經「かかる雨にのぼり侍らば、足がたつきて、いと不便に、きたなくなり侍りなむ」といへば、清「など。せんぞく料にこそはならぬ」といふを、信經「これは御前にかしこうおほせらるるにあらず。信經が足がたのことを申さざらましかば、えのたまはざらまし」と、かへすがへすいひしこそをかしかりしか。
 清「はやう、中后の宮にゑぬたきといひて名高き下仕なむありける。美濃の守にてうせにける藤原の時柄、藏人なりけるをりに、下仕どものあるところにたちよりにて、時柄「これやこの高名のゑぬたき、などさしも見えぬ」といひける、いらへに「ゑぬたき」「それは、ときがらにさも見ゆるならむ」といひたりけるなむ、「かたきにえりても、さることはいかでかあらむ」と上達部・殿上人まで興あることにのたまひける。またさりけるなむり、けふまでかくいひ傳ふるは」ときこえたり。信經「それまたときがらがいにはせたるなめり。すべてただ題がらなむ、文も歌もかしこき」といへば、清「げにさもあることなり。さは、題出ださむ。歌よみたまへ」といふ。信經「いとよきこと」といへば、清「御前におなじくは、あまたをつ

が。「時から」の意をも含める。「いはせたる」は底本「ひさせざる」

(二)題の出しやうで詩でも歌でもすばらしく出来ませぬ。

(三)同じくすなは、御前でたぐさんの歌を。底本など「なせんに……」

(四)勅使として持つて来た御書への皇后からの御返事が出来て来たので。

(五)この信經が作物所の別當をしてゐたころ。作物所は禁中の調度を調進し諸細工をする。別當はその長官。底本「つくろ所」とし、「る」に「もイ」と傍書。

(三〇)第一類本「に」がない。

(三一)細工物の繪圖面。「繪やう」は繪の下書、繪圖面。

(三二)「そのかたはらに」底本など第一類本にはない。

【四】(一)長徳元年一月十九日、關白道隆二女原子(淑景舎)春宮(後の三條天皇、居貞親王)の女御となつた。

(二)「二月十餘日」は底本など第一類本「二月十日よひ」韻本「二月十日よか」第二類本「二月十日よ日」

(三)定子皇后の御かたにておいでになるとのおたよりがあつたので。

(四)御調度の御用意。御裝飾。

(五)底本と第一類諸本はこの一句の右に「一本よひにわたらせ給て又の目おはし

か

かうまつらむ」などいふほどに、御返し出で來ぬれば、信經「あな、おそろし。まかり逃ぐ」といひて出でぬるを、人人「いみじう眞名も假名もあしう書くを、人笑ひなどする、かくしてなむある」といふもをかし。

作物所の別當するころ、誰がもとにやりたりけるにかあらむ、ものの繪

やうやるとて、信經「これがやうにつかうまつるべし」と書きたる眞名の

やう、文字の世に知らずあやしきを見つけて、そのかたはらに、詩「これ

がままにつかうまつらば、ことやうにこそあるべけれ」とて殿上にやりた

れば、人人とりて見ていみじう笑ひけるに、おほきに腹立ちてこそにくみ

しか。

百

淑景舎、春宮にまゐりたまふほどのことなど、いかがめでたからぬこと

なし。正月十日にまゐりたまひて、御文などはしげうかよへど、まだ御對

面はなきを、二月十餘日宮の御かたにわたりたまふべき御消息あれば、つ

ねよりも御しつらひ心ことにみがきつくろひ、女房などみな用意したり。

ますへければ、女はうは御ものやとりにむかひたるわたと(の)にと小言がある。

(六)後宮の・殿舎。車は貞觀殿、南に弘微殿に通ずる。

(七)この一文「さぶらふべし」までは第二類本で補つた。能本にもこの文がない。

(八)道隆とその妻貴子(高内侍)とは、随に同じ御車で。貴子は従二位高階成忠のむすめ、儀同二司(伊周)の母。

(九)「御格子まゐる」は上げおろしいづれにも用ゐるが、ここはあげたこと。

(一〇)「四尺の」は底本「四人の」

(一一)「の上に」第一類本にない。「御しとね」は第二類本「しとね」

(一二)底本(第二類本)以外「さくせんしくやうの日」(横善寺供養の日)とある。「御車寄せの日」であれば、正月十日春宮にまゐらせられた日のことであらうか。

(一三)うれしく見たい氣持がつのつて、早くと思ふ。

(一四)皇后様(定子)は。

(一五)紈紋は、織物の紋を浮かさず、沈めてかたく織つたもの。横糸に縦糸をからんで織つたもの。浮紋は、その反對で浮織にした模様。

(一六)紅の濃い衣がよく似あふものよ。

(一七)もう二月中旬であるから。「紅梅」の衣は十一月から二月まで着用。「いま」

夜中よなかはかりにわたらせたまひしかば、いくばくもあらで明けぬ。

登華殿とうかだんの・東の廂ひだりの二間ふたまたまに御しつらひはしたり。宵よひにわたらせたまひ

て、またの日おはしますべければ、女房は御物やどりにむかひたるわた殿

にさぶらふべし。殿たか、上うへ、階あかぎに一つ御車にてまゐりたまひにけり。つと

めて、いととく御格子みかくしまゐりわたして、宮は、御曹司ごそうしの南みなみに四尺の屏風、

西東しひがしに御座ごましきて北むきに立てて、御疊ごたたまの上に御褥ごしとねばかり置きて御火桶

まゐれり。御屏風の南、御帳の前に女房いとおほくさぶらふ。

まだこなたにて御髮ごみづなどまゐるほど、宮「淑景舎しゆけいさは見たてまつりたり

や」と問はせたまへば、清「まだ、いかでか。御車ごくるまよせの日、ただ御うし

ろばかりをなむ、はつかに」ときこゆれば、宮「その柱はしらと屏風とのもとに

よみて、わがうしろよりみそかに見よ。いとをかしげなる君ぞ」とのたま

はするに、うれしくゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。

紅梅べにばいの紈紋かたむち、浮紋うきもんの御衣ごぞども、紅べにのうちたる、御衣三重ごぞみへが上うへにただ引

き重ねてたてまつりたる。宮「紅梅には、濃こき衣きぬこそをかしけれ、え着きぬこそくちをしけれ。いまは紅梅べにばいのは着きでもありぬべしかし。されど、萌黄もへぎ

を皇后の御年（當時十九）をいふと見る説もある。

(一〇)色が格別で、そのまま御容姿のすばらしいのうつつり映えまじつてゐるのは、いくら他の御容姿のすぐれた人（淑景舎）でもこの宮様ほどではないらつしやるまいと思はれるが、それにしても、早く淑景舎を拜したいと思はれる。「あはせ」は底本とその同類本「あらはせ」。

「とぞ」は底本と同類本「と」と。

(一〇)皇后様（定子）が中へおはひりになつたので、そのまま屏風によりそつてのぞくのを。

(二〇)注意する。聞えるやうにいふ。「ひとりごと」「ひとりごと」と同類の語法。

「きこえ言する」の意。

(二二)「ぞ」は底本「そぞ」

(二三)底本「わかやうなる」

(二四)扇で顔をおつと隠していらつしやる御様子、すばらしく。

(二五)いかにも皇后様のおことばのやうに可憐にお見えになる。

(二六)道隆公は薄紫色の御直衣に。

(二七)直衣の襟の紐をむすんで。

(二八)そして、二人の姫君のすばらしいお姿を見て、にこにしながら。

(二九)いつものやうに。副詞。「たはぶれ言」底本とその同類本「た」がない。

などのにくければ。紅くれないにあはぬか」などのたまはすれど、ただいとぞめでたく見えさせたまふ。たてまつる御衣ぎの色いろことに、やがて御かたちのにほひあはせたまふぞ、なほことよき人もかうやおはしますすらむとぞゆかしき。

さて、ぬざりぬ入いらせたまひぬれば、やがて御屏風びんぷうにそひつきてのぞくを、女房「あしかめり。うしろめたきわざかな」ときこえきここつ人人もをかし。

障子まじりのいと廣ひろうあきたれば、いとよく見ゆ。上うへは、白き御衣ぎども紅くれないのはりたる二つばかり、女房の裳もなめり、引きかけて、奥おくによりて東ひがしむきにおはすれば、ただ御衣ぎなどぞ見ゆる。淑景舎しゆけいざは北きたにすこしよりて、南みなみむき

におはす。紅梅こうばいいとあまた濃こく薄うすくて、上うへに濃こき綾あやの御衣ぎ、すこし赤あかき小

桂けい、蘇枋そぼうの織物おりもの、萌黄もぎのわかやかなる固紋かたもんの御衣ぎたてまつりて、扇あふをつと

さしかくしたまへる、いみじう、げにめでたくうつくしと見えたまふ。殿との

は薄色うすいろの御直衣ぎ、萌黄もぎの織物おりものの指貫さしぬき、紅くれないの御衣ぎども、御紐おんぬいさして、廂むすしの

柱はしらにうしろをあててこなたむきにおはします。めでたき御ありさまを、う

ち笑わらみつつ例たとへのたはぶれ言ことばせさせたまふ。淑景舎しゆけいざのいとうつくしげに繪えに

(二九) 朝の御洗面の御用意をする。
(三〇) 淑景舎より登華殿までにある。

(三一) 貞觀殿は御回殿ともいひ、皇后宮の正廳のある殿舎。

(三二) 登華殿東面の貞觀殿に通ずる反渡殿で、その中央の屋根が唐廂(屋根がそつてゐる廂)になつてゐるが、關根正直博士は、かた(片)廂だと説く。

(三三) 半分はお送りして、みな歸つたのであつた。

(三四) その名は少將といふ女房の意。底本など第一類本「むまの」がない。

(三五) 菅原輔正(菅公の曾孫。長徳二年参議—唐名宰相)の女の宰相の君であつて、皇后づきの女房の「宰相の君」ではない。紫式部日記に「宰相の君は北野の三位のよ」とある北野の三位は師輔の七男、藤原遠度で、宰相の君はそのむすめであらうか。「北野宰相のむすめ宰相の君など」の句、底本には「きたの宰相の君などぞ」とある。いづれにしてもこれは淑景舎づきの女房である。

(三六) 當番の水司(後宮十二司の一)の采女。下藤の女官。

(三七) 顔をひどく白く塗つて。
(三八) いかにも格式めき、中國の畫にでもありさうな姿で、おもしろい。

かいたるやうにてゐさせたまへるに、宮はいとやすらかにいますこしおとなびさせたまへる御けしきの、紅の御衣にひかりあはせたまへる、なほたぐひはいかでかと見えさせたまふ。

御手水まある。彼の御方のは、宣耀殿、貞觀殿をとほりて、童女二人下仕四人して持てまあるめり。唐廂のこなたの廊にぞ女房六人ばかりさぶらふ。せばしとて、かたへは御おくりして、みな歸りにけり。櫻の汗衫、

萌黄、紅梅などいみじう、汗衫長く引きて、とりつぎまゐらする、いとなまめきをかし。織物の唐衣どもこぼれ出でて、相尹の馬の頭のむすめ、少將、北野宰相のむすめ、宰相の君などを近うはある。をかしと見るほどに、

こなたの御手水は、番の采女の青柳濃の裳、唐衣、裙帯、領巾などして、おもていと白くて、下などとりつぎまあるほど、これはたおほやけしう店めきてをかし。

御膳のをりになりて、御髪あげまゐりて、藏人ども御まかなひの髪あげてまゐらするほどは、隔たりつる御屏風もおしあけつれば、かいまみの人、隠れ蓑人、隠れ蓑取られたるこちして、あかずわびしければ、御簾

(四〇)のぞき見をしてゐた人は、かくれ簑を着てゐた人(いづれも自分を指す)が、かくれ簑を取らぬやうな氣持で、もの足りなくつらいので、「隠れ簑人は底本と同類本以外にない。それが原態か。」
 (四一)しかしわたしの衣の裾や裳などは。
 (四二)「端」は底本など第一類本「はら」
 (四三)第二類本「かのすみのま」能本「かすみのま」(四四)「侍る」は底本「侍り」
 (四五)無器量なむすめどもをもつてゐると見たら困る。
 (四六)さう口では謙遜してゐなざるものゝまことに得意さうな様子である。
 (四七)淑景舎の方でも。
 (四八)自分と高内侍とをさす。
 (四九)せめておさがりでも下さい。
 (五〇)冗談。されごと。
 (五一)伊周。この年内大臣。底本とその同類本「殿」がない。
 (五二)隆家。(五三)伊周の長男道雅の幼名。
 (五四)早速お抱きとなりになつて。
 (五五)あたり一面にひろがつてもてあます。
 (五六)いかにも巧者な様子で。
 (五七)北の方の御幸運。「宿世」は前世の果報。高内侍は藤原氏の出ではない。
 (五八)御圓座にすわるやうに申されたが。
 (五九)「陣」は校書殿の東廂にあり、公卿が集會して公事を議す所であるが、ここ

と几帳とのなかにて、柱のとよりぞ見たてまつる。衣の裾、裳などは、御簾の外にみなおし出だされたれば、殿、端のかたより御覽じ出だして、「あれは誰そや。彼の御簾の間より見ゆるは」とがめさせたまふに、宮「少納言がものゆかしがりて侍るならむ」と申させたまへば、殿「あな、はづかし。彼は故き得意を。いとにくさげなるむすめども持たりともこそ見侍れ」などのたまふ御けしき、いとしたりがほなり。

あなたにも御膳まゐる。殿「うらやましう、かたがたの、みなまゐりぬめり。とくきこしめして、翁、姫に御おろしをだにたまへ」など、日一日、たださるがう言をのみしたまふほどに、大納言殿、三位の中將、松君率てまゐりたまへり。殿いづしかいだき取りたまひて、膝にすゑたてまつりたまへる、いとうつくし。せばき縁にところせき御装束の下敷ひき散らされたり。大納言殿はものしう清げに、中將殿はいとらうらうじう、いづれもめでたきを見たてまつるに、殿をばさるものにて、上の御宿世こそいとめでたけれ。「御圓座」などきこえたまへど、大納言「陣に着き侍るなり」とて、いそぎ立ちたまひぬ。

は詰め所・役所の意であらうか。

(六〇)底本「ねぬ」

(六一)殿内の一室で、御厨子棚をよそ、御膳を納めてある。

(六二)「たり」は底本「たち」

(六三)「けふ」は底本と第一類本「たふ」

(六四)道隆六男。長徳元年正月十三日任少將。

(六五)「殿、上」は底本、第一類本「殿上人」

(六六)つぎからつぎへと。

(六七)わたしが見てみますので、お書きにならないと見える。

(六八)さうでない時は、こちらからたえず春宮に御文をさしあげなざるといふことですが、「なる」は傳聞推定の助動詞。

(六九)「ほんたうに、早く」などと母君もおすすめになるので。

(七〇)いよいよ遠慮し、はづかしがつていらつしやる御様子である。

(七一)小桂と袴とを簾よりおし出されたので。「小桂」は底本「こうき」

(七二)観頭(かつげもの・祝儀の品)として使者の肩にお興へになる。

(七三)「思ひて」は底本「おもふて」第一類本「思て」第二類本になし。

(七四)皇后様(定子)の御子たちとして、人前に引き出しても、不似あひではござ

しばしありて、式部の承(うけ)にながし御使にまゐりたれば、御膳(おの)やどりの北

によりたる間に褥(とね)さし出(い)だしてすゑ(六三)たり。御返(ごへん)しけふ(六四)はとく出(い)ださせたま

ひつ。まだ褥(とね)もとり入れぬ(六五)ほどに、春宮(あきみや)の御使(ごし)に周頼(しゆらい)の少將(せうしやう)まゐりたり。

御文(ごぶん)とり入れて、波殿(なでのも)はほそき縁(えん)なれば、こなたの縁(えん)にこと褥(とね)さし出(い)だし

たり。御文(ごぶん)とり入れて、殿(との)、上(うへ)、宮(みや)など御覽(ごらん)じわたす。殿(との)「御返(ごへん)しはや」

とあれど、とみにもきこえたまはぬを、殿(との)「ながしが見侍(みまわ)れば、書(か)きた

まはぬなめり。さらぬ(六六)をりはこれよりぞ間(ま)もなくきこえたまふなる」など

申(まを)したまへば、御面(ごおもて)はすこし赤(あか)みてうちほほは多(おほ)みたまへる、いとめでた

し。「まこと(六九)に、とく」など上(うへ)もきこえたまへば、奥(おく)にむきて書(か)いたまふ。

上(うへ)近(おほ)うよりたまひて、もろともに書(か)かせたてまつりたまへば、いとどつづ

ましげなり。

宮(みや)の御(ご)かたより萌黄(ももぎ)の織物(おりもの)の小桂(こけい)、袴(はかま)おし出(い)でたれば、三位(さんい)の中將(ちゆうしやう)かづ

けたまふ。頸苦(くびくる)しげに思(おも)ひて、持ちて立ちぬ。

松君(まつきみ)のをかしようものたまふを、たれもたれもうつくしがりきこえたま

ふ。殿(との)「宮(みや)の御(ご)みこたちとてひき出(い)でたらむにわらく侍(まわ)らじかし」などの

いますまい。

(七五)皇子御誕生の御こと(御妊娠)が、なせいままでないのであらうと待ち遠しく気がかりなところである。

(七六)午後二時前後ごである。

(七七)(行幸のため)筵道をおしきする。

(七八)装束の衣ずれの音とともに、天皇がおはひりになるので、中宮様もこちらのお部屋へおうつりになつた。「こなたへ」は底本「こなた」

(七九)天皇はお起きあそばして。

(八〇)藤原道頼。道隆の長男。祖父兼家の子となる。定子皇后・伊周・隆家らの異母兄。

(八一)お呼びよせになり、装束をめされて還幸になる。

(八二)夕日に映えたりつくしきなどすばらしくめでたいが、おそれおほいことなので、筆をとどめた。

(八三)異腹のためあまり親しく出入りなさぬ仲間はずれの御兄ではあるが、まことにりつばなかなたなのである。

(八四)氣品のあるうつくしきは、こちらの大納言(伊周)以上でいらつしやるのに、このやうに世の人がいちづに軽んじ申すのは、お氣の毒なことがある。

(八五)「殿」は底本「殿の」

(八六)藤原頼親。道隆の五男。

たまはするを、げになどかざる御ことのいままでとぞ心もとなき。

未^{ひつじ}のときばかりに、「筵道^{えんどう}まゐる」などいふほどもなく、うちそよめきて

入らせたまへば、宮もこなたへ入らせたまひぬ。やがて御帳に入らせたま

ひぬれば、女房もみな南面^{みなむね}にみなそよめき往ぬめり。廊^{ろう}に殿上人^{でんじゆん}とおほ

かり。殿^{との}の御前^{ごまへ}に宮司^{みやうき}めして、殿「くだもの・さかななどめさせよ。人人

醉^あはせ」などおほせらるる、まことにみな酔^あひて、女房^{にようぼう}ともいひかはす

ほど、かたみにをかしと思ひためり。

日の入るほどに起きさせたまひて、山の井^{やまのゐ}の大納言^{おほののり}めし入れて、御^ご袿^{うぎ}

まゐらせたまひてかへらせたまふ。櫻^{さくら}の御直衣^{ごちやく}に紅^{べに}の御衣^{ごえ}の夕^{ゆふ}ばえなど

も、かしこければとどめつ。山の井^{やまのゐ}の大納言^{おほののり}は入り立たぬ御せうとにて

はいとよくおはするぞかし。にほひやかなるかたはこの大納言^{おほののり}にもまさり

たまへるものを、かく世の人はせちにいひおとしきこゆるこそいとほしけ

れ。殿^{どの}、大納言^{おほののり}、山の井^{やまのゐ}も、三位^{さんゐ}の中將^{ちゆうしやう}、内藏^{ないざう}の頭^{かみ}などみなさぶらひたま

ふ。宮^{みや}のぼらせたまふべき御使^{ごし}にて、馬^{うま}の内侍^{ないせう}のすけまゐりたり。宮^{みや}「今^{いま}

宵^よはえなむ」などしづらせたまふに、殿^{どの}聞^きかせたまひて、「いとあしきこ

(八七)「みな」は底本など第一類本にない。
(八八)中宮様に参内なされるやうにとのお使として。

(八九)右馬の權頭の藤原時明のむすめ。「内侍のすけ」は典侍。内侍所の次官。

(九〇)「今晚はどうも」とおしぶりになるが。「しづらせ」は底本「しふせ」。

(九一)おすすめ申しあげける。

(九二)それならまづ淑景舎を春宮にお送り申されてから。(九三)でも、どうしてわたくしがさきに歸れませう。

(九四)底本「とをく」。

(九五)定子皇后は、宮中へおあがりになる。(九六)途中でも、道隆公の御冗談にひどく笑つてほとんどすんでのことのうち橋からころげ落ちさうであつた。「うち橋」は、渡殿の間の土間などに假に渡した板橋。「御さるがう言」は底本「御座るがことく」第一類本「御さるかうことく」。

【言】(一)「梅のみな」底本「梅の花」。

(二)「これいか」が「底本」これはたゞ、

(三)「大庾嶺の梅は早く落ちにけり。誰か粉性を問はん」(紀長谷雄。盃を停めて柳色を看る。和漢朗詠集、内宴序。原漢文)

大庾嶺は江西省南安府城の南にあり、梅がおほいので梅嶺といはれる。

(四)とほり一べんの歌などを詠み出したやうなのよりも、かうした機智の秀句の

と。はやのぼらせたまへ」と申させたまふに、春宮の御使しきりであるほど、いとさわがし。御むかへに、女房、春宮の侍従などいふ人もまゐりて、

「とく」とそそのかしきこゆ。宮「まづ、さは彼の君わたしきこえたまひて」とのたまはすれば、淑景舎「さりと、いかでか」とあるを、宮「見

おくりきこえむ」などのたまはするほどにも、いとめでたくをかし。「さらば遠きをさきにすべきか」とて、淑景舎わたりたまふ。殿など歸らせたま

ひてぞ、のぼらせたまふ。道のほども、殿の御さるがう言にいみじう笑ひて、ほとほとうち橋よりも落ちぬべし。

百 一

殿上より、梅のみな散りたる枝を、「これいか」^二といひたるに、ただ、

清「早く落ちにけり」といらへたれば、その詩を誦じて殿上人黒戸にいと

おほくみたる、うへの御前にきこしめして、主上「よろしき歌など詠みて

出だしたらむよりは、かかることはまさりたりかし。よくいらへたり」と

おほせられき。

ことは、ずつとすぐれてゐるよ。

(五)うまく答へた。「たり」は底本など第一類本「たる」(六)「き」は底本「る」

【四】(一)底本など「うらてさぶらふ」とあるが、「かうて」が正しいであらう。「かくて」の音便。まゐりました、さぶらうてゐます、ごめん下さいなどの意。

(二)藤原公任。關白太政大臣賴忠の長男。正曆三年參議、長保三年中納言。宰相は參議の唐名であるから、この段の事件はその任官中(他の人の官位その他から長保元年二月)のことと推定される。

(三)「往歲かつて西邑の吏となる。駱口より南秦に到るに慣る。三時雲冷くしておほく雪を飛ばす。二月山寒くすこし春あり。われ舊事を思ひてなほ惆悵たり。」(白氏文集十四、南秦雪)(金子彦二郎博士説)

(四)「けしき」は底本「ふしき」。

(五)だれだれがはづかしやるか。
(六)こちらがはづかし思ふほど學才のすぐれたかたがたである中に、とりわけ
(七)風情なく、平凡に答へられよう。
(八)底本「に」がない。

(九)第二類本「おほとこのこもりたり」

(一〇)もかくまあとら思つて。

(一一)前掲白氏文集の詩によつて譚案した

(一二)底本に「と」がない。

(一三)これの批評。この返事の結果、評判。

百 一

二月さきつごもりごろに風いたう吹きて空いみじう黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸くろとに主殿司しゅたんとし來て、「かうてさぶらふ」といへばよりたるに、主殿司「これ、公任きんたふの宰相殿さいしやうの」とであるを、見れば、懷紙ふとこに

すこし春はるあるこちこそすれ

とあるは、げにけふのけしきにいとようあひたる、これがもとはいかでかつくべからむと思ひわづらひぬ。清きよ「たれたれか」と問へば、主殿司「それ」といふ。みないとはづかしきなかに、宰相の御いらへをいかでかとなしびにいひ出でむと心ひとつに苦くるしきを、御前おまへに御覽みまへせさせむとすれど、うへのおはしまして御みとのごもりたり。主殿しゅたんとづかきは「とくとくと」といふ。げにおそうさへあらむはいととりどころなければ、ささはれとて、

清きよ 空寒くわんみ花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きてとらせて、いかに思ふらむ、わびし。これこゝがことを聞かばやと思ふに、そそしられたらば聞かじとおぼゆるを、「俊賢しゅんけんの

- (一四)「そしられ」は底本など「たしられ」
 (一五)源俊賢。西の宮左大臣高明の三男。長
 徳元年八月参議、寛弘元年正月權中納言。
 (一六)藤原實成。太政大臣公季の長男。長
 徳四年十月右近の中将、寛弘五年参議、同
 六年三月左兵衛の督を兼ねた。ただし、
 實成とすると、この段の執筆年時は寛弘
 六年三月以後になるので、これを「左衛
 門の督」の本文につくる前田家本旁書に
 より、藤原誠信(寛和二年正月右近衛の
 中将、長徳三年正月左衛門の督を兼ね
 た。齊信の兄)とみる説(小澤正夫氏)も
 ある。
- 【百三】(一)第二類本「ゆくすゑはるかなる
 もの」
 (二)底本など第一類本「はひ」半臂は束
 帶の時に用ゐる。つけ紐の長さ八尺また
 は一丈二尺、幅二寸五分あり、たんで
 左の腰の前につれる。その紐をひねり
 じめるのである。
 (三)行く人が、逢坂の關を越えるころ。
 (四)底本にないが、第二類本にある。
 【百四】(一)源方弘。文章生、長徳二年正月
 十四日藏人に補せられた。
 (二)華美な風をしてゐる者を呼び寄せ
 て。「美美しき」は底本「ひさしき」
 (三)方弘の家庭は染物や裁縫などを巧み
 にするところ、他の人よりもつばに

宰相など、「なほ、内侍に奏してなさむ」となむさだめたまひし」とばかり
 ぞ、左兵衛の督かみの、中將におはせし、語りたまひし。

百三

はるかなるもの 半臂はんびの緒をひねる。陸奥國むちのくにへ行く人、逢坂あさか越ゆるほど。
 生なままれたるちこの、大人おとなになるほど。(大般若の讀經だいげんやのよみかう、一人ひとりしてはじめた
 る。)

百四

方弘まさひろはいみじう人に笑はるる者かな。親おやなどいかに聞きくらむ。供ともにあり
 く者のいと美美びびしきを呼よびよせて、人人たに「何なにしにかかる者には使つかはるるぞ。
 いかがおぼゆる」など笑ふ。ものいとよくするあたりにて、下襲したかきの色、袍うへ
 なども、人よりもよくて着きたるをば紙燭しそくさしつけ焼やき、あるは、人人「こ
 れをこと人に着きせばや」などいふに。げにまた詞ことばづかひなどぞあやしき。
 里さとに宿直とらひもの取りにやるに、方弘「男二人をとこまかれ」といふを、男「一人ひとりし

して着てゐるのをば。

(四) 輕率にも紙燭を近づけて焼いて。

「紙燭……あるは」底本に脱落。「着せ」は底本と同類本「きかせ」

(五) 「に」どめの例。七四・一四四頁参照。

(六) 「もたる」は底本「のたる」

(七) 沙石集にも見える諺。

(八) なんとはいふごとと(どんなことと)理解する人はいふごとと、大笑ひをする。

(九) 「あな」は底本「あの」

(一〇) あわてるのか。

(一一) 「なに者の」底本など第一類本「な

にの」

(一二) 圓融天皇女御、東三條院藤原詮子。

(一三) 方弘が天皇のお見舞のお使として。

(一四) 「それよりはかにはだれがをりまし

たか」ときくと「さうですね、歸つた人

たちもあつたのですが」と。

(一五) 「往ぬる」は底本「はぬる」または

「はぬか」

(一六) 方弘としてはまじめにいつてゐるの

だから、笑ふのもまたへんなことではな

いか。

(一七) 人のゐない時に。

(一八) 「わがき」は「わがきみ」の略。源

氏物語の「いぬき」などとおなじ。「こ

そ」は敬稱、人を呼ぶのによく用ゐる。

(一九) 全身みな。「むくろ」は身體のこと。

て取りにまかりなむ」といふ。方弘「あやしの男や。一人して二人がものをばいかでか持たるべきぞ。一升瓶に二升は入るや」といふを、なでふことと知る人はなけれど、いみじう笑ふ。人の使の來て、「御返りごととく」といふを、方弘「あな、にくの男や。などかうまどふ。箱に豆やくべたる。この殿上の墨・筆はなに者の盗みかくしたるぞ。飯、酒ならばこそ人もはしがらめ」といふを、また笑ふ。

女院愾ませたまふとて、御使にまゐりて歸りたるに、「院の殿上には、たれたれかありつる」と人の問へば、方弘「それ、かれ」など、四五人ばかりいふに、人「またたれか」と問へば、方弘「さて往ぬる人どもぞありつる」といふも、笑ふも、またあやしきことにこそはあらめ。人間により來て、方弘「わが君こそ。ものきこえむ。まづと人のたまひつることぞ」といへば、「なにごとぞ」とて、几帳のもとにさしよりたれば、「むくろごめによりたまへ」といひたるを、「五體ごめ」となむいひつるとてまた笑はる。

除目の中の夜、さし油するに、燈臺の打敷を踏みて立てるに、あたらし

(二)當時、除日は三日間行はれたから、その第二日の夜の意。七四頁参照。

(三)燈臺の油皿に油をつぎたさうとし、燈臺の敷き物をふんで立つてきたが、その打ち敷き(油單は布のひとつへに油を引かないものもある)が新しかつたので、はいてゐた襪(足袋に似て、指がわかれてゐない)が強くへはりついてしまつた。

(二)そのまま。(三)藏人の頭が臺盤に。

(四)方弘は豆一盛りをそつと取つて。

(五)清涼殿の御手水の間と朝餉の間との隔ての衝立障子。表に猫、裏に竹雀をかく【音五】着物の背縫を片よせて着てゐるの。また襟を後へおしさげて着てゐるのも見苦しい。

(二)なみなみでない人。貴い人。

(三)僧形をした陰陽師。法師と陰陽師とみる説もある。

(四)三角形の紙を額にあてて。

(五)色が黒くみつともない顔をした女の入れ毛をしたのと。

(六)やつれ衰へ、やせこけた男とが夏に晝寝してゐるはまことに見苦しい。

(七)すばらしい人はまあすこしみられるが、たいしてすぐれてあなす容貌の持主は、てらてら光り、腫れぼったくて、うつかりすると、頬がゆがんだりしてゐる

き油單ゆたんに襪したつはいとよくとらへられにけり。さしあゆみて返れば、やがて燈臺とうだいは倒れぬ。襪したつに打敷うてしきつきて行くに、まことに大地震動しんどうしたりしか。頭とうつきたまはぬかぎりは、殿上の臺盤たいばんには人もつかず。それに、豆一盛りまめひともをやをら取りて、小障子こさうじのうしろにて食ひければ、引きあらはして笑ふことかぎりなし。

百五

見苦みくるしきもの衣ゐの背縫せぬい、片かたによせて着たる。またのけくびしたる。例れいならぬ人の前に子負こおひて出で來たる者。法師ほうし陰陽師おんやうしの、紙冠かみかぶりして被ほらしたる。色黒いろくろうにくげなる女のかづらしたると、鬚ひげがちにかじけやせやせなる男おとこと晝寝ひるねしたるこそいと見苦みくるしけれ。なにの見るかひにてさて臥ふいたるならむ。夜よるなどはかたちも見えず、またみなおしなべてさることとなりたれば、われはにくげなりとて起きぬるべきにもあらずかし。さてつとめてはとく起きぬる、いとめやすしかし。晝寝ひるねして起きたるは、よき人こそいますこそしをかしかなれ、えせかたちはつやめき、寝腫ねはれて、ようせず

であらう。

【百六】(一)能本と三卷本系統本の一部とに「ながき(長き)」となつてゐる本がある。それに従へば、そこで切れる。

(二)こちらが氣はづかしく感じられる人が何かおおくつてくだざつた時の返事。

(三)思ひもかけないことをたづねた時に、面とむかつては答へにくい。

【百七】(一)三重縣志郡川口。船川の關。

(二)底本「花のせき」岩手縣平泉の北、衣川の關。清少納言と同時または以後の歌であるが、「もろとも」にたましものを陸奥の衣の關をよそに見るかな(詞花集、和泉式部)

(三)ただひたすら越えるといふ無遠慮な關の名は、はばかり名の關に比して、反對でたとへやうがない。底本「たとしへなく」を「たとしくなく」につくる。「たごえの關」は所在未詳。「くさかのたごえの道」(古事記)「ただ越えのこの道にしておし照るや難波の海と名づけたりしも」(萬葉集六)

(四)駿河國駿河郡横走郷。いま静岡縣足柄郡。「横走り清見が關のかよみ路にいづといふ」とは長くとどめむ(兼盛集)。(五)所在未詳。八雲御抄に「近江」とある。(六)所在未詳。底本とその同類本「よもくの關」第二類本には「よしなくの關」

は、頬ゆがみもしぬべし。かたみにうち見かはしたらむほどの生けるかひななさや。

やせ、色黒き人の生絹の單衣着たる、いと見苦しかし。

百六

いひにくきもの 人の消息のなかに、よき人の仰せ言などのおほかるを、はじめより奥までいひにくし。はづかしき人のものなどおこせたる返りと。大人になりたる子の思はずなることを聞くに、前にてはいひにくし。

百七

關は 逢坂。須磨の關。鈴鹿の關。くきたの關。白河の關。衣の關。たごえの關ははばかりの關にたとしへなくこそおぼゆれ。横はしりの關。

清見が關。みるめの關。よしよしの關こそいかに思ひかへしたるならむと、いと知らまほしけれ。それを勿來の關といふにやあらむ。逢坂などを、さて思ひかへしたらむはわびしかりなむかし。

とほるものか多し

【七】「逢ふ」にかけてある。(八)さうして思ひかへして逢ひに行かなかつたとしたらまことにつらいことであらうよ。

【八】(一)京都府久世郡淀町附近。「かくしてやなほややみなむ大荒木の浮き田の杜のしめならなく」(萬葉集十一)

(二)未詳。うつぎの原かといふ。

(三)奈良縣生駒郡。「かむなびの岩瀬の森のほととぎすならし岡にいづか來鳴かむ」(萬葉集八)岩代國(福島縣)岩瀬郡にもあつた。「陸奥や岩瀬の森のしける日に一聲つらき初ほととぎす」(貫之集)

(四)所在未詳。

【九】(一)「霧立ちて雁ぞ鳴くなる片岡のあしたの原はもみぢしぬらむ」(古今集五秋下)(二)近江。加賀にもある。

(三)底本にない。紀伊。

(四)信濃國(長野縣)下伊那郡。「その原やふせ屋に生ふるははき木のありとは見えあはぬ君かな」(新古今集十一戀一)是則。是則集。古今六帖五「くれどあはす」。

【十】(一)陰曆四月(初夏)の末ごころに。(二)淀の渡船場をわたつたところが、舟に牛車をのせて行く時。

(三)車の上から見るので、菖蒲や菰などの葉末が短く見えたので、取らせてみたら。「末の」底本「すゑ」

百八

森は 浮田の森。うへ木の森。岩瀬の森。たちぎきの森。

百九

原は あしたの原。粟津の原。篠原。萩原。園原。

百十

四月のつごもりがたに、初瀬にまうでて淀の渡りといふものをせしかば、舟に車をかきすゑて行くに、菖蒲・菰などの末の短く見えしを取らせたれば、いと長かりけり。菰積みたる舟のありくこそいみじうをかしかりしか。「高瀬の淀に」とはこれをよみけるなめりと見えて。三日歸りしに、雨のすこし降りしほど、菖蒲刈るとて、笠のいとちひさき着つつ、脛いと高き男童などのあるも、屏風の繪に似て、いとをかし。

(四)高瀬は淀川の一部。「こも枕高瀬の淀にかるこものかるともわれは知らで頼まむ」(神樂歌・古今六帖)

(五)「て」とめの例。八六・九五頁参照。

(六)五月三日に都へ歸つたが。

(七)衣を脛高くまでまくりあげた男の子どもなどがあるのも。「男童」は一四九頁参照。

【百十一】(一)ふだんとかはつて特別に聞えるもの。

(二)前田本の「元正」の本文にしたがふ方がよいとの説(慶野正次氏)があるが、初稿本文としてはこのままで支障はないであらう。現存三巻本はすべて「正月」である。能本は「元三」とある。

(三)せきばらひ。樂の音はいふまでもない。

【百十二】(一)繪にかくとかへつて見おとりのするもの。

【百十三】(一)「いみじう寒き」がよいの意。

【百十四】(一)しみじみと感動させられるもの。しみじみと哀愁感をおぼえさせられるもの。心をうたれるもの。

(二)底本など第一類本「孝」第二類本「けう」

(三)身分の高い、教養の深い、しかも若い男が、御嶽本尊(藏王菩薩つまり彌勒菩薩)に祈願して精進してゐるの。

(四)ぬかづき。禮拜。

百十一

つねよりことにきこゆるもの
正月の車の音。また鳥の聲。曉のしはぶき。ものの音はさらなり。

百十二

繪にかきおとりするもの
なでしこ。菖蒲。櫻。物語にめでたしといひたる男・女のかたち。

百十三

描きまさりするもの
松の木。秋の野。山里。山路。

百十四

冬はいみじう寒き。夏は世に知らず暑き。

(五)たとへば、その妻など。

(六)御嶽に参詣してゐる間の状態安否をどのやうであらうと留守の家人がひやひやしておそれてゐたのに。

(七)無事に帰宅したのはまことにすばらしい。「たひらかに」は底本「たいまいりに」。

(八)みつともない。見苦しい。底本「人のわるき」。

(九)この御嶽まうでは、どんなに身分の高い人でもとても粗末な服装でおまゐりなされると聞いてゐる。

(一〇)それなのに右衛門の権の佐宣孝(正暦二年八月筑前守、長徳四年右衛門の権の佐兼山城守。長保三年四月廿五日歿。紫式部の夫)といつた人は「無益なつまらないことだ。ただ清浄な衣を着てまうでるのだつたらはでな着物だつて、なんのことがあらう。御嶽の御本尊は『身なりは飾らず、賤しい粗末な服装で参詣せよ』などで決しておつしやるまい」といふのだ。「さらに」は底本「さらに」。(一)ここは狩衣のこと。(二)山吹がさね(表薄朽葉、裏黄色)のともぎようぎようしく目立つのを着て。

(三)宣孝の長男。長保三年六月藏人。

(四)模様のみだれ染にすり出した。

(五)水干(狩衣をすこし簡便にした衣)を

あはれなるもの 孝ある人の子。よき男の若きが御嶽精進したる。たてへだてゐてうちおこなひたる 曉のぬかいみじうあはれなり。むつまじき人などの目さまして聞くらむ思ひやる。まうづるほどのありさまいかならむなどつつしみおぢたるに、たひらかにまうで着きたるこそいとめでたけれ。烏帽子のさまなどぞすこし人わろき。なほいみじき人ときこゆれど、こよなくやつれてこそまうづと知りたれ。

右衛門の佐宣孝といひたる人は、「あぢきなきことなり。ただ清き衣を着てまうでむに、なでふことかあらむ。かならずよも『あやしうてまうでよ』と御嶽さらのたまはじ」とて、三月つごもりに、紫のいと濃き指貫、白き襖、山吹のいみじうおどろおどろしきなど着て、隆光が主殿の亮なるには、青色の襖、紅の衣、すりもどろかしたる水干といふ袴を着せて、うちつづきまうでたりけるを、歸る人もいままうづるもめづらしうあやしきことに、すべてむかしよりこの山にかかる姿の人見えざりつとあさまし

着る時にはく長い袴をいつたのである。水干はもと襦を用ひず、水張りにして干した絹をいつたので、ここでもその絹で作った袴だといふ説もある。

(二六)二人つづいて。

(二七)「この山」は底本「この山」

(二八)筑前の守が死んだ、その後任になつたのは、いかにもその詞「御嶽の御験にかはりはあるまい」といつたのちがひはなかつたことと思はれた。

(二九)御嶽の話のついでに書いておくのである。

(三〇)喪服。(三一)たけの低いちがや。

(三二)さまざまの色彩の。「夕暮」をこの句につづけることも考へられる。

(三三)眞竹。(三四)「山里の雪」底本、第二

類本にない。宮本にある。(三五)邪魔をする者やさまざまになる事情があつて、思ふとほりにならないの。

(三六)以下()内の部分は底本にはないが、底本系統本第二類諸本には「イ」として書き込み、または本文としてかかげてあるので加へた。これは塚本に見える本文である。

【百十六】(一)雨のすこし降つたやうな時などは。(二)清水寺。

(三)局(部屋)を定め支度してある間。

(四)荒木の階段で、樽階だといふ。また

がりしを、四月一日に歸りて、六月十日のほどに、筑前の守の死せしなりたりしこそ、げにいひけるにたがはずもときこえしか。これはあはれなることにはあらねど、御嶽のついでなり。

男も、女も、若く清げなるが、いと黒き衣着たるこそあはれなれ。

九月つごもり、十月ついたちのほどに、ただあるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの聲。鶏の子抱きて伏したる。秋深き庭の淺茅に露のいろいろの玉のやうにて置きたる。夕暮・曉にかは竹の風に吹かれたる、目さまして聞きたる。また夜などもすべて。山里の雪。思ひかはしたる若き人のなかの、せくかたありて心にもまかせぬ。(九月二十七日の曉がたまで人とのどかに物語してゐ明かしたるに、あるかなきかにほそき月の、山の端よりわづかに見えたるこそいとあはれなれ。また、あれたる宿の板間よりもり来る月影。山里の鹿の聲。八重むぐらのはひひろごりたる庭に、月のくまなく明かき。)

吳橋・庫橋ともいわれる。「清水」は能本「はつせ」。現在長谷寺にある木の長い階廊が長暦三年四月に春日社司正領中臣信清の造立した「九十九間の登廊」以後のものであるとするが、清少納言當時のそれではあるまいが、春記永承七年八月の記事などによつて、長暦以前にすでにあつたとも考へられる。(福山徹男氏説)ただし、三卷本によれば、こゝは清水寺の「くれはし」である。前田本・堀本も「清水」である。

(五)俱舍論(世親菩薩の作)四句一偈で六百頌ある。頌は偈とおなじで、字句を一定にして調誦に便利にしたもの。

(六)場所がらだけ興味深い。

(七)若法師たちはまるで板敷などの上を歩くやうに平氣でのぼつて行くのもおもしろい。「やうに」は底本「やらに」

(八)うはくつ。

(九)衣の裾を裏がへしてまくりあげなどした参詣人も。(一〇)「あり」底本「ある」

(一一)「深頭履、いま按ずるにこの間に深履といふ、その頭短きはこれを半靴といふ」(和名抄、原漢文)このころのは下部は革で、上部は錦製である。

(一二)當時のは桐の木で淺く作り、漆で黒く塗つた沓。

(一三)廊のあたりを沓を引きずつて入るの

正月に寺にこもりたるは、いみじう寒く雪がちに氷りたるこそをかしけれ。雨うち降りぬるけしきなるは、いとわるし。清水などにまうでて局するほど、くれ階のもとに車ひきよせて立てたるに、帯ばかりうちしたる若き法師ばらの、足駄といふものをはきて、いささかつみもなく下りのぼるとて、なにともなき經のはしうち讀み、俱舍の頌など誦じつつありくこそとこにつけてはをかしけれ。わがのぼるはいとあやふくおぼえて、かたはらによりて勾欄おさへなどして行くものを、ただ板敷などのやうに思ひたるもをかし。

法師「御局して侍り。はや」といへば、沓ども持て來ておろす。衣うへさまにひきかへしなどしたるもあり。裳、唐衣など、ことごとしく装束きたるもあり。深履・半靴などはきて、廊のほど沓すり入るは、内わたりめきてまたをかし。

内外ゆるされたる若き男ども、家の子などあまた立ちつづきて、「そこもととは、落ちたるるところ侍り。あがりたり」など教へゆく。なに者にかあらむ、いと近くさしあゆみ、さいだつ者などを、「しばし。人おはしますずに、

は禁中の沓することが思ひあはされて。
 (四) 主家の内(奥方)外(主人方)ともに立ち入ることをゆるされてゐる若い男たちや一門の者など。(五)そこは、低くなつてやります。(そこは)高うございまず。(六)主人に。(七)先に立つてゆく者などを。(八)「人の」底本と第一類本にない。(九)「とほり」は底本「返り」
 (一〇) 御堂の内陣と外陣とをし切る小さなつくりつけの格子。
 (一一) どうしてこの何箇月來おまゐりしないですごして來たのかと信心もおこる。

(一二) 「御あかし」は底本など「御みあかし」御燈明。
 (一三) この寺でささげる常時點じてゐる燈明ではなくて、内陣に別に人が奉納した燈明が。(一四) 佛前にある高座。導師はこれに上つて拜し、讀經する。

(一五) 「かひろぎ」能本「むかひてろぎ」底本以外の三卷第一類「むかひろぎ」第二類「かひろぎ」前田本・堀本「めかはりく」とあつて、いづれも「ちかふ」につづく。「かひろぎ」ゆれ動く意か。(島田退藏氏説)「ろぎ」は論議といはれるが「いつき」の誤寫かともいはれる。(山岸徳平氏説)

(一六) 非常に堂内一ぱいに反響してゐるので、いまあけてゐるのがだれの願文であ

かくはせぬわざなり」などいふを、げにとすこし心あるもあり、また聞きも入れず、まづわれ佛の御前にと思ひて行くもあり。局に入るほど、人のみ並みたる前をとほり入らばいとうたてあるを、犬防の内見入れたるこちぞいみじうたふとく、などでこの月ごろまうで過ぐしつらむとまづ心もおこる。

御あかしの、常燈にはあらで、内にまた人のたてまつれるが、おそろしきまで燃えたるに、佛のきらきらと見えたまへるはいみじうたふとときに、手ごとに文どもをささげて、禮盤にかひろぎ誓ふも、さばかりゆすり満ちたれば、とりはなちて聞きわくべきにもあらぬに、せめてしほり出だしたる聲聲の、さすがにまたまぎれずなむ。「千燈の御志」はなにがしの御ため」などはつかに聞ゆ。帶うちして拜みたてまつるに、「ここにつかうさぶらふ」とて、櫛の枝を折りて持て來たるは、香などのいとたふときもをかし。

犬防のかたより法師より來て、「いとよく申し侍りぬ。幾日ばかりこもらせたまふべきにか。しかじかの人こもりたまへり」などいひ聞かせて往

るかとりかけて聞きわけられさうもないが、力を入れてしほり出すやうに強く發した聲々は、さういふもの他の人とはまぎれずきはだつて聞える。

(七)だれだれの御ため。「なにがし」は、底本と第一類本「なにか」

(八)物語の際、上衣の上にかける掛け帯をして、禮拜してゐると。

(九)未詳。ここまゐるよしといふ挨拶呼びかけの語か。「つかう」は「仕う」か。「塗香」とみる説(永井義憲氏)もある。能本「ここにかうさふらふ」前田本

「ほとにへたう候」堺本「ほとにへたうさふらふ」。「かう」を「香」または「候」とみる説(池田龜鑑博士)もある。「へたう」を生かせば別當の義であらう。

(一〇)湯水をものにつぐ器。

(一一)わたくしのためらしいと。

(一二)「つく」は、内本による。

(一三)ひどく信心深く思ひこんだ様子で。

(一四)高い聲で讀經させたいと思はれるのに、ましてはなごきなきいとつた音を立てず、また聞きにくいほど高くなく、つましやかにかんだのは、底本とその同類本「させ」なし。

(一五)彼の願意をとげさせたい。

(一六)以前は。(一七)底本「そう」坊は、宿坊。

(一八)そばで突然、法螺貝を吹き出したのはとてもびつくりする。

ぬる、すなはち火桶、菓子など持てつづけて、半挿に手水入れて、手もなき盥などあり。「御供の人は、かの坊に」などいひて呼びもて行けば、かはりがはりぞ行く。誦經の鐘の音などわがななりと聞くものもしようおほゆ。かたはらによろしき男のいとしのびやかに額などつく、立居のほども心あらむと聞えたるが、いたう思ひ入りたるけしきにても寝すおこなふこそいとあはれなれ。うちやすむほどは、經を高うは聞えぬほどに讀みたるもたふとげなり。うち出でさせまほしきに、まいてはななどを、けざやかに聞きにくくはあらで、しのびやかにかみたるは、なにごとを思ふ人ならむ、かれをなさばやとこそおほゆれ。

日ごろこもりたるに、晝はすこしのどやかにぞ、はやくはありし。師の坊に男ども、女、童など、みな行きて、つれづれなるも、かたはらに貝をにはかに吹き出でたるこそいみじうおどろかるれ。清げなる立文持たせたる男などの、誦經のものうち置きて、堂童子など呼ぶ聲、山彦響きあひてきらきらしう聞ゆ。鐘の聲響きまさりて、いづこのならむと思ふほどに、やむごとなきところの名うちいひて、「御産たひらかに」など、げんげんし

(三九)願文をつつんだ立文。九七頁参照。
 (四〇)誦經への布施物。裝束布帛など。
 (四一)底本「たうとし」堂内で雜事を取り扱ふ者。
 (四二)「暇々しげに」(萩谷朴氏説)で驗ありげに、あらたかさうにの意か。あるいは、「げにげにしげに」で、もつともらしくの意か。
 (四三)御産はどうであらうかと、ただわけもなく気がかりで、なんとなく祈る氣持になるものである。
 (四四)仕官などについて。正月は縣召の除目が行はれる月である。
 (四五)おつとめもろくろくしない。「しやらず」は底本など「しらず」
 (四六)未詳。三卷本第二類「おほ」がない。前田本「大屏風」塚本「おほ屏風」能本「屏風」。「高き」は底本「たかさ」
 (四七)とても上手にとりあつかつて、疊などをそこへおいたかと思ふと、すぐ局にし切りをこしらへて。
 (四八)し馴れてゐるし、容易さうである。
 (四九)「げはひして」は底本「たはいして」
 (五〇)「人」は底本「人々」
 (五一)「なにになんがことがあふない」とか「火の用心をしなさい」などいふ人もあるやうだ。この系統第二類本「そのことあやし」

げに申したるなど、^{四五}すずるにいかならむなどおぼつかなく念ぜらるかし。これはただなるをりのことなめり。正月などはただいとさわがしき。もの^{四四}のぞみする人など、ひまなくまうづるを見るほどに、^{四五}おこなひもしやらず。日うち暮るるほどまうづるは、こもるなめり。小法師^{四五}ばらの、持ちあるくべうもあらぬおに屏風の^{四六}高きを、いとよく進退して、疊^{四七}などをうち置く^{四七}と見れば、ただ局^{四八}につぼねたてて、^{四八}大防に簾^{四九}さらさらとうちかくる、いみじうしつきたり、やすげなり。そよそよとあまたお^{五〇}り來て、大人^{五〇}だちたる人の、いやしからぬ聲のしのびやかなる^{四九}げはひして、歸る^{五〇}人にやあらむ、^{五一}「そのことあやし。火のこと制^{五一}せよ」などいふもあなり。七つ八つばかりなる男兒^{五二}の、聲愛敬^{五二}つき、おごりたる聲にて、侍^{五三}の男ども呼^{五三}びつき、ものなどいひたる、いとをかし。また三つばかりなるちごの寝^{五四}おびれてうちしはぶきたるも、いとうつくし。乳母^{五四}の名、母^{五五}など、うちいひ出でたるも、たれならむと^{五五}知らまほし。夜一夜^{五五}ののしりおこなひ明かすに、寝^{五五}も入らざりつるを、後夜^{五六}などはててすこしうちやすみたる寝^{五六}耳にその寺の佛の御經をいとあらあらしう、たふとくうち出^{五六}で讀^{五六}みたるにぞ、いとわざとた

(五) 聲に愛敬があり、またどこかたかぶつた聲で。はじめの「聲」は「肥え」とも考へられるが、底本など「一聲」とあるので、しばらくさう考へた。

(五三) 呼びつけ、何かしやべつてゐるのは。(五四) 寝ぼけて、せきをしたのも、とてもかはいい。「うちしはふき」は底本「うちしはふれ、「うちつくし」は底本など第一類本「うちくし」

(五五) やかましくさわいで勤行し明かすので、すこしも寝なかつたのを。

(五六) 後夜(ここは晨朝)の勤行も終つて、すこしうとうととして寢耳に。「うちやすみ」底本など第一類本「かちやすみ」(五七) 読んでゐるやうだなと、ふと目ざめて。

(五八) 適當な人が。(五九) 童女などをつれて。(六〇) 「圍繞し」と解するのが通説。池田龜鑑博士は「居念じ」(座して祈念する意)と説かれる。底本「能本など「いねうしたる」、前本「堀本「ねんしたる」

(六一) 「かりそめに」底本など「かりそめは」(六二) 「つく」は底本「す」

(六三) 「ぬ」は底本など第一類本「す」(六四) あの人らしいと思つて見るのも。(六五) 寺の事務をあつかふ者。元來その寺の長官をいふ。

(六六) たいした身分でない者とは見えぬ。(六七) 「男どもの」は底本「こもの」官本「おとこもの」第二類本による。

ふとくしもあらず、修行者だちたる法師の装うちしきたるなどが讀むなりと、ふとうちおどろかれてあはれに聞ゆ。また夜などはこもらで、人人しき人の、青鈍の指貫の綿入りたる白き衣どもあまた着て、子どもなめりと見ゆる若き男のをかしげなる、装束きたる童などして、侍などやうの者どもあまたかしこまりぬねうしたるもをかし。かりそめに屏風ばかりを立てて、額などすこしつくめり。かほ知らぬはたれならむとゆかし。知りたるはさなめりと見るもをかし。若き者どもはとかく局どものあたりに立ちさまよひて、佛の御かたに目も見入れたてまつらず、別當など呼び出でて、うちささめき物語して出でぬる、えせ者とは見えぬ。

二月つもごり、三月ついたち、花ざかりにこもりたるもをかし。清げなる若き男どもの、主と見ゆる二三人、櫻の襖、柳などいとをかしうてくくりあげたる指貫の裾もあてやかにぞ見なさる。つきづきしき男に装束をかしうしたる餌袋いだかせて、小舎人童ども、紅梅、萌黃の狩衣、いろいろの衣、おしすりもどろかしたる袴など着せたり。花など折らせて、侍めきてほそやかなる者など具して金鼓うつこそをかしけれ。さぞかしと見

(六)指貫の裾括を脛に高くくりあげた
(六七)もとは鷹の餌を入れる袋、このころは菓物・餅・飯などを入れて、持ち歩いた。
(七)色さまざまの下着、摺り亂した模様の袴など着せてゐる。

(七)きらびやかに装束させて。「花を折る」は、はなやかに装束する義の慣用句
(池田龜鑑博士説)

(七)寺の軒にかけ、布索で鳴らす金属製の樂器。鯨口。「うつ」は底本「うへ」

(七)きつとあの入だなど思はれる人を見るが、先方ではどうして知らう。そんな時、そのまま通りすぎてしまふものもものたりぬ氣がするので、「ここにゐると知らせようものを」などといふのもおもしろい。「見せ」は底本第一類本「させ」

(七)また一般にはあまり行かないところにただ自分の召使どもとだけで參籠參詣してゐるのはつまらなく思はれる。やはり自分と同じくらゐる身分の人で、おもろいこともにくいと感じることも、自分と同じ氣持でいろいろ話ができさうな友を、かならず一人か二人、あるいはもつとたくさんでもさそひたい。「さそひまほし」の「は」底本ない。

(七)そのゐあはせてゐる召使の中にも、相當りつばな者もあるが、絶えず見馴れてゐるためさう思はれないのであらう。「目馴れ」は底本「めされ」

ゆる人もあれど、いかでかは知らむ。うち過ぎて往ぬるもさうざうしければ、「けしきを見せましものを」などいふもをかし。

かやうにて、寺にも籠り、すべて例ならぬところに、ただ使ふ人のかぎりしてあるこそかひなうおぼゆれ。なほおなじほどにて、ひとつ心に、をかしきこともにくきこともさまざまにいひあはせつべき人、かならず一人
二人あまたもさそはまほし。そのある人のなかにもくちをしからぬもあれど、目馴れたるなるべし。男などもさ思ふにこそあらめ、わざとたづね呼びありくは。

百十七

いみじう心づきなきもの 祭・帙などすべて男のもの見るに、ただ一人
乗りて見るこそあれ。いかなる心にかあらむ。やむことなからずとも、若
き男などのゆかしがるをもひき乗せよかし。すき影にただ一人ただよひて
心ひとつにまぼりゐたらむよ。いかばかり心せばくけにくきならむとぞお
ぼゆる。

(七六)「なども」底本、第一類本「なと」と
(七七)わざわざいい相手をさがしまはると
ころをみるなど。

【軍士七】(一)はなはだ氣に入らぬものは。
まつたくおもしろくないものは。

(二)見ることである。

(三)いつつたい、どんな氣持なのであらうか。たとへ、たふとい身分の人でなくて
も、若い男などで、見物したい氣持を持つて
ゐる者をも乗せてあげたらいいのに。

(四)簾の透影にたつた一人ちらちら姿を
見せて、自分だけで見つめてゐたりする。

(五)どんなに心がせまく、こにくらしい
人なんだらうかと思はれる。

(六)「御主人はこの自分をかはいがつて
下さらない。某々こそただいま體を専ら
にしてゐる者だ」などといふのを。

(七)臆測である評をしたり、勝手なもの
うらみをしたりして、自分でさかしらぶ
つてゐる場合。

【軍士六】(一)つらさうに見えるもの。なさけ
なささうに、貧相に見えるもの。

(二)正午から三時ごろの暑い日盛りに。

(三)つまらぬ牛をつけ、がたがた行く者。

(四)服喪の時など車上にむしりを張る。

(五)とても寒い時、あるいは暑いころな
どに身分のいやしい女でみすばらしい服
装をしてゐるのが、子を背負つてゐる。

(六)板ぶきの家の黒ずんできたならしい

ものへ行き、寺へもまうづる日の雨。使ふ人などの、「われをばおぼさ
ず。なにがしこそただいまのときの人」などいふを、ほの聞きたる。人よ
りはすこしにくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし、すずるなるものう
らみし、わがかしこなる。

百十八

一 わびしげに見ゆるもの 六七月の午・未の時ばかりに、きたなげなる車
にえせ牛かけてゆるがし行く者。雨降らぬ日、張り筵したる車。いと寒き
をり、暑きほどなどに、下衆女のなりあしきが子負ひたる。老いたる乞食。
ちひさき板屋の黒うきたなげなるが雨に濡れたる。また、雨いたる降りた
るに、ちひさき馬に乗りて御前したる人。冬はされどよし、夏は袍・下
襲もひとつにあひたり。

百十九

暑げなるもの 隨身の長の狩衣。柄の袷袷。出居の少將。いみじう肥え

たる人の髪おほかる。六七月の修法の日中のときおこなふ阿闍梨。

百二十

はづかしきもの 男の心のうち。いざとき夜居の僧。みそか盗人のさるべき隈にゐて見るらむをたれかは知らむ。暗きまぎれに忍びてもの引き取る人もあらむかし。そはしも、おなじ心にかしとや思ふらむ。

夜居の僧は、いとほづかしきものなり。若き人の集まりゐて、人の上をいひ笑ひ、そしりにくくみするを、つくづくと聞きあつむる、いとほづかし。「あなうたて、かしがまし」など、御前近き人などのけしきばみいふをも聞き入れず、いひいひのはてはみなうち解けて寝るも、いとほづかし。

男は、うたて思ふさまならず、もどかしう心づきなきことありと見れど、さしむかひたる人をすかしたのむるこそいとほづかしけれ。まして、情あり、このまじう、人に知られたるなどは、おろかなりと思はすべうももてなさずかし。心のうちのみなならず、またみなこれがことはかれにいひ、かれがことはこれにいひ聞かすべかめるも、わがことをば知らで、か

のが雨に濡れてゐる。

(七)主人の車の先に立つ前驅。

【百十九】(一)近衛府の長。布の袷の狩衣を着る。(二)種々の布片を補綴して作つた袷。袷。「衲」は、補綴の義。後にはことに高貴な織物を厚く縫ひ綴つて「衲の袷」と呼んだ。底本とその同類本「のりのけさ」(三)朝廷で射儀や相撲などの儀式の時庭上に臨時に設ける座を「出居・出居の座」といひ、正装し、威儀を正してこの座につく近衛の少將をいふ。

(四)第二類本「七月のすはうのあさり日中の時などおこなふいかにあつからんと思ひやる又おなしころのあかかねのち」

(五)晝夜六時のうち正午の勤行をいふ。

(六)梵語。軌範師と譯す。天台・眞言兩宗において最高位の僧。

【百二十】(一)氣はづかしいもの。こちらがきまり悪く思ふもの。

(二)眼ざとい夜居の僧。夜居の僧は禁中などに伺候して終夜加持する僧をいふ。

(三)こそどろがしかるべきもののかげにかくれて見てゐるのをだれも知らないが、暗さに乗じてそつと物を引き盗る人もあることであらう。それを見てゐた盗人は自分と同じ心理だなど思つておもしろいと思つてゐるであらう。底本とその同類本「そはしも……をかし」脱落。

(四)若い女房どもが。(五)「寝る」は底本「ある」第二類本「ねいりぬる」

(六)相手の女性がいやな感じがして理想的でなく、こちらがもどかしく思ふほど齒がゆく氣に食はぬ點のある女だと思つてゐても、面とむかつた相手の女には、表面さらぬ體にもてなし、うまいことをいつて欺き頼みにさせるのはまことに。(七)あなたを思ふ氣持はとほりいつべんですなどと思はせるやうには、もてなさぬものである。「おろかなりと」の「と」は、底本にない。

(八)やはり自分を思つてゐてくれる氣持は格別なやうだと思ふことであらう。

(九)さてこのやうに男の心といふものはわかつたから、すこしでも思つてくれる人に逢ふと思はれて、たいして氣はづかしい氣持もしないものである。

(一〇)男は、ひどくあはれて氣の毒で到底見捨てられないと思はれる女を棄てて、まつたくなんとも思つてゐないのも、どのやうな心理なのかとあきれたものだ。

(一一)そのくせ他人を批評しとがめ、いろいろ理窟をこねることである。

(一二)格別たよりになる人もない宮仕人など仲好くなつて、相手が妊娠したことを全然知らないでゐるなんて實際あきれ

う語るはなほこよなきなめりと思ひやすらむ。いで、さればすこしも思ふ人にあへば、心はかなきなめりと見えていとはづかしうもあらぬぞかし。いみじうあはれに、心苦しう、見捨てがたきことなどを、いささかなにも思はぬも、いかなる心ぞとこそあさましけれ。さすがに人の上をもどき、ものをいとよくいふさまよ。ことにたのもしき人なき宮仕人などをかたらひて、ただならずなりぬるありさまを、きよく知らでなどもあるは。

百二十一

むとくなるもの 潮干の瀉にをる大船。大きな木の風に吹き倒されて根をささげて横たはれ臥せる。えせ者の従者がへたる。人の妻などのすずろなるもの怨じなどしてかくれたらむを、かならずたづねさわがむものぞと思ひたるに、さしもあらずねたげにもてなしたるに、さてはえ旅だちめたらねば、心と出で來たる。

百二十二

はてることである。

【百二十二】(一)無體裁なもの。臺なしの感がするもの。

(二)満潮でこそ大船が生きるのである。

(三)たいしたこともない男が召使の者を叱つてゐる圖。

(四)なんでもないことからむやみな嫉妬をして、身を隠したやうな場合、夫がきつとやいやいつてさがすにちがひないと思つてゐたが、案内外きでもなくて、妻自身としてくちをしやくきもきと思ふくらぬ夫がのんびりと放つておくので、さういつまでも家出をしてゐるわけにはゆかないから、自分から姿をあらはしたの。

「旅だち」は底本「旅たら」

【百二十三】(一)奈良方。(榮華物語廿六)「山がた・奈良がた」。山がたは比叡山方。

(二)御眞言の(陀羅尼)の略であらうか。

【百二十三】(一)まのわるいもの。きまりのわるいもの。

(二)他の人と呼んでゐるのに。

(三)「わがぞとて」第二類本「我ぞとて」古本「われぞとて」。自分かと思つて。

(四)興へる。ここはもらふ意に自他を轉用してゐる。

(五)人のうわさ話などをしてゐるうちに、自然と惡口をいつたりしたのに、幼い子どもが聞きとつて、當人のゐる時にそのことをいひ出した場合。

修法は ならがた。佛の御しんどもなど、讀みたてまつりたる、なまめかしうたふとし。

百二十三

はしたなきもの こと人を呼ぶに、わがぞとてさし出でたる。ものなどとらするをりはいとど。おのづから人の上などうちいひ、そしりたるに、幼き子どもの聞きとりて、その人のあるにいひ出でたる。

あはれなることなど人のいひ出でうち泣きなどするに、げにいとあはれなりなど聞きながら、涙のつと出で來ぬ、いとはしたなし。泣きがほつきり、けしきことになせど、いとかひなし。めでたきことを見聞くには、まづただ出で來にぞ出で來る。

八幡の行幸のかへらせたまふに、女院の御棧敷のあなたに御興とどめて、御消息申させたまひしなど、いみじくめでたく、さばかりの御ありさまにてかしこまり申させたまふが、世に知らずいみじきに、まことにこぼるばかり化粧じたるかほみなあらはれて、いかに見苦しからむ。宣旨の御

(六)急に出て来ないのは。

(七)反對に、皮肉にもすばらしいことを見たり、聞いたりする時には。「見聞く」は底本「みて」

(八)長徳元年十月廿二日、一條天皇石清水八幡宮行幸還御。朱雀院の東方で女院(東三條院藤原詮子。天皇の御生母)も御見物のことがあつた。ただし、齊信が宰相になつたのは長徳二年四月である。

(九)天皇が女院に御挨拶申させられた時など、とてもすばらしく。「たまひし……申させたまふが」は底本とその同系統本には「給」とのみあるが、能本で補ふ。

(一〇)いかにもあつくこぼれるほどお化粧した顔もすつかりはげでどんなに見苦しいことであらう。「こぼるばかり」は底本「こほれはかり」

(一一)「たる」は底本「たり」

(一二)馬に乗つた人につき添ふ男のがほつそりと白装束させたのだけをつれて。

(一三)さて、天皇がお通りになるのを見申しあげられる時の女院の御氣持を御推察申すと、感激し、隨喜して飛び立つてしまひさうな感じがした。

(一四)いつまでも泣いてゐて笑はれたものである。「長泣」は底本「なかなを」

(一五)世間普通の人でも、子のりつぽなものはやはりすばらしいものであるのに、ま

使^{つかひ}にて齊^{たかの}信^のの宰相の中將の御棧敷^{さきじき}へまありたまひしこそいとをかしう見え

しか。ただ隨身^{ずゐん}四人、いみじう装束^{まゐら}きたる、馬副^{うまのへ}のほそく白くしたたるばかりして、二條の大路^{おほぢ}の廣く清げなるに、めでたき馬をうちはやめていそぎまゐりて、すこし遠くより下りて、傍^{そば}の御簾^{みすだ}の前にさぶらひたまひしなどいとをかし。御返りうけたまはりて、また歸^{かへ}りまゐりて、御輿^{こし}のもとにて奏^{そう}したまふほどなどいふもおろかなり。

さて、うち^このわたらせたまふを見たてまつらせたまふらむ御こち思ひやりまゐらすは、飛び立ちぬべくこそおぼえしか。それには長泣^{ながなき}をして笑はるるぞかし。よろしき人だになほ子のよきはいとめでたきものを、かくだに思ひまゐらすもかしこしや。

百二十四

關白殿、黒戸^{くろと}より出でさせたまふとて、女房^{にようぼう}の隙^{ひま}なくさぶらふを、關白^{せき}あなみじのおもとたちや。翁^{おきな}をいかに笑ひたまふらむとて、わけ出^いでさせたまへば、戸口^{とぐち}近き人人^{ひと}いろいろの袖口^{そでぐち}して御簾^{みすだ}引き上げたるに、權大^{ごんたい}

して女院の場合は、このやうにお祭し申すだけでもおそれ多いことである。「かしこしや」は底本など「かしこや」

【言字四】(一)道隆。この段もめでたきことに感激した見聞談。「黒戸」は一五七頁参照。(二)りつは美しいかたがた(女房たち)だこと。あなたがたはこの醜い老人をどんなにお笑ひであらう。

(三)色の異つた美しい袖口を出して。

(四)伊周。正暦五年八月内大臣。

(五)装束うるはしく整へて、下襲の裾を長くひき、あたりもせまいばかりのありさまで侍候していらつしやる。

(六)道頼。この時には中納言。(七)兄弟でない人々は。(八)當時四位以上の袍の色は黒。(九)關白道隆殿はすつきりと儼雅なお姿で、御佩刀などとりなほされて休んでいらつしやるが。

(一〇)藤原道長。關白兼家の五男。正暦元年十月五日中宮大夫(長徳元年に及ぶ)。(一一)よもや下座なざるまいと思つてゐたのに。

(一二)關白道隆殿がすこしあゆみ出される、道長がすつと膝まづかれたので、弟ではあるがこれほどの人に下座をさせるなんて、道隆公はやはりどれほどの前世の善業をつまれたためであらうかと見申しあげたことはすばらしかつた。

納言の御沓取りはかせたてまつりたまふ。いとものものしく清げによそほしげに、下襲の裾長く引き、ところせくてさぶらひたまふ。あなめでた

大納言ばかりに沓取らせたてまつりたまふよと見ゆ。山の井の大納言、その御次次のさならぬ人人、黒きものをひき散らしたるやうに、藤壺の堀のも

とより登華殿の前までみなみたるに、ほそやかになまめかしうて、御佩刀などひきつくるはせたまひ、やすらはせたまふに、宮の大夫殿を戸の前に

立たせたまへれば、ゐさせたまふまじきなめりと思ふほどに、すこしあゆみ出でさせたまへば、ふとゐさせたまへりしこそ、なほいかばかりのむか

しの御おこなひのほどにかと見たてまつりしこそいみじかりしか。

中納言の君の、忌日とてくすしがりおこなひたまひしを、女房「たまへ、その數珠しばし。おこなひしてめでたき身にならむ」と借るとて集まりて

笑へど、なほいとこそめでたけれ。御前にきこしめして、宮「佛になりたらむこそはこれよりはまさらめ」とてうち笑ませたまへるを、まためでたくなりてぞ見たてまつる。大夫殿のゐさせたまへるを、かへすがへすきこゆれば、宮「例の思ひ人」と笑はせたまひし、まいて、この後の御ありさ

(三)右兵衛の督藤原忠君のむすめ、和泉守時明の室。

(四)命日をいふが、ここは一般にわたる忌日・齋日であらう。能本「忌の日」前本「忌日」。

(五)奇特にも殊勝らしく珠敷を繰り勤行をしてゐなされたが。

(六)わたたくしも勤行をして、めでたい佛の身にたたくしものです。(島田真織氏説)「めでたき身」を關白の身にとるのが通説。

(七)やはり關白殿の御威勢のほどはまことにすばらしい。

(八)關白など現世の榮華よりも佛のめでたい身になつた方が。

(九)道長の全盛を。この一文、皇后崩御後の筆であることを物語つてゐる。

【菅玉】(一)はつとはなやかにさし出たをりから。

(二)庭前の植込みの露はこぼれるほど。

(三)ぬれてゐるもの。(四)板や竹などで間をすかしてつくつた垣。(五)透垣の上

に細い竹か木を菱形に交叉した垣。

(六)降り置いてゐるのがまるで。

(七)「秋の野に置く白露は玉なれやつらぬきかくる蜘蛛の絲筋」(古今集四秋上、文屋朝康)

まを見たてまつらせたまはましかば、ことわりとおぼしめされなまし。

百二十五

九月きつばかり、夜一夜ひとよ降り明あかしたる雨の、今朝けさはやみて朝日いとけざやかにさし出でたるに、前まへ敷の露はこぼるばかり濡ぬれかかりたるも、いとをかし。透垣すゐの羅文らぶん、軒のきの上などはかいたる蜘蛛くもの巢すのこぼれ残りたるに雨のかかりたるが、白しろき玉たまを貫つらぬきたるやうなるこそいみじうあはれにをかしけれ。

すこし日たけぬれば、萩などのいと重おもげなるに、露つゆの落おつるに、枝うち動うごきて、人も手觸ふれぬに、ふとかみざまへあがりたるもいみじうをかしといひたることどもの、人の心にはつゆをかしからじと思ふこそまたをかしけれ。

百二十六

七日の日の若菜わかなを、六日人の持もて來き、さわぎとり散ちらしなどするに、見

(九)實にいいといったことどもが、他の人の心にはすこしもおもしろくもあるまいと思ふのが、またおもしろい。「ことども」は底本「ことくの一」

【言三六】(一)正月七日に用ゐる若菜をその前日の六日に人が持つて来て、わいわいひひ。(二)「問へば」は底本にない。

(三)さあ。下に「知らず」など打消の語が来る。躊躇してゐるさま。「いさ」は底本など「いま」

(四)路傍などに野生する石竹科の草。漢名、卷耳。(五)耳が無いから、聞えない顔をしてゐるのね。

(六)いくらつんでもつんでも「摘めど」に子どもを「抓めど」をかけてゐる。耳無草は耳が無いためあはれである。しかし、その草はおほくあるので、中には(この多數の子どもの中には)菊(聞く)ものわかる者)もまじつてゐたことだ。

(七)子どものことであるから。

【言三七】(一)太政官廳で。この段から底本中巻になる。

(二)逆に讀むのは上皇の音にかよふのを避けたためといふ。八月十一日六位以下の公務員中から藝能・行跡なごのすぐれた者を選出して官辭を定める行事。二月十一日に行はれるのは列見である。これを混同したのであらう。なほ春曙抄本

も知らぬ草を子どもこの取り持もて來きたるを、清「なにとかこれをばいふ」と問いへば、とみにもいはず、子「いさ」など、これかれ見みあはせて、「耳無草みみなしとなむいふ」といふ者のあれば、清「むべなりけり、聞きかぬかほなるは」と笑わふに、またいとをかしげなる菊きくの、生おひ出いでたるをも持もて來きたれば、清清つめどなほ耳無草みみなしこそあはれなれあまたしあればきくもありけりといはまほしけれど、またこれも聞きき入いるべうもあらず。

百二十七

二月、官くわんの司つかさどに定考ちやうこうといふことすなる、なにごとにかあらむ、孔子くつじなどかけたてまつりてすることなるべし。聰明そうめいとて、うへにも宮にもあやしきもののかたなど、かはらけに盛もりてまゐらず。

百二十八

頭かしらの辨べんの御みもとより、主殿ちゆうだん司つかさどなどやうなるものを白しろき色紙しきしにつつみて梅うめの花はなのいみじう咲さきたるにつけて持もて來きたり。急いそにやあらむといそぎ取と

「なにごとにかあらむ」の下に「釋奠も
いかならむ」とあるが、その本文は能本
にもない。「二月」はおそらく作者の思
ひ違ひか、二と八の誤寫かであらう。「す
なる」は「するといふことである」の意。
「なる」は傳聞・推定の助動詞。

(三)ひもろぎ(祭祀の供物)で、餅(白
黒、あは飯、栗黄、乾棗など。「あやし
きもの」はあは飯などをいっただのか。

【言子心】(一)藏人の頭兼左中辨藤原行成。
この段は、前段からつづく筆とみるべき
であらう。

(二)繪であらう。「餌」ともいふ。(坂元
三郎氏説)

(三)つつみ餅(餅に鶯・鴨などの子と雜
菜を煮合せて入れ四角に切る)。二月の列
見、八月の定考に公卿らに供した。

(四)諸司または國衙より諸省へさし出す
文書。願書。

(五)底本など「へたん」とある。

(六)別當職である少納言殿へと假に戯れ
たのである。

(七)「みまな」は姓。三間名(任那氏)
美麻那(宿彌姓)御間名(人姓)などが
ある。「なりゆき」は行成を逆に訓讀し
たものであらう。

(八)葛城の一言主の神が役小角から久米
路の石橋をわたすことを命ぜられたが、

り入れて見れば、餅饅といふものを二つならべてつつみたるなりけり。添
へたる立文には、解文のやうにて、

進上 餅饅一包

例に依て進上如し件

別當 少納言殿

とて月日書きて、「みまなのなりゆき」とて、奥に「こののをのこはみづから
まゐらむとするを、晝はかたちわろしとてまゐらぬなめり」といみじうを
かしげに書いたまへり。御前にまゐりて御覽ぜさすれば、宮「めでたくも
書きたるかな。をかしくしたり」などほめさせたまひて、解文は取らせた
まひつ。清「返りごといかがすべからむ。この餅饅持て來るには、ものな
どやとらすらむ。知りたらむ人もがな」といふをきこしめして、宮「惟仲
が聲のしつるを。呼びて問へ」とのたまはすれば、端に出でて「左大辨に
ものきこえむ」と侍して呼ばせれば、いとよくうるはしくて來たり。
清「あらず、わたくしごととなり。もし、この辨、少納言などのもとにかか

醜貌をはちて、其はこもり夜だけ働いた
故事をふまへていふ。

(九)使者になにか物をあげねばならない
のかしら。

(一〇)平惟仲。大進生昌の兄。

(一一)左大辨惟仲がまことにりつぱに、身
を整へ威儀を正してやつて来た。

(一二)いいえ、これは私用です。もし辨官
や少納言などのところへ。辨は左大辨を

さし、「もしあなたがわたしのところへ」
とも解し得るが、ここは辨も少納言も、

男子の官を一般的にいつたのであらう。

(一三)しもべなどには祝儀(かげもの)
などをつかはすべきものでせうか。

(一四)もらつておいて食べるだけです。

(一五)政治家の借字で、太政官の役人をいふ。

(一六)いいえ、さうではありませぬ。

(一七)すさまじく興のない意にいふ。(岩
崎美隆説) 餅饅にうつけたといふ。

(一八)すたくにいらつしやつて。

(一九)わたくしが出たところ。

(二〇)能本「歌よみして「または「うたよみ
して」とある。「そらよみ」は常套的な歌
を苦心もせずすらすらとよんでの意か。
または「そら」は「うた」からの誤寫か。

(二一)りつぱにもいつたものだなあ。

(二二)女ですこし自信のある人は、すぐに
歌を詠みたがるものだ。歌を詠んだりし

るもの持て来る下部しもぐさなどはすることやある」といへば、惟仲「さることとも侍
らず。ただとめてなむ食くひ侍る。なにしに問とはせたまふぞ。もし、上官じやうわん
のうちにて得えさせたまへるか」と問へば、清「いかがは」といらへて、返かへ
りごとをいみじう赤あかき薄うす様に、「みづから持てまうで來ぬ下部しもぐさはいと冷淡れんたん
なりとなむ見みゆるめるとて、めでたき紅梅こうばいにつけてたてまつりたる、すな
はちおはして、行成ぎやうせい「下部しもぐささぶらふ。下部しもぐささぶらふ」とのたまへば、出で
たるに、行成ぎやうせい「さやうのもの、そらよみしておこせたまへると思おもひつるに、
美美びびしくもいひたりつるかな。女にのすこしわれはと思おもひたるは、歌うたよみが
ましくぞある。さらぬこそかたらひよけれ。まるなどに、さることいはむ
人かへりて無む心しんならむかし」などのたまふ。「則光のりみつ、なりやすなど笑わらひてや
みにしことを、うへの御前ごぜんに人人いとおほかりけるに、かたり申まをしたまひ
ければ、『よくいひたり』となむのたまはせし」とまた人のかたりしこそ、
見苦みぐるしきわれればめどもをかし。

ない女がなじみよい。

(三) 悪ぼくに、歌などよむやうな人はかへつて思ひやりのない人だと思はれるよ。

(四) 傳末詳。底本「なりやす」の傍註に「此名不見」とし、「やす」の右に「まさ賦」と小書。

(五) 主上の御前に。能本「殿のまへに」

(六) 皇后様が主上にお話し申されたので。「けれ」は底本など「それ」

【百五十九】(一) 新しく官についた六位の藏人の笏の材に、なせ職の御曹司の東南隅の築土の板(土塀の骨組の板)を使つたのかしら。そんなら、西や東のものすればいいのに。(二) いふも無益なことでもあるが。(三) なせ理由も根拠もない名をつけたのであらうか、ほんとにへんだ。

(四) 形も名に相應してあるからさう呼ぶもよからうが、どうして汗衫は「かざみ」などと呼ぶのであらう、その形から「尻長」といへばよいのに。

(五) 表袴。袍を着る時にはく禮装の袴。

(六) 大口袴。表袴の下にはく。東帯にはかならず着用了。

(七) 袴といふ名は實におもしろくない。

(八) 指貫はどうしてあんな名があるのかしら。むしろ足の衣とこそいふべきだわ。

あるいは、そんなものをば、袋といへばいいのに。

女房「などて官得はじめたる六位の笏に、職の御曹司の辰巳の隅の築土の板はせしぞ。さらば、西、東のをもせよかし」などいふことをいひ川で

て、「あぢきなきことどもを。衣などにすすろなる名どもをつけむ、いとあやし。衣のなかに細長はさもいひつべし、なぞ汗衫は、尻長といへかし。男童の着たるやうになぞ唐衣は、短衣といへかし。されど、それは唐

土の人の着るものなれば。うへの衣、うへの袴はさもいふべし。下襲よし。大口また長さよりは口ひろければさもありなむ。袴いとあぢきなし。指貫

はなぞ、足の衣とこそいふべけれ。もしは、さやうのものをば、袋といへかし」など、よるづのことをいひのしるを、「いで、あな、かしがまし。

いまはいはじ。寝たまひね」といふいらへに、夜居の僧の、「いとわろからむ。夜一夜こそなほのたまはめ」と、にくしと思ひたりし聲高にていひたりしこそ、をかしかりしにそへておどろかれにしか。

百三十

故殿の御ために、月ごとの十日經佛など供養せさせたまひしを、九月

(九)「いややおやすみになるのはまことによろしくありません。一晚中お話しなさい」と、いかにもにくらしいと思つてゐた高聲でいつたのは、おもしろかつたがびつくりもしたことである。

【百三】(一)道隆。長徳元年四月十日薨去。四十三歳。

(二)長徳元年。道隆の半周忌。

(三)既註。一一五頁参照。

(四)若い女房たちもみな泣くやうである。底本など「みなみななく」

(五)「かの金谷花に酔ふの地、花は春ごとに匂ひて主は歸らず、南樓月を翫ぶの人、月は秋と期して身いづくにか去る。いはんや窟深き者は思ひもまた深し」(本朝文粹十四菅原文時、謙徳公のために報恩の善を修する願文。原漢文)和漢朗詠集雜懷舊にもある。謙徳公は藤原伊尹。

(六)「し」底本など「詩」

(七)皇后様がいらつしやるところに。

(八)すばらしく、まるで今日の忌日のためによんであつたやうな注文どりの詩でした。

(九)齊信と特に親しいそなたは、まして。

(一〇)以下齊信との關係を述べる。「この御ことばの意味は」といふ内容の接續詞が省略されてゐる。三五頁(三)参照。

(一一)あふところでは、いつも「どうして

十日、職の御曹司にてせさせたまふ。上達部・殿上人、いとおほかり。清は、講師にて、説くこと、はたいと悲しければ、ことにものあはれ深かるまじき若き人人、みな泣くめり。

果てて、酒飲み、詩誦などするに、頭の中將齊信の君の、「月秋と期して身いづくか」といふことをうち出だしたまへりし、はたいみじうめでしたし。いかで、さは思ひ出でたまひけむ。

おはしますところに行かまゐるほどに、立ち出でさせたまひて、宮「めでたしな。いみじう今日の料にいひたりけることにこそあれ」とのたまはすれば、清「それ啓しにとて、もの見さしてまゐり侍りつるなり。なほいとめでたくこそおぼえ侍りつれ」と啓すれば、宮「まいて、さおほゆらむかし」とおほせらる。

わざと呼びも出で、あふところごとにては、齊信「なか、まろをまこととに近くかたらひたまはぬ。さすがにくしと思ひたるにはあらずと知りたるを、いとあやしくなむおほゆる。かばかり年ごろになりぬる得意の、うとくてやむはなし。殿上などに明暮なきをりもあらば、なにことをか思ひ

ほくと心から仲好くして下さらないので
すか。もつとも、ほくをかくらしいと思
つてゐるのではないとわかつてゐるが、
どうも不思議でしやうがない。

(二)これほどながい年月交際してゐる間
がら、よそよそしくて終る法はない。

(三)もし、ほくが藏人頭の任期がすんで、
(四)おことはほくもつともです。夫婦に
なることは決してむづかしいことではあ
りませんが、さうした間がらになると。

(五)恐さうするのが役目のやうにひたすら
あなた様のことについておほめしてをり
ますのに、夫婦になつてはどうしてそれ
が、。ただ愛してゐて下さればいいの。

(六)夫婦になりますと、第三者に遠慮し
なければならぬし、自分の良心もとが
めて、ほめにくくなりませう。

(七)なぜですか。愛する夫をこそ他人と
して以上にほめる例がありますよ。底本
など「よそめ」を「め」につくる。

(八)その自分の夫をほめるなどいふこと
がにくらしく感じないわたくしなら、す
ぐにでも夫婦になりませうが、男でも女
でも、自分と近くかたらふ人の肩をもつ
てその人を、ひいきしたり、ほめたり。

【言三】(一)行成。長徳元年藏人の頭。同
二年辨。同四年右大辨。

(二)午前一時から三時まで。丑の刻から
翌日になるからいつたのである。

出にせむ」とのたまへば、清「さらなり。かたかるべきことにもあらぬを、
さもあらむ後にはえほめたてまつらざらむがくちをしきなり。うへの御前
などにてても、やくとあづかりて、ほめきこゆるにいかでか。ただおほせか
し。かたはらいたく、心の鬼出で来て、いひにくくなり侍りなむ」といへ
ば、齊信「などで。さる人をしもこそ、よそめよりほかにほむるたくひあ
れ」とのたまへば、清「それがにくからずおほえばこそあらめ、男も女も、
けちかき人思ひ、かたひき、ほめ、人のいささかあしきことなどいへば腹
立ちなどするがわびしうおほゆるなり」といへば、齊信「たのもしげなの
ことや」とのたまふも、いとをかし。

百三十一

頭の辨ぶんの、職しきにまゐりたまひて物語などしたまひしに、夜いたうふけぬ。
頭辨「明日御物忌あすなるに、こもるべければ、丑うしになりなばあしかりなむ」と
てまゐりたまひぬ。

つとめて、藏人所の紙屋紙かうやひき重ねて、頭辨「今日けふはのこりおほかるこ

(三)禁中校書殿にある。

(四)平野神社(現在京都市上京區)前の紙屋川に朝廷の紙屋院があり、そこですいた紙。主に宿紙で薄墨色のすき返しの紙がおほかつた。

(五)夜明けを告げる鶏の聲にせきたてられて。

(六)そんなに大層夜深い時(夜中)に鳴いた鶏(單に「とり・鳥」ともいつた)の聲は、あの中國の孟嘗君の偽の鳴き聲でしたらうか。「鶏の聲にもよほされて」などとおつしやいました。が、丑の刻にもならぬうちにあわてて参内遊ばしたものを、と皮肉つたのである。

(七)孟嘗君は中國戰國時代の人、齊の公族田文。食客三千人あつたといふ。ある時秦に囚はれたが、逃げて函谷關に來た。關の法は鶏が鳴いてから開くのであつた。その時食客のなかに鶏鳴をよくまねる者があつて、鳴きまねをしたところ、ほんもの鶏がみな一時に鳴き出したので無事に關を越えることができたといふ故事。(史記列傳十五孟嘗君傳)

(八)あなたとわたくしとが逢ふといふ逢坂の關です。

(九)底本とその同類本「とり」のそらねに「まだ夜の明けぬ中に鶏が鳴いて函谷關の關守を欺いたとしても、あなたとあ

ちなむする。夜をとほして昔物語もきこえ明かさむとせしを、鶏の聲にもよほされてなむ」といみじう言おほく書きたまへる、いとめでたし。

御返に、清「いと夜深く侍りける鳥の聲は、孟嘗君のにや」ときこえたれば、たちかへり、「孟嘗君の鶏は函谷の關を開きて、三千の客わづかに去れり」とあれども、これは逢坂の關なり」とあれば、

清「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世にあふ坂の關はゆるさし心かしこき關守侍り」ときこゆ。また、たちかへり、

頭「逢坂は人越えやすき關なれば鳥鳴かぬにもあけて待つとか」

とありし文どもを、はじめのは僧都の君いみじう額をさへ突きて、とりたまひてき。後後のは御前に。

さて、逢坂の歌はへされて返しもえせずなりにき。頭辨「いとわろし。

さて、その文は殿上人みな見てしは」とのたまへば、清「まことにおぼしけりとこれにこそ知られぬれ。めでたきことなど人のいひ傳へぬはかひなきわざぞかし。また、見苦しきこと散るがわびしければ、御文はいみじうかくして、人につゆ見せ侍らず。御心ざしのほどをくらぶるに、ひとしく

ふわたしの逢坂の關はそんなあまい手段では決しておゆるししないでせう。わたしをだまさうとなさつてもむだですわ。この歌は後拾遺集十六雜二にも見える。

(二)逢坂は通行の自由な關所ですから、鶏が鳴かなくても。あなたは開放的で氣のいい人だから。「相坂はこれ古昔の舊關なり。時、聖運なるがために門鍵を閉ぢず、出入禁むることなき」と年代久し」(文徳實錄、天安元年四月、原漢文)

(二)隆圓。(二)歴せられて。負けて。

(二)わたくしはあなたの御手紙をば。

(二)他の女房とはくらべものにならないで。

(二)「深慮もなく、世に廣めなどして結果わるくとりはからつた」などと普通の女のやうにいふだらうと思つてゐた。

(二)「まあ、どういたしまして。反對に御禮をこそ申しあげたうございますわ。

(二)「でもし、見せあるかれたら、どんなにいやでつらいことせう。

(二)「あなたに思つてゐる人のなかにわたしがはひつてゐましたことは。

(二)「そんなことをめづらしい、いまはじまつたことのやうに他人じみてよろこびなざるのだねえ。

【百三十二】(一)女房はいらつしやいますか。

こそは」といへば、頭辨「かくものを思ひ知りていふが、なほ人には似ずおぼゆる。『思ひくまなくあしうしたり』など、例の女のやうにやいはむと

こそ思ひつれ』などいひて、笑ひたまふ。清「こは、などで。よろこびを

こそきこえめ』などいふ。頭辨「まろが文をかくしたまひける、また、な

ほあはれにうれしきことなりかし。いかに心憂くつらからまし。いまより

も、さを頼みきこえむ』などのたまひて、後に經房の中將おはして、「頭の

辨はいみじうほめたまふとは知りたりや。一日の文に、ありしことなど語

りたまふ。思ふ人の、人にほめらるるはいみじううれしき」などまめまめ

しうのたまふもをかし。清「うれしきこと二つにて、かのほめたまふなる

に、また思ふ人のうちに侍りけるをなむ」といへば、經房「それめづらし

う、いまのことのやうにもよろこびたまふかな」などのたまふ。

百三十二

五月ばかり、月もなういと暗きに、殿上人「女房やさぶらひたまふ」と聲聲していへば、宮「出でて見よ。例ならずいふはたれそとよ」とおほせ

(二)ひどくものものしく大きな聲でおつしやるのは。

(三)擬聲語。がさつと。

(四)ああ「この君」でしたか。「この君」は竹の異名。王羲之の子王子猷が竹をうゑて、「なんぞ一日もこの君なかるべけんや」といつた故事(世説新語棲逸・晉書王徽之傳。原漢文)によるが、和漢朗詠集下雜の藤原篤茂の修竹冬青序と題する「晉の騎兵參軍王子猷うゑてこの君と稱し、唐の太子の賓客白樂天愛して吾が友となす」(本朝文粹十一にもある)などがより近い典據であらう。

(五)爲平親王の二男、源賴定。

(六)藤原行成。

(七)清涼殿の御庭の竹を折つて。

(八)おなじことなら、中宮職に參上して。

(九)「持て」は底本「りて」。

(一〇)それにして、人が普通知りさうもない教へを聞いて、人が普通知りさうもないことをいふのか。

(一一)「この君」などと申して、失禮な者だと思ひになつたのでせうか。

(一二)ほんたうに、それを知らずにね。

(一三)ほかのまじめな話などを。

(一四)西宮(四)参照。

(一五)いひ約束したことの目的もとげないで、なぜ歸られたのかなと不思議に思つ

らるれば、清「こは、誰ぞ。いとodorodorしうきはやかなるは」といふ。ものはいはで、御簾をもたげてそよとさし入るる、くれ竹なりけり。清「おい、『この君』にこそ」といひわたるを聞きて、「いざいざ、これまつ殿上に行きてかたらむ」とて、式部卿の宮の源中將、六位どもなどありけるは往ぬ。

頭の辨は、とまりたまへり。頭辨「あやしくても往ぬる者どもかな。御前の竹を折りて、歌よまむとてしつるを、『おなじくは、職にまゐりて、女房など呼び出でできこえて』と持て來つるに、くれ竹の名をいとくいはれて往ぬることいとほしけれ。誰が教へを聞きて人のなべて知るべうもあらぬことをばいふぞ」などのたまへば、清「竹の名とも知らぬものを。なめしとやおぼしつらむ」といへば、頭辨「まことに、そは知らじを」などのたまふ。

まめごとなどいひあはせてゐたまへるに、殿上人「種多てこの君と稱す」と誦じて、また集まり來たれば、頭辨「殿上にていひ期しつる本意もなくは、など歸りたまひぬるぞとあやしうこそありつれ」とのたまへば、

てゐたところですよ。

(二六)「とあやしう」能本など「いとあやしう」

(二七)「おい『この君』にこそ」などといふ名答にはどう答へられませう。つまりらぬ應答はかへつてしない方がいいでせう。

(二八)やんややんやとさわがしかつた。

(二九)主上もお聞きになつておもしろがつていらつしやいました。

(三〇)女房たちも。

(三一)建春門。七三頁参照。

(三二)傳未詳。

(三三)天皇のお手紙を中宮様の方へお持ち申しあげた時に。

(三四)存じませぬ。故事など全然知らないで「この君」といひましたのを。

(三五)皇后づきの女房で、殿上人にはめられる人のことを、皇后御自身およるこびあそばされるのもうれしくありがたい。

【宮三三】(一)正暦三年二月諒闇の御はて。圓融天皇は一條天皇の御父、正暦二年二月十二日崩御。當時諒闇は一年間であつた。

(二)喪服。藤の衣。

殿上人「さることには、なにのいらへをかせむ。なかなかならむ。殿上にていひののしりつるは。うへもきこしめして興ぜさせおはしましたつ」と語る。頭の辨もろともにおなじことをかへすがへす誦じたまひて、いとをかしければ、人人みなとりどりにものなどいひ明かして、歸るとても、なほおなじことをもろ聲に誦じて、左衛門の陣に入るまできこゆ。

つとめて、いととく少納言の命婦といふが御文まゐらせたるに、このことを啓したりければ、下なるを召して、宮「さることやありし」と問はせたまへば、清「知らず。なにとも知らで侍りしを、行成の朝臣のとりなしたるにや侍らむ」と申せば、宮「とりなすとも」とて、うち笑ませたまへり。

誰がことをも、「殿上人ほめけり」などきこしめすを、さいはるる人もよろこばせたまふもをかし。

百三十三

圓融院の御はての年、みな人御服脱ぎなどして、あはれなることを、お

(三)底本をはじめこの系統本には「人も世の」の一句がない。しばらく能本で補つた。「花の衣に」は「みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわらぬにせよ」(古今集十六哀微 僧正遍昭この歌は仁明天皇の諒闇のはてによまれた)によつてゐる。

(四)一條天皇の御乳母、繁子。右大臣師輔の四女。道兼の室。道兼の薨後、平惟仲の妻となる。

(五)雨天で蓑を着てゐたのである。

(六)しとみ戸も上げないのですよ。

(七)下半分はしめてある藪からとり入れて、かくかくで童が持つてまゐりましたと、主人藤三位にお聞かせしたが。

(八)長押の上にそのままさして。

(九)經文・陀羅尼などを讀誦した後でその巻数を記して寺や僧から願主におくる文書。ここはさう見たのである。「こそ」は底本などがない。

(一〇)表は香色(薄赤く黄ばんだ色)、裏は白。

(一一)ひどく變つた筆蹟で。

(一二)せめてこの喪服だけでも故院をおしのび申しあげるかたみと思つて山里にゐる者は脱ぎかねてゐるのに、都ではもはや喪服を脱いで花の衣になつたことであらうか。「椎柴」は椎のこと、喪服の染料にするからそのまま喪服の意に用ゐる。

ほやけよりはじめて、院の人も「花の衣」になどいひけむ世の御ことなど思ひ出づるに、雨のいたう降る日、藤三位の局に、糞蟲のやうなる童の大きな白き木に立文をつけて、「これたてまつらせむ」といひければ、「いづこよりぞ。今日明日は、物忌なれば、藪もまゐらぬぞ」とて、下はたてたる藪より取り入れて、さなむとはきかせたまへれど、藤三位「物忌なれば見ず」とて、かみについさして置きたるを、つとめて、手洗ひて、「いで、その昨日の巻數こそ」とて詩ひ出でて、伏し拜みてあげたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるをあやしと思ひてあげもて行けば、法師の、いみじげなる手にて、

これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつる椎柴の袖

と書いたり。いとあさましうねたかりけるわざかな。たれがしたるにかあらむ。仁和寺の僧正のにやと思へど、世にかかることのためはじ。藤大納言ぞ彼の院の別當にぞおはせしかば、そのしたまへることなめり。これを、うへの御前、宮などにとくきこしめさせばやと思ふに、いと心もとなくおぼゆれど、なほいとおそろしういひたる物忌しはてむとて、念じ暮らして、

また源頼政の「椎をひろひて」の歌と同様に、藤三位が四位から昇進したことを椎にかけたともいふ。なほ、この御製は後拾遺集十哀傷にも一條院御製とあるが、また藤原仲文集にも下句を「かへやつらむ」として見える。これが仲文の歌かどうかは疑はしいが、いづれにしてもこの段の事件は清少納言の宮仕中の體驗ではない。

(三)寛朝僧正。醍醐天皇皇子敦實親王の三男。當時七十七歳、圓融院の灌頂師。
(四)藤原朝光であらう。「別當にぞ」の「ぞ」底本にない。

(五)主上や中宮などに。

(六)やはりまことにおそろしいといつてゐた物忌を終へてしまはうと思つて、がまんして一日を暮らして。

(七)すべて御承知でありながらまことにぞ知らぬさまに御覽になつて。

(八)筆蹟ではないやうです。

(九)風流を好む。

(一〇)僧官(僧正・僧都・律師)僧位(法印・法眼・法橋)の總稱。

(一一)不審がり、知りたかつて申されたが。

(一二)「厨子」は袋戸棚のやうな形で調度類を納めて置く戸棚の類。

(一三)いや、まあいやな。このわけをおつしやつて下さいませ。ああ、頭が痛い。

またつとめて、藤大納言の御もとに、この返しをしてさし置かせたれば、すなはちまた返ししておこせたまへり。

それを二つながら持ていそぎまゐりて、藤三位「かかることなむ侍りし」と、うへもおはします御前にてかたり申したまふ。宮ぞいとつれなく御覽じて、宮「藤大納言の手のさまにはあらざめり。法師のにこそあめれ。むかしの鬼のしわざとこそおぼゆれ」など、いとまめやかたのたまはすれば、藤三位「さは、こは誰がしわざにか。すきすきしき心ある上達部・僧綱などはたれかはある。それにや、かれにや」など、おぼめきゆかしがり申したまふに、うへの、「このわたりに見えし色紙にこそいとよく似たれ」とうちほほ笑ませたまひて、いま一つ御厨子のもとなりけるを取りて、さしたまはせられたれば、藤三位「いで、あな、心憂。これおほせられよ。あな、頭痛や。いかでとく聞き侍らむ」とただ責めに責め申し、うらみきこえて笑ひたまふに、やうやうおほせられ出でて、主上「使に行きける鬼童は、臺盤所の刀自といふものものとなりけるを、小兵衛がかたらひ出だして、したるにやありけむ」などおほせらるれば、官も笑はせたまふを、ひきゆるがし

どうぞ早く聞きたうございます。

(三四)ただひたすらに責め申し。「申し」は底本など「申」

(三五)はじめに「養蟲のやうなる童」とあり、養蟲は鬼が生んだと傳へられてゐたから、かういつたのであらう。

(三六)御厨子所、臺盤所、内侍所などにあつて、雑役を勤める女官。

(三七)皇后づきの女房の名。

(三八)仲間にひき入れて、したのでせう。

(三九)かくやしがりゆすぶり申して。

(四〇)どうしてこのやうにわたくしをおだましあそばしたのですか。

(四一)たしかにその者のやうです。

(四二)誰の手紙を誰がお前にわたしたの。

(四三)いかにもばかげた様子でにやにやして走つて行つてしまつた。

(四四)「大納言」は内本「藤大納言」

【百三十四】閑散無聊なもの。退屈なもの。所在のないもの。

(二)ふだん住んでゐる所を去つてよそでする物忌。

(三)雙六の駒。當時の雙六は黒白の駒十五づつを盤の上に相對して積んで置き、二つの賽の目次第で駒二つづつを進めて勝負をきめる。「馬おりぬ」は積んだ駒が下りて進まないこと。

(四)この「まいて」は「除日に……」の

たてまつりて、藤三位「などかくははからせおはしましたしぞ。なほ疑もなく手をうち洗ひて、伏し拜みたてまつりしことよ」と笑ひねたがりゐたまへるさまも、いとほこりかに愛敬づきてをかし。

さて、うへの臺盤所にも、笑ひののしりて、局に下りて、この童たづね出でて文取り入れし人に見すれば、童「それにこそ侍るめれ」といふ。藤三位「たれが文をたれか取らせし」といへど、ともかくもいはで、しれじれしう笑みて走りにつけり。大納言後に聞きて、笑ひ興じたまひけり。

百三十四

つれづれなるもの ところさりたる物忌。馬下りぬ雙六。除日に官得ぬ人の家。雨うち降りたるはまいていみじうつれづれなり。

百三十五

つれづれなくさむもの 碁。雙六。物語。三つ四つのちごの、ものをかしういふ。またいとちひさきちごの、物語し、たがへなどいふわざしたる。

みにかかるのではあるまい。

【言三十五】(一)未詳。遊びの名か。前本・能本このあたり一物語したるがゑなどいふ事したる。

(二)洒落を飛ばしたり冗談を言つたりして話の上手な人が来た場合など、それが物忌の日であつても、入れてしまひたいものだ。

【言三十六】(一)とりえのないもの。

(二)無器量でおまけに心も悪い人。

(三)この一句未詳。通説には(御衣編糰の濡れたる)(姫糊に水が入つてぬれたもの)と解するが、「ぬりたる」は有力な現存各系統諸本にすべて「ぬりたる」とあつて、決して「ぬれたる」とはなつてゐない。「みそひめ」の語も再考の餘地がある。それに「これいみじう……」へつづく意が判然としない。

(四)書くのを。

(五)葬送にたく門燎に用ゐた竹の火箸、

これは誰もが知つてゐることであらう。したがつてわざわざ書き出して、それを人が讀んだりするほどのものではないが、「みな人……あらねど」は底本とその系統本にない。能本によつて補ふ。

【言三十七】(一)やはりりつばなこと。なんといつても結構なことは。

(二)臨時の祭のころの。三月の第二の午

菓子。男などの、うちさるがひ、ものよくいふが來たるを、物忌なれど、入れつかし。

百三十六

とりどころなきもの かたちにくさげに、心あしき人。みそひめのぬりたる。これいみじうよろづの人のにくむなるものとて、いまとどむべきにあらず。また、あと火の火箸といふこと、などてか、世になきことならねど、みな人知りたらむ。げに書き出で、人の見るべきことにはあらねど、この冊子さうしを人の見るべきものと思はざりしかば、あやしきことも、にくきことも、ただ思ふことを書かむと思ひしなり。

百三十七

なほめでたきこと 臨時の祭ばかりのことにかあらむ。試樂しがくも、いとをかし。

春は、空のけしきのどかにうらうらとあるに、清涼殿の御前に、掃部かみづ

かさの、疊たたみをしきて、使は北むきに、舞人まひは御前おまへのかたにむきて。これら

はひがおぼえにもあらむ。所ところの衆しゆうどもの、衛重ついで取りて前まへにもすゑわたしたる。

陪従たいじゆうもその庭ばかりは御前おまへにて出で入るぞかし。公卿・殿上人たんのうじんかは

りがはり、盃さかづき取りて、はてには、やく貝えいといふものして飲みて立つ、すな

はちとりばみといふもの、男をとこなどのせむだにいとたてあるを、御前おまへには

女をんなぞ出でて取りける。思おもひかけず、人ひとあらむとも知らぬ火焼屋たきやよりにはか

に出でておほく取らむとさわぐ者は、なかなかうちこぼしあつかふほど

に、軽かるらかにふと取りて往いぬる者にはおとりて、かしこき納殿なまめのとのには火焼屋たきや

をして取り入るこそいとをかしけれ。掃部かみべづかさの者ども疊取たかるやおそ

しと主殿そのりの官人、手てごとに箒はらき取りて砂すな馴ならす。

承香殿じようかうてんの前のほどに笛ふえ吹き立て、拍子はやしうちて遊あそぶを、とく出で來きなむ

と待つに、有度いうた濱はまうたひて、竹たけの筒ますのもとにあゆみ出でて御琴おんことうちたるほ

ど、ただいかにせむとぞおぼゆるや。一の舞まひの、いとうるはしう袖そでをあは

せて二人ふたりばかり出で來て、西にしによりてむかひて立ちぬ。つきつき出づる

に、足踏あしづまを拍子はやしにあはせて、半臂はんびの緒いとをつくるひ、冠かぶり・袍きぬの領くびなど、手ても

の目に行はれる石清水の祭か。

(三)社頭しゃがうで奏する舞曲を祭の一兩日前に御前で試みる。

(四)大藏省の被官。祭中の薦、席、床など小道具類、洒掃しうばうなどのことをつかさどる。

(五)向いて着座したと思ふが、これらはあるいは記憶違ひがあるかも知れない。

「むきて」は「て」とめの例。八六・八八・九五頁参照。

(六)三方。案の四方に穴があるのは四方。

(七)公卿たちの。

(八)常には御前に出ない陪従たいじゆう（地下ぢかの樂人。ここは東遊とうゆうびの琴笛がた）も。

(九)青螺せいら（大隅の屋久島でとれるので名づけられたといふ。一名夜光貝）で作られた盃で飲んで座をたつ、するとすぐ。

(一〇)饗饌きやうぜんのあまりを庭に投げて下衆どもに拾はせること。「取り食」の義。

(一一)人がゐるなどとは思はれない火焼屋たきや（衛士の詰め所をいふが、ここは臨時に庭前に設けて供饌などの用意をする所）

(一二)かへつてこぼしそれを始末してゐるうちに、一方手輕うちかにすつと取つて。

(一三)氣きのさいた物置もの置きには火焼屋たきやを利用して、取り入れるのはとてもおもしろい。

(一四)笏拍子しやくはやしをうつて合奏するが。

(一五)早く出て來てくれればと待つてゐる。

(一六)「うと濱に 駿河なるうと濱に 打

ちよする波は七くさの妹、ことこそよしことこそよし……(東遊 駿河舞、有度濱)

(二七)藏人所の雑色二人が早き出た和琴を樂人がうつやうに彈くのである。

(二八)「鳥故に濱に出で遊ぶ、千鳥故にあやもなき、小松がうれに綱な張りそ(駿河舞の節)こま山」はこまつ(誤寫か。(二九)駿河舞の舞の手振りの名。

(三〇)また「あるべし」からの約略。

(三一)こんどはそのまま吳竹(清涼殿の庭の東北)の空のうしろから舞つて出たが、その様子はとともすばらしい。さまざまも「は底本」さうとも。

(三二)あちらこちらに移りなどしてあるすばらしさは。(三三)十一月第三の酉の日。

(三四)社頭の儀を終へて、使舞人が再び禁中へまゐつて神樂を奏するをいふ。

(三五)その還立のさまは。

(三六)ふるへて澄んだ聲で吹きさると。

(三七)「おもしろく」は底本「おもしろし」

(三八)つめたくなるのも感じないほどおもしろい。

(三九)神樂の人長の舞の後に、召されて滑稽な舞を演ずる者。「さえ」ともいつた。

(四〇)得意さうな、満足らしい様子は。

(四一)里にゐる時は、ただ祭使・舞人たちが通過するのを見るだけであるが、それではどうも満足できないので、お社まで

やまずつくろひて、「あやもなきこま山」などうたひて舞ひたるは、すべてまことにいみじうめでたし。

大輪まわなど舞まふは、日一日見るともあくまじきを、果てぬる、いとくちをしけれど、またあべしと思へば頼たのもしきを、御琴みことかきかへして、このたび

はやがて竹のうしろより舞ひ出でたるさまざまはいみじうこそあれ。搔練かいたりのつや、下襲したぎなどの亂れあひて、こなたかなたにわたりなどしたる、いで

さらにいへば世のつねなり。

このたびはまたもあるまじければにや、いみじうこそはてなむことはくちをしけれ。上達部かんだちなどもみなつづきて出でたまひぬれば、さうざうしく、

くちをしきに、賀茂かものの臨時の祭は、還立かへりだの御神樂みかぐらなどにこそなくさめらるれ。庭燎にほひの煙けぶりのほそくのぼりたるに、神樂かぐらの笛ふえの、おもしろくわななき吹

きすまされてのぼるに、歌の聲こゑもいとあはれに、いみじうおもしろく、寒

くさえこほりて、うちたる衣きぬもつめたう、扇あふぎ持ちたる手も冷ゆともおぼえ

ず。才ざいの男おとこ召まして、聲こゑ引きたる人長ひとぶらのこちよげさこそいみじけれ。

里さとなるときは、ただわたるを見るがあかねば、御社やしらまで行き見て見るをり。

行つて見るをりもある。

(三三)舞人の。

(三四)社前の橋板を踏み鳴して。

(三五)「あはせて」は底本「あはて」

(三六)未詳。能本「良少將」前田本「さい

五中將」とあるが、「頭中將」の本文によ

るのが原態で、それは藤原實方を指した

ものがあらうか。當時から賀茂の橋下

(現在橋本の社)に實方の霊がとどまつ

てゐるとの説があつたらしい。

(三七)自分ですばらしいものだと思ひこん

であつたところ。

(三八)その靈があるといふことを聞くと、

こはくて、そんなに物に思ひしみ、執着

しまいと思ふが、やはりわたくしだつて、

このすばらしさだけはとも思ひすてら

れるものではない。

(三九)主上がお聞きになつて。

(四〇)ほんたうでございますか。さうでし

たら、どんなにすばらしいことでござい

ませう。

(四一)ぜひ還立の舞を。

(四二)わいわいいつて申しあげたので。

(四三)よもやそんなことはあるまいと油斷

してゐた舞人は。

(四四)とまどうて。

(四五)局にゐた女房たちがあわてて參上す

るさまは、またみものである。

もあり。大いなる木どものもとに車を立てたれば、松の煙のたなびきて、

火の影に半臂の緒、衣のつやも、晝よりはこよなうまさりてぞ見ゆる。橋

の板を踏み鳴して、聲あはせて舞ふほどもいとをかしきに、水の流るる

音、笛の聲などあひたるは、まことに神もめでたしとおぼすらむかし。頭

の中將といひける人の、年ごとに舞人にてめでたきものに思ひしみける

に、亡くなりて上の社の橋の下にあなるを聞けば、ゆゆしう、ものをさし

も思ひ入れじと思へど、なほこのめでたきことをこそ、さらにえ思ひすつ

まじけれ。

女房「八幡の臨時の祭の日、なごりこそいとつれづれなれ。など、かへりて

また舞ふわざをせざりけむ。さらば、をかしからまし。祿を得て、うしろ

よりまかづるこそくちをしけれ」などいふを、うへの御前にきこしめして、

「舞はせむ」とおほせらる。女房「まことにやさふらふらむ。さらば、いかに

めでたからむ」など申す。うれしがりて、宮の御前にも「なほそれ舞はせさ

せたまへと申させたまへ」など、集まりて啓しまどひしかば、そのたび、

かへりて舞ひしは、いみじううれしかりしものかな。さしもやあらざらむ

（四）女房があわてて腰につける裳を頭にかぶりなどして参上するのを。

【三十八】（一）道隆薨去後、長徳二年四月廿四日、伊周・隆家らが流罪となり、皇后も三月四日二條北宮へ退出、四月二十四日二條宮に遷御、ついで御落飾されたことなどをいふ。

（二）「東三條之東町、今鴨院也 世稱二條宮云々」（三卷本勅物）

（三）不愉快なこと（道長がたへ通ずるなどといふ冤罪）があつたので。「ありし」は底本など「ありしは」。

（四）氣がかりなのは、

（五）縁を切つてゐることはできさうもなかつた。「堪へで」（こらへられないで）とも解せられる。底本とその同系統本「たへて……ける」能本「かくて」

（六）源經房。長徳二年七月廿七日右近衛の權の中將。

（七）「たり」は宮本にない。

（八）このやうな御不運の際にも怠らずにお仕へしてゐることである。

（九）たて糸紅、ぬき絲黄の織物。

（一〇）どうして、こんなにしてあるのですか。お刈り取らせになつてはいかがです

とうちたゆみたる舞人、御前に召すときこえたるに、ものにあたるばかりさわぐも、いとどものぐるほし。

下にある人人のまどひのぼるさまこそ。人の従者、殿上人など見るも知らず、裳を頭にうちかづきてのぼるを笑ふもをかし。

百三十八

殿などのおはしまさで後、世のなかにこと出で來、さわがしうなりて、宮もまゐらせたまはず、小二條殿といふところにおはしますに、なにともなくうたてありしかば、ひさしう里にゐたり。御前わたりのおほつかなきにこそ、なほえ絶えてあるまじかりけれ。

右中將おはして、物語したまふ。右中將「今日宮にまゐりたりつれば、いみじうものこそあはれなりつれ。女房の装束、裳・唐衣をりにあひ、たゆまでさぶらふかな。御簾のそばのあきたりつるより見入れつれば、八九人ばかり朽栗の唐衣、薄色の裳に、紫苑・萩などをかしようてゐ並みたりつるかな。御前の草のいとしげきを、『なか。かきはらはせてこそ』とい

(一) 清少納言さんが里下りをしていらつしやつて誠に情ない。中宮様がこんな所にお住まひになる悲しい時には、たとへどんな事情やいささつがあらうとも。

(二) これを貴女にお聞かせ申せといふ意味なのでせうよ。

(三) 露臺。廊に似て、屋根がない。

(四) いや。いいえ。軽く否定した應答。

(五) わたくし自身もまたにくらしく感じましたので。

(六) 「寛大におつしやるね」と(皮肉を)いってお笑ひになる。「とて」は底本など第一類本にない。

(七) それにつけても、ほんに宮様はいまごろどうしてみられることであらうとお思ひ申しあげる。大體、こんどのこのひさしい里居も宮様の御氣色に因を發したものではなくて、そばに住へてゐる女房たちが。

(八) わたしが「左大臣(道長、長徳二年閏七月廿日左大臣)がたの人の知りあひである」などといつて、女房たちが集まり話してゐる時、わたくしがお局から參上して來るのを見ると、急にいひやめ、のけ者あつかひにする様子なのが、いまままでにないこと。

(九) ほんとに右中將のおことばどほり、長らくになつてしまつたが、また宮様の

ひつれば、「ことさら露置かせて御覽ずとて」と宰相の君の聲にていらへつるが、をかしうもおぼえつるかな。女房「御里居、いと心憂し。かかるところに住ませたまはむほどは、いみじきことありとも、かならずさぶらふべきものにおぼしめされたるに、かひなく」とあまたいひつる、かたり聞かせたてまつれとなめりかし。まゐりて見たまへ。あはれなりつるところのさまかな。臺の前に積多られたりける牡丹などのをかしきこと」などのたまふ。清「いさ。人のにくしと思ひたりしが、またにくくおぼえ侍りしかば」といらへきこゆ。右中將「おいらかにも」とて笑ひたまふ。

げにいかならむと思ひまゐらす。御けしきにはあらで、さぶらふ人たちなどの、「左の大殿がたの人知るすぢにてあり」とて、さしつどひものなどいふも、下よりまゐる見ては、ふといひやみ、はなち出でたるけしきなるが見ならはずにくければ、宮「まゐれ」など度度あるおほせ言をも過ぐして、げにひさしくなりにけるを、また宮の邊には、ただあなたがたにいひなして、そら言なども出で來べし。

例ならずおほせ言などもなくて日ごろになれば、心ほそくてうちながむ

そばにゐる人々は、わたしをあちらがた
(道長側)の者としてしまつて、きつと
あらぬ噂なども出て來るであらう。

(三〇)物思にしづんでゐると。

(三一)「中宮様から宰相の君を通してこつ
そりと下さいました」といつて、ここで
までも人目をはばかつてゐるのもあんな
りである。

(三二)山吹がくちなし色で、口無(くちな
し)にかけ、「山吹の花色ごろも主やたれ
間へど答へずくちなしにして」(古今集十
九俳諧、素性、古今六帖五)などとよま
れてゐるのによつたものである。

(三三)「心には下行く水のおきかへりいは
で思ふぞいふにまされる」(古今六帖五。
大和物語には下句だけ見える)

(三四)ちよつとそこまで用事に行き、また
參上致します。

(三五)上の句をきれいに忘れてゐる。

(三六)もうこの口もとまで出かかつてゐる
のに、いひ出せないなんて。「ぬ」は底
本など「ね」

(三七)前にすわつてゐた者(童女)が。能本
この前に「ちひさきわらはの」とある。

(三八)中宮様に御返事をさしあげて、しば
らくたつてから御所に參上したが、どう
かしらと、いつもよりは氣がひけて、御
几帳に半分隠れて伺候してゐるのを。

るほどに、長女なごめ文ふみを持もて來きたり。長女「御前ごぜんより宰相さいしやうの君きみしてしのびてた
まはせたりつる」といひて、ここにてさへひきしのぶるもあまりなり。人
づてのおほせ書がきにはあらぬなめりと胸むねづぶれて、とくあげたれば、紙には
ものも書かせたまはず、山吹やまぶきの花はなびらただ一重ひとへをつつませたまへり。それ
に、「いはで思ふぞ」と書かせたまへる、いみじう日ひごろの絶たえ間ま敷ぢかれ
つる、みななくさめてうれしきに、長女なごめもうちまもりて、「御前ごぜんにはいか
ものをりごとにおぼし出いできこえさせたまふなるものを。たれもあやし
き御長居ながゐとこそ侍まるめれ。なかかはまゐらせたまはぬ」といひて、「ここな
るところにあからさまにまかりて、まゐらむ」といひて往いぬる後のち、御返り
ごと書かきてまゐらせむとするに、この歌うたの本ほんさらに忘わすれたり。「いとあや
し。おなじ故事ふるごとといひながら、知らぬ人やはある。ただここもとおぼえ
ながら、いひ出いでられぬはいかにぞや」などいふを、聞ききて、前まへにゐたる
が、童女「下したゆく水」とこそ申ませ」といひたる、など、かく忘れつるなら
む。これに教おしへらるるをかし。

御返ごんかへりまゐらせて、すこしほど經へてまゐりたる、いかがと例たとよりはつつま

(三九)あのはづかしがつて隠れてゐるのは、新参者か。

(四〇)「いはで思ふぞ」などいふ歌はいやな歌だけれど、あのをりにはわたしのいひなかつたことだつたのよ。

(四一)それにしても、まつたくそなたに絶えずあつてゐないと、しばらくの間も心が晴れないことです。「慰む」は底本とその同類本「なく」。「なく」は和ぐの意か。

(四二)「故事」は底本以外「事」とある。

(四三)謎々あはせ。「なぞ」は「何ぞ」で、秀句あらそひ、考へもの競争である。

(四四)左方・右方、いづれの方人(ひいきの人)でもなかつたが、さうした謎合に巧みで老練だつた人が。

(四五)頼みにさせるので、さういふ以上いくらなんでもつまらぬことはよもやいふまいと。

(四六)その謎の詞は、そのまま残しておいてわたくしにおまかせなさい。かう申してゐる以上、決して不都合なことはしません。

(四七)謎々あはせの當日が。

(四八)萬一おなじ謎でもあつたら大變ですから。△頁(二〇)参照。

(四九)「ちや、もう知らない。おことわりします」などと立腹するので。

しくて、御几帳さちやうにはた隠かくれてさぶらふを、宮「あれは新参にいせうかりか」など笑はせたまひて、宮「にくき歌なれど、このをりはいひつべかりけりとなむ思ふを。おほかた見つけではしばしもえこそなくさむまじけれ」などのたまはせて、かはりたる御けしきもなし。

童わらわに教へられしことなどを啓けいすれば、いみじう笑はせたまひて、宮「さることぞある。あまりあなづる故事かごなどは、さもありぬべし」などおほせらるるついでに、宮「なぞなぞ合あはせしける、方人かたうとにはあらで、さやうのことにりやうりやうじかりけるが、『左の一はおのれいほむ。さ思ひたまへ』など頼たのむるに、さりとともわろきことはいひ出いでじかすと、たのもしくうれしうて、みな人作り出いだし、選えりさだむるに、『そのことばをただまかせてのこしたまへ。さ申してはよもくちをしくはあらじ』といふ。げにとおしはかるに、目めいと近ちかくなりぬ。人人「なほこのことのためへ。非常ひふじょうにおなじこともこそあれ」といふを、『ささは、いさ知らず。な頼たのまれそ』などむづかりければ、おぼつかかなながら、その日ひになりて、みな方かたの人、男女居おとこわかれて、見證けんじょうの人などいとおほく居ゐ並ならみてあはするに、左の一いみじく用

(四〇)見物しながら批判する人。審判官。
(四一)謎あはせをするのに。
(四二)みな待ち遠しくどうなるかとみつめて。
(四三)弓張月。鼓月。これを三日月と解くことは小兒でも知つてゐるやさしい謎である。
(四四)勝つたも同然だから。
(四五)左方の人は、あきれかへつて。
(四六)右方に通じて。敵に内通して。
(四七)すぐ氣づいたが。
(四八)はりあひがなくて、まことに残念、ばからしいと心中に思ひ、笑つて、わざと。
(四九)べそ口をして、『これはまるつた』といつて。
(五〇)ふざけかかつたところ。
(五一)勝のしるしの籌すゑを籌すゑ刺さにささせた。
(五二)「知らない」といつたからには、どうして、負けにならないことがあらう。
(五三)思ひ出せない時はそんなものである。
(五四)「と」は底本などない。
(五五)負けた右の人はいかにもそのやうにくちをしく思ひませうよ。どうしてそんな残念な答へかたをしたのでせう。それにしても、一番が「天に張り弓」などといったのを聞きつけた左の方の人の心中は、どんなに齒がゆく思つたでせう。

意してもてなしたるさま、いかなることをいひ出でむと見えたれば、こなたの人、あなたの人、みな心もとなくうちまもりて、『なぜ、なぜ』といふほど心にくし。左の一『天に張り弓』といひたり。右方みぎかたの人はいと興きようありてと思ふに、こなたみぎの人はものもおぼえず、みなにくく愛敬あいぎやうなくて、あなたによりてことさらに負けさせむとしけるをなど、かた時のほどに思ふに、右の人、『いとくちをしく、をこなり』とうち笑ひて、右の一『やや、さらにえ知らず』とて、口を引き垂たれて、『知らぬことよ』とてさるがうしかくるに、籌すゑさせせつ。右の一『いとあやしきこと、これ知らぬ人はたれかあらむ。さらに籌すゑささるまじ』と論ずれど、左の一『知らず』といひてむには、などてか負くるにならざらむ』とて、つぎつぎのもの人なむみな論ろんじ勝たせける。『いみじく人の知りたることなれども、おぼえぬときはしかこそはあれ。なにしにかは、知らずとはいひし』と、後のちにうらみられけること』などかたり出でさせたまへば、御前おまへなるかぎり、女房にようぼう「さ思ひつべし。くちをしういらへけむ。こなたの人のこちうち聞きはじめけむ、いかがにくかりけむ」などと笑ふ。これは忘れたることかは、ただみ

〔五六〕このお話の右の一番は、「天に張り弓」の解を忘れてゐたのではない。自分は「いはで思ふぞ」の上の句を忘れたのだが。底本をはじめ三巻本系統本には「かは」の「か」がない。その本文によると、以下終まで、この話は、「自分が忘れたことはみな人が知つてゐることだ」といはれる例であらうか、などの意となつたが、しばらく本文を改めて通説にしたがう。しかし、「ただみな……」への接続は未だ穩當でない。

【四三】(一)底本など「くろうくもり」とある。「暗う……」とよむのは誤。(二)きちつときれいに手入れし整はせてもなく、平でもない畑の。

(三)若い枝が多くさし出してゐるのが。

(四)底本「つやくかにて」

(五)衣の裾を上へたくしあげてゐる男兒。二六九頁参照。

(六)すこし脛を見せて、脛高とまではいかないが、裾をすこしまくりあげた。「こはき」は小脛である。

(七)杖を短く切つて穂(まり)を打つ具を作るのである。

(八)わが御主人もお望みです。

(九)われがちにと奪ひ取り争ひ。從來、「はしりかひ」(走り交ひ)などと校訂さ

な知りたることとかや。

百三十九

正月十餘日のほど、空いとくろう雲もあつく見えながら、さすがに日はけざやかにさし出でたるに、えせ者の家の荒畠といふものの土うるはしうも直からぬ、桃の木の若だちて、いとしもとがちにさし出でたる、片つかたはいと青く、いま片つかたは濃くつややかにて蘇枋の色なるが日影に見えたるを、いとほそやかなる童の、狩衣はかけ破りなどして髪うるはしきが、上りたれば、引きはこへたる男兒、また小脛にて半靴はきたるなど、木の下に立ちて、「われに毬打切りて」など乞ふに、また髪をかしげなる童の、袖どもほころびがちにて袴なえたれど、よき鞋着たる三四人來て、「卵槌の木のよからむ切りておろせ。御前にも召す」などいひて、下したれば、ばひしらがひ取りて、さし仰ぎて、「われにおほく」などいひたるこそをかしけれ。

黒袴着たる男の走り來て乞ふに、「待て」などいへば、木の下を引きゆ

れたのは誤。底本とその同系統本「はひしらかひ」または「はひしゝかい」能本「はしりかい」前本・堺本「はしらかひ」(一)底本と同系統本「まして」とある。(二)しがみついでわめくのもおもしろい。

(三)梅の實などがなつてゐるをりも。
【酉平】(一)それでもまだ満足しないのであらうか。

(二)普通の燈臺は四尺、ここは三尺の燈臺をいふ。短いほど雙六盤を照らすのに都合がよい。

(三)相手がこちらの賽のよい日が出ぬやうにと祈り責めて、急にも賽を筒に入れないので。

(四)襟の紐が顔にかかるので。
(五)あまりきれ地の固くない烏帽子をうしろにふりやつて。

(六)待ち遠しさうに見まもつてゐるのは、いかにも自信ありげに見える。

【酉平】(一)直衣のえりにくけ込んだ紐を(二)うちくつろいだ、しとけないさまで、碁石を碁筒からつまみ出し、盤面に拾ひ出して置くのに。

(三)身分のおとつた相手の人がすわつた姿勢もかしこまつた様子で。
(四)および腰になつて、邪魔になる袖の下をもう一方の片手でおさへなどして。

るがすに、あやふがりて猿のやうにかいつきてをめくもをかし。梅などのなりたるをりもさやうにぞするかし。

百四十

清げなる男の雙六を日一日うちて、なほあかぬにや、短き燈臺に火をともしていと明かうかかけて、かたきの賽を責め詰ひて、とみにも入れねば、筒を盤の上に立てて待つに、狩衣の領のかほにかかれば、片手しておし入れて、こはからぬ烏帽子ふりやりつつ、「賽いみじく呪ふともうちはずしてむや」と心もとなげにうちまもりたるこそ、ほこりかに見ゆれ。

百四十一

碁を、やむごとなき人のうつとて、紐うち解き、ないがしろなるけしきにひろひおくに、おとりたる人の、ぬずまひもかしこまりたるけしきにて、碁盤よりはすこし遠くて、およびて、袖の下はいま片手してひかへなどしてうちぬるもをかし。

【四十二】(一)どんぐりの笠の類。

(二)火事の現場。

【四十三】矢。一名鬼蓮。葉に刺^つがある。

【四十四】(一)疊につくるこも。こもは疊表の材。當時の疊は現在のござの類である。

(二)水を容器に入れる時の透き影。

【四十五】(一)「しやく」を「笏」とみる説

(清水濱臣・關根正直博士)と「爵」と

解する通説とがある。式部の丞は殿上を

下る時五位に敘せられるからといふのが

後者の主張であるが、この一段の内容か

らみて前者によるべきであらうか。後考

を期したい。

(二)綾の屏風に對して、布屏風はいやし

いものである。その新しいのは下品

である。

(三)古くなつてすすけて黒ずんでゐるの

は、あんなつまらないものなので、却へつ

て目立たず全然氣にならないのである。

(四)「したてて」底本「したて」とよめ

る。

(五)貝がらを焼いて作つた白いやはらか

い粉。繪の具にする。

(六)丹砂。鑛物の名。深山の石がけの間

から水銀・珪石などと混じて産する。緋

色で、碎いて、銀朱の代用とし、漆器を

塗^ぬり、また藥用にする。「辰砂」ともい

百四十二

おそろしげなるもの 椽^{ゑん}のかさ。焼^やけたるところ。水^みふぶき。菱^{ひし}。髪

おほかる男^{おのこ}の洗^{せん}ひてほすほど。

百四十三

清^{きよ}しと見ゆるもの かはらけ。あたらしき鏡^{かがみ}。疊^{かさね}にさす薦^{せき}。水^みをもの

に入るるすき影^{かげ}。

百四十四

いやしげなるもの 式^{しき}部の承^{ていじょう}のしやく。黒^{くろ}き髪^{かみ}の筋^{すぢ}わるき。布^ぬ屏^{びん}風^{ふう}の新^{あらた}

らしき。舊^{ふる}り黒^{くろ}みたるはさるいふかひなきものにて、なかなかなにとも見

えず。新^{あらた}らしうしたてて、櫻^{うづ}の花^{はな}おほく咲^さかせて、胡^こ粉^{こな}、朱^{しゆ}砂^さなどいろど

りたる繪^ゑどもかきたる。遣^や戸^と厨^{しよ}子^し。法^{ほふし}師^しのふとりたる。まことの出^い雲^{うん}むし

ろの疊^{たたみ}。

ふ。

(七)開き戸の厨子に對して、引き戸の厨子をいつたのであらう。

(八)はんものの。

【西平五】(一)ひやひやするもの。はらはらするもの。非常に心配なこと。驚くこと。

(二)毎年五月武徳殿で行はれ、賀茂・石清水などの神事にも行はれる。

(三)ここはこより(紙より・かうより)の元結。細く長くよるので切れさうで。

(四)氣分が悪いといつて常でない様子である時。

(五)疫病などが流行して。

(六)思つてゐる人の聲で、はつきりと思ひがどうもさうらしいと思はれる程度の聲を。「いちじるからぬ」は「(人の)聲」を修飾する。

(七)ほかの人がわが思ふ人のことなど評判する時にも。

(八)まつさきに胸がどきつとする。

【西平六】(一)かはいらしいもの。可憐なもの。

(二)底本はじめその系統諸本・能本・前本・堀本すべて「うり」。従來流布の「ふり」は能本の末流本にはじめて見えるもので、辭書類に用例としてあげるのは誤。

(三)人が鼠鳴きをしてちゆうちゆうと呼ぶと、びよんびよんとをどりながら。

百四十五

胸一つぶるるもの 競馬二見る。元結三よる。親などのこ四こちあしとて例ならぬけしきなる。まして、世五のなかなどさわがしときこゆるころはよろづのことおぼえず。まだものいはぬちごの泣き入りて、乳六も飲まず、乳母七の抱八くにもやまでひさしき。

例九のところならぬところにて、ことにまたいちじるからぬ人の聲聞きつけたるはことわり、こと人七などのそのうへなどいふにも、まづこそつぶるれ。いみじうにくき人の來たるにもまたつぶる。あやしくつぶれがちなるものは胸こそあれ。

昨夜十來はじめたる人の、今朝十一の文のおそきは、人のためにさへつぶる。

百四十六

う一つくしきもの 瓜二にかきたるちごのかほ。雀三の子の鼠鳴四するにをどり來る。二五つ三六つばかりなるちごのいそぎてはひ來る道に、いとちひさき塵七

(四)目敏に。目早く。
 (五)底本とその同類本「おとなことに」宮本「こと」の右に「なと歟」と傍書してある。

(六)婦人が受戒して尼となつた時、垂髪すいぱつの先を肩から頸のあたりでそぎそろへたのをいふが、當時の女尼はかうした髪をしてゐたのである。尼びたひ。
 (七)かきのけもしないで、くびをかしげて何かを見てゐるものかはいい。

(八)攝關など良家の子息の元服以前に昇殿をゆるされて遊ばせあやしてゐるうちに、とりすがつて寝てしまつたのは。

(九)着物のたけが長いのでたすきで結びあげてあるのが。「襦」は袴についたもので、それを背から胸へかけてゆつたといふ。(山崎美隆説)

(一〇)袖がひどく目立つてゐるのを着て。
 (一一)雛の足の上部まで十分毛が生えてゐないありさま。「はぎだか(脛高)」などと類似の用語。

(一二)びよびよとやかましく鳴いて。

(一三)一八九頁参照。

(一四)「言字七」人があるので調子に乗るもの。人の存在で一段と乗ずるもの。「人ばへ」は「人そばへ」の脱とも略ともいひ、「人映え」の義ともいふ。「心ばえ」などとあ

のありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて大人なおとなどに見せたる、いとうつくし。頭はあまそぎなるちごの、目に髪のおほへるを搔かきはやらで、うちかたぶきてものなど見たるもうつくし。

大きなはあらぬ殿上童わらわの、装束まうぞうきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごの、あからさまに抱いだきて遊ばしうつくしむほどに、かいつきて寝たる、いとらうたし。

雛ひなの調度てうど。蓮はらすの浮葉うきはのいとちひさきを池より取りあげたる。葵あひのいとちひさき。なにもなにも、ちひさきものは、みなうつくし。

いみじう白く肥こえたるちごの二つばかりなるが、二藍ふたあざのうすものなど、衣長きぬながにて襷結たすきむすひたるがはひ出でたるも、また短きが袖そでがちなる着きてありくも、みなうつくし。八つ・九つ・十とばかりなどの男兒おとこの、聲こゑはをさなげにて書讀かみみたる。いとうつくし。

鶏にはとりの雛ひなの、足高あしたかに白うをかしげに衣きぬみじかなるさまして、ひよひよとかしがましう鳴きて、人の後先しりさきに立ちたちてありくもをかし。また親おやの、ともにつれてたちて走るも、みなうつくし。かりのこ。舍利せりの壺つば。

はせてなほ考へるべき語である。

(二)たいしてすぐれてもぬない子どもが、さうはいふものの親にとてもかはいがられあまやかされてゐるもの。「子の」は底本とその同類本にない。

(三)咳。せきばらひ。

(四)それは、氣のはる人に何かしやべらうと思ふと先に出るものである。

(五)あちらちちら、兩隣(局か)などに住む人の子の、四五歳くらゐなのは、(六)意地悪くて。いたづらざかりで。

(七)「ひきいられ」つまり「遠慮する」とも解せられるが、底本などの本文によつた。ひつばられとめられて。二三頁参照。

(八)いい氣になつて。

(九)底本など「もの」がない。

(一〇)禁止の意をあらはず副詞。いけない。(一一)してはいけませんよ。そこねてはいけませんよ。底本「さなせそくこなふななど」

(一二)こちらとしてもさう相手を取づかしかるやうなこともいへず、子どものしぐさを見てゐるのは氣が氣でない。

【習字】(一)板塀。もと門の左右の袖をいつた。

(二)不祥雲。凶變の前兆の雲。

(三)ほこ(戈)の形をした彗星。

(四)腋を笠のかかりにしなければならぬいほど急に降る雨。

百四十七

一 人ばへするもの 二 ことなることなき人の子の、さすがにかなしうしならはしたる。 三 しはぶき。 四 はづかしき人にもいはむとするに先に立つ。

五 あなたこなたに住む人の子の、四つ五つなるは、あやにくだちてもの取り散らしそこなふを、引きはられ制せられて、心のままにもえあらぬが、親の來たるに 六 ところ得て、 七 「あれ見せよ、やや、母」などひきゆるがすに、 八 大人どものものいふとて、ふとも聞き入れねば、手づからひき探し出でて 九 見さわぐこそいとにくけれ。それを、母「まな」ともとりかくさで、母「さなせそ」 一〇 「そこなふな」とばかりうち笑みていふこそ親もにくけれ。 一一 われ、 一二 はた、えはしたなうもいはで見るこそ心もとなけれ。

百四十八

名おそろしきもの 青淵。谷の洞。 鱧板。 鐵。 土塊。 雷。 は名のみに
もあらず、いみじうおそろし。 暴風。 ふさうぐも。 ほこ星。 ひぢかさ雨。

(五)未詳。亂聲（舞樂のはじめなどに奏する太鼓、鉦鼓、笛などのあやなき樂）であらうか。縁衫（ろうさう）。六位の官人の着る袍）とみる説もある。

(六)未詳。

(七)底本とその同類本「からたけ」

(八)煎炭。火にあぶつて濕氣をとり、火がつきやすいやうにした炭。

(九)地獄閻魔の廳にゐる獄卒。牛頭・馬頭といふ鬼。

【百四十九】文章生でさらに作文の試験に及第した者。文章博士の下にある。

【百五十】（一）見苦しい感じのするもの。むさくるしい感じのするもの。不快なもの。

（二）ころがし出したもの。

（三）格別されいでない所がしかも暗い場合。

（四）持つて世話をしてゐると説くのが通説であるが、「もちあつかふ」と同じく複合動詞として取り扱ひに苦しむ、世話を憚むなどの意にとりたひ。ただし、能本「もちてあつかひ」とある。

【百五十】（一）たいしたこともないものはばをきかせるをり。第二流のものが得意満面としてゐる場合。

（二）大根を正月の齒固めに用ゐる。齒固めとは齒（よはひ）を固める義といふ。

（三）内侍の司の被官で、行幸には馬に乗

荒野ら。

強盜、またよろづにおそろし。らんそう、おほかたおそろし。かなもち、

またよろづにおそろし。牛蠟。くちなはいちご。鬼わらび。鬼ところ。蒞。

枳殻。いり炭。牛鬼。碗、名よりも見るはおそろし。

百四十九

見るにことなることなきものの文字に書きことごとしきもの 覆盆

子。鴨跖草。艾。蜘蛛。胡桃。文章博士。得業の生。皇太后宮の權の大

夫。楊梅。

虎杖は、まいて虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべきかほつき

を。

百五十

むつかしげなるもの 縫物の裏。鼠の子の毛もまだ生ひぬを、巢のうち

よりまろばし出でたる。裏まだつけぬ 表の縫目。猫の耳の中。ことに清

つて御供を申す少女。

(四)紫宸殿の四方の門を警護する衛士。

(五)この藏人は、女藏人で、内侍・命婦より地位が低い。六月・十二月の大祓の夜、女藏人が竹で主上(中宮・東宮)の御身長などを計る。御寸法通りに竹の節

を折るので、節折といふ。

(六)春秋(二月・八月)二季に宮中で大般若經を四箇日講ぜられるのをいふが、

「威儀師」は一般に法會の時衆僧の先に進んで威儀をつくらひ、その進退作法を整へる役で、季の御讀經の時に御前僧廿名を引率して紫宸殿から清涼殿にまゐる。

(七)式場の飾りつけなどをする藏人所の衆。

(八)春日祭は毎年二月・十一月の第一の申の日に行はれ、その前日奉幣使として近衛の中少將を派遣する。それに隨行する舍人ども。

(九)元日の主上の御屠蘇をまづ毒味する少女。清涼殿で行はれる。

(一〇)七六段一五五頁参照。ここも大部分が人間であり、底本はじめ諸本「ほうし」

「法師」とあるから、しばらく「法師」とした。しかし、その意は明らかではない。正月初の卯の日に卯杖をたてまつる眞言・天台の験者かといふ。(盤齋抄)

(一一)五節の帳臺の試の翌日(寅の日)御

げならぬところの暗き。

ことなることなき人の、子などあまた持てあつかひたる。いと深うしも心ざしなき女の、ここちあしうしてひさしう悩みたるも、男のここちはむつかしかるべし。

百五十一

一 えせものところ得るをり 正月の大根。行幸のをりの姫まうち君。御

即位の御門つかさ。六月・十二月のつごもりの節折の藏人。季の御讀經の

威儀師。赤袈裟着て僧の名どもを讀みあげたる、いときらきらし。

季の御讀經、御佛名などの御裝束のところの衆。春日祭の近衛の舍人ど

も。元三の薬子。卯杖の法師。御前の試の夜の御髮上。節會の御まかな

ひの采女。

百五十二

一 苦しげなるもの 夜泣きといふわざするちこの乳母。思ふ人二人持ちて

前の試がある。

【苧草三】見るからに苦しきうなもの。

(三)嫉妬される男。

(四)強いのけ調伏にかかはつた(從事してゐる)驗者。

(五)せめて祈禱の效驗だけでも早くあらはれればよいのであるが、さうもいかぬ時、さうはいつても物笑ひにならないやうにと苦心して念じてゐるのは。

(六)むやみに猜疑心の強い男に。

(七)攝關などの家に仕へて羽振りのよい人も決して氣樂ではあり得ないが、それはまあよいやうである。

(八)いつもいらいらしてゐる人。

【苧草三】(一)見るからにうらやましきうなもの。能本・前本「うらやましきもの」

(二)自分がひどくたどたどしく。

(三)經をくるくる巻き解きして讀んでゆかさま。すらすらと運ぶさま。

(四)時、折、世、代、壽などの意がある。

(五)いま京都市伏見區にある稻荷神社。本社倉稻魂神、一座素盞鳴命、一座大市

杵姫。

(六)願を立てておまゐりしたところ。

(七)本社である。

(八)たまらなく苦しいのをこらへてのぼるに。

(九)初午の祭日は夜があけないうちから家を出ていそいだが。

こなたかなたふすべらるる男。こはきものの怪にあづかりたる驗者。驗だにいちはやからばよかるべきを、さしもあらず、さすがに人笑はれならじと念ずる、いと苦しげなり。

わりなくものうたがひする男にのみじう思はれたる女。一のところなどに時めく人も、えやすくはあらねど、そはよかめり。心いられたる人。

百五十三

うらやましげなるもの 經など習ふとて、いみじうたどたどしく忘れがちなかへすがへすおなじところを讀むに、法師はことわり、男も女も、くるくるとやすらかに讀みたるこそ、あれがやうにいつの世にあらむとおぼゆれ。こちなどわづらひて臥したるに、笑うち笑ひ、ものなどいひ、思ふことなげにてあゆみありく人見るこそ、いみじううらやましけれ。

稻荷に思ひおこしてまうでたるに、中の御社のほどのわりなう苦しきを、念じのぼるに、いささか苦しげもなく、おかれて來と見る者どものだ行きに先に立ちてまうづる、いとめでたし。二月午の日の曉にいそぎ

(一) 坂の半分くらゐまであるいて來たら、午前十時ごろになつてしまつた。

(二) とてもつらくつて、こんな苦勞をして、なにより日もあらうものを、どうして、なんのためにおまゐりしたのかしらと。

(三) 宮本などに「やみこゝするに」吉本「やすみぬるに」能本「やすむに」とある。「やみ」は「病み」で、疲れての意。

(三) 一〇頁参照。

(四) ただちよつと衣の裾をたくしあげた人が。二六(一)頁参照。

(五) 普通の場所では。この「ところ」には、「とき(時)」の意がある。九九頁(八)一〇三頁参照。

(六) 法師になつてゐる子であつても、すばらしい子どもをもつてゐる人は。

(七) 女の垂れ髪を兩鬢を肩のあたりできり下げたものを「ひたひ髪」といつて、顔をかくすに用ゐるが、その末端をいふ。

(八) おくゆかしい、りつぱな人のところへおつかはしになる仰せ帯などを、だれだつて鳥の足跡のやうなちぎれちぎれのまづい文字でどうして書かうか。みな一往は上手に書かうと努力するものである。しかしそんな時でも下の局へ下つてゐるものを、わ

しかど、坂のなからばかりあゆみしかば、巳の時ばかりになりけり。やうやう暑くさへなりて、まことにわびしくて、など、かからでよき日もあらむものを、なにしにまうでつらむとまで、涙も落ちてやすみ困ずるに、四十餘ばかりなる女の、壺装束などにはあらで、ただ引きはこへたるが、「まろは七度まうでし侍るぞ。三度はまうでぬ。いま四度はことにもあらず。まだ未に下向しぬべし」と、道にあひたる人にうちいひて下り行きしこそ、ただなるところには目にもとまるまじきに、これが身にただいまならばやとおぼえしか。

女兒も、男兒も、法師も、よき子ども持たる人、いみじううらやまし。髪いと長くうるはしく、さがりばなどめでたき人。また、やむごとなき人の、よろづの人にかしこまられ、かしづかれたまふ、見るも、いとうらやまし。手よく書き、歌よく詠みて、もののをりごとにもまづ取り出でらる、うらやまし。

よき人の御前に女房いとあまたさぶらふに、心にくきところへつかはすおほせ書などを、たれもいと鳥の跡にしもなどかはあらむ。されど、下など

ざわざ召し寄せて。

(二)ひそかに仕へてゐる老女格の女房などになるも、ほんとは悪筆に近いやうな人でも、ことに應じて一とほりは書く人もではあるが。「難波わたり……」は「筆もつゆがみてもの書かるるは難波わたりのあしてなるらむ」(この歌「旁註」に和泉式部の作として引くが、出所未詳)の「あして」や手習ひのはじめに習ふ有名な王仁作の「難波津に」の歌なども響かせて幼稚さや悪筆のことをいつたのか。(三)未熟なうちは、この人のやうになつたら上手になれるだらうかと思ふであらう。

(三)どこへでもなんの遠慮もなくまゐりかよへる人。

【百五十四】早く見たいもの。早く聞きたいもの。早く知りたいたいもの。

(二)七六頁参照。その出来上りが早速見たいのである。

(三)男の兒か、女の兒か、早く聞きたい。

(四)それは、すばらしい人の場合には勿論であるが、身分の低い者、下衆のやうな者の場合でもやはり知りたいたい。

(五)知人で當然任官するはずの人がない時でもやはり聞きたい。

【百五十五】不安で氣がかりなもの。待ち

にあるをわざと召して、御視取りおろして書かせさせたまふもうらやまし。

さやうのことはところのおとななどになりぬれば、まことに難波わたり遠

からぬも、ことにしたがひて書くを、これはさにはあらで、上達部などの

まだはじめてまゐらむと申さする人のむすめなどには、心ことに紙よりは

じめてつくろはせたまへるを、集まりてたはぶれにもねたがりいふめり。

琴・笛など習ふ、またさこそはまだしきほどは、これがやうにいつしか

とおぼゆらめ。

内裏・春宮の御乳母。うへの女房の、御かたがたいづこもおぼつかなか

らずまゐりかよふ。

百五十四

とくゆかしきもの 卷染・むら濃・くくりものなど染めたる。人の、子

生みたるに、男女、とく聞かまほし。よき人さらなり、えせ者、下衆の際

だになほゆかし。

除日のつとめて。かならず知る人のさるべきなきをりもなほ聞かまほし。

遠しいもの。おれつたいもの。

(二)使の歸つて來る方角を見つめて待つてゐる心の中。

(三)豫定日がすんでも産みさうなけはひのない場合。

(四)遠いところから戀人のレターをもらつてかたく封じてある糊づけなどをあける間は、とてもおれつたい。「はなち」は、底本とその同類本にない。「そくひ」は飯粒を練つて作つた糊。續飯。

(五)すでに行列が通つてゐた。

(六)看習長などが警固のために持つ白い杖である。

(七)車を棧敷へつける時、つらくて。

(八)自分のゐることを知られたくない人がゐるので、前にゐる人に教へて挨拶させてゐる時の心持。

(九)成人の日がいつ來ることかと行く末がまことに待ち遠しい。

(一〇)うす暗いところで針に糸をとほす場合。しかし、それはいいとして。

(一一)針の穴があるはずのところをおさへて、人に通させるが、その人もいそいでゐるからであらうか、すぐになかなか通せないで。

(一二)「いや、もうよろしい」といふのに、さういはれても、どうしてそのままにできようかと思つた様子でそのままちつと

百五十五

心もとなきもの 人のもとにとみの物縫ひにやりて、いまいと苦しう居入りて、あなたをまもらへたるこち。子生むべき人の、そのほど過ぐるまでさるけしきもなき。遠きところより思ふ人の文を得て、かたく封じたるそくひなどはなちあくるほど、いと心もとなし。

もの見におそく出でて、ことなりにけり、白きしもとなど見つけたるに、近くやりよするほど、わびしう、下りても往ぬべきこちこそすれ。

知られじと思ふ人のあるに、前なる人に教へてものいはせたる。いつしかと待ち出でたるちこの、五十日・百日などのほどになりたる、行く末、いと心もとなし。

とみの物縫ふに、なま暗うて針に糸すぐる。されど、それはさるものにて、ありぬべきところをとらへて、人に上げさするに、それもいそげばにやあらむ、とみにもえさし入れぬを、「いで、ただなすげそ」といふを、さすがになどかと思ひがほにえ去らぬ、にくささへそひたり。

してゐるのは、にくらしきまで加はる。

「え去らぬ」は底本「えさゝぬ」

(二七)その家の主人、夫などが、「先に自分
がどここへ行くから、しかしすぐかへ
してよござう」などといつて出て行つた
車の歸つて来るのを待つてゐる間。

(二八)歸つて来たやうだわ。

(二九)もう行列はすんだことせう。

(三〇)後座。

(三一)いつしよに行くはずになつてゐる人
を乗せに行つたところ、車を玄關に横づ
けにしてゐるのに、急にも乗らないで待
たせるのも。

(三二)急に要る事で。

(三三)二六六頁参照。

(三四)それでも時にはまたいそがなければ
ならない場合もある。

(三五)女でも、ただ一往の交際としての應
答は、早い方がなによりだと思ふので、
あまりいそぎすぎて、不本意なまちがひ
も生ずることがあるものである。

(三六)気分が悪く、なんとなくおそろしい
をり。

(三七)この文は次段に關聯してゆく。

なにごとにもあれ、いそぎてものへ行くべきをりに、まづわがさるべき
ところへ行くとして、ただいまおこせむとて出でぬる車待つほどこそ、いと
心もとなけれ。大路行きけるを、「さななり」とよろこびたれば、外さま
に往ぬる、いとくちをし。まいて、もの見に出でむとてあるに、「ことは
なりぬらむ」と人のいひたるを聞くこそわびしけれ。

子生みたる後のことのひさしき。もの見、寺まうでなどに、もろとも
あるべき人を乗せに行きたるに、車をさしよせて、とみにも乗らで待たす
るも、いと心もとなく、うちすても往ぬべきこちぞする。

また、とみにていり炭おこすも、いとひさし。人の歌の返しとくすべき
を、え詠み得ぬほども心もとなし。懸想人などはさしもいそぐまじけれど、
おのづからまたさるべきをりもあり。まして、女も、ただにいひかはすこ
とは、ときこそはと思ふほどに、あいなくひがごともあるぞかし。

こちのあしく、もののおそろしきをり、夜の明るるほど、いと心もと
なし。

【晋平六】(一)道隆は長徳元年四月十日に薨じたから、その後一箇年間である。ここは長徳元年六月の晦日である。同年六月廿八日中宮は官の朝所に行啓された。(三)卷本勅物による)

(二)方角が悪いといふので。

(三)大政官廳。大臣以下が政務をとる場所。

(四)「あしたどころ(朝所)」の替使。参議以上の人の食事をする場所。

(五)暑くて眞暗で、なんともいへずせまく不安な氣持で一夜を明かした。

(六)普通の局のある殿舎のやうに格子などもなくて、周圍に御簾だけがかけてあるのが、かへつてめづらしくて。

(七)一名わすれ草。

(八)竹、木などで作った低い垣。

(九)もつともらしい、篤實な、偽りのない義で、こは儀式めいた、固苦しいところの意。

(一〇)漏刻の司。陰陽寮所屬であるが、陰陽寮は太政官廳の東北隣にある。

(一一)すぐそばなので。

(一二)服喪中だから墨染色である。

(一三)まさか天人などとはいへまいけれど。

故殿の御服のころ、六月のつものりの日、大祓といふことにて、宮の出でさせたまふべきを、職の御曹司をかたあしとて、官のつかさの朝所^{あいなところ}にわたらせたまへり。その夜さり、暑くわりなき闇にて、なにともおぼえず、せばくおぼつかなくて明かしつ。

つとめて、見れば、屋のさまいとひらに短く、瓦ぶきにて、唐めき、さまことなり。例のやうに格子などもなく、めぐりて御簾ばかりをぞかけたる、なかなかめづらしくてをかしければ、女房庭に下りなどして遊ぶ。前栽に萱草といふ草をませ結ひていとおほく植ゑたりける。花のきはやかにふさなりて咲きたる、むべむべしきところの前栽には、いとよし。時づかさなどは、ただかたはらにて、鼓の音も例には似ずぞ聞ゆるをゆかしがりて、若き人人二十人ばかりそなたに行きて、階より高き屋にのぼりたるを、これより見上ぐれば、あるかぎり薄鈍の裳・唐衣、おなじ色の單衣襲、^{くれなる}紅の袴どもを着てのぼりたるは、いと天人などこそえいふまじけれど、

(四)後をおすばかりにして上へあがらせた方の女房は、仲間入りできないで。
 (五)芭腰かけの一種で、後と左右の欄がない。

(六)「けしからんことだと思つて」神妙にとがめだてる者どももあるけれども。
 (七)暑さがとても比類のないほどなので。

(八)出所未詳。「やかう」の語義も明らかでない。「野郊の場(には)」「盤齋抄・旁註」「野干(やかん)の庭」「濱臣・關根正直博士」「(いまや)歌舞の場」(金子元臣氏)などあるがしたがひ難い。思ふに、これは「夜行の場」で、太政官の朝所は政務をみるところであり、殿上人が夜も居明かして物語するやうな場所ではなかつたのにとの意ではあるまいか。

「夜行」の語はこの冊子のほか源氏・榮花・讀政典侍日記・梁塵秘抄などに見える。
 「あるき」「夜あそび」の意として「夜」かたへ涼しき風や吹くらむ(古今集三夏、六月つごもりの日よめる 躬恒)

(九)場所がせまいからであらう。
 (十)「吾辛七」この條は七夕祭の日の事件である。(池田龜鑑博士説)

(三)突然に。だしぬけに。
 (三)「明日はどのやうな詩をお詠みにな

空よりおりたるにやとぞ見ゆる。おなじ若きなれど、おしあげたる人は、えまじらで、うらやましげに見あげたるも、いとをかし。

左衛門の陣まで行きて、倒れさわぎたるもあめりしを、「かくはせぬことなり。上達部の着きたまふ倚子などに女房どものぼり、上官などのある床子どもをみなうち倒しそこなひたり」などくすしがる者どもあれど、聞きも入れず。

屋のいと古くて、瓦ぶきなればにやあらむ、暑さの世に知らねば、御簾の外にぞ夜も出で來、臥したる。古きところなれば、蜈蚣といふもの日ひと日落ちかかり、蜂の巢の大きにて、つき集まりたるなどぞいとおそろしき。

殿上人日ごとにもゐり、夜も居明かしてものいふを聞きて、「あにはかりきや、太政官の地の、いまやかうの庭とならむことを」と誦し出でたりしこそをかしかりしか。

秋になりたれど、かたへだに涼しからぬ風の、ところからなめり、さすがに蟲の聲など聞えたり。八日ぞ還らせたまひければ、七夕祭、ここにて

りますか」とたづねると、ちよつと考へて。

(四)「人間の四月芳菲盡き、山寺の桃花始めて盛んに開く。長く恨みき、春歸りてもむる處なきを。知らず、轉じてこの中に入り來たるを」(白氏文集十六、大林寺桃花)「人間」は人間界のこと。

(五)これは次條に述べられてゐる事件への應酬であつた(原田清氏・池田龜鑑博士説)から、ここは「ずつと前、約三箇月あまりも前のことであるが、それを忘れないで返報していふのは」の意。

(六)女などこそさうした物忘れはしないものだが、男はさうでもなく、自分が詠んだ歌でさへうろおぼえであるのに。

(七)なんのことだかわからないと。

(八)實は、これについてはこの長徳元年四月一日ごろに。

(九)藤原齊信。

(一〇)源宣方。

(一一)すつかり夜が明けたやうだね。

(一二)「年再びは秋ならず夜五更、料り知らんや露配曉來の情、露はまさに別れの涙なるべし。珠空しく露は、雲はこれ殘粧髻いまだ成らず」(菅家文草、七月七日牛女に代りて曉更を借しむ)
(一三)まだ四月ですのにあわてた七夕様です。

は例よりも近う見ゆるは、ほどのせげればなめり。

百五十七

宰相の中將齊信（たかののぶのぶかた）宣方（のぶかた）の中將道方（みちかた）の少納言などまゐりたまへるに、人人出いでてものなどいふに、ついでもなく、詩「明日あすはいかなることをか」といふに、いささか思ひまはし、とどこほりもなく、齊信「人間の四月」をこそは」といらへたまへるがいみじうをかしきこそ。過ぎにたることなれども、心得ていふはたれもをかしき中に、女メなどこそさやうのもの忘れはせぬ、男オトはさしもあらず、よみたる歌などをたにままおぼえなるものを、まことにをかし。内うちなる人も、外そとなるも心得こころえずと思ひたるぞことわりなる。

この四月のついたちごろ、ほそ殿どのの四の口に殿上人どのうぢあまた立てり。やうやうすべり失うせなどして、ただ頭かぶの中將・源中將（げんちゅうじょう）、六位一人むゐしひとり残りて、よろづのこといひ、經讀み、歌うたひなどするに、「明けはてぬなり。歸かへりなむ」とて、「露（つゆ）は別の涙（なみだ）なるべし」といふことを頭の中將のうち出いだしたまへれば、源中將ももろともにいとをかしく誦ずんじたるに、清「いそぎける

(四)ただ「曉の別」といふ一事だけが似てゐるので、ふと思ひ出すままに吟じたのだが、さうけなされたのはつらいことだ。大體この邊(清女のかたはらなど)でかうした故事を十分に考へもせずいふと、こんな目にあふから、残念なことである。底本「わかれ一すち」:

(五)葛城の神に似た醜いほくはもうここにはゐられない。

(六)宮本「わけ」能本「わけて」とあり、「露」の縁語となるが、底本その他の本文によつた。

(七)齊信が宰相(參議)になつたのは、長徳二年四月廿四日であるから、この段の事件を長徳元年のことと見なければならぬ。他の理由(中宮の禁中にましましたことなど)からして、これは後で思ひ出しながらいひ作者の錯覺と見なければならぬ。

(八)かならずしも七夕のころにあへるかどうかわからない。

(九)長徳元年七月七日に。

(一〇)あの四月の一日の夜(實は三月盡の夜半から四月一日の朝にかけての夜であらう)のことなどをいひ出したならば、お悟りなされるならば、なんのことをいふのであらうかと思議に思つて頭を傾け

七夕なつたかな」といふを、いみじうねたがりて、齊信「ただ曉あかつきの別わかれの一すちを、ふとおぼえつるままにいひて、わびしうもあるかな。すべて、このわたりにてかかること思ひまはさずいふは、くちをしきぞかし」など、かへすがへす笑ひて、「人にな語りたまひそ。かならず笑はれなむ」といひて、あまり明あかうなりしかば、齊信「葛城かたきの神、いまぞすぢなき」とて、二六はしにしを、七夕なつたのをりにこのことをいひ出せばやと思ひしかど、宰相せいになりたまひにしかば、かならずしもいかでかは。そのほどに見つけなむもせむ。文書ぶんしょきて、二殿司にんのもりしてもやらむなど思ひしを、七日にちにまゐりたまへりしかば、いとうれしくて、その夜よのことなどいひ出せば、心もぞ得たまふ。ただずるにふといひたらば、あやしなどやうちかたぶきたまふ。さらば、それにをありしことをばいはむとてあるに、つゆおぼめかでないへたまへりしかば、まことにいみじうをかしかりき。

三二 月つきごろいつしかと思おもほえたりしだに、わが心ながらすきずきしとおぼえしに、いかでさ思ひまうけたるやうにのたまひけむ。もろともにねたがりいひし中將ちゆうしやうは思ひもよらであたるに、齊信「ありし曉あかつきのことこといましめら

なざるであらう。さうしたら、その時にこそ去る四月の「七夕」のことをいほうと考へてゐたのに、案に相違して、頭中將は一向忘れただけはひもなくて、「それにを」の「を」は強意の助詞。

(三)月ごころいつかいつかと心待ちにしてゐた自分の氣持でさへ、われながらもの好きなことだ。思はえ。は底本など

(三)かうして清少納言とがめられてゐるよ。「曉」は底本「あ月」とあり、宮本

には傍註「あか月」とある。「う月」ならば、この段冒頭の「四月云々」を承ける。

(三)おもしろくないことだ。(三)以下頭中將齊信との交情を述べる。「ものいふ」は語らふの意。「基」になして「は基に譬へて。底本とその同類本」にならて「手ゆ

るしてけり」は、「先手をとられてしまつたなあ」とか「睨目を詰めた(おしまひだ)」などといふ。「男はてうけむ(は未詳)

(三)圍碁の勝負が終つて雙方の石を分けるのを「こぼつ」といふ。敵味方の石が相接してゐるので親近の意に用ゐたのだといふ。(三)勝負がさまならないでせう

「定日」より「定めなし」を節操なしに用ゐたのであらうか。(三)「ずうじ」の「う」は撥音の表記。「ぼうと」「ぼうぼうと」の「う」と同じ。

(三)「蕭會稽の古廟を過ぐるや、託けて

るは。知らぬか」とのたまふにぞ、宣方「げに、げに」と笑ふめる、わろしかし。

人ともものいふことを基になして近うかたらひなどしつるをば、「手ゆるしてけり」「結さしつ」などいひ、「男はてうけむ」などいふことを人はえ知らず。この君と心得ていふを、「なにぞ、なにぞ」と源中將は添ひつきていへど、いはねば、かの君に宣方「いみじう、なほこれのたまへ」とうらみ

られて、よきなかなれば、聞かせてけり。あへなく近くなりぬるをば、「おしこぼちのほどぞ」などいふ。我も知りにつししか知られむとて、宣方「碁盤侍りや。まろと碁うたむとなむ思ふ。手はいかが。ゆるしたまは

むとする。頭の中將とひとし碁なり。なおぼしわきそ」といふに、清「さのみあらば、さだめなくや」といひしを、またかの君に語りきこえければ、齊信「うれしういひたり」とよるこびたまひし、なほ過ぎにたること忘れぬ人は、いとをかし。

宰相になりたまひしころ、うへの御前にて、清「詩をいとをかしう誦じ侍るものを。蕭會稽の古廟を過ぎにし」などもたれかいひ侍らむとする。

累代の交りをむすぶ、張僕射の新才を重んずるや、推して忘年の友となす」(本朝文粹十、大江朝綱 交友序・和漢朗詠集雜。原漢文) 蕭會稽は梁の會稽郡の長吏蕭允のこと。彼が郡を巡つて吳の季札の古廟に至り、その賢なるを憶つてこれを祀り、古人に交りをむすんだといふのである。こんな詩をあのかた(齊信)以外にだれが(あんなに上手に)吟じませうか。(二)參議にならないで。「ながら」は底本など「ならて」とある。

(三)そなたがかういふからといふので、參議(宰相)にしないでおかうかね。

(三)ほんとに物足りなくさびしかつたが、源中將宣方も齊信に負けないつもりで風流ぶつてしきりに姿をあらはすので(三)わたくしが。

(三)「顔回は周の賢者、未だ三十の期に至らず。潘岳は晉の名士、早く秋興の詞を著はす。彼はみな我よりわかし、始めて見ることの速きを喜ぶべし」(原漢文、本朝文粹二、源英明 二毛を見る) 英明は三十五の年二毛(白髮)を見て、中國の二賢に比してその速きを喜んだのである。潘岳は三十二で白髮を見た。

(三)齊信が近衛の陣座に着いて居られたのを宣方が。
(三)清少納言がかういひます。どうか、

しばしながらさぶらへかし、くちをしきに」と申ししかば、いみじう笑はせたまひて、主上「さなむいふとて、なさしかし」などおほせられしもをかし。されど、なりたまひにしかば、まことにさうさうしかりしに、源中將おとらず思ひて、ゆゑだち遊びありくに、宰相の中將の御うへをいひ出でて、清「未だ三十の期に及ばず」といふ詩をさらにこと人に似ず誦じたまひし」などいへば、宣方「などてかそれにおとらむ。まさりてこそせめ」とて誦むに、清「さらに似るべくだにあらす」といへば、宣方「わびしのことや。いかであれがやうに誦ぜむ」とのたまふを、清「三十の期」といふところなむすべていみじう愛敬づきたりし」などいへば、ねたがりて笑ひありくに、陣に着きたまへりけるを、わきに呼び出でて、宣方「かうなむいふ。なほそこもと教へたまへ」とのたまひければ、笑ひて教へけるも知らぬに、局のもとに來ていみじうよく似せて誦むに、あやしくて、清「こは誰そ」と問へば、笑みたる聲になりて、宣方「いみじきことをきこえむ。かうかう、昨日陣に着きたりしに、問ひ聞きたるに、まづ似たるなり。清「たれぞ」とにくからぬけしきにて問ひたまふは」といふも、わざと習ひ

このところの誦じかたを教へて下さい。

(三七)齊信がその箇所を。
(三八)まあまあ似てゐたんですね。「いまあなたは『どなた』とやさしい聲でお問ひになりましたから」とうれしうにさういふのも。

(三九)こちらもだまされるのを承知で、これさへ期誦なさると出て行つて。
(四〇)留守を使つて。

(四一)この詩句さへ吟ずると、「ほんとはここに居りますの」などといふ。

(四二)右近衛の四等官たる將曹をいふ。「さうくわん」は「さくわん」の音便。「みつな」は細光方か。(岩野祐吉氏説)

(四三)三十歳はお過ぎになつたてせう。
(四四)朱買臣、字は翁子、吳の人なり。家貧しくて書を讀むを好み、産業を治めず、つねに薪樵を艾り、賣りて以て食を給す。(中略)妻これをはち去らんことを求む。買臣笑ひて曰く、我年五十にしてまさに富貴なるべし。いますでに四十餘なり。なんぢ苦しむこと日久し、わが富貴なるを待ち、なんぢの功に報いん」

(原漢文、前漢書六十四)

(四五)一條天皇女御義子。内大臣公季のむすめ。長徳二年七月十日入内、八月九日女御となる。廿三歳。

(四六)大鏡家傳、今昔物語卅一にも「う

たまひけむがをかしければ、これだに誦ずれば出でてものなどいふを、

宣方「宰相の中將の徳を見ること。そのかたにむかひて拜むべし」などいふ。

下にありながら 清「うへに」などいはずるに、これをうち出づれば、

清「まことはあり」などいふ。御前にも、「かく」など申せば、笑はせたまふ。

内裏の御物忌なる日、右近のさうくわんみつなにとかやいふ者して疊紙

に書きておこせたるを見れば、宣方「參ぜむとするを、今日明日の御物忌

にてなむ。『三十の期におよばず』はいかが」といひたれば、返りに、

清「その期は過ぎたまひにたらむ。朱買臣が妻を教へけむ年にはしも」と

書きてやりたりしを、またねたがりて、うへの御前にも奏しければ、宮の

御かたにわたらせたまひて、主上「いかでさることは知りしぞ。『三十九な

りける年こそさはいましめけれ』とて、宣方は『いみじういはれにたり』

といふめるは」とおほせられしこそ、ものぐるほしかりける君とこそおほえしか。

弘徽殿とは閑院の左大將の女御をぞきこゆる。その御かたにうちふしと

ちふし」といふ賀茂若宮の巫女（かんなぎ・みこ）の名が見える。

(四七)「いらつしやつた時に。「おはしましい」は「おはしまし」の音便。

(四八)「おはしまし」の音便。のには、うち臥し休むところ（寢所・宿直所）があるのがよいことです。しかし、あなたはさうした「うちふし」へはしばしばおかよひになるとのことでございますが、こちらへお見えにならないのは「うちふし」がないからなのでせうね。「なる」は傳聞・推定の助動詞。

(四九)「わたくしの味方だとおたのみ申してゐるのに、世間の流説のとほりお信じなされる。

(五〇)「宣方がくやしがつてそばにゐた女房をつつくと、その女房も「さう察らなければならぬ理由もないのに御立腹なさるが、これにはなにか仔細がございますせう」と皮肉をいって、陽気に笑うのであらう。

(五一)「しやくにさわることだど。

(五二)「人がいふのさへにくらしいのですもの。わたしはそんな事をいひませうか。(五三)「しかし、あの詞は殿上人が笑ふだらうと思つたものと思はれるからしかたがない。

いふ者のむすめ左京といひてさぶらひけるを、「源中将かたらひてなむ」と人人笑ふ。

宮の、職におはしましいにまゐりて、宣方「ときどきは宿直などもつかうまつるべけれど、さべきさまに女房などももてなしたまはねば、いと宮仕おろかにさぶらふこと。宿直所をだにたまはりたらば、いみじうまめにさぶらひなむ」といひ居たまへれば、人人「げに」などいらふるに、清「まことに人はうちふしやすむところのあるこそよけれ。さるあたりにはしげうまもりたまふなるものを」とさしいらへたりとて、宣方「すべてものきこえじ。方人とたのみきこゆれば、人のいひふるしたるさまに取りなしたまふなめり」などいみじうまめだちて怨じたまふを、清「あな、あやし。いかなることをかきこえつる。さらに聞きとがめたまふべきことなし」などいふ。かたはらなる人を引きゆるがせば、女房「さるべきこともなきを、ほとり出でたまふ、やうこそはあらめ」とて、はなやかに笑ふに、宣方「これも彼のいはせたまふならむ」とて、いとものしと思ひたまへり。清「さらにさやうのことをなむいひ侍らぬ。人のいふだにくきものを」といら

【百草】(一)昔のりつばさが思ひ出されてなつかしいけれど、もういまではどうにもしやうのないもの。

(二)白地に色々の糸で花など織りつけた錦の織物を「縹網」といふ。それをへりにしたりつばな疊。細いたて糸がすり切れて太い糸があらはれたのを「ふし」が出来たといふ。

(三)衛士といふ説(千蔭)もある。

(四)義髮。かもじ。

(五)葡萄酒は薄紫色。紫は椿の灰をさすものだから、その色をあせるのを「灰かへる」といふ。

(六)年老いて衰へ弱つたの。

(七)そのままのこつてゐるが。

(八)「て」とめの例。八六・九五頁参照。

【百草】(一)信頼できさうでないもの。見こみのなささうなもの。

(二)「心短く」は氣が短い義もあるが、ここは「心浅く、あきやすく」の意。なほ「忘れがちなる」で切り「婚の…」を別の一文とする説もあるが、とらない。

(三)夜離れ。

(四)さうはいふものの、人のことを引き受けて、なし遂げる見こみ顔で重大事を。

へて、引き入りにしかば、後にもなほ、宣方「人にはぢがましきこといひつけたり」とうらみて、宣方「殿上人笑ふとていひたるなめり」とのたまへば、清「さては一人をうらみたまふべきことにもあらざるに、あやし」といへば、その後は絶えてやみたまひにけり。

百五十八

むかしおぼえて不用なるもの 縹網ばしの疊のふし出で來たる。唐綉の屏風の黒み、おもてそこなはれたる。繪師の目暗き。七八尺のかづらの赤くなりたる。葡萄酒の織物、灰かへりたる。色好みの老いくづほれたる。おもしろき家の木立焼け失せたる。池などはさながらあれど、浮草、水草など茂りて。

百五十九

たのもしげなきもの 心短く、人忘れがちなる婚の、つねに夜がれする。そら言する人の、さすがに人のことなしがほにて大事請けたる。

【百六十一】毎日讀む經。また、死者の幸福・追善のために、一定の期間に晝夜間斷なく法華經・最勝王經・大般若經などを讀經すること。

【百六十二】(一)宮(中宮御所)の前の祭。宮仕の身だから見にも行けない。

(二)相思はぬ、情愛のない兄弟姉妹。

(三)九十九折。幾重にも迂曲した坂路。行く先は目前にある。一直線にすればすぐそこ。

(四)一日と一年と。

【百六十三】(一)是より西方十萬億土を過ぐれば、世界あり。名づけて極樂といふ。その上に佛あり、阿彌陀と號く(阿彌陀經)「阿彌陀佛」を去ること遠からず(觀無量壽經)佛を念ずれば遠い極樂も近いといふからである。

(二)能本「男女の中」であり、これが流布して諺になつたが、「人のなか」が初稿であり、作者の原文であらう。

【百六十四】(一)はるばると思ひこそやれ武藏野のほりかねの井に野寺ありてふ(貫之集)

(二)京都府綴喜郡。井手の玉川の堰。

(三)勢よく流れる井の義。普通名詞。

(四)「あさか山影さへ見ゆる山の井の淺き心はわが思はなくに」(萬葉集十二采女)山の井はなぜあれほど心の淺い最初の例に(古歌に)引かれたのであらう。

風早きに帆かけたる舟。七、八十ばかりなる人の、ここちあしうて、日ごろになりたる。

百六十

讀經は不斷經。

百六十一

近うて遠きもの 宮の前の祭。思はぬ同胞、親族のなか。鞍馬のつづら
をりといふ道。十二月のつごもりの日、正月のついたちの日のほど。

百六十二

遠くて近きもの 極樂。舟の道。人のなか。

百六十三

井はほりかねの井。玉の井。走井は逢坂なるがをかしきなり。山の井

(五)奈良縣高市郡飛鳥村にある。「飛鳥井にやどりはすべし かげもよし みもひも寒し みま草もよし」(催馬樂)。「みもひも寒し」は水も冷たくてよい意。

(六)平安京にも攝津にもあつたといふ。底本はじめ諸本「千貫の井」かな書でない。八雲御抄「ちぬきのゐ」

(七)「烏丸の東、大炊御門の南」。(拾芥抄、原漢文)

(八)奈良縣高市郡豊浦村。

(九)后町は常寧殿の異名。その南、承香殿へ行く廊の脇にある井。

【百六十四】(一)未詳。

(二)「春日野の飛火の野守出でて見よいまいく日ありて若菜つみてむ」(古今集一春上)

(三)未詳。山城とも下野ともいふ。底本

とその同系統本すべて「しめし野」で、從來「しめち野」と校訂した本はとれない。

能因歌枕・八雲御抄・和歌初學抄(清輔)等いづれも「しめし野」とある。

(四)未詳。

【百六十六】(一)少將は五位相當官であるが、官は少將で位が四位になつてゐる人はいふ。「三位の中將」などもおなじ呼びかたで、ともに大臣の子か孫でないとなぜられないといふ。

などさしも浅き例になりはじめけむ。飛鳥井は「御水も寒し」とほめたるこそをかしかれ。千貫の井。少將井。櫻井。ささきまちの井。

百六十四

野は 嵯峨野さらなり。印南野。交野。駒野。飛火野。しめし野。春日野。そうけ野こそすずろにをかしかれ。などてさつけけむ。宮城野。栗津野。小野。紫野。

百六十五

上達部は 左大將。右大將。春宮の大夫。權大納言。權中納言。宰相の中將。三位の中將。

百六十六

君達は 頭の中將。頭の辨。權の中將。四位の少將。藏人の辨。四位の侍従。藏人の少納言。藏人の兵衛の佐。

【百六十七】(一)底本にはこの一段全文がない。第二類本によつて補ふ。

(受領は) 伊豫の守。紀伊の守。和泉の守。大和の守。

百六十七

百六十八

権の守は 甲斐。越後。筑後。阿波。

百六十九

大夫は 式部の大夫。左衛門の大夫。右衛門の大夫。

百七十

法師は 律師。内供。

百七十一

女は 内侍のすけ。内侍。

【百六十八】(一)「権」は「假・副」の義。権官は定員外に權に任ずる官。

【百六十九】(一)五位の通稱。

【百七十】(一)僧官の名。僧都の次の位で、正・權があり、五位に準じたもの。僧の戒律を支配する僧であつた。

(二)内供奉。宮中の内道場で齋會のとき講師を奉仕し、清涼殿の二間に祇候して夜居を勤める。高德の僧十人を選ぶ。

【百七十一】(一)典侍。内侍司の次官。内侍司は、後宮の雜事、奏請傳奏のことをもつかさどる。尙侍・典侍・掌侍の他に女孀、命孀、采女もこれに屬した。九五頁参照。

(二)掌侍。内侍のじょう。内侍司の判官(三等官)。正が四人、權が二人ゐた。

【百七十一】(一)この段は前段をうけて「女は……」であるのがよい。「夫として六位の藏人などをば決して希望すべきでもない」の意であらう。あるいは、「女は」に對して「男は六位の藏人などになることをば希望すべきでない」の意かとも考へられる。

(二)彼爵して、五位になれば、殿上を下り、某國の權の守、なにの大夫などといふ人が。「などいふ」は底本などにない。

(三)布張りの襖障子を。

(四)きびしく指圖してゐるやうなのはまことに前途の見こみもなく、おもしろくない。

(五)親・舅・をぢ・兄などがゐないやうな場合は、自然と、またよく知つてゐる受領が任地へ行つてあいてゐるやうな家とか、さうでなかつたら院の御子や内親上の御子の家がたぐさんあるそのなかの一つに。「ばら」は底本など「はう」とあり、坊と解することもできる。その方が穩當であらうか。「院・宮・坊の……」である。

(六)いつのまにかすばらしい家をさがし出して住んでゐるのはいい。「住み」は底本「よみ」

百七十二

六位の藏人などは思ひかくべきことにもあらず。かうぶり得てなにの權の守、大夫などいふ人の、板屋などのせばき家持たりて、また小檜垣などいふもの新らしくして、車宿に車引き立て、前近く一尺ばかりなる木生して、牛つなぎで草など飼はするこそいとにくけれ。

庭いと清げに掃き、紫革して伊豫簾かけわたし、布障子はらせて住まひたる。夜は「門強くさせ」などことおこなひたる、いみじう生ひ先なう、心づきなし。

親の家、舅はさらなり、をぢ、兄などの住まぬ家、そのさべき人なからむは、おのづからむつましくうち知りたらむ受領の、國へ行きていたづらならむ、さらずは、院・宮ばらの屋あまたあるに住みなどして官待ち出でて後、いつしかよきところたづね取りて住みたるこそよけれ。

百七十三

【百七十三】(一)ひどく荒れて。破れくづれて。
 (二)土塀なども満足でなく、池などある所にも水草が生え、庭には雑草がいつばい茂つてゐる、といつたほどではなくても。「あ」は茂つてゐる意。
 (三)雑草が見えてゐるのは訪れる人が少ないのと手入れが届かないためである。
 (四)さうでなくて、氣が利いた風に、非難のないやうに手入れをよくして、門を嚴重に閉ぢ、きは立つて目に立ち、きちんとしてゐるのは、女のひとり住まひにはふさはしくなく、かへつていやらしく感じられる。

【百七十四】(一)この段は前段を承けてゐる。宮仕する女の里などでも、両親がそろつてゐるのは、まことによい。

(二)両親と同居の場合はさしつかへがない。
 (三)表立つてでも。

(四)「いつ御退出になつたのやら存じませんで」とか、また「こんどはいつ参上されますか」などいひに。

(五)つねに思つてゐるいはゆる懸想の人はまたどうして來ないことがあらうか。
 (六)ゆつくりとかまへて。第二類本「おほやけに」能本「あやうけに」(危ふげ

女の一人住むところは、いたくあばれて築土なども全からず、池などあるところも水草ゐ、庭なども遂にしげりなどこそせねども、ところどころ砂の中より青き草うち見え、さびしげなるこそあはれなれ。ものかしこげになだらかに修理して、門いたく固め、きはぎはしきは、いとうたてこそおほゆれ。

百七十四

一宮仕人の里なども、親ども二人あるは、いとよし。人しげく出で入り、奥のかたにあまた聲聲さまざま聞え、馬の音などして、いとさわがしきまであれど、とがもなし。されど、しのびても、あらはれても、「おのづから出でたまひにけるをえ知らで」とも、また、「いつかまゐりたまふ」などいひに、さしのぞき來るもあり。

五心かけたる人、はたいかがは。門あけなどするを、うたてさわがしうおほやうげに、夜中までなど思ひたるけしき、いとにくし。主人「大御門はさしつや」など聞ふなれば、「いままだ人のおはすれば」などいふ者のな

に」とある。

(七)閉めたか。「さし」は底本「さら」

(八)問ふやうであるが。「なれ」は推定の助詞詞。

(九)なんとなくいやさうに(邪魔らしげに)、歸れがしに)思つて。

(一〇)不愉快で、それはそばで聞いてゐる人さへさう感じるものである。まして、いはれる身になつては。

(一一)家人が客の歸りを待ちわびてこそこそしてゐるのを、供の者がまねてゐると聞いたならば。

(一二)實直な客人は。

(一三)主人(女)から「もうお歸りにならない」となど。

(一四)その家の召使(門番)が。

(一五)諸本みななかうあるが意義未詳。「らんざんと」(亂散と)か、または廣々となどの意であらうか。

(一六)「を」は感動の助詞とみたが、これをつぎにつづけて「男親」と考へることもできる。

(一七)眞實の親でないのは。

(一八)その同胞(せうと)の心がよくない時は、繼父母の場合と同様つましく遠慮されることであらう。

(一九)手落ち一つないといふやうな嚴重な戸締りをしないで。

まふせかしげに思ひていらふるにも、主人「人出でたまひなば、とくさせ。このごろ盗人、いとおほかなり。火あやふし」などいひたるが、いとむつかしううち聞く人だにあり。

この人の供なる者どもはわびぬにやあらむ、この客いまや出づると絶えずさしのぞきて、けしき見る者どもを笑ふべかめり。まねうちするを聞かばましていかにきびしいひとがめむ。いと色に出でていはぬも、思ふ心なき人はかならず來などやはする。されどすくよかなるは、「夜ふけぬ。御門あやふかなり」などわらひて出でぬるもあり。まことに心ざしことなる人は「はや」などあまたたび遣らはるれど、なほ居明かせば、たびたび見ありくに、明けぬべきけしきをいとめづらかに思ひて、家人「いみじう、御門を今宵らいさうとあけひろげて」ときこえごちて、あぢきなく曉にぞさすなるはいかがはにくきを。親そひぬるはなほさぞある。まいて、まことのならぬはいかに思ふらむとさへつつまし。せうとの家なども、けにくきはさぞあらむ。

夜中、曉ともなく、門もいと心かしこうももてなさず、なにの宮、内

(三〇) 部屋の中から出て行く人の姿を見送つてゐるのは興味深い。
 (三一) 人のうわさなどをしあつて歌などを話しあつたり聞いたりしてゐるうちに、「聞く」は底本とその同類本「き」

【言半】(一) ひどく色好みの者として評判されて、心づかひのすぐれてゐる男が。
 (二) 「今朝のなごりが思ひ出されることせう」と、語りつくして歸つて行くが。
 (三) 女(なにの君)は、心中「いまごろ歸りつつあるであらう」と、はるかに見送つてゐる時など、なんともいへず魅力がある。

(四) 男は、女(なにの君)に歸る姿を一度見せておいて、すぐ引き返し。
 (五) まだ去りきれないやうに、もう一度自分がここでのなごりを惜しんでゐることをいひ知らせようと思つてゐると。

(六) 「長月のありあけの月のありつつも君し來まさばわれ戀ひめやも」(拾遺集十三戀三、人麿。萬葉集十「ありあけの月夜」「君が來まさば」古今六帖「われも忘れじ」など異同がある)「ありつつ」はありての義で、つねにある、「つづいて」、絶えず、いつもの意。つまり絶えずお越

裏わたり、殿はらなる人人も出であひなどして、格子などもあげながら冬の夜を居明かして、人の出でぬる後も見出だしたるこそをかしけれ。有明などは、ましていとめでたし。笛など吹きて出でぬるなごりはいそぎても寝られず、人のうへどもいひあはせて歌など語り聞くままに、寝入りぬるこそをかしけれ。

百七十五

「あるところになにの君とかやいひける人のもとに、君達にはあらねど、そのころいたうすいたる者にいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりに行きて、有明のいみじう霧り満ちておもしろきに、「なごり思ひ出でられむ」とことばをつくして出づるに、いまは往ぬらむと遠く見送るほど、えもいはず艶なり。出づるかたを見せてたちかへり、立部(たてじぶみ)の間に陰にそひて立ちて、なほ行きやらぬさまにいま一度いひ知らせむと思ふに、「有明の月のありつつも」としのびやかにうちいひてさしのぞきたる、髪(かみ)の頭にもよりに來ず、五寸ばかり下りて、火をさしともしたるやうなりけるに、月の光

し下さつたならわたしはこんなに戀ひ慕ひは致しませんが、をといふのである。
(七)外をのぞいてゐる女の髪が。
(八)火をともしたやうに映えてゐたが、月の光が一層明かるく照つて。

【百七十六】(一)氣のあつた友だち(女房)同士。
(二)部屋には火もともさないが、外一面に積つてゐる雪の光が非常に白く反射してゐるので、火箸で灰を手慰みに掻き廻しながら。
(三)しみりと心をうたれる話やら、おもしろい話などをたがひに話しあつたのは。
(四)夜のまだふけないころ。八、九時ごろから十時ごろをいふのであらう。夜中・曉につづく。
(五)思ひがけなく見える男性であつた。
(六)たいしたことない用事に妨げられまして、どこそで一日を送つてしまひました。「その」は「某の」の意。
(七)「山里は雪降りつみて道もなしけふ來む人をあはれとは見む」(拾遺集四冬、平兼盛)といつた歌の心をいふのであらう。

もよほされておどろかるこちしければ、やをら出でにけり」とこそかたりしか。

百七十六

雪のいと高うはあらで、うすらかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。

また、雪のいと高う降りつもりたる夕暮より、端近う、おなじ心なる人二三人ばかり、火桶をなかにすゑて物語などするほどに、暗うなりぬれどこなたには火もともさぬに、おほかたの雪の光いと白う見えたるに、火箸して灰などかきすさみて、あはれなるもをかしきもいひあはせたるこそをかしけれ。

宵もや過ぎぬらむと思ふほどに、宵の音近う聞ゆれば、あやしと見出だしたるに、時時かやうのをりに、おぼえなく見ゆる人なりけり。「今日の雪を、いかにと思ひやりきこえながら、なでふことにさはりて、そのところに暮しつる」などいふ。「けふ來む」などやうのすぢをぞいふらむかし。

(八)片膝は縁につき、片足は地面におろしたままで。

(九)曉の鐘。

(一〇)部屋の内にゐるわれわれ女房も外にゐる男性も話題と興趣とが盡きないのである。

(一一)夜明けがた、まだすこし暗いころ。

(一二)一瞬に梁玉の苑に入れば雪群山に滿てり。夜廬公が樓に登れば月千里に明らかなり。(原漢文、和漢朗詠集上、雪謝観)

(一三)女だけでは、とてもそんなに。

(一四)「せつかくの雪の夜をわたしたちだけで平凡に過ごすよりもおもしろく風流に過ごせたことでした」などと。

【百七七】(一)第六十二代。醍醐天皇第十四皇子。

(二)白い麴薬（まがひやく）を加へた陶器。後には金屬でもつくつた。(關根正直博士説)

(三)未詳。藏人は女藏人。

(四)「琴詩酒の友はみなわれをなげうち、雪月花の時もつとも君を憶ふ」(原漢文、和漢朗詠集、交友股協律に寄す。白樂天)白氏文集二十五に出てゐる。

(五)平凡である。

(六)あれは、何であるか見よ。

(七)この歌は兵衛の藏人の作ではない。

藤原輔相の家集藤六集に見える輔相の歌

晝ありつることどもなどうちはじめて、よろづのことをいふ。圓座ばかりさし出でたれど、片つかたの足は下ながらあるに、鐘の音なども聞ゆるまで、内にも外にも、このいふことはあかずぞおぼゆる。

あけくれのほどに歸るとて、「雪某の山に滿てり」と誦じたるは、いとをかきものなり。「女のかぎりしては、さもえの明かさざらましを、ただなるよりはをかしう、すぎたるありさま」などいひあはせたり。

百七十七

村上の前帝の御時に、雪のいみじう降りたりけるを、楊器に盛らせたまひて、梅の花をさして、月のいと明かきに、主上「これに歌よめ。いかがいふべき」と、兵衛の藏人に賜はせたりければ、「雪月花の時」と奏したりけるをこそ、いみじうめでさせたまひけれ。主上「歌などよむは世のつねなり。かくをりにあひたることなむいひがたき」とぞおほせられける。

おなじ人を御供にて、殿上に人さぶらはざりけるほど、たたずませたまひけるに、火櫃に煙の立ちければ、主上「かれはなにぞと見よ」とおほせ

である。(山岸徳平氏・久曾神昇氏説)
「おき」(沖・熾火)に「漕がる」と「焦がる」とをかけ、「歸る」に「蛙」をいひかけて、蛙の焼けてゐたことを知らせた機才である。

【宮主人】(一)「齋院の宣旨」といふのとおなじ義で元來普通名詞であつた。ここは女房の名。傳記未詳。醍醐天皇の末年ごろから朱雀、村上兩帝のころまで宮仕してゐたものと推定される。(山岸徳平氏説)

(二)村上天皇に。

(三)びんづら。上古の男子の髪を結ひかたの名で、頂の髪を左右に分けて鬢の邊でむすんだもの。後世のあげまき(總角)で、童子の正装のときの髪である。

(四)具明王とても書くのであらうが、この名がなぜ御感にあづかつたのか未詳。あるいは具明王の御姿に似てゐたのであらうか。「けれ」でとめられてゐるのは前段同様傳聞回想であつて、作者の直接見たことではない。

【宮主人】(一)中宮御所(下文によると當時登華殿であつた)にはじめて宮仕に上つたところは。正暦四年初春のことであらう。(三)手さへも前へ出すことができないほどでたまらないはづかしさであつた。「にて」は能本、前本にない。「た」の誤りであらうか。

られければ、見て歸りまゐりて、

わたつ海のおきにこがるもの見ればあまの釣りしてかへるなりけり
と突しけるこそをかしけれ。蛙の飛び入りて焼くるなりけり。

百七十八

御形の宣旨の、うへに五寸ばかりなる殿上童のいとをかしげなるをつくりて、みづらゆひ、装束などうるはしくして、なかに名書きて、たてまつらせたまひけるを、「ともあきらの大君」と書いたりけるを、いみじうこそ興ぜさせたまひけれ。

百七十九

宮にはじめてまゐりたるころ、もののはづかしきことの數知らず、涙も落ちぬべければ、夜夜まゐりて、三尺の御几帳のうしろにさぶらふに、繪など取り出でて見せさせたまふを、手にてもえさし出づまじう、わりなし。宮「これは、とあり、かかり。それか、かれか」などのたまはず。高坏に

- (三)かうである、ああである。それがよいか、あれがよいか。
- (四)元來食器をのせる臺、これを逆にしてその上に油の皿を置き、燈臺の代用とする。低くて近くが明かるいからである。
- (五)かへつて晝よりもあらはにはつきり見えてはづかしいが、がまんして拜見してゐた。
- (六)美しい色艶をもつた薄紅梅色であるのは。
- (七)こんなにおうつくしい、りつばなかがこの世にをられたのだなあと、思はずはつとうたれるほど、いつまでも御手や御姿にお見惚れ申してゐた。
- (八)容貌の醜い葛城の神様でも、もうしばらくゐてもいいでせう。二七六頁参照。
- (九)どうして、たとへ斜にでも顔を見られたくないと思つてそのまま。
- (一〇)内側から、女房があげようとするのを、「いけません」と中宮がおとめになるので。「まな」は禁止の副詞。一九七頁参照。
- (一一)さがりたくなつたのであらう。ではもうさがつてよい。夜は早い日にね。
- (一二)御前を膝行して局へ歸つて来るや否やすぐに窓をあけ放つたところ。「おそき」は底本など「にもおそき」。
- (一三)どうしても參上するやうに。

まゐらせたる御殿油なれば、髮の筋などもなかなかな晝よりも細證に見えてまばゆけれど、念じて見などす。いとつめたきころなれば、さし出でさせたまへる御手のはつかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるはかぎりなくめでたしと、見知らぬ里人ごこちには、かかる人こそは世におはしましけれど、おどろかるまでぞまもりまゐらす。

曉にはとくおりなむといそがる。宮「葛城の神もしばし」などおほせらるるを、いかでかはすちかひ御覽ぜられむとて、なほ伏したれば、御格子もまゐらず、女官どもまゐりて、「これ、放たせたまへ」などいふを聞き、女房の放つを、宮「まな」とおほせらるれば、笑ひてかへりぬ。

ものなど問はせたまひ、のたまはするに、ひさしうなりぬれば、宮「おりまほしうなりにたらむ。さらばはや。夜さりはとく」とおほせらる。

みざり歸るやおそきとあけ散らしたるに、雪降りにけり。登華殿の御前は立部近くてせばし。雪、いとをかし。

晝つかた、宮「けふはなほまわれ。雪に曇りてあらはにもあるまじ」など、度度めせば、この局の主も、「見ぐるし。さのみやはこもりたらむと

(一) 思なかなかむづかしい御前伺候を、見てゐてもはりあひのないほど容易にまたたびだびゆらされてゐるのは、それだけおぼしめしがあるのでせう。好意にそむくのはにくらしいものよ。

(二) 芭先輩の女房がいろいろなお世話をするために御前に伺候していらつしやるの、その炭櫃のそば近くにすわつてをられる。

(三) 宮様は沈(東インド原産の舶來の香木)の御火桶の梨地に蒔繪を施したのに向かつてをられる。「梨繪」は意義未詳。

(七) ぎつしりすわつてゐる女房たち。

(八) 能本「きたれ」前本「(からきぬ)きたれ」。「まき」が「こき」に誤られたのであらうか。ゆつたりと下垂れて。

(九) いつになつたら自分もあのやうにみんなの仲間入りができ、平氣でしやべれるだらうかと思ふことさへはづかしい氣持がする。

(三〇) 奥の方へさがつて。

(三一) 關白殿(道隆)がお見えになつたやうですわ。「なり」は推定の助動詞。

(三二) どうかして下りたいものと思ふが、全くすこしも身動きができないので、もうすこし奥に入り込んだが、さうはいふものやはりお姿が見たいのであらう、御几帳の縫目のわづかな間からやつと。

する。あへなきまで御前ゆるされたるはさおぼしめすやうこそあらめ。思ふにたがふはにくきものぞ」と、たたいそがしに出だしたつれば、我にもあらぬこちすれど、まゐるぞいと苦しき。火燒屋の上に降り積みたるもめづらしうをかし。御前近くは、例の炭櫃に火こちたくおこして、それにわざと人もあらず。上臈御まかなひにさぶらひたまひけるままに、近うゐたまへり。沈の御火桶の梨繪したるにおはします。つぎの間に長炭櫃に隙なくゐたる人人、唐衣こき垂れたるほどなど、馴れやすらかなるを見るも、いとらやまし。御文取りつぎ、立ち居、行きちがふさまなどのつつましげならず、ものいひ、ゑ笑ふ。いつの世にかさやうにまじらひならむと思ふさへぞつつましき。奥寄りて三四人さしつどひて繪など見るもあめり。

しばしありて、前驅高う追ふ聲すれば、女房「殿まゐらせたまふなり」とて、散りたるもの取りやりなどするに、いかでおりなむと思へど、さらにえふとも身じろかねば、いますこし奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめり、御几帳のほころびよりはつかに見入れたり。

(三)それは大納言伊周様が。

(四)底本と同系統本「はしらもと」とあるによつた。「翁丸」うれしきもの」の段などにもその例がある。

(五)いづれも「山里は雪降り積みて道もなし今日來む人をあはれとは見む」(拾遺集四冬、平兼盛)の歌による問答である。

(六)あれこれと筆にまかせておほげさに書いてあるのに、すこしも相違がないものだ。

(七)繪にかいてある場合にはこれほどすばらしいものを見ただけれど、現實の人としては。

(八)大納言は、女房としやべつて。

(九)女房たちは大納言への御返答をすこしもはづかしいとも思つてゐないでお答へし。

(一〇)見てゐても目もくらみさうで、なんともいひやうもなく驚きあきれ、むやみに顔がはてつて來ることである。

(一一)大納言は自分でたべなどして、その座を取り持ちもてなされ、中宮様にもおすめになる。

(一二)興を感じられたのであらうか、立つてこちらへいらつしやるのを、やはりどこか外へ行かれるのかと思つてゐたら、すぐそばにおすわりになつて。「さかす

大納言殿のまゐりたまへるなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪に映え

ていみじうをかし。柱もとにゐたまひて、大納言「昨日、今日物忌に侍りつ

れど、雪のいたく降り侍りつれば、おぼつかなさになむ」と申したまふ。

宮「道もなし」と思ひつるに、いかで」とぞ御いらへある。うち笑ひたま

ひて、大納言「あはれと」もや御覽ずると「などのたまふ御ありさまど

も、これよりなにごとかはまさらむ。物語にいみじう日にまかせていひた

るにたがはざめりとおぼゆ。

宮は、白き御衣どもに紅の唐綾をぞ上にたてまつりたる。御髪のかか

らせたまへるなど、繪にかきたるをこそかかるとは見しに、うつつには

まだ知らぬを、夢のこちぞする。女房どものいひ、たはぶれ言などした

まふ。御いらへをいささかはづかしとも思ひたらず聞え返し、そら言など

のたまふは、あらがひ論じなどきこゆるは目もあやにあさましきまであい

なう、面ぞ赤むや。御菓子まゐりなど取りはやして、御前にもまゐらせた

まふ。

大納言「御帳のうしろなるはたれそ」と問ひたまふなるべし、さかすに

にこそはあらめ」は從來「さそと申すにこそはあらめ」(能本)または「さすか校訂され、解釋されて来たが、「さかす」はうつほ・源氏・堤中納言物語などに用例のある語で、興をもよほす意の動詞。

(三三) わたくしの宮仕以前から聞いて。

(三四) これこれのこと(評判)は眞實にさうであつたか。

(三五) 「まゐり」底本「まつり」

(三六) 簾ごしに自分の姿が見えはしまいかとはらはらして、扇で顔をかくすのがつねであるのに、いまかう眞近く對面して。

(三七) 冷汗がにじみ流れてとてもたまらないのでなにお答へしてよいのやら全然わからない。

(三八) 大事な頼みのかけ(おほひ)として。

(三九) ひたひ髪(鬢)の髪を顔の眉尻のあたりまで解きかけ、その末を肩へ垂れる)の先を切り、顔へはらはらとかかるやうにして面かくしの一助ともするのである。さうした髪を感じまて悪くて變に思はれるであらうと思ふにつけて。

(四〇) 底本とその同類本「とてたち給なむ」早くお立ちのきになつてほしいと。

(四一) 「まだらに」底本など「に」がない。

(四二) 思慮のないことだ、わたしが苦しくてたまらなく思つてゐるであらうにと。

こそはあらめ、立ちておはするを、なほほかへにやと思ふに、いと近うゐたまひて、ものなどのたまふ。まだまゐらざりしより聞きおきたまひけることなど、大納言「まことにや、さありし」などのたまふに、御几帳へだてて、よそに見やりてまゐりつるだには、づかしかりつるに、いとあさましう、さし向かひきこえたるここちうつつともおほえず。行幸など見るをり、車のかたにいささかも見おこせたまへば、下簾引きふたぎて、透影もやと扇をさしかくすに、なほいとわが心ながらもおほけなく、いかで立ち出でしにかと汗あえていみじきには、なにごとをかは、いらへもきこえむ。

かしこきかげとささげたる扇をさへ取りたまへるに、振りかくべき髪のおぼえさへあやしからむと思ふに、すべて、さるけしきもこそは見ゆらめ。とく立ちたまはなむと思へど、扇を手まさぐりにして、大納言「繪のこと、誰がかかせたるぞ」などのたまひて、とみにも賜はねば、袖をおしあててうつぶしゐたる、裳、唐衣に白いものうつりてまだらにならむかし。

ひさしくゐたまへるを、心なう、苦しと思ひたらむと心得させたまへるにや、宮「これ見たまへ。これは誰が手ぞ」ときこえさせたまふを、

大納言「賜四三はりて見侍らむ」と申したまふを、宮「なほ、ここへ」とのたま

はす。大納言「人をとらへて立て侍らぬなり」とのたまふも、いといまめ

かしく、身のほどにあはず、かたはらいたし。人の草四六がな書きたる冊子四七な

ど取り出四八でて御覽四九ず。大納言「たれがにかあらむ。かれに見せさせたまへ。

それぞ世にある人の手はみな見知りて侍らむ」など、ただいらへさせむ

と、あやしきことどもをのたまふ。

一と五〇ころだにあるに、また前驅五一うち追はせて、おなじ直衣五二の人まゐりた

まひて、これはいますこしはなやぎ、さるがう言五三などしたまふを、笑ひ興

じ、「われも、なにがしが、とあること」など、殿上人のうへなど申したま

ふを聞くは、なほ變化五四のもの、天人などの下り來五五たるにやとおほえしを、

さぶらひ馴れ、日五六ころ過五七ぐれば、いとさしもあらぬわざにこそはありけれ。

かく見る人人もみな家の内出五八でそめけむほどはさこそはおほえけめなど觀五九

じもて行くに、おのづから面馴六〇れぬべし。

ものなどおほせられて、宮「われをば思ふや」と問はせたまふ。御いら

へに、清六一「いかがは」と啓六二するにあはせて、臺盤六三所のかたに、はなをいと高

(四三)こちらにいただいて拜見しませう。

(四四)清少納言がおたくしをつかまへて離

さず、立たせないのです。

(四五)若々し過ぎる冗談でわたしの身分や

年輩には不相應できまりの悪いことであ

つた。

(四六)萬葉がなを草體で書いたかな。男女

共用の字體であつた。

(四七)だれの筆蹟でせうか。

(四八)伊周様お一かたでさへはづかしく當

惑してゐるのにまたもや前驅をさせて。

(四九)冗談。

(五〇)ほくもね、だれそれがどうしたこと

があるなどと、殿上人の評判などを。

(五一)この世の人間でない者、あるいは天

人などがこの世に下りて來たのであらう

かと思はれたが。

(五二)さうたいたして不思議なことでもない

のであつたのだ。

(五三)考へさつてゆくうちに自然と見馴

れてなんともなくなつてしまふやうであ

る。

(五四)「どうしてお思ひ申さないことがあ

りませうか」とお答へ申すと同時に、臺

盤所の方で大きくしやみやみをした者があ

つたのは。當時くしやみやみを不吉としたこ

とは一出でてゆかむ人をとどめむよしな

きに隣のかたにはなもひぬかな」(古今

集十九誹諧歌)などの例があり、袖中抄二十にも見える。

(五)なみ一と口にも筆にもつくせないほど思ひ申しあげてあるものをつ。いひやうもなくなげないことで、くしやみの方が嘘をいつたのであると思ふ。

(五)大體、つねからくしやみといふものはおもしろくないものだと自分は思ふので、くしやみが用さうになつた時も、おさへおさへしてこらへてゐるのに、ましてこんなたいせつなをりもをり。

(五)姿を見せられないが偽をただしてくださる賀茂の糸の神様がもし世にをられなかつたならば、どのやうにしてどうしてそなたの詞の虚實を知ることができたであらうか。糸の神がをられるからそなたの偽が判明したのである。

(五)櫻の花のよしあしといふものは、その色の薄さ濃さ、さういつたものによつてきまるものでせうが、わたくしの宮様を思ひ申しあげる心の厚薄はそんな外面的なものではわかりませぬ。それにしても、「花」でない、「はな(くしやみ)」のために情ない「目」をみる。「身」と「實」とをかける。「花」の縁語。「實」は「心」をよそへる―のはまことにつらいことです。この歌は從來「うすきこそ」「あら

うひたれば、宮「あな、心憂。そら言をいふなりけり。よし、よし」とて、

奥へ入らせたまひぬ。いかでかそら言にはあらむ。よろしうだに思ひきこえさすべきことかは。あさましう、はなこそそら言はしけれと思ふ。さてもたれか、かくにくきわざはしつらむ。おほかた心づきなしとおぼゆれば、

さるをりもおしひしぎつつあるものを、まいていみじ、にくしと思へど、まだうひうひしければ、ともかくもえ啓しかへさで、明けぬれば、下りたる、すなはち、淺緑なる薄様に艶なる文を「これ」とて來たる、あけて見れば、

「宮いかにしていかに知らましいつはりをそらにただすの神なかりせば」

となむ御けしきは」とあるに、めでたくもくちをしようも思ひ亂るるにも、なほ昨夜の人ぞねたくにくまほしき。

清「うすきこそそれにもよらぬはなゆゑにうき身のほどを見るぞわびしき

なほこればかり啓しなほさせたまへ。式の神もおのづから。いとかしこし」

ぬ」その他いろいろに校訂されて来たが、信すべき諸本により下のやうに歸納した。

(五)陰陽家が使役する神で、人間の目に見えない。人の善惡を監視するといふ。

【百八十一】得意さうなもの。

(一)くしゃみやみをした人。「たる」は底本

とその同類本「た」

(二)競争者の多い時の藏人に自分の子を任官させた親の様子。

(三)お祝ひなどいつて「ほんとによくおなりになりました」などといふ返事に。

(四)どういたしました。まことにひどく零落して、都落ちをするまことだから。

(五)もともと君達の身分である人が参議(宰相)になりあがつたのよりも得意さうではこらしく、たいしたものに思つてゐるやうである。

【百八十二】(一)この段「したりがほなるもの」に關聯がある。位といふものはなんといつてもすばらしいものである。

(二)大夫は五位で官職のない者。侍従は定員八人で従五位下。

とて、まゐらせて後にも、うたてをりしも、などでさはたありけむと、いと歎かし。

百八十

「したりがほなるもの 正月ついたちに最初にはなひたる人。よろしき人はさしもなし。下臈よ。きしろふたたびの藏人に子なしたる人のけしき。また、除目にその年の一の國得たる人。よろこびなどいひて、「いとかしこうなりたまへり」などいふいらへに、「なにかは。いとことやうにほろびて侍るなれば」などいふも、いとしたりがほなり。

また、いふ人おほく、いどみたるなかに、選りて婿になりたるも、われはと思ひぬべし。受領したる人の宰相になりたるこそ、もとの君達のなりあがりたるよりもしたりがほにけ高う、いみじうは思ひためれ。

百八十一

位こそ くらゐ なほめでたきものはあれ。おなじ人ながら、大夫の君、侍従の

(三) なにもさまたげられず、遠慮するところなくの意か。能本「せんかたなく」

(四) 諸國に歴任して。

(五) 尊厳なざるやうである。

(六) 地位も地位だが、女の場合どうもそれだけではよくない。

(七) 底本とその同系縮本、おほやうはある」しばらく能本文による。またそれにしてその例もきはめてすくないの意。

(八) 普通の人としては、この上ない出世と思つてうらやましがるやうである。

(九) 普通の身分の人が公卿の奥方になりたり、公卿の令嬢が皇后になられたりすることは。

(一〇) なんといつても、若い人の出世するのは、まことにすばらしいことだと思はれる。

(一一) たいした者とは思はれない。

(一二) はつきりわからない。「なり」は鳴りの意、聲立ててさわく意といふ。(山岸徳平氏説)

君などきこゆるをりはいとあなづりやすきものを、中納言・大納言・大臣などになりたまひては、むげにせくかたもなく、やむことなうおぼえたまふことのこよなきよ。ほどほどにつけては、受領などもみなさこそはあめれ。あまた國に行き、大貳や四位・三位などになりぬれば、上達部などもやむことながりたまふめり。

女こそなほわろけれ。内裏わたりに、御乳母は内侍のすけ、三位などになりぬればおもおもしけれど、さりとてほどより過ぎ、なにばかりのことはある。またおほくやはある。受領の北の方にて國へ下るをこそは、よろしき人のさいはひの際と思ひてめでうらやむめれ。ただ人の、上達部の北の方になり、上達部の御むすめ、后にゐたまふこそは、めでたきことなめれ。

されど、男はなほ若き身のなり出づるぞいとめでたきかし。法師などのなにかしなどいひてありくは、なにかは見ゆる。經たふとく読み、みめ清げなるにつけても、女房にあなづられてなりかかきこそすめれ。僧都・僧正になりぬれば、佛のあらはれたまへるやうにおぢ惑ひ、かしまるさ

【百八十二】(一)威勢のあるものは。たいしたものは。以下前段・前々段に關聯してゐる。

(二)乳母の夫。一をとこ一は通常「夫」をさし、をのこ一は一般に男子を、また藏人や使用人をさす。底本「をとこ」

第一類本「男」

(三)すばらしいことはいふまでもないから、申しあげないでおく。

(四)その家で、の信任が甚だしいものになつてゐるから。

(五)得意顔で信任があると自任して。

(六)まつたく自分の物にして、女兒の場合ほそれほでもないが。

(七)つねに離れないで世話をし。

(八)御かたと同じ。すこしでも彼の御かた(男兒)のいふことにそむく者。

(九)「詰め立て」か「爪立て」か。前者ならば盛んにいひ詰める意、後者は排斥する意となる。後者にとりた。

(一〇)わるくつげ口をし、わるいけれど、この乳母の夫のいばることをば思ふままに批判する人もあないので。

(一一)ここからは乳母の話にもどる。その兒があまり幼少であることはすこし都合が悪い。その兒が親の前でゐると乳母は一人で自分の局にゐる。

(一二)兒を呼んで局でゐると。

(一三)親が呼ぶのである。

まはなににか似たる。

百八十二

かしこきものは 乳母の男こそあれ。帝、皇子たちなどはさるものにて

おきたてまつりつ。そのつぎつき、受領の家などにも、ところにつけたる

おぼえわづらはしきものにしたれば、したりがほにわがこちもいとよせ

ありて、この養ひたる子をも、むげにわがものになして、女はされどあり、

男兒はつと立ちそひて、うしろみ、いささかもかの御ことにたがふ者をば

つめたて、讒言し、あしけれど、これが世をば心にまかせていふ人もなけ

れば、ところ得、いみじき面もちして、こと行ひなどす。

むげに幼きほどぞすこし人わろき。親の前に臥すれば、ひとり局に臥し

たり。さりとしてほかへ行けば、こと心ありとてさわがれぬべし。しひて呼

びおろして臥したるに、「まづまづ」と呼ばるれば、冬の夜など引き探し

引き探しのほりぬるがいとわびしきなり。それはよきところもおなじこ

と、いますすこしわづらはしきことのみこそあれ。

百八十三

病は胸。もの怪。脚の氣。はては、ただそこはかたなくてももの食はれぬこち。

十八九ばかりの人の、髪いとうるはしくて丈ばかりに、褌いとふさやかなる、いとよう肥えて、いみじう色白う、かほ愛敬づき、よしと見ゆるが、齒をいみじう病みて、額髪もしとどに泣きぬらし、亂れかかるも知らず、面もいと赤くて、おさへてゐたるこそいとをかしけれ。

八月ばかりに、白き單衣なよらかなるに、袴よきほどにて、紫苑の衣のいとあてやかなるを引きかけて、胸をいみじう病めば、友達の女房など數數來つとぶらひ、外のかたにも若やかなる君達あまた來て、「いといとほしきわざかな。例もかうや憐みたまふ」など、ことなしびにいふもあり。心かけたる人はまことにいとほしと思ひ歎き、人知れぬかなどはまして人目思ひて、寄るにも近くえよらず、思ひ歎きたるこそをかしけれ。いとうるはしう長き髪を引き結ひて、ものつくとて起きあがりたるけしき

【百八十三】(一)「ものの氣」とも解する。生靈死靈が人について心身をなやますをいふ。

(二)脚氣のことだといふ。

(三)とこが悪いといふこともなくて。

(四)髪の毛が端座で自分の身長ほどで、その裾がまことにふさふさとしてゐて。

(五)ひどくびつしよりと泣きぬらし。

(六)病打齒のあたりをおさへてゐるの

は。

(七)紫苑色の着物のまことに上品なのを。

(八)胃痛。胃瘕瘕、胃瘕氣の類であらう。

(九)「まことにお氣の毒なことですな。いつもこんなに苦しまれるのですか」などと、とほり一べんに見舞ふ者もある。

「ことなしびに」はたいしたことななさうに、お座なりにの意。

(一〇)思ひをかけてゐる人はほんとに氣の毒だと思ひ歎き。

(一一)底本、人知れぬ；思ひ歎き「脱落。こつそりといひかはしてゐる男などは。

(一二)ものを吐く意とも、ものわけがつく意とも解せられるが、當時の例からみ

て、ここは前者に解したい。

(三)可憐である。
 (四)御差遣の僧をすわらせた。
 (五)見舞客がたく見えん来てお経を聞いた
 りするのめよく見えるので、僧がそれら
 の見舞の女房に目を配りながら讀經をし
 てるのは、佛罰を蒙りはしまいかと思
 はれる。

【百八十四】(一)色好みで獨身の男性が。「獨
 住みする人の」は底本とその同類本「人
 かすみ人の」

(二)夜明けがたに歸つて来てそのまゝ起
 きてゐるので、ねむたさうな様子である
 が。

(三)「ことなしびに」(形容詞連用形)
 は下の「あらず」にうち消される中止法。

とほり「べんに筆にまかせて書くとい
 ふやうではなく、十分心をこめて、後
 朝の文を書くしどけない姿も。

(四)朝露にぬれてしわがよつて縮んでゐ
 るのを、ちつと見つめ見つめして書き終
 へて、前にゐる人にもわたさず、わざわ
 ざ立ちあがつて。

(五)底本「ことわりかわらは」

(六)小聲でいひつけて、手紙をわたして。

(七)ちつとも思ひにふけりながら。

(八)「めし上れ」と家の者がすすめるの
 で。

もらうたげなり。

うへにもきこしめして、御讀經の僧の聲よき賜はせられたれば、几帳引きよ
 せてすゑたり。ほどもなきせばさなれば、とぶらひ人あまた来て、經聞き
 などするもかくれなきに、目を配りて讀みるたるこそ、罪や得らむとおぼ
 ゆれ。

百八十四

すきずきしくて獨住する人の、夜はいづくにかありつらむ、曉に歸り
 て、やがて起きたる、ねぶたげなるけしきなれど、硯取りよせて墨こまや
 かにおしすりて、ことなしびに、筆にまかせてなどはあらず、心とどめて
 書くまひろげ姿もをかしう見ゆ。

白き衣どもの上に、山吹、紅などぞ着たる。白き單衣のいたうしほみた
 るをうちまもりつつ書きはてて、前なる人にも取らせず、わざと立ちて、
 小舎人童、つきづきしき隨身など近う呼びよせて、ささめき取らせて、往
 ぬる後もひさしうながめて、經などのさるべきところころしのびやかに

(九)「あゆみ」は底本とその同類本「あへみ」
(一〇)法華經の第六卷壽量品。
(一一)行く先は近いところであつたらしい、先刻の小舎人童が歸つて来て、返事をもらつて来たけしきを合圖するの。
(一二)急に讀むのをやめて、女から来た返事(返歌)に心をうつすのは佛罰をうけはしまいかと思はれ、興趣深い。

【百八十五】(一)たまらなく暑い日中に、どうしようかと思つて。

(二)眞赤な薄様をうつくしく咲いた唐なでしこにむすびつけて、人がもつて来たのを受けとつた時には。

(三)この手紙を書いた時の暑さが思ひやられ、それだけその人の思つてくれてゐる志の深さも推しはかることができて、絶えず使つてゐてさへもの足りなく思ふ扇も思はずその場に置いて、その手紙を讀むことである。「らむ」は現在の見てゐないことを推量する助動詞。疑惑の意のあることがおほい。「れ」は自發の助動詞「る」の連用形。

口ずさびに讀みめたるに、奥のかたに御粥、手水などしてそそのかせば、あゆみ入りても、文机におしかかりて書などをぞ見る。おもしろかりけるところは高ううち誦したるも、いとをかし。
手洗ひて、直衣ばかりうち着て、六の卷そらに讀む、まことにたふときほどに、近きところなるべし、ありつる使、うちけしきばめば、ふと讀みさして、返りごとに心移すこそ罪得らむとをかしけれ。

百八十五

いみじう暑き晝なかに、いかなるわざをせむと、扇の風もぬるし、氷水に手をひたし、もてさわぐほどに、こちたう赤き薄様を唐なでしこのいみじう咲きたるに結びつけて取り入れたるこそ、書きつらむほどの暑さ、心ざしのほど浅からずおしはかられて、且つ使ひつるだにあかずおぼゆる扇もうち置かれぬれ。

百八十六

【百七十六】(一)南の廂か、さうでなかつたら東の廂の板縁で姿がうつるほどつややかなのに。「板のかげ」はかげが見えるほど端近かにもと解せられるが、いかがであらう。

(二)きれいな疊を敷いて。

(三)つうとすべり動いて、思つたよりもむかふに立つたが。

(四)童女などが下長押(敷居)によりかかり、またおろした簾に寄り添つて横になつてゐるものもある。

(五)薰燭。外は木で、内に銅か陶をうづめ、上に銅の籠をおほつた香爐の類。

(六)いつもの、こんな場合のことをよくのみこんである女房が来て、うまく行動し、訪れて来た人をかくしながら一方人が見るのを注意して、家の中へ入れたのは、さうした場合の機を得た處置としていいものである。

【百七十七】(一)「佳人ことごとくあしたの粧ひをかざれば魏宮鐘動き、遊子なほ残の月に行けば函谷鶴鳴く。」(原漢文、和漢

南ならずは、東の廂の板のかげ見ゆばかりなるに、あざやかなる疊をうち置きて、三尺の几帳の帷子いと涼しげに見えたるをおしやれば、流れて思ふほどよりも過ぎて立てるに、白き生絹の單衣、紅の袴、宿直物には濃き衣のいたうはなえぬをすこし引きかけて臥したり。

燈籠に火ともしたる二間ばかり去りて、簾高うあげて、女房二人ばかり、童など長押によりかかり、また下いたる簾に添ひて臥したるもあり。火取に火深う埋みて、心ぼそげににははしたるも、いとどのやかに、心にくし。

宵うち過ぐるほどに、しのびやかに門たたたく音のすれば、例の心知りの人来て、けしきばみ、立ちかくし、人まもりて入れたるこそさるかたにかしけれ。

かたはらにいとよく鳴る琵琶のをかしげなるがあるを、物語のひまひまに、音も立てず、爪弾きにかき鳴らしたるこそをかしけれ。

朗詠重曉の賦、賈島)實は賈誼の詩である。「魏宮」は魏の宮中。

(三)馬の側腹をおほふ革の具。

【宮六十二】(一)急に幻滅を感じたりするものは。能本には「おろきものは」とある。

いはゆる總注語の提示語的用法。

(二)男でも女でも、詞の文字、會話の用語をげすつづく用ゐたのこそ何よりもよくないことである。

(三)たつた一つのことばのつかひかたで、不思議なことに、上品にもまた下品にもなるのはどうしたわけであらうか。

(四)そのくせ(とはいへ)こんなに廣言を吐く人(講女みづからを指していふ)が特別にことばの使用に勝れてゐるものでもない。

(五)それなのに、なにを標準としてどれをよい、どれが悪いと判断するのであらう、わかるはずのものではないが、「知るにかは」の「は」は底本とその同類本にない。

(六)ほかの人は知らないが、自分はただ自分の主観でさう思はれるのである。

(七)下品なことばだと知つてゐながら。

(八)しかし、自慰しないで自分がなまつてゐることばを、遠慮なく盛骨にいつたのは、なんともいややうもなくさげな

いものである。また、そんないやなことばをつかひさうもない老人や男性などが、わざわざ氣とつて。

朗詠重曉の賦、賈島)實は賈誼の詩である。「魏宮」は魏の宮中。

大路近なるところにて聞けば、車に乗りたる人の有明のをかしきに簾あ

げて、「遊子なほ残りの月に行く」といふ詩を、聲よくて誦じたるもをか

し。
馬にても、さやうの人の行くはをかし。さやうのところにて聞くに、泥障の音の聞ゆるを、いかなる者ならむと、するわざもうち置きて見るに、あやしの者を見つけたる、いとねたし。

百八十八

ふと心おとりとかするものは 男も女もことばの文字いやしう使ひたる
こそよろづのことよりまさりてわるけれ。ただ文字一つにあやしう、あて
にもいやしうもなるはいかなるにかあらむ。さるは、かう思ふ人ことにす
ぐれてもあらじかし。いづれをよしあしと知るにかは。されど、人をば知
らじ、ただここにさおほゆるなり。

いやしき言もわるき言も、さと知りながらことさらにいひたるはあしう
もあらず。わがもてつけたるを、つつみなくいひたるはあさましきわざな

- (九)よくないことば。無作法なことば。
 (一〇)未詳。無遠慮に平氣で、または絶えずいづつなどの意か。
 (一一)はらはらした氣持で。
 (一二)底本「きえいのたる」とも讀まれる。
 (一三)「と」といふ音が消えて。
 (一四)それだけでもうたちまちにいやだ。
 (一五)手紙などに書いた場合はよくない。
 (一六)へたに書いてしまふとつまらなく、作者まで氣の毒である。
 (一七)「ひとつ車に」(おなじ車での意)といふのを「ひてつ車に」となまつた人もあつた。「ひてつくるまに」を「批點(または秘點)附くる間に」と解する説(春暉抄・古澤義則博士)もあるが、「ひて」(批點・秘點)の例設のないこと、「まに」の用法が無理なことなどよりみても、
 「ひてつくるまに」といつたのは「ひとつ車」がつねに「に」といふ格助詞とともに、つまり「ひとつ車に」と使用されるからである。

【宮子九】(一)宮仕する女性のところへ通つて來たりする男性が。
 (二)大體愛してゐる人(女)が「まあどうぞめし上つて下さいませ」などと志があつていふやうな場合、それを忌み嫌

り。また、さもあるまじき老いたる人、男などの、わざとつくるひひなびたるはにくし。まさなき言もあやしき言も、大人なるはまのもなくいひたるを、若き人はいみじうかたはらいたきことに聞き入りたるこそさるべきことなれ。

なにごとをいひても、「そのことさせむとす」「いはむとす」「なにとせむとす」といふ「と」文字を失ひて、ただ「いはむずる」「里へ出でむずる」などいへば、やがていとわろし。まいて文に書いてはいふべきにもあらず。物語などこそあしう書きなしつればいふかひなく、作り人さへいとほしけれ。「ひてつくるまに」といひし人もありき。「もとむ」といふことを「みとむ」などはみないふめり。

百八十九

【みやづか】
 宮仕人のもとに來などする男のそこにてもの食ふこそいとわろけれ。食はする人も、いとにくし。思はむ人の、「なほ」など心ざしありていはむを、忌みたらむやうに口をふたぎ、かほをもて退くべきことにもあらねば、

つたやうに口をふさぎ、顔をそむける失禮なことでもできないから、やむを得ず男は食べてゐるのであらうから。

(三)男がひどく酔つて、よんどころなく。(四)決して湯漬一杯さへ喰べさせるまないことだ、親切心もないことだ、氣のないことだなあといつて男が來ないなら、それはそれでよい。

(五)南面が正座敷・客間であるに對して臺所・茶の間とでもいふべき場所。そこで出すのはまあしかたがない。しかし、それでさへやはりまだにくらしい。

【吉平】(一)晝寢などのをり、一夏中とほして着た薄綿入れの衣がものにかけてあつたのを取つて着、その上に生絹の單衣をかさねて着たのもまことにいい。(二)この薄い生絹一枚さへもとてもつままし。

(三)強い風がさつと吹いて顔にあたつてつめたいたいものもなかなか興味深いものである。

(四)櫻の葉とか、棕の葉などは、ことにはやく落ちるものである。

食ひをるにこそはあらめ。

いみじう酔ひて、わりなく夜ふけて泊りたりとも、さらに湯漬をだに食はせじ。心もなかりけりとして來ずは、さてありなむ。

里などにて、北面より出だしてはいかがはせむ。それだになほぞある。

百九十

風は 嵐。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる雨風。

八九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨の脚横さまにさわがしう吹きたるに、夏とほしたる綿衣のかかりたるを、生絹の單衣重ねて着たるも、いとをか。この生絹だにいとところせく暑かはしく、取りすてまほしかりしに、いつのほどにかくなりぬるにかと思ふもをか。曉に格子、端戸をおしあげたれば、嵐のさとかほにしみたることいみじくをかしけれ。

九月つごもり・十月のころ、空うち曇りて風のいとさわがしく吹きて、黄なる葉どものほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり。櫻の葉、棕の

【百九十一】野分―秋に吹く暴風―のあつた翌日は、實になんともいひやうもなく感慨深くまた興趣をおぼえるものである。

(二) 七四頁参照。

(三) 一五〇・二三七頁参照。

(四) 見るからにむざんで、いたいたしい姿である。

(五) 横たはり、倒れふしてゐるのは、まことにあまりにもひどいありさまである。

(六) 格子のひと間ひと間をいふ。

(七) わざわざ人工的に入れたやうにいちいち入念に吹き入れてゐるのは。

(八) たいそう濃い紫の衣の、表がすこし古びて黒ずんでゐるのに。

(九) 實直に見えるきれいな女が。

(一〇) 吹き亂されて、すこしふくらみ亂れそそけてゐるのが。

(一一) 外的ものあはれな景色を見出して。

(一二) 吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ。(古今集五秋下、文屋康秀・古今六帖一、下句「なへて草木の」) 文屋朝康の作とみるのが正しい。

(一三) 「にや」底本など「や」

(一四) 一五二頁参照。

(一五) はなだ色もあせてぬれなどしてゐる薄紅色の夜着を着て、髪はあてやかで、

葉こそいとくは落つれ。

十月ばかりに木立おほかるところの庭は、いとめでたし。

百九十一

野分のまたの目こそ、いみじうあはれにをかしけれ。立部、透垣などの

亂れたるに、前栽ともいと心苦しげなり。おほきなる木どもも倒れ、枝な

ど吹き折られたるが、萩・女郎花などの上によこるばひ臥せる、いと思は

ずなり。格子の壺などに木の葉をことさらにしたらむやうにこまこまと吹

き入れたるこそ、荒かりつる風のしわざとはおぼえぬ。

いと濃き衣のうはぐもりたるに、黄朽葉の織物、薄物などの小鞋着てま

ことしう清げなる人の、夜は風のさわぎに寝られざりければ、ひさしう寝

起きたるままに、母屋よりすこしみざり出でたる、髪は風に吹きまよはさ

れてすこしうちふくだみたるが、肩にかかれるほど、まことにめでたし。

ものあはれなるけしきに、見出だして、「むべ山風を」などいひたるも

心あらむと見ゆるに、十七八ばかりにやあらむ、ちひさうはあらねど、わ

一本一本きちつと整つてをり、毛先もすすきのやうにふさふさとして、ちやうど身のたけほどの長さなので。「色に」はうつくしくあでやかなさまをいふ形容動詞「色なり」の連用形。

(二) びはし(端)はしからのぞいてゐるが。(三) び根のついたまま吹き折られた庭の木を。

(二) 従來「推しはかりて」の本文によりどうするのだらうなどと想像してと解されてゐるが、底本などに「おしはりて」とあるににより、簾を外の方へおし出しかげんにまで寄り添つての意とみるべきであらう。「おしはりて」は源氏物語・とこなつ、堤中納言物語・蟲めづる姫君などに例がある。

(二) 後姿。

【百年】(一) 奥ゆかしいもの。相手がにくいと思はれるほどすぐれてゐるもの。相手のすぐれた心くばりに奥ゆかしく感じらるもの。

(二) 女房とは思はれぬ女主人らしい人が、人を呼ぶ手の音がしのびやかに。

(三) 召使の女房が衣ずれの音をさせておそばにまゐるけが衣ずるのを、なにかのうしろで、または襖などを隔てて聞いてゐると、御食事をめしあがる時なのであらうか、箸や匙の音が。

ざと大人とは見えぬが、生絹の單衣のいみじうほころび絶え、はなもかへりぬれなどしたる薄色の宿直物を着て、髪、色に、こまごまとうるはしう、末も尾花のやうにて丈ばかりなりければ、衣の裾にかくれて袴の、そばそばより見ゆるに、童・若き人人の、根ごめに吹き折られたる、ここかしこに取り集め、起し立てなどするをうらやましげにおしはりて、簾に添ひたるうしろでもをかし。

百九十二

心にくきものもの隔てて聞くに、女房とはおぼえぬ手のしのびやかにをかしげに聞えたるに、答へ若やかにして、うちそよめきてまゐるけはひ、もののうしろ、障子などへだてて聞くに、御ものまゐるほどにや、箸・匙など、取りまげて鳴りたる、をかし。ひさげの柄の倒れ伏すも、耳こそとまれ。

よううちたる衣の上に、さわがしうはあらで、髪振の振りやられたる、長さおしはからる。いみじうしつらひたるところの、大殿油はまゐらで、炭

(四) 酒や飲料を盛つて物に注ぐ器。その柄は鍋のつるに似てゐる。

(五) 十分に碇で打つて光澤を出した。

(六) 亂れはしなさいでと解くのが通説であるけれども、「さわがし」にさうした例を見ない。音をいふか。關根博士は「さばく」から派生した「さばかし」で「わけ散らす」の意かといはれた。後考をまつ。

(七) 御簾の帽額(一〇四頁参照)や總角などにあけてかけてあける鉤が、きは立つて光つてゐるのも。簾を巻きあげた時掛けておく金色の曲り金具を鉤といひ、それに附いた、あげまき結びの緒を總角といふ。

(八) 火箸がくつきりと光つて。

(九) 斜に交叉して。半ば倒れるやうに。

(一〇) 底本など「に」がない。

(一一) なんといつても、夜寝ない人は。

(一二) ふと眼をさまして。

(一三) 起きてゐるやうだと、そのけはひは聞えるが、なにをしやべつてゐるのかいふことは聞えないで。

(一四) 底本をはじめ第一類本には「主も」の本文がない。いま、第二類本によつて補つたが、ないのが原態か。

(一五) たふとい上臈女房が參上してゐる時。

(一六) 消してあるが、長炭櫃の火で、あたりの様子もよく見える。

櫃びつなどびつにいとおほくおこしたる火の光ひかりばかり照り満ちたるに、御帳みちやうの紐ひもなどのつややかにうち見えたる、いとめでたし。御簾みすの帽額ぼうがく・總角あけまきなどにあげたる鉤かぎのきはやかなるもげざやかに見ゆ。よく調てうしたる火桶かまどの灰はいのきは清きよげにて、おこしたる火に、内うちにかきたる綺きなどの見えたる、いとをかし。箸はしのいとときはやかにつやめきてすぢかひたてるも、いとをかし。

夜いたくふけて、御前ごぜんにも大殿たいでん籠り、人人みな寝ぬる後ご、外とのかたに殿上人たにじやうじんなどのものなどいふに、奥おくに碁石ごせきの筭しりに入るる音ねあまた度聞ゆる、いと心にくし。火箸かきをしのびやかに突つい立つるも、まだ起おきたりけりと聞くも、いとをかし。なほ寝ねぬ人は、心にくし。人の臥ふしたるに、ものへだてて聞くに、夜なかばかりなどうちおどろきて聞きけば、起おきたるななりと聞えて、いふことは聞えず、男おとこもしのびやかにうち突つひたるこそなにごとならむとゆかしけれ。

また、主しゆもおはしまし、女房にようぼうなどさぶらふに、上人じやうじん、内侍うちわかしのすけなど、はづかしげなるまありたるとき、御前ごぜん近く御物語ごものがたりなどあるほどは、大殿たいでん油あぶらも消けちたるに、長炭櫃ながすすびつの火にものあやめもよく見ゆ。

(一七)奥ゆかしいと思はれる新参ではあるが、さう直接に御覽なされるほどの身分でない者がすこし夜ふけて参上した時に。
(一八)その新参の召使がうぶで、はづかしさうに遠慮して返事申しあげる聲も、御主人(宮様)へは聞えさうにないほどで、まことにしづかである。
(一九)女房があちらこちらにあつまつてすわり、話をし、出入する衣ずれの音などは特に大きな音がしないけれど。
(二〇)ああ、いまのはあの人だなとわかるやうに聞えたのは。
(二一)そばのほかの人の部屋の光が。「ものの上などより：」は未詳。屏風などの上からもれて来るためなどと解するのが通説。
(二二)こちらの火は消してあるとはいへ、あたりの様子はかすかに見わけられるといつた時に。
(二三)書間にはかうして對座するといふこともめつたない相手(男性)なので。
(二四)髪のかつかうの好さわるさは隠せないやうだ。
(二五)まづよいであらう。
(二六)曲げてまるくして。わがねて。
(二七)夜明けがたに歸る時、暗いところなのでなかなか見つけられないであわてさせることであらう。

殿とのばらなどには心こゝろにくき新参にいさまのいと御覽ごらんするきはにはあらぬほど、ややふかしてまうのぼりたるに、うちそよめく衣きぬのおとなひなつかしう、みざり出いでて御前ごまへにさぶらへば、ものなどほのかにおほせられ、子めこゝろかしうつつましげに、聲こゑのありさま聞ゆべうだにあらぬほどにいと静しずかなり。女房にようここかしこにむれゐつつ、物語うちし、下りのぼる衣きぬのおとなひなどおどろおどろしからねど、さななりと聞えたる、いと心にくし。
内裏うちの局つぼねなどに、うちとくまじき人のあれば、こなたの火は消けちたるに、かたはらの光の、ものの上かみなどよりとほりたれば、さすこゝろがにものあやめはほのかに見ゆるに、短みき几帳ひ引きよせて、いと晝ひるはさしも向かはぬ人なれば、几帳ひのかたに添そひ臥ふして、うちかたぶきたる頭かぶつきのよさあしさはかくれざめり。直衣なほし・指貫さしぬきなど几帳ひにうちかけたなり。
六位ろくゐの藏人ざうじんの青色あおもあへなむ。縁衫ろうきんはしも、あとのかたにかたにかいこゝろわぐみて、曉あけにもえ探たずりつけでまどはせこそせめ。
夏も、冬も、几帳ひの片かたつかたにうちかけて人の臥ふしたるを、奥おくのかたよりやをらのぞいたるも、いとをかし。

(二)ここは弘徽殿の上の御局であらう。
 (三)移り香。「し香は」は、「しかば」ではあるまい。

(三)翌日までも御簾に移り香がしみかへつてゐたのを、若い女房達が。

(三)身分の高い者や低い者がたくさんつれだつてあるいてゐるものよりも、

(三)上衣はまあどんなものでも、例へばかいねり襲(表裏ともに紅のねり衣)とか山吹襲(表裏黄紅葉、裏黄)とかなどを。

(三)塔とみる説もある。

【言平三】(一)多数の島の意の普通名詞。「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人」には

告げよあまの釣り舟(古今集九綺旅、小野篁)

(二)「鹽竈の前に浮きたる浮島のうきて思ひのある世なりけり」(古今六帖三山口女王・新古今集戀五)

(三)「名にしおはばあだにぞあるべきたはれ島波の濡衣着るといふなり」(伊勢物語)熊本縣宇土郡。(四)淡路の繪島か。

(五)「音に聞く松が浦島けふぞ見るむべ心あるあまは住みけり」(後撰集十五雑素性・素性法師集)

(六)山口縣豊浦郡。「よそに見し豊浦(いとこよの)島の二心(イニ所)あり」とし

聞けばさらにたのます」(古今六帖三・壬生忠岑)

(七)「わがせこを都にやりて鹽竈のまが

薰物の香、いと心にくし。

五月の長雨のころ、上の御局の小戸の簾に齊信の中將のよりゐたまへり

し香は、まことにをかしうもありしかな。そのものの香ともおぼえず。お

ほかた雨にもしめりて、艶なるけしきのめづらしげなきことなれど、いか

でかいはではあらむ。またの日まで御簾にしみかへりたりしを、若き人な

どの世に知らず思へる、ことわりなりや。

ことにきらきらしからぬ男の、高き、短きあまたつれだちたるよりも、す

こし乗り馴らしたる車のいとつややかなるに、牛飼童なりいとつきづき

しうて、牛のいたうはやりたるを、童はおくるるやうに綱引かれて遣る。

ほそやかなる男の柳濃だちたる袴、一藍かなにぞ、かみはいかにもいかに

にも搔練、山吹など着たるが、沓のいとつややかなる、堂のもと近う走り

たるは、なかなか心にくく見ゆ。

百九十三

島は 八十島。浮島。たはれ島。象島。松が浦島。豊浦の島。まがきの

島のまつぞ戀しき」(古今集二十大歌所御歌 東歌 みちのく歌)

【百九十四】「君が代はかぎりもあらじ長濱の眞砂の敷はよみつくすとも」(古今集二十大歌所御歌 これは仁和の御べ)

【大嘗】の伊勢國の歌)

(二)「秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬか波のよするか」(古今集五秋下菅原朝臣)和歌山縣海草郡。

(三)「近江なる打出の濱のうちいでて恨みやせまし人の心を」(拾遺集十五戀五よみ人知らず)

(四)「但馬なる鐔の白濱もろよせに思ひしものを一重とや見む」(古今六帖二・三)

(五)和歌山縣日高郡にある磐白の濱の一名。「紀の國の千里の濱にありけるいとおもしろき石たてまつれり」(伊勢物語)

【百九十五】(一)底本系統諸本「おほの浦」能本「おふのうら」または「をふのうら」

「をふの浦に片えさしおほひなる梨のなりもならずもねて語らばむ」(古今集二十。大歌所御歌 伊勢歌)「をふの浦」

は三重縣志摩郡であるが、「おほの浦」は萬葉集卷八・十の歌枕で遠江にある。

(二)「こりずまの浦の白浪立ち出でてよるほどもなくかへるばかりか」(後撰集十二 戀歌四)須磨と同所だといふ。

(三)「紀の海の名高の浦によする波音高

島。

百九十四

濱は うど濱。長濱。吹上の濱。打出の濱。もろよせの濱。千里の濱、

ひろう思ひやらる。

百九十五

浦は をふの浦。鹽濱の浦。こりずまの浦。名高の浦。

百九十六

森は うへ木の森。石田の森。木枯の森。うたた寝の森。岩瀬の森。大

荒木の森。たれその森。くるべきの森。立聞の森。

横堅の森といふが耳とまるこそあやしけれ。森などいふべくもあらず、

ただ一木あるをなにごとにつけむ。

きかもあはぬ子ゆゑに」(萬葉集十一)和歌山縣海草郡。

【百九十六】この段、底本系統本には重出してゐる。

【百九十七】京都市右京區嵐山にある。本尊虚空藏菩薩。貞觀中、道昌僧都の開基。

(一)靈鷲山。わしのみやま。摩揭陀國、王舍城の東北十里。釋迦の説法したところの名であるが、ここは最澄の延暦年中の創建にかかると正法寺の別名であらう。

いま京都市東山區にその跡と地名とが残つてゐる。このあたり能本には「高野は弘法大師の御すみかなるが あはれなるなり」とある。

【百九十八】華嚴經の普賢行願品をいふ。

(一)千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無碍大悲心陀羅尼經。一卷。

(二)普遍光明清淨熾盛如意寶印心無能勝大明王隨求陀羅尼經。二卷。

【百九十九】六觀音(千手、聖、馬頭、十

一面、准胝、如意輪)の一。

【二百】(一)白氏文集。唐の白樂天の詩文集。七十一卷。

(二)梁の昭明太子蕭統が周秦以來梁に至るまでの詩文を類聚した書。三十卷。唐の李善が注して、六十卷となつた。

(三)書名(固有名詞)と思はれるが未詳。

(四)前田本に「こたいはんき」とある。

百九十七

寺は 壺坂。笠置。法輪。靈山は、釋迦佛の御住處なるが あはれなるなり。

石山。粉河。志賀。

百九十八

經は 法華經さらなり。普賢十願。千手經。隨求經。金剛般若。藥師經。

仁王經の下卷。

百九十九

佛は 如意輪。千手、すべて六觀音。藥師佛。釋迦佛。彌勒。地藏。文殊。

殊。不動尊。普賢。

二百

書は 文集。文選。新賦。史記。五帝本紀。願文。表。博士の申文。

(五) 君主に建言した文書。

(六) 文章博士の申文。申文は七四頁(三)参照。

【三言】(一) 底本とその同系統本「こまの物かたり」能本によつて改めた。

(二) 古い蝙蝠扇をさがし出して。蝙蝠扇は、地紙を骨の片面にだけはり、ひろげた形が蝙蝠の翼に似ているのでかういふ。第一禮装である束帯には檜扇ひなせんを持つが、衣冠、直衣の時、夏にかぎつて「かはほり」を持つてよいとした。一〇六・三八四頁参照。

【三言】(一) 音楽のあそびは、夜がいい。人の顔が見えない暗い時がよい。

二百一

物語は 住吉。うつぼ。殿うつり。國ゆつりはにくし。むもれ木。月待つ女。梅壺の大將。道心すすむる。松が枝。こま野の物語は、ふるかはほりさがし出でて持て行きしがをかしきなり。ものうらやみの中將、宰相に子生ませ、かたみの衣など乞ひたるぞにくき。交野の少將。

二百二

陀羅尼は 曉。經は 夕暮。

二百三

あそびは 夜。人のかほ見えぬほど。

二百四

あそびわざは 小弓。碁。さまあしけれど、鞆もをかし。(韻寒。碁。)

【三四】(一) 底本にない。能本による。

【四五】(一)東國の風俗歌にあはせて舞ふものうち駿河歌を舞ふものをいふ。
(二)唐樂。一名武昌太平樂、武將破陣樂、巾舞。項莊鴻門曲。

(三)漢の高祖と楚の項羽との鴻門の會に項莊が拔劍して高祖を撃たうとした故事を模して作つた舞樂。「項莊劍を抜き起ちて舞ふ。項伯もまた劍を抜き起ちて舞ふ。つねに身を得ず」(原漢文。史記項羽列傳)「に」どめの例。七三頁參照。

(四)一名迦陵頻。インド傳來の舞樂で舞人四人、天冠羽衣を着て雙手に銅鈸子を拍ち、拍子を取つて舞ふ。

(五)宗妃樂といふ。「一人して舞ふなり。青き絲を髮の亂るごとく振りかけ、すさまじき面を着て侍れば、まみなどおそろしといふなり」(盤齋抄)「まみ」は目つき。

(六)納蘇利(高麗傳來の舞樂)を一人で舞ふ時の稱であるが、ここは納蘇利の一名として用ゐた。「二人して背をかかめ、膝を突いて舞ふなり」(盤齋抄)

【二六六】(一)「蘇合」は蘇合香の略。底本「それから盤涉調のインド樂。「急」は音樂の進行を序破急にわけ、終りの段。

(二)春鶯囀。壹越調の唐樂。女舞。

二百五

舞は 駿河舞。求子、いとをかし。太平樂、太刀などぞうたてあれど、
いとおもしろし。唐土に敵どちなどして舞ひけむなど聞くに。
鳥の舞。拔頭は髮振りあげたるまみなどはうとましけれど、樂もなほい
とおもしろし。

落躑は二人して膝踏みて舞ひたる。狛がた。

二百六

弾くものは 琵琶。調は 風香調。黃鐘調。蘇合の急。鶯のさへづり
といふ調。
箏の琴、いとめでたし。調は さうぶれん。

二百七

笛は 横笛、いみじうをかし。遠うより聞ゆるがやうやう近うなりゆく

(三)十三絃のこと。
(四)相府蓮。晋の王儉が大臣として家に蓮を栽ゑて愛した時の樂である。(つれづれ草・二一四段) 曲があつて舞はない。想夫憐、想夫戀なども書き、その意を汲んで解いたりした。

【三】(一)雅樂に用ゐる竹製の笛で、吹き穴ともに八穴である。

(二)徒歩でも、馬上でも。「より」は「にて」とおなじく、手段・方法をあらはす助詞。

(三)懷中にしてもつてゐても、何だとも見えない。

(四)男が忘れて行つたのを。

(五)人が取りによこしたのを包んでわたす時にも。

(六)大き過ぎて、もてあつかひにくく見える。

(七)さうして、これを吹く顔はまあなんと醜いことであらう。しかしそれは横笛とても同様で、吹きやう次第で醜いものではある。「なめり」は底本「なめし」(八)替へていふと。

(九)いやで、近くでいつも聞きたくない。ましてへたに吹いてゐるのはまことにいやだが。

(一〇)ああ、いいなあと聞いてゐる時に。

もをかし。近かりつるが遙かになりて、いとほのかに聞ゆるも、いとをかし。車にても、徒歩よりも、馬よりも、すべて懷にさし入れて持たるも、なにとも見えず。さばかりをかしきものはなし。まして聞き知りたる調子などは、いみじうめでたし。曉などに忘れてをかしげなる枕のもとにありける、見つけたるもなほをかし。人の取りにおこせたるをおしつみても、立文のやうに見えたり。

笙の笛は月の明かきに、車などにて聞き得たる、いとをかし。ところせくもてあつかひにくくぞ見ゆる。さて、吹くかほやいかにぞ。それは横笛も吹きなしなめりかし。

箏はいとかがましく、秋の蟲をいはば、響蟲などのこちして、うたてけ近く聞かまほしからず。ましてわろく吹きたるは、いとにくきに、臨時の祭の日、まだ御前には出ででもものうしろに横笛をいみじう吹き立てたる、あな、おもしろと聞くほどに、なからばかりよりうち添へて吹きぬべきこちすれ。やうやう琴・笛にあはせてあゆみ出でたる、いみじう

をかし。

二百八

(一)ひちりきの音を加へて。
 (二)なんともいへずりつばで、あまりのおもしろさに、端麗に整つた髪を持つてゐる人もその髪がみな立ちあがるほど感動をおぼえさうである。
 【賀茂】(一)賀茂祭の前目に行はれる關白の賀茂まうでのこと。

(二)陰曆十一月新嘗祭の後の酉の日。
 (三)舞人陪從などの冠につけて飾る造花が山藍ですつた青摺の袍の上に。
 (四)底本系統諸本「やうしたる」「整したる」(帛を貝でみがき、光澤を出す)の義といふ。半臂(樂人などの着るもので、袖のゆきが短い)の緒の結びあまりが袍の脇から出て黒い鞆にかかつたのである。

(五)白地の絹にものゝ形をすり出したものを「地摺」といふ。
 (六)光のあるつや。
 (七)挿頭の藤の花に顔が隠れてゐるところなどは。
 (八)賀茂・石清水などの祭の東遊の音楽を奏した人、および歌人の稱。

(九)馬具の名。泥が飛びはねて衣をよごすを防ぐために、馬の兩脇や腹におほひ垂れたもの。
 (一〇)一ちはやぶる賀茂の社のゆふだすき一日も君をかけぬ日はなし(古今集十一

見るものは 臨時の祭。行幸。祭のかへさ。御賀茂詣。

賀茂の臨時の祭、空の曇り寒げなるに、雪すこしうち散りて、挿頭の花、青摺などにかかりたる、えもいはずをかし。太刀の鞆のきはやかに黒うまだらにてひろう見えたるに、半臂の緒のえうしたるやうにかかりたる、地摺の袴のなかより氷かとおどろくばかりなる打目など、すべていとめでたし。いまずこしおほくわたらせまほしきに、使はかならずよき人ならず、受領などなるは目もとまらずにくげなるも、藤の花にかくれたるほどはをかし。なほ過ぎぬるかたを見送るに、陪從のしなおくれたる、柳に挿頭の山吹わりなく見ゆれど、泥障いと高ううち鳴らして、「賀茂の社のゆふだすき」とうたひたるは、いとをかし。

行幸にならぶものはなにかはあらむ。御輿にたてまつるを見たてまつるには、明暮御前にさぶらひつかうまつるともおぼえず、神神しくいつくし

戀一「ちはやぶる賀茂の社の姫小松萬代ふとも色は變らじ」(同二十、大歌所御歌冬の賀茂の祭の歌 藤原敏行朝臣)この場合後者でなければならぬが原作者の筆の誤か、それとも「ゆふだすき」は後人の補入か。底本系統諸本「神の…」

(二)「見たてまつる」は底本「たてまつる」
(三)行幸の時、御興の御綱をとる大令人の助(禁中に宿直し、雑事に使はれる)を「御綱の助」といふ。中・少將は供奉の近衛の中將少將である。
(四)行幸の時には中・少將とともに弓箭を帶して供奉する。

(五)従来「ものありさま」と校訂されて来たが、底本とその同類本「もとのゝありさま」第二類本「もとのありさま」とある。「も 殿のありさま」と考へてみた。「とのありさま」は「外のありさま」であらうか。

(六)端午に菖蒲の薬玉を親王・公卿に傳へる女藏人。

(七)このあたり未詳。この十二字底本の假名のまま示した。「ゑい」は綴「も」は裳であらうか。

ういみじう、つねはなにとも見えぬなにかさ、姫まうち君さへぞやむごとなくめづらしくおぼゆるや。御綱の助の中・少將、いとをかし。

近衛の大將、ものよりことにめでたし。近衛つかさこそなほいとをかしけれ。

五月こそ世に知らずなまめかしきものなりけれ。されどこの世に絶えにたることなめれば、いとくちをし。昔語に人のいふを聞き、思ひあはするに、げにいかなりけむ。ただその日は菖蒲うちふき、世のつねのありさまだにめでたきをも、殿のありさま、ところどころの御棧敷どもに菖蒲ふきわたり、よろづの人ども菖蒲鬘して、菖蒲の藏人かたちよきかぎり選り出だされて、薬玉賜はずれば、拜して腰につけなどしけむほど、いかなりけむ。ゑいのすいゑうつりよきもなどうかけむこそをかしうもおぼゆれ。還らせたまふ御興のさきに、獅子・狛犬など舞ひ、あはれさることのあらむ、ほととぎすうち鳴き、ころのほどさへ似るものなかりけむかし。行幸はめでたきものの、君達車などの好ましく乗りこぼれて、上下走らせなどするがなきぞくちをしき。さやうなる車のおしわけて立ちなどする

(一) 賀茂祭の翌日に齋王(齋院)が上の社から紫野の齋院の御所に還られるのをいふ。勅使をはじめ舞人陪従などが供奉する。その前日(祭の當日)は下賀茂から賀茂川堤を上賀茂へ行つたのである。

(二) いつものどうかして聞きたいものだと、夜も寝ないで起きてゐて、その鳴き聲を苦心して待つ、あのほととぎすの聲の意。「鳥は」の段二二八頁参照。

(三) 鶯が老いぼれた聲で、ほととぎすの鳴聲に似せようと、けなげにも聲を添へたのは。底本「うくひの」。

(四) 緋紅色の衣。桃色に染めた布の狩衣で、公私の奴婢・仕丁などの服装。三二四頁参照。

(五) 「どうですか、いよいよお通りですか」といふと、「まだいつのことかわかりませんよ」などと答へて。

(六) まだまだ後のことのやうにいつてゐたが、間もなくお還りになる。

こそ心ときめきはすれ。

祭のかへさ、いとをかし。昨日はよろづのことうるはしくて、一條の大路のひろう清げなるに、日の影も暑く、車にさし入りたるもまばゆければ、扇してかくし、居なほり、ひさしく待つも苦しく、汗などもあえしを、今日はいとくいとそぎ出でて、雲林院、知足院などのもとに立てる車ども、葵髪どももうちなびきて見ゆる。日は出でたれども、空はなほうち曇りたるに、いみじういかで聞かむと目をさまし起きぬて待たるほととぎすのあまたさへあるにやと鳴きひびかすはいみじうめでたしと思ふに、鶯の老いたる聲してかれに似せむと、ををしよううち添へたるこそ、にくけれどまたをかしけれ。

いつしかと待つに、御社のかたより赤衣うち着たる者どもなどのつれだちて来るを、「いかにぞ、ことなりぬや」といへば、「まだ無期」などいらへ、御輿など持て歸る。かれにたてまつりておはしますらむもめでたく、け高く、いかでさる下衆などの近くさぶらふにかとぞおそろしき。

はるかげにいひつれど、ほどなく還らせたまふ。扇よりはじめ、青朽葉

(二四)載人所の雑色が。三二九頁参照。
(二五)(思はれて)似てゐて、ほととぎすもまちがへてその蔭にかくれさうに、見えるのである。

(二六)大衆で客を饗應する時の相伴人（ちやうじん）をいふ。垣下は庭上であるから、元來地下の者の座であるが、轉じて殿上でも相伴する。垣下（かきくだ）ともいふ。三二九頁参照。

(二七)さびしく、しづかに。

(二八)齋王の行列御通過直後は、あわてることであらう、われもわれもと。

(二九)早く歸らうと急ぐのを、「まあさう急がないで」と扇をさし出してとめるが。

(三〇)しかたがないので、すこし廣いところで自分の車を強ひて止めて立たせたが、召使の者どもはほかの車がどんどん歸つてゆくを見て、じれつたく腹立たしいことに思つてゐるにちがひないが。

(三一)に」とめの例。七三・一四・三六頁参照)それにつけても、つきに來る車どもを見てゐるのはおもしろいものである。

(三二)普通の時よりも興趣深いが。

(三三)「風吹けば峯にわかるる白雲の絶えてつれなき君が心か」(古今集十二戀二、忠岑)「焦點は勿論「絶えてつれなき…」に於る。

(三四)なほも興が盡きずおもしろいので。

どものいとをかしよう見ゆるに、所の衆（ところしゅう）の、青色（あおいろ）に白襲（しらぎさね）をけしきばかり引きかけたるは、卯の花（うのはな）の垣根（かきね）近うおぼえて、ほととぎすもかげにかくれぬべくぞ見ゆるかし。

昨日は車一つにあまた乗りて、二藍（ふたあゐ）のおなじ指貫（さしぬき）、あるは狩衣（かりぎぬ）など亂れて、簾（すだれ）解きおろし、ものぐるほしきまで見えし君達（きみたち）の、齋院（さいいん）の垣下（かきくだ）にとて、日の装束（さうぶく）うるはしうして、今日は一人（ひとり）づつさうさうしく乗りたる後に、をかしげなる殿上（てんじやう）乗せたるもをかし。

わたり渠（は）てぬる、すなはちはこちもまどふらむ、われもわれもとあやふくおそろしきまで前に（まへ）立たむといそぐを、清（きよ）「かくないそぎそ」と扇をさし出でて制（せい）するに、聞きも入れねば、わりなきに、すこしひろきところにて強（し）ひてとどめさせて立てる、心もとなくしとぞ思ひたるべきに。ひかへたる車どもを見やりたるこそをかしけれ。男車（おとこぐるま）のたれとも知らぬが後に引きつづきて來るも、ただなるよりはをかしきに、引き別（わか）れるるところにて、「峯（みね）にわかるる」といひたるもをかし。なほあかずをかしければ、齋院（さいいん）の鳥居（とりゐ）のもとまで行き見て見るをりもあり。

(三四) 卯の花の木をいけ垣にした垣根が、とてもあらあらしくぎようぎようしげで。

(三五) 葵かづらなどのしほれて見苦しいのに對して風雅に見える。

(三六) 案内さう狭いとほれないやうな道でもなかつたのは、まことにおもしろい。

【三九】(一) 上はなんでもなく(水もなにもないやうに)草がおひ茂つてゐるのを。

「蘆根はふ泥はうへこそつれなけれ下はえならず思ふ心を」(拾遺集十四戀四)によつたのかといふ。(岩崎美隆説)

(二) まつすぐ一直線に進んで行くこと。

(三) 下はなんともいへない美しい水が、さう深くはないがたまつてゐて、車そひの男や牛などが歩くと、とばしりをあげたのは、ほんとにすばらしい。

(四) いそいでつかまへて折らうとする、すつと通り過ぎてはづれたのは、まことに残念である。

内侍の車などのいとさわがしければ、異方の道より歸れば、まことの山里めきてあはれなるに、卯つ木垣根といふものの、いとあらあらしくおどろおどろしげに、さし出でたる枝どもなどおほかるに、花はまだよくも開けはてず、つぼみたるがちに見ゆるを折らせて、車のこなたかなたにさしたるも、かづらなどのしほみたるがくちをしきに、をかしようおぼゆ。いとせばう、えもとほるまじう見ゆる行く先を、近う行きもて行けば、さしもあらざりけるこそをかしかれ。

二百九

五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もいと青く見えわたりたるに、上はつれなくて草生ひ茂りたるを、ながながとたたざまに行けば、下はえならざりける水の深くはあらねど、人などのあゆむに走りあがりたる、いとをかし。

左右にある垣にあるものの枝などの車の屋形などにさし入るを、いそぎとらへて折らむとするほどに、ふと過ぎてはづれたるこそ、いとくちを

(五)押しつぶされたのが、車輪の廻轉するにつれてまひあがつて、ついそばまでやつて來るのもおもしろい。「うちかかへたるも」は能本「かへたるもかのかへたるも」前本「かへたるも」とあり、「かへへ」の本文によると、句をふくみ持つ義で、近くかをつて來たの意となる。

【三草】(一)人が夕涼をするといつた時刻で物のありさまもはつきりわからない日暮れ時に、さき拂ひをつれた身分のある男車は勿論のこと、普通の人、人なみの身分の人でも、女でもよいの意をもつのであらう)

(二)なんともいへず嗅いだこともない香だが、すばらしいと思ふのも變に氣狂じみてゐる。

(三)松火。たいまつ。

(四)ふくみにはつて來るのもいい。

【二百十】(一)きもちとそろへとのへるやうに切つて。

(二)擠ひて擠つて、かついでの意か。これは端午の節前日の光景である。「青き草」は、菖蒲であらうか。

しけれ。

蓬の、車に押しひしがれたりけるが、輪の廻りたるに、近ううちかかひたるをかし。

二百十

いみじう暑きころ、夕涼といふほど、ものさまざまもおぼめかしきに、男車の前驅追ふはいふべきにもあらず、ただの人も後の簾あげて二人も、一人も、乗りて走らせ行くこそ涼しげなれ。まして、琵琶掻い調べ、笛の音など聞えたるは、過ぎて往ぬるもくちをし。さやうなるに、牛の鞅の香の、なほあやしう嗅ぎ知らぬものなれど、をかしきこそものぐるほしけれ。いと暗う、闇なるに、前にともしたる松の煙の香の、車の内にかかへたるをかし。

二百十一

五月四日の夕つかた、青き草おほくいとうるはしく切りて、左右にな

(三) 桃色の狩衣で身分の低い召使が着る。三二〇頁参照。

【百十一】(一) へぎ製の角盆またはすみきり盆で、食器を載せるに用ゐるもの。ここは田植笠の形容。

(二) 何をしてゐるのであらうか。おもしろいなと思つてゐるうちに。

(三) 軽蔑して(下品なものとして)。

(四) 俗語、田植歌であらう。「おれ」は「おのれ」で元來自稱の代名詞。ここは相手(ほととぎす)を卑しめて呼んだものであらうか。「おれ鳴きて」は「お前が鳴いて」の意。「かやつ」は「彼奴」で元來他稱の代名詞。ほととぎすはその鳴聲から「しでの田長」と呼ばれ、和漢ともに農事を勸奨するものといはれてゐる。(武藤元信氏説、古今集詳諸・成都記・格物論などに見えるといふ)

(五) 「ほととぎすいたくな鳴きそ汝が聲をさつきの玉にあへぬくまで」(萬葉集八藤原夫人、古今六帖六)を指すのであらう。なほ萬葉集八に、「ほととぎすい

たくな鳴きそ獨りゐて寝の寝らえぬに聞けば苦しも」(大伴坂上郎女、古今六帖五・拾遺集二 夏)といふのがあつた、ここは前者をさすのであらう。藤原夫人は鎌足のむすめ、天武天皇の夫人である。

(六) 一六五頁、一二七・八頁参照。

ひて、赤衣着たる男の行くこそをかしけれ。

二百十二

賀茂へまゐる道に、田植うとて女の新らしき折敷のやうなるものを笠に着て、いとおほう立ちて歌をうたふ。折れ伏すやうに、またなにごとすると見えでうしろざまに行く。いかなるにかあらむ。をかしと見ゆるほどに、ほととぎすをいとなめううたふを聞くにぞ心憂き。「ほととぎす、おれ、かやつよ。おれ鳴きてこそ、われは田植うれ」とうたふを聞くも、いかなる人か「いたくな鳴きそ」とはいひけむ。仲忠が童生ひいひおとす人と、ほととぎす、驚におおるといふ人こそいとつらうにくけれ。

二百十三

八月つごもり、太秦に詣つとて見れば、穗に出でたる田を人いとおほく見さわくは、稻刈るなりけり。「早苗取りしかいつの間に」、まことにさいつごろ賀茂へ詣つとて見しが、あはれにもなりにけるかな。これは男ど

【三十三】(一)京都市右京區大秦蜂岡の廣隆寺。秦はらの河勝はらの建立たてで蜂岡寺ともいふ。

(二)「昨日こそ早苗取りしかいつの間に稲葉いなばをよぎて秋風の吹く」(古今集四秋上)

(三)さきごろ賀茂へおまゐりしようとした時に見た稲の苗、がまあこんなに成長して刈り取るころとなつたことだ。

(四)一度刈つてみたいと思はれることである。どうしてあのやうにするのであらうか、刈りとつた穂を地面にならべてみるのもおもしろい。

(五)田の番人の小屋なども風流である。

【三十四】(一)もうすぐその場で寝こんでしまつた。

(二)ねてゐた人たちの衣の上に白く照りうつりなどしてゐたのは。

(三)自分は歌ができなまいがといふ氣持がある。

【三十五】(一)京都市東山區にある清水寺。法相宗兼眞言宗。延暦廿四年坂上田村麻呂建立、始祖は延鏡。本尊は十一面千手千

眼觀世音、山號を音羽山といふ。當時も貴紳の參詣參籠がきはめて盛であつた。

(二)坂の下。坂の口。いま清水坂、産寧坂などがある。

もの、いと赤きあか稻いねの、本もとぞ青あおきを取りて刈かる。なににかあらむして本もとを切るさまぞ、やすげに、せまほしげに見ゆるや。いかでさすらむ、穂ほをうち敷しきて竝なみをるもをかし。庵いほのさまなど。

二百十四

九月二十日あまりのほど、初は瀬せに詣まうでて、いとほかなき家いへに泊とまりたりしに、いと苦くるしくて、た一だ寝かに寝い入りぬ。

夜しやふけて、月の、窓まどよりもりたりしに、人ひとの臥ふしたりしどもが衣きぬの上に白しろうてうつりなどしたりしこそ、いみじうあはれとおぼえしか。さやうなるをりぞ人ひと、歌うたよむかし。

二百十五

清水きよみづなどにまゐりて坂さかもとのぼるほどに、柴しばたく香かのいみじうあはれなるこそをかしけれ。

【二百六】(一)變に姿もかはつてゐるのを、折つて来て、何かに入れておいたのをあけたところ、その當時のほひが残つてふくみにほつたのは、とてもいい。

【二百七】(一)着物に十分たきしめてある薫物の、昨日も一昨日も、いや今日もうっかりしてゐてそのまま忘れてゐたのを、ばつとひろげた時に。
(二)いまたきしめた香よりも。

【二百八】(一)二百十八段で底本の中巻がをはり、この段から下巻になる。大きい方がよいものの意。

(二)もと鷹の食料を入れる器。後には、人の食べ物などを入れて携行するのにも用ゐた。

(三)體格がりつばで大がらであると、威嚴がある。

(四)女性的である。

(五)あまり大き過ぎて。

【二百九】(一)短くてすませるものならすま

二百十六

五月の菖蒲さきぐさの、秋冬す過ぐるまでであるが、いみじう白み枯かれてあやしきを、引き折をりあけたるに、そのをりの香かの残りてかかへたる、いみじうをかし。

二百十七

一 よくたきしめたる薫物たきものの、昨日、一昨日を、今日けふなどは忘れたるに、引きあけたるに、煙けぶりの残りたるは、たゞいまの香かよりもめでたし。

二百十八

月のいと明あかきに、川を渡れば、牛のあゆむままに、水晶すゐさうなどの割われたるやうに水の散ちりたるこそをかしけれ。

二百十九

一 大きおほにてよきもの 家いへ。餌袋えぶくろ。法師ほうし。菓子くだもの。牛うし。松の木。硯いの墨。

せたいもの。短くあつてほしいもの。
(二)いそぎのものを縫ふ時の糸。長いのは邪魔になる。
(三)長いのは貴くて、下衆女には相應しない。短いのが立ち働く下衆には便利である。

(四)「話」をいふとの説もあるが、しばらく「舌つきにてあいだれたるを、きらへるなるべし」(春曙抄)にしたがふ。すなはち、あまえて聲を引くのをきらつたのである。

(五)低いほど近くが明かるい。

【百二十一】(一)人の家にあつていかにもふさはしいもの。

(二)「廊の折れ曲り行くなり」(春曙抄)直角に曲つた廊をいふ。(金子元臣氏説)

(三)上臈に仕へる下女。

(四)貴人を護衛する武士の詰所。

(五)懸盤(一)三頁参照)に次ぐ中くらゐの大きな食臺。

(六)未詳。「おはうき」という本文もある。

(七)底本など「ついでちさうし」

(八)書き板で塗り板(黒板)をいふとの説もあるが、「かき」は「掻き」(切る)の義で、紙を切つたりする板をいふ。(關根正直氏説)つまり裁縫に用ゐるたち板のちひさなもの。

(九)御厨子棚のことだといふ。

(一〇)酒などをいれる長柄の器。

男の目のはそきは、女びたり。また、鏡のやうならむもおそろし。火桶。酸漿。山吹の花。櫻の花びら。

二百二十

短くてありぬべきもの とみのもの縫ふ糸。下衆女の髪。人のむすめの聲。燈臺。

二百二十一

一人の家につきづきしきもの 脇折りたる廊。圓座。三尺の几帳。大きな童女。よきはしたものの。侍の曹司。折敷。懸盤。中の盤。おはらき。衝立障子。かき板。装束。よくしたる餌袋。傘。棚厨子。提子。銚子。

二百二十一

ものへ行く道に、消げなる男のほそやかなるが、立文持ちていそぎ行く

【百十五】(一)どこへゆくのであらうかと。
 (二)前革(向革)がつややかなのであらうか。

(三)従来は埴土はじつちとして粘土・へな土と解されてゐるが、これは屐子の齒に土がたくさん附着してゐるさまである。

(四)前を歩いてゆく者呼び入れた時に無愛想で、返事もしないで行く者は、そんな者をつかつてゐる人の人がらもよくわかる。

【百十六】(一)見すばらしい貧弱な車に乗り、お粗末な服装をして見物する人は、まことよくない。「もどかし」はとがめたい氣持の義で、にくい、氣にくはぬ、おもしろくない意。

(二)それでもありがたいお説經を聴聞に行く時などは、それでよい。それは滅罪のためなんだから。「うしなふ」は底本「しなふ」。

(三)それでもやはり、あまりひどいありさまでは見苦しいのに。

(四)そんな姿ではむしろ見ないであつてほしい氣持である。

(五)新調して。
 (六)さう卑下しなければならぬほどではあるまいと自信を持つて出かけたところが、自分の以上にすぐれた車などを。

こそ、いづちならむと見ゆれ。

また、清げなる童わらわなどの、袖あきめどものいとあざやかなるにはあらで、なえばみたるに、屐子のつややかなるが、齒はに土おほう附きたるをはきて、白き紙かみに大きに包みたるもの、もしは箱の蓋ふたに冊子さうしどもなど入れて持て行くこそ、いみじう呼びよせて見まほしけれ。

門近かどぢかなるところの前まへわたりを呼び入るるに、愛敬あいぎやうなく、いらへもせで行く者は、使つかふらむ人こそおしはからるれ。

二百二十三

よろづのことよりも、わびしげなる車くるまに裝束さうそくわるくてもの見る人、いともどかし。説經せきけいなどは、いとよし。罪つみうしなふことなれば、それだになほあながちなるさまにては見苦みくるしきに、まして祭まつりなどは見でありぬべし。下した簾すだれなくて白しろき單衣ひとへの袖ひもとなどうちたれてあめりかし。ただその日の料れうと思ひて、車くるまの簾すだれもしたてて、いとくちをしょうはあらじと出いでたるに、まさる車くるまなど見つけては、なにしにとおぼゆるものを、まいていかばかりなる心に

- (七)今日はなにしに來たのかと情なく感
 じるものを、ましてはじめから貧弱な姿
 で出かけて見物するなんてどうした氣持
 なのであらうか。(八)待ちくたぶれて、
 車中ですわつたり立ちあがつたりして、
 (九)朝廷または公卿の饗宴の相伴をする
 人。三二頁参照。「所の衆」は藏人所に
 屬して雜事を勤めた者。五位・六位の侍
 の中から選んだ。三三頁参照。
 (一〇)車をつらねて齋院の方から。
 (一一)いよいよ渡御になつたよと。
 (一二)藏人所の御前驅の人々に。
 (一三)ほしいひ(乾飯)を水にひたしたも
 の。冬は湯づけにする。「よき人」も食
 べる。下衆にかぎるものではない。
 (一四)物見のところの階段のもとに前驅の
 者が馬を引きよせると、前驅中にゐる世
 に評判の高い良家の子息などに對して
 は、その家の雑色(下衆男)などが下りて。
 (一五)ながえを全部一齊におろして、お通
 りすぎになると、あわててあげるのもお
 もしろい。能本「すだれがあるかきりと
 りおろし」(二〇)「どうして立ててはいけ
 ないのか」といつて無理に立てるので、
 供の者は困つてその車の主人公に申し入
 れなどするもおもしろい。
 (二七)從者の乗る車。後車。
 (二八)馬からとんどんおりて。

てさて見るらむ。

よきところに立てむといそがせば、とく出でて待つほど、居入り、立ち
 上りなど、暑く苦しきに困ずるほどに、齋院の垣下にまゐりける殿上人・
 所の衆・辨・少納言など、七つ八つと、引きつづけて院のかたより走らせ
 て來るこそ、ことなりにけりとおどろかれて、うれしけれ。

物見のところの前に立てて見るも、いとをかし。殿上人ものいひにおこ
 せなどし、所の御前どもに水飯食はすとて、階のもとに、馬引きよする
 に、おぼえある人の子どもなどは、雑色など下りて馬の口取りなどしてを
 かし。さらぬ者の見も入れられぬなどぞいとほしげなる。

御輿のわたらせたまへば、轅どもあるかぎりうちおろして、過ぎさせた
 まひぬれば、まどひあぐるもをかし。その前に立つる車はいみじう制する
 を、「などで立つまじき」とて強ひて立つれば、いひわづらひて、消息な
 どするこそをかしけれ。ところもなく立ちかさなりたるに、よきところの
 御車、副車引きつづきておほく來るを、いづこに立たむとすらむと見るほ
 どに、御前どもただ下りに下りて、立てる車どもをただ除けに除けさせ

(一) 能本には「おひのけられたるえせ車」とある。「牛かけて」は牛を車につけて。

(二) 空いてあるところにゆるゆると動かして行くのはまことにつらさうである。

(三) きらびやかですばらしい車などをそんなにひどくおしのけたりはしない。

(四) 底本「いとぎとけなれ」と

【百二十四】(一) 泊るべきでない不都合な人が泊つて。

(二) わたくし(清少納言)のこと(評判)なのであつた。

(三) その泊つたといふ問題の人は、殿上もできない地下の身分の低い者ではあつても、非難される點はなく、また人からりつばな者だと認められるほど問題になる人でもないのに。

(四) この返事をすぐにまゐらすやうに。

(五) 雨傘。

(六) 手だけで笠をささせて、その下に。底本「笠」がない。

(七) 能本「みかさ山やまのはあけし朝より」。これはそのなかに「あやしくもわれぬれぎぬを着たるかなみかさの山を人に借られて」(拾遺集十八雜賀)を踏まへてのおほせと考へられるから、笠は繪に譲り、「みかさ山」のない本文の方が賜はつた原文であらう。「明けし朝」は曉

て、副車^{ひだまり}まで立てつづけさせつるこそいとめでたけれ。追ひさげさせつる車^{ひだまり}どもの、牛^{うし}かけて、ところあるかたにゆるがし行くこそいとわびしげなれ。きらきらしくよきなどをばいとさしもおしひしがず。いと清^{きよ}げなれど、またひなび、あやしき下衆^{げす}など絶えず呼びよせ、出だし据^す多^たなどしたるもあるぞかし。

二百二十四

人「ほそ殿^{どの}に便^{びん}なき人なむ 曉^{あかつき}に笠^{かさ}さして出でける」といひ出でたるを、よく聞^きけば、わがうへなりけり。地下^{ちげ}などいひても、目^めやすく人にゆるさるばかりの人にもあらざるを、あやしのことやと思^{おも}ふほどに、うへより御文^{ごぶん}持^もて來^きて、宮^{みや}「返^{かへ}りごとたたいま」とおほせられたり。なにごとにかとて見^みれば、大笠^{おほかさ}の繪^{かた}をかきて、人は見^みえず、ただ手^てのかぎり笠をとらへさせて、下^{しも}に、

宮^{みや}「山^せの端^は明^あけし朝^{あした}より」

と書かせたまへり。なほはかなきことにても、ただめでたくのみおぼえさ

のことをほめかされたのである。

(八)中宮様はどんなつまらないことも、すぐすばらしいとばかりお思ひあそばすから。(九)はづかしいまいやなことは、どうかしてお目にかけたくない(お耳に入れたくない)と思ふのに、こんなとんでもないうわさが出て来て、つらいが、この仰せ言がうれしくて。

(一〇)別の紙に。

(一一)能本「雨ならぬ名のふりにけるかな」とあるが、これも雨は繪に譲つて略したこの三卷本文が原態であらう。

(一二)(七)にあげた拾遺集の歌を踏まへてゐる。「ぬれぎぬ」は無實の罪を齎ること。「裏なき」(實のなき)ゆゑといふ。

【百二十五】(一)定子皇后は長保元年八月九日職の御曹司から大進生昌の三條の宅に移られた。御懷妊のためである。ここは長保二年五月のことである。

(二)禁中の宮殿をふき、また薬玉などに用ゐる菖蒲を入れておく興。

(三)脩子内親王。當時御年五歳。

(四)敦康親王。當時御年二歳。

(五)青麥のมายしを煎り、臼でひいて粉とし、絲のやうにひねつて作つた菓子。

(六)「ませ越しに麥はむ駒のはつはつに及ばぬ戀もわれはするかな」(古今六帖二、うま)により、下の句をにははせ、「麥」「ませ」(馬塚・埒の義で、塞く意

せたまふに、はづかしく心づきなきことはいかでか御覽ぜられじと思ふに、かかるそら言の出で来る、苦しけれど、をかしくて、こと紙に、雨をいみじう降らせて、下に、

清「ならぬ名の立ちにけるかな

さてや、濡れ衣にはなり侍らむ」

と啓したれば、右近の内侍などにかたせたまひて、笑はせたまひけり。

二百二十五

三條の宮におはしますころ、五日の菖蒲の輿など持てまゐり、薬玉まゐらせなごす。

若き人人、御匣殿など、薬玉して姫宮・若宮に着けたてまつらせたま

ふ。いとをかしき薬玉どもほかよりまゐらせたるに、青刺といふものを持て来たるを、青き薄様を艶なる硯の蓋に敷きて、清「これ、笹越しにさぶらふ」とてまゐらせされたれば、

宮みな人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける

をもつ)により、到来したものと、の意を示す以外、皇后と自分とをさへぎるものがあることを暗示してゐる。なほ、右の古今六帖の歌は「うませ越しに菱はむ駒の響らゆれど(やかましくいはれても)なほし戀ひしくしのびかねつも」(萬葉集十二)を原歌としてゐる。

(七)美麗なものをとめて、準備してゐる時にも、榮耀のために奔走する意をふくめてゐる。

【百五十六】(一)傳記未詳。

(二)餞別として。

(三)しかるべき尊いところを描いて。
 (四)明かるく輝くとの名をもつ日向の國に着いたなら、東の方からさしけるぼる日に向つてもせめて思ひ出してくれるやうに。そなたのゐない都では、この繪のやうに空も心も晴れないままに、わたくしが長雨に思ひに沈んでながめてゐることをね。「あかねさす」は日・晝・照る・紫・君などにかかると枕詞。

(五)感慨無量であつた。

【百五十七】(一)草がなで。二九六頁参照。

(二)山に近い清水寺でうつ夕方の鐘の音ごとに、自分がどれほどそなたを戀ひ思つてゐるか、そのおほい鐘の音の數にもよそへてわかるであらうに。

(三)失禮にあたらぬ程度のももの。

この紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる、いとめでたし。

二百二十六

御乳母の大輔の命婦、日向へ下るに、賜はする扇どものなかに、片つかたは日いとうららかにさしたる田舎の館などおほくして、いま片つかたは京のさるべきところにて、雨いみじう降りたるに、

あかねさす日に向かひても思ひ出でよ都は晴れぬながめすらむと
 と御手にて書かせたまへる、いみじうあはれなり。さる君を見おきたてまつりてこそえ行くまじけれ。

二百二十七

清水にこもりたりしに、わざと御使して賜はせたりし、唐の紙の赤みたるに、草にて、

宮「山近き入杵の鐘の聲ごとに戀ふる心の數は知るらむ
 ものを、こよなの長居や」とぞ書かせたまへる。紙などのなめげならぬ

(四)「旅」と「度」とをかけてゐる。
【百二十八】(一)驛。道中筋の馬つぎの宿場である。

(二)「君ばかりおほゆるものはなし原のうまや出て来むたぐひなきかな」(古今六帖拾遺・夫木抄雜十三) 滋賀縣栗太郡。

(三)信濃であらうか。

(四)未詳。能本「山のむまや」

【百二十九】(一)奈良縣山邊郡、石上神宮。

(二)神戸市。

(三)御旅所のことであらう。「旅の宮」「御旅の宮社」ともいふ。

(四)宮城縣宮城郡泉節神社か。

(五)奈良縣磯城郡の三輪神社をいつたのであらう。「わが庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」(古今集十八雜下)

(六)靜岡縣小笠郡日坂町にある。

(七)「ねぎ言をさのみ聞きけむ社こそはては歎きの森とならめ」(古今集十九) 辨語、「ねぎ言」は「ねがひごと」のことのままの「明神」はよろづ願望成就ではなはだ心強いが、なにごとも「ことのまま」にお聞きとどけになると、はてには歎きの森となるといふ古歌のやうにいはいはれなさるのではないかと心配されるが、まことにお氣の毒である。

(八)大阪府泉南郡。貫之の逸話は貫之集

も、取り忘れたるたびにて、紫なる蓮の花びらに書きてまゐらす。

二百二十八

むまやは 梨原。望月の驛。やまは驛は、あはれなりしことを聞きおきたりしに、またもあはれなることのありしかば、なほとりあつめてあはれなり。

二百二十九

社は 布留の社。生田の社。旅の御社。はなふちの社。杉の御社はしりしやあらむとをかし。ことのままの明神、いとたのもし。「さのみ聞きけむ」とやいはれたまはむと思ふぞいとほしき。

蟻通の明神、貫之が馬のわづらひけるに、この明神の病ませたまふとて、歌よみてたてまつりけむ、いとをかし。この蟻通とつけけるは、まことにやありけむ、むかしおはしましける帝の、ただ若き人のみおほしめして、四十になりぬるをば、うしなはせたまひければ、人の國の遠きに行

に見える。
(九)以下の説話は、雜寶藏經第一に典據があり、法苑珠林卷十九・今昔物語卷五・打開集にも見える。なほ四十歳は初老。

(一〇)隠しすゑて。

(一一)行つては行つては。幾度も行つての意。「つつ」は反復繼續の意をあらはす助詞。

(一二)朝廷へも。

(一三)どうしてまあ、家にゐて外に全然出ないやうな人などは知らないことにしていらいやつたらしいのに。いやな世の中であつたものだ。

(一四)りつばな人物との評判が高く、學問の造詣も深くて、時めく人として帝の御寵愛を得てゐたのであつた。

(一五)どうかしてだまして。

(一六)能本「をくり」とある。「おそり」のままで「恐り」としか考へられないので、この場合妥當でない。

(一七)まるく、きれいに削つた木の。

(一八)底本「たてまつれたるに」

きかくれなどして、さらに都のうちにさる者のなかりけるに、中將なりける人の、いみじうときの人にて、心などもかしこかりけるが、七十近き親二人を持たるに、かう四十をだに制することにまいておそろしと怖ぢさわぐに、いみじく孝なる人にて、遠きところに住ませじ。一口に一度見ではえあるまじとて、みそかに家のうちの地を掘りて、そのうちに屋を立てて、こめす多て、行きつつ見る。人にも、おほやけにも、失せかくれにたるよしを知らせてあり。などか家に入り居たらむ人をば知らでもおほせかし。うたてありける世にこそ。この親は上達部などにはあらぬにやありけむ、中將などを子にて持たりけるは。心いとかしこう、よろづのこと知りたりければ、この中將も若けれど、いとときこえあり、いたりかしこくして、とさの人に おぼすなりけり。

唐土の帝、この國の帝をいかではかりてこの國討ち取らむとて、つねに試みごとをし、あらがひごとをしておそりたまひけるに、つやつやとまるにうつくしげに削りたる木の二尺ばかりあるを、「これが本末いづかた」と問ひにたてまつりたるに、すべて知るべきやうなければ、帝おぼしわづら

(一) 立てたままの意と説くのが普通であるが、それでは「横さまに」が説明できない。「立てたまま水平に」では變である。ここは人が立つたままの意であらう。山岸徳平氏は、源氏物語・ゆふがほなどの例により、ついちよつとの意と説かれる。三八三頁参照。

(二) 方向をかへて、先になつて流れる方を。

(三) ほんたうにそのとほりであつた。

(三) 小枝、笞の類。

(三) 底本とその同類本以外は「はたらかさむ」とあるが、改めなかつた。雜寶藏經に「とどまりて動かざるものはまさに雌と知るべし」とあるからである。

(三) さうしたところが、その父の言のやうに。

(三) 唐土では、だれでもしますことです。

(三) 「どんなにすばらしい名人も役に立たない」と、おほくの。

(三) いふので、中將はまた親のもとへ行つて、「かうかうです」といふと。

ひたるに、いとほしくて、親のもとに行きて、中將「かうかうのことなむある」といへば、父「ただ、早からむ川に立ちながら横さまに投げ入れて、返りて流れむかたを末と記してつかはせ」と教ふ。まゐりて、わが知りかほに、中將「さて試み侍らむ」とて、人と具して、投げ入れたるに、先に行かたにしろしをつけてつかはしたれば、まことにさなりけり。

また、一尺ばかりなる蛇の、ただおなじ長さなるを、「これはいづれか男女」とてたてまつれり。また、さらに人え見知らず。例の、中將來て問へば、父「二つを竝べて、尾のかたにほそきすばえをしてさしよせむに、尾はたらかざらむを女と知れ」といひける。やがてそれは内裏のうちにて、しけるに、まことに一つは動かさず、一つは動かしかれば、またさるしるしをつけてつかはしけり。

ほどひさしくて、七曲にわだかまりたる玉の、なかとほりて左右に口あきたるがちひさきをたてまつりて、「これに緒とほしてたまはらむ。この國にみなし侍ることなり」とてたてまつりたるに、「いみじからむものの上手不用なり」と、そこらの上達部・殿上人、世にありとある人いふに、

(二六)太い糸をつけて、向ふ側の口に蜜を添つて見よ。

(二七)もう一つの口に。

(二八)そのとほり申しあげて。

(二九)父のいつたとはりすぐ、むかふの口から出てしまつたといふことである。

(三〇)後には、さうしたところみごと、あちがひわざもなかつたといふことである。底本「のちに」。

(三一)どのやうな恩賞をし、またどのやうな官爵を賜はりたいと思ふか。

(三二)位。官位。

(三三)行方不明になつてをりますのを探したつねて、都に住ませることを。

(三四)その孝行な申將が、その中將の親がとみるのが通説であるが、ここの文勢上當然、その人「は中將を指すものと思はれる。樹根博士も中將説である。

(三五)蟻通の神があるとは世人は知らずにあるのであらうか。「ありとはし」は底本「ありとはし」。

(三六)この蟻通明神についての説話すべてをうけるのであらう。この文はすべて傳聞・回想の助動詞「けり」で終つてゐる。

(三七)(一)一條大宮の院。「小一條院」とある本文は誤。長保元年六月十六日一條院に遷御、同二年二月十一日定子皇后御入内。

(二)主上がいらつしやる御殿は。

また行きて、中將「かくなむ」といへば、父「大きな蟻を捕らへて、二つばかりが腰にほそき糸をつけて、またそれにいますこしふときをつけて、あなたの口に蜜を塗りて見よ」といひければ、さ申して、蜜の香を嗅ぎて、まことにいとくとくあなたの口より出でにけり。さて、その糸の貫かれたるをつかはしてける後になむ、「なほ日の本の國はかしこかりけり」とて、後にはさることもせざりける。

この中將をいみじき人におぼしめして、帝「なに業をし、いかなる官・位をか賜ふべき」とおほせられければ、中將「さらに官もかうぶりも賜はらじ。ただ老いたる父母のかくれ失せて侍る、たつねて、都に住ますることをゆるさせたまへ」と申しければ、「いみじうやすきこと」とてゆるされければ、よろづの人の親これを聞きてよろこぶこといみじかりけり。中將は上達部、大臣になさせたまひてなむありける。

さて、その人の神になりたるにやあらむ、その神の御もとにまうでたりける人に夜あらはれてのたまへりける、

七曲にまがれる玉の緒を貫きてありとほしとは知らずやあるらむ

(三)定子皇后はその北にある御殿に。

(四)皇后のまします御殿の西東は渡殿で、主上がこちらへわたらせたまふ時にも、皇后が清涼殿へ参上される時にも、おとほりになる道であつて、前は壺庭(中庭)になつてゐて、草木の植込があり、まがきがつくつてあつて、實にいい。

(五)参議藤原齊敏の子、小野宮實頼の孫。正暦三年より長徳二年まで兵部卿であつた。

(六)催馬樂の律の歌。「高砂の さいさこの 尾の上に立てる白玉椿 玉柳……」

(七)座本「みすもと」

(八)不滿なこと、不如意、不本意な事を「芹摘む」といつた。狭衣にも「かく芹

摘みし世の人にも……」と見え、その故事は綺語抄・袖中抄・童蒙抄などに説かれてゐる。「芹摘みし昔の人もわがごと

や心にものかなはざりけむ」(童蒙抄)

(九)尾張の守藤原興方の子で中納言懐忠の養子となつた藤原輔尹とみるのが通説。三好英二氏はこれを非とし、未詳とせられた。

(一〇)「無遠慮さま」「武骨さま」ほどの意。「あらは」は無遠慮をいふが、がさがさ

したあらあらしさをも含めてゐるのであらう。「こそ」は人名の下につけて呼ぶ敬稱。この句、前本に「あらはき」とな

とのたまへりけると、人の語りし。

二百三十一

一條の院をば新内裏とぞいふ。おはします殿は清涼殿にて、その北なる殿におはします。西東は渡殿にて、わたらせたまひ、まうのぼらせたまふ道にて、前は壺なれば、前栽植糸、笄結ひて、いとをかし。

二月二十日ばかりのうらうらとのどかに照りたるに、渡殿の西の廂にて、うへの御笛吹かせたまふ。高遠の兵部卿御笛の師にてもおしたまふを、御笛二つして高砂ををり返して吹かせたまへば、なほいみじうめでたしといふも世のつねなり。御笛のこともなど奏したまふ、いとめでたし。御簾のもとに集まり出でて、見たてまつるをりは、「芹摘みし」などおぼゆることこそなけれ。

すけただは木工の允にてぞ藏人にはなりたる。いみじくあらあらしくうたてあれば、殿上人、女房「あらはこそ」とつけたるを、歌につくりて、「さうなしの主、尾張人の種にぞありける」とうたふは、尾張の兼時がむ

つてゐる。「き」は「君」の意。

(一)「左右なし」または「雙なし」といはれるが、後者であらう。ならぶ者がないの意。

(二)紫式部日記・續古事談にその名が見える。後者によると、安居兼時といひ、神樂の人長としてすぐれてゐた。

(三)清涼殿。

すめの腹なりけり。これを御笛に吹かせたまふを、添ひにさぶらひて、高遠「なほ高く吹かせおはしませ。え聞きさぶらはじ」と申せば、主上「いかか。さりともしも、聞き知りなむ」とて、みそかにのみ吹かせたまふに、あなたよりわたりおはしまして、主上「かの者なかりけり。ただいまこそ吹かめ」とおほせられて吹かせたまふは、いみじうめでたし。

一二百三十一

【二百三十一】(一)生まれ變つて天人などになればまあかやうなことになるかと思はれるほど身分やふるまいに相違のはなはだしいもの。「かうや」は底本「かやうや」

(二)御乳母になると。

(三)極言すれば、着ない無作法な姿で。

(四)「よういはば」は、一九六頁参照。

(五)うつてかはつたその權勢は、とても筆舌につくし難い。

(六)賀茂の臨時の祭。十一月最後の酉の日。その臨時の祭の時には、藏人所の雑色が琴をかついで行列に加はる。

(七)藏人所の雑色以外からなつたのは。

身をかへて天人などはかうやあらむと見ゆるものは、ただの女房にてさぶらふ人の、御乳母になりたる。唐衣も着ず、裳をだにも、よういはば着ぬさまにて御前に添ひ伏し、御帳のうちを居どころにして、女房どもを呼び使ひ、局にものをいひやり、文を取りつがせなどしてあるさま、いひつくすべくもあらず。

雑色の藏人になりたる、めでたし。去年の十一月の臨時の祭に御琴持たりしは、人とも見えざりに、君達とつれ立ちてありくは、いづこなる人ぞとおぼゆれ。ほかよりなりたるなどは、いとさしもおぼえず。

【三百二十一】(一)石帯の痕が袍のうしろについてゐるのである。束帯の時には石帯をつけるが、衣冠、すなはち宿直姿では石帯をつけない。衣冠は、束帯(正装)の下襲を脱ぎ、表袴を指貫の袴にかへた略装。

(二)引き上げ、たぐつて着て。

(三)助詞「さへ」とも考へられるが、その説はとらない。

(四)紅色か、またははでで目のさめるやうな山吹色を見せせて。

(五)半履。脛巾。脚絆のやうなもの。

【三百二十二】(一)弘徽殿の西廂。やり戸は南北にある。ここは南の方か。それを朝早くおしあげたところが。

(二)清涼殿にあり、天皇御沐浴の御間。東西に切馬道がある。ここは東方であらうか。

(三)長廊下のやうな通路。

(四)朔平門。(内裏の北の御門)

(五)冠の後にたれた纒を前の方に引き廻して、寝起き顔を見せまいとするのである。

雪高う降りて、いまもなほ降るに、五位も四位も、色うるはしう若やかなるが、袍の色いときよらにて、革の帯のかたつきたるを宿直姿に引きはこへて、紫の指貫も雪に冴え映えて濃さまさりたるを着て、柏の紅ならずは、おどろおどろしき山吹を出だして、傘をさしたるに、風のいたう吹きて横さまに雪を吹きかくれば、すこし傾けてあゆみ來るに、深き沓半靴などはばきまで、雪のいと白うかかりたるこそをかしけれ。

二百三十二

一 ほそ殿の遺戸をいととうおしあげたれば、御湯殿に馬道より下りて來る殿上人、なえたる直衣・指貫の、いみじうほころびたれば、色色の衣どもこのぼれ出でたるをもし入れなどして、北の陣さまにあゆみ行くに、あきたる戸の前を過ぐとて、纒を引き越してかほにふたぎて往ぬるもをかし。

【三三三】(一)京都市上京區。

(二)奈良縣生駒郡。

(三)京都府乙訓郡。「この笹はいづこの笹ぞ舍人らが腰にさがれる鞆岡の笹」(催馬樂)

(四)「かたこひの岡」の誤寫かといふ。

「みちのくにありといふなるかたこひの岡をわが身にそふるころかな」(古今六帖二)

(五)京都市右京區嵯峨野。「手もふれで今日はよそにて歸りなむ人見の岡のまつ

のつらさよ」(住吉物語)

【三三三】(一)檜皮ぶきの屋根に降つたの

がいい。檜皮ぶきは、檜の皮でふいた屋

根。

(二)角が白く埋まり、瓦がまるく見えた

のは。「まるに」は從來の校訂本・註釋

書に「ましろに」とあるが、信すべき現

在各系統諸本はすべて「まるに」である

から、それにしたがつて解すべきであら

う。

(三)「時雨・霰は」は「時雨。霰は」と

も考へられる。「時雨や霰は板屋に降つた

のがよい」と見ないで、「時雨、いとをか

し」とし、霰は板ぶきの屋根に降るのが

よいの意と見るのである。

【三三三】(一)光がまだ残つて赤く見える

ところ。

二百三十四

岡はをが船岡ふねが片岡かたが鞆岡ともがは、笹ささの生おひたるがをかしきなり。かたらひの岡。人見ひとみの岡。

二百三十五

降るものは雪。霰あられはみぞれにくけれど、白き雪のまじりて降るをかし。雪は檜皮ひばぶき、いとめでたし。すこし消えがたになりたるほど。また、いとおほうも降らぬが、瓦かはらめの目ごとに入りて、黒こうまろに見えたる、いとをかし。時雨しぐれ・霰あられは板屋いたや。

霜も板屋。庭。

二百三十六

日は入日いりひ。入りはてぬる山の端はに、光ひなほとまりて赤う見ゆるに、薄うす

黄ばみたる雲のたなびきわたりたる、いとあはれなり。

二百三十七

月は 有明あきあけの東ひがしの山際やまはにほそくて出づるほど、いとあはれなり。

二百三十八

星は すばる。牽牛ひきほし。ゆふづつ。よばひ星、すこしをかし。尾おだになからましかば、まいて。

二百三十九

雲は 白き。紫。黒きもをかし。風吹くをりの雨雲あま。
明け離はなるほどの黒き雲の、やうやう消えて、しろうなり行くも、いとをかし。「朝あしたにさる色」とかや、ふみにも作りたなる。
月のいと明あかき面おもてに薄うすき雲、あはれなり。

【二百三十七】(一)有明の月が東の山際にほそい姿を見せて出づるころが。

【二百三十六】(一)昴と書く。中國の二十八宿の一つ。十内外の星が集まつて見えるもので、いまの牡牛座にある散開星團。

(二)牽牛星。いぬかひほし。いまのアルタイル。七夕せちやの傳説で有名である。

(三)宵の明星。金星。太白星。

(四)流星はちよつとおもしろい。もし尾さへなかつたら、もつと興趣深いであらう。

【二百三十九】(一)第一段に似てゐる。七一頁参照。

(二)出所未詳。從來「朝に去る色」として巫山の故事(宋玉の高唐賦)が引かれて來たが、「さる色」は「さる人・さる年」などの「さる」で、「某の・なんとかの」の體化の意と思はれる。

(三)漢詩にも作つてゐるやうである。「たなる」は「たるなる」の略約。「なる」は傳聞推定の助動詞「なり」の連體形。

【二百四十一】(一)ばちばちと火の粉が飛ぶのをいふ。

(二)僧侶の午前の食事の残飯をもちつて。「生飯」は「さんばん」の唐音で、衆生飯の義かといふ。食膳にむかふ時、飯粒を分けて鬼神に供へ、餓鬼に施し、それを食後に屋上などに投げて鳥などに食はせるのである。

(三)観音の縁日。

(四)田舎。地方。

(五)わが家へは類焼はしなかつたといふやうな場合。

【二百四十二】(一)無禮なほど、うちとけてゐるものしどけないものだらしないもの。

(二)下仕の女官。

(三)帯の玉石に彫刻した模様が唐繪になつてゐるが、その裏は装飾がしてない。

(四)俗人の評判を気にしないからであらうか。

【二百四十三】(一)ことばづかひのぶしつけなものである。

(二)巫祝の類をいふのであらう。「祭文」は祝詞である。「宮の部」は、「みやのめ」のまじり」で、不吉を退け幸福をもつめるため正月、十二月の初午の日に六柱の神を祭ることをいふ。

(三)相撲とり。諸國の相撲人を召し集めて、毎年七月(初秋)に相撲の節會があつた。地方の者が方言をつかふからである。

二百四十

さわがしきもの 走り火。板屋の上にて鳥の齋の生飯食ふ。十八日に、清水にこもりあひたる。

暗うなりて、まだ火もともさぬほどに、ほかより人の來あひたる。まいて遠きところの人の國などより、家の主ののぼりたる、いとさわがし。

近きほどに火出で來ぬといふ。されど、燃えはつかざりけり。

二百四十一

ないがしろなるもの 女官どもの髮上姿。唐繪の革の帯のうしろ。聖のふるまひ。

二百四十二

ことばなめげなるもの 宮の部の祭文讀む人。舟漕ぐ者ども。雷鳴の陣の舍人。相撲。

【百五】(一)ごさかしいもの。利口なもの。

(二)いまだきの幼児。

(三)底本「はらなとゝる女」とある。按摩按摩などする老女。「はらへなどする女」の本文は誤。

(四)その巫女に按摩・小兒科醫師をも兼ねたやうな老女が祓の具を請ひ受けて、お祈りに必要なものを作るさま。

(五)鋸などをいふのであらうか。または御幣をいふか。

(六)幣をかける竹。

(七)幣物などを作るかたはらは、つぎのやうな白慢話をする。

(八)某宮、某の殿の若君がとてもひどい御病氣でしたが、わたくしがぬぐひ取つたやうに御全快させ申しましたので。

(九)このわたくしを。

(一〇)御得意(御出入り)にさせていただいて居ります。

(一一)いやしい。

(一二)そんな者(しれたる者)にかぎつてごさかしくて、ほんたうに賢明な人を教へたりなどするものである。「それ」を第二類本など「そひ」に作る。それによれば「愚な夫が連れ添つてゐる」の意となる。

二百四十二

一 さかしきもの 今様の三歳兒。ちこの祈りし、腹などとする姫。ものの具
ども請ひ出でて、祈りものつくる、紙をあまたおし重ねていと鈍き刀して
切るさまは、一重だに斷つべくもあらぬに、さるものの具となりにつれ
ば、おのが口をさへ引きゆがめておし切り、目おほかるものどもしてかけ
竹うち割りなどして、いと神神しうしたてて、うちふるひ祈ることども、
いとさかし。かつは、姫^八にの宮・その殿の若君、いみじうおはせしを、
搔^かい拭^{ぬぐ}ひたるやうにやめたてまつりたりしかば、祿^{ろく}をおほく賜はりしこ
と。その人、かの人めしたりけれど、驗^{しるし}なかりければ、いまに姫^{おんな}をなむめ
す。御徳^{ごとく}をなむ見る」^三などかたり居るかほもあやし。
^げ下衆の家の女^{おんな}。しれたる者、それしもさかしうて、まことにさかしき
人を教へなどすかし。

二百四十四

【百四十四】(一)どんどん早く過ぎ去るもの。
 (二)春から夏へ、夏から秋へ……の氣持。
 【百四十五】(一)格別人の注意をひかないもの。たいして人に氣づかれずに過ぎてしまふもの。

(二)月ごとに三日以上十四日に及ぶ凶目。「是日最凶。百事勿用」(曆林問答)あまりおほいので馴れてしまふのである。
 【百四十六】(一)手紙の文句をぶしつけに書く人は。底本をはじめ諸本「ふみこと」とある。

(二)世の中を、相手を軽く、あまり見たとやうに書き流してあることばが。

(三)「といつてまた」たいしたこともない人のもとに、あまりかしこまつた文句で書いてゐるのも。

(四)無禮なことばづかひの手紙は、自分がもらつた場合はいふまでもなく、他人のところへ來た時までにくらしく感ずるでも、ふしつけなことばは、對談する場合などにいふのであらうかと聞くに堪へない。

(六)そんなぶしつけなことがばづかひをするのは、根が教養もないのであるから、笑ひぐさになつていかにもよい。

(七)妻が自分の夫(男主人)に對してぶしつけなことばづかひをするのは、(八)たとへば自分の使つてゐる召使女などが、自分の夫について。

ただ過ぎに過ぐるもの 帆かけたる舟。人の齡 春、夏、秋、冬。

二百四十五

ことに人に知られぬもの 凶會日。人の女親の老いにたる。

二百四十六

文のことばなめき人こそいとにくけれ。世をなめに書きながしたることばのにくきこそ。

さるまじき人のもとに、あまりかしこまりたるも、げにわるきことなり。されど、わが得たらむはことわり、人のもとなるさへにくくこそあれ。

おほかたさし向かひても、なめきは、などかくいふらむとかたはらいたし。まいて、よき人などをさ申す者はいみじうねたうさへあり。田舎びたる者などの、さあるは、をこにていとよし。

男主などなめくいふ、いとわるし。わが使ふ者などの「なにとおはする」「のたまふ」などいふ、いとにくし。ここともとに「侍り」などいふ文

(九)このあたりに。「おはする」・「のたまふ」の(か)りに

(一〇)そんな敬語法を誤つてゐるやうな者に對しては「ふさはしくない、愛敬もない、なぜまあこんなあなたのことばはぶしつけなのでせう」などとがめると。

「にげな」は底本など「人けんの」、「など」は底本など「な」と

(一一)こんなにわたくしがやかましくいふからであらうか、人々が「あなたはおまゝに注意し過ぎですよ」などといふのも、そのいはれる人が外聞悪く思ふからであらう。「そす」は「卒す」で「つくす・過ぎる」などの意。底本など「見うす」

(一二)直接に本名をなんの遠慮もしないでいふのはまことによくないが。

(一三)全然當人が名のつてゐる名はいはない。

(一四)たとへ、個人の會話であつても、主上や皇后が聞いていらつしやる時には。

(一五)「まろが」などといふ人が賢明であらうか、さうではあるまい。またさういはないからといつてなんの悪いことがあらう。

【四十七】(一)あまり上等でない板の間を掃く(はら)うのさき。

(二)殿上の間に備へ附けの蓋のついた朱塗(しゆ)り椀(わん)。だれでも使用する。五年に一度新らしくかへるといふ。

字をあらせばやと聞くこそおほかれ。さもいひつべき者には、^{二〇}「潜」にげな、^{一六}愛敬(あやう)な、^{一七}などかう、このことばはなめき」といへば、聞く人もいはる人も笑ふ。かうおほゆればにや、^{一八}人「あまり見そす」などいふも、人わろきなるべし。

殿上人、宰相などを、^{一九}ただ名のる名をいささかつつましげならずいふはいとかたはなるを、^{二一}きようさいはず、女房(にようぼう)の局(つぼね)なる人をさへ、「あのおもと」「君」などいへば、めづらかにうれしと思ひてほむることぞいみじき。

殿上人・^{二二}君達(きみたち)、御前(ごまへ)よりほかにては官(つかさ)をのみいふ。また、御前(ごまへ)にてはおのがどちものをいふとも、^{二三}きこしめすには、^{二四}なごてか「まろが」などはいはむ。さいはむにかしこく、^{二五}いはざらむにわろかるべきことかは。

二百四十七

いみじうきたなきもの なめくぢ。えせ^{二六}板敷(いたじき)の^{二七}帚(はき)の^{二八}末(すえ)。殿上(ごまへ)の^{二九}合子(がふし)。

二百四十八

【三言六】(一)とてもこはいもの。

(二)夜の雷。

(三)無我夢中であるから、なんとも感じない。

【三言九】(一)気分が悪いころ。病氣のころ。

(二)法會などの時導師に伴ふ從僧。

(三)佛法の祈禱をすること。

(四)気分のおもしろくないころ。氣の晴れないとき。

(五)眞實でたのみになる戀人がなくさめてくれたのは。

【三言十】(一)いろいろ用意をし、りつぱに支度をして、婿をもらつたのに、間もなく通つて來ない婿が舅にあつた時、氣の毒だと思ふであらう。

(二)時めいてゐる人の婿になつて。

(三)ろくろく來もしないで。底本とその同類本「も」がない。

(四)その女の乳母などは、その婿をのろつて不吉なことをいつたのに、皮肉にもその翌年の正月にその婿は出世して藏人になつた。

(五)今を時めく舅とこんな不仲であるのにどうしてあんなに出世したのかしち。

(六)やかましく評判するのをその婿は聞いてゐることであらう。

(七)車臺の後に出了た部分の稱。轅ひなえの一部分。前に出てゐるのが普通にいふ轅であ

せめておそろしきもの 夜鳴る神。近き隣に、盗人の入りたる。わが住むところに來たるは、ものもおぼえねば、なにとも知らず。

近き火、またおそろし。

二百四十九

たのもしきもの 一 ここちあしきころ、伴僧あまたして修法したる。ここちなどのむつかしきころ、まことまことしき思ひ人のいひなくさめたる。

二百五十

一 いみじうしたてて婿取りたるに、ほどもなく住まぬ婿の、舅にあひたる、いとほしとや思ふらむ。

ある人の、いみじうときにあひたる人の婿になりて、ただ一月ばかりも、はかばかしうも來でやみにしかば、すべていみじういひさわぎ、乳母などやうの者は、まがまがしきことなどいふもあるに、そのかへる正月に藏人になりぬ。「あさましう、かかるなからひには、いかで」とこそ人は

る。

(八)引つかげさうな近くに。

(九)車中の女はどう思つて見てゐるであらうと。

(一〇)婚はよく平氣で、そ知らぬ顔であたものですね。

(一一)どうもやはり男といふものは、人に對する氣の毒だとの氣持、人がどう感じるかとの思ひやりのわからないものものやうである。

【三十五】(一)この世の中において、なんといつてもとてもつらいことは、人ににくまれることであらう。「世の中」は底本

「世なか」

(二)どんな氣狂ひ(癡人)でも、自分は今ににくまれたいなどと思ふ者があらうか。だれでもかはいがられたいと念願する者ばかりなのである。しかし。

(三)困つた、情ないことであるよ。

(四)かはいがつてゐる子どもは他人からも注目され、りつばな者だと評判されて、その子を疎略に扱へない氣がする。そしてその子が容姿とか才能とかにすぐれてゐる場合は、なるほどこれでは親の身としてどうしてかはいがらずには親の身と

かと思はれる。また、その子がたいしたことのない平凡な子である時は、また、この子をかはいと思ふのは親だからこそだと思はれて心を動かされる。

思ひたれ」など、いひあつかふは、聞くらむかし。

六月に人の八講したまふところに、人人集まりて聞きしに、藏人になれる婚の、綾の表の袴、黒半臂などいみじうあざやかにて、忘れにし人の車の鴟の尾といふものに、半臂の緒を引きかけつばかりにてゐたりしを、いかに見るらむと、車の人人も知りたるかぎりはいとほしがりを、こと人も、「つれなくゐたりしものかな」など後にもいひき。

なほ、男は もののいとほしさ、人の思はむことは知らぬなめり。

二百五十一

世の中になほいと心憂きものは 人ににくまれむことこそあるべけれ。

たれてふ物狂か、われ人にさ思はれむとは思はむ。されど、自然に宮仕どころにも、親・同胞の中にも、思はるる思はれぬがあるぞいとわびしきや。

よき人の御ことはさらなり、下衆などのほどにも、親などのかなしうする子は、目たて耳たてられて、いたはしうこそおぼゆれ。見るかひあるは

(五)またすべて、ちよつと交際するやうな人にも、その相手の人に愛されるといふことほどすばらしいことはあるまい。

【(五)】(一)男といふものはなんといつてもきはめて不思議な、どうも解せぬものである。(二)きれいな女を捨てて、へんな顔の女性を。

(三)朝廷に出入りして重んぜられてゐる男性。

(四)きれいな女がたくさんあるなかで、特にやさうな人を選んでお思ひになれたい。そして自分の身分としてとても及ばないやうなりつばな女であつても、いい女だと思ふ人があつたら、死ぬほどにも強く懸想するがよい。

(五)だのに、一方で、女の目から見ても美人だと思ふ女性に思ひをかけるのは、どういふ心理なのであらうか。

(六)男の方では、返事だけは進んですぐにするけれども全然よりつかず、女がいたいだけに歎いてゐるのを。自分に關係のないことながら腹立たしくて。

(八)「見證」で、第三者としてこの正否を検し、判断する意か。通説では能本の「けんそく」(眷屬)の本文によつて、女の身内の者の氣持もの意に解してゐる。

ことわり、いかが思はざらむとおぼゆ。ことなることなきはまた、これのかなしと思ふらむは親なればぞかしとあはれなり。

親にも、君にも、すべてうち語らふ人にも、人に思はれむばかりめでたきことはあらし。

二百五十二

男こそなほいとありがたくあやしきこちしたるものはあれ。いと清げなる人を棄てて、にくげなる人を持つたるもあやしかし。おほやけどころに入り立ちたる男、家の子などは、あるがなかによからむをこそは選りて思ひたまはめ。およぶまじからむきはだに、めでたしと思はむを死ぬばかりも思ひかかれかし。人のむすめ、まだ見ぬ人などを、よしと聞くをこそはいかでも思ふなれ。かつ女の目にもわるしと思ふを思ふは、いかなることにかあらむ。

かたちいとよく、心もをかしき人の、手もよう書き、歌もあはれによみて、うらみおこせなどするを、返りごとはさかしらにうちするものから、

(九)男は、自分のすることについては、全然相手への思ひやりの氣持がないのだから、困つたものである。

(一〇)思ひやりの氣持があることは。(一〇)なんでもない氣持がよつとしたことばだけれど。

(一〇)そしてまた、ほんとに心の底からの聲ではないが、氣の毒なことに対しては「お氣の毒です」ともいひ、悲哀をおぼえることに對しては、ほんとにどんなに深く思ひ悩んでいらつしやるでせうかなどといつたのを、間接に人から傳へて聞いたのは、直接面とおかつていふのよりもうれし。

(一〇)さうした場合、どうかしてそのうれしい詞を述べてくれた人に「同情の御詞を賜はり、身にしてみてもうれしく存じてをります」との心を知られたいものだ。

(一〇)當然たづねてくれるはずの人がかういつてくれるのはあたり前のことであるから、とりわけうれしきとも思はないが、そんなことをいひさうもない人が、挨拶・應答程度のことでも氣やすくしてくれたのはうれしきものである。

(一〇)なんでもないことだけれど、めつたにないことだ。

(一〇)才幹、才能のある人は。

(一〇)稀なことやうである。

(一〇)しかし、また世間はひろいから。

よりつかず、らうたげにうち數きてゐたるを、見棄てて行きなどするは、あさましう、おほやけ腹立ちて、けんそのこちも心憂く見ゆべけれど、身九のうへにてはつゆ心苦しさを思ひ知らぬよ。

二百五十三

よろづのことよりも情なまけあるこそ、男をとこはさらなり、女もめでたくおほゆれ。なげのことばなれど、せちせちに心に深く入らねど、いとほしき事をば「いとほし」とも、あはれなるをば「げにいかにも思ふらむ」などいひけるを、傳へて聞きたるは、さし向かひていふよりもうれし。いかでこの人に「思ひ知りけり」とも見えにしがなとつねにこそおほゆれ。

かならず思ふべき人、とふべき人はさるべきことなれば、とりわかれしもせず。さもあるまじき人の、さしいらへをもうしろやすくしたるはうれしきわざなり。いとやすきことなれど、さらにえあらぬことぞかし。

おほかた心よき人のまことにかど七なからぬは、男も女も八ありがたきことなめり。また、さる人もおほかるべし。

【二百五十四】(一)人のことについてうわさするのを聞いて腹を立てる人があるが、まことにわけのわからないことである。どうしてうわさをしないでをられようか。

(二)それほど非難したく、いひたいと思ふものがほかにあるだらうか。

(三)しかし、考へてみればよくないことでもあり、また、自然とその相手がこちらのいつたのを聞きつけてうらんだりするかも知れないから、こまる。

(四)どうしても思ひ切ることのできないやうな人に對しては、氣の毒だなどと我慢し容赦して評判しないことである。さうした關係さへなかつたら、當然遠慮なく評判をし、笑ひもしてしまはう。

【二百五十五】(一)特別にすぐれてゐるな、よいなあと見える部分は。

(二)ああうつくしい、すばらしいと思ふものである。

(三)これに反して、繪などは何度も見ると、目にもとまらないものである。

(四)それにくらべると、なんといつても人間の顔は、すばらしいものである。

(五)無器量な顔の道具(目とか鼻とか耳とか口とか)のなかに、一つはいいところ

が自然と目にとまるものであるよ。

(六)醜いところもやはり同様に目立つものであらうと思ふのは、ほんとになさけ

二百五十四

人のうへいふを腹立つ人こそいとわりなけれ。いかでかいではあらむ。わが身をばさしおきて、さばかりもどかしくはまほしきものやはある。されど、けしからぬやうにもあり、また、おのづから聞きつけて、うらみもぞする、あいなし。

また思ひはなつまじきあたりは、いとほしなど思ひ解けば、念じていはぬをや。さだになくば、うち出で、笑ひもしつべし。

二百五十五

人のかほにとりわきてよしと見ゆるところは、度ごとに見れども、あなをかし、めづらしとこそおぼゆれ。繪などあまた度見れば、目も立たずかし。近う立てたる屏風の繪などはいとめでたけれども、見も入れられず。人のかたちはをかしうこそあれ。にくげなる調度のなかに、一つよきところのまもらるるよ。みにくきもさこそはあらめと思ふこそわびしけれ。

ないことである。清少納言自身美人と思つてゐなかつたことは、この文にもうかがへる。

【百十六】(一)古代風の人。古風な人。

(二)のろのろした感がする。「たいだいし」は「怠々し」である。

(三)前であつて、まづ着物の裾をみなまくりこんで、腰の部分はそのままに、着物の前をすつかりととのへてから、および腰になつて腰の部分をとる時、うしろの方に手をやつて、まるで猿が両手をしながら立つてゐるのは、急場の間にあひさうにも見えないやうである。「ほどき」は未詳。「おほどき」の義か。

【百十七】(一)外出の時、長い表着の裾を返して着て、そのなかに垂れ髪を入れるのである。「ひきかかし」の本文もある。

(二)女房の名。

(三)卒塔婆の意か。このあたり文意未詳。「あたらし」は惜しい意か。

【百十八】(一)源成信。兵部卿致平親王の子。長徳四年十月左中將。長保三年二月三日出家。年二十三。

(二)聲にしても筆蹟にしても、聞きわけたり見わけたりはしないものであるのに、この中將はとても低い、小さな聲でも、りつぱにお聞きわけなされたことである。

二百五十六

一 一
ごたいの人の、指貫着たるこそいとたいだいしけれ。前に引きあてて、まづ裾をみな籠め入れて、腰はうちすてて、衣の前を調へはてて、腰をおよびて取るほどに、うしろざまに手をさしやりて、猿の手結はれたるやうにほどきたてるは、とみのことに出で立つべくも見えざめり。

二百五十七

十月十餘日の月のいと明かきに、ありきて見むとて、女房十五六人ばかりみな濃き衣を上に着て、引きかへしつありしに、中納言の君の、紅の張りたるを着て、頸より髪をかき越したまへりしが、あたらし。そとはに、いとよくも似たりしかな。「ひひなのすけ」とそ若き人人つけたりし。しりに立ちて笑ふも知らずかし。

二百五十八

【百五十九】藤原正光。關白兼通の六男。長徳二年四月藏人の頭、長徳四年十月大藏卿、寛弘元年参議。長和三年薨す。年五十八。一耳としは耳早い、耳がさとい意。一四二頁参照。

(三)ほんたうに蚊のまつ毛の落ちる音までも聞きつけなざりかねないほどであった。蚊の腿の「」は列子の湯問篇に黄帝と容成子とが空洞の上のみにて齋するのと三箇月、心死し形廢れて、焦螟が蚊の腿に集まる音が雷霆の聲のやうに聞えたとの故事があり、春曙抄をはじめこれを引く註釋書がおほいが、これにヒントを得たことばか、または當時の諺によつたのであらうか。

(三)わたくしが中宮職の西面の間に住んでゐたころ。

(四)大殿は左大臣道長。成信は道長の養子であつたからかう呼んだのである。

(五)そばにゐた女房がわたくしに「新中將様に扇の繪のことを話さない」とささやくので。

(六)もうしばらくして大藏卿正光様がお立ち去りになつてからねえ。

(七)とても小さな聲でわたしがその女房に耳うちしたところ、その當人さへ聞きとれないで。

(八)なんですつて、なんですつて。

(九)大藏卿は、遠くにすわつてゐて。

(一〇)そんなにお邪魔なら、ぼくは今日は働きませんまい。

成信なりのぶの中將こそ人の聲はいみじうよう聞き知りたまひしか。おなじところの人の聲などは、つねに聞かぬ人はさらにえ聞きわかず。ことに男おとこは人の聲こゑをも手をも、見わき聞きわかぬものを、いみじうみそかなるも、かしく聞きわきたまひしこそ。

二百五十九

大藏卿だいざんけいばかり耳みみとき人はなし。まことに、蚊かの腿まつげの落つるをも聞きつけたまひつべうこそありしか。

職しきの御曹司みざうしの西面おほてに住みしころ、大殿おほとのの新中將宿直しんちゆうじくぢくにて、ものなどいひしに、そばそばにある人の、「この中將に扇の繪のこといへ」とささめけば、清きよ「いま彼の君の立ちたまひなむにを」と、いとみそかにいひ入るるを、その人だにえ聞きつけで、「なにとか、なにとか」と耳をかたづけ來るに、遠とほくゐて、大藏卿だいざんけい「にくし。ささのたまはば、今日けふは立たじ」とのたまひしこそ、いかで聞きつけたまふらむとあさましかりしか。

【百十七】(第一卷(第一册)を讀んで、そのつづきがせひ讀みたいものだとはかり思つてゐたのが、そのつづきを見つけた時。

(二)それも讀んでみて、案外つまらなくかへつて失望する場合もあるものであるが。

(三)幾行も。ただし「ひとくんだり」を手紙一通の意に用ゐたと解される例が落窪物語にあるから、こゝも何通もの意か。

(四)たいしたこともないやうに夢判斷をしてくれたのは。

(五)貴い人の御前で。

(六)自分の方を御覽になり、あたかも自分だけ話し、相談でもなさるやうな風におはせられるのは、ほんとにうれし。

(七)隔たつてゐて、自分がとてもたいせつに思つてゐる人が病氣をしてゐるのを聞いて。

(八)益快したとのよし、たよりがあつたのも。

(九)自分の愛人が、人からほめられたり、貴い人がわが思ふ男を「彼はりつばな男である」などとおほしめし、さうおつしやることもうれしもの一つである。

(一〇)何か催しものあつた時とか、あるいは人と贈答した歌が世に評判になつて(一)すぐれた歌を書きとめた聞き書。耳にふれたことを書いておく空への意。

うれしきもの。まだ見ぬ物語の一を見て、いみじうゆかしとのみ思ふが、のこり見出でたる。さて、心おとりするやうもありかし。

人の破り棄てたる文を繼ぎて見るに、おなじつづきをあまたくだり見つけたる。いかならむと思ふ夢を見て、おそろしと胸つぶるるに、こともあらずあはせなしたる、いとうれし。

よき人の御前に、人人あまたさぶらふをり、むかしありけることにもあれ、いまきこしめし、世にいひけることにもあれ、語らせたまふを、われに御覽じあはせてのたまはせたる、いとうれし。

遠きところはさらなり、おなじ都のうちながらも隔たりて、身にやむごとなく思ふ人の惱むを聞きて、いかにいかにとおぼつかなきことを歎くに、おこたりたるよし、消息聞くも、いとうれし。

思ふ人の、人にほめられ、やむごとなき人などのくちをしからぬ者に思しのためふ。ものををり、もしては、人といひかはしたる歌の聞えて、打聞

- (一) これはわたくし自身にはまだ経験したことはないけれど、その氣持はやはり想像できるわ。
- (二) 故事古歌で、知らなかつたのを。
- (三) 讀んでゐた書物のなかなどで。
- (四) これにあつたのだなと。これだつたのだなと。
- (五) 普通の紙でも、すばらしいのを手に入れた時。
- (六) 尊敬してゐる人が歌の上の句や下の句をたづねた時に、すぐに思ひ出せたのは。
- (七) いつも記憶してゐることでも、改まつて人がたづねると、きれいに忘れてしまつてゐるをりが多いものである。
- (八) にはかに大いそぎで探してゐるものが發見できた時。
- (九) 左右に組を分けて、ものをおたがひに合はせて優劣勝敗を競ふ遊戯。合はせるものの種類によつて、歌合・繪合・根合・草合・貝合・扇合などがある。
- (一〇) おれこそはなどと思つて得意顔の人は、秀句(しやれ)などどうまくだませたのを。
- (一一) 返報。しかへし。
- (一二) 相手が平氣な顔でなんとも思つてゐない風で、こちらを油斷させて過ごすのも、またおもしろい。

などに書き入れらるる。みづからのうへにはまだ知らぬことなれど、なほ思ひやるよ。

いたううち解けぬ人のいひたる故き言の、知らぬを聞き出でたるもうれし。後にものなかなだにて見出でたるは、ただをかしう、これにこそありけれど、彼のいひたりし人ぞをかしき。

陸奥國紙、ただのも、よき得たる。はづかしき人の、歌の本末問ひたるに、ふとおぼえたる、われながらうれし。つねにおぼえたることも、また人の問ふに、きよう忘れてやみぬるをりぞおほかる。とみにてもとむるもの見出でたる。

物合、なにくれと挑むことに勝ちたる、いかでかはうれしからざらむ。また、われはなど思ひてしたりがほなる人はかり得たる。女どちよりも、男はまさりてうれし。これが答はかならずせむと思ふらむと、つねに心づかひせらるるもをかしきに、いとつれなくなにも思ひたらぬさまにてたゆめ過ぐすも、またをかし。にくきものあしき目見るも、罪や得らむと思ひながら、またうれし。

(二四)りつばなできばえでできて來たのは。

(二五)七三頁参照。

(二六)「このあたりは『また』の字もおほいが」の意か。この一句は作者または後人の補記とも考へられる。能本・前本などにはこの句にあたるものがない。

(二七)幾日も幾月もひどい病氣にかかつてずつとわづらひつづけて來たのが、全快したのもうれし。

(二八)それが自分の思つてゐる人の身である時は、自分自身の場合よりもずつとうれしいものである。

【三六十一】(一)腹立たしく、氣がふさぎ、不愉快で、ほんのしばらくもめようといふ氣がしないで、ただもうどこへでも行つてしまひたいと思ふ時に。「腹立たしう」は底本「はうたしう」

(二)やはりまあ。「さはあれ」の約。

(三)かうしてしばらくでも生きてゐたいものだと思はれる。

(四)白地の緒に雲形などの紋を黒く織り出した縁の疊の綾表筵が青々として、目がこまかくて、分厚いのが、へりの紋がまことにきは立つて。

ものをりに衣うたせにやりて、いかならむと思ふに、きよらにて得たる。刺櫛磨らせたるに、をかしげなるもまたうれし。またもおほかるもの。

日ごろ、月ごろしるきことありて、惱みわたるが、おこたりぬるもうれし。思ふ人のうへは、わが身よりもまさりてうれし。

御前に人人とくもなくあたるに、いまのぼりたるはずこし遠き柱のものとなどにあたるを、とく御覽じつけて、宮「こち」とおほせらるれば、道あけて、いと近う召し入れられたるこそうれしけれ。

二百六十一

御前にて人人とも、またものおほせらるるついでなどにも、清「世の中の腹立たしう、むつかしう、片時あるべきこちもせで、ただいづちもいづちも行きもしなばやと思ふに、ただの紙のいと白う清げなるに、よき筆、白き色紙、陸奥國紙など得つれば、こよなうなくさみて、さはれ、かくてしばしも生きてありぬべかんめりとなむおほゆる。また高麗ばしの筵青う

(五) どうしてどうして、やはりまだ。

(六) 「わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」(古今集十七雜上、よみ人知らず)といふ歌があるが、そなたのやうにさうたやすく心が慰められるならば、姨捨山の月を見て心を慰めかねた人などなかつたわけですね。

(七) 罪を消し災難をふせぎとめるための祈なのね。「ななり」は「なるなり」の略約。下の「なり」は推定・詠嘆の助動詞。「…のやうですね」の意。

(八) 前記「世の中の…」をうける。

(九) 壽命陀羅尼一卷。息災延命を祈るための經。

(一〇) お忘れにならないで、お思ひおき下さつたことは、普通の人でさへもやはり心をひかれることである。まして、中宮様がさう思つてゐて下さるなんて、ひとほりの感激なんかでは決してない。

(一一) 口に出して申すもおそれおはいことですが、賜はりました紙の、神のやうにあらたかな效驗には心が慰み命が延びまします。鶴の千年の齡ともなりさうでございます。でも、千年とはあまり長過ぎるでせうかと。

(一二) 雜役をつかさどる女官。

(一三) 「むつかしきことも」まぎるることにして「にかかる。」

こまやかに厚きが、縁の紋いとあざやかに黒う白う見えたるを引きひろげて見れば、なにかなほこの世はさらにさらにえ思ひ捨つまじと命さへ惜しくなむなる」と申せば、宮「いみじくはかなきことにもなくさむなるかな。『姨捨山の月』はいかなる人の見けるにか」など笑はせたまふ。さぶらふ人も「いみじうやすき息災の祈なり」などいふ。

さて後ほど經て、心から思ひ亂ることありて里にあるころ、めでたき紙二十をつつみて賜はせたり。おほせ言には、宮「とくまぬれ」などのたまはせて、「これはきこしめしおきたることのありしかばなむ。わろかめれば壽命經もえ書くまじげにこそ」とおほせられたる、いみじうをかし。思ひ忘れたりつることをおぼしおかせたまへりけるは、なほただ人にてだにをかしかべし。まいて、おろかなるべきことにぞあらぬや。心も亂れて、啓すべきかたもなければ、ただ、

清「かけまくもかしこきかみのしるしには鶴の齡となりぬべきかな

あまりにやと啓せさせたまへ」とてまゐらせつ。臺盤所の雜仕ぞ御使には來たる。青き綾の單衣取らせなどして、まことにこの紙を冊子に作りなど

(四)桃色の狩衣で身分の低い召使が着る。三二〇頁参照。

(五)ぶつぎらほうに。

(六)「使の者はもう歸りました」といふので。

(七)上等の疊むしろ。貴人の御座の料だからいふと。ござ。

(八)高麗縁など、まことにきれいである。三五五頁(四)参照。

(九)皇后様の御心づくしであらうなどと思つたが、やはり自信がないので、家の召使を外へ出して、かの使者を探させたけれども、姿が見えなかつたといふ。

(一〇)家をまちがへたために疊を持ちこんで来たのなら、そのうちにまたなんとかいつて來るであらう。

(一一)皇后様のところへおうかがひに參上したいけれど。

(一二)もし皇后様のおほしめしによるのでなかつたならば、いやであらうと思ふが。「あべし」は「あるべし」の略約。

(一三)みだりに。わけもなく。

(一四)わたくしがこんなことを申したなど人に押しやべり下さいますな。

もてさわぐに、むつかしきこともまぎるるこちして、をかしと心のうちにもおほゆ。

二日ばかりありて、赤衣着たる男、疊を持って來て、「これ」といふ。下女

「あれは誰そ。あらはなり」などものはしたなくいへば、さし置きて往ぬ。

清「いづこよりぞ」と問はずれど、下女「まかりにけり」とて取り入れた

れば、ことさらに御座といふ疊のさまにて、高麗など、いとぎよらなり。

心のうちにはさにやあらむなど思へど、なほおほづかなさに、人人出だし

てもとむれど、失せにけり。あやしがりいへど、使のなければ、いふかひ

なくて、ところたがへなどならば、おのづからまたいひに來なむ。宮の邊

に案内しにまゐらまほしけれど、さもあらずは、うたてあべしと思へど、

なほたれか、すずろにかかるわざはせむ。おほせ言なめりと、いみじうを

かし。

二日ばかり音もせねば、疑ひなくて、右京の君のもとに、清「かかるこ

となむある。さることやけしき見たまひし。しのびてありさまのたまへ。

さること見えずは、かう申したりとな散らしたまひそ」といひやりたるに、

(三) 絶対におたくしが申したなどと口にもお出しくださいますな。

(四) 思つたとほりさうだつたので。

(五) 置かせたところが、それはあまりあつたので、そのままかけおとして。

「……ものは……けり」は、四八頁(六)参照。

(夏十三) (一) 道隆。(二) 正暦五年二月二十日(日本紀略・本朝世紀・扶桑略記)

(三) 二條の北、京極の東にあり、もと兼家の私邸であつたが、正暦元年五月十日改造して永く佛寺とした。

(四) 法興院境内に道隆が別に建てた堂。

(五) 釋迦の説いた一切の經文と後の名僧の註疏とを合はせておよそ一千部に及ぶものを新たに筆寫させて寺に納める式。

(六) 東三條院詮子。一條天皇の御生母。

(七) 皇后定子様も。

(八) 正暦三年御新造の中宮の御所。

(九) 翌朝、日がうららかにさし出た時分に起きたところ。

(一〇) 天皇皇后の御帳臺の前にかぎり、すゑられる置物。角一本のが狛犬、二本のは獅子。

(一一) ばかに早く咲いたものだなあ、いまは(まだ)梅が満開だのにと思つてよく見ると、造花なのであつた。

(一二) どれほど手を要したことであつたらうか。それにしても、もし雨が降つたら、

はばんでしまふであらうと思ふと残念で

右京「いみじうかくさせたまひしことなり。ゆめゆめまろがきこへたるとな口にも」とあれば、さればよと思ふもしるく、をかしうて、文を書きて、またみそかに御前の勾欄に置かせしものは、まどひけるほどに、やがてかけ落して御階の下に落ちにけり。

二百六十一

關白殿、二月二十一日に法興院の積善寺といふ御堂にて一切經供養せさせたまふに、女院もおはしますべければ、二月ついたちのほどに、一宮へ出でさせたまふ。ねぶたくなりしかば、なにごとも見入れず。

つとめて、日のうららかにさし出でたるほどに起きたれば、白う新らしうをかしげに造りたるに、御簾よりはじめて、昨日かけたるなめり、御しつらひ、獅子・狛犬などいつのほどにか入り居けむとぞをかしき。櫻の一丈ばかりにていみじう咲きたるやうにて御階のもとにあれば、いとく咲きにけるかな、梅こそただいまはさかりなれと見ゆるは、造りたるなりけり。すべて花のにはひなどつゆまことにおとらず。いかにうるさかりけ

ある。

(三) ただ建物の様子がしたしみがあつて、風流である。

(四) 道隆。

(五) 定子中宮。

(六) 道隆殿は中宮様の御前におすわりになつて。

(七) 宮様の御應答のすばらしさを里にさがつてゐる人にすこしでも見せて、聞かせてやりたいと、拜見するのであらうか。これほどおほくのりつばな人々(女房)をならべて置いて御覽になるとはうらやましいことです。

(八) 一人として器量(容貌)の悪い人はゐないではありませんか。しかも、これらはみなそれぞれりつばな家々の娘です。ああ、結構なことです。どうか十分に寵愛して奉公をおさせなさいませ。

(九) 中宮様はどんなにいやしいかたか、どれほどもの惜しみをなさる宮様であるかといひますと、わたくしはこの宮様御誕生以來ずっと心から御奉公申してをりますが、今日に至るまでまだおさがりの御召しもの一つも賜はりませぬ。どうしかげ口など申しませうか。堂々とかうして御前で申します。

む。雨降らばしほみなむかしと思ふぞくちをしき。小家などいふものおほかりけるところを、いま造らせたまへれば、木立など見どころあることもなし。ただ宮のさまぞけ近う、をかしげなる。

殿わたらせたまへり。青鈍の固紋の御指貫、櫻の御直衣に紅の御衣三つばかりをただ御直衣に引きかさねてぞたてまつりたる。御前よりはじめて紅梅の濃き、薄き織物、固紋、無紋などあるかぎり着たれば、ただ光り満ちて見ゆ。唐衣は、萌黄・柳・紅梅などもあり。

御前にみさせたまひて、ものなごきこえさせたまふ。御いらへなどのあらまほしさを里なる人などにはつかに見せばやと見たてまつる。女房など、御覽じわたして、關白殿「宮、なにごとをおぼしめすらむ。こころめでたき人人を据ゑ並めて御覽ずることそはうらやましけれ。一人わるきかたちなしや。これみな家家のむすめどもぞかし。あはれなり。よう顧みてこそさぶらはせたまはめ。さても、この宮の御心をばいかに知りたてまつりて、かくはまゐり集まりたまへるぞ。いかにいやしくもの惜しみさせたまふ宮とて、われは宮の生まれさせたまひしよりいみじうつかうまつれど、ま

(二)下文に見える源則理のこと。前大納言重光の四男。正暦二年正月十三日式部丞。この時藏人、十九歳。

(三)伊周。

(四)拜見したいお手紙ですな。

(五)宮様は。「あやふしと」を「かたじけなくもあり」につづけて關白のことばとみる説もある。すなはち「御當惑の御様子ですな。やはりもつたいたい氣がします」と説く。

(六)「やはりおそれおほいことです」といつて。

(七)宮様はおうけとりになつても。

(八)勅使のために。

(九)勅使への被物を用意いたしましたせう。

(一〇)皇后様は、天皇よりの御文を。

(一一)御召しものがおなじ色であるのとうづりあり、似てゐるのなど、ほかによもやかうした氣持でこのありがたい御様子をおりはかり、見たてまつる人はあるまいと思はれてまことに残念である。

(一二)婦人の着るもので小うちぎに似たもの。

(一三)あるので、酔はせたいけれど。

だおろしの御衣一つ賜はらず。なにか、しりう言にはきこえむ」などのたまふがをかしければ、笑ひぬれば、關白殿「まことぞ。をこなりと見てかく笑ひいまするがはづかし」などのたまはするほどに、内裏より式部の丞なにがしまゐりたり。

御文は大納言殿取りて殿にたてまつらせたまへば、引き解きて、關白殿「ゆかしき御文かな。ゆるされ侍らば、あけて見侍らむ」とはのたまはずれど、あやふしと思いためり。關白殿「かたじけなくもあり」とてたてまつらせたまふを、取らせたまひても、ひろげさせたまふやうにもあらずもてなさせたまふ御用意ぞありがたき。

御簾のうちより女房褥さし出でて、三四人御几帳のもとにゐたり。關白殿「あなたにまかりて、祿のこともし侍らむ」とて立たせたまひぬる後ぞ、御文御覽する。御返し、紅梅の薄様に書かせたまふが、御衣のおなじ色にほひかよひたる、なほ、かくしもおしはかりまゐらする人はなくやあらむとぞくちをしき。今日のはことさらにとて殿の御かたより祿は出ださせたまふ。女の装束に紅梅の細長そへたり。さかななどあれば、酔はさまほ

(三三)ここは關白殿の姫君をいう。

(三四)道隆の第三女。冷泉院の御子の帥すけの宮(敦道親王)の北の方である。

(三五)道隆の第四女。

(三六)道隆の第二女。淑景舎の女御原子。

(三七)北の方、奥方などと申しあげるにはふさはしいやうに見える。

(三八)道隆の室、高の内侍。

(三九)おおひにならぬので、自分も新参で對面のゆるされぬ一人だから、つまらない氣がして心が晴れやらない。

(四〇)女房どもは集まつて、供養當日の。

(四一)競争心から自分の装束・扇のことをかくさうとして、「わたしなんかどうしてことさらに用意しませう。ただありあはせの不斷着のままで」などといつて、他の女房から「いつもの癖がまた出てゐますね」などとにくまれる。「いとみかくし」は「いとみかはし」とある本が多い。(四二)里へ。里宅へ。底本「人おほかれど」：日々々々脱落。

(四三)道隆の室。中宮の御母。

(四四)主上よりの。

(四五)造花だからである。底本とその同系統本「まさりて」いま能本による。

(四六)その翌朝の花の姿は見るにたへないむざんなありさまである。

しけれど、式部丞「今日はいみじきことの行事に侍り。我が君、ゆるさせたまへ」と大納言殿にも申して、立ちぬ。

君などいみじく化粧けしょうしたまひて、紅梅の御衣ごぎどもおとらじと着たまへる

に、三の御前は、御匣殿・中の姫君よりも大きに見えたまひて、うへなど

きこえむにぞよかめる。

うへもわたりたまへり。御几帳みきざう引きよせて、新らしうまゐりたる人人に

は見えたまはねば、いふせきこちす。

さしつどひて、彼の日の装束・扇などのことをいひあへるもあり。また、

いとみかくして、女房「まろはなにか。ただあらむにまかせてを」などい

ひて、「例の、君の」など、にくまる。夜さりまかづる人おほかれど、か

かるをりのことなれば、えとどめさせたまはず。

うへ、日日にわたりたまひ、夜もおはします。君達などおはすれば、御

前、人ずくなならでよし。御使日日にまゐる。

御前の櫻、露に色はまさらで、日などにあたりてしほみ、わるくなるだ

にくちをしきに、雨の夜降りたるつとめていみじくむとくなり。いととう

(四七)「櫻花露にぬれたる顔みれば泣きて別れし人ぞ戀しき」(拾遺集六、別)

(四八)お目をおさましになつたところに。

(四九)困つたことだ。早く早く。

(五〇)「山守はいはばい(はなむ高砂の尾の上の櫻折りてかささむ)はなむ高砂の尾の上の櫻折りてかささむ」(後撰集二春中素性・古今六帖六)に似た歌が源兼澄(陸奥の守信明の子。寛和のころまでの人)の歌にあつたのであらうか。それとも別人であらうか。「いはばいはなむ」は、いふならいつてくれの意。

(五一)相手が教養のある貴い人だつたら。

(五二)もしもあのままに放つておいたならば、造花が枝などにぬれからまつてどんなに無恰好なことだつたらうと思つた。

(五三)御格子を上げる。主殿司の女官がお掃除などをすつかりすましてから、宮様はお起きあそばしたがつ、花もないので。(五四)といふやうであつたが、それも枝などをすこし折り取る程度であらうと思つて聞いてゐたのに。「なり」傳聞推定の助動詞。

(五五)白つばい服装をした者がをりましたので、花を折り取るのだらうかと気がかりなので、いつたのでございます。「うしろめたき」は底本「うしろめたさ」(五六)「山田さへいまはつくるを散る花の

起きて、清「泣きて別れけむかほに心おとりこそすれ」といふを聞かせたまひて、宮「げに雨降るけはひしつるぞかし。いかならむ」とおどろかせたまふほどに、殿の御かたより侍の者ども・下衆など、あまた來て、花のもとにただよりによりて引き倒し取りてみそかに行く。侍「關白殿」まだ暗からむに」とこそおほせられつれ。明け過ぎにけり。不便なるわざかな。とくとくと」と倒し取るに、いとをかし。「いはばいはなむ」と、かねずみがことを思ひたるにやともよき人ならばいはまほしけれど、清「彼の花盗むはたれぞ。あしかめり」といへば、いとど逃げて、引き持て往ぬ。なほ殿の御心はをかしうおほすかし。枝どもぬれまつはれつきて、いかに便なきかたちならましと思ふ。ともかくもいはで、入りぬ。

掃部つかさまありて、御格子まゐる。主殿の女官御きよめなどにまゐりはてて、起きさせたまへるに、花もなければ、宮「あな、あさまし。あの花どもはいづち往ぬるぞ」とおほせらる。宮「隣に『花盗人あり』といふなりつるを、なほ枝などすこし取るにやとこそ聞きつれ。誰がしつるぞ、見つや」とおほせらる。清「さも侍らず。まだ暗うてよくも見えざりつる

かごと風におほせざらなむ(貫之集)を踏まへてゐる。この歌の意は、春たけて、山田までもいまは田をつくる季節になつたのであるから、このあたり、櫻の花が散るのは當然のことであつて、その罪は春風に負はせないでほしいものだ。

(五七)この歌を引かうと思つて、隠すのね。これは盗みではなく、雨がひどくふり、ひどくふるびたのでせう。雨が降ると、舊るとにいひかけてある。能本一ふりにこそふるなりつれと」とある。底本とその同系統本による。

(五八)寝みだれた朝の顔を不意に御覽になるかも知れないと思つて奥へひっこむ。(五九)はいつて來られるや否や「あの花はなくなつてしまつたね。どうして、こんなにむざむざと盗まれたのかね。ほんとなによくない女房たちだ。お寝坊で、気がつかなくつたんだね」

(六〇)「鶯の鳴く音を聞けば山深みわれよりにさきに春は知りけり」(新拾遺集十八雑上 忠見・風雅集一春上 源信明)の詞をとつたのであらうか。

(六一)よもやほかの人が出てゐて見つけはしまし。宰相の君とそなたとくらゐたらうと思つてゐたよ。

(六二)(六三)いづれも(五五)にかかげた歌によつた。

を。白^{しろ}みたる者の侍りつれば、花を折るにやとうしろめたきにいひ侍りつるなり」と申す。宮「さりとも、みなは、かう、いかでか取らむ。殿^{との}のかくさせたまへるならむ」とて笑はせたまへば、清「いで、よも侍らじ。春^{はる}の風^{かぜ}のして侍るならむ」と啓^{けい}するを、宮^{みや}「かういはむとてかくすなりけり。盗みにはあらで、いたうこそふりなりつれ」とおほせらるるもめづらしきことにはあらねど、いみじうぞめでたき。

殿^{との}おはしませば、ね^ねくたれの朝^{あさ}がほも、ときならずや御覽^{ごらん}せむと引き入^いる。お^おはしますまに、關白殿^{せきひつ}「彼の花^{はな}は失^うせにけるは。いかで、かうは盗^{ぬす}ませしぞ。いとわろかりける女房^{にようぼう}たちかな。いぎたなくて、え知らざりけるよ」とおどろかせたまへば、清^{せい}「されど『われよりさきに』とこそ思^{おも}ひて侍りつれ」としのびやかにいふに、いととう聞きつけさせたまひて、關白殿^{せきひつ}「さ思^{おも}ひつることぞ。よにこと人出^{ひとで}でゐて見^みじ。宰相^{せいしやう}とそことのほどならむとおしはかりつ」といみじう笑はせたまふ。宮^{みや}「さりけるものを、少納言^{せうなごん}は春^{はる}の風^{かぜ}におほせける」と、宮^{みや}の御前^{ごまへ}のうち笑^{わら}ませたまへる、いとをか。關白殿^{せきひつ}「そ^そら言^{こと}をおほせ侍るなり。『いまは、山田^{やまだ}もつくる』らむも

(六)宮様の方にはこのやうな警戒人がゐたのであつたよ。

(六)詩歌故事の句をそのまま引かないで散文日常の詞としては巧緻に。

(六)ちひさな若君の義の普通名詞。ここは伊周の子道雅(松君)のこととみるのが通説。しかし道雅はこの歳三歳であり相應し女房の名とする。後撰集春下の作者に小若君といふのがある。

(六)「清少納言は既に『露にぬれたる』といひ、また『造花が見るかひもないありさま』などとも申しました」と皇后に申しあげなざると、殿はひどく。

(六)わたくしが退出しようとするのをとめられて。

(六)「九月西風興り、月冷やかにして霜華凝る。君を思へば秋夜長し。一夜魂九たびのぼる。二月東風來り、草桥けて花心開く。君を思へば春日遅し。一日陽九たび廻る云々」(白氏文集卷十二 感傷長相思)によつて應答した秀句である。「秋はいまだしく侍れど、いまは春だからである。「九度」は底本をはじめ現存各系統諸本すべて「このたび」とある。

(七)中宮様が二條の宮へ。

(七)豫定された車の順序もなく、われがちにと。

のを」などうち誦^ずぜさせたまへる、いとなまめき、をかし。關白殿「さてもねたく見つけられにけるかな。さばかりいましめつるものを。人の御かたにはかかるいましめ者のあるこそ」などのたまはず。關白殿「春の風」はそらにいとかしこうもいふかな」など、またうち誦^ずぜさせたまふ。宮「ただ言^{こと}にはうるさく思ひつよりて侍りし。今朝のさま、いかに侍らまし」などぞ笑はせたまふ。小若君「されど、それをいとく見て、清「露にぬれたる」といひける、清「面^{おもて}ぶせなり」といひ侍りける」と申したまへば、いみじうねたがらせたまふもをかし。

さて、八九日のほどにまかづるを、宮「いますこし近うなりてを」などおほせらるれど、出でぬ。いみじうつねよりもどかに照りたる晝つかた、宮「花の心開^{ひら}けざるや。いかに、いかに」とのたまはせられたれば、清「秋はいまだしく侍れど、夜に九度^{このたび}のぼるこちなむし侍る」ときこえさせつ。

出^ででさせたまひし夜、車の次第もなく、女房「まづ、まづ」と乗りさわぐがにくければ、さるべき人と、「なほ、この車に乗るさまのいとさわがしう、祭のかへさなどのやうに、倒れぬべくまどふさまのいと見苦しきに、

(七三)しかるべき人と。心のよくあふ先輩の女房と。この「と」は三行後の「いひあはせて」に照應する。

(七四)どうも。(七五)ただもうともかくも。

(七六)宮様がそのうちお聞きつけになつて別の車をもう一臺くだされもしよう。

(七七)わたくしども二人が立つてゐる前から、ほかの女房どもが一團となつて、わいわいとおしあひひしあひさわいで乗り終へて。

(七八)「かうこ」の本文により「かう、こといふに」とし、「斯う、言(または事)いふに、まだし此處に」(こんなに聲をかけてゐるのに未だここに残つて)の意とも解されるが、また底本と全部で「かうか」の本文によつて「もう全部ですか」「もうすつかりお乗りになりましたか」の意とし、「まだしここに」は清女とともにゐた「さるべき人」(右衛門といふ女房)の語とみたい。底本「かうかと」とも讀めるが、宮本以下すべて「かうこと」とある。

(七九)大進生昌の段の「笑ふめれば」とおなじやうな例。八〇頁参照。

(八〇)御厨子所の女官、采女の中から選任するから名づける。定員三名。

(八一)車を寄せさせるが。

(八二)それなら、まづ先にその御豫定の得

ただ、さはれ、乗るべき車なくてえまゐらずは、おのづからきこしめしつけて賜はせもしてむ」などいひあはせて、立てる前よりおしこりて、まどひ出でて乗り果てて、行事「かうか」といふに、「まだし、ここに」といふめれば、宮司より來て、「たれたれおはするぞ」と問ひ聞きて、宮司「いとあやしかりけることかな。いまはみな乗りたまひぬらむとこそ思ひつれ。こはなどかうおくれさせたまへる。いまは得選乗せむとしつるに。めづらかなりや」などおどろきて、よせさすれど、清「さは、まづその御心ざしあらむをこそ乗せたまはめ。つぎにこそ」といふ聲を聞きて、宮司「けしからず、腹ぎたなくおはしましけり」などいへば、乗りぬ。そのつぎには、まことに御厨子が車にぞありければ、火もいと暗きを、笑ひて二條の宮にまゐり着きたり。

御輿はとく入らせたまひて、しつらひゐさせたまひにけり。宮「ここに呼べ」とおほせられければ、「いづら、いづら」と右京・小左近などいふ若き人人待ちて、まゐる人ごとに見れど、なかりけり。下るるにしたがひて、四人づつ御前にまゐりつどひてさぶらふに、宮「あやし。なきか。いかな

選をこそさきにお乗せなさいませ。

(八三) なかなか意地悪くいらつしやるね。

(八四) 得選の乗る車であつたから。

(八五) 中宮附の若い女房たちであるが、傳末詳。

(八六) わたくしどもを探しもとめて見たらしいけれども、ゐなかつたのである。

(八七) 長年のおすまひのやうに。

(八八) ゐないのかとたづね探すほど。「なきか」とは「無き門」で、留守の家の意とも考へられる。

(八九) まことにしかたのないことでございました。最後の車に乗つてゐたわたくしどもはどうして早く参上できませうか。しかもその車も御厨子が氣の毒がつて、底本「みつかしか」とある。

(九〇) まだ新参で勝手を知らない者(清少納言)は遠慮してゐるであらうが、右衛門のやうに古くから任へてゐる者は、どうしてまあ宮司などにいへばよいのに。(九一) どうして先に立つてかけ出せませう。

(九二) 「順序を亂し上位を犯して乗つて、それでもよいといふべきではない。規定の順でりつばなのがよいでせう」と腹立たしげに(御機嫌が悪さうに)。(九三) 先に乗つた女房たちは、わたくしどもが下りますのが、あまり待ち遠しくて、つらかつたからでせう。

るぞ」とおほせられけるも知らず、あるかぎり下りはててぞからうじて見つけられて、右京小左近「さばかりおほせらるるに、おそくは」とて、ひきめてまゐるに、見れば、いつの間にかう年ごろの御すまひのやうにおはしましつきたるにかとをかし。

宮「いかなれば、かうなきかとたづぬばかりまでは見えざりつる」とおほせらるるに、ともかくも申さねば、もろともに乗りたる人、「いとわりなしゃ。最果の車に乗りて侍らむ人は、いかでか、とくはまゐり侍らむ。これも、御厨子がいとほしがりて、ゆづりて侍るなり。暗かりつるこそわびしかりつれ」とわぶわぶ啓するに、宮「行事する者のいとあしきなり。また、なかは心知らざらむ人こそはつつまめ、右衛門などいはむかし」とおほせらる。右衛門「されど、いかでかは走り先立ち侍らむ」などいふ、かたへの人にくしと聞くらむかし。宮「さまあしうて高う乗りたりとも、かしこかるべきことかは。定めたらむさまの、やむごとなからむこそよからめ」とものしげにおぼしめしたり。清「下り侍るほどのいと待ち遠に苦しければにや」とぞ申しなほす。

(九四)一切經御供養を行はれるために、宮様は明日横善寺へお出でになるといふので、明日は今宵(その前後)すなはち正暦五年二月十九日(夜)に参上した。

(九五)腰紐をぬひ。腰は裳についてゐる帶、裙帶。これに平組の緒を刺緒すること。

(九六)髪などのことも、まるで明日以後髪が無くなりさうに思つてゐるのかと疑はれるほど、懸命に手入れをしてゐる。

(九七)午前四時ごろに御出發なさるさうよ。

(九八)あなたを探しもとめてゐる人があつたわ。

(九九)衣裳をつけ、身じたくをしてゐたが、寅の刻もすみ、夜も明けきつて。

(一〇〇)唐破風づくり(八の字形に似た一本の曲線で、玄關などに用ゐる)にした軒廂。

(一〇一)女房は全員行くが。

(一〇二)新參の女房。清女自身も入つてゐる。

(一〇三)道隆公が滞在していらつしやるので。

(一〇四)道隆の北の方とその御妹。

(一〇五)宮以下六所になるから、六所の誤りとみる説(中村秋香氏)がある。「その御おととはあるまじり御妹三人の意とみるべきではあるまいか。なほ高階氏系圖によると高内侍(殿の上)の妹は一人となつてゐる。

(一〇六)ならんでいらつしやる。「おはしまさふ」はつねに主語が複数である。

御經のことにて、明日わたらせたまはむとて、今宵まゐりたり。南の院の北前にさしのぞきたれば、高坏どもに火をともして、二人、三人、四人、さべきどち屏風引きへだてたるもあり。几帳などへだてなどもしたり。また、さもあらで、集まりゐて衣どもとち重ね、裳の腰さし、化粧するさまはさらにもいはず、髪などいふもの明日より後はありがたげに見ゆ。「寅の時になむわたらせたまふべかなる。なか、いままでもゐりたまはざりつる。扇持たせて、もとめきこゆる人ありつ」と告ぐ。

さてまことに寅の時から装束きたちてあるに、明けはて、日もさし出でぬ。西の對の唐廂にさしよせてなむ乗るべきとて、渡殿へあるかぎり行くほど、まだうひうひしきほどなる新參などは、つつましげなるに、西の對に殿の住ませたまへば、宮もそこにおはしまして、まづ女房ども車に乗せさせたまふを御覽すとて、御簾のうちに、宮・淑景舎・三四の君・殿のうへ・その御おとと、三所立ち並みおはしまさふ。

車の左右に、大納言殿・三位の中將二所して簾うちあげ、下簾引き上げて乗せたまふ。うち群れてだにあらばすこしかくれどころもやあらむ、四

(二〇) 乗車する人の名、順序、配當を記したものである。

(二一) 大勢のかたがたの視線がそそがれる中で、中宮様が見苦しいなど御覽になることほど、つらいことはない。

(二二) はづかしくて冷汗がにじみ出るので、せつかく手入れをした髪などもみまばらばらにはづつ上つてしまつてはるまいかと思はれる。

(二三) 大納言伊周と三位の中將隆家とが。

(二四) しつかりして賢明なためなのか、あつかましいためなのかの意。または上上の面目であつたか、不面目なことであつたかの意であらうか。「かしこき顔もなきか」とし、氣のきいた顔もないかと思はれるとか、ばかづらでもしてゐたかと解する説は探らない。「思ひたどる」はさかのぼつて推量する意。

(二五) 氣どつて何かいひなどするなかに、明順の朝臣が。明順は高階成忠の三男、左中辨正四位下。中宮の御伯父。

(二六) 胸をはつてゐる。得意のさま。

(二七) 女院(東三條院詮子)。

(二八) 女院が御出發になつてから。

人づつ書立にしたがひて、「それ、それ」呼び立てて乗せたまふに、あゆみ出づるこちぞ、まことにあさましう顯證なりといふも世のつねなり。御簾のうちにそこらの御目どものなかに、宮の御前の見苦しと御覽せむばかり、さらにわびしきことなし。汗のあゆれば、つくろひたてたる髪などもみなあがりやしたらむとおほゆ。からうじて過ぎ行きたれば、車のもとにはづかしげに清げなる御さまでもしてうち笑みて見たまふもうつならず。されど倒れでそこまでは行き着きぬるぞ、かしこきかおもなきか思ひたどらるれ。

みな乗りはてぬれば、引き出でて、二條の大路に榻にかけて、もの見車^{くるま}のやうに立てならべたる、いとをかし。人もさ見たらむかしと心ときめさせらる。四位・五位・六位などいみじうおほう出で入り、車のもとに來て、つくろひものいひなどするなかに、明順の朝臣のこち空をあふぎ、胸をそらいたり。

まづ、院の御迎へに殿をはじめたてまつりて、殿上人・地下などもみなまゐりぬ。それわたらせたまひて後に、宮は出でさせたまふべしとあれば、

(二六)待ち遠しいことだと思つてゐると、日が高くなるぼつてから女院は御出發である。

(二七)女院の御車を入れて十五輛、そのうち四輛は尼の車で、第一の御車(女院の御車)は唐胎(屋根が唐風の破風造り)の車である。

(二八)女房の車十輛である。底本など「十」を「丁」につくる。
(二九)うつりあつて、すばらしい織物、色さまざまの唐衣などよりも、優美ですばらしいことの上ない。

(三〇)いらつしやる方がだれもかれもみな女院をたいせつにお世話し、その御行列をお通し申されるありさまは。
(三一)わたくしども中宮女房の車が二十輛ならべてあるのも。

(三二)女院の方からもまたすばらしいと見てゐることであらうよ。
(三三)早く中宮様も御出發になればいいのにと。「なむ」は「はしい」の義。

(三四)豊前だといふ。傳未詳。
(三五)丹波宿禰重雅。典薬頭は從五位下相嘗官。一知る人は妻の意。

(三六)禁色の拜用をゆるされたのだね。葡萄酒は紫に似てゐるうへ、織物であるからゆるしを得ねば着用できない。
(三七)道頼。長徳元年六月薨。年二十四。

いと心もとなしと思ふほどに、日さしあがりてぞおはします。御車ごめに二六十五、四つは尼の車、一の御車は唐車なり。それにつづきてぞ尼の車、後、日より水晶の數珠、薄墨の裳・袈裟・衣、いとみじくて、簾はあげず、二七下簾も薄色の裾すこし濃き、つぎに女房の十、櫻の唐衣・薄色の裳・濃き衣・香染・薄色の表着ども、いみじうなまめかし。日はいとうらかなれど、空は緑に霞みわたれるほどに、女房の装束の二九にほひあひて、いみじき織物、色色の唐衣などもなまめかしうをかきことかぎりなし。

關白殿、そのつきつぎの殿ばら、おはするかぎりもてかしづきわたしたてまつらせたまふさま、いみじくめでたし。これをまつ見たてまつり、めでさわく。三一この車どもの二十立てならべたるもまたをかしと見るらむかし。

三二いつしか出でさせたまはなむと待ちきこえさするに、いとひさし。いかなるらむと心もとなく思ふに、からうじて采女八人、馬に乗せて引き出づ。青裾濃の裳・紺帯・領布などの風に吹きやられたる、いとをかし。三四「ふせ」といふ采女は、典薬の頭重雅が知る人なりけり。葡萄酒の織物の指貫を着たれば、「重雅は色ゆるされにけり」など山三七の井の大納言笑ひたまふ。

(一三)女院の御ありさまに、これ(宮様の御行列)はまたくらべものにならないほどりつばなことであった。
 (一四)葱花葎。天皇、皇后が神社その他へ行啓の時にある、屋蓋に葱の花のやうな飾りのあるもの。
 (一五)御綱の介が輿の綱を四方に張つて。

(一六)感動のあまり頭の毛が立つなど人(一七)がいふのは、決してうそではない。
 (一八)そんなこと―頭の毛が立つなどといふこと―があつたら、その後は悪い髪(一九)の持ち主たる自分たちも歎かなければならないであらう。
 (二〇)おこそそかでりつばで。

(二一)「人給ひに」(副車に)か、「一度車」(二二)か。能本「人たまひに」とある。「副車」を「ひとたび」といつた例があればそれによるべきであるが、さもなければ一齊(二三)などの意で「一度に」説を採るべきであらう。

(二四)どんどんと。いそぐさま。

(二五)積善寺に御到着になると。

(二六)總門のところだ。

(二七)雅樂。

(二八)獅子舞、狛犬舞だ。

(二九)左方の唐樂と右方の高麗樂と並んで同時に太鼓鉦鼓を打ちはやし、笛、琴などを吹き合はせること。集合亂聲、小

みな乗りつづきて立てるに、いまぞ御輿出でさせたまふ。めでたしと見たてまつりつる御ありさまには、これ、はた、くらぶべからざりけり。

朝日のはなばなとさしあがるほどに、水葱の花いときはややかにかがやきて、御輿の帷子の色つやなどのきよらささへぞいみじき。御綱張りて出で

させたまふ。御輿の帷子のうちゆるぎたるほど、まことに「頭の毛」など人のいふ、さらにそら言ならず。さて、後は髪あしからむ人もかこちつべし。あさましう、いつくしう、なほいかでかかる御前に馴れつかうまつる

らむと、わが身もかしこうぞおぼゆる。御輿過ぎさせたまふほど、車の樹どもひとたびにかき下したりつる、また牛どもにただかけにかけて御輿の後につづけたるこち、めでたく興あるさま、いふかたもなし。

おはしまし着きたれば、大門のもとに高麗・唐土の樂して、獅子・狛犬をどり舞ひ、亂聲の音、鼓の聲にももおぼえず。こは、生きての佛の國

などに來にけるにやあらむと、空に響きあがるやうにおぼゆ。

うちに入りぬれば、色色の錦のあげばりに、御簾いと青くかけわたし、

屏帳ども引きたるなど、すべてすべてさらにこの世とおぼえず。御棧敷に

亂聲、林邑亂聲など種々ある。

(一四) 門内にはひつてしまふと。

(一三) 平地に柱を立て、棟を上げて、四方と方に幕を張つて包んだ帷舎。帷。

(一二) 幕、横に引いただけで屋根はない。

(一四) 伊周卿と隆家卿。

(一五) 乗つたところでさへあれほど明かるくあらはであつたのに、ここは。

(一六) 髪も。かもじを入れて、添へ毛してある。

(一七) 乗車中は垂れ髪を唐衣の中へ着こめる。

(一八) ふくらみひろがつて、へんになつてゐるであらう。それに髪の色は黒さ赤さまでも辨別できさうな明かるさなのがつてもつらいので、急におりない。

(一九) うしろの方からどうぞ。

(二〇) その女房もわたくしと同じ心理なのであらうか、伊周、隆家らに對してこそおのきくさいませ。勿體なうございませ。などといふ。

(二一) 末詳。清少納言の戀人か夫の名であらう。夫の棟業かといふ。

(二二) 祭しが悪いね。「引きおろし」は底本「ひきおとろし」。

(二三) 宮様が伊周卿にそのやうに申しおかれたのであらうと拜察するにつけても

(二四) さきに車を下りた人(女房)が、供養の儀式などの見物できさうな端の方に八人くらゐすわつてゐた。

さしよせられたれば、またこの殿ばら立ちたまひて、「とう下りよ」とのたまふ。乗りつるところだにありつるを、いますこし明かう顯證なるに、つくろひそへたりつる髪も、唐衣のなかにてふくだみ、あやしうなりたらむ。

色の黒さ赤ささへ見えわかれぬべきほどなるがいとわびしければ、ふともえ下りず。清「まづ後なるこそは」などいふほどに、それもおなじ心にや、後の女房「しぞかせたまへ。かたじけなし」などいふ。大納言「はぢたまふかな」と笑ひて、からうじて下りぬれば、よりおはして、大納言「むねたかなどに見せて、かくしておろせ」と宮のおほせらるれば、來たるに、思ひぐまなく」とて引きおろして率てまゐりたまふ。さ、きこえさせたまひつらむと思ふも、いとかたじけなし。

まゐりたれば、はじめ下りける人、もの見えぬべき端に八人ばかりのけり。一尺餘二尺ばかりの長押の上に、おはします。大納言「ここに立ちかくして率てまゐりたり」と申したまへば、宮「いづら」とて、御几帳のこなたに出でさせたまへり。まだ御裳、唐の御衣たてまつりながらおはしますぞいみじき。紅の御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

くれないの御衣、なかに唐綾の柳の御衣、

(一五) 高さ一尺餘か二尺くらゐの。

(一六) 宮様はいらつしやる。

(一七) お召しになつたままで。

(一八) なみひととほりのよきではない。

(一九) 表白裏青。

(二〇) 紋様の縁を糸色か金泥で細くまと

ひとり、その紋様のきはをあざやかに見

せるもの(絹)。(田沼善一氏説)象は「か

たち」限は「限」であるといふ。

(二一) 「こりつばでございます」などと

いつても、こりには出しては、世間なみの

表現しかできない。

(二二) 道長(中宮大夫)が女院の御供に

着て、一度人に見られたのとおなじ下襲

のままであつたら、人々がよくないと思

ふであらうといふので、別の下襲を。

(二三) とても風流好みでいらつしやるわ

ね。

(二四) 假髻(すゑ)の前につける飾具。

金属製の玉をちりばめた美しい具。蔽髻

(ひたひ)といふ。釵子はこれを假髻の前

前に立てるため左右からさし込みに用ゐ

る簪である。

(二五) はつきり。くつきり。

(二六) 一雙。

(二七) 端の縁を長押の端に並行させて。

(二八) 師輔の子。兼家と同母の弟。したが

つて、道隆の叔父にあたる。「中納言の君」

といふ女房は忠君のむすめであつた。

(二九) 時平の二男頼忠。宰相の君の父は

葡萄染の五重襲の織物に赤色の唐の御衣、地摺の唐の薄物に、象眼重ねたる御裳などたてまつりて、ものの色などはさらになべてのに似るべきやうもなし。

宮「われをばいが見る」とおほせらる。清「いみじうなむさぶらひつる」なども、言に出でては世のつねにのみこそ。宮「ひさしうやありつる。それは大夫の、院の御供に着て人に見えぬる、おなじ下襲ながらあらば、人わろしと思ひなむとて、こと下襲縫はせたまひけるほどに、おそきなりけり。いと好きたまへりな」とて笑はせたまふ。いとあきらかに、晴れたるところはいますこしぞげざやかにめでたき。御額あげさせたまへりける御釵子にわけめの御髪のいささか寄りてしるく見えさせたまふさへぞ、きこえむかたなき。

三尺の御几帳一よろひをさし違へて、こなたのへだてにはして、そのうしろに疊一枚を長さまに縁を端にして、長押の上に敷きて、中納言の君といふは殿の御叔父の右兵衛の督忠君ときこえけるが御むすめ、宰相の君は、富の小路の右の大臣の御孫、それ二人ぞ上にあて、見たまふ。御覽じわた

右馬頭重輔。(一三〇)宮様は清少納言をここに上らせたいとお考へだなど心得て。

(一二七)それでは少納言もおはいいり。

(一二三)中務省侍従の次位にあり、良家の子弟に禁中殿上のことを習はせるために補せられたが、このころは諸家の士も任せられてゐた。「内舍人」といふところの意。

(一二七)馬副ひ。馬に乗つた人に附き添ふ人。宰相の君のそばにすわつたので、その父の官職によつて皮肉つたのであらう。

(一二四)はれがまし。

(一二五)自慢話。自讃のはら話。

(一二六)こんなにしなみのない女(清少納言)をそれほど御寵愛になつたのかと。

(一二七)不都合にもわるく評判しようから。

(一二八)事實なのだからしかたがない。まつたく身のほどに過ぎたことどももあるにちがひないのである。なほ底本とその同類本、こともくありぬへし。

(一二九)伊周(二十一歳)と道頼(二十四歳)と。ただし道頼はこの時權中納言左衛門督であり、この年八月廿八日に大納言になつてゐるから、この段の執筆年時はそれ以後である。

(一三〇)隆家。二〇六頁参照。

(一三一)近衛の陣に着いたままの装束で、弓箭を帯びて。

して、宮「宰相はあなたに行きて人どものゐたるところにて見よ」とおほせらるるに、心得て、宰相「ここに、三人はいとよく見侍りぬべし」と

申したまへば、宮「さは、入れ」とて召し上ぐるを、下にゐたる人人は、

「殿上ゆるさるる内舍人なめり」と笑へど、清「こは、笑はせむと思ひたまひつるか」といへば、人人「馬さへのほどこそ」などいへど、そこにの

ほりゐて見るは、いと面だたし。かかることなどぞみづからいふは吹き語な

どももあり、また君の御ためにも輕輕しう、かばかりの人をさ思しけむな

ど、おのづからも、もの知り、世のなかもどきなどする人は、あいなうぞ

かしこき御ことにかかりてかたじけなけれど、あることはまたいかかは。

まことに身のほどに過ぎたることどもありぬべし。

女院の御棧敷、ところどころの御棧敷ども見わたしたる、めでたし。殿の御前、このおはします御前より院の御棧敷にまゐりたまひて、しばしありて、ここにまゐらせたまへり。大納言二所、三位の中將は陣につかうまつりたまへるままに、調度負ひて、いとつきづきしうをかしうておはす。

殿上人、四位・五位こちたくうちつれ、御供にさぶらひて並みたり。

- (一八三) 關白道隆がはひつて來られて。
 (一八四) 繪にかいてあるやうに美しい。
 (一八五) 底本系諸本すべて「いま一尺は」とある。前本「いまうへけふは」能本「今いらへけふは」とある。この本文と意義未詳。「一尺」を「一人」の誤寫と見て、殿の上を指すものと見たが、はつきりしない。前本の「うへ」は殿の上であらう。
 (一八六) 「若君」とも解されるが、能本に「おまへ」とあるのを參考して「我が君」の方が妥當と考へる。すなはち中宮をさす。「おはしませ」は底本「おはせませ」
 (一八七) わたくし(清少納言)が着てゐる。
 (一八八) 僧の正服。赤色の袍と裳。
 (一九〇) 報賽する。僧に物を與へること。つまり、これを法服のない僧に與へたらよかつたの意。底本など「かへり申へかりけれ」能本・前本「かへり申すへかりけれ」(一九一) さうした法服を取つて着ていらつしやるのか。
 (一九二) 退いていらつしやつたが。
 (一九三) 清原の僧都と戯れたのであらうか
 (一九四) 隆圓。伊周の弟。一九〇頁参照。
 (一九五) 僧侶だから剃髪して青々として、變らじい感じなのである。
 (一九六) 隆圓様は僧都でいらつしやるから、僧侶の中にまじつて威儀を正してをられるべきなのに、さうなさらないで。

一八二
 入いらはせたまひて見たてまつらせたまふに、みな御裳・御唐衣、御匣みくしげ殿どのまでにき着きたまへり。殿どののうへは裳もの上に小袷こあきをぞ着きたまへる。關白「繪ゑにかいたるやうなる御さまどもかな。いま一人は、今日は人人しかめるは」と申したまふ。關白「三位の君、宮の御裳も脱ぬがせたまへ。このなかの主君すくには、わが君みこそおはしませ。御棧敷さじきの前に陣屋ぢんや据すさせたまへる、おほろげのことかは」とてうち泣かせたまふ。げに見えて、みな人涙ひとなみだぐましきに、赤色あかに櫻うづの五重ごじゆうの衣きぬを御覽みかんじて、關白「法服ほふくの一つ足ひとつたらざりつるを、にはかにまどひしつるに、これをこそかへり申すべかりけれ。さらずは、もしまた、さやうのものを取り占しめられたるか」とのたまはするに、大納言殿おほのくわんどのすこしいそきてゐたまへるが、聞きたまひて、「清僧都せいそうどうのにやあらむ」とのたまふ。一言ひとこととしてめでたからぬことぞなきや。
 僧都そうどうの君、赤色あかの薄物うすものの御衣ごころも、紫の御袈裟むすし、いと薄き薄色の御衣ごころもども、指貫さしぬきなど看たまひて、頭かしらつきの青くうつくしげに、地藏菩薩ぢざうぼさつのやうにて、女房にようばうにまじりありきたまふも、いとをかし。人人「僧綱そうこうのなかに威儀具足ゐぎぐそくしてもおはしませで、見苦みくるしう、女房にようばうのなかに」など笑ふ。

女房の中にいらつしやるなんて、見苦しう。「威儀具足」は法華經などにしばしば見える文句である。

(一九五)伊周の子、道雅。

(一九六)女房たちの中にお抱き入れ申すと、どうした粗相があつたのか、大聲でお泣きになるのまでが大變にぎやかに起こる。

(一九七)御法事がはじまつて。

(一九八)法會につとめる衆僧中の首座の僧

(一九九)香花。あるいは「講」であらうか。

(二〇〇)一日中見てゐると、目もだるく疲

れて苦しい。日ぐらしは古く清んで「日ぐらし」と讀んだ。

(二〇一)勅使。

(二〇二)床几の類である。

(二〇三)宮様はすぐこのまま内裏へ。

(二〇四)ひとまづ二條の宮へ歸つてから、

まあ。

(二〇五)右少辨高階信順。明順の兄弟。正

曆四年十一月、五位の藏人。

(二〇六)主上の仰せ言にそのまましたがつ

て。

(二〇七)「陸奥の千賀の鹽竈近ながらから

きは人にあはぬなりけり」(續後撰集戀二

讀み人知らず)「からき」は辛いのも意。

(二〇八)相互に交換されたりするのをも。

大納言殿の御棧敷より、松君率てたてまつる。葡萄染の織物の直衣、濃

き綾のうちたる、紅梅の織物など着たまへり。御供に例の四位・五位、い

とおほかり。御棧敷にて、女房のなかにいただき入れたてまつるに、なにこ

とのあやまりにか、泣きののしりたまふさへいとはええし。

ことはじまりて、一切經を蓮の花の赤き一花づつに入れて、僧俗・上達

部・殿上人・地下・六位、なにくれまで持てつづきたる、いみじうたふと

し。導師まあり、香はじまりて、舞ひなどす。日ぐらし見るに、目もたゆ

く苦し。御使に五位の藏人まありたり。御棧敷の前に胡床立ててゐたるな

どげにぞめでたき。

夜さりつかた、式部の承則理まありたり。「やがて夜さり入らせたまふべ

し。御供にさぶらへ」と宣旨かうぶりて」とて、歸りもまゐらず。宮は「ま

づ歸りてを」とのたまはずれど、また藏人の辨まありて、殿にも御消息あ

れば、ただおほせ言にて、入らせたまひなむとす。

院の御棧敷より「ちかの鹽竈」などいふ御消息まありかよふ。をかしき

ものなど持てまゐり違ひたるなどもめでたし。

△(二〇九)御法事が終つて、女院は還御あそばされる。

△(二一〇)院の御所の庶務をつかさどる職員。

△(二一一)半分が御供にまゐつたのであつた。

△(二一二)内裏では、宮の御供にまゐつてゐる女房は、(その従者が)寝具などを(早く)持つて来てくればよいのにと待つてゐたが、まつたく影も形も。

△(二一三)晴れ衣で着馴れてゐないため、身にびつたりしないのである。

△(二一四)翌朝。

△(二一五)辯解するところも聞けば、もつともである。

△(二一六)「このお天気によつてわたくしの幸運のほどはわかりました。どうお考へですか」と宮様に申しあげなされるが、お得意のお氣持もまことにもつともである。

△(二一七)以下この段の終まで能本・前本にない。初稿にあつて再稿で省いたか、それとも作者(あるいは後人)の補記か。おそらく前者であらう。

二〇九 ことはてて、院還^{かへ}させたまふ。院司^{かんじ}・上達部^{かんだちの}など、今度^{こたみ}はかたへぞつかうまつりたまひける。

宮は内裏^{うち}にまゐらせたまひぬるも知らず、女房^{むす}の従者^{しゆざ}どもは、二條の宮にぞおはしますらむとて、それにみな行きゐて、待てども待てども見えぬほどに、夜いたうふけぬ。内裏^{うち}には、宿直物^{とくちもの}持て來なむと待つに、きよう見えきこえず。あざやかなる衣^{きぬ}どもの身^みにもつかぬを着て、寒きまま、いひ腹立^{はらた}てど、かひもなし。つとめて來たるを、「いかでかく心もなきぞ」などいへど、陳^{ちん}ぶることはいはれたり。

またの日、雨の降りたるを、殿^{との}は、道隆^{みちたか}「これになむおのが宿世^{すぐせ}は見え侍りぬる。いかが御覽^{ごん}ずる」ときこえさせたまへる、御心^{ごん}おごりもことわりなり。されど、そのをり、めでたしと見たてまつりし御ことどもも、いまの世の御ことどもに見たてまつりくらぶるに、すべてひとつに申すべきにもあらねば、もの憂くて、おほかりしことどももみなとどめつ。

一卷で、その文九條より成る。一條を誦すること錫杖を振るが、その音を聞くこと、一切衆生菩提心を起し、諸佛もこれをもつて成佛するといふ。(一)念佛後の回向文。「光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨」(佛說觀無量壽經)回向は自分の修めた功德を他に回し向ける意。
 【百六十四】(一)風俗歌。もと諸國の民謡。
 (二)「わが庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門」(古今集十八雜下 古今六帖二・わが宿は、同六・とふとふきませ)であらうか。なほ、梁塵秘抄にもよく似た歌が見える。
 (三)古典的な神樂・催馬樂などに對して當世風の歌、現代式の歌の義で、その時に新らしく作り出したもの。
 【百六十五】(一)青蛾の色。るり色。あさぎの濃い色で五月以後に着るといふ。
 【百六十六】(一)糊をひかぬ絹で縫つたもの。表裏おなじ色をあはせて縫ふ。なほ「白き」で切る説もある。
 (二)この句はつぎの段にも關聯がある。枕冊子が歌枕でないことを示すもの。山岸徳平氏は次段の冒頭に冠して校訂せられたが、むしろさうした語氣であらう。この一句春曙抄本になく、能本にはこの段の末尾にあり、「ひとへは」で改行になつてゐる。

たふときこと 九條の錫杖。念佛の回向。

二百六十四

歌は 風俗。なかにも、杉立てる門。神樂歌もをかし。今様歌は長うてくせづいたり。

二百六十五

指貫は 紫の濃き。萌黄。夏は、一藍。いと暑きころ、夏蟲の色したるも涼しげなり。

二百六十六

狩衣は 香染の薄き。白きふくさ。赤色。松の葉色。青菜。櫻。柳。また青き。藤。男はなにの色の衣をも着たれ。

二百六十七

【百七】(一)束帶を着た禮装の時に用ゐる紅の單衣の柏などを、束帶を着ないで、ちよつと着てゐるのは。

(二)氣にくはない、おもしろくない。

(三)白い絹を練つたもの。淡黄色。

(四)やはり、單衣は白いのかぎる。

【百十六】(一)表蘇枋、裏は青打ちとも紅打ちともいふ。

(二)紅の練り絹の下襲。

【百十九】(一)底本とその同系統本すべて「ほお」とある。能本「ほを」前本「ほよ」從來春曙抄本文などによつて「あを」とし、「色」につづけて「青色」としたのは誤。

(二)前本に「かみのいろは」とあるやうに、紙の色はの意であらう。赤や紫で張つた朴の骨の扇の例は、この冊子中にある。一一・二・一七頁参照。

【百二十】(一)模様なしで、描きも繡ひもしていないのをいふ。

單衣は 白き。日の装束の、紅の單衣の柏などかりそめに着たるはよし。されど、なほ白きを。黄ばみたる單衣など着たる人は、いみじう心づきなし。

練色の衣どもなど着たれど、なほ單衣は白うてこそ。

二百六十八

下襲は 冬は、躑躅。櫻。搔練襲。蘇枋襲。夏は、二藍。白襲。

二百六十九

扇の骨は 朴。色は赤き。紫。緑。

二百七十

檜扇は 無紋。唐繪。

二百七十一

【三十七】(一)京都市右京區松尾神社。大山
昨命に別雷神を配祀する。

(二)京都府石清水八幡宮。祭神は應神天皇、神功皇后、玉依姫。

(三)京都府乙訓郡大原野。平安寛都のとき嘉祥三年かに春日神社(藤原氏の氏神)を勧請したといふ。

(四)京都市上京區。祭神今木神、久度神、古開神。相殿、比賣神。

(五)空屋。空家。

(六)「ちはやぶる神の齋垣にはふ萬も秋にはあへずうつろひにけり」(古今集五
秋下・古今六帖「色づきにけり」)「あへず」

は「敢へず」で、たへず、能はずなどの意。
(七)「立たせられ」の義。つまり、いつ

までも動けなかつたことであるの意。「立

て」は下二段活用の他動詞(未然形)。
(八)「みくまり(水分)」の訛りからきた

といふ。奈良縣に三箇所ありといふが吉

野山の神社がもつとも有名である。
【三十三】滋賀縣滋賀郡。萬葉集以來の

歌枕。(二)島根縣。

【三十三】(一)屋の棟を立てないで、ふきお
ろしに同一材料(蘆、茅、草など)で造
つた家。普通名詞である。
(二)四阿。棟を置かず、四本の柱に方桁
造りにふきおろしにしたもの。

神は 松の尾。八幡、この國の帝にておはしましけむこそめでたけれ。

行幸などに、水葱の花の御輿にたてまつるなど、いとめでたし。大原野。

春日、いとめでたくおはします。平野は、いたづら屋のありしを、「なに

するところぞ」と問ひしに、「御輿宿」といひしも、いとめでたし。齋垣

に葛などのいとおほくかかりて、紅葉の色色ありしも、「秋にはあへず」

と貫之が歌思ひ出でられて、つくづくとひさしうこそ立てられしか。みこ

もりの神、またをかし。賀茂、さらなり。稻荷。

二百七十二

崎は 唐崎。三保が崎。

二百七十三

屋は まろ屋。あづま屋。

二百七十四

【百十四】(一)禁中で、夜警の武士が時刻を奏上するのをいふ。

(二)沓の音である。こぼこぼと音をたて沓底を地面にすつて来て、弓の弦をびゆんと鳴らして。

(三)なにのだれそれ。從來すべて「なんけのながし」「何家の某」と校訂されてゐるが、底本系統すべて「なんなのながし」とあるのでそれによつた。

(四)清涼殿の殿上の小庭に時の簡がある。この簡に第四刻ごとに枕をさすのである。

(五)子の刻には撃鼓九つ、丑の刻には八つなので、民間では子の刻を「九つ」、丑の刻を「八つ」などとなにも知らずに呼ぶのをいふ。

(六)第四刻(一刻は半時間)の意。つまり子の第四刻、丑の第四刻などである。

【百十五】(一)天皇はおやすみでいらつしやるであらうかしらなどと拜察申しあげるころに。

(二)藏人を指す。八三頁(九)参照。

【百十六】(一)既註。三五二頁参照。

(二)致平親王。村上天皇の皇子、四品兵部卿。天元四年出家、長久二年薨。年八十九。

(三)源兼資のむすめが成信に棄てられて、その女を親の兼資が伊豫の國につれて下つたことは。

「^一時奏する、いみじうをかし。いみじう寒き夜中ばかりなど、こぼこぼとこぼめき、沓すり来て、弦うち鳴らしてなむ「何の某、刻丑三つ、子四つ」など、はるかなる聲にいひて、時の枕さす音など、いみじうをかし。「子九つ、丑八つ」などぞ、さとびたる人はいふ。すべて、なにもなにも、ただ四つのみぞ枕にはさしける。

二百七十五

日のうらうらとある雲つかた、また、いといたうふけて、子の刻などいふほどにもなりぬらむかし、大殿ごもりおはしましてにやなど、思ひまゐらするほどに、主上「をのこども」と召したるこそいとめでたけれ。

夜中ばかりに、御笛の聲の聞えたる、またいとめでたし。

二百七十六

成信の中將は、入道兵部卿の宮の御子にて、かたちいとをかしげに、心ばへもをかしうおはす。伊豫の守兼資がむすめ忘れて、親の伊豫へ率て下

(四)明日の曉に女が父とともに出發するといふので、前夜に訪問されて。

(五)人の評判などなされる時には、悪い者は悪いとはつきり斷言なされるかたであったが、御自身のかうした言行不一致をいかがおぼしめされるのであらうの餘意を含むか。「」どめの例。七三・一四〇・一四四頁参照。

(六)神妙に物忌をつつしんで。「つのかめ」以下未詳。「め」は海藻か。「」にたてては「煮たてて」か。後考をまつ。

(七)清少納言、赤染衛門、藤式部など宮中での呼び名を姓で呼ばれてゐる人がある、その人が。「姓」は底本とその同系統本すべて漢字。能本「さう」。

(八)この前後脱落があるらしい。未詳。

(九)能本「をかしきかた」の上に「兵部とて」とある。前本にはない。

(一〇)底本「おまへわり」とある。

(二)中宮附きの女房。四七段参照。底本「しきふのおりと」。

(三)中宮。

りしほど、いかにあはれなりけむとこそおぼえしか。曉あけに行くとして、今宵こよひおはして、ありあけの月に歸りたまひけむ直衣姿なほぎすがたなどよ。

その君、つねにゐてもいいひ、人のうへなどわるきはわるしなどのたまひしに。

物忌ものいみくすしう、つのかめなどにたててくふものまつかいかげなどするもの、名を姓なをせいにて持たる人のあるが、こと人の子こになりて、平たひらなどいへど、ただそのものと姓せいを若き人人、言ことぐさにて笑ふ。ありさまもことなることもなし。をかしきかたなども遠とほきが、さすがに人にさしまじり、心などのあるを、御前ごまへわたりも「見苦みくるし」などおほせらるれど、腹はらぎたなきにや、告ぐる人もなし。

一條の院に造らせたまひたる一間ひとまのところには、にくき人はさらによせず。東ひがしの御門みかどにつと向かひて、いとをかしき小廂こせうに、式部のおもともろともに夜も晝ひるもあれば、うへもつねにも御覽ごらんじにいらせたまふ。「今宵こよひは、うちに寝ねなむ」とて、南みなみの廂せうに二人臥ふしぬる後に、いみじう呼ぶ人のあるを、「うるさし」などいひあはせて、寝ねたるやうにてあれば、なほ

(三)「この兵部」の前に脱落があるらしい。三八一頁(九)参照。前本には「この兵部」もない。兵部の傳未詳。

(四)そのまますこにすわりこんで、その男となにか語つてゐるやうである。「な」は傳聞・推定の助動詞で、こは推定の意。

(五)成信。長徳四年中將に昇進した。

(六)中將(成信)のやうだわ。これは一體何事をあんなにすわりこんで話してゐるのかしら」といつて。

(七)式部のおもとと二人で、ひそかに。

(七)兵部。

(八)さうしてぬれてまで訪ねて来たやうな時には、いままでのいやなこと氣にいらぬこともすつかり忘れてしまふものがある。

(九)凸なせ彼女はさういふのであらうか。男のそんな態度を。

(一〇)昨夜も、一昨夜も、その前の夜もすべてこのごろ毎夜かかさず通つて来る男性が、その夜ひどい雨が降つたのにもめげないで来たのは。

(一一)やはり一夜でも離れてゐまいと思つてゐるやうだとその志がいとほしいのだ

(一二)さうでなくて、ずつと長い間訪ねて

過もせず、こちらに氣をもませて平氣で

降る夜にかぎつて来たやうなのは、愛情

いみじうかしがましう呼ぶを、宮「それ起こせ。そら寝ならむ」とおほせられければ、この兵部来て起こせど、いみじう寝入りたるさまなれば、兵部「さらに起きたまはざめり」といひに行きたるに、やがてあつきて、

ものいふなり。しばしかと思ふに、夜いたうふけぬ。清「權中將にこそあ

なれ。こはなにごとをかくめてはいふぞ」とて、みそかにただいみじう笑

ふも、いかでかは知らむ。曉までいひ明かして歸る。清「またこの君いと

ゆゆしかりけり。さらによりおはせむにものいはじ。なにごとをさはいひ

明かすぞ」などいひ笑ふに、遣戸あけて、女は入り來ぬ。

つとめて、例の廂に人のものいふを聞けば、兵部「雨いみじう降るをり

に來たる人なむあはれなる。日ごろおぼつかなく、つらきこともありと

も、さて、ぬれて來たらむは、憂きこともみな忘れぬべし」とは、などて

いふにかあらむ。さあらむを。昨夜も、昨日の夜も、そがあなたの夜も、

すべてこのごろうちしきり見ゆる人の、今宵いみじからむ雨に障らで來た

らむは、なほ一夜もへだてじと思ふなめりとあはれなりなむ。さらで、日

ごろも見えず、おぼつかなくて過ぐさむ人の、かかるをりにしも來むは、

がある部類になんか絶対に入れまいとわたしは思ふ。

(三三)人間の心といふものはそれぞれ異なるものだからであらうか、兵部の考へと自分の氣持とはちがふやうである。

(三四)もの辨別のつく、思慮ある女で、りつぱだと思はれる女に關係をむすんで、ほかにたくさんかよふ先もあり、また本妻ともいふべき女もあるので、さう度々も見えぬ男が、そんなひどい雨の日などに來た時は、その男の眞底は他の人にもその志のほどを語りつがせ、またほめられたいと思つてわざとするのであらうか(三五)もつともさうしたことも、全然思ひもかけてゐないやうな女に對しては、どうして、たとへ偽りにしてもそんなに志のほどを見られたい、見せたいなどと思はう。すこしは思つてゐればこそである。だから兵部のいふことも一往もつともであるが。

(三六)「し」は強意の氣持。さういふ時には特に。

(三七)身にはそは遠く馳せ。

(三八)そんな夜に來た男性は。

(三九)そこが人目に立つので長く居られぬところでも、人の目をばからねばならぬ事情があつても、決してそのまま歸さないで、きつと、たとへほんのしばらくでもない。「立ちながら」は三三五頁参照。

さらに心ざしのあるにはせじとこそおぼゆれ。人の心こころなるものなれば

にや。もの見知り、思ひ知りたる女の、心ありと見ゆるなどをかたらひて、

あまた行くところもあり、もとよりのよすがなどもあれば、しげくも見え

ぬを、なほさるいみじかりしをりに來たりしなど、人にも語りつがせ、ほ

められむと思ふ人のしわざにや。それもむげに心ざしなからむには、げに

なにしにかは、つくり事にも見えむとも思はむ。されど、雨の降るときに

は、ただむつかしう、今朝まで晴れ晴れしかりつる空ともおぼえず、にく

くて、いみじきほそ殿、めでたきところともおぼえず。まいていとさらぬ

家などは、とく降りやみねかしとこそおぼゆれ。

をかしきこと、あはれなることもなきものを。さて月の明かきはしも、

過ぎにしかた、行末まで思ひ残さるることなく、心もあくがれ、めでたく、

あはれなること、たぐひなくおぼゆ。それに來たらむ人は、十日、二十日、

一月、もしは一年も、まいて七八年ありて思ひ出でたらむは、いみじうを

かしとおぼえて、えあるまじう、わりなきところ、人目つつむべきやうあ

りとも、かならず立ちながらも、ものいひて歸し、また泊るべからむは、

(三〇) 思ひ出されるをりがほかにあらうか。

(三一) いま傳はらない。

(三二) かはほり扇を。三一五頁参照。

(三三) 「夕闇は道も見えねどふるさとはもとこし駒にまかせてぞくる」(後撰集十三戀五、古今六帖一、大和物語上・夕されば)の類をいふのであらうか。

(三四) 「めでたかべき」の音便。

(三五) どうして、そのいやな雨にぬれて困つて来た男がすばらしいなんて思へよう。

(三六) 現存おちくぼ物語には主人公の左近の少將が古物語の交野の少將をとくに非難した(もどく)と稱すべき記事はない。

「もどく」を「準ずる・まねる」の意にとる説によるべきか。(山岸徳平氏説)しかし、ここは左近の少將が雨の夜におちくぼの君をたづねる記事をふまへてゐると見るよりは、島津久基博士説のやうに、現存おちくぼ物語の左近の少將が女君に向かつて交野の少將を皮肉まじりに評する記事を指すのであらうか。

(三七) その場合も昨夜、一昨夜とつづいて少將が通つてゐるからこそ、それもいいのである。

(三八) 現存おちくぼ物語に見える。

とどめなどもしつべし。

月の明かき見るばかり、ものの遠く思ひやられて、過ぎにしことの憂かりしも、うれしかりしも、をかしとおぼえしも、ただいまのやうにおぼゆるをりやはある。こま野の物語は、なにばかりをかしきこともなく、ことばも古めき、見どころおほからぬも、月にむかしを思ひ出でて、蟲ばみたるかはほり取り出でて、「もと見しこまに」といひてたづねたるが、あはれなるなり。

雨は心もなきものと思ひしみたればにや、片時降るもいとにくくぞある。やむごとなきこと、おもしろかるべきこと、たふとう、めでたかべいことも、雨だに降ればいふかひなく、くちをしきに、なにかそのぬれてかこち來たらむがめでたからむ。

交野の少將もどきたるおちくぼの少將などはをかし。昨夜、一昨日の夜もありしかばこそ、それもをかしけれ。足洗ひたるぞにくき。きたなかりけむ。

風などの吹き、あらあらしき夜來たるは、たのもしくて、うれしうもあ

りなむ。

(三六)「紅のはつ花染の色深く思ひし心われ忘れめや」(古今集十四戀四、讀人しらず)「わが命のまたけむかぎり忘れめやいや日にけには思ひ益すとも」(萬葉集四笠女郎)「逢はずして戀ひわたるとも忘れめやいや日にけには思ひ益すとも」(同十二)

(四〇)「をかしかんべし」とよむ。「をかしかる」の「る」が發音化して無表記の例。

(四一)六位の袍である。

(四二)こんなな自分が雨の夜の來訪者を攻撃するのを聞いて、雨の夜には女性のところへ行かない男も出來るかも知れない。

(四三)「戀しさはおなじ心にあらずとも今宵の月を君見ざらめや」(拾遺集十三戀三、月のあかがりける夜、女のもとにつかはしける 源信明)

【百七十七】(一)後朝の文をよこす男性が。
(二)問答無用だ(勝手にするがよい)。もうしやうがない。いまは交際を斷たう。

雪こそめでたけれ。「忘れめや」などひとりごちて、しのびたることは

さらなり、いとさあらぬところも、直衣などはさらにもいはず、袍、藏

人の青色などの、いとひややかにぬれたらむは、いみじうをかしかべし。

緑衫なりとも、雪にだにぬれなば、にくかるまじ。むかしの藏人は、夜な

ど人のもとにも、ただ青色を着て、雨にぬれても、しぼりなどしけるとか。

いまは晝だに着ざめり。ただ緑衫のみうちかづきてこそあめれ。衛府など

の着たるは、まいていみじうをかしかりしものを。かく聞きて、雨にあり

かぬ人やあらむとすらむ。

一月のいみじう明かき夜、紙のまたいみじう赤きに、ただ「あらずとも」

と書きたるを廂にさし入りたる月にあてて、人の見しこそをかしかりし

か。雨降らむをりはさはありなむや。

二百七十七

つねに文おこする人の「なにかは。いふにもかひなし。いまは」といひ

(三)夜が明けはじめるといつも来る手紙が見えないのは、もの足りないことと思つて。

(四)はつきりしたけぢめをつけるしつかりした心だなあ。

(五)その翌日、雨がひどく降つてゐる。

(六)引歌未詳。「まこも刈る淀の澤水雨降ればつねよりことまざるわが戀」(古今集十二戀二、貫之)。「雨降りて水まさりけり天の川今宵はよそに戀ひむとや見し」(後撰集五秋上、源仲忠)などの類をいふのであらうか。

(七)ここから別段ともみられるが、後朝うしろあさの文に關聯してつづけておく。

(八)すつと、すくに氷つてしまつたから。

(九)こまかく折り目がついてくぼんでゐるが墨がたいへん黒いところや、また薄

いところができて、行間もせまく。

(一〇)第三者として遠くから見えてゐるのも。

(一一)微笑しながら読んでゐるあたりの文面は、まことに。

(一二)待ちきれぬ氣持なのであらうか。

(一三)はつきりしないのを、ぼつりぼつりと、たどりたどり読んでゐるのは。

【三七六】(一)輝くばかりりつばなもの。も

て、またの日音ひびもせねば、さすがに明あきけたてば、さし出づる文ふみの見えぬこそさうさうしけれと思ひて、「さても、きはぎはしかりける心かな」といひて暮らしつ。

またの日、雨のいたく降る、晝ひるまで音おともせねば、「むげに思ひ絶たえにけり」などいひて、はしのかたにゐたる夕暮ゆふぐれに、笠かさしたる者の持もて來たる文ふみを、つねよりもとくあけて見れば、ただ「水増みづます雨の」とある、いとおほくよみ出いだしつる歌どもよりもをかし。

今朝けさはさしも見えざりつる空そらの、いと暗くらうかき曇くもりて、雪のかきくらし降るに、いと心ぼそく見出みだすほどもなく、白しろう積つもりて、なほいみじう降るに、隨身ずゐじんめきてほそやかなる男おとこの、笠かささして、そばのかたなる塙はなの戸とより入りて、文ふみをさし入れたるこそをかしけれ。いと白しろき陸奥國紙むつみのくにがみ・白しろき色紙しきしの結びたる、上うへに引きわたしける墨すみのふと氷りにければ、裾薄すそうすになりたるを、あけたれば、いとほそく巻まきて結むすびたる、卷目まきめはこまごまごまとくほみたるに、墨のいと黒う、薄く、くだりせばに、裏表書きうらへづき亂みだりたるを、うち返しかへしひさしう見るこそ、なにごとならむとよそにて見やりたるもをかし

のものしくりつばで堂々としてゐるもの。

(二)近衛の大將の前驅が警蹕ひびしてゐるさま。

(三)孔雀明王經。底本とその同系統本「くさ經」

(四)五大尊の御修法も。五大(力)尊は、五壇の御修法ともいひ、中央に不動明王、東壇に降三世明王、西壇に大威德明王、南壇に軍荼利夜叉明王、北壇に金剛夜叉明王を請じて祈禱する。

(五)正月八日から十四日まで七日間、宮中で最勝王經を講ぜられる法會。

(六)「えうする」は底本など「やうする」三二八頁参照。

(七)佛頂尊勝陀羅尼經により、尊勝佛頂を本尊として息災増益除病滅罪を修する法。四二三頁参照。

(八)毎年二月・八月の春秋二季に、四日間衆僧を宮中に集めて大般若經を轉讀(初中・終の數行だけを讀むこと)させるのをいふ。(九)金輪佛頂を本尊として天變兵亂を鎮めるために修する法。

(十)雷がひどく鳴るをりに。

(十一)宮中で、雷唱の時、近衛の將官が弓を持つて守護するために設けた陣屋。

(十二)まことに氣の毒である。

(十三)「下りよ」の意。大將の指揮する詞。能本「のほりおりとの給らん」

けれ。まいて、うちほほ多むところはいとゆかしけれど、遠うゐたるは、黒き文字もじなどばかりぞ、さなめりとおぼゆるかし。

額髮ひたひがみなが長やかに、面おも様よき人の、暗くらきほどに文ふみを得て、火ともすほども心もとなきにや、火桶あぶりの火を挟はさみあげて、たゞたゞしげに見ゐたるこそをか

しけれ。

二百七十八

きらきらしきもの 大將だいしょうの御前驅みさき追おひたる。孔雀經くわんげの御讀經みどきやう。御修法みずほよ。五

大尊だいてんのも。御齋會ごさいかい。藏人ざうじんの式部しきぶの丞ぢゆうの白馬あまびまの日大踏練おほほちりたる。その日、鞞しゆげ負ひの佐すけの摺衣すりぎぬえうする。尊勝王そんじやうわうの御修法みずほよ。季きの御讀經みどきやう。熾盛光しじやうくわうの御讀經みどきやう。

二百七十九

神かみなりのいたう鳴るをりに、雷鳴かみなりの陣ぢんこそいみじうおそろしけれ。左右さうの大

將しやう、中・少將ちゆうせうなどの御格子みかくしのもとにさぶらひたまふ、いといとほし。鳴りはてぬるをり、大將おほせて、「おり」とのたまふ。

【百十】(一)底本とその同系統諸本は「元」の字「え」に見える。中國の地誌。それに見える土地山海川澤の名を選び書いた屏風。

(二)後漢の班固の撰にかかる前漢の歴史書。百篇。それに載せた事蹟をかけた屏風。

(三)醍醐天皇が六帖の御屏風一雙に、正月から十二月までの自然の景物をかかせて、色紙形に歌を書かせられたものであらう。(關根正直博士説)

【百十一】(一)節分のかたがへである。九七頁参照。

(二)ほんとにたまらなく。

(三)おこつてゐない炭を、周圍に置いて、中に火があるやうにしたのはよい。(四)みんな外の方に火をかきのけて、炭を重ねて置いたその頂上に火を置いたのは、どうもおもしろくない。

【百十二】(一)いつも雪の降つた時には御格子をあげるのであるが、今日にかぎつて御格子をおろし申して。

二百八十

坤元録の御屏風こそをかしようおほゆれ。漢書の屏風は雄雄しくぞ聞えた。月次の御屏風もをかし。

二百八十一

節分違などして夜深く歸る、寒きこと、いとわりなく、頤などもみな落ちぬべきを、からうじて來着きて、火桶ひきよせたるに、火の大きにて、つゆ黒みたるころもなくめでたきを、こまかなる灰のなかよりおこし出でたるこそ、いみじうをかしけれ。

また、ものなどいひて火の消ゆらむも知らずあたるに、こと人の來て、炭入れておこすこそいとにくけれ。されど、めぐりに置きて、なかに火をあらせたるはよし。みなほかさまに火をかきやりて、炭を重ね置きたるいただきに火を置きたる、いとむつかし。

(二) わたくしども女房が集まつてひかへてゐると。

(三) 沿愛寺の鐘は枕をそばだてて聴き、香爐峯の雪は簾を擧げて看る。(原漢文、白氏文集十六、香爐峯下新たに山居を卜し、草堂初めて成る、たまたま東壁に題す)をふまへられた。原詩は八句の律詩であるが、前述の二句は和漢朗詠集にも見える。香爐峯は江西省九江の廬山の北の峯。その北に遺愛寺がある。

(四) こんな有名な故事は。

(五) あなたはやはり、この宮様にお仕へ申す人として適當なやうである。「さべきなめり」は「さるべきなるめり」「さべきなめり」となり、撥音が表記されてゐない例である。なほ、「さることは知り、さべきなめり」を女房の詞とみる説(淺尾芳之助・吉永登兩氏)もある。

【百八十二】(一) ともよく物事を心得てゐる。

(二) 主人の陰陽師が祭文などを讀むのを(三)一般の人は普通に聞いてゐるが、小童はつつと走つて行つて。「ちうと」は敏捷なさまをあらはす副詞。

(四) 主人が「酒、水をそそぎかけなさい」ともいはないのに。

(五) さうした召使がほしい、使ひたいものだ。

二百八十一

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして、集まりさぶらふに、宮「少納言よ、香爐峯の雪いかならむ」とおほせらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、笑はせたまふ。

人人も、さることは知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。「なほ、この宮の人にはさべきなめり」といふ。

二百八十二

陰陽師のもとなる小童こそ、いみじうものは知りたれ。祓などしに出でたれば、祭文など讀むを、人はなほこそ聞け、ちうと立ち走りて、「酒、水いかけさせよ」ともいはぬに、しありくさまの、例知り、いささか主にもいはいせぬこそうらやましけれ。さらむ者がな。使はむとこそおぼゆれ。

二百八十四

【百八十四】(一)しばらく宿るところとして。
(二)たいしてすぐれたものもない中で。
(三)普通のはそい柳のやうに優雅な姿でなくて、葉が廣く見えて、みつともないのを。

(四)これは柳とちがふやうですね。

(五)ほそくてよい柳の眉(葉)が、利口ぶつて生意氣にもひろがつて、そのでしやばつた眉(葉)のために、せつかくおもしろい春景色も面目をつぶされてゐる宿だなあ。「眉」と「おもて」とは縁語。「柳の眉」は柳の葉を眉に見立てていふ。「おもてを伏す」は「おもてを起す」(面目を施す)の對語。七五頁参照。

(六)二日目といふ日のお晝ごろ。

(七)退屈さが昂じてたまらなく、もう物忌をも犯して、すぐ參上しようかと思つてゐるをりもをり。

(八)とのおほしめしです。宰相個人の詞としては、「あなたをお待ちしてゐる今日のこの一日が、まるで千年ほどの長さに感じられますわ。夜明け前に早くね。」
「に」どめの例。七三頁参照。「暮るの間は千とせをすぐすことに久しかりけり」(後拾遺集戀二、讀み人知らず)

(九)九重の雲の上の宮中までも、無聊で

三月ばかり、物忌しにとてかりそめなるところに人の家に行きたれば、木どもなどはかばかしからぬなかに、柳といひて、例のやうになまめかしうはあらず、ひろく見えて、にくげなるを、「あらぬものなめり」といへど、「かかもあるあり」などいふに、

清さかしらに柳の眉のひろごりて春のおもてを伏する宿かな
とこそ見ゆれ。

そのころ、またおなじ物忌しにさやうのところに出で來るに、二日といふ日の晝つかた、いとつれづれまさりて、ただいまもまひりぬべきこちするほどにしも、おほせ言のあれば、いとうれしくて見る。淺緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書いたまへり。

宮いかにして過ぎにしかたをすぐしけむ暮らしわづらふ昨日今日かなとなむ、わたくしには、宰相「今日しも千歳のこちするに。曉にはとく」とあり。この君のたまひたらむだにをかしかべきに、ましておほせ言の

暮らしかねて居られたこの長い春の日を私は自分のある場所が場所なので、自分だけがさびしく退屈なのだと思つてゐたことです。「雲の上」と「春の日」と縁語。

(二) 深草の少將の百夜通ひの傳説(清輔奥義抄その他に見える)によつたのであらうか。夜があけるのを待たず、焦がれ死をしまひさうです。

(三) 「くらしわづらふ」を奪胎させた

(一) 「くらし」かねける」といふ句は。

(二) 眞實の氣持で詠んだのであるが。このあたり熊本に「いと侘しう誠にさる事も」とあり、それによれば、ほんとにつらいが、實際宮様のお氣持おことばも、もつともであるの意となる。底本の本文のままで、ほんたうにこもつともであると解することもできる。

(三) 頁十五(一) 御佛名會。一五六頁参照。

(二) 子の二刻から丑の一刻(十二時半ごろから午前二時ごろ)までの間。

(三) 導師の佛名經讀誦を。

(四) つららがひどくさがり、土地などもむらむらに白いところがおほいといつた状態であるが、屋根の上はまつたく一面に白いで。

(五) 底本「ことさらに ことさらに」

(六) 牛車の屋根の内部にかける長さ九尺五寸の帷帳。二筋を長く地上に垂れるほど引く。普通綾絹でつくる。

さまはおろかならぬこちすれば、

清雲の上も暮らしかねける春の日をとらともながめつるかな

わたくしには、清「今宵のほども少將にやなり侍らむとすらむ」とて、曉にまゐりたれば、宮「昨日の返し」かねける、いとにくし。いみじうそしりき」とおほせらるる、いとわびし。まことにさることなり。

二百八十五

十二月二十四日、宮の御佛名の半夜の導師聽きて出づる人は、夜なかばかりも過ぎにけむかし。

日ごろ降りつる雪の今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷いみじうしたり、地などこそむらむら白きところがちなれ、屋の上はただおしなべて白きに、あやしき賤の屋も雪にみな面がくして、ありあけの月のくまなきに、いみじうをかし。白銀などを葺きたるやうなるに、水晶の溜などいはいましやうにて、長く、短く、ことさらにかけわたしたると見えて、いふにもあまりめでたきに、下簾もかけぬ車の、簾をいと高うあげたれ

(七)女の装束であらう。
(八)紫または紅の薄色。男がその指貫を
はいて。

(九)たくさん出だし衣にして、直衣の眞
白なのは、紐を解いてゐるので、自然と
ゆるやかに肩からずれさがつて、車の外
にひどくこぼれ出てゐる。

(一〇)牛車の前のかまちに敷きわたした低
いしきりの板。

(一一)あまり明かるい月光で、きまりが悪
いから、女が奥の方へはひるのを、男が
絶えず前へ引き寄せるので、女は明かる
いところへ出されて困惑してゐるのもお
もしろい。

(一二)「秦甸ちんけんの一千餘里、凜々として氷鋪こほりし
けり。漢家の三十六宮、澄々として粉飾こなざり
れり」(原漢文。和漢朗詠集上、八月十
五日夜 公乗億)

【百六十六】(一)宮仕所から里へ出て、集まつ
て、自分の仕へてゐる主君の御ことをほ
め申しあげ、御殿の中のことや君たちの
ことを。

(二)おたがひに話しあつてゐるのを。

(三)その家の主人として聞くのは興趣深
い。

ば、奥までさし入りたる月に、薄色、白き紅梅など、七つ八つばかり着た
る上に、濃き衣のいとあざやかなるつやなど月にはえて、をかしよう見ゆる、
かたはらに、葡萄染の固紋の指貫、白き衣どもあまた、山吹、紅など着
こぼして、直衣のいと白き、紐を解きたれば、脱ぎ垂れられていみじうこ
ぼれ出でたり。指貫の片つかたは軾とこさきのもとに踏み出だしたるなど、道に
人あひたらば、をかしと見つべし。

二 月の影のはしたなさに、うしろざまにすべり入るを、つねにひきよせ、
あらはになされてわぶるもをかし。「凜凜として氷鋪けり」といふことを
返す返す誦じておはするは、いみじうをかしようて、夜一夜もあつかまほし
きに、行くところの近うなるもくちをし。

二百八十六

宮仕する人人の出で集まりて、おのが君君の御ことめできこえ、宮の
内、殿ばらのことども、かたみに語りあはせたるを、その家主にて聞くこ
そをかしけれ。

(四)ちよつと親しくしてゐる人でもいいが、宮仕人である人を邸内あちらこちらに住まはせておきたいものである。

(五)適當な機会には、必要な時には。

(六)その宮仕人のもとにむつまじく訪れて来る人でもある時は、部屋をきれいに飾りつけ。

(七)宮へ参上する時はその世話なり支度なりをして、その人(宮仕人)の思ふやうにして宮仕に出してあげたいものである。

(八)すばらしい人の日常お暮らしになるありさまなどがとても知りたく思はれるのは、好奇心が過ぎるであらうか。

【二百八十七】(一)見てすぐまねるもの。

(二)幼児はよく人のまねをする。

【二百八十八】(一)心のゆるせないもの。油断のならぬもの。

(二)つまらぬ者。たいした身分教育のない人。下衆ではないが、たいしたことのない者。下衆の上、よろしき者の下。

(三)そのくせ、えせ者はりつばな人だと世間で評判される人よりも、かくし隔てがなくつきあひよく思はれるものである。

家ひろく、清げにて、わが親族はさらなり、うちかたらひなどする人も、

宮仕人をかたがたに据ゑてこそあらせまほしけれ。さべきをりは一とこ

に集まりゐて、物語し、人のよみたりし歌、なにくれと語りあはせて、人

の文など持て来るも、もろともに見、返りごと書き、またむつまじう来る

人もあるは、清げにうちしつらひて、雨など降りてえ歸らぬも、をかしう

もてなし、まゐらむをりは、そのこと見入れ、思はむさまにして出だし出

でなどせばや。

よぎ人のおはしますありさまなどのいとゆかしきこそ、けしからぬ心に

や。

二百八十七

見ならひするもの 欠伸。ちごども。

二百八十八

うちとくまじきもの えせ者。さるは、よしと人にいはるる人よりもう

(四) 船路。航海。
 (五) 薄緑色の打ち衣を引きわたしたやうに、おだやかで。

(六) ますますすひどく荒れて來るので、生きたこちもなく。
 (七) ほんのわづかな時間にひどく變化して、あれほど靜かだつた海とも思はれないほどである。

(八) なんともいひやうもなく、これほどおそろしいものはない。

(九) かなりの深さのところできへ。

(一〇) そのやうなちひさな、たよりないもの。舟。

(一一) 底もわからず。

(一二) その上、物をとてもなくさん。

(一三) ちよつともあらあらしくすると、沈みほしいだらうかと思はれるのに。

(一四) 圓いのを。丸太を五六本。

(一五) 擬音語。ほんほんと。九七頁参照。

(一六) 目がくらむやうな氣がする。

(一七) 早緒と名づけて。
 (一八) あれが(早緒が)切れたら、どうなることであらうか。すつと落ちこんでしまふであらうに。

らなくぞ見ゆる。

船の路。日のいとうらかなるに、海の面のいみじうのどかに、淺緑のうちたるを引き渡したるやうにて、いささかおそろしきけしきもなきに、若き女などの袖、袴など着たる、侍の者の若やかなるなど、櫓といふもの押して、歌をいみじううたひたるは、いとをかしう、やむごとなき人などにも見せたてまつらまほしう思ひ行くに、風いたう吹き、海の面ただあしにあしうなるに、ものもおほえず、泊るべきところに漕ぎ着くるほどに、舟に波のかけたるさまなど、片時にさばかりなごかりつる海とも見えざかし。

思へば、舟に乗りてありく人ばかりあさましよう、ゆゆしきものこそなけれ。よろしき深さなどにてだに、さるはかなきものに乗りに漕ぎ出づべきにもあらぬや。まいて、そこひも知らず、干尋などあらむよ。ものをいとおほく積み入れたれば、水ぎはただ一尺ばかりだになきに、下すものいささかおそろしとも思はで走りありき、つゆあらうもせば、沈みやせむと思ふを、大きな松の木などの二三尺にてまろなる、五つ六つ、ほうぼ

(二) この船はそのやうに水面とすれすれのところにあつて、すぐ波に下りられさうなちひさい舟ではないから。この一句は從來「されどひとしうおもげになどあらねば」の本文により、「けれど、ほかの船とおなじやうに、格別重さうには見えないうが」と解してゐるが、底本以下三卷本の信すべき諸本によつて本文のやうに校訂した。(三) はしけ舟と名づけて。
(二) 舟で明かした翌早朝にそれを見る時などは、感慨無量である。

(三) 一世の中をなにに譬へむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟の跡の白波」(拾遺集二十哀傷沙彌滿誓、古今六帖三) 萬葉集卷三には「世の中をなにに譬へむあさびらき漕ぎ云にし船の跡なきごとし」とある。

(三) 歌の詞のとほり、ほんとに次第に消えて行くものである。

(四) 普通以上の人はやはり舟に乗つて行くことなどはするべきではないと。「こと」とは底本「ことこそ」

(五) 「おそろしかなれ」が「おそろしかなれ」と發音され、「ン」の音が表記されない形。おそろしいものではあるが、「六」なんといつても、ともかくもまあ。

(三) やはり非常におそろしいと思つてゐるのに、まして。

(二八) 潜水をするために海中へ。

うと投げ入れなどするこそいみじけれ。

屋形といふもののかたにて押す。されど、奥なるはたのもし。端にて立

てる者こそ目くるるここちすれ。早緒とつけて、櫓とかにすげたるもの

弱けさよ。かれが絶えば、なにかならむ。ふと落ち入りなむを。それだ

に太くなどもあらず。わが乗りたるは、清げにつくり、端戸あけ、格子あ

げなどして、さ水とひとしう下りげになどあらねば、ただ家のちひさきに

てあり。

小舟を見やるこそいみじけれ。遠きはまことに笹の葉を作りてうち散ら

したるにこそいとよう似たれ。泊りたるところに、舟ごとにともしたる

火は、またいとをかしう見ゆ。

はし舟とつけて、いみじうちひさきに乗りに漕ぎありくつとめてなどい

とあはれなり。「跡の白波」は、まことにこそ消えもて行け。よろしき人

は、なほ乗りてありくまじきことこそおぼゆれ。徒歩路もまたおそろし

かなれど、それはいかにもいかにも地に着きたれば、いとたのもし。

海はなほいとゆゆしと思ふに、まいて海士のかづきしに入るは憂きわざ

(二七)もしも切れたならば。

(二八)それもせめて強い男でもするのであればまあよからうが、女ではとてもなみたいていの氣持ではあるまい。

(二九)夫であらう。(三〇)楮の皮の織維で作つた繩。(三一)浮かべて、舟を漕ぎうろうろしてゐるが、あぶないと思ひ、氣がかりだと思はないのかしら。

(三二)男があつてたぐりあげるありさまは。(三三)あがつて來た海女が。「はた」は底本」とた一

(三四)氣の毒で涙がこぼれさうであるのに、その海女を幾度も落し入れて。

(三五)男子などといふものは、氣が強いといふか、思ひやがないといふか、目もあてられない、なんともいひやうもないものである。

【寛弘十九】(一)くだらない父親を。

(二)自分が不面目、不名譽だとつらく思つたためか。

(三)孟蘭盆會。地獄におちて倒懸(逆さ釣り)の苦を受ける者を救ふ法會。その供養をしようとして準備するのを。

(四)大納言藤原道綱の長子。諷誦の名人で歌人。天王寺の別當。道命が阿闍梨になつたのは寛弘元年(一〇四二)十二月であるから、この呼稱を信じれば、この段はそれ以後の執筆となる。

なり。腰に着きたる緒の絶えもしなば、いかにせむとならむ。男にせましかばさてもありぬべきを、女はなほおぼろげの心ならじ。舟に男は乗りて、歌などうちうたひて、この桡繩を海に浮けてありく、あやふくうしろめたくはあらぬにやあらむ。のぼらむとて、その繩をなむ引くとか。まだひ繰り入るるさまぞことわりなるや。舟のはたをおさへて放ちたる息などこそ、まことにただ見る人だにしほたるるに、落し入れてただよひありく男は、目もあやにあさましかし。

二百八十九

右衛門の尉なりける者の、えせなる男親を持ちたりて、人の見るに面ぶせなりと苦しう思ひけるか、伊豫の國より上るとて、波に落し入れけるを、人々「人の心ばかりあさましかりけることなし」とあさましかるほどに、七月十五日、盆たてまつるとていそぐを見たまひて、道命阿闍梨、わたつ海に親おし入れてこの主の盆する見るぞあはれなりけるとよみたまひけむこそをかしけれ。

【百七】(一)能本(高野博士本)・前田本「ふのとの(傳の殿)とあり、道綱の母(蜻蛉日記の著者)のこととなる。他の能本には「小野殿」とあるが「傳の殿」以外の稱呼は未詳。もし「傳の殿」とすれば、この段は道綱が東宮の傳の殿となつた寛弘四年(二〇七)正月以後の執筆となる。(二)東山長谷村にあつた。聖護院山莊慈照院別業などが附近にあつた。なほ本文「八講しける」は道綱母集に「千部の經供養するに」とある。(三)東山の小野にあつた。權中納言藤原文範の所領、別邸。(四)法華經提婆達多品第十二に説かれてゐる、水を汲み、薪を拾ひ、佛に仕へる業、つまり八講は昨日で終りましたが、(その經文にも見える)、さあ斧(小野にかける)の柄が朽ちるまでここでのんびりと櫻花をながめて遊びつづけませう。この歌、拾遺集、道綱母集、傳大納言母上集にも見える。能本では「いざ」が「けふ」になつてゐる。(五)このあたりは、前段も含めていふ。【三克士】(一)伊登内親王。桓武天皇の皇女。阿保親王の妃。(二)「老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな」伊勢物語・古今集雜上「別れも」(三)その手紙を葉平があげて見た時の氣持が思ひやられる。

二八八―二九二段

二百九十

一 小原の殿の御母上とこそは、普門といふ寺にて八講しける、聞きて、またの日小野殿に、人人いとおほく集まりて、遊びし、文作りてけるに、薪こることは昨日に盡きにしをいざ斧の柄はここに朽たさむとよみたまひたりけむこそいとめでたけれ。

五 ここもとは打聞になりぬるなめり。

二百九十一

また、葉平の中將のもとに母の皇女の、「いよいよ見まく」とのたまへる、いみじうあはれにをかし。引きあけて見たりけむこそ思ひやられる。

二百九十二

をかしと思ふ歌を冊子などに書き置きたるに、いふかひなき下衆のうちうたひたるこそ、いと心變けれ。

二百九十三

【百九十三】(一)すぐに(そのまま)幻滅の悲哀を感じまふものである。價值がすっかり下つてしまふものだ。「よろしき男」は「かなりな男」であつて、「よき男」ではない。(二)そんな下衆女からはそしられる方がかへつてよい。(三)「底本」ほほむるままに……。ほめてゐるうちにとんでもないいひそこなひをしてしまふものだ。

よろしき男を下衆女などのほめて、「いみじうなつかしうおはします」などいへば、やがて思ひおとされぬべし。そしらるるは、なかなかよし。下衆にほめらるるは、女だにいとわろし。また、ほむるままにいひそこなひつるものは。

二百九十四

【百九十四】(一)檢非違使の大小尉を兼ねてゐる。(二)女性のところへ夜通つて。「夜行し」は從來「や。格子」と校訂されてゐるが、誤である。(三)もてあましさうなのを、几帳にわがね(折り曲げ)懸けたのは、まことにふさはしくない。(四)麴塵の袍を。藏人だけが着る。(五)引歌未詳。

左右の衛門の尉を判官といふ名つけて、いみじうおそろしうかしこきものに思ひたるこそ。夜行し、細殿などに入り臥したる、いと見苦しかし。布の白袴、几帳にうちかけ、袍の長くところせきを、わがねかけたる、いとつきなし。太刀の後に引きかけなどして立ちさまよふは、されどよし。青色をただつねに着たらば、いかにをかしからむ。「見しありあけぞ」とたれいひけむ。

【百九十九】(一)伊周。九〇頁参照。

(二)學問。文。書。

(三)いつものやうに、夜がひどく更けたので。

(四)わたくしただ一人が、ねむたいのをこらへて伺候してゐたが。

(五)午前三時半。

(六)奏するやうである。「なり」は推定の助動詞。

(七)「夜が明けたやうだわ」とひとりごとをいふのを。

(八)まづかつたな、なぜ「明け侍りぬなり」などと申しあげたのであらうと、くやしく思つたが、ほかに人があたらば、人目にまぎれかくれて眠れようが、だれもそばにゐないので、ちつとしてゐた。

(九)天皇が。

(一〇)「このやうにおやすみなさるべきではございませまい」と申しあげられるので、中宮様はお笑ひになり、「ほんたうにね」と申されるのだが、天皇はお氣づきにならない時に。

(一一)間木。上長押などの上に設けた棚のやうなもの。従來は「さき」になほし、「先」と見てゐる。しかし底本とその系統の信すべき本文によつた。

(一二)起きなどしたやうである。

(一三)天皇もお目ざめになつて。

二百九十五

大納言殿まありたまひて、ふみのことなど奏したまふに、例の、夜いたくふけぬれば、御前なる人人、一人二人づつうせて、御屏風、御几帳のうしろなどに、みなかくれ臥しぬれば、ただ一人、ねぶたきを念じてさぶらふに、「丑四つ」と奏すなり。清「明け侍りぬなり」とひとりごつを、大納言殿「いまさらにな大殿ごもりおはしましそ」とて、寝べきものとも思いたらぬを、うたて、なにしにさ申しつらむと思へど、また人のあらばこそは、まぎれも臥さめ、上の御前の、柱によりかからせたまひて、すこし眠らせたまふを、大納言「かれ、見たてまつらせたまへ。いまは明けぬるに、かう大殿ごもるべきかは」と申させたまへば、「げに」など、宮の御前にも笑ひきこえさせたまふも知らせたまはぬほどに、長女が童の、鶏を捕らへ持て来て、「あしたに里へ持て行かむ」といひてかくし置きたりける、いかがしけむ、犬見つけて追ひければ、廊のまきに逃げ入りて、おそろしう啼きのしるに、みな人起きなどしぬなり。うへも、うちおどろか

(二四)「鶏人曉に唱へて、聲明王の眼を驚かし、烏鐘夜鳴いて、響、暗天の曉に徹る」。〔原漢文。本朝文粹三 漏刻の策 都良香、和漢朗詠集 禁中〕 鶏人は鶏冠を戴いて曉を傳唱する役人。

(二五)ただ人である自分(清少納言)のねむたかつた目も。「明王」に對して「ただ人」といつたのである。「ただひとり」とある本文は誤。

(二六)つぎの夜は、宮様は。

(二七)夜中に、わたくしが廊に出て召使を呼ぶと。

(二八)お歸りか。では、送らう。

(二九)踏みひしぎ。踏み亂して。

(三〇)一八七段(三〇五頁)参照

(三一)能木「めてまとふ」とあり、それによくと、めで惑ふの意となる。

(三二)やはりすばらしいものをば、どうしてもはめないではゐられない。

【言九六】(一)僧都の君隆圓の御乳母のまま

(乳母の通稱・別名)などといつしよに。

(二)ある男が、縁側のところまで近く寄つて來て。

(三)「ひどい目にあひまして。だれにこ

せたまひて、主上「いかでありつる鶏ぞ」などたづねさせたまふに、大言殿の「聲、明王の眼をおどろかす」といふことを高ううち出だしたへる、めでたうをかしきに、ただ人のねぶたかりつる目もいと大きになぬ。「いみじきをりのことかな」と、うへも宮も興せさせたまふ。なほかかることこそめでたけれ。

またの夜は、夜の御殿にまゐらせたまひぬ。夜なかばかりに、廊に出て人呼べば、大納言「おるるか。いで、送らむ」とのたまへば、裳・唐は屏風にうちかけて行くに、月のいみじう明かく、御直衣のいと白う見るに、指貫を長う踏みだきて、袖をひかへて、「倒るな」といひておするまゝに、「遊子なほ残りの月に行く」と誦じたまへる、またいみじめでたし。

大納言「かやうのこと、めでたまふ」とては笑ひたまへど、いかでかなほをかしきものをば。

のつらさを訴へませうか」といつて、い
まにも泣き出しさうな様子であるから。

(四)ちよつと外出しました間に。

(五)住んでゐますところが。

(六)やどかり。寄居蟲。蟹の類。

(七)その火は馬寮に御秣(馬草)が積んで
ありました家から出ましたのでござい
ます。

(八)寢所に寝てをりました家内(愚妻)も。

(九)もうすんでのところ。底本の「ほと
とく」は「ほとど」ともよめる。「と
うで」(底本「とて」)は取り出での義。

(一〇)御秣をもやす(草を蒔やす)程度
の春の目(火をいひかけてゐる)に淀野(夜
殿をかける)までも、なぜ残らずもえた
のであらうか。淀野は京都府久世郡淀の
野。

(一一)ここにおいての方(清少納言)が、
そなたの家が焼けたさうだと聞いて、氣
の毒に思つてこれを下さるのです。

(一二)短策。厚様の紙を巾一寸餘に切つた
もの。人に賜はる米鹽などの數を書いた
附箋のやうなものである。

(一三)どのくらゐ(米鹽など)見舞品をい
ただけるのでせうか。

(一四)(いや)ただ讀めばいいのよ。

(一五)まったくの明き盲(文盲)で。

僧都そうじの御乳母めのとのままなど御匣殿みくしげどのの御局つばねにゐれば、男おのこのある、板敷いたじきのも
と近う寄り来て、「からい目を見さぶらひて。たれにかは變うれへ申し侍ら
む」とて、泣きぬばかりのけしきにて、清きよ「なにごとぞ」と問へば、男おとこ「あ
からさまにものにまかりたりしほどに、侍まるところの焼やけ侍りにければ、
がうなのやうに、人の家いへに尻しりをさし入れてのみさぶらふ。馬うまづかさの御秣なまき
積たみて侍りける家いへより出いでまうで来て侍るなり。ただ垣かきをへだてて侍れ
ば、夜殿よどのに寝て侍りける童わらわも、ほとほと焼やけぬべくてなむ。いささかも
のまとうで侍らず」などいひをるを、御匣殿みくしげどのも聞きたまひて、いみじう笑
ひたまふ。

清きよ

清きよみまclusさをもやすばかりの春の日に夜殿よどのさへなど残らざるらむ
と書きて、清きよ「これを取とらせたまへ」とて投げやりたれば、笑ひののしり
て、女房にようばう「このおはする人の、家いへ焼けたなりとて、いとほしがりて賜たまふな
り」とて取とらせたれば、ひろげてうち見て、男おとこ「これは、なにの御短冊みづたなづに
か侍らむ。ものいくらばかりにか」といへば、女房にようばう「ただ讀よめかし」とい
ふ。男おとこ「いかでか、片目かためもあきつかうまつらでは」といへば、女房にようばう「人に

(二六)ただいま、宮様がお召しになつてゐるから、急用で参上します。そんなすばらしい物を手に入れたからにはなんにも心配はないぢやないの。

(二七)中宮様も「どうして、そんなにばかはしやぎをしてゐるの」とお笑ひになる。

【寛七】(一)男性といふものは、母親が死んで父親だけが残つてゐる場合、父はともその男兒をかはやく思つてゐるが。

(二)遠慮せねばならないやうな後妻が出來てから後は。

(三)男の子を自分らのゐる寢殿へも立ち入れさせず、装束の世話などは、その男兒の乳母とか、亡くなつた先妻の召使などにさせる。(そんな男がいい)

(四)客間。客座敷。亭。

(五)おぼしめしがよくて。御信任、御寵愛なされて。

(六)始終召し出され、音楽などの御あそびの相手にお思ひになつてゐるが。

(七)繼母であるのでいつも心たのしまず、この世がおもしろくない氣持がして。

(八)好色めいいた心が不都合なほどにありさうである。

(九)その實の妹だけが自分の胸のうちをうちあけて話し、なぐさめ相手であつた。

【寛七】(一)遠江の守の子である男性としたりしくしてゐたが、その女房が、底本

も見せよ。ただいま召せば、とみにてうへへまゐるぞ。さばかりめでたきものを得ては、なにをか思ふ」とて、みな笑ひまどひ、のぼりぬれば、「人にや見せつらむ。里に行きていかに腹立たむ」など、御前にまゐりてままの啓すれば、また笑ひさわぐ。御前にも「など、かくものぐるほしからむ」と笑はせたまふ。

二百九十七

男は女親なくなりて男親の一人ある、いみじう思へど、心わづらはしき北の方出で來て後は、内にも入れ立てず、装束などは、乳母、また故うへの御人どもなどしてせさす。

西東の對のほどに、まらうど居など、をかし。屏風・障子の繪も見どころありて住まひたる。

殿上のまじらひのほど、くちをしからず人人も思ひ、うへも御けしきよくて、つねに召して、御あそびなどのかたきにおぼしめしたるに、なほつねにもの歎かしく、世のなか心にあはぬこちして、すぎずきしき心ぞか

たはなるまであべき。

上達部かんたちののまたなきさまにてもかしづかれたるいもうと一人あるばかりにぞ、思ふことうちかたらひ、なぐさめどころなりける。

二百九十八

ある女房の、遠江とゑの守の子なる人をかたらひてあるが、おなじ宮人みやびをなむしのびてかたらふと聞きて、うらみければ、女房「男『親おやなどもかけて誓ちかはせたまへ。いみじきそら言ことなり。夢ゆめにだに見ず』となむいふはいかがいふべき」といひしに、

清誓ちよしかへ君遠江きみとゑのかみかけてむげに濱名はまなの橋見はし見ざりきや

二百九十九

便びんなきところにて、人ひとにものをいひけるに、胸むねのいみじう走りはしけるを、男「など、かくある」といひける人に

逢坂あさかは胸むねのみつねにはしり井いの見見つくる人やあらむと思へば

守まもらない。

(二)その男が「ある女房」とおなじ宮にお仕へしてゐるほかの女房を。

(三)「ある女房」がうらんだところ。

(四)遠江の守であるわたくしの親などを證人としてでも誓はせて下さい。

(五)「と(あの男は)辯解するのですが、どう答へてやつたらいいでせうか」といつたので、わたくし(清少納言)はつぎの歌を示しました。

(六)お父様が遠江の守ですからあなたは神(守をいひかけてゐる)かけてりつばにお誓ひなさつてもよろしい。けれど、わたしとていまかういふのは決して根據のないこととなく、あなたのおやしいそぶりははつきりと目撃したのでございませす。「橋」に「端」をかけてゐる。

【二百九十九】(二)人に見られては都合の悪いところであるから。「ける」が用ゐてあるから。

(二)男に話をしてゐたところが。

(三)胸騒ぎがしてたまらなかつたが、それを察した相手の男が「なぜそんなに落ち着きがなく、そはそはしてゐるのか」といつたので、その人(男)に對して。

(四)見つける人があるかも知れないと不安なので、あなたとあふ時、あふ場所ではいつも胸がさわぎます。逢坂には走井の水(見つ)くる)があるから。

【三言】(一)引歌未詳。能本「かうやへくた
る」とある。

(二)「させも草」は「さしも草」で、も
ぐさ。下野の國(栃木縣)都賀郡伊吹山
のしめちが原におほいので、伊吹のさし
も草、しめちが原のさしも草などといふ。

「思ひ」は「火」、「伊吹の」は「いふ」、
「里は」は「然(さ)とは」、「告げし」

に「火を附けし」などをいひかけ、「かか
らぬ」は「思ひ」と「山」と兩方にかか
つてゐる。「かかると」は山をあるく、登
るの意。全然思ひもかけてゐないのに、
下向の話を誰がさうとはいひ告げまし
たかの意。

(三)かうした順序に、このままの位置に
ある現存本はない。堺本文に類似して
ゐるが、その順序などは異なつてゐる。
堺本の原據本などではあるまいか。

【一】(一)額が廣くて髪が端麗なのが。

(二)ふるまひから受ける感じ。靜かな、
しつとりした感じなのであらう。

【二】(一)底本とその同類本「口かけ」と
あるが、第二類本に「ほかけ」とあるの
によつた。「夜まさりするもの」に對す
のであらう。前本・堺本「ほかけおと
りするもの」

【三】(一)聞きづらいもの。聞きとりにくい
もの。また、聞くのがいやな、腹立たしい
もの。の意にも用ゐられてゐることは、數

三 百

まことにや、「やがては下る」といひたる人に、

清思^ニひだにかからぬ山のさせも草^タたれか伊吹^ヒの里^サは告げしぞ

本

きよしと見ゆるもの のつきに

一

夜まさりするもの 濃き搔練^カのつや。むしりたる綿^ワ。

女は 額^ハはれたるが髪^カうるはしき。琴^キの聲^コ。かたちわろき人のけ^ケはひ
よき。ほととぎす。瀧^タの音^ネ。

二

へあげられた内容から知られる。

(二) 聲のよくない人が。

(三) 「嚮蟲」にもたとへられた(「笛は」の段 三一七頁参照) やかましいのと拙劣なので。

【四】(一) 漢字で書いてそれだけの(さう書くだけの)理由があるのであらうが、どうも合點のいかないもの。

(二) 燒鹽の類。(三) 七六・八六頁参照。

(四) 強飯を蒸した後の、ねばりのある湯を汁じゅうといひ、泔げん坏わいといふ容器に貯へておき、髪をすくのに用ゐる。

(五) 今日では肥桶を積みまたは野菜などを積んでゆく舟をいふが、ここはそれではないと思はれる。なにかの誤寫であらうか。しかし、現存塚本にも異向がない。

あるいは「桶」「舟」と別に考へるのであらうか。また、「泔桶」「舟」と考へるべきであらうか。

【五】(一) 底本・同系統本「したの心かまへてわろくてきよげにみゆるもの」下の方が氣がかりで落ち着きがなくて、それでゐてきれいに見えるもの。

(二) 倒れさうな氣持か。倒れさうで、下の方が危つかしい姿をいふのであらうか。書かれてゐる畫面がおほく山水の斷崖であるためにいふか。

(三) 下の方ははげ落ちやすい。

火影ひかげにおとるもの 紫むらさきの織物。藤の花。すべてその類るいはみなおとる。紅くれなゐは月夜にぞわろき。

三

聞きにくきもの 聲こゑにくげなる人のものいひ、笑ひなど、うちとけたるけはひ。眠りて陀羅尼だらかに讀みたる。齒はくろめつけてものいふ聲。ことなることなき人はもの食ひつつもいふぞかし。筆ひらき築習ふほど。

四

文字もじに書きてあるやうあらめど心得ぬもの 撓鹽たうしほ。柏あざの。帷子かたびら。辰子けいし。泔げん。桶か。泔げん。桶か。

五

下の心がまへわろくて清きよげに見ゆるもの 唐繪からゑの屏風。石灰いしほの壁かべ。盛も物もの。檜皮ひだぶきの屋の上うへ。かうしりのあそび。

は「かはしり」と讀まれて、當時は淀河の河口をさすのが通例。ただし、底本などすべて「かうしり」とあるから、「かはしり」の音便形だとしても、なほ考へるべきである。

六

女の表着は 薄色。葡萄酒。萌黄。櫻。紅梅。すべて薄色の類。

七

唐衣は 赤色。藤。夏は 二藍。秋は 枯野。

八

【八】(一)海賦。「海部」とも書く大波・海松・貝・洲濱・磯馴れ松など、海邊の状をあらはしたもの。

裳は 大海。

九

汗衫は 春は 躑躅。櫻。夏は 青朽葉。朽葉。

十

織物は 紫。白き。紅梅もよけれど、見ざめこよなし。

【十】(一)長く見てゐるうちに興がさめること、この上ない。

【十二】(一)酢漿草。三瓣なので、それにかたどり、三瓣の本を合はせたかたちを紋とする。

(二)絹布の織紋に、霞のやうな小紋、市松模様を織り出したもの。表袴(うへのはかま)に用ゐるのは三位以上の公卿にかぎる。「あられ」ともいふ。

【十三】(一)薄様の色紙の義であらう。

(二)黄色。刈安草の莖葉を煮て染めた色。刈安草は、路傍に自生し、笹に似て小さく、やはらかい。いま「こぶな草」といふ。

【十四】(一)雲鶴の綾。綾に、雲と鶴との紋のあるをいふ。

【十五】(一)鳥獸に冬生ずるやはらかな毛。

(二)見た感じもよい。

(三)兎うの毛。鶴の毛ではない。

【十五】(二)まるくて、角ばつてゐないのがよ

十一

あやの紋もんは 葵あひかたばみ。あられ地ぢ。

十二

薄うす様やう色紙しは 白しろき。紫むらさき。赤かき。刈安染かりやすぞめ。青あきもよし。

十三

硯すずりの箱はこは かさねの蒔繪まきゑに雲鳥くもどりの紋もん。

十四

筆ふでは 冬毛ふゆげ。使つかふもみめもよし。ううの毛け。

十五

墨すみは 丸まるなる。

い。

【十六】(一)肉が脱けてうつろになつた貝の

總稱。貝殻。

(二)白梅の花の一瓣に似た小さな貝。玩具などにした。

十六

貝は 空せ貝。蛤。いみじうちひさき梅の花貝。

十七

櫛の箱は 盤繪、いとよし。

十八

鏡は 八寸五分。

十九

蒔繪は 唐草。

二十

火桶は 赤色。青色。白きにつくり繪もよし。

【十九】(一)唐はあて字で、からみくさの義といふ。つる草が巻きながら延びる形を圖案にしたもの。

【二十】(一)墨書の上に彩色したものをいふ。

二十一

疊たたみは 高麗かうらい縁いげし。また、黄きなる地ぢの縁はし。

二十二

檳榔びんろう毛けは のどかに遣やりたる。

網代あしろは 走くらせ来る。

二十三

一 松この木立こ高たきところの 東ひがし南みなみの格かうし子し上げわたしたれば、涼すずしげに透すき
て見みゆる母屋もやに、四尺よじの几帳いぢやう立たてて、その前まへに圓座わらじ置おきて、四十よじばかり
の僧そうの、いと清きよげなる墨染すみぞめの衣ころも・薄物うすものの袈裟けさあざやかに装束まうすきて、香染かきぞめ
の扇あふぎを使つかひ、せめて陀羅尼だらにを讀よみみたり。

ものけにいたう惱なげめば、移うつすべき人ひととて、大おほきやかなる童わらの、生絹すずし
の單衣ひとへあざやかなる、袴はかま長ながう着きなしてゐざり出いでて、横よこさまに立たてたる

【三二】この段と類似の文既出。三十段
(一〇七頁) 参照。

【三三】(一)松の木立が高い家の、東と南との格子を全部あげたから。
(二)几帳は普通高さ三尺であるが、母屋や廂の間の簾にそへて立てるのには四尺の几帳を用ゐる。

(三)丁子を濃く煮出して、その汁で染めたもの。黄色をおびた薄紅色。丁字染。

(四)聲をしぼつて、懸命に。「陀羅尼」は、三八七・四二三頁参照。

(五)童女である。

(六)あたりにすわつてゐると。

(七)僧が身體をねじつて外の方に向き。

(八)もと、圍碁・蹴鞠・雙六などの競技のそばにゐて勝負を見とどけて證すること、またその證人をいふが、ここは成り行きをいかかと案じ見まもつてゐる女房の意であらう。

(九)そばをはなれずすわつてゐて、ちつと見まもつてゐる。

(一〇)もののけを移された童女(よりまし)が身をふるひ出したので、彼女はその本心を失つて、僧の加持するまににしたがつてをられる(護法神の行動)を見るにつけて。

(一一)内外の出入をゆるされてゐる。底本など「みなくいけしたり」とあるが、「く」はこの場合一字分のをどり字である。

(一二)その童女が、もし本心(通常の意識)であるならば。

(一三)乗りうつた靈が、加持によつて苦しんでゐるのであつて、本人は苦しくないのだとは知りながら、童女のひどく苦しむ、泣いてゐる様子が、見てゐてもかはいさうなので、そのよりまし(童女)の知人などは、いたはしく思つし(童女)にすわつて亂れた衣をととのへたりする。

(一四)巴病勢が衰へて、病人は「藥湯が欲しい」などといふ。

(一五)氣がかりで、湯を盤に入れて引きさ

几帳のつらにゐたれば、外様にひねり向きて、いとあざやかなる獨鈷を取らせてうち拜みて讀む陀羅尼もたふとし。

見證の女房あまた添ひゐて、つとまもらへたり。ひさしうもあらでふるひ出でぬれば、もとの心失せて、おこなふままにしたがひたまへる、佛の御心もいとたふとしと見ゆ。

せうと・從兄弟なども、みな内外したり。たふとがりて、集まりたるも、例の心ならば、いかにはづかしとまどはむ。みづからは苦しからぬことと知りながら、いみじうわび、泣いたるさまの、心苦しげなるを、憑き人の知り人どもなどは、らうたく思ひ、け近くゐて、衣ひきつくるひなどす。

かかるほどに、よろしくて、「御湯」などいふ。北面に取りつく若き人どもは、心もとなく引きさげながらいそぎ來てぞ見るや。單衣どもいと清げに、薄色の裳など萎えかかりてはあらず、清げなり。

いみじうことわりなどいはせて、ゆるしつ。童女「几帳の内にありとこそ思ひしか、あさましくもあらはに出でにけるかな。いかなることあ

げはこびながら、いそがしさうな様子で、調伏のありけにうん^二と陳謝させ、固く退散を誓はせて、調伏を終へた。

(七)わたくしは几帳の内側にかくれてゐたとばかり思つてをりましたのに。

(八)顔を見られる事を恥ぢて、額髪を顔に振りかけて。

(九)気が分がすつと致されましたか。底本など「さげやかに」とあるが、「げ」は

「は」からの誤寫で、「さはやかに」または「さわやかに」が原形であらう。

(一〇)さだめの時刻、つまり朝とか夕とかの勤行の時刻になりましたのでの意。こ

は夕の時の念佛であらう。

(一一)暇乞ひの挨拶をして。

(一二)「うれしく」は「立ちよらせたまへる」の結果に對する感情である。「櫻の枝を長く折りて」若菜を青やかに摘み

などと同じ用法。お立ち寄り下さいましてまことにうれしうございました。

(一三)おかげで、たまらなくつらく存じてをりましたのが、もうすつかりなほつたやうに思はれます。幾重にもお禮申しあげます。

(一四)お越し下さいませ。

(一五)御油断なされない方が、よろしうございます。しかし、すこしでもおこころ

りつらむ」とはづかしくて、髪を振りかけてすべり入れれば、僧「しばし」とて、加持すこしうちして、僧「いかにぞや、さわやかになりたまひたりや」とてうち笑みたるも心はづかしげなり。僧「しばしもさぶらふべきを、時のほどになり侍りぬれば」などまかり申しして出づれば、

人「しばし」など留むれど、いみじういそぎ歸るところに、上藤とお

ぼしき人、簾のもとにゐざり出でて、「いとうれしく立ちよらせたまへ

るしるしに、たへ難う思ひたまへつるを、ただいまおこたりたるやうに

侍れば、かへすがへすなむよろこびきこえさする。明日も御暇のひまに

はものせさせたまへ」となむいひつつ、僧「いと執念き御もののけに侍

るめり。たゆませたまはざらむ、よう侍るべき。よろしうものせさせた

まふなるを、よろこび申し侍る」と言すくなにて出づるほど、いと驗あ

りて、佛のあらはれたまへるとこそおほゆれ。

清げなる童の髪うるはしき、また大きなが髭は生ひたれど、思は

ずに髪うるはしき、うちしたたかにむくつけげにおほかるなどおほえ

で。いとまなう此處彼處にやむごとなうおほえあるこそ、法師もあらま

くおなりになつたことをおよろこび申あげます。

◎とても髪の端麗な童で、しかも見て不快なほどにひどくおほい髪とは思はないで。「おほえで」は能本の「おほて」に從ふべきか。しかして、これは、偶のつれであるく童子のことであらう。なほ、この童のうち、「大きな」は八九歳から二十四五歳までの中童や、十五六歳から四五十歳までの大童など元服できないのであるのをさすのであらか。すくなくも鬚の生えてゐる童であ

十五(一)品は、親王の位にいふ語。一品、臣下の一位にあたる。

(二)齋宮、齋院では佛・經をも忌んで中・染紙などといふので、佛を信ずる立から「罪深かなれど」といつたのだとふが、「をかし」などと評するのは「罪か」との意にも解せよう。「罪深かなれ」は罪深かなれ」とよみ、「罪深かなれ」の音轉略形)なほ、「餘の」とこに「このころは」と傍書した本文が、當時齋院であつた選子内親王は、評判のかたであつたから、この人のことをいつたのかとあつた。

二十五(一)板ぶきの屋根に生じた隙。

ほしげなるわざなれ。

二十四

宮仕所は 内裏。 後の宮。 その御腹の一品の宮など申したる。 齋院。 罪深かなれど、をかし。 まいて、餘のところは。 また春宮の女御の御かた。

二十五

荒れたる家の蓬深く、葎はひたる庭に、月の隈なく明かく、澄みのぼりて見ゆる。 また、さやうの荒れたる板間よりもり來る月。 あらうはあらぬ風の音。

池あるところの五月長雨のころこそいとあはれなれ。 菖蒲、菰など生ひこりて、水も緑なるに、庭もひとつ色に見えわたりて、曇りたる空をつくづくとながめ暮らしたるは、いみじうこそあはれなれ。 いつも、すべて池あるところはあはれにをかし。 冬も氷したる朝などはいふべきに

(二) 生ひ茂つて。繁茂して。第二類本「おひひころりて」

(三) どこもかしこも緑一色に見えて。

(四) 人工的に手入れをしてあるのよりも。

(五) 池の面が青々としてゐるその水草の茂つてゐる絶え間絶え間(水面)から月の姿だけが。

【二十六】この段塚本には「ねたきもの」の中にあり、第二類本諸本には右肩に「ねたきもの下に」と小書してある。

(二) 裾をひいての意であらう。「うちまかす」と「まかす」とは違ふかも知れない。能本には「さしませつつ」とあるが、下の「ねたかりしか」は、下臈であるのに上臈めいたふるまひをしてゐたために催した感情と思はれるので、しばらくかう解した。

(三) 橋の上に屋根と欄干をつけたもの。ここは長谷寺の山上の堂に上る屋根つき階段の長廊下。一一六段(二二五頁)参照。

(四) いつになつたら御佛を拜することができるのであらう、早く拜みたいものだと。

(五) 賤しく見苦しい者を譬へたといふ。(六) 全然遠慮といふこともわきまへないありさまなのは。

(七) しかし、考へてみれば、どこでもそれはさうなのだ。

もあらず。わざとつくろひたるよりも、うち捨てて水草がちに荒れ、青みたる絶え間絶え間より月影ばかりは白白とうつりて見えたるなどよ。

すべて、月影はいかなるところにてもあはれなり。

二十六

初瀬にまうでて、局にめたりしに、あやしき下臈どもの、うしろをうちまかせつつ居竝みたりしこそねたかりしか。

いみじき心起こしてまゐりしに、川の音などのおそろしう、くれ階を上るほどなど、おぼろげならず困じて、いつしか佛の御前をとく見たまつらむと思ふに、白衣着たる法師、衰蟲などのやうなる者ども集まりて、立ちぬ、額つきなどして、つゆばかりところもおかぬけしきなるは、まことにこそねたくおぼえて、おし倒しもしつべきこちせしか。いづくもそれはさぞあるかし。

やむごとなき人などのまゐりたまへる御局などの前ばかりをこそ拂ひ

(八) 底本「よろしは……」とある。かなりといふ程度でたいしたこともない身分の人の御局の前は、さわがしさを制しかねてゐるやうである。自分らもこの「よろしき」さはあるから、さうは知つてゐながらも、やはりこの事實に直面すると、まことに残念で腹立たしきさへおぼえるものである。

(九) せつかくきれいに掃除した櫛を「あか」におとしこんだのも。「あか」は未詳。垢、閑伽ではあるまいから。

【三七】(一) 未詳。第二類本の「しりしよりも」(知りしよりも)の本文により、平素知つてゐる牛よりもあらあらしく叱る意に解する説がある。能本にはこのあたり「れいのしよりも下さまにうちいひていたうはしりうつも」とみえる。

(二) 供の男たちが不愉快さうな顔つきで。

(三) 車の持主の心が推量せられて。

(四) もう二度とたのみことばをかけようとも思はないほどいやである。

(五) 高階氏。従五位下左衛門佐敏忠の子。正四位下春宮亮になつた。高階成忠の甥。

(六) 業遠の朝臣の(車の)従者に命じて。

(七) 注意訓戒してあつたことがおしはかれる。なほ(六)(七)は「その女車では従者に命じて、牛か牛飼ひを打たせるな

などもすれ、よろしきは制しわづらひぬめり。さは知りながらも、なほさしあたりてさるをりをり、いとねたきなり。

掃ひ得たる櫛、あかに落し入れたるもねたし。

二十七

女房の、まわりまかでは、人の車を借るをりもあるに、いと心よいひひて貸したるに、牛飼童、例のしもしよりも強くいひていたう走り打つも、あなうたてとおぼゆるに、男どものものむつかしげなるけしきにて、「とう遣れ。夜ふけぬさきに」などいふこそ、主の心おしはかられて、またいひふれむともおぼえね。

業遠の朝臣の車のみや夜中・曉わかず人の乗るに、いささかさることなかりけれ。ようこそ教へ習はしけれ。それに道にあひたりける女車の、深きところに落し入れて、え引き上げで、牛飼の腹立ちければ、従者して打たせさへしければ、ましていましめおきたるこそ。

(七)お書きになるなら「枕」でございませう。(枕言(題詞)をお書きになるのがよろしいでせう)「枕」を「史記」に對する書名にとらうとすれば、それは「枕冊子」の略と考へられる。この「枕」と「史記」との出典をつぎのやうに催馬樂によるとみる説(原川清氏)があるが、「まくら」と「しき」を對照させるなら、むしろ古來しばしば引かれる「しきたへのまくら」などを考へたい。ぬき川の瀬々の小菅のやはら手枕、やはらかにぬる夜はなくておやさくる夫、おやさくる夫は、ましてるはしも、しかしあらば、矢矧の市に、杳さう買ひにかん、杳さうかはば、線鞋せんがはの細底ほそぞをかへ、さしはきて、上裳じやうじやうとりきて、宮路みやぢかよはん(貫河)なほ、能本「し侍らめ」の本文はとらない。

(八)それなら、そなたにとらせよう。

(九)「こよ」は「こし」(故事)の誤かといはれる。能本「あやしきをこしやなにや」とある。しかし、岩崎美隆・關根博士の「あやしきをこし」と「をこし」とをこ言こごで「ざれ言」とりとめもないこと、「謙辭」とみる説にしたがふべきか。

(一〇)おれながらへんでわけのわからぬことが、これも謙辭。つれづれ草の「あやしうこそものぐるほしけれ」はこれと同じ心境であり、これなどから出たので

「思ふほどよりはわろし。心見えなり」とそしられめ、ただ心一つにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば、ものに立ちまじり、人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしに、「はづかしき」なんどもぞ見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞあるや。げに、そもことわり、人のにくむをよしといひ、ほむるをもあしといふ人は、心のほどこそおしはからるれ。ただ、人に見えけむぞねたき。

左中將さななまだ伊勢いせの守かみときこえしとき、里さとにおはしたりしに、端はたのかたなりし疊たたみをさし出いでしものは、この冊子さうし載りて出でにけり。まどひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いとひさしくありてぞ返りたりし。それよりありきそめたるなめりとぞ。(ほんに)

あろう。

(一)なほ、精選して書き。「なほ」は底本「事を」に近い字。

(二)あるいはすぐれた歌などや、また木・草・鳥・蟲などの解説紹介でも述べたのならば、「豫想してゐたよりもよくない。

作者の心が見えすいてゐる」などと世人から悪口をたたかれるであらうが、これはさうしたものではなく、ただ自分の。

(三)一般の物語などの作品と肩をならべて、世間なみ程度の評判なり、批評を得られるはずがないと思つてゐたのに、「りつばなものですね。敬服しました」などと讀んだ人がいはれるので。「見る人は

したまふ(三卷本兩類本・能本第一類本)の本文は、能本第二類本(高野博士本)と十行古活字本以下の流布本本文に「見

る人はのたまふ」とあるにおとるものとして、從來探られてゐないが、「したまふ」のままですらうであらう。さうした用法

(四)人に見られたのが。

(五)源經房。長徳元年十二月より同二年十二月まで伊勢の守。「左中將」は「左近

の中將」と見れば、後述のやうに寛弘二年七月以後のこととなるが、「左近の權の中將」と見れば長徳四年十月以後と考へ

られる。なほ「左中將云々」以下は偽跋

源經房朝臣

伊勢權守長徳元二年事也

西宮左大臣三男

俊賢卿母弟號愛宮

此草子長保元二年事多書之若書加敷
母九條殿第五女
母同 高光少將

永観二年正月七日 從五位下

一品宮 十六
御給

寛和二年八月十三日 侍從

十月廿一日 左兵衛佐

永延二年十月十四日 從五位上

權中納言道讓

三年二月 昇殿

永祚元年三月 四日 左近少將

廿一

正暦元年正月 伊豫權介

四年正月 七日 正五位下

長徳元年正月 七日 從四位下

止少將

十三日 伊豫權守

二年七月廿一日 右近中將

四年十月廿五日 左中將

長保二年正月廿四日 從四位上

三年八月廿五日 藏人頭 卅三

十月十日 正四位下

四年二月 兼内藏頭

寛弘二年六月十九日 參議中將如元 卅七

橘 則 季

越中守則長一男 陸奥守則光孫
母前長門守橘元愷女

天喜五年 正月十一日 非藏人 進士 縫殿助

康平三年十二月廿七日 補藏人 卅六 縫殿助

四年 二月廿八日 式部丞

六年 六月廿八日卒 卅九

本云

とみる説もあるが、したがひ難い。
(二)さし出したところが。「さし出でしかば」につくる古活字本以降の本文は後世の改竄。「…ものは…けり」が「したところ(あいにく)(不本意なことに)…た(ことだ)」の意に使用せられてゐる例は、この冊子や源氏物語、榮華物語、宇治拾遺物語などに見える。
(七)あわてて取り入れられたけれどもだめで、そのまま持つていらつしやつて。
(八)それから世に流布しはじめたのだ。
(九)底本と同系統諸本すべてにこの五字があり、能本にも「なめりとそ」とあるが、「ほんに」は、まづ作者の筆ではないと考へられるので削つた。
【奥書】(一)公卿補任によると、長徳二年七月右近權中將、同四年十月左近權中將。(二)公卿補任によると、寛弘二年七月左近中將、三條天皇長和四年二月權中納言となり、中將をやめてゐる。
(三)枕冊子中に全然あらはれてゐない則季の勤物が、經房の勤物と並記されてゐる理由は未詳であるが、兩者がこの冊子傳來の上にあづかつた關係が深かつたためであらう。岸上愼二氏の説によれば、則季は、清少納言の初期の夫たる則光の孫にあたる。したがつて、清少納言にも孫になる人物である。

(四) 圖書寮本、陽明文庫三冊本などは「會書留」とあるが、底本などの「令書寫」をとるべきであらう。

(五) なに人か未詳。藤原定家か。(池田龜鑑博士説) 安貞二年は西紀一二二八年。

(六) 傳未詳。文安四年は西紀一四四七年。

なほ勸修寺家本はこの署名なく、第二類本諸本には「自文安四年」以下全文とこの署名とがない。「尋勘」は底本「尋」。

(七) 永享三年(一四三一)生まれ。廣橋綱光。父は權中納言兼郷。文明二年(一四七〇)六月に従二位權大納言に任ぜられた。勸修寺教秀と親交があり、文明九年(一四七七)二月、四十七歳で薨じた。

(八) 増運大僧正。園城寺長吏准三后一身阿闍梨。享徳四年(一四五五)閏四月辭退。

(九) 「下之本末兩冊」と訓むか、「これを下す。本末兩冊」と訓むか、兩説あるが、前者によるべきであらう。「下之本末」は、三巻本がもと上下二巻であり、各巻がそれぞれ二冊に分かれてゐた時のあつたことを教へるやうである。下巻は「二月官のつかさに」以下であり、「下」の「末」(下巻)は「おほきにてよきもの」から以下であらう。

往事所持之荒本紛失年久更借出一兩之本令書寫之依無證本不散不審但管見之所及勘合舊記等注付時代年月等是亦謬案歟

安貞二年三月

笔及愚翁^五

在判

古哥本文等雖尋勘時代久隔和歌等多以不尋得纔見事等在別紙

自文安四年冬比仰面々人々書寫之同五年中夏事終

校合再移朱點了

秀隆兵衛督大德書之^六

文明乙未之仲夏廣橋亞槐送^七 實相院^八
准后本下之本末兩冊見示曰余書寫所^九

- (一〇)「默」の誤と思はれるが、いかげであらう。現存信すべき諸本すべて「點」とある。底本も「默」とよむのには、無理な字體である。
- (一一)廣橋亞槐から送られた「實相院准后本 下之本末兩冊」である。
- (一二)教秀が寫した本である。

希也嚴命弗獲^{一〇}點^{一〇}馳^{一〇}禿^{一〇}毫^{一〇}彼^二舊^二本^二不
及^二切^二句^二此^二新^二寫^二讀^二而^二欲^二容^二易^二故^二比^二校^二之^二次
加朱點畢

正二位行權大納言藤原朝臣教秀

補遺 (第二類本にのみ附載されてゐる本文)

【上卷末所載】

一本 牛飼はおほきにて といふつぎに

法師は 言すくななる。男だにあまりつぎつききは、にくし。されどそれはさてもやあらむ。

女は おほどかなる。下の心はともかくもあれ、うはべは子めかしきはまづらうたげにこそ見ゆれ。いみじきそら言を人にいひつけられなどしたれど、道道しくあらがひ、わきまへなどはせで、ただうち泣きなどしてゐたれば、見る人おのづから心苦しうてことわるかし。

女のおそびは 古めかしけれども、亂暴。けふせに。雙六。はしらき。扁つくもよし。

【中卷末所載】

(一) 現在堺本(宸翰本)と同様の本であるが、ここに摘録した本文と現在堺本とは順序の異なる箇所がある。

(二) 在俗の男でさへ、あまりつぎからつぎへとしやべりつづけるやうなのはにくい。しかし、在俗の男は、まあそれでもよいであらう。「つきつきし」は調和美を述べる形容詞「つきつきし」では解せないで、しばらく「次々し」といふ形容詞に考へてみた。後考をまつ。

(三) 理窟を述べたてて争ひ、是非をことごとしく正しなどはしない、ただ泣いてゐると、それを見る男は、自然と氣の毒になつてあやまるものである。

(四) 「そふとに」(古粹堂文庫本)「うふせに」(松井簡治博士本)「けふせき」(宸翰本)などの異文がある。「け防ぎ」など遊びの名と考へられるが未詳。

(五) 未詳。「はしうき」とよめる本文もある。

- (一) 與へたところが。
- (二) 寢坊でだらしくも寝てしまったやうだと思つて心をゆるして、あれやこれやと。
- (三) 數珠の飾り。

(一) これも現存堺本(宸翰本)本文である。ただし、この順序も現存本と一致しない。

- 【二】(一) 温泉。
- (二) 三重縣一志郡神原にある温泉だといふ。「一志なるななくりの湯も君がため戀しやまずと聞くはもの愛し」(夫木集)
- (三) 「つかまの湯」(宸翰本・八雲御抄)であらうか。(八雲御抄流布本には「つまのゆ」とある)信濃にあるといふ。(後拾遺集)
- (四) 未詳。

一本 にくきもの 下

夜居にまゐりたる僧を、あらはなるまじうとて局にすゑて、冬は火桶など取らせたるに、聲もせねば、いぎたなく寝たるなめりと思ひて、これかれものいひ、人のうへほめそしりなどするに、數珠のすがりの、心にもあらず脇息などにあたりて鳴りたるこそ心にくけれ。

【下卷末(一本本文のつきに) 所載】

又一本

一

霧は 川霧。

二

湯。 出で湯は 出で湯は 出で湯は 出で湯は
 一 二 三 四
 ななくりの湯。 有馬の湯。 那須の湯。 つかさの湯。 ともの

【三】(一)佛菩薩の説いた咒文じゆもんで聲に出してよむもの。長いのを陀羅尼だらにまたは大呪だいじゆといひ、短いのは眞言まごころまたは咒じゆといふ。(二)阿彌陀如來の陀羅尼。阿彌陀如來根本陀羅尼。

(三)受けるはずの業ごふを救済しようとして讀みあぐる陀羅尼。佛頂尊勝陀羅尼經の中の陀羅尼。三八七頁參照。

(四)千手觀世音の功德を述べた陀羅尼。千手陀羅尼大悲咒。

【五】(一)「申酉・子丑」とも考へられ「申酉。子。丑」とも解される。申は午後四時前後、酉は同六時前後。子は午前零時前後。底本・刈本・内本など「とり」がない。

【六】(一)目もくらむほどりつばなりつばなもの。まばゆいほど、とても結構なもの。「もくゑ」は、「めでたきもの」の依に、「つくり佛のもくゑ」とあつたが、おなじ語であらう。木片を象眼のやうにはめて、細工を加へたものであらうといふ。

三

陀羅尼は 阿彌陀の大咒。尊勝陀羅尼。隨求陀羅尼。千手陀羅尼。

四

時は 申、酉、子、丑。

五

下簾は 紫の裾濃。つきには蘇枋すぼうもよし。

六

目もあやなるもの もくゑの箏しやうの琴ことの飾りたる。七寶しちほうの塔た。木像もくざうの佛のちひさき。

七

【七】(一)底本・刈本・内本はこの段全文がない。
(二)悲しい感情で、鼻をつまらせ、涙と水ばなを出してゐるの。また一方ではなをかみ、はなをかみして、なにか話してゐる様子。

ものあはれ知り^しがほなるもの はなたりしたる。かつ、はなかみつものいふけはひ。わさび食ふ。眉^{まゆ}抜くも。

八

めでたきものの人の名につきていふかひなく聞こゆる 梅。柳。櫻。霞。葵^{あひひ}。桂。菖蒲^{さやうぶ}。桐。檀^{ぼんみ}。楓^{かへで}。小萩^{こはぎ}。雪。松。

九

【九】(一)かよつて行くさきがおほいのが、すねたり、だだをこねたりしてゐるもの。
(二)容貌のよくないむすめ。

見るかひなきもの 色黒くやせたるちこの、瘡^{かさ}出でたる。ことなることなき男^{をとこ}の、行くところおほかるが、ものむづかりする。にくげなるむすめ。

十

【十】(一)底本など「あめのうし」一三一頁参照。

まづしげなるもの あめ牛のやせたる。直垂^{ひたたれ}の綿薄^{わたうす}ぎ。青鈍^{あざとび}の狩衣^{かりぎぬ}。黒柿^{くろがし}の骨に黄なる紙張りたる扇。鼠に食^{くら}はれたる餌袋^{えぶくろ}。香染^{かうぞめ}の黄ばみた

(三)拙い筆蹟を。

【十一】(一)不本意なもの。心にかなはないで、残念なもの。不満を感じるもの。

(二)宸翰本「みやたてたる人のなかあしき」

(三)自分から進んで法師になつた人が。

(四)宸翰本と堀本系の鈴鹿本とに「さえ」とあり、これによつて「才」(ざえ)と

解すべきであらうか。學問がなくて、しかも容貌容姿も……といふのである。

(五)戀人が祕密をもつてゐるの。現存堀本(宸翰本)すべて「……ものかくしする」

(六)自分の懇意にしてゐる人のことについて、ほかの人が悪口をいふのを聞いて

ゐる意であらうか。または、自分がやむなく親しい人をけなさなければならぬ

場合といふ意であらうか。

るに、悪しき手を薄墨に書きたる。

十一

ほいなきもの 綾の衣のわろき。宮たての人の仲あしき。心と法師に
なりたる人の、さはなくて清からぬ。思ふ人のかくしする。得意のうへ
そしる。冬の雪降らぬ。